

下之宮高俣遺跡

国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



下之宮高俣遺跡

埋蔵文化財発掘調査報告書
国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う

二〇一六

群馬県伊勢崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2016

群馬県伊勢崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

下之宮高俣遺跡

国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2016

群馬県伊勢崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



1- 1区1面 近世屋敷全景(北より)



1- 1区3面 中世館虎口遺構(西より)

序

国道354号玉村伊勢崎バイパスは、東毛広域幹線道路の一部として、大河川利根川の架橋である五料橋の交通渋滞緩和と、通行時間の短縮等をはかるものとして、新たに利根川に伊勢玉大橋を架橋して、建設された道路であります。玉村伊勢崎バイパスは、既に、平成26年8月に暫定2車線で供用が開始され、現在は更なる交通量の増加に対応するため、4車線化の工事が進められております。

下之宮高俣遺跡は、玉村伊勢崎バイパス建設予定地に在って、利根川の右岸、伊勢玉大橋の直ぐ西側に広がる遺跡です。遺跡は平成22年10月から平成24年4月にかけて、発掘調査を行いました。そして調査成果として、古墳時代前期の集落や、平安時代の畑、中世の館を含む遺構群、江戸時代の寛保2(1742)年の大洪水等の被災畑や天明3(1783)年の浅間山の大噴火により被災した屋敷や耕地、あるいはその後の耕地復旧にかかわる遺構群と、そして数々の出土遺物がありました。特に、天明3年の浅間山の大噴火で発生した泥流により被災した屋敷建物は、地域の建築史研究に、そして、良好な状態で確認された15世紀の所産と見られる館の構造は、地域に留まらず、全国的な城郭研究に資する資料となりましょう。

此の度、下之宮高俣遺跡の発掘調査成果をまとめ、埋蔵文化財発掘調査報告書として上梓することとなりました。発掘調査から報告書作成まで、ご指導、ご協力を賜りました群馬県伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、玉村町教育委員会生涯学習課、地元関係各位に感謝申し上げます。そして本報告書が今後地域の歴史を知るうえで広く活用されますことを願い、序とします。

平成28年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野三智男

例 言

- 1 本書は、平成22・23・24年度国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)に伴い発掘調査された下之宮高俣(しものみやたかまま)遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 下之宮高俣遺跡は、群馬県佐波郡玉村町下之宮11-2、12-1・2、15-1・5~11、29-1・4-6、32-1-8、33-1、43、45、46、48-2、238、239、240、241、242、230・233・234、245、246、247番地に所在する。
- 3 事業主体は群馬県伊勢崎土木事務所である。
- 4 調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
- 5 発掘調査の期間と体制は次の通りである。

調査期間 平成22年10月1日～平成23年3月31日(履行期間：平成22年9月1日～平成23年3月31日)

調査担当 調査部調査課 上席専門員 谷藤保彦、調査研究員 古口晃敬

遺跡掘工事削請負 スナガ環境測設株式会社

委託 地上測量：株式会社測研

調査期間 平成23年7月1日～平成24年3月31日(履行期間：平成23年3月31日～平成24年3月31日)

調査担当 調査部調査課 上席専門員 石守 晃、主任調査研究員 笹澤泰史

遺跡掘工事削請負 スナガ環境測設株式会社

委託 地上測量：株式会社シン技術コンサル 航空写真撮影：技研測量設計株式会社

調査期間 平成24年4月1日～平成24年4月30日(履行期間：平成24年3月30日～平成25年3月31日)

調査担当 調査部調査2課 上席専門員 井川達雄、専門調査役 山下歳信

遺跡掘工事削請負 株式会社

委託 地上測量：アコン測量設計株式会社 土器洗浄・注記作業：山下工業株式会社

- 6 整理事業の期間と体制は次の通りである。

整理期間 平成25年2月1日～平成25年3月31日(履行期間：平成24年12月1日～平成25年3月31日)

整理担当 資料部資料2課 主任調査研究員 石田典子

整理期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日(整理履行期間：平成26年4月1日～平成27年3月31日)

整理担当 資料部資料1課 上席専門員 石守晃、資料2課 補佐(総括) 佐藤元彦

整理期間 平成27年11月1日～平成28年1月31日(整理履行期間：平成27年3月31日～平成28年3月31日)

整理担当 資料部資料1課 上席専門員 石守 晃

- 7 本書作成の担当者は次の通りである。

編集 石守 晃、石田典子、佐藤元彦

本文執筆 第2章第1・2節は大木紳一郎が執筆したものに石守晃が加除筆した。4章第1節は生物考古学研究所、第2節は宮崎重雄、第3～5節はパレオ・ラボ、第5章第2節は村田敬一(群馬県文化財保護審議委員)が執筆し、その他本文は石守が執筆した。

デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)

遺物観察 縄文・弥生土器：谷藤保彦(上席専門員)・石坂 茂(専門調査役) 石器・石製品：岩崎泰一(資料統括)・石田典子(主任調査研究員) 土師器・須恵器：神谷佳明(専門調査役) 中近世陶磁器・土器：大西雅広(上席専門員)・藤巻幸男(専門調査役) 金属製品・製鉄遺物・炭化物：関邦一(補佐(総括))














遺物写真撮影 岩崎泰一・石田典子・津島秀章・石守 晃・神谷佳明・藤巻幸男・関 邦一

保存処理 関 邦一

- 8 石材同定は飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)に依頼した。
- 9 発掘調査諸資料及び出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 10 発掘調査及び本書作成に当たり諸氏、機関よりご協力、ご指導、ご教示を得た。記して感謝の意を表します。
(組織・個人別 五十音順 敬称略)

伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、玉村町教育委員会生涯学習課、玉村町下之宮地区自治会、秋本太郎、飯森康広、井沼千秋、千田嘉博、中島直樹、西谷徳雄、原 眞、原 幹雄、宮武正登、村田敬一、茂木 渉、八巻孝夫

凡 例

- 1 下之宮高俣遺跡の遺構平面図は世界測地系国家座標(座標第IX系)を用いて測量した。遺構図の中で使用した北方位はすべて座標北で、真北方向角は $+0^{\circ}24'20.82''$ である。
- 2 遺構図の中で使用した北方位は、すべて座標北を示している。
- 3 遺構の方位は、座標北を基準として主軸角度等の傾きを計測した。
- 4 遺構平面図の縮尺は、原則として以下を使用した。但し遺構によっては異なる縮率を用いたものもある。
竪穴住居 1:80、炉 1:40、溝 1:250、土坑 1:80、ピット 1:60、畑・復旧畑・復旧溝群 1:250
遺構断面図の縮尺は、竪穴住居・炉・竈・土坑・ピットは平面図に同じ。溝・畑・復旧畑・復旧溝群 1:120
- 5 遺物図の縮尺は以下の通りである。
土器 1:3 1:4、石器・石製品 1:3 1:4、鉄製品 1:3
- 6 遺物番号は出土遺構ごとの連番で、番号は本文・挿図・表・写真図版ともに一致する。
- 7 図中で使用したスクリーンパターンやマークは、以下のことを表す。
遺構平面図  硬化面  粘土  炭化物  酸化鉄  ローム
 灰黄褐色粘質土  灰褐色粘質土  攪乱
遺物実測図  内黒  粘土  酸化土砂
石器実測図 ● 潰れ部  摩耗  すり面
- 8 本書では必要に応じて、浅間山A軽石(As-A)、浅間山B軽石(As-B)、浅間山C軽石(As-C)、浅間山板鼻黄色軽石(As-YP)、榛名一二ツ岳渋川火山灰(Hr-FA)、榛名一二ツ岳渋川軽石(Hr-FP)などの主要テフラを略号のみで表記した。
- 9 1区の土層や土器の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。土層の色調番号の表記は、紙数の関係で割愛した。

目次

序 例言 凡例 目次

第1章 調査に至る経過	1
第1節 調査に至る経過	1
(1) 国道354号と玉村伊勢崎バイパス	1
(2) 試掘調査	4
(3) 発掘調査に至る経過	4
第2節 調査の方法	4
(1) 調査区の設定	4
(2) 調査面の設定	5
(3) 調査方法	6
(4) 標準土層	6
第3節 発掘調査の経過	7
第2章 地理的および歴史的環境	11
第1節 遺跡の位置と周辺の地形	11
(1) 地理的環境	11
(2) 地質的環境	11
第2節 遺跡周辺の歴史環境	14
(1) 旧石器時代	14
(2) 縄文時代	14
(3) 弥生時代	16
(4) 古墳時代	20
(5) 奈良・平安時代	20
(6) 中・近世	21
第3章 発見された遺構と遺物	23
第1節 1面の調査	23
(1) 1面の概要	23
(2) 1面上位面	23
(a) 1区	23
復旧溝群(23)、土坑(26)	
(b) 2区	29
復旧溝群(29)、復旧畑(31)、	
(c) 3区	32
道路(32)、区画溝(32)、復旧溝群(33)、土坑(38)	
(d) 4区	38
道路(38)、溝(43)、復旧溝群(43)、集石(44)	
(e) 5区	44
道路(44)、溝(46)、復旧畑(46)	
(f) 1面の遺構外の出土遺物	48
(1) 1面下位面	48
(a) 1区	48
屋敷(48)、建物(49)、土塁(55)、井戸(63)、屋敷内の土坑	
(63)、屋敷内の出土遺物(63)、道路(63)、溝(63)、畑・区	
画溝(77)、竹藪(77)	

(b) 2区	80
畑(80)	
(c) 3区	80
道路(80)、集石(80)	
第2節 2面の調査	81
(1) 2面の概要	81
(2) 2面上位面	81
畑(81)、竪穴(82)	
(3) 2面中位面	82
畑(82)	
(4) 2面上位面	82
溝(82)、畑(86)、竪穴(82)、井戸(86)、土坑(87)、集石(87)	
(5) 2面の遺構外の出土遺物	89
第3節 3面の調査	94
(1) 3面の概要	94
(2) 館内の遺構群	97
土塁(97)、堀(106)、溝(122)、土坑・ピット(123)、虎口遺構(124)	
(3) 館外の遺構群	124
土坑・ピット(124)	
(4) 3面の遺構外の出土遺物	127
第4節 4面の調査	128
(1) 4面の概要	128
(2) 4面の遺構と遺物	128
溝(128)、畑(128)、土坑(128)	
(3) 4面の遺構外の出土遺物	128
第5節 5面の調査	135
(1) 5面の概要	135
(2) 5面の遺構と遺物	135
竪穴住居・溝状遺構群(135)、掘立柱建物(157)、竪穴遺構(161)、	
焼土(163)、土坑・ピット(163)	
(3) 5面の遺構外の出土遺物	167
第6節 縄文時代・弥生時代の遺物	167
第4章 自然科学分析	169
第1節 自然科学分析の委託	169
第2節 下之宮高俣遺跡出土中世人骨	170
第3節 下之宮高俣遺跡の馬歯	173
第4節 下之宮高俣遺跡出土木材および	
炭化材の樹種同定	175
第5節 下之宮高俣遺跡出土の灰の植物珪酸体	178
第6節 下之宮高俣遺跡出土の大型植物遺体	179
第5章 総括	183
第1節 概要	183
第2節 下之宮高俣遺跡の建築遺構	184

参考文献

挿図目次

第1図	下之宮高俣遺跡と群馬県の地勢	1	第55図	1区111～117号畑	84
第2図	下之宮高俣遺跡位置図	2	第56図	1区5号溝の痕跡と23・36・39・119号畑	85
第3図	試掘調査成果	3	第57図	1区2・3・20・30号溝と出土遺物	88
第4図	下之宮高俣遺跡の調査区	5	第58図	1区19・24号溝と199号土坑	89
第5図	下之宮高俣遺跡の標準土層	7	第59図	1区2・3号竪穴(上)、2号土塁上面と5号溝 の痕跡及び37・118号畑	90
第6図	周辺地形分類図	12	第60図	1区2号土塁上面の集石と5号溝の痕跡	91
第7図	周辺遺跡分布図	15	第61図	1区3・4号井戸と出土遺物	92
第8図	1-1区1面全体図	24	第62図	1区1号集石と2面の遺構外の出土遺物	93
第9図	1-2・3区、2～5区1面全体図	25	第63図	1-1区3面全体図	94
第10図の1	1区1・3～6号復旧溝群	26	第64図	1区2号土塁と5・11号溝	95・96
第10図の2	1区1・3～6号復旧溝群断面	27	第65図	1区2号土塁下7・8号ピットと2号土塁出土遺物(1)	98
第11図	1区2号復旧溝群	28	第66図	1区2号土塁出土遺物(2)	99
第12図	1区7号復旧溝群	29	第67図	1区2号土塁の断面と出土遺物(3)	100
第13図	1区8・9号復旧溝群	31	第68図	1区5号溝出土遺物(1)	101
第14図	1区6～8号土坑と出土遺物	32	第69図	1区5号溝出土遺物(2)	102
第15図	2区1～3号復旧畑	33	第70図	1区10・11号溝出土遺物	103
第16図の1	2区1～3号復旧溝群平面	34	第71図	1区6・7・8・16号溝と出土遺物(1)	104
第16図の2	2区1～3号復旧溝群断面	35	第72図	1区6・8号溝出土遺物	105
第17図	3区1号区画溝と1・2号復旧畑	36	第73図	1区12～15号溝	106
第18図	3区2号区画溝と3号復旧畑	37	第74図	館内土坑出土遺物(1)	107
第19図	3区1号土坑と出土遺物	38	第75図の1	館内土坑・ピット(1)と出土遺物(2)	108
第20図	3区2号道路、3・4号区画溝、4・5号復旧畑と 1号土坑	39	第75図の2	館内土坑・ピット土層断面(1)	109
第21図	4区1号道路と1・4・5号復旧畑	40	第76図	館内土坑・ピット(2)と出土遺物(3)	110
第22図	4区1号道路、1号溝と2・3・6・7号復旧畑	41	第77図	館内土坑・ピット(3)と出土遺物(4)	111
第23図	4区1号道路と8～10号復旧畑	42	第78図の1	館内土坑・ピット(4)と出土遺物(5)	112
第24図	4区1号集石	43	第78図の2	館内土坑・ピット(4)	113
第25図	5区1号溝と2号復旧畑	44	第79図の1	館内土坑・ピット(5)	114
第26図	5区1号道路、2号溝と3・4号復旧畑	45	第79図の2	館内土坑・ピット(5)土層断面	115
第27図	5区1号復旧畑	46	第80図の1	館内土坑・ピット(6)	116
第28図	1～5区1面遺構外出土遺物	47	第80図の2	館内土坑・ピット(6)土層断面	117
第29図	1区1号屋敷As-A軽石上面	50	第81図の1	館内ピット(7)	118
第30図	1区1号屋敷As-A軽石下面	51	第81図の2	館内ピットの土層断面(7)と館内土坑出土遺物(7)	119
第31図	1区1・2号建物と土壁、及びダイドコロ	52	第82図	館内土坑・ピット(8)と出土遺物(8)	120
第32図	1区1号建物	53	第83図	館外の土坑とピット(1)と出土遺物(1)	125
第33図	1区2号建物	54	第84図	館外の土坑(2)	126
第34図	1区1号建物掘り方と3号建物	56	第85図	1区3面の遺構外の出土遺物	127
第35図	1区1号建物礎石	57	第86図	1区4面全体図	129
第36図	1区1号建物出土遺物(2)	58	第87図	1区40・41号畑	130
第37図	1区1号建物出土遺物(3)と2号建物出土遺物(1)	59	第88図	1区41・126～129号畑	131
第38図	1区2号建物出土遺物(2)	60	第89図	1区126～129号畑断面と4号溝	132
第39図	1区1号土塁北西部と出土遺物(位置は62頁第41図参照)	60	第90図	1区27・28・29号溝(1)	133
第40図	1区1号土塁南部(上)と土塁上集石(中)及び3号石組	61	第91図	1区28号溝(2)	134
第41図	1区1号道路と1号土塁	62	第92図	1区5面全景	136
第42図	1区1号土塁2号石積と1区1号井戸	64	第93図	1区1号住居と出土遺物	137
第43図	1区1号井戸出土遺物(1)	65	第94図の1	1区2号住居と出土遺物	138
第44図	1区1号井戸出土遺物(2)及び1～5号土坑と出土遺物	66	第94図の2	1区2号住居土層注記	139
第45図	1区屋敷内出土遺物	67	第95図の1	1区3号住居と1号溝状遺構群	140
第46図の1	1区1・17・18号溝と1号溝出土遺物及び 1～5・22・27・30号畑	68	第95図の2	1区3号住居土層注記	141
第46図の2	1区17号溝出土遺物及び1～5・22・27・30号 畑土層断面	69	第96図の1	1区3号住居掘り方と出土遺物(1)	142
第47図の1	1区18号溝及び6・7・24～26・28・29 ・31～34号畑	70	第96図の2	1区3号住居出土遺物(2)	143
第47図の2	1区6・7・24～26・28・29・31～34号畑土層断面	71	第97図の1	1区4号住居	145
第48図の1	1区1号溝及び8～18号畑	72	第97図の2	1区4号住居土層断面と出土遺物	146
第48図の2	1区8～18号畑土層断面	73	第98図	1区5号住居と出土遺物	148
第49図	1区(1-2区)19・20号畑	74	第99図の1	1区6号住居	150
第50図	1区(1-3区)21号畑	75	第99図の2	1区6号住居出土遺物	151
第51図	1区1号竹藪と出土遺物	78	第100図の1	1区7号住居	152
第52図	2区1・2号区画溝と1～11号畑、3区1号集石	79	第100図の2	1区7号住居出土遺物	153
第53図	1-1区2面全体図(左:上・中位面 右:下位面)	81	第101図	1区8号住居と3号溝状遺構群及び出土遺物	155・156
第54図	1区101～110号畑	83	第102図の1	1区9号住居と3号溝状遺構群	158
			第102図の2	1区9号住居掘り方と土層注記及び出土遺物	159
			第103図	1区9号住居と3号溝状遺構群	160
			第104図	1区1号掘立柱建物と出土遺物	162

第105図	1区1号竪穴と出土遺物(1)及び1号焼土	164
第106図	1区1号竪穴出土遺物(2)	165
第107図	1区1号竪穴出土遺物(3)及び5面の土坑群	166
第108図	1区5面のピット群	167
第109図	1区5面の遺構外の出土遺物と縄文・弥生時代の出土遺物	168
第110図	第221号土坑出土人骨の歯の萌出状態推定	172

第111図	中世館虎口遺構概要図	183
第112図	主家からの方位第129図	185
第113図	附属建物の配置形式	186
第114図	礎石実測断面図	187
第115図	柱間寸法図	189
第116図	復元平面図	189

本文写真目次

1-1区2面2期調査風景	8
1-2区1面台風被災状況	9
1-1区3面3期調査風景	10
写真1 カスリーン台風被災状況写真	13
写真2 1区128号土坑出土人骨(頭蓋骨)	170
写真3 1区128号土坑全景	170
写真4 1区128号土坑出土人骨(出土歯咬合面観)	170
写真5 1区221号土坑出土人骨出土状況	171

写真6 1区221号土坑出土永久歯咬合面観	171
写真7 1区221号土坑出土人骨出土状況	171
写真8 1区221号土坑出土顎左右切歯のエナメル質減形成	172
出土馬歯写真	173・174
図版1 下之宮高俣遺跡出土土材の光学顕微鏡 および走査型電子顕微鏡写真	177
図版2 下之宮高俣遺跡出土の灰の植物珪酸体	181
図版3 下之宮高俣遺跡から出土した大型植物遺体	182

表 目 次

表1 周辺遺跡一覧	17
表2 1区1面上位面復旧溝群一覧	27
表3 4区1面復旧畑一覧	40
表4 1区1面下位面As-A下畑一覧	76
表5 2区1面下位面As-A下畑一覧	76
表6 1区1面土坑計測値	76
表7 1区2面畑一覧	87
表8 3面館内土坑一覧	109
表9 3面館内ピット一覧	120
表10 3面館外土坑一覧	125
表11 3面館外ピット一覧	125
表12 4面As-B下畑一覧	132
表13 5面土坑一覧	166
表14 5面ピット一覧	167
表15 下之宮高俣遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表	172

表16 切歯計測値	174
表17 上顎臼歯計測値	174
表18 下顎臼歯計測値	174
表19 下之宮高俣遺跡出土木材及び炭化材の樹種同定結果	175
表20 下之宮高俣遺跡出土の灰の植物珪酸体	178
表21 下之宮高俣遺跡から出土した種実遺体	179
表22 下之宮高俣遺跡から出土した葉遺体	179
表23 主家からみた付属建物の建造位置(境町)	185
表24 玉村町の広間型	188
表25 伊勢崎市の広間型	188
表26 藤岡市の広間型	188
表27 客間における2間の柱間内法寸法と建造年代	190
表28 遺物観察表	191
表29 非掲載遺物集計表	219

写真目次

PL. 1	1	1-1区東部1面(上側東)
	2	1-1区中～南西部1面(上側東)
PL. 2	1	1-2・3区1面復旧溝群(南より)
	2	1-1区東部1面(北より)
	3	1区1号屋敷(上側東、As-A上面)
	4	1区1号屋敷庭As-A清掃状況(南より)
	5	1区1・2号建物土壁遺存状況(北西より)
PL. 3	1	1区1号建物(西より)
	2	1区1号建物南壁遺存状況(北西より)
	3	1区1号建物竈と排水弁(北より)
	4	1区1号建物竈と水囊(南西より)
	5	1区1号建物礎石(49)出土状況
	6	1区1号建物ダイドコロ付近遺物出土状況
	7	1区2号建物全景(北西より)
	8	1区3～5号土坑全景(南より)
PL. 4	1	1区1号井戸付近全景(南より)
	2	1区1号井戸底部枳材出土状況(西より)
	3	1区3号建物全景(西より)
	4	1区1号土塁全景(西より)
	5	1区1号道路(南より、As-A上)
	6	1区1号溝全景(北より)
	7	1区1号畑全景(南より)
	8	1区1号畑足跡(南東寄り)
PL. 5	1	1-1区中・北西部全景(東より)
	2	1区32号畑と9号復旧溝群(横位)(北より)

	3	2区東部全景(西より)
	4	2区1号復旧溝群と1号畑(軽石部)(北東より)
	5	2-2区全景(北東より)
PL. 6	1	2区1号復旧畑全景(南西より)
	2	2区2号復旧畑全景(東より)
	3	3区全景(東より)
	4	3区北西部(南西より)
	5	3区1号土坑全景(東より)
PL. 7	1	4区全景(東より)
	2	4区2号復旧畑As-A残存状況(西より)
	3	4区2号復旧畑全景(西より)
	4	4区5号復旧畑西部(南より)
	5	4区5号復旧畑東部(南より)
PL. 8	1	4区6号復旧畑(東より)
	2	4区7号復旧畑(南より)
	3	5区全景(東より)
	4	5区3号復旧畑(東より)
	5	5区1・2号道路、2号溝全景(南より)
PL. 9	1	1-1区東部・北部2面(上側東)
	2	1-1区南西寄り2面(上側東)
PL. 10	1	1区2・3号溝全景(西より)
	2	1区19号溝全景(東より)
	3	1区23号畑全景(南より)
	4	1区3号井戸全景(西より)
	5	1区4号井戸全景(東より)

	6	1区2号竪穴全景(上側東)	3	1区6号住居掘り方全景(西より)
	7	1区2号土塁上土層断面(北東より)	4	1区7号住居遺物出土状況(南東より)
	8	1区2号土塁近世面表出状況ピ(東より)	5	1区7号住居焼土面分布状況(北西より)
PL.11	1	1-1区東部・北部3面(北西より)	6	1区7号住居全景(南東より)
	2	1-1区中・南西部3面(南西より)	7	1区7号住居掘り方全景(南西より)
PL.12	1	1区館北部(東より)	8	1区8号住居南半部全景(北より)
	2	1区館中央・中西部(東より)	PL.22	1 1区8号住居北半部全景(南東より)
	3	1区館東部(西より)	2	1区8号住居南半部掘り方等全景(東より)
	4	1区館中南・南西部(東より)	3	1区9号住居遺物出土状況(南より)
	5	1区5号溝中部全景(西より)	4	1区9号住居全景(南より)
	6	1区5号溝西部と橋脚柱穴(東より)	5	1区9号住居掘り方全景(北より)
PL.13	1	1区5号溝・土塁土層断面(東より)	6	1区1号掘立柱建物全景(南より)
	2	1区5号溝南塵除土層断面(東より)	7	1区1号竪穴遺物出土状況(東より)
	3	1区10号溝(左)・11号溝(右)全景(西より)	8	1区1号竪穴遺物出土状況(東より)
	4	1区11号溝埋戻土橋(西より)	PL.23	1区1号復旧溝・1号土坑・1号建物(1)・1～5区遺構外
	5	1区11号溝白磁皿出土状況(南東より)	PL.24	1号建物(2)
	6	1区12号溝全景(南より)	PL.25	1区1号建物(3)・2号建物・ミソグラか・建物一括・1号土
PL.14	1	1区2号土塁全景(南より)		塁・1号井戸
	2	1区2号土塁中東部(北より)	PL.26	1面屋敷内・1・17号溝・6号土坑、2面2号溝・3・4号井
	3	1区2号土塁と土塁痕跡(手前)(東より)		戸・集石・洪水層・遺構外
	4	1区2号土塁中東部礫崩落状況(西より)	PL.27	3面2号土塁・門
	5	1区2号土塁石列(北西より)	PL.28	3面5・6・10・11号溝
	6	1区2号土塁突出部(北西より)	PL.29	3面8・9号溝・40・45・57・58・62・122・128・141・148・
	7	1区2号土塁土層断面(北東より)		195号土坑・33号ピット・遺構外
	8	1区館門(西より)	PL.30	5面1・2・3(1)号住居
PL.15	1	1区館虎口全景(上側北)	PL.31	5面3(2)・4・5・6(1)号住居
	2	1区館門(北より)	PL.32	5面6(2)・7(1)号住居
	3	1区館門下部ピット(西より)	PL.33	5面7(2)・8・9号住居・1号掘立柱建物
	4	1区館北部土坑・ピット群(上側南)	PL.34	5面1号竪穴住居(1)
	5	1区館中央・中西部土坑ピット群(北より)	PL.35	5面1号竪穴住居(2)
PL.16	1	1区館南東部土坑ピット群(上側南)	PL.36	4面28号溝、5面遺構外、縄文・弥生時代
	2	1区館南東寄りピット群(東より)		
	3	1区41号土坑周辺土坑・ピット群(東より)		
	4	1区106・107号土坑土層断面(西より)		
	5	1区148号土坑全景(南より)		
	6	1区306号土坑周辺土坑ピット群(北より)		
	7	1区52・53号土坑全景(南より)		
	8	1区29号溝全景(北西より)		
PL.17	1	1-1区東部4面全景(南より)		
	2	1区27号溝全景(北西より)		
	3	1区40号畑全景(西より)		
	4	1区41号畑全景(北より)		
	5	1-2区4面全景(南より)		
PL.18	1	1-1区中央・中南部5面全景(南南東より)		
	2	1-1区南東隅部5面(西より)		
	3	1区1号住居掘り方全景(南より)		
	4	1区2号住居遺物出土状況(西より)		
	5	1区2号住居炭化材出土状況(南西より)		
PL.19	1	1区2号住居全景(西より)		
	2	1区2号住居掘り方全景(南より)		
	3	1区3号住居遺物出土状況(北より)		
	4	1区3号住居遺物出土状況(南西より)		
	5	1区3号住居全景(西より)		
	6	1区3号住居土坑1土層断面(西より)		
	7	1区3号住居掘り方全景(西より)		
	8	1区4・5号住居出土遺物(西より)		
PL.20	1	1区4号住居全景(北より)		
	2	1区4号住居掘り方全景(西より)		
	3	1区5号住居全景(北西より)		
	4	1区5号住居掘り方全景(南より)		
	5	1区5号住居床上・床下土層断面(西より)		
	6	1区6号住居遺物出土状況(西より)		
	7	1区6号住居灰遺存状況(西より)		
	8	1区6号住居中北部灰堆積状況(北東より)		
PL.21	1	1区6号住居全景(西より)		
	2	1区6号住居貯蔵穴付近(北東より)		

第1章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過

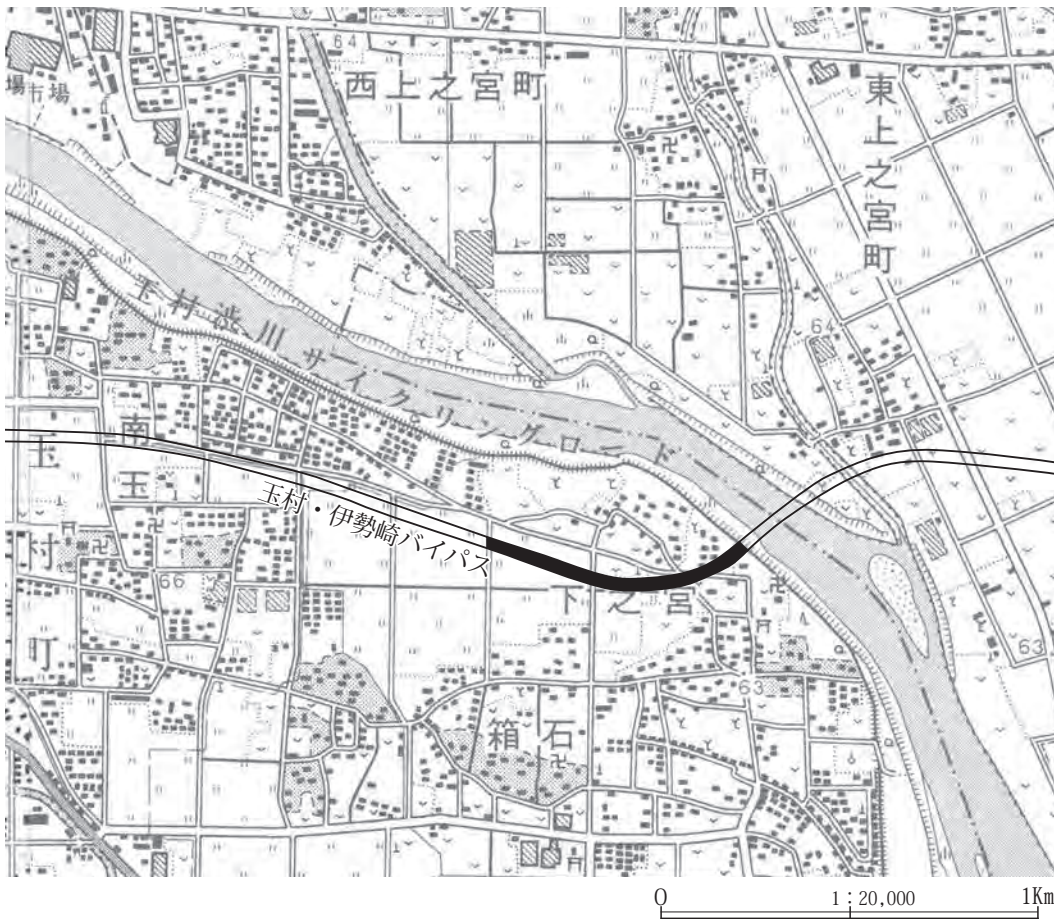
(1) 国道354号と玉村伊勢崎バイパス

一般国道354号(以下「国道354号」とする)は、北関東の東西を結ぶ主要幹線道路のひとつである。国道354号は、昭和49年(1974)11月に政令364号により、館林市-高崎市間の路線として指定された一般国道であり、その後、幾度かの路線変更を経て、現在は群馬県高崎市と茨城県牟田市を結ぶ、全長172.3kmの道路となっている。

一方、国道354号は、群馬県にとって、県南部に在る、西毛(群馬県西部)の高崎市と、中毛(同中南部)の伊勢崎市、東毛(同東部)の太田市及び館林市、そして県東端の邑楽郡板倉町を結ぶ幹線道路、東毛広域幹線道(東毛広



第1図 下之宮高俣遺跡と群馬県の地勢(S=1/200,000 国土地理院「宇都宮」平成18年発行を使用)



第2図 下之宮高俣遺跡位置図(S=1/20,000 国土地理院「伊勢崎」平成15年発行を拡大して使用)

幹道)の一部として、これを構成している。

さて、幹線道路である国道354号は、昭和40代のモータリゼーションの到来により、各所で出退勤時を中心とした交通渋滞を引き起こすようになる。その交通渋滞が頻発する箇所の一つに、一級河川利根川を渡河し、西の佐波郡玉村町の中心市街地(旧例幣使街道玉村宿)と、東の伊勢崎市域を繋ぐ五料橋があった。五料橋の渋滞は、玉村町中心市街地が、古くから西の高崎市と東の伊勢崎市、南の多野郡新町(現高崎市)や藤岡市と北の前橋市や勢多郡大胡町(現前橋市)を結ぶ、陸上交通の結節点であるのに対し、玉村町の中心市街地と北の前橋市方面や東の伊勢崎市方面への通行が、大河川の利根川により阻まれ、その渡河点が、上述の五料橋と、玉村町の中心市街地の北方に在る、群馬県道24号高崎伊勢崎線(以下「県道高崎伊勢崎線」とする)の架橋である福島橋の二箇所に限られたという要因のためであった。

このうち、福島橋は、東西を結ぶ県道高崎伊勢崎線、そして南北を結ぶ群馬県道11号前橋玉村線と群馬県道40号藤岡大胡線(以下「県道藤岡大胡線」とする)という3本

の主要地方道の渡河点であったため、交通渋滞が常態化していた。しかし、この方面の交通渋滞は、平成13年(2001)12月に、県道藤岡大胡線のバイパスの開通に伴って、福島橋の東600m地点に、新たに架橋された玉村大橋が通行できるようになったことで、交通渋滞の緩和が図られるようになった。しかし、玉村大橋の供用開始後も五料橋の渋滞が大きく改善されることはなかった。

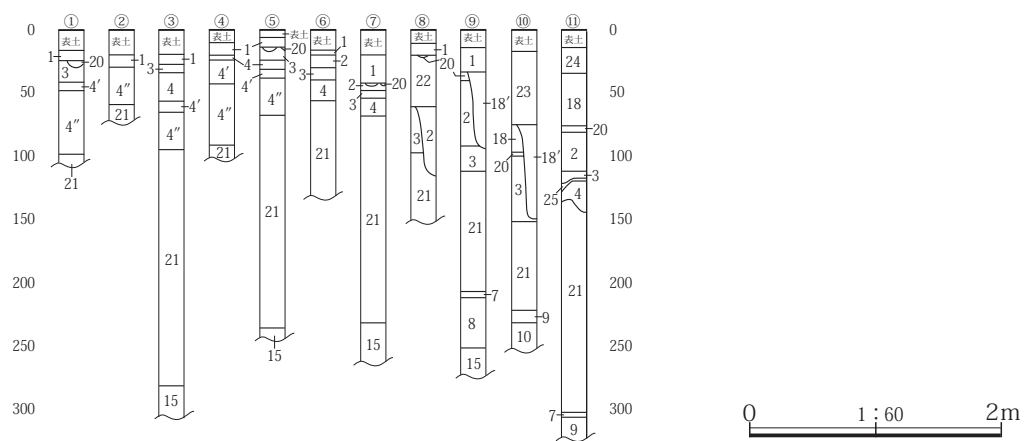
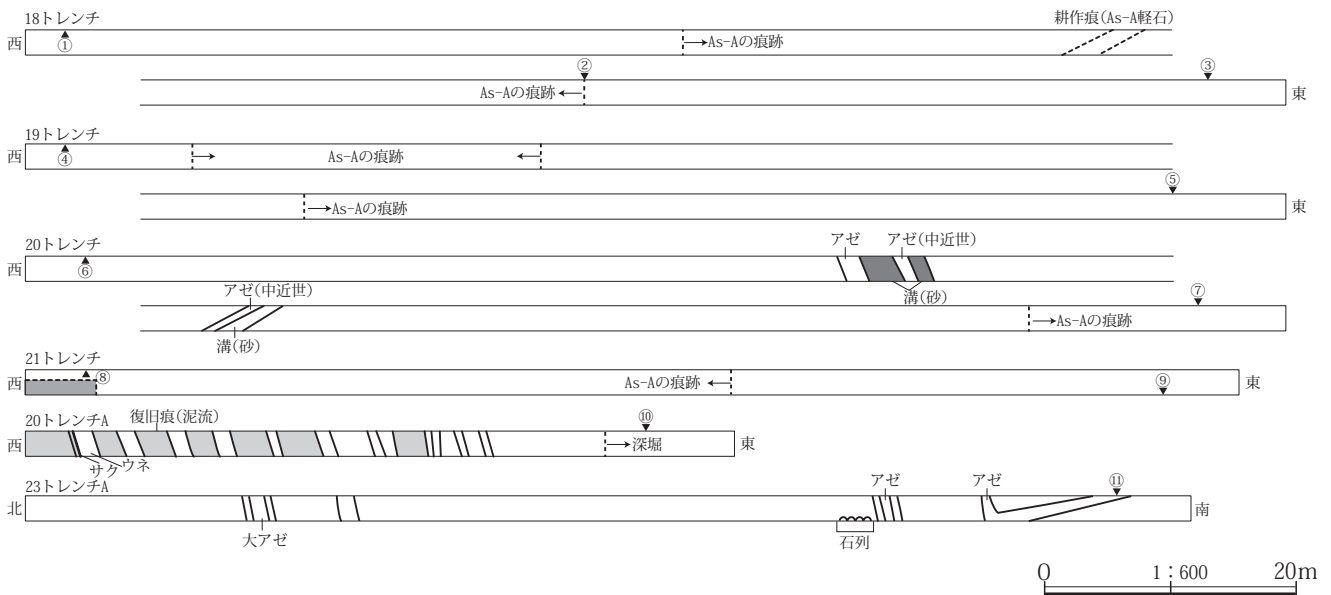
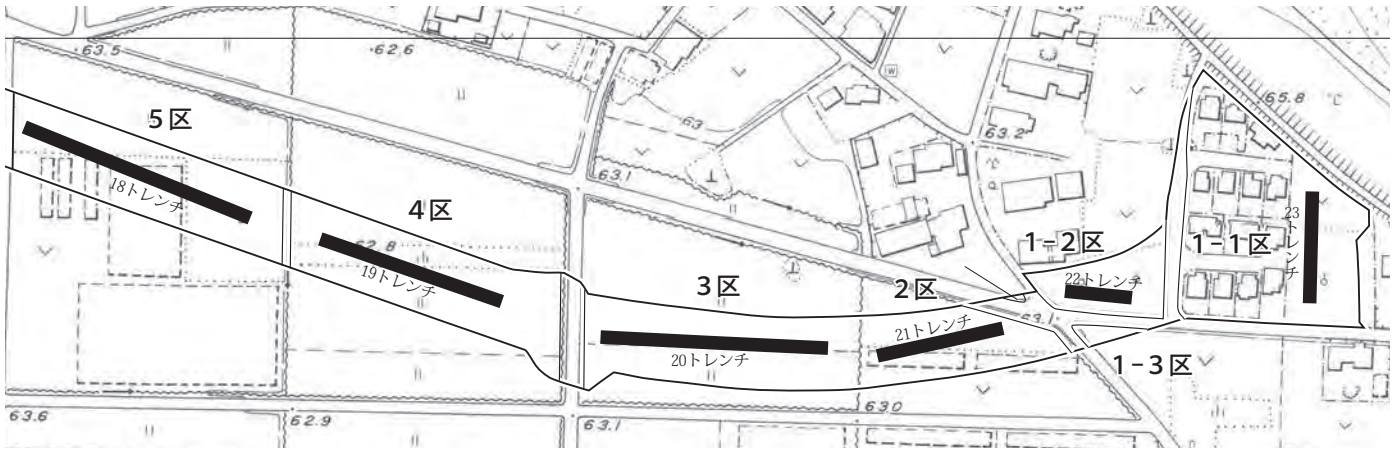
この五料橋の渋滞

に対して、国道354号(旧道)に並走するバイパス(玉村・伊勢崎バイパス)を建設し、五料橋の交通渋滞の緩和、交通量の増加、通行の円滑化を図る計画が立案された。この計画は、地域間連携や発展に貢献する広域幹線道路の一つとして建設中の、東毛広域幹線道路の一部としての機能も併せ持つものである。東毛広域幹線道路は、幾つかの事業を組み合わせる建設される高規格道路で、西毛の高崎市と県東端部の板倉町とを結ぶ、全長58.61kmの4ないし6車線の幹線道路である。事業期間は昭和37年度から平成29年度(1962.4～2018.3)であり、暫定2車線の区間もあるが、本稿執筆現在、全線で供用が開始されている。

このバイパスの一部となる玉村伊勢崎バイパスは、利根川への新たな架橋を伴うもので、西は既設の国道354号のバイパスである高崎玉村バイパスに接続し、東は県道高崎伊勢崎線のバイパス(葦塚工区)へ接続するものである。玉村伊勢崎バイパスは、佐波郡玉村町福島(ふくじま)に所在する県道藤岡大胡線バイパスとの交差点を基点、玉村町東部を東進した後、新たに架橋された伊

勢玉大橋で利根川を渡河し、伊勢崎市上之宮町域を東西に横断して、同市田中町の群馬県道104号駒形柴町線との交差点を終点とする、全長3,030mの道路である。玉村伊勢崎バイパスは、既に平成26年(2014)8月31日暫定

2車線で供用が開始されているが、平成29年度(2017.4-2018.3)までに4車線化させる予定で事業が進められている。



第3図 試掘調査成果(玉村町都市計画区域図9平成19年作成使用)

(2) 試掘調査

玉村伊勢崎バイパスの事業を担当する群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所(以下「伊勢崎土木」)は、群馬県教育委員会文化財保護課(以下「保護課」)に対し、埋蔵文化財の有無を問い合わせた。これに対し保護課は、当該事業地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、平成22年5月20日から同年6月4日にかけて、同バイパス建設予定地である佐波郡玉村町福島から下之宮に至る地域に対する試掘、確認調査を実施した。この調査は、遺構面の検出、遺構の有無、遺物出土の確認を目的としたもので、予定地内に幅1mのトレンチを23本設定して実施された。その結果、「ほぼ全域で、天明三年(1783年)の浅間山噴火に伴うAs-A軽石や泥流に覆われた水田や畑、復旧溝、中世から近世にかけての洪水層に覆われた水田や畑、As-A軽石層前後で営まれた水田跡等を検出した。また、13トレンチ以西では、古墳～平安時代にかけての住居跡等も確認した、という調査成果をまとめている。この成果により文化財保護課は「住居跡や水田、畑地が確認されたことから、本調査が必要と判断される」という判定を下し、関係機関に通知している。

このうち、その東部が玉村町No.212遺跡に含まれる下之宮高俣遺跡は、区域内に18トレンチから23トレンチの6本のトレンチが設定され、試掘調査が実施された。このうち18トレンチが試掘調査の5区に、19トレンチが同4区に、20トレンチが同3区に、21トレンチが同2区に、22トレンチが同1区西部に、23トレンチが同1区東部に設定されている。これらのトレンチのうち、19～22トレンチは建設予定地の中央を縦断するように設定され、23トレンチは、当該区域にミニ団地が在ったため、その東端部に路線に対して垂直な方向に設定されていた。なお、上記1～5区は、試掘調査段階で、調査時点で約100mおきに敷設された道路や農業用水路で区切られる区間を一つの区として、東から1～19区と、便宜上付したものであるが、後述する本遺跡の本調査においても、この区呼称は引き継がれている。

3～5区では、18トレンチは2.3m、19トレンチは1m、20トレンチは1.3mの深さまで掘削したが、表土下に圃場整備時の客土、以下、砂質土、シルト、粘質シルトが堆積し、55～88cm以下は、シルトや砂の互層から成る

水生堆積層が堆積していることを確認した。そして平面的には、18トレンチでAs-Aの痕跡やAs-A下の耕作痕、19トレンチではAs-Aの痕跡、20トレンチでは中・近世の砂で埋没した畑やAs-Aの痕跡を確認した。

一方、1・2区では、21トレンチで1.4～2.6m、22トレンチで2.5m、23トレンチで3.1mの深さまで掘削した。21トレンチ以東では、表土、圃場整備時の客土の下に、地表下10～95cmの位置にはAs-Aの純層が堆積し、東部では客土とAs-A純層の間にAs-A泥流土やAs-A混土が堆積している。As-A純層の下にはシルトや細砂層があり、更にシルトや砂の互層から成る水生堆積層が見られた。その下にAs-BやHr-FA或いはAs-Cなどを含む粘質土の堆積が確認されている。平面的には21トレンチではAs-Aの痕跡、22トレンチではAs-A降下時の畑や降下後の耕地復旧溝、23トレンチではAs-A降下時の大畔や畦、石列が確認されている。

これにより、本遺跡は18～23トレンチの設置区域内全域が、発掘調査対象となっている。

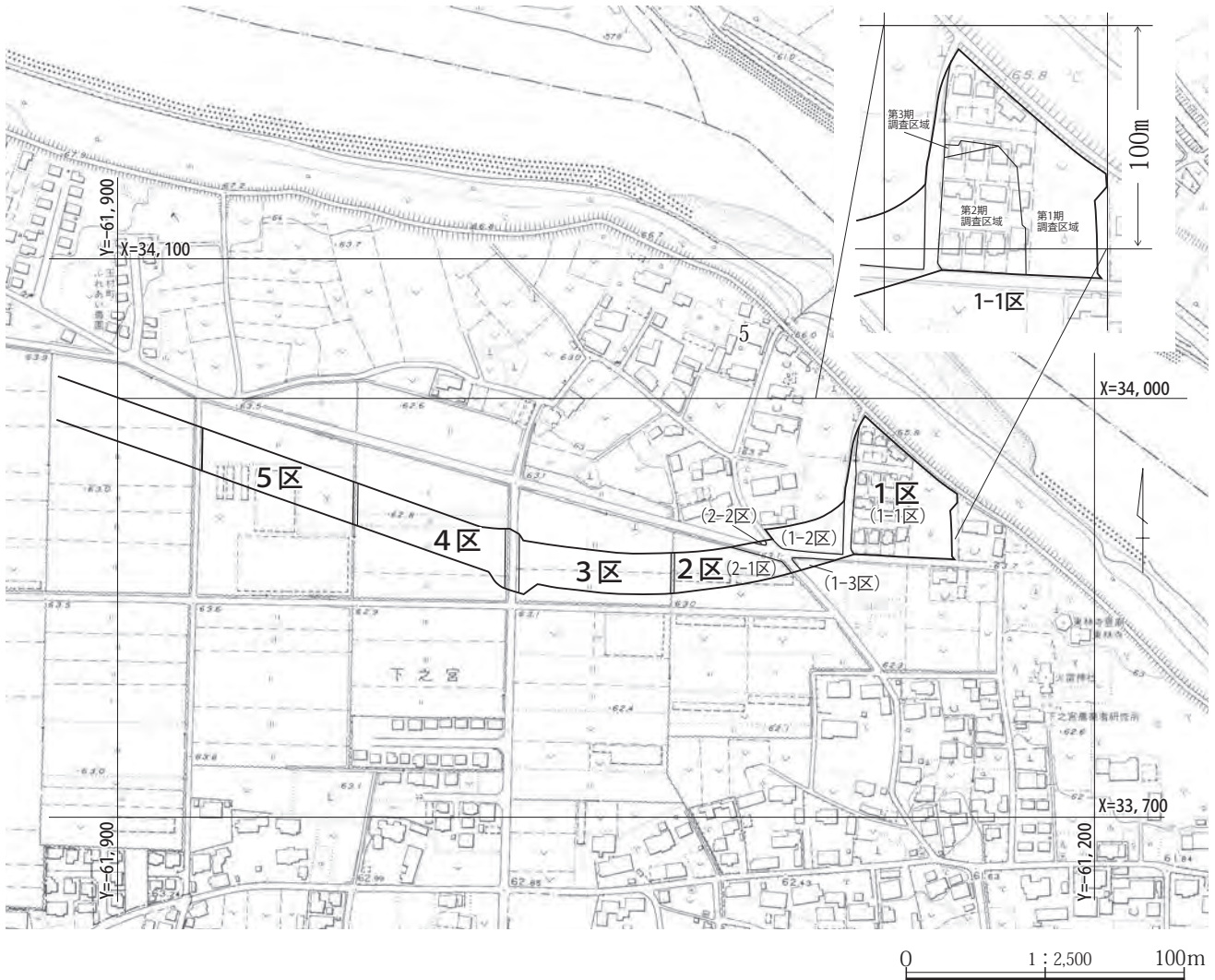
(3) 発掘調査に至る経過

伊勢崎土木はこの試掘調査の成果を受けて、平成22年8月、保護課に対して発掘調査を依頼し、協議の結果、同年9月1日に財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(現公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、以下「事業団」とする)がこれを受託することに決し、事業団が本遺跡の調査を実施することとなったのである。

第2節 調査の方法

(1) 調査区の設定

本遺跡周辺は、圃場整備の区画整理により、ほぼ100mおきに敷設された道・水路で圍繞された区画が広がる。玉村伊勢崎バイパスは、この区画を東西に横断するが、本遺跡は道水路で区画された7区画があったが、東端の3区画は変則的な道路の敷設によって区画されたため一つの区として1区とし、以西の区画は、東から西に2区、3区、4区、5区と名称を付した。また1区は区の中を通る道路により、1-1区、1-2区、1-3区に細分し、更に1-1区は、第3節に後述するように3回に分けて調査されたため、東部と北部の第1期調査区、中央部・中南部・南西部・中西部の第2期調査区、そして中・西



第4図 下之宮高伏遺跡の調査区

(伊勢崎市現況図No.41平成22年作成、玉村町都市計画区域図9平成19年作成使用)

北部南寄りの第3期調査区にさらに細分している。

なお、上述のように、1～5区は、試掘調査で設定した区呼称に一致する。また、区の名前の標記は、発掘調査段階ではローマ数字表記と算用数字表記が混在していたが、本報告書においては算用数字表記に統一して報告する。

(2)調査面の設定

本遺跡は、下記の第1面は1～5区で共通している。しかし、2～5区では出水による調査の危険があったため、また1-3区は、その狭さから下位面到達の可能性が低く、出水や、壁面崩落の危険が想定されたため、第1面だけの調査に留めた。

また、1-1区では、第1期・第2期調査区域では5面の調査を行い、第3期調査区域では調査期間が極めて

短かったため、2面の調査に留めた。これらの調査面は、第1～3期調査区域の第1面は共通しているが第2面以下は、それぞれの調査状況によって異なるものになっている。第1期調査区域の第2・3調査面は本報告書の2面(以下同じ)、第4面は3・4面、遺構確認面が5面に相当する。2期調査区域の第2調査面は2面、第1期調査区域での経験から第3面の呼称は用いず、第4調査面は3面、第4調査面の下位が4面に相当し、第5調査面は5面を示している。3期調査区域での第2調査面は、3面に相当する。

1-2区では調査1面は1面であるが、調査2面は4面であり、2・3面の遺構を確認することはできなかった。

以下、本報告による遺構面を記す。

第1章 調査に至る経過

- 第1面 近世面であり、天明3(1783)年浅間山噴出のAs-A軽石層(後述の標準土層IV層)下面を基本として設定したが、遺構は天明3年後のものも含まれている。このため、本書では、第1面は天明3年より後の遺構を第1面上位面、天明3年の面を第1面中・下位面として報告する。
- 第2面 近世面であり、大洪水のあった寛保2(1742)年の被災遺構を調査対象とした。しかし、中世から近世にかけての洪水が多かったようで、寛保2年の遺構を特定するのは難しく、一部寛保2年と誤認した畑遺構も、本面の遺構として報告する。
- 第3面 中世面である。15世紀を中心とする時期の遺構を報告するが、その中心となるものが、中世館に伴う遺構群である。
- 第4面 古代面である。天仁元(1107)年浅間山噴出のAs-B軽石で覆われた遺構群である。
- 第5面 古墳時代面である。古墳時代前期の遺構を確認調査したが、1-1区第2期調査区域でしか調査できなかった。

(3)調査方法

上述のように本遺跡の調査は、複数面を対象としており、各区、調査面ごとに実施した。

掘削は、表土及び各調査面間の土層は、掘削機械を用い、一部人力で掘削した。この作業の後、鋤簾を用いて、人力により確認面の精査を行い、遺構確認を行った上で、スコップ或いは移植コテ等を用いて、人力により遺構を掘削した。この際、土層確認のためのベルト等を設定し、記録化を図るまでの間、掘り残す等の手順を経た。

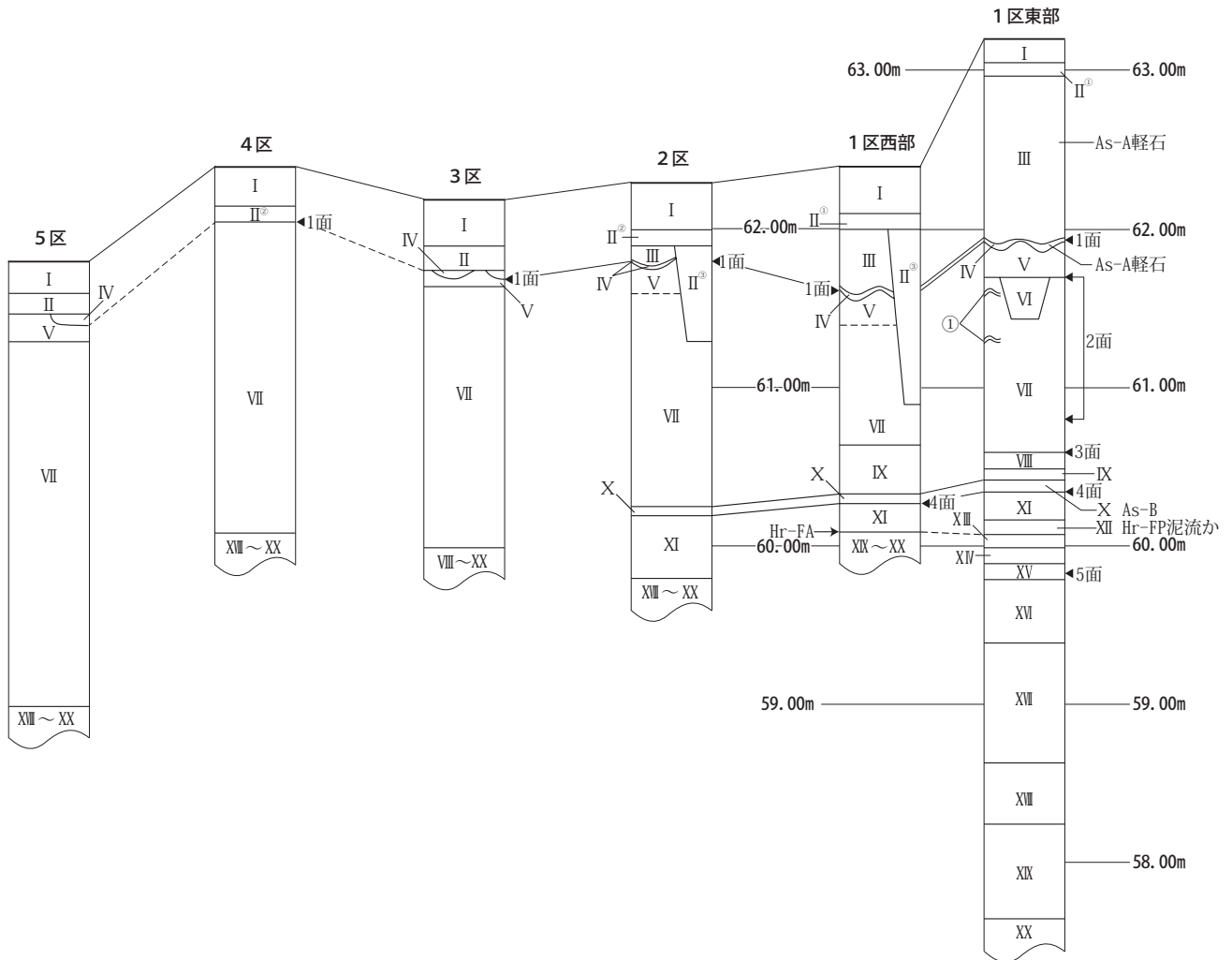
なお、1-1区においては、調査の効率化を図るため、As-A泥流層を除去して、As-A軽石面を表出させたのち、遺構の調査を行った。

記録保存のための遺構の記録は、測量図と写真によった。平面図は、原則としてデジタル測量で行い、断面図はアナログ測量を実施した後、デジタル化を実施した。また、適宜航空写真撮影を行ない、区全体或いは各遺構の写真撮影は、デジタル写真撮影を基本として、全景写真等については、記録保存の観点から6×7版によるモノクロ写真撮影も併用した。

(4)標準土層

本遺跡の堆積層は、地点、地点により異なるものであった。従って、全く完全な標準土層を示すことはできないが、以下、これらを概観してまとめたものを標準土層として示す。

- I：現耕土：褐灰色(東部)～黒褐色(西部)砂質土。
- II：旧耕土
- II①：天地返し後の耕作土：にぶい黄褐色砂質土。
- II②：被災後の耕作土：暗灰褐色土。As-A軽石混入。
- II③：As-A泥流復旧溝埋土：As-A泥流層土主体。
- III：As-A泥流層：天明3年(1783)。黒褐色土。
- IV：As-A軽石層：天明3年(1783)。軽石・火山灰・軽石の3ユニット確認。本層下面が第1面の確認面。
- V：黄褐色細砂質土：天明3年(1783)の耕作土。
- VI：にぶい黄褐色砂：洪水復旧坑埋め土。寛保2年(1742)の可能性有。
- VII：洪水と耕作による形成層：褐色～黒褐色砂質土：川砂混入。複数層に分層可能。層の中に褐灰色砂質土の畑耕土複数枚確認。本層中に2・3面の第2面の確認面有り。
- ①：VII層中の耕作度：褐灰色砂質土。厚さ数cmで畝・畝間(サク)が波状に確認される。
- VIII：室町時代の表土：灰白色細砂質土：粘性あり。本層上面が第3面の確認面。
- IX：黒褐色砂質土：As-B軽石混入。いわゆるB混黒。
- X：As-B軽石層：天仁元年(1108)。本層下面が第4面の確認面。
- XI：黒褐色～褐灰色粘質土：上位層は天仁元年(1108)耕作土。
- XII：明黄褐色粘質土：Hr-FP泥流か。
- XIII：褐灰色粘質土
- XIV：黒色粘質土
- XV：黒褐色粘質土：本層上面付近が第5面の確認面。
- XVI：ローム漸移層土：にぶい黄褐色。
- XVII：ローム層土：明黄褐色。
- XVIII：灰白色細砂質土
- XIX：にぶい黄色細砂質土
- XX：灰黄色砂質シルトと小礫の混土：前橋泥流風化層か



第5図 下之宮高俣遺跡の標準土層

第3節 発掘調査の経過

下之宮高俣遺跡の発掘調査は、平成22年10月から24年4月にかけて実施した。しかし、調査は西接する下之宮中沖遺跡と併せた調査であったため、本遺跡と下之宮中沖遺跡の調査は、交互、或いは並行に行われた。このため、本遺跡の調査は断続的なものとなっているが、その実質的調査期間および、当該調査対象区域は次の通りである。

- ① 期間 平成22(2010)年10月1日～12月2日
対象区域 2～5区 調査面は1面
- ② 期間 平成23(2011)年1月4日～2月4日
対象区域 4区 調査面は1面

- ③ 平成23(2011)年7月～10月
調査対象1区 調査面は1～5面
- ④ 平成24(2012)年1月～3月
調査対象1区 調査面は5面
- ⑤ 平成24(2012)年5月
調査対象1区 調査面は2面
1区のうち、東部の1-1区の「1期調査区域」は上記③の期間に実施された調査範囲(東部・北部)であり、「2期調査区域」は同じく上記④の期間に実施された調査範囲(中部から西・南部)、「3期調査区域」は同じく上記⑤の期間に調査された調査範囲(西側中北部)を示している。

また、調査東端の1-1区は当初北半分の区域を調査した後、南半分の区域を調査する予定であり、調査区内

第1章 調査に至る経過

に在ったミニ団地跡には電柱の撤去を依頼していたが、当時東日本震災復旧が優先されたため、撤去が遅延し、変則的な調査区割を行うこととなり、1-1区の1～3期調査区間に未調査区域が生ずるなど、調査に支障を生じた。

さて、以下に調査日誌の抜粋を記す。

① 平成22年度調査の1

2010年(平成22年)10月

- 1日 担当者着任。事務所用地整備(～5日)
- 6日 幅杭復元。
- 8日 2区、3区除草並びに安全柵設置。事務所設置。
- 12日 3区機械による表土掘削開始(～19日)。
- 14日 3区遺構確認(含む掘削)開始。
- 18日 5区除草作業(～19日)。
- 19日 3区写真撮影開始。4区除草作業。
- 20日 3区遺構実測開始。5区機械による表土掘削・遺構確認開始(～27日)。
- 29日 3区下位面への確認調査開始。

11月

- 1日 10月30日の台風14号による降雨のため、調査区水没。3区は2日まで、5区は4日まで調査不能。
- 8日 3区調査完了。
- 9日 3区埋戻し開始(～12日)。
- 10日 2区機械による表土掘削開始(～18日)。
- 12日 2区遺構確認(含む掘削)開始。
- 15日 3区隣地境畦畔成形(～19日)。5区遺構測量開始。
- 17日 5区遺構写真撮影開始。伊勢崎土木の要請により、4区南の畦畔を撤去。
- 18日 2区遺構写真撮影開始。
- 19日 5区調査終了。玉村町教育委員会中島主査視察のため来跡。
- 22日 5区埋戻し開始(～25日)。
- 25日 5区隣地境畦畔成形(～30日)。
- 26日 2区全景写真撮影。
- 30日 2区調査終了。2区埋戻し作業開始(～12月1日)。

12月

- 2日 2区隣地境畦畔成形。
- 3日 年末まで調査中断(下之宮中沖遺跡調査)。
- 15日 2・3・5区の平面図修正作業実施。

② 平成22年度調査の2

2011年(平成23年)1月

- 4日 作業再開。
 - 6日 4区機械による表土掘削開始(～13日)。
 - 14日 18日まで調査中断(下之宮中沖遺跡調査)。
 - 19日 調査再開。4区遺構確認(含む掘削)開始(～25日)。
 - 23日 下之宮高伝遺跡・下之宮中沖遺跡現地説明会。(見学者181名)
 - 26日 4区写真撮影。
 - 27日 4区遺構測量開始(～2月1日)。
- #### 2月
- 2日 4区埋戻し。
 - 3日 4区隣地境畦畔成形(～4日)。
 - 4日 平成22年度調査終了。(下之宮中沖遺跡調査へ)

③ 平成23年度調査の1

2011年(平成23年)5月

- 1日 担当者着任。(以後しばらくの間、下之宮中沖遺跡の調査に入る。)
- #### 7月
- 19日 調査範囲囲繞。下之宮中沖遺跡より資材搬入等開始(～21日)。
 - 22日 1-1区1期調査区域(東・北区域)機械による表土掘削開始(～8月12日)。



- 25日 1-1区1期調査区域1面遺構確認、As-A下畑より掘削開始(北部を除きAs-A上面まで掘削)。
- 29日 1-1区1期調査区域1面断面図測量に着手、遺構測量開始。屋敷遺構調査着手(As-A軽石上面)。
- 8月
- 12日 1-1区1期調査区域東部As-A上面、北部As-A下面空中写真撮影。
- 13日 第1回現地説明会(1面屋敷遺構等、下之宮地区対象)。
- 17日 1-1区1期調査区域As-A下面調査。1-3区機械による表土掘削開始(~19日)、遺構確認。
- 18日 1-3区遺構掘削開始。
- 23日 1-2区機械による表土掘削開始(~31日)、遺構掘削開始。1-1区の調査中断、1-2・3区の調査に傾注。
- 9月
- 1日 台風12号に伴う降雨(~2日)。
- 2日 降雨に伴い調査区冠水、排水作業開始(1-2・3区は10月に入っても湧水止まらず)。
- 5日 台風被害対策作業。1-1区
- 6日 1-1区作業再開。1-1区北部、2面への機械による掘削開始(~31日)。
- 8日 1-1区1期調査区域1面(As-A下)空中写真撮影。
- 26日 1-3区調査再開。
- 27日 1-2区調査再開。
- 29日 1-1(1期調査区域東部)・1-2・1-3区1面(As-A下)、1-1区1期調査区域北部2面空中写真撮影。
- 10月
- 4日 1-2区2面へのトレンチによる確認調査開始。遺構確認(~7日)。
- 5日 1-1区1期調査区域2面遺構確認開始(含遺構掘削~7日)。1-2区2面遺構掘削、遺構測量、写真撮影、湧水著しく壁面崩落の危険のため、拡張を断念。1-2区調査終了。
- 6日 排水をしつつ埋戻し開始(~7日)。
- 7日 1-3区1面調査終了。法面との関係から2面調査断念。
- 8日 1-3区埋戻し開始(~12日)。



- 12日 1-1区1期調査区域1面調査東端の一部(近世屋敷カマド付近及び1号井戸)を除き終了。
- 14日 1-1区1期調査区域東部調査2面(2面)空中写真撮影。
- 17日 1-1区1期調査区域東部調査3面(4面、As-B下面)遺構掘削開始。
- 20日 1-1区1期調査区域東部調査3面(4面)空中写真撮影。
- 21日 1-1区1期調査区域北部調査4面(ほぼ3面)の中世館遺構群の確認に至る遺構確認開始、掘削開始。
- 26日 1-1区1期調査区域東部5面確認調査。南東部に遺物の埋蔵が多めであることを確認。
- 27日 1-1区1期調査区域調査4面(東部4面、北部3面)空中写真撮影。
- 29日 1-1区1期調査区域5面東部南東隅の包含層部分掘削、掘削、遺物出土状況写真、測量。
- 31日 1-1区1期調査区域北部調査4面(3面)空中写真撮影。1-1区1期調査区域北部4面(3面)と東部1面残部分調査終了。工事側に明け渡し。
- 11月
- 1日 発掘資材撤収、中沖遺跡へ搬送。以後年明けまで下之宮中沖遺跡の調査に集中。
- ④ 平成23年度調査の2
2012年(平成24年)1月
- 10日 調査再開。1-1区2期調査区域発掘資材搬入、安全対策。



- 11日 1-1区2期調査区域1面表土掘削開始(～26日)、遺構確認開始(～16日)。
- 12日 1-1区2期調査区域1面遺構掘削開始。
- 24日 1-1区2期調査区域1面遺構測量、写真撮影開始。
- 28日 1-1区2期調査区域1面空中写真撮影。
- 30日 1-1区2期調査区域調査2面への機械掘削、遺構確認開始(～2月8日)。
- 31日 古墳頂部(後に土塁であることを確認)を確認、遺構測量開始。
- 2月
- 9日 1-1区2期調査区域2面空中写真撮影。
- 10日 1-1区2期調査区域3面への機械掘削(～10日)、外堀・土塁調査等遺構調査継続。
- 13日 1-1区2期調査区域館以南4面への機械掘削(～17日)、遺構確認作業。
- 17日 玉村町教育委員会中島文化財係長、群馬県城館址研究会原氏来跡。
- 20日 1-1区2期調査区域館以南4面遺構掘削開始。高崎市教育委員会秋本主任主事来跡。
- 21日 1-1区2期調査区域4面館以南遺構測量、写真撮影開始。村田敬一先生(建築学)、玉村町教育委員会川端課長、小柴文化財室長、中島文化財係長視察のため来跡。
- 24日 1-1区2期調査区域3・4面空中写真撮影。口澤宏先生、中島文化財係長視察のため来跡。
- 26日 第2回現地説明会(隣接集落対象)開催、玉村町長他96名参加。
- 27日 1-1区2期調査区域3面表層面の調査完了。5

面への機械掘削開始(～3月8日)、遺構確認作業。

- 28日 1-1区2期調査区域3面土塁撤去、土塁下所在遺構の掘削、測量、写真撮影開始。
- 29日 降雪により現場作業中止。
- 3月
- 1日 1-1区2期調査区域5面遺構掘削、測量、写真撮影開始。
- 7日 1-1区2期調査区域4面遺構調査終了。
- 8日 1-1区2期調査区域3面遺構調査終了後、5面へ掘削。
- 11日 1-1区2期調査区域5面遺構調査継続。排水作業。東日本大震災1周年黙祷。
- 16日 1-1区2期調査区域5面空中写真撮影
- 19日 1-1区2期調査区域5面調査終了。
- 20日 1-1区2期調査区域埋戻し開始(～31日)。
- 27日 調査事務所撤去。
- 31日 資材撤去完了。平成23年度発掘調査終了。

⑤ 平成24年度調査

2012年(平成24年)4月

- 1日 本遺跡も担当する南玉埋堀遺跡等調査担当着任。
- 9日 担当1名出張。1-1区3期調査区域の安全柵圍繞。
- 10日 1-1区3期調査区域の機械による表土掘削。
- 11日 1-1区3期調査区域1面遺構確認、掘削、測量、写真撮影。
- 12日 1-1区3期調査区域調査2面(3面)への機械掘削開始(～13日)。遺構確認(～16日)。
- 16日 1-1区3期調査区域調査2面(3面)遺構掘削、測量、写真撮影開始。
- 19日 1-1区3期調査区域調査2面(3面)全景写真撮影。
- 20日 1-1区3期調査区域8号住居北半掘り下げ(5面の遺構)
- 23日 1-1区3期調査区域調査終了。
- 24日 1-1区3期調査区域埋戻し開始(～5月2日)
- 5月
- 2日 下之宮高俣遺跡調査完了。

【参考文献】
国土庁1996『首都圏整備計画』

第2章 地理的および歴史的環境

第1節 遺跡の位置と周辺の地形

(1) 地理的環境

本遺跡は、群馬県中南部に位置する佐波郡玉村町下之宮に所在する。玉村町は関東平野の北西部に在り、本遺跡は玉村町役場の東2.9km、前橋市に在る群馬県庁の南東12.3km、伊勢崎市役所の西南西4.5kmに位置する。本遺跡は、利根川右岸にあるが、利根川は本遺跡の北側0.6km程を東南東方向に流れ、本遺跡の北東で南東方向に流れを変じて本遺跡の東端に接して流下する。また、後述する前橋台地を北西-南東方向に流下する中小河川の一つとして、本遺跡の西0.5kmに矢川がある。

遺跡地の周辺は、利根川の対岸を含めて農村地帯であり、集落や耕作地が広がるが、新興のミニ団地などが散見される。公共交通はバスのみであり、明治10年(1881)に設立した日本鉄道が第一区線(現在のJ R 高崎線)の建設を計画した当初には、玉村を通過させる案もあったが、結局、鉄道線は明治17(1884)年に、本遺跡の南5.1km付近、烏川の対岸を東南東-西北西方向に走行する路線として敷設され、本遺跡の南西4.9kmにJ R 新町駅が設置されている。また、本遺跡の南1.3kmには国道354号線が西北西-東南東方向に走り、その利根川架橋である五料橋が、南東2.2kmに在る。西方1.8kmには県道40号藤岡大胡線のバイパス線が南北に走行し、西北西2.1kmにはその利根川の架橋である玉村大橋が架かる。また、利根川の北側5.3km地点には県道24号高崎伊勢崎線が東西に通過し、西北西2.6kmにはその利根川の架橋には福島橋が架かる。この他、本遺跡の西方4.7kmには関越自動車道の高崎玉村スマートインターが在り、西北西5.6kmには北関東自動車道の前橋南インターが在る。

(2) 地質的環境

本遺跡の所在する佐波郡玉村町は、北に赤城山、北西に榛名山、南を藤岡-比企丘陵に囲まれた前橋台地(新井1962)の南東部に在る。前橋台地は、今から約2万年前

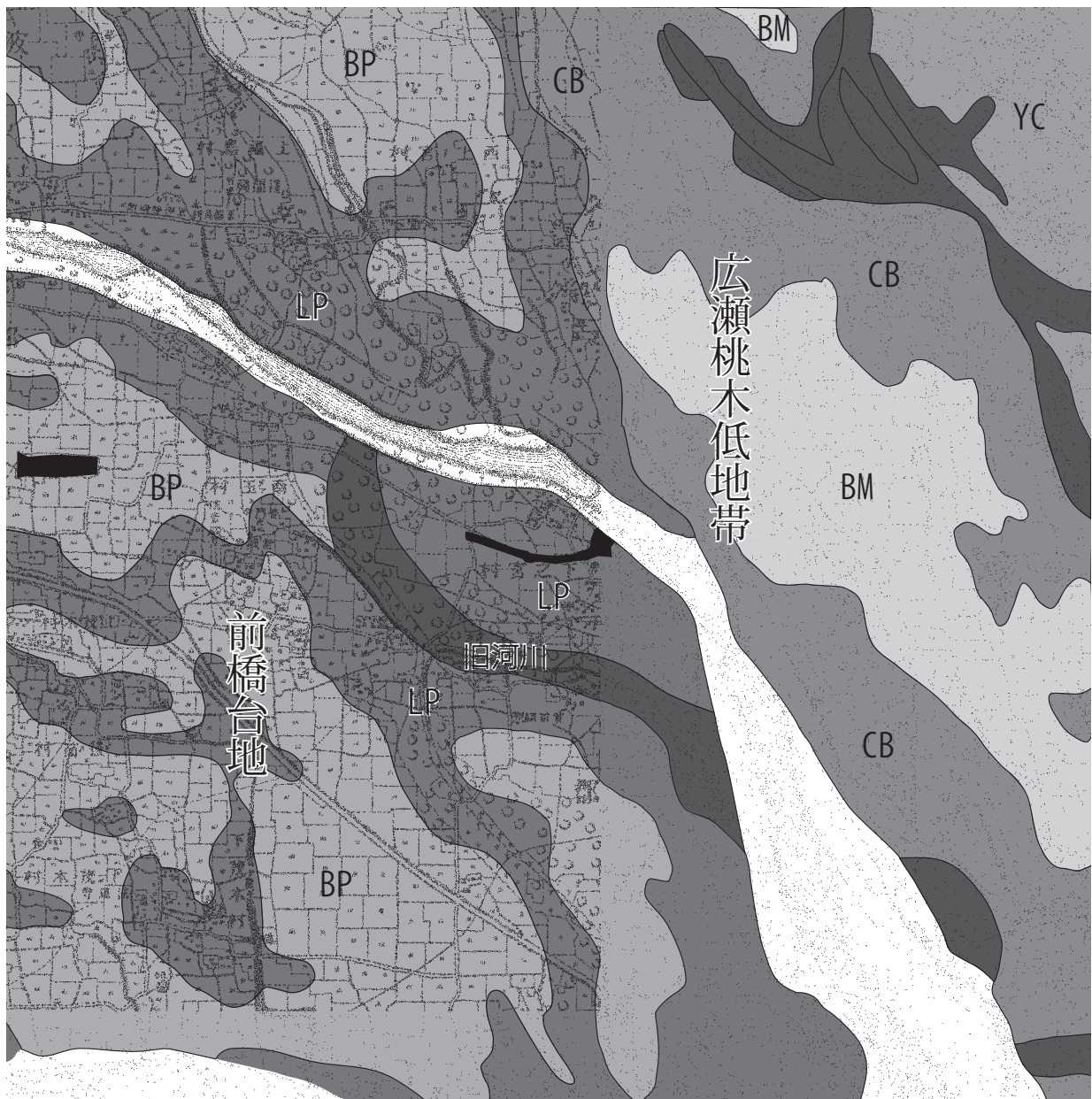
に浅間山東麓で水蒸気爆発があった時に発生した、大規模な山体崩壊による応桑泥流が吾妻川を下って前橋市域に至り、泥流堆積物を厚く積もらせたことで形成されたと考えられている。この前橋泥流堆積物は「大小の安山岩質角礫と細粒基質からなり、かなり固結している。ときに径数メートル以上の巨大岩塊をふくみ、またところにより河成の礫層をはさんでいる」(新井1967)地層であり、ボーリングデータによれば玉村町域ではおおむね17~20mの層厚を示すという(澤口1995)。なお、この泥流堆積物の上には板鼻黄色軽石層(As-YP)を挟む上部ローム層を載せている。このローム層上面は、南東方向へ樹枝状に延びる小支谷によって侵食されており、そのうちの多くは古墳時代以前に埋没していることが、本遺跡の北方を走る北関東自動車道関連の発掘調査等で判明している。

前橋台地の南部にあたる玉村町の景観は、ほとんど起伏のない平坦な地形に見えるが、明治18(1885)年測量の迅速図によれば、前橋台地南部は北西から南東にかけて緩い傾斜面を形成しており、標高は町北西部の板井では75mほど、南東端にある沼之上では55mほどとなっている。南端を画する烏川の南岸には藤岡-比企丘陵が迫っており、巨視的には前橋台地のなかで最も低い窪地状の地形となっている。このことから、関東平野の地質構造として知られる「関東構造盆地」の西端との見方(澤口1995)がなされている。

現在、玉村町域を横断する流路をとる利根川は、この前橋台地を貫流する大河川でもある。かつては、前橋台地の北東辺にあたる赤城山南麓との境、すなわち現在の広瀬川が流れる低地帯を流下していたと考えられており、その頃の玉村町附近は数条の小河川が流下する台地であったらしい。西遷と称される利根川の現流路への変流の時期と要因について築瀬大輔は、自然災害説と人工引水説があると指摘している(築瀬2012)。前者は応永34(1427)年の大洪水による西遷を主張するが、最初にその指摘をしたのは峰岸純夫であり(峰岸1984)、『伊勢崎市史』、『玉村町誌』がこの説を取り、築瀬も文書の記載に

基づく交通路の検討から、この説を取っている。一方、後者を主張したのが山崎一(山崎1978)と澤口宏(澤口2000)であるが、山崎は、惣社の長尾忠房が、現利根川の位置に在った久留馬川に拠って築城した石倉城(武田信玄が厩橋城への付城として築城した石倉城とは別物)の要害を増すため、旧利根川から久留馬川へ運河を掘ったものの、天文から永禄にかけての数回の洪水で利根川が変流して、城を押し崩したとし、澤口は『上毛伝説雑記』の記述に基づいて、石倉城へ利根川の水を導水するため

の堀を掘削したところへ洪水が襲い、東岸に三の郭だけ残して崩れたとして、この洪水の発生した1539(天文8)年と1543(天文12)年を西遷の時期としている。現状では、東西交通路の研究成果(久保田2009、築瀬2013)等から、応永34年の大洪水が利根川西遷の端緒であることが確認されている。しかし、15世紀後半までにかかなりの水量が移ったものの、少なくとも16世紀末まで西遷が続いたものと想定される。近世以降の利根川は概ね現流路を流れていたようであるが、絵図や現在も地形上に残された河



- | | | |
|--------------|--------------------|-----|
| LP: 前橋台地微高地 | BM: 河成段丘(後背湿地) | 旧流路 |
| BP: 前橋台地後背湿地 | GB: 河岸段丘(旧中州: 完新世) | |

第6図 周辺地形分類図(S=1/25,000 陸軍迅速図「倉賀野驛・伊勢崎町」 明治18年測図使用)

道から、七分川・三分川と呼称される玉村町南東端の対岸にあたる伊勢崎市側に蛇行・分岐した流路をとっていた事が知られる。

玉村町域での現利根川は、約150～200mの幅を有し、河床から3～10mの崖を形成している。台地地形は北西から南東方向へ緩傾斜するため、崖高は南東ほど低い。

前述のように、前橋台地上には中小河川が北西から南東方向に幾筋も流れていたと考えられ、埋没して現在は確認できない状態といつてよい。これらの埋没河川は、本遺跡から北方ないし北西方約4km前後のあたりを東西に横断する北関東自動車道路の発掘調査で存在が確認されている。これらはいずれも上部ローム堆積による台地地形形成後に流下が始まった榛名山麓起源の河川と考えられ、これによる小規模な侵食谷が樹枝状に展開していたと推測される。その多くは、縄文時代から浅間Cテフラ(As-C)の堆積する3世紀後半～4世紀初頭までの間には堆積作用が進んで埋没したらしい。前橋市徳丸仲田遺跡の旧藤川流路や同市西善尺司遺跡(共に第6図範囲外)で検出された河川も、6世紀初頭の榛名山噴火によるテフラ(Hr-FA)に覆われた水田が確認出来ることから、5世紀のうちにはほとんどが埋没してしまったと考えてよいだろう。そのなかで、いくつかの水流を集めて現代ま

で遺存し続けたと考えられるのが、前橋南部から玉村町域を流れる端気川や藤川である。この両河川は人工的に流路改変されて現況に至っているが、かつては第6図に見られるように、蛇行しながら北西から南東への流路をとる古墳時代以前から続く河川であると考えられよう。玉村町の現利根川以南の地に当たる地域でも、埋没した矢川の流路が想定されている。本遺跡の西方に在る南玉埋堀遺跡の調査範囲にも確認された矢川は、現在は利根川右岸の南玉から箱石を経て飯倉まで南流する用水路である。自然河川としての矢川は、藤川や端気川と平行するように東南流して利根川及び烏川に注ぐ流路をとっていたようであるが、その河道について現在はほとんど遺存していない。この矢川旧河道の復元は、明治18年測量の迅速図や航空写真(1947年米軍撮影)、地区境と小字地名を参考におおよそ復元が可能である。また、これに発掘調査の埋没河川調査例を加えた復元流路も提示されている(中島1999 関・中島2005)。なお矢川旧河道は中間点の箱石で東方に分岐して利根川に注いでいたことが絵図等で判明している。これは「裏矢川」と呼ばれ、現在は旧河道に沿った小規模な自然堤防状の微高地に住宅が立ち並んでおり、当時の流路をうかがうことができる。

矢川旧河道の形成がいつ頃かについては、現在のところ明確ではない。天仁元(1108)年の浅間山噴火以降との説(澤口1995)もあるが、現利根川の対岸にあたる北側を東南流する藤川と流路方向がほぼ平行していることから、現利根川の北側から藤川や端気川と平行して流下していた小河川の存在も可能性として考えておきたい。

ところで、この自然河川としての矢川旧河道は、天明3(1783)年の浅間山噴火の際に発生した泥流に襲われ、泥流堆積物で埋没してしまったことが記録に残されている。現在の玉村東南域はこの泥流堆積物(以下「天明泥流堆積物」と呼ぶ)が厚く覆い、微かな地形の凹凸を隠している。天明泥流は利根川から溢れ出して兩岸の低地部を襲っており、特に矢川旧河道に沿った地域は被害がひどく、利根川までの間約1.5kmの広範囲に及んでいる(関・中島2005)。なお、昭和22(1947)年のカスリー



写真1 カスリーン台風被災状況写真
(1947年10月30日米軍撮影、国土地理院「前橋使用」)

ン台風のと きにも、これとほぼ同様の氾濫被害がでていることは注目される(写真1)。利根川が現流路に変流して以来、玉村町南玉・下之宮・小泉・飯倉・沼之上の地域は、こうした洪水被害の常襲地域だったといえ、逆に利根川変流以前は比較的安全度の高い地域だったと推察される。このことは、縄文時代以降の遺跡立地との関係を考えるうえで、最も重要な地形条件と考えておくべきだろう。

この凄まじい被害をもたらした天明泥流は、西方に離れた長野県境にある浅間山の噴火に起因する。浅間山はこれより遡る3世紀後半～4世紀初頭の間、天仁元(1108)年の2回にわたって噴火がおき、このとき広範囲に亘って住民の生活環境に多大な影響を与えたと考えられている。また、前橋台地北西にそびえる榛名山は、古墳時代の西暦6世紀に2回の大きな噴火があり、県中央～東部に甚大な被害を与えたことが知られる。これらの火山噴火被害について、玉村地域においては降下火山灰のほか、榛名山の2度の噴火時に発生した洪水や泥流に覆われた事が判明している。さらに、年代や要因は特定できないが、中世に発生した洪水被害の痕跡も遺跡調査では明瞭に残されている。これらは、天明泥流のように甚大ではないにしろ、少なくとも農作物への被害は大きかったであろうと推察される。

玉村町域の歴史的な自然環境について、前橋台地東南部を主体に利根川の変流以後と以前で概述してきた。なお、前橋台地の南限を画する烏川は玉村町の南界ともなっており、対岸には藤岡市、埼玉県上里町がある。烏川は榛名山南西麓を流下して前橋台地の西側を画し、玉村町の南側では東流して南方から北流してくる神流川と合流、そこから約3km下流で現利根川を合わせている。16世紀代以前は玉村町の対岸で現流路のやや南側を流れ、利根川との合流点が尾島あたりまで至る以外、烏川の流路自体は大きな変化はなく、当地域における人類史のなかで確定的な地理的境界あるいは交流・交易ルートとしての役割を果たしてきた。このことから、烏川の存在が利根川変流以前の玉村町域の遺跡分布のあり方に一定の条件を与えていることは充分予測されるところである。

下之宮高仮遺跡の周辺地域における過去の植生については、いくつかの遺跡発掘調査に伴う花粉分析結果に

よって大まかな推定が可能である。それによれば、古墳時代の4～6世紀代では、集落のある遺跡近辺では概ね草本花粉と木本花粉がほぼ同量あり、草本ではイネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属が優勢で、木本ではコナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属が優勢との結果が出ていることから、遺跡周囲では水田を含む湿地及びやや乾燥地からなる草地と広葉樹林が相半ばする景観が推測される。また浅間Bテフラに覆われた12世紀初頭の地層からは、木本より草本花粉が大きく上回り、草本ではイネ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科が、木本ではクリ・シイ属・マテバシイ属とコナラ属コナラ亜属が優勢で、湿地もあるが比較的乾燥気味の開けた土地の周囲に広葉樹林が存在する景観が推測される。更に砂町遺跡では、6世紀初頭の榛名山の火山降灰(Hr-FA)は花粉の様相に大きな影響を与えていないとの結果が確認された。そして天明三(1783)年の浅間山噴火に伴う降下火山灰(As-A)と泥流下の土層中の花粉から、遺跡地周辺はかなり開けた乾燥草地の周辺に疎らな広葉樹林が存在する景観であるが、古墳時代や12世紀末の木本花粉相に加えて新たにマツ属が確認されることから、人為的な開発の結果生じる二次林の拡散が裏付けられたといえよう。

第2節 周辺遺跡の歴史的環境

(1)旧石器時代

第1節で述べたように、前橋台地は約2万年前からの上部ローム層をのせており、玉村町域においても後期旧石器時代の遺跡が発見されてもよい条件ではあるが、現在まで明確な遺跡の存在は知られていない。寒冷な湿地的環境であったことがその理由とされる(『玉村町誌 通史編 上巻』p.11)。石器類が発見されないだけで、旧石器時代人の活動域であったことまでも否定するものではないが、前橋台地ではその北東側にある赤城山麓や大間々扇状地での比較的濃密な遺跡分布と全く対照的な状況を示している。

(2)縄文時代

約12000年前に最終氷河期のドリラス期(Older Dryas)の終盤から温暖化が始まり、植生をはじめとした自然環境の大きな転換が、狩猟・採集経済を高度に発達させた

縄文文化を生み出した大きな要因になったことはよく知られている。前橋台地では、植生を示す花粉分析の結果から、この気候変動が一様ではなく、寒冷地植生が温暖化の影響を受けて緩やかに変化していった例のあることも分かっている。

玉村町域とその周辺では、この時期から遺跡の存在が明確になってくる。玉村町向田遺跡(272)では旧石器時代末期まで溯りうる黒曜石製木葉形尖頭器、福島曲戸遺跡(79)では有舌尖頭器が出土している。この地点での植

生分析からは、寒冷地特有のマツ属やトウヒ属が主体でこれにコナラ亜属などの広葉樹類がわずかに加わってることが判明しており、急激な温暖期をむかえる直前の段階と評価(矢口1999)されている。このように想定される環境において、徳丸仲田遺跡での磨り石類の存在は食用堅果類などの利用も既に行われていたことを示唆する事例として注目される。

縄文時代早期以降、とりわけ群馬県内で各地に集落が形成され遺跡数が激増する前期以降にあっても、玉村町



第7図 周辺遺跡分布図(S=1/25,000 陸軍迅速図「倉賀野驛・伊勢崎町」 明治18年測図使用)

域での遺跡数・遺構検出は希薄である。福島大光坊(104)・福島曲戸(79)の両遺跡で少数の土坑が検出されているのみで、集落の存在は不明瞭である。福島曲戸遺跡のように少量とはいえ早期から後期までの土器片がまんべんなく出土することから、未確認ながら限られた地点で度々集落が存在したことは想定しておく必要はあろう。ただしその場合でも、遺物量の少なさから極めて時間的に短いものであったと考えるべきだろう。その理由を、小河川の多い湿地的環境であったための狩猟対象動物相の貧弱さや有用植物の少なさに求めることも可能だが、そこで収束するのではなく、むしろ少量とは言え出土した石器類の分析や環境復元の結果等を総合的に検討して小規模で限定的な縄文人の生活の有り様を復元すべきだろう。同様に、現在得られる資料から玉村町域における縄文時代遺跡の立地傾向を語るのも時期なお早と考える。立地環境の異なる赤城山麓や大間々扇状地といった縄文遺跡の高密度分布域とは自ずと異なる遺跡立地背景を想定すべきなのだろう。

(3) 弥生時代

弥生時代の時期区分として前・中・後の3時期区分が永く行われてきたが、稲作農耕の開始を廻る議論や土器編年研究の進展から、近年では更に細分して早期と晩期を加えた5時期区分も行われるようになってきた。また、中期と後期の境界に対する考え方の相違を解消するため、「前中後」の名称を避け「Ⅰ～Ⅴ期」と呼称することも並行して行われている。ここでは、周辺遺跡の紹介に重点を置くため、可能な限り各報告書や文献の記載に従い普遍的な3時期区分名で呼称することにする。

玉村町域での弥生遺跡の分布は、縄文時代と同様に少ない。しかし、その背景については縄文時代と異なる。群馬県において、少なくとも中期の後半からは稲作農耕本格化のために水田可耕地である低湿地への進出が顕現化するのであって、その点で玉村町域は格好の開墾地だったとの想定は赦されるはずである。しかるに、西側に隣接する井野川流域やこれに続く烏川中流域左岸には中期後半から後期にかけての弥生集落遺跡が多く分布するのと対照的な状況を示すのはなぜであろうか。ここでその理由についての考究は避けるが、既知の弥生遺跡資料によって玉村町域における弥生時代の状況を概観する

こととしたい。

現状で最も古い段階の弥生土器が出土したのは福島飯塚遺跡である。ここでは東北地方南部の南御山式系と思われる渦文土器がみられ、それ以外にも中期中葉から中期後半頃の在来系土器が出土している。中期後半では上飯島芝根Ⅱ遺跡(208)で中期後半の住居1棟(御新田式か?)が知られており、小規模で短期間と想定されるところでも集落の存在は否定できない。遺構は確認出来ないが、福島南玉(114)で中期後半の土器片が出土している。特徴的なのは、在来系櫛描文の栗林式とともに、北島式ないし御新田式(上飯島芝根Ⅱ(208)他)が目立つことである。出土総数そのものが少量であるにもかかわらず明瞭な存在を示すことから、比率としては他地域に比べてかなり高い。弥生時代中期後半の関東北西部では、中部高地型櫛描文を特徴とする栗林式土器が群馬県北～西半地域に、烏川と利根川の対岸にあたる埼玉県北部では北島式(吉田2003)、渡良瀬川以東の栃木県側には北島式と類縁性の高い御新田式が分布する。群馬県東部では散在的分布ながらも東北地方南部の影響を受けた渦文系土器の存在が知られている。玉村町域はこれらの主要分布域の間隙地域に相当し、そのことがこのような複数型式の混在状況を示すと考えてよからう。また、この時期に栗林式土器の集団が鐮川や烏川、さらに利根川に沿って埼玉県北部(熊谷市前中西遺跡)まで進出したと推測されることから、玉村町域はその通過地点だったとの想定も赦されよう。弥生時代の後期は県内各地に集落遺跡が拡散する分布動態が知られるが、当地域においては全く異なる。茂木古墳群内の玉村町13号古墳(190)から出土した後期初頭の甕を筆頭に、福島南玉(114)・神人村Ⅱ(30)の各遺跡から少数の樽式土器片が出土しているのみで、遺構の存在はなお不明瞭である。ここでは、群馬県北～西半部でみられるような弥生後期の定住集落の姿は想定しにくい状況といえる。南玉埋堀遺跡から北西に約5km離れた横手早稲田遺跡では、古墳前期土器に混在しながら比較的まとまった量の樽式土器が出土している。その理由が西側の弥生遺跡主分布域に近いからだとするならば、更に南東に展がる前橋南部～玉村町域～伊勢崎南部の低地域への進出が阻まれた何らかの理由があるはずである。それはおそらく、広範囲に及ぶ水利管理と水田開発の可否で理解するのがよいと思う。

表1 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
1	下之宮高俣遺跡				●		●	●	●	H22-25調査、屋敷、溝、畑、復旧溝
2	玉村町No.17遺跡		●		●	●	●	●	●	玉村御厨・玉村保指定地含む
3	松原Ⅱ遺跡				●	●	●	●	●	H3年発掘調査
4	松原Ⅲ遺跡				●					H2f試掘、4f調査、集落
5	松原遺跡				●		●	●	●	S62f調査
6	阿佐美館環濠集落							●	○	近世の可能性有
7	玉村町No.55遺跡				●					古墳
8	玉村町No.56遺跡				●					古墳
9	玉村町No.487遺跡				●					古墳
10	玉村町No.72遺跡					●	●	●		H2試掘、堀
11	原浦Ⅱ遺跡				●	●	●			H7調査、溝
12	原浦遺跡				●	●	●	●		H7発掘、溝
13	玉村町No.72遺跡					●	●			H2試掘、集落
14	玉村町No.76遺跡					●	●			H2試掘、集落
15	玉村町No.517遺跡						●			H4f調査、水田
16	尾柄町Ⅲ遺跡						●			H11年調査、水田
17	尾柄町遺跡					●	●			H3・4年調査
18	上福島尾柄遺跡					●	●	●		H13年調査、東山駅路、水田、溝
19	尾柄町Ⅱ遺跡							●		H3年調査
20	上福島遺跡				●		●	●		H13調査、水田、畑、溝
21	玉村町No.518遺跡						●			H4調査、水田
22	中町遺跡							●		H12f試掘、集落
23	玉村町No.584遺跡							●		H11f調査、畑
24	上福島中町遺跡				●		●	●		H13・14f調査、集落、土坑、柵列、畑
25	玉村町No.627遺跡							●		H15f試掘、道
28	神人村遺跡						●			H2試掘、土坑・溝
29	阿佐美館							○		藤姓那波氏築城
30	神人村Ⅱ遺跡						●	●		H3調査、水田
31	玉村町No.79遺跡								●	S63試掘、土師器包蔵地
32	玉村町No.80遺跡							●		H2試掘
33	玉村町No.57遺跡				●					古墳
34	玉村町No.82遺跡				●	●	●	●		H3試掘、集落他
35	玉村町No.511遺跡				●			●		H4調査、畑
36	樋越諏訪前遺跡							●		H8調査、畑
38	玉村町No.81遺跡						●			H2試掘
39	玉村町No.73遺跡					●	●			H2試掘、集落
40	松原遺跡				●	●	●			散布地、古墳
41	稲荷山古墳群				●					散布地、終末期古墳群
42	宮郷村第4号墳				●		●			H44調査
43	杉葉師古墳				●					宮郷村第3号墳
44	宮郷村第8号墳				●					H44調査
45	宮郷村第7号墳				●					
46	宮郷村第5号墳				●					
47	宮郷村第6号墳				●					
48	宮郷村第13号墳				●					
49	富士塚古墳				●					H44調査
50	宮郷村第12号墳				●					
51	金比羅山古墳				●					宮郷村第9号墳
52	上之宮古墳				●					H40調査、石室調査
53	若宮古墳群				●					終末期古墳群か
54	宮郷村第11号墳				●					
55	宮郷村第10号墳				●					
56	宮郷村第19号墳				●					
57	宮郷村第18号墳				●					
58	宮郷村第17号墳				●					
59	宮郷村第15号墳				●					
60	宮郷村第14号墳				●					
61	宮郷村第16号墳				●					
62	西上之宮遺跡							●		散布地、集落
63	倭文神社					●	○	○	○	式内社、上之宮社
64	上之宮要害							●		15、16世紀、那波氏
65	西本郷遺跡				●	●	●			散布地
66	東上之宮遺跡				●	●	●	●		散布地
67	東上之宮遺跡				●	●	●	●		H23-24調査、集落、土坑、ビト、溝、畑、復旧溝、墓、道、井戸
68	東上之宮遺跡					●	●	●		H25-26調査、集落、土坑、溝、水田、復旧溝
69	阿弥大寺本郷遺跡				●	●	●			H21試掘、集落、水田、畠

No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
70	阿弥大寺本郷遺跡				●		●	●		H22-23調査、集落、館、井戸、畠、水田
71	真光寺古墳群				●					散布地、古墳
72	宮柴遺跡		●							散布地、集落
73	宮柴前遺跡									●
74	宮柴前遺跡Ⅰ・Ⅱ区									●
75	一号堰遺跡				●	●	●			散布地
76	小泉城							●		那波氏、15世紀、集古文書、利根川崩落
77	柴遺跡								●	
78	柴遺跡								●	H13-17調査、建物、道路、溝、水田、畑、復旧溝
79	福島曲戸遺跡		●		●	●	●	●		H12f調査、集落、土器焼成、水田、復旧溝
80	玉村町No.565遺跡								●	H10f試掘(No.547)、畑、道路
81	玉村町No.673遺跡						●			H19試掘(No.691)
82	玉村町No.600遺跡					●	●			H12試掘(No.601)、集落、水田、溝、復旧溝
83	野屋敷遺跡				●		●	●		H11調査、水田、溝
84	玉村町No.692遺跡						●			H4試掘、水田、土坑
85	玉村町No.176遺跡					●	●			散布地
86	福島久保田遺跡				●		●	●		H10f調査、集落、屋敷、水田、復旧溝
87	久保田遺跡				●		●	●		H14f調査、集落、屋敷、土坑、井戸、ビト、溝、復旧溝
88	玉村町No.512遺跡						●			H4f調査(No.423)、水田
89	玉村町No.156遺跡						●			S62試掘
90	味噌袋・福島二丁町遺跡					●	●	●		H10調査、溝、土坑、水田
91	玉村町No.184遺跡					●	●	●		散布地
92	玉村町No.166遺跡						●			H2f試掘、集落、水田
93	利根添遺跡								●	H2調査、土手、畑
94	玉村町No.204遺跡								●	H2試掘
95	玉村町No.207遺跡						●	●	●	H2試掘
96	玉村町No.212遺跡					●	●	●		散布地
97	玉村町No.201遺跡						●			古墳?
98	玉村町No.202遺跡						●			古墳?
99	福島味噌袋遺跡		●		●		●	●	●	本遺跡
100	南玉二丁遺跡				●	●	●	●		H23-24調査、水田、畑、復旧溝、溝
101	南玉埋堀遺跡					●	●	●		H23-24調査、水田、畑、復旧溝
102	下之宮中沖遺跡				●		●	●		H22-24調査、溝、畑、復旧溝
103	玉村町No.208遺跡								●	H2試掘
104	福島大光坊遺跡		●		●		●	●		H9・12f調査、集落、溝、溝、畑、復旧溝
105	玉村町No.183遺跡					●	●			散布地
106	玉村町No.586遺跡					●	●	●		H11試掘(No.587)、集落、水田、溝、屋敷、復旧溝
107	福島大光坊遺跡						●	●		H9調査、墓、水田、屋敷
108	玉村町No.157遺跡						●			H2試掘
109	玉村町No.159遺跡						●			H2試掘
110	玉村町No.158遺跡						●			H2試掘
111	玉村町No.161遺跡						●			H2試掘
112	玉村町No.162遺跡						●			H1試掘
113	玉村町No.160遺跡						●			H2試掘、畑
114	福島南玉遺跡				●	●	●	●		H11調査、集落、溝、土坑
115	玉村町No.186遺跡				●	●	●	●		散布地
116	玉村町No.163遺跡						●			S63試掘
117	玉村町No.164遺跡						●			H2試掘、集落、水田
118	玉村町No.167遺跡						●			H2試掘、集落、水田
119	玉村町No.148遺跡							●		原家五輪塔(文安5・6年)

第2章 地理および歴史的環境

No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
120	玉村町No.168遺跡					●				H1試掘
121	十王堂Ⅲ遺跡					●				H3発掘、集落
122	玉村町No.190遺跡					●	●	●		散布地
123	玉村町No.169遺跡					●				H2試掘、集落
124	玉村町No.698遺跡					●				H2試掘、水田
125	玉村町No.419遺跡					●				H2試掘、水田
126	南玉館							●	○	原武屋敷
127	玉村町No.701遺跡									H2試掘(Na.214)、土坑、堀?
128	玉村町No.173遺跡						●			H2試掘、水田
129	玉村町No.138遺跡				●					古墳か
130	玉村町No.185遺跡				●	●	●	●		散布地
131	玉村町No.314遺跡				●					古墳
132	玉村町No.315遺跡				●					古墳
133	玉村町No.316遺跡				●					古墳
134	玉村町No.317遺跡				●					古墳
135	玉村町No.171遺跡					●	●			H2試掘、集落、水田
136	玉村町No.172遺跡					●	●			H3試掘、集落
137	玉村町No.170遺跡							●		H7試掘、畑、水田
138	玉村町No.205遺跡							●	●	H2試掘
139	玉村町No.206遺跡							●	●	H2試掘
140	玉村町No.193遺跡				●					古墳?
141	社宮島古墳				●					S51発掘
142	玉村町No.174遺跡						●			H1試掘、水田
143	玉村城							●		南玉原屋敷、金原氏、13世紀
144	玉村町No.191遺跡					●	●			散布地
145	十王堂Ⅰ・Ⅱ遺跡					●				H2発掘
146	三境Ⅱ遺跡					●	●			H6調査、集落、水田、溝
147	三境遺跡					●	●			H5調査、水田、溝
148	玉村町No.427遺跡					●	●			散布地
149	玉村町No.537遺跡							●		H6試掘(Na.483)、畑、水田
150	玉村町No.214遺跡					●	●			散布地
151	玉村町No.429遺跡				●					古墳?、S36航空写真
152	玉村町No.430遺跡				●					古墳?、S36航空写真
153	玉村町No.431遺跡				●					古墳?、S36航空写真
154	玉村町No.194遺跡				●					古墳
155	少林山古墳				●					
156	玉村町No.209遺跡						●			H2試掘
157	玉村町No.494遺跡					●	●		●	H1試掘、水田、畑
158	玉村町No.510遺跡							●	●	H4試掘(Na.408)、畑
159	玉村町No.196遺跡				●					古墳
160	玉村町No.197遺跡				●					古墳
161	玉村町No.198遺跡				●					古墳
162	火雷神社					●	○	○	○	式内社、上之宮社
163	玉村町No.199遺跡				●					古墳、S36航空写真
164	玉村町No.598遺跡							●		H12試掘(Na.595)、溝
165	玉村町No.213遺跡				●	●	●	●	●	散布地
166	玉村町No.210遺跡							●		H2試掘、畑
167	玉村町No.200遺跡				●					
168	玉村町No.211遺跡							●		H3試掘
169	玉村町No.215遺跡				●	●	●	●	●	散布地
170	玉村町No.489遺跡				●					古墳
171	玉村町No.433遺跡				●					古墳
172	玉村町No.457遺跡					●		●		H2試掘、水田、畑
173	玉村町No.432遺跡				●					古墳?、S36航空写真
174	重田家住宅							●		国登録有形文化財、住宅兼診療所
175	玉村町No.434遺跡				●					古墳
176	玉村町No.435遺跡				●					古墳
177	玉村町No.436遺跡				●					古墳
178	玉村町No.437遺跡				●					古墳
179	玉村町No.438遺跡				●					古墳
180	玉村町No.466遺跡							●		H2試掘
181	玉村町No.467遺跡							●		H2試掘
182	玉村町No.439遺跡				●					古墳
183	玉村町No.440遺跡				●					古墳
184	玉村町No.441遺跡				●					二本樺古墳?、S36航空写真
185	川井箱石遺跡	●		●		●	●	●		H8・9調査、包含層、集落、水田、溝、土坑
186	小泉大塚越遺跡			●		●		●		H1・6・12調査、水田、畑、復旧溝、溝

No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
187	小泉長塚遺跡				●				●	H2f発掘調査
188	玉村町No.442遺跡				●					古墳
189	玉村町No.468遺跡								●	H2試掘
190	玉村町No.469遺跡								●	H2試掘
191	玉村町No.686遺跡								●	H19試掘(Na.692)、水田か
192	玉村町No.470遺跡								●	H2試掘
193	北田中遺跡								●	H11調査、畑
194	玉村町No.685遺跡								●	H16試掘(Na.685)、畑、復旧溝
195	玉村町No.458遺跡								●	H1試掘(Na.47)、水田
196	稲荷木1号墳				●					S52発掘
197	稲荷木2号墳				●					S52発掘
198	沖遺跡								●	H10調査、畑
199	玉村町No.459遺跡								●	H2試掘
200	玉村町No.543遺跡								●	H7試掘(Na.494)、畑
201	玉村町No.460遺跡								●	H1試掘
202	往来遺跡								●	H6調査、畑
203	玉村町No.714遺跡								●	H24試掘(Na.731)、畑
204	玉村町No.471遺跡								●	H2試掘
205	玉村町No.179遺跡					●	●			散布地
206	上飯島芝根遺跡						●			H6調査、集落、水田
207	玉村町No.687遺跡									H20試掘(Na.697)、水田
208	上飯島芝根Ⅱ遺跡			●			●			H6調査、集落、水田
209	玉村町No.528遺跡						●			H5試掘(Na.460)、集落、水田
210	玉村町No.554遺跡						●			H9試掘(Na.527)、集落、水田
211	玉村町No.181遺跡					●	●			散布地
212	玉村町No.165遺跡					●	●			S63試掘、集落
213	玉村町No.187遺跡					●	●	●	●	散布地
214	玉村町No.188遺跡					●	●	●	●	散布地
215	大明神遺跡						●			H10調査、水田
216	玉村町No.709遺跡				●	●	●			H22試掘(Na.721)、土坑、ピット
217	茂木館(元木館)							●	○	田口氏、天正11年佐竹勢奇襲
218	玉村町No.189遺跡					●	●			散布地
219	玉村町No.417遺跡						●			H2試掘
220	玉村町No.418遺跡						●			S63試掘
221	玉村町No.180遺跡				●	●	●			散布地
222	玉村町No.182遺跡					●	●			散布地
223	後閑屋敷							●	○	田口広安、天正、西側に別郭
224	玉村町No.688遺跡						●			H21試掘(Na.711)、水田
225	玉村町No.420遺跡						●	●		H1試掘、溝
226	宮下屋敷							●	○	大正年間まで建物残る
227	玉村町No.424遺跡				●	●	●	●	●	散布地
227	五郎作東遺跡					●	●			H9調査、溝
228	玉村町No.421遺跡						●			H2・9試掘、水田、溝
229	滝川南遺跡				●		●	●		S62調査、集落
230	玉村町No.351遺跡				●					古墳
231	萩塚				●					総覧漏芝根村第10号墳
232	軍配山古墳				●					総覧玉村町第1号墳
233	玉村町No.710遺跡				●					S41調査、総覧玉村町第2号墳
234	下茂木神明Ⅱ遺跡						●			S62f調査、水田、溝
235	神明遺跡						●			S61調査
236	玉村町No.422遺跡						●			S63試掘
237	玉村町No.354遺跡				●					S41調査、総覧玉村町第3号墳
238	玉村町No.355遺跡				●					総覧玉村町第24号墳
239	玉村町No.423遺跡				●	●	●			散布地
240	玉村町No.343遺跡				●					総覧玉村町第4号墳
241	玉村町No.356遺跡				●					古墳、S36航空写真
242	玉村町No.358遺跡				●					総覧玉村町第6号墳
243	玉村町No.362遺跡				●					総覧玉村町第10号墳
244	玉村町No.358遺跡				●					総覧玉村町第7号墳

第2節 周辺遺跡の歴史的環境

No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
245	玉村町No.360遺跡				●					総覧玉村町第8号墳
246	玉村町No.361遺跡				●					総覧玉村町第9号墳
247	玉村町No.363遺跡				●					総覧玉村町第11号墳
248	玉村町No.364遺跡				●					総覧玉村町第12号墳
249	玉村町No.365遺跡				●					S41調査、総覧玉村町第13号墳
250	玉村町No.366遺跡				●					S42調査、総覧玉村町第14号墳
251	深沢遺跡				●					H6調査、集落、古墳
252	玉村町No.414遺跡				●					H2・14試掘、古墳
253	玉村町No.367遺跡				●					S41調査、総覧玉村町第15号墳
254	玉村町No.368遺跡				●					総覧玉村町第16号墳
255	玉村町No.369遺跡				●					総覧玉村町第18号墳
256	浄土山古墳				●					S42調査、総覧芝根村第1号墳
257	玉村町No.370遺跡				●					古墳
258	梨ノ木山古墳				●					S41-42調査、総覧芝根村第3号墳(皇院廻り古墳)
259	玉村町No.372遺跡				●					古墳、S36航空写真
260	玉村町No.373遺跡				●					古墳、S36航空写真
261	深沢遺跡(2次調査)				●	●	●			集落、古墳、墓、水田
262	玉村町No.374遺跡				●					古墳、S36航空写真
263	オトカ塚遺跡				●				●	H3f調査、総覧芝根村第2号墳(朴が塚)、集落、井戸
264	殿台山古墳				●					総覧芝根村第4号墳
265	下茂木地区遺跡群(本鉄塔No.21)					●	●			S63調査、水田、井戸、溝
266	玉村町No.513遺跡					●	●			H4試掘(Na.513)、溝、土坑、水田
267	玉村町No.563遺跡				●	●	●			H10試掘(Na.539)、溝、ピット
268	下茂木屋敷							●	○	斎藤基五兵衛、天正年間、田口文書
269	下茂木地区遺跡群(本鉄塔No.22)						●			S63発掘
270	玉村町No.425遺跡					●	●			散布地
271	玉村町No.569遺跡						●			H10試掘(Na.557)、水田、溝
272	向田遺跡				●	●	●	●	●	H19-20試掘(Na.694・704)
273	玉村町No.426遺跡					●	●			散布地
274	玉村町No.668遺跡				●	●	●	●	●	H17・19試掘、土坑、水田、溝、復旧溝、井戸、ピット
275	北原遺跡				●	●	●	●	●	H6調査、集落、墓、土坑、井戸、溝、水田
276	街道南遺跡				●		●		●	H2調査、墓、土坑、ピット、溝、井戸
277	茶釜山古墳				●					古墳
278	玉村町No.428遺跡				●	●	●			散布地
279	房子塚古墳				●					総覧芝根村第9号墳
280	川井城(霞城)							●		斎藤基盛、16世紀、田口文書
281	玉村町No.461遺跡						●			H2試掘
282	玉村町No.446遺跡				●					S44調査、総覧漏れ芝根村第17号墳
283	玉村町No.473遺跡				●					散布地
284	二ツ子山古墳				●					総覧芝根村第5号墳
285	玉村町No.449遺跡				●					S43調査、総覧漏れ芝根村第14号墳
286	玉村町No.450遺跡				●					S44調査、総覧漏れ芝根村第16号墳
287	玉村町No.451遺跡				●					S44調査、総覧漏れ芝根村第15号墳
288	玉村町No.443遺跡				●					総覧芝根村第12号墳

No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
289	玉村町No.444遺跡				●					S44調査、総覧漏れ芝根村第18号墳
290	川井稲荷山古墳				●					総覧芝根村第7号墳、三角縁神獣鏡出土
291	玉村町No.499遺跡						●			H2試掘(Na.86)、水田
292	玉村町No.497遺跡						●			H2試掘(Na.73)、水田
293	玉村町No.462遺跡								●	S63試掘
294	玉村町No.463遺跡								●	S63試掘、畑
295	玉村町No.464遺跡								●	H2試掘
296	玉村町No.452遺跡				●					古墳
297	玉村町No.568遺跡								●	H10試掘(Na.555)、畑、復旧溝
298	玉村町No.474遺跡				●	●	●	●	●	H2試掘、散布地
299	玉村町No.480遺跡								●	H3試掘
300	五料関所跡								●	例幣使街道利根川渡河点所在関所
301	玉村町No.472遺跡								●	H2試掘
302	玉村町No.615遺跡		●						●	H13試掘(Na.621)、包含層、水田
a	東山駅路					●	●			中路東山道
b	鎌倉街道支道							●		
c	上野大道							●		
d	日光例幣使街道								●	
e	日光裏街道								●	大胡道、江戸道、東京道
f	佐渡奉行道								●	
g	五料宿								●	
h	柴宿								●	
i	五料河岸								●	
j	鞠負河岸								●	
k	備前堀(滝川)								●	関東奉行伊奈備前守

(4)古墳時代

玉村町から前橋市南部及び伊勢崎市南部にかけての地域開発史のなかで、最初の大きな画期が古墳時代前期にあるとの理解については、大方の意見が一致するところである。当地域において、古墳時代前期の集落遺跡は、弥生時代後期の状況に比べ、爆発的ともいえる急激な遺跡の増加を示す。遺跡規模の大小や微妙な時期差を除けば、分布密度の濃淡も認めがたい。これは、弥生後期には何らかの理由で果たし得なかった水田開発を広域にしかも短期間のうちに押し進めた結果と考えてよいだろう。水田跡については、浅間山As-Cテフラ(3世紀後半～4世紀初降下)に覆われた検出例は不明だが、第7図の範囲には確認されなかったが、周辺地域からは、6世紀初頭の榛名山降下テフラ(Hr-FA)に覆われた水田耕土下から走向や区画の異なる水田畦畔痕跡が確認されていることから、4～5世紀には水田の開発と経営が進められたことは間違いない。集落の規模や継続期間にはばらつきがあり、現利根川左岸にあたる伊勢崎市阿弥大寺本郷遺跡(69)や同市東上之宮遺跡(67)は規模が大きく後期まで継続する拠点集落と位置づけてもよい。このようなくつかの拠点集落と多くの小規模短期集落の組み合わせで分布し、一気に広範囲の水田開発を進めたと理解したい。

前期の古墳については、川井稲荷山古墳(290)、軍配山古墳(232)、などが近隣のものとしてある。本遺跡に近い箱石浅間山古墳や川井稲荷山古墳(290)は2次的な埋葬のための墳丘改変で墳形や規模は不明だが、初期の段階では4世紀代の前期古墳であったことが判明している。川井稲荷山古墳ではこの初期埋葬に伴ったと考えられる三角縁神獣鏡1面が出土している。また、街道南遺跡(276)から周溝墓が検出されている。

古墳時代中期(5世紀代)は、前期に比べると遺跡数が減少する傾向がうかがわれ、現利根川左岸の伊勢崎市阿弥大寺本郷遺跡(69)のように後期まで継続する集落と前期で一旦終息する集落の両者がみられる。梨ノ木山古墳(258)など中期古墳が存在すること、前述のように6世紀初頭に噴火した榛名山降下テフラHr-FAで覆われた水田が玉村町域～前橋市南部の各地で検出されていることから、5世紀代を通じて継続した地域経営が行われてい

たことは間違いないだろう。ただし、この時期の古墳としては5世紀後半の梨ノ木山古墳(258)などが判明しているのみで、5世紀前半に比定できる古墳については不明確なままである。なお、松原Ⅲ遺跡(4)では5世紀前半の滑石製模造品の工房跡が検出されており、比較的早い段階で模造品による祭祀システムの一部を担う地域として機能していたことが知られる。

古墳時代後期(6～7世紀)には、烏川左岸に茂木古墳群(第7図左下)、川井古墳群が、現利根川右岸にそって箱石古墳群(第7図右下)、小泉古墳群(169中近世)がそれぞれ展開するようになる。そのうち川井古墳群のなかの芝根16号古墳(286)は昭和44年に群馬大学の手で発掘調査が行われ、残されていた石室構造から群馬県内でも最古段階に含まれる横穴式石室であると考えられている(右島2009)。小泉古墳群では全長46mの前方後円墳である小泉大塚越3号墳(186)がほぼ全面調査され、金銅製冠片・単鳳環頭大刀・馬具等の豊富な副葬品や多彩な形象埴輪等が出土している。同じく小泉大塚越7号墳(186)からは稀少な人面付円筒埴輪が出土した。茂木古墳群の中核であるオトカ塚古墳(263)は全町86mを越える前方後円墳であり、日本最大級の馬形埴輪を出土したことで知られる。これらはいずれも6世紀中頃～後半の古墳と考えられ、玉村地区における古墳築造最盛期を代表する例といえよう。

玉村地区における6～7世紀代の古墳の密な分布状況に比べ、集落遺跡の存在は限られている。土器などの遺物については各所で散見出来るが、集落としての姿を示すのは本遺跡の西2km程にある福島飯塚遺跡などわずかである。

玉村町～前橋市南西部域は、6世紀の初頭と中頃に噴火した榛名山の降下テフラの直接的な被害は少なかったようだが、その二次的災害ともいえる泥流が広範囲に堆積しており、これによって埋もれた田畑の分布が知られる。同様に、現利根川の左岸にあたる伊勢崎域においても東上之宮遺跡(67)や阿弥大寺本郷遺跡(70)で泥流埋没畑が検出されている。

(5)奈良・平安時代

律令期の上野国には13の郡が置かれ、更にその下に郷が置かれた。10世紀の『倭名類聚抄』に記載された「那波

郡」には朝倉・鞆田・田後・佐味・倭文・池田・葦束の7郷が属しており、このうち佐味・鞆田郷が現在の玉村町域に概ね推定されている(尾崎1976)。

この地域における集落遺跡は7世紀後半あたりから顕在化してきて、平安時代の9世紀代には分布密度がかなり高くなり、分布範囲もほぼ全域にひろがるようである。

集落遺跡以外では、現利根川左岸にある上福島尾柄町(18)では東西に走る推定東山道駅路(a)、牛堀-矢ノ原(ルート)が判明している。これは、側溝心々距離約9～10mで、7世紀後半から8世紀にかけて利用されたと推定されている。また、この推定駅路と関連して、南に約250mほど離れて官衙的施設と目される一万田遺跡がある。

本地域では、1108(天仁元)年に噴火した浅間山の火山灰に比定される浅間Bテフラ(As-B)に覆われた水田跡の検出が広範囲に見られる。これらは平均幅1.3mほどの大畦の走向から、ほぼ律令期の条里地割に沿ったものと理解されている。部分的に条里プランから外れた地形優先の区画や、異なる基準線を用いたらしい区画の存在なども判明している(中島・吉澤2004)。As-Bに覆われた水田条里地割の成立年代については、耕土下位から出土する土器の年代から8世紀後葉(中里2000)、前橋台地南部の調査例をもとに9世紀初頭以降(新井2001)といった見解がある。

ところで、本遺跡の南東近くには延喜式内社である火雷神社が鎮座する。現本殿は18世紀中頃の建物だが、縁起によれば御諸別王の創建で、796(延暦15)年に官社に列せられたと『日本後紀』にみえる。また、現利根川を越えた伊勢崎市側には倭文神社が鎮座する。この両社は上野国の12座のうちの2座であり、地名の「上之宮」「下之宮」と呼応して南北に並んだ位置関係にあることが注目される。いずれも8世紀には存在していたことが想定され、火雷神社は農耕神、倭文神社は織物・養蚕の神の信仰とし、古代集落の展開と関連づける考え方もある(井上1992)。

なお注目される出土遺物として、福島曲戸遺跡(79)から「上野国」ほかの刻書紡輪や緑釉陶器、上飯島芝根Ⅱ遺跡(208)では「影」文字の銅印、また現利根川左岸の神人村遺跡(28)からは瑞花双鳳八稜鏡が出土している。

(6)中・近世

本地域における発掘調査では、1108(天仁元)年噴火による浅間Bテフラを鍵層として調査面を分け、これより上層で確認される遺構や出土遺物を、中世及び近世に帰属するものとして扱うことが多い。また、1783(天明3)年の浅間Aテフラを鍵層に近世遺構であることを認定することができる。ただし、このような鍵層となるテフラの認定が不明確であったり、出土遺物がほとんど見られない場合には、中世と近世を明瞭に分かつことは難しい。また、中世から近世を通じて現代までその痕跡を残す遺構もあることから、ここでは分割せず一括して概観する。12世紀中頃(長寛年中)に伊勢神宮内宮の「玉村御厨」がこの地におかれたとの記録(『神宮雜記』)が残されている。この時の在地開発領主が玉村氏であったとも目される。鎌倉幕府の政権下では、それまで上野国奉行人の安達氏に被官していた玉村氏によって支配されていたが、弘安8(1285)年の霜月騒動により、北条得宗家へ支配が移った。これにより、北玉村は円覚寺、これ以外の地は極楽寺に寄進されたと推定されている(唐沢定市1988)。

平安時代後期頃に現伊勢崎市南西部域を支配していたと推定される藤原姓那波氏が、治承・寿永乱(1180～1185)で没落し、替わって中原姓大江氏が那波氏を名乗ったといわれる。この中原姓那波氏は、室町時代に上杉氏守護下で玉村を支配し、戦国期には由良氏、のち後北条氏に属したらしい。この地域は、周辺の有力な豪族や、戦国期には上杉、武田、後北条氏らの動向に大きく影響を受け、河川交通や戦略的な要衝として度重なる戦乱の舞台ともなったため、広い範囲にわたって荒廃したと推測される。

発掘調査からは、玉村町～前橋市南部にかけて多く分布する環濠屋敷が注目されるが、発掘調査によって、周知の遺構は戦国末から近世のものが多く、中世の屋敷遺構は未周知のものが多いことが分かってきた。

初源が13世紀代まで遡及する可能性のある城郭・屋敷としては、弘長二(1262)年記銘ほか板碑があり玉村太郎邸宅の伝承の残る観照寺屋敷(上之手)のほか、玉村城(143)、南玉館(126)、阿左美館(6)などが知られる(群馬県教育委員会1988)。発掘調査例では、本遺跡の他、福島久保田遺跡(86)、久保田遺跡(87)、福島味噌袋遺跡

(90)、福島大光坊遺跡(104)等が列記され、近世まで継続するものもみられる。なお、本遺跡の西方には金蔵寺があり、その開基と伝わる金原氏の屋敷跡と推定される玉村城143、(南玉村屋敷)が南に隣接する。ここには町重要文化財に指定された2基の五輪塔(文安5・6年銘)が残る。その更に南東に接して南玉館が位置し、那波氏家臣であった原氏の館、あるいは上野国守護安達氏家臣の玉村氏の館との伝承が残る。

また、大江姓那波氏の居城は、本遺跡南に在った小泉城(76)であったが、小泉城は、前節に述べた利根川西遷によって、その過半が利根川に削り取られてその機能を失ったため、居城を芝宿(H)に東隣する堀口城(那波城)に移している。那波氏は、源頼朝により那波郡に封ぜられたが、利根川西遷により、その支配領域は利根川左岸(東側)に片寄せざるを得なかったものと思慮される。

鎌倉公方家と関東管領家の内紛である15世紀後半の享徳の乱(1455～1483)において、利根川(下流域は現荒川)は、鎌倉公方家と関東管領家の境界となり、右岸(西側)にある下之宮高俣遺跡(1)は関東管領の勢力範囲にあったものと判断される。

農業生産関連の遺構としては、福島久保田遺跡(87)で1427(応永34)年と想定される洪水層に覆われた水田跡が検出されている。

近世に入ると、この地は徳川幕府代官の伊奈忠次の管掌のもとで再開発が実施された(『玉村町誌』)。正保4(1647)年以降には、玉村町を東西に横断する日光例幣使街道の通行が盛んとなって宿場として繁盛し、利根川渡河点の五料には厳しい取り締まりの関所、渡船場が置かれた。現在の玉村町の景観はほぼこの時期に形成されたと考えられる。

近世の埋没遺跡としては、中世から引き続く環濠屋敷、1783(天明3)年浅間山噴火に伴う泥流被害の埋没家屋・田畑がある。

現利根川左岸にある上福島中町遺跡(24)は、天明泥流によって埋没した建物が発見された。ここからは礎石建物10棟、便所6棟、井戸2基、畑、道などの存在が判明し、当時のままの各種生活用具が出土している。また樋越諏訪前遺跡(36)では、埋没家屋や植え込みなどが、利根添遺跡では矢川氾濫を防ぐための堤防遺構が確認されている。この天明泥流で埋没した田畑としては、川井箱

石遺跡(185)、小泉大塚越遺跡(186)、小泉長塚遺跡(187)等が知られており、柄田添遺跡では農作業(草取りか)の足跡列、利根川対岸の伊勢崎市東上之宮遺跡では水田の倒れたイネも発見されている。この天明泥流被災後の復旧田畑の検出も多い。下之宮中沖(102)、川井箱石(185)、伊勢崎市東上之宮(67)等の各遺跡では、砂礫の多く混じる泥流堆積物の天地返しによる耕土復旧を行った様子がありありとかがえる。下之宮高俣遺跡(1)の東部(1・2区)は、天明泥流の被害を直接被った地域である。

【参考文献】

- 新井 仁2001「群馬県における平安時代の水田開発について」研究紀要19 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 新井房夫1967『群馬大紀要自然科学編』10
- 井上唯雄1992「第4章 律令時代の玉村町 第5節 古代信仰と神社」『玉村町誌』通史編 上巻
- 尾崎喜左雄1967『上野玉村古墳群発掘調査概報』
- 尾崎喜左雄1976『群馬の地名』
- 唐澤定市1988「玉村御厨」『国史大事典』9 吉川弘文館
- 澤口 宏1995「第三章 地形・地質 第二節 台地」『玉村町誌 通史編 下巻二』p.1516
- 石井榮一2009「B区4面より検出された建物遺構の建築史的検討」『福島大島遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 玉村町誌編集委員会1992『玉村町誌 通史編 上巻』
- 中里正憲2000「砂町遺跡における大畦畔の調査例」群馬考古学手帳10
- 中島直樹1999「VIまとめ」『沖遺跡』玉村町教育委員会 玉村町遺跡調査会
- 中島直樹・吉澤 学2005「群馬県玉村町における条里地割の復原」『東国史論』19
- 土生田純之2008「古墳時代の実像」『古墳時代の実像』
- 深澤敦仁2013「玉村周辺の古墳時代のはじまりを考える」『玉村町の前期古墳』平成25年度玉村町歴史資料館 第18回企画展資料
- 右島和夫2009「玉村の古墳群を考える」群大考古資料里帰り展資料 玉村町歴史資料館
- 峰岸純夫1964「上州一揆と上杉氏守護領国体制」『歴史学研究』284 歴史学研究会
- 築瀬大輔2012「中世上野の地域構造と利根川一東上野と西上野」『群馬県立歴史博物館紀要』第33号
- 矢口裕之「群馬県徳丸仲田遺跡の縄文時代草創期遺物包含層の層序と古環境」『研究紀要』17、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎 一1978『群馬県古城址の研究』上巻
- 吉田 稔2003「北島式の提唱」『埼玉考古別冊7 埼玉考古学会シンポジウム 北島式土器とその時代』
- 若狭 徹2002「古墳時代の地域経営」『考古学研究』49-2
- 若狭 徹2011「中期の上毛野」『古墳時代毛野の実像』季刊考古学・別冊17
- 玉村町誌編集委員会1992『玉村町誌』
- 玉村町教育委員会1992『玉村町の遺跡』
- 群馬県教委1988『群馬県の中世城館跡』

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 1面の調査

(1) 1面の概要(第8・9図、PL. 1・2・5～7)

1面は天明3(1783)年の、「浅間焼け」と呼ばれる浅間山の大噴火に伴い噴出したAs-A火山灰・軽石の前後の遺構を主体とした近世面である。

1面として扱っているが、主に天明3年7月7日(1783.8.4)午後から翌8日朝にかけて降下したAs-A軽石降下直前の面(以下「下位面」とする)、7月8日午前のAs-A軽石降下直後の面(以下「中位面」とする)、そして午前10時の爆発に伴い発生し、午後に入って本遺跡付近に到達したAs-A泥流による被災後の面(以下「上位面」とする)に分けられる。

なお、本節では、上位面、中位面、下位面の順に述べるが、中位面で特記すべき遺構は屋敷遺構内だけであるので、下位面に含めて報告する。

なお、1-1区北部の中程には、地元で「クボッタ」と呼ばれる東西15m、南北36mの範囲で、As-A軽石下面寄り10cm程掘り窪められた区域があった。この区域は、当地での被災はなかったものの、昭和22(1947)年のカスリーン台風後の堤防のかさ上げのために掘削された痕跡であるという。

(2) 1面上位面

上述のように、1面上位面は、天明3(1783)年以降の所産の遺構群である。

1面上位面は1区から2区東部と、2西部以西の区域とに二分される。前者は天明3年の浅間山噴出の軽石降下による被災に加えて、火山災害の際に発生した層厚おおよそ1m程を測る泥流被災を受けた区域であり、後者は軽石による被災に留まった区域である。

1区と2区東部は、耕地復旧のための天地返しを目的とした復旧溝群が掘削されていたが、利根川堤防から約32mを境に、以西の区域は全面に復旧溝群が掘削されていたが、以東の区域は2面を確認しただけであった。ま

た復旧溝群は、畑の単位毎に掘削され、地表から深さ1.5～2m程の深さで掘削されていたことが確認される。

また2区中部から5区の区域にはAs-Aを鋤込んで耕作した復旧畑やこれを区画した道路、溝などを確認した。しかし遺存状態は全体に不良であったが、土地区画を復元できる箇所もあった。

2区中部から5区にかけての区域は、天明3年後のAs-A軽石を鋤込んで造られた畑や、道路、溝などが確認、調査した。

なお、遺構の報告に当たっては、区呼称を省いて記すこととする。

(a) 1区

1. 復旧溝群(第10～13図、PL. 1・2・23)

概要 1区の復旧溝群は、As-A泥流被災後の天地返しによる耕地復旧のために掘削された遺構群である。1区では11面の復旧溝群を確認した。

位置 このうち7・10号復旧溝群は1-1区北東部に、8・9号復旧溝群は同南東部にあり、4～6号復旧溝群は1-2区東部に、1号復旧溝群は同西部に、2A号復旧溝群は1-3区北部、2B号復旧溝群は同南部にある。

所在グリッドは表2に記した。

規模・主軸方位 表2に記した。

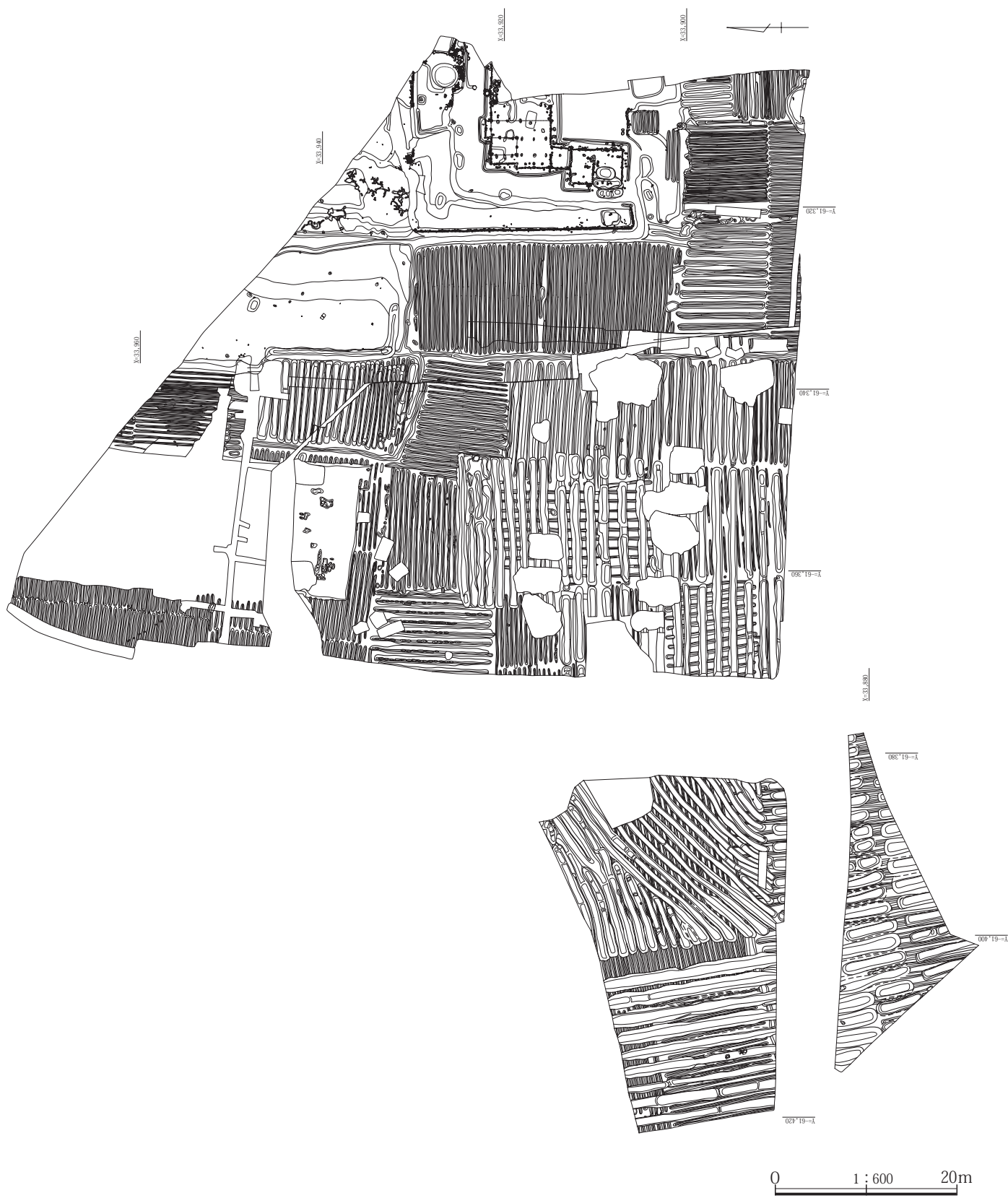
構造 これらの復旧溝群は近接して掘削された溝群で構成される。

個々の復旧溝群の掘削の間隔、復旧溝の規模、溝と溝の間隔などは表2にまとめたが、いずれの復旧溝の掘削形態も箱堀状で、底面は平底で、壁面は立ち気味である。

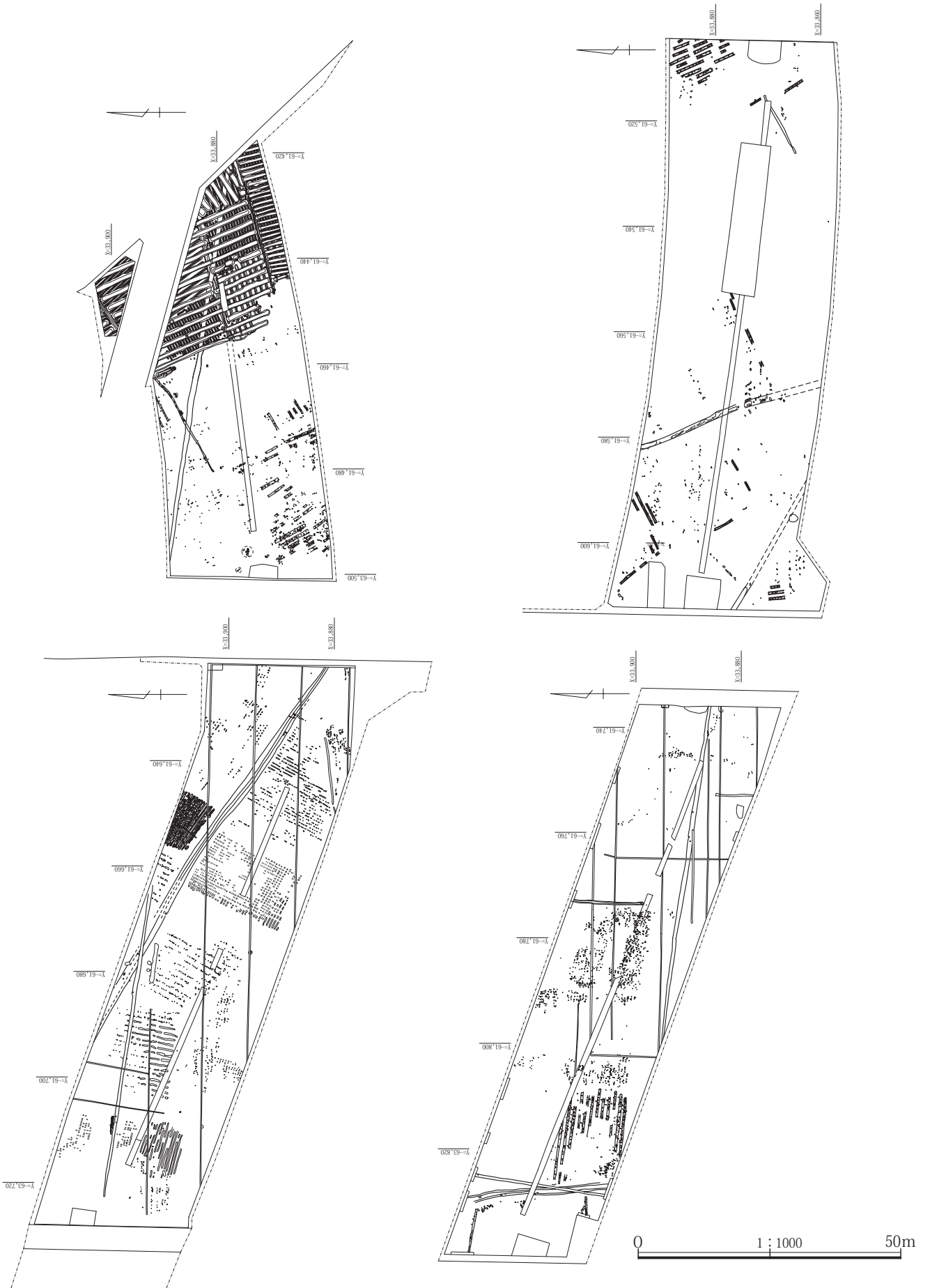
なお、9号復旧溝群は条の復旧溝を確認したが、過半の復旧溝が東西に2～3列に縦列に並ぶ。

遺物 1号復旧溝群からは不明鉄製品(1)と少量の近世の国産陶器片、近現代の土器片、2号復旧溝群からは少量の近世の国産陶器片、4号復旧溝群からは少量の国産陶磁器片が出土した。2号復旧溝群からは瀬戸・美濃陶器蓋(2)が出土した。

所見 1区の復旧溝群は畑の区画に対応して掘削されたものと思慮される。

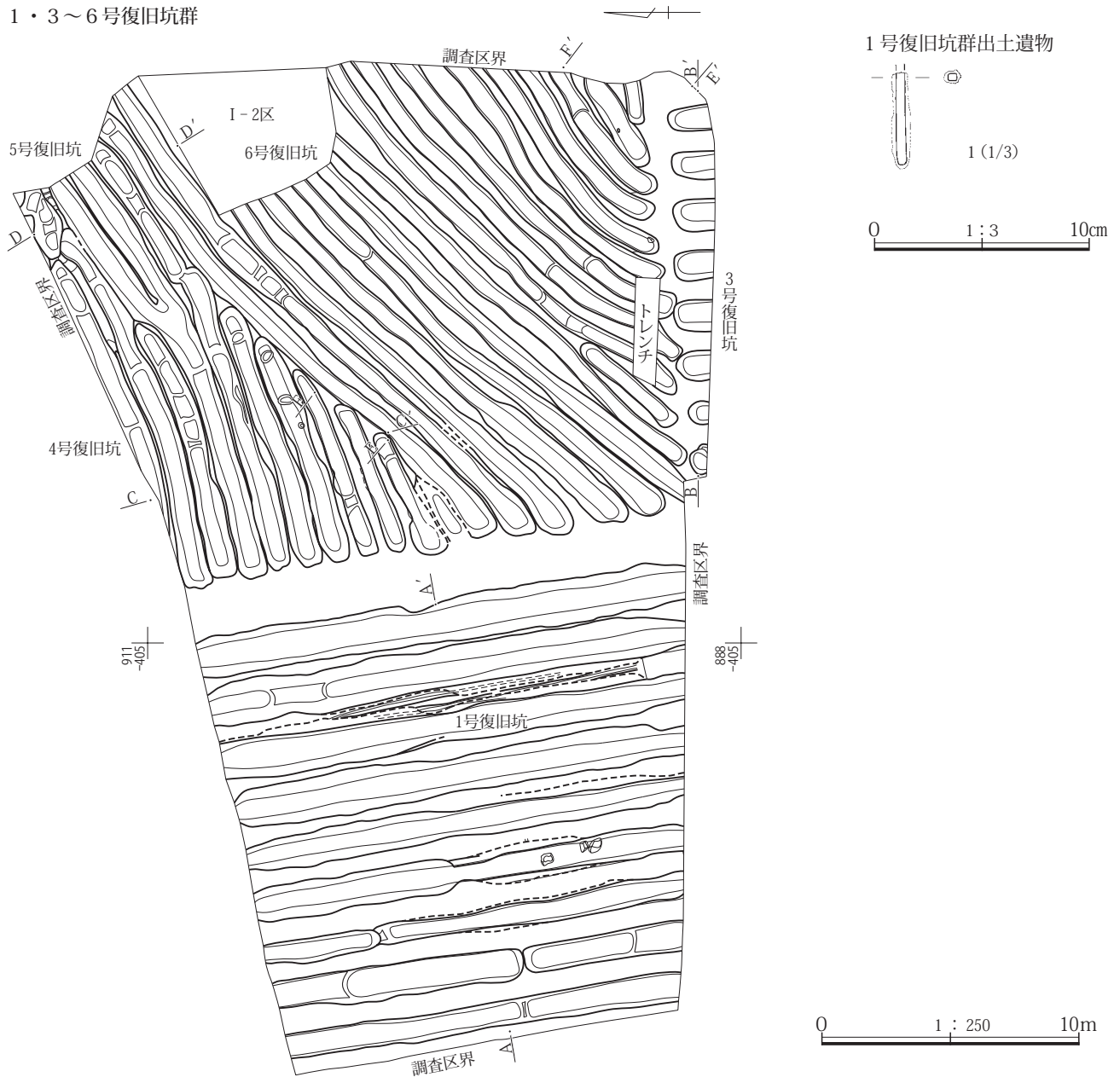


第8図 1-1区1面全体図



第9図 1-2・3区、2~5区1面全体図

1・3～6号復旧坑群



第10図の1 1区1・3～6号復旧溝群

また、その掘削時期は、天明3(1783)年以降の所産として把握されるに過ぎなかったが、1号復旧溝群から僅かであり、出土位置も特定できなかったが、近現代の陶磁器が出土しているため、近代に入ってから掘削されたものである可能性がある。

2. 6・7・8号土坑(第12図)

概要 6号土坑は大型で、7・8号土坑は中規模の土坑である。共に南側が調査区外にでており、全容を把握することはできなかった。

位置 本土坑は1-1区の調査区南端、調査区の南東隅近くにある。所在グリッドは表6に記した。

重複 6・7号土坑は13号畑、6・8号土坑は16号畑を壊している。

また、6号土坑は7・8号土坑と重複するが、両土坑に対して、6号土坑の方が新しい。

規模・主軸方位 表6に記載した。

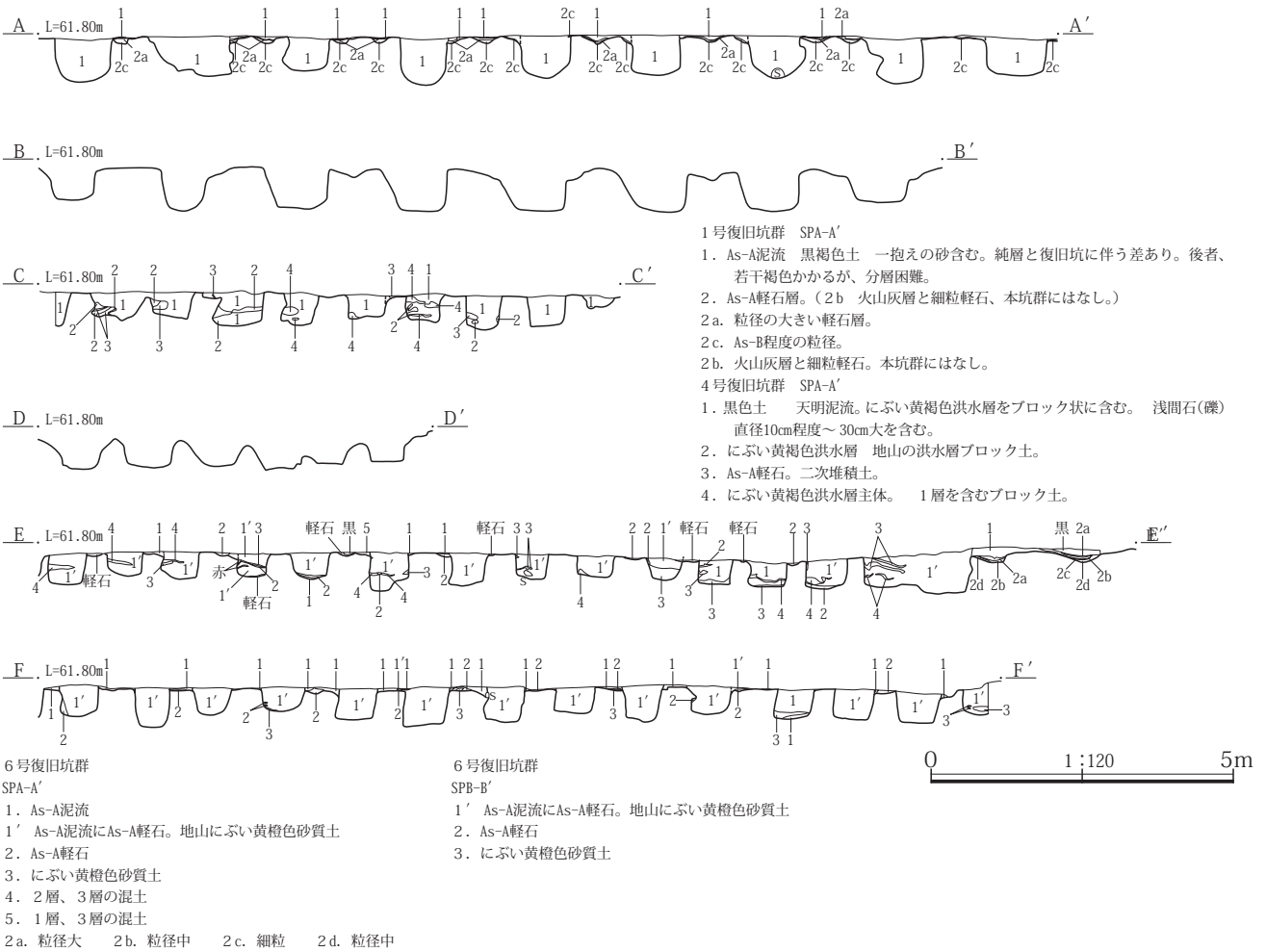
覆土 6号土坑は黒褐色土で埋没する。

構造 6～8号土坑は楕円形のプランを呈するものと想定される。共に箱形の掘削形態を呈するが、6号土坑の底面はやや丸底状を呈する。

遺物 6号土坑から銭種不明の銅銭(318)が出土したが、7・8号土坑からの遺物の出土はなかった。

所見 6号土坑の掘削意図は特定されなかった

1・3～6号復旧坑群

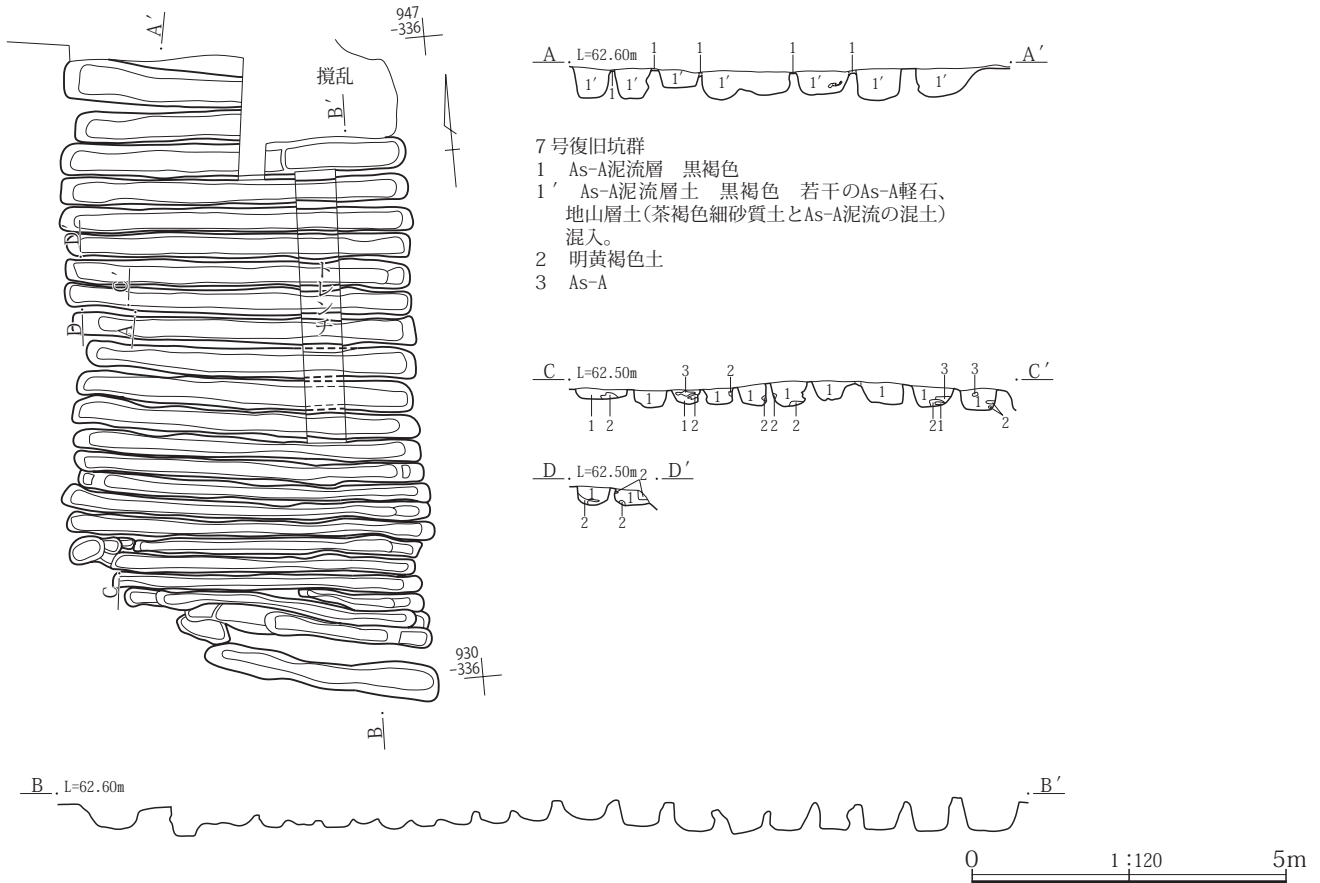


第10図の2 1区1・3～6号復旧溝群断面

表2 1区1面上位面復旧溝群一覧

番号	所在グリッド	主軸方位	規模(m)	復旧溝										溝間距離	
				条数	掘削間隔(cm)	(平均)	長さ(m)	(平均)	幅(cm)	(平均)	深さ(cm)	(平均)	(cm)	(平均)	
1	890～908-402～421	N-07°-W	19.20 × 17.00	9	173～244	195.06	—	—	—	68～153	113.56	51～72	61.11	23～115	82.50
2A	934～974-360～368	N-83°-E	(9.85) × (44)	19	142～209	181.00	—	—	—	77～179	123.00	46～104	90.09	16～105	58.00
2B	868～879-382～404	N-75°-E	22.90 × (7.03)	12	165～214	194.09	—	—	—	102～160	123.17	58～101	85.08	21～103	69.18
3	889～891-383～398	N-90°	14.32 × (1.68)	8	182～197	190.71	—	—	—	86～125	109.38	44～72	61.88	72～99	79.57
4	898～913-392～402	N-75°-E	12.40 × 11.28	11	94～115	102.88	5.22～11.65	8.73	63～105	80.22	44～62	52.09	7～40	21.44	
5	909～916-383～394	N-65°-E	(8.20) × (4.55)	5	99～109	102.67	—	—	—	60～105	82.80	24～58	42.00	5～33	16.67
6	890～912-382～400	N-45°-E	(26.92) × 16.00	16	66～136	102.53	—	—	—	55～107	40.47	38～68	50.58	3～65	33.59
7	929～947-336～346	N-5°-E	15.92 × 10.00	34	46～116	71.08	5.00～9.77	8.46	26～98	59.95	10～57	37.21	5～48	11.35	
8	415～925-347～464	N-85°-E	17.00 × 10.28	9	86～142	110.25	16.64～16.96	16.77	37～107	84.44	22～58	36.22	8～54	26.63	
9	889～915-347～372	N-7°-E	24.92 × (24.60)	15	116～204	168.79	—	—	—	78～115	97.13	45～76	58.47	28～108	71.64
10	950～951-342～346	N-83°-W	4.63 × (1.80)	7	59～111	78.83	1.16～1.06	1.06	45～61	52.17	7～13	10.57	11～55	26.33	

7号復旧坑群



第12図 1区7号復旧溝群

その時期は、出土遺物から推して下限は現代に下るものと判断される。

(b) 2区

1. 復旧溝群(第16図、PL. 5)

概要 2区の復旧溝群も、As-A泥流被災後の天地返しによる耕地復旧のために掘削された遺構群であり、4面の復旧溝群を確認した。

位置 このうち1号復旧溝群は2-1区西部に、2号復旧溝群は同中・西南部に、3号復旧溝群は同中・西北部にある。

位置するグリッドは、1号復旧溝群は866~876-417~444グリッド、2号復旧溝群は874~883-421~432グリッド、3号復旧溝群は869~891-429~462グリッドである。

規模・主軸方位 1号復旧溝群 確認範囲：26.8×4.8m 主軸方位：N-76°-E

2号復旧溝群 確認範囲：12.6×7m 主軸方位：N-37°-W

3号復旧溝群 確認範囲：25.6×25.2m 主軸方位：

N-23°-W

4号復旧溝群 確認範囲：14.5×6.4m 主軸方位：N-75°-W

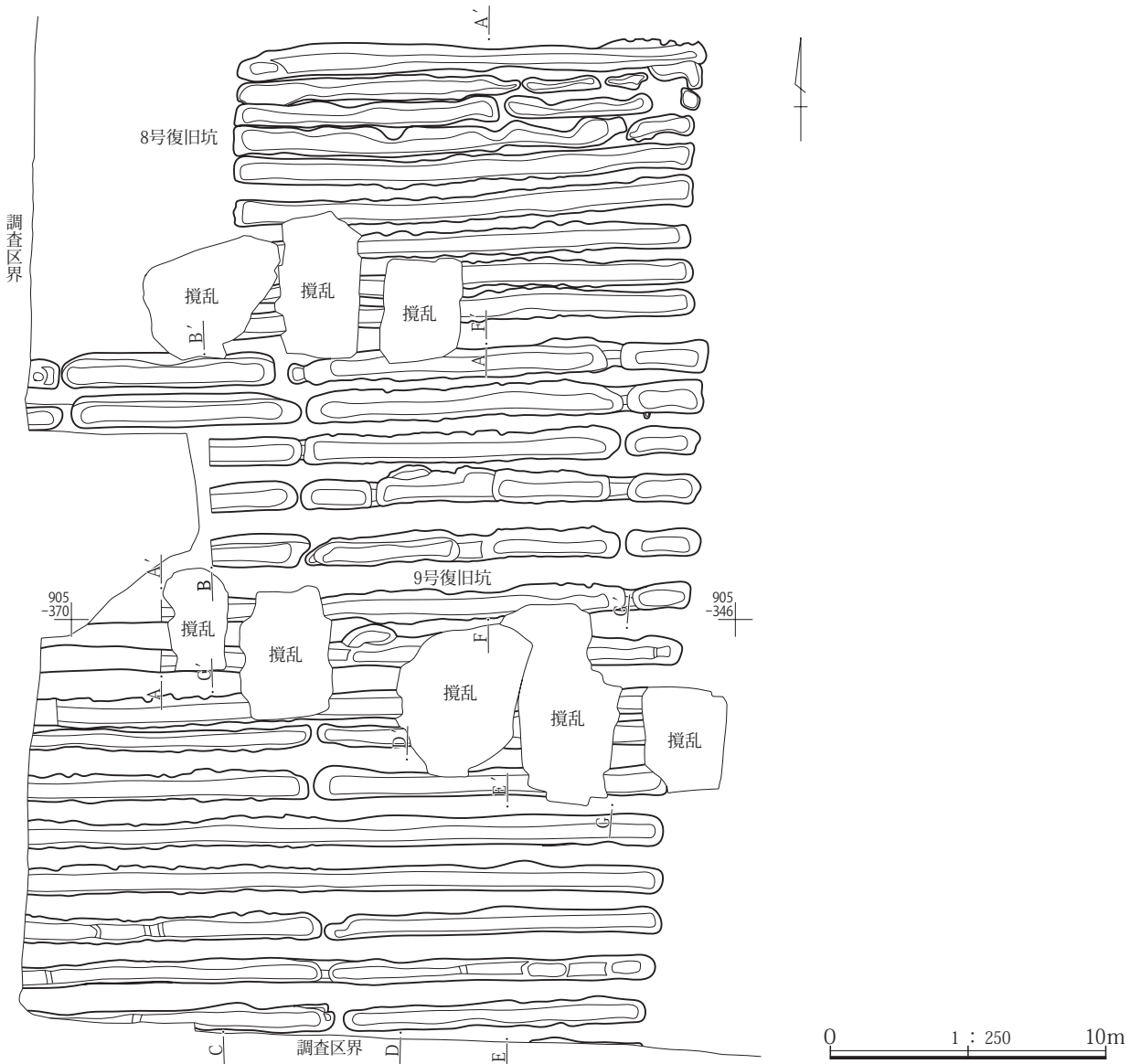
構造 これらの復旧溝群は近接して掘削された溝群で構成される。

1号復旧溝群は28条の復旧溝を確認した。復旧溝は79~119cm、平均92.87cmの間隔で掘削され、その長さは、南側が調査区外にあるため、確認できなかったが、その幅は59~97cm、平均70.23cm、As-A下面からの深さは19~67cm、平均47.13cmを測り、隣接する復旧溝の間隔は15~38cm、平均25.29cmを測った。

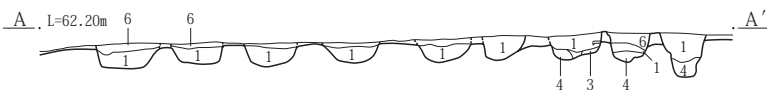
2号復旧溝群は7条の復旧溝を確認した。復旧溝は159~211cm、平均178.33cmの間隔で掘削され、長さは東側が調査区外に出ているため測定できなかったが、その幅は90~133cm、平均111.00cm、As-A下面からの深さは28~66cm、平均51.50cmを測り、隣接する復旧溝の間隔は22~85cm、平均50.00cmを測った。

3号復旧溝群は8条の復旧溝を確認した。復旧溝は182~197cm、平均190.71cmの間隔で掘削され、その長さ

8・9号復旧溝群



8号復旧坑群



8号復旧坑群 SPA-A'

1. 黒褐色土層 礫含む天明泥流主体。礫直径は10cm未満。黄褐色砂質土を含む。
2. As-A。粒子やや小さい。直径1mm程度。
3. As-A主体。黒褐色土層(天明泥流)を含む。
4. 黒褐色土層 1層に同じだが、黄褐色砂質土が多い。

第13図の1 1区8・9号復旧溝群

は南側が調査区外に在ったため、測定できなかったが、その幅は86~125cm、平均109.38cm、As-A下面からの深さは44~72cm、平均61.88cmを測り、隣接する復旧溝の間隔は72~99cm、平均79.57cmを測った。

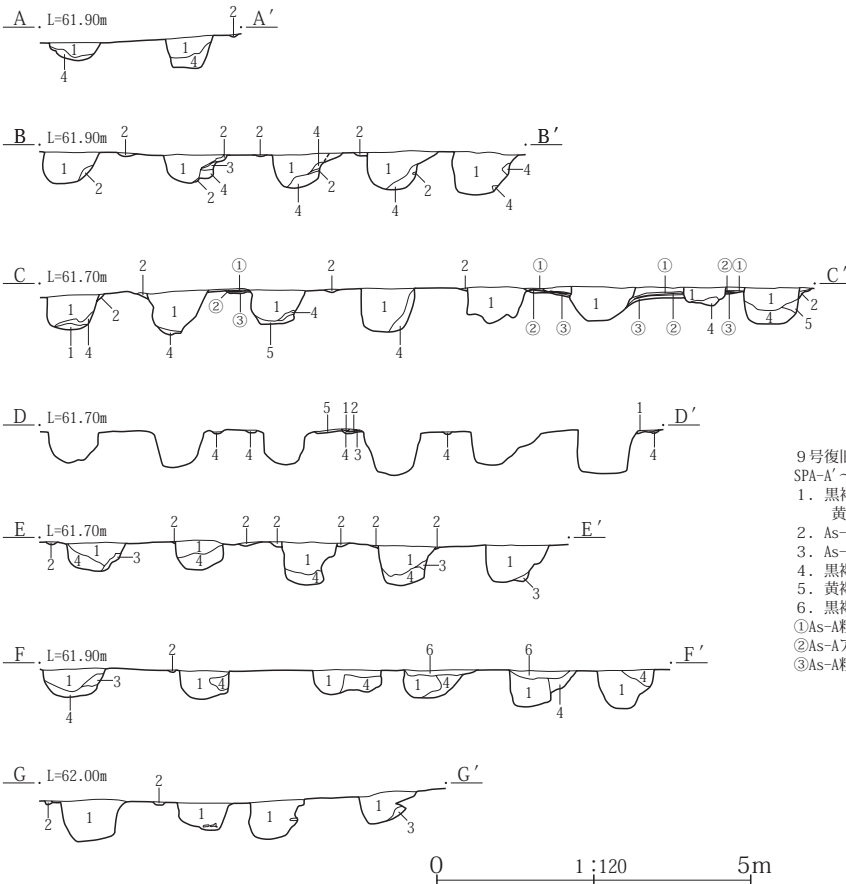
4号復旧溝群は14条の復旧溝を確認した。131~218cm、平均183.72cmの間隔で掘削され、復旧溝の長さは、南北両側が調査区外に出ていたため、測定できるものはなかったが、その幅は75~120cm、平均97.83cm、As-A下面からの深さは37~71cm、平均59.13cmを測り、隣接する復旧溝の間隔は33~123cm、平均86.59cmを測った。

遺物 2-1区の復旧溝群からは少量の国産陶磁器片が出土した。

所見 2区3・4復旧溝群は別遺構として報告したが、その走向と規模から推して、3号復旧溝群と4号復旧溝群のうち南部のものは同一の復旧溝群であると判断される。

また、その掘削時期は天明3(1783)年以降の所産として把握されるものの、その掘削時期を特定することはできなかった。

9号復旧坑群



9号復旧坑群
SPA-A' ~ SPG-G'
1. 黒褐色土層 礫含む天明泥流主体。礫直径は10cm未満。黄褐色砂質土を含む。
2. As-A。粒子やや小さい。直径1mm程度。
3. As-A主体。黒褐色土層(天明泥流)を含む。
4. 黒褐色土層 1層に同じだが、黄褐色砂質土が多い。
5. 黄褐色土層主体。As-A含む。
6. 黒褐色土層 ほぼ1層に同じだが、黄褐色砂質土なし。
①As-A粒子大
②As-Aアッシュ
③As-A粒子小

第13図の2 1区9号復旧溝群土層断面

2. 復旧畑(第15図、PL. 5)

概要 上述のように、天明3(1783)年の浅間山噴火の被災復旧のため、2区東半部では復旧畑の掘削がおこなわれたが、2区西半部では、As-A軽石を鋤込んだ復旧畑3面を確認した。

しかしいずれも遺存状態は悪く、底面付近を調査できたに過ぎなかった。

位置 このうち1号復旧畑は2区西部に、2号復旧畑は2区中・西南部に、3号復旧畑は2区中・西北部にある。

位置するグリッドは、1号復旧畑は858~888-471~498グリッド、2号復旧畑は360~879-452~472グリッド、3号復旧畑880~888-462~480グリッドである。

規模・主軸方位 1号復旧畑 確認範囲: 22.1×18.5m
主軸方位: N-60°-E

2号復旧畑 確認範囲: 7×3.7m 主軸方位: N-30°-W

3号復旧畑 確認範囲: 5.95×1.8m 主軸方位: N-60°-E

構造 復旧畑は鋤先痕で確認されるが、サクの範囲を想

定できたものもあった。

1号復旧畑では16条のサクを確認した。サクは100~200cm、平均132.29cmの間隔で掘削され、その長さは確認できず、深さは測定できなかったが、幅は13~70cm、平均49.06cm、隣接するサクの間隔は45~150cm、平均80.83cmを測った。

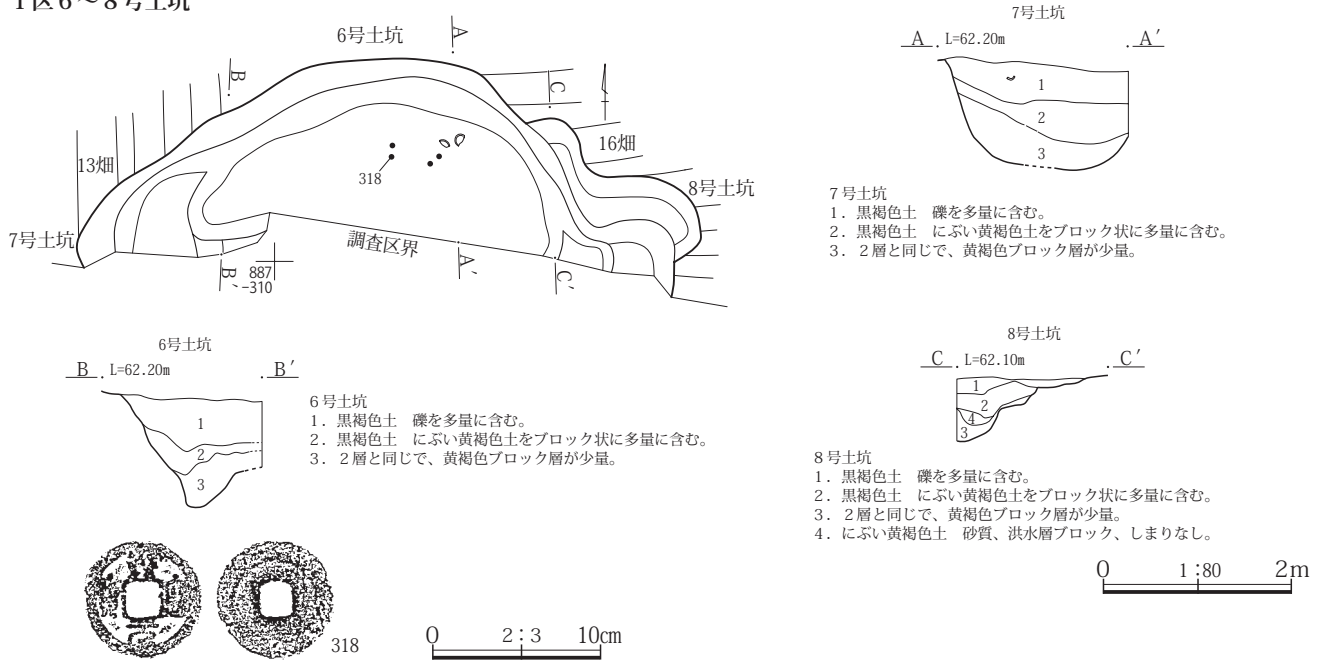
2号復旧畑では5条のサクを確認した。サクは95~113cm、平均105.00cmの間隔で掘削され、その長さは確認できなかったが、幅は30~35cm、平均33.00cm、隣接するサクの間隔は65~80cm、平均73.33cmを測った。

3号復旧畑では2条のサクを確認した。確認範囲では、サクは153cmの間隔で掘削され、その長さは確認できず、幅は25~30cm、平均27.50cm、隣接するサクの間隔は125cmを測った。

遺物 2-1区の復旧畑からは肥前磁器染付碗(22)・皿(23)、産地不明の磁器小杯(24)出土遺物が出土した。

所見 2区1~3号復旧畑の掘削時期は天明3(1783)年以降の所産として把握されるものの、その掘削時期を特定することはできなかった。

1区6～8号土坑



第14図 1区6～8号土坑と出土遺物

(c) 3区

1. 2号道路(第18図)

概要 本道路は、硬化面によって確認された遺構であり、本道路は東西両側が調査区外に出るため、全容を詳らかにできなかった。

位置 本道路は3区西部、880～925-622～877グリッドに位置する。

重複 2号道路は他遺構との重複はなかった。

規模 2号道路 残長：25.3m 幅：89cm 深さ：-cm

覆土 本道路はAs-Aを含む褐色土の下に確認された。

構造 本道路の走向はN-49°-Wに走向を取り、直線的な走行を呈する。

遺物 本道路からの遺物の出土はなかった。

所見 本道路の敷設の目的は特定されなかったが、5号復旧畑の北東を画している。

なお、敷設の時期は、天明3年以降の所産として把握できたに過ぎなかった。

2. 区画溝(第17・18図、PL. 6)

概要 3区では4条の区画溝を確認した。これらの区画溝は、後述の復旧畑を画するものである。

いずれの区画溝も削平により、遺存状況は不良である。

位置 1号区画溝は3区東部、865～870-515～519グリッ

ド、2号区画溝は3区中部、871～877-559～566グリッド、3号区画溝は3区西部、890～898-603～607グリッド、4号区画溝は3区西部、876～880-595～597グリッドに位置する。

重複 いずれの区画溝も他遺構との重複はなかった。

規模 1号区画溝 残長：12.54m 幅：45cm 深さ：4cm

2号区画溝 残長：7.7m 幅：43cm 深さ：-cm

3号区画溝 残長：24.3m 幅：38cm 深さ：3cm

4号区画溝 残長：3.7m 幅：35cm 深さ：-cm

覆土 本道路はAs-Aを含む褐色土の下に確認された。

構造 1号区画溝の走向はN-61°-Eに走向を取り、直線的な走行を取るが、東端はN-75°-Eを向く。

2号区画溝の走向はN-67°-Eに走向を取り、直線的な走行を取る。

3号区画溝の走向はN-38°-Wに走向を取り、直線的な走行を取る。

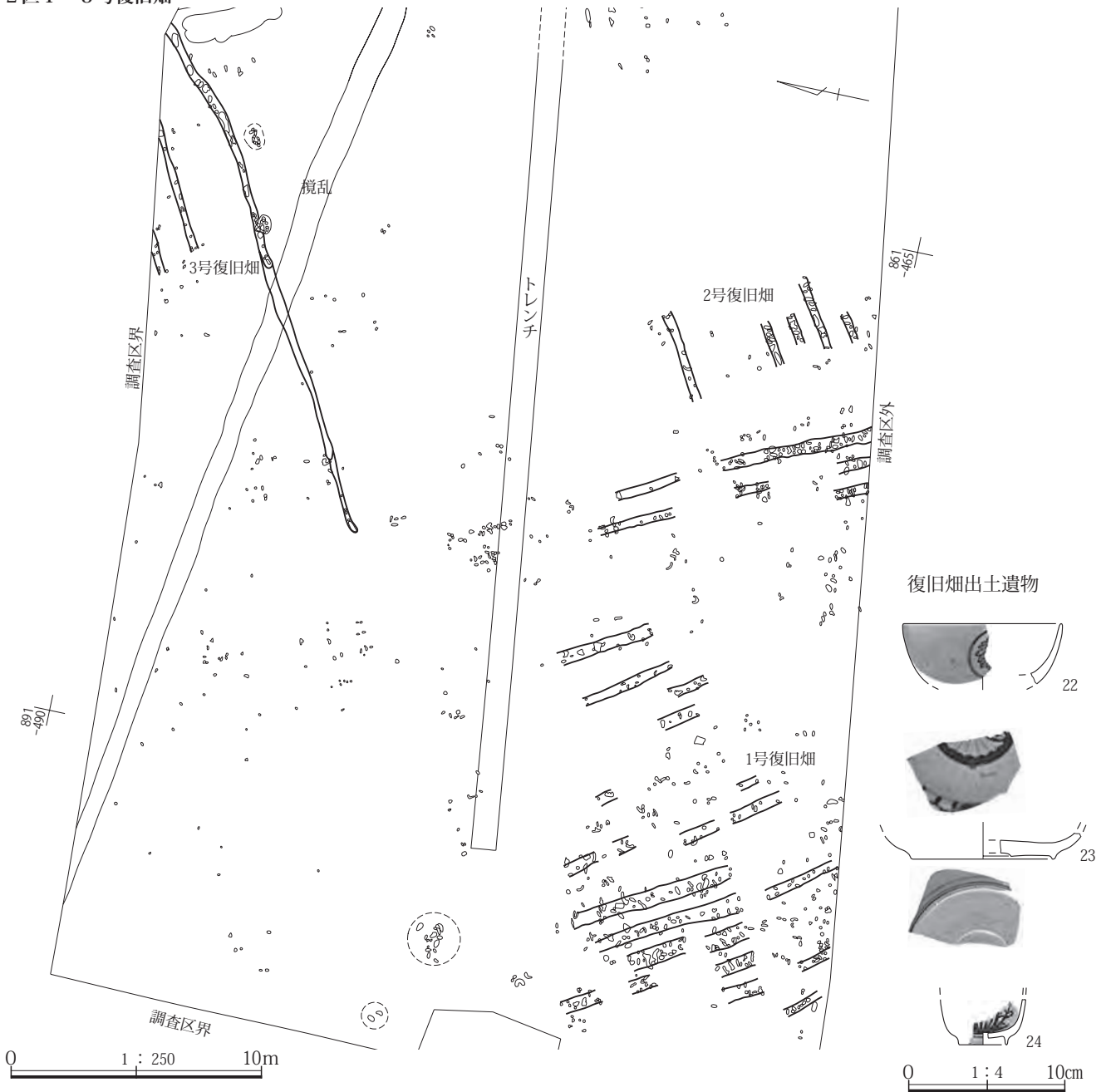
4号区画溝の走向はN-27°-Wに走向を取り、直線的な走行を取るが、東端はN-35°-Wを向く。

遺物 1～4号区画溝からの遺物の出土はなかった。

所見 上述のように、1～4号区画溝は復旧畑を区画する溝である。

なお、その掘削時期は、天明3年以降の所産として把握できたに過ぎなかった。

2区1～3号復旧畑



第15図 2区1～3号復旧畑

3. 復旧畑(第17・18図、PL. 6)

概要 3区においても、天明3(1783)年の浅間山噴火の被災復旧のため、As-A軽石を鋤込んだ復旧畑5面を確認した。

しかしいずれも遺存状態は悪く、底面付近を調査できたに過ぎず、深さも測定できなかった。

位置 このうち1号復旧畑は3区北東隅部に、2号復旧畑は3区南東部に、3号復旧畑は3区中北部に、4号復旧畑は3区中南部に、5号復旧畑は3区南西隅部にある。

位置するグリッドは、1号復旧畑は876～888-504～516グリッド、2号復旧畑は867～880-553～576グリッド、

3号復旧畑は882～884-567～572グリッド、4号復旧畑は863～897-581～605グリッド、5号復旧畑863～872-601～611グリッドである。

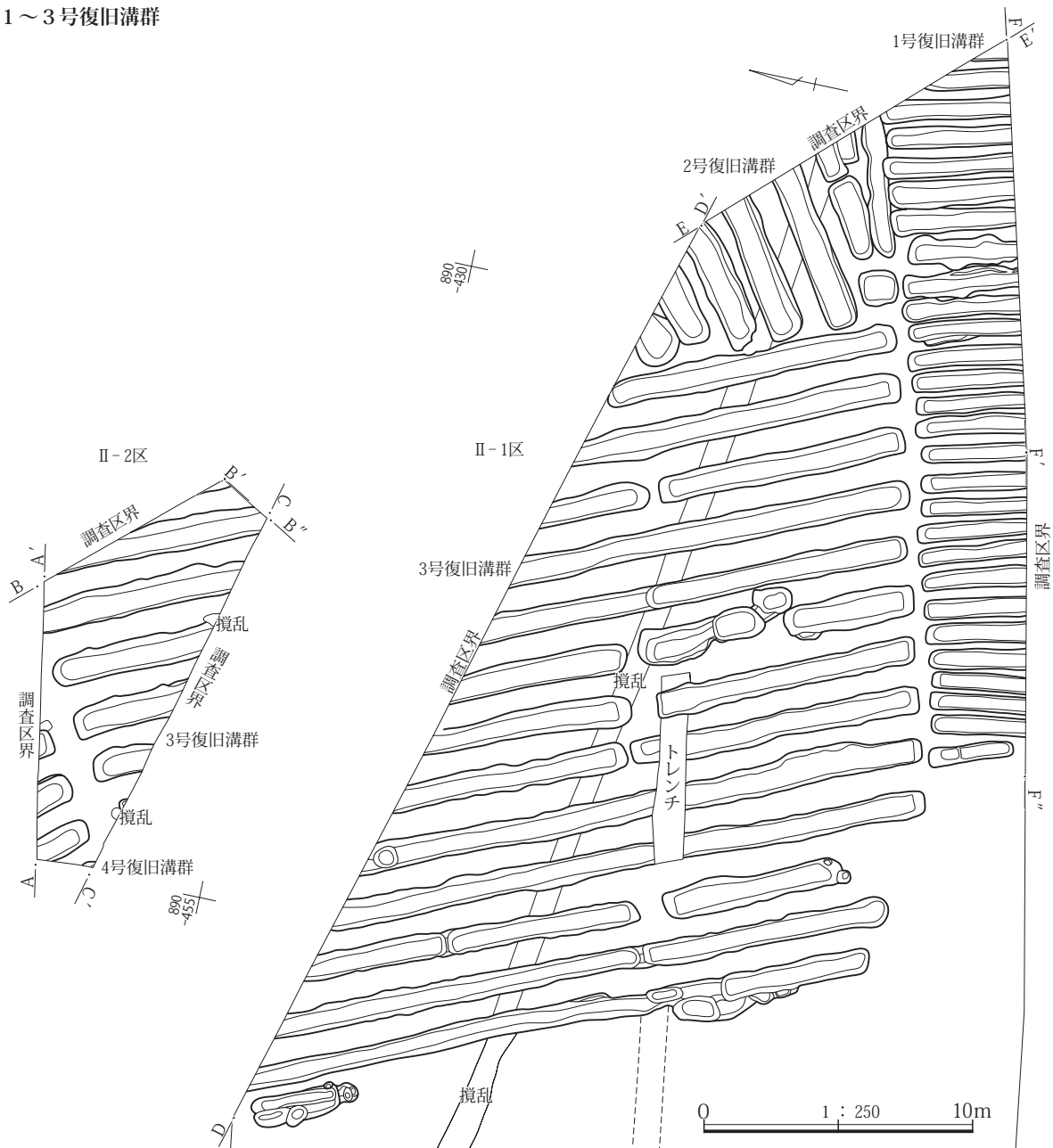
規模・主軸方位 1号復旧畑 確認範囲：17.15×12.9m 主軸方位：N-65°-E

2号復旧畑 確認範囲：3.9×0.4m 主軸方位：N-33°-W

4号復旧畑 確認範囲：22.10×11.60m 主軸方位：N-26°-W

5号復旧畑 確認範囲：3.10×2.60m 主軸方位：N-8°-W

2区1～3号復旧溝群



第16図の1 2区1～3号復旧溝群平面

構造 復旧畑は鋤先痕で確認されるが、サクの範囲を想定できたものもあった。

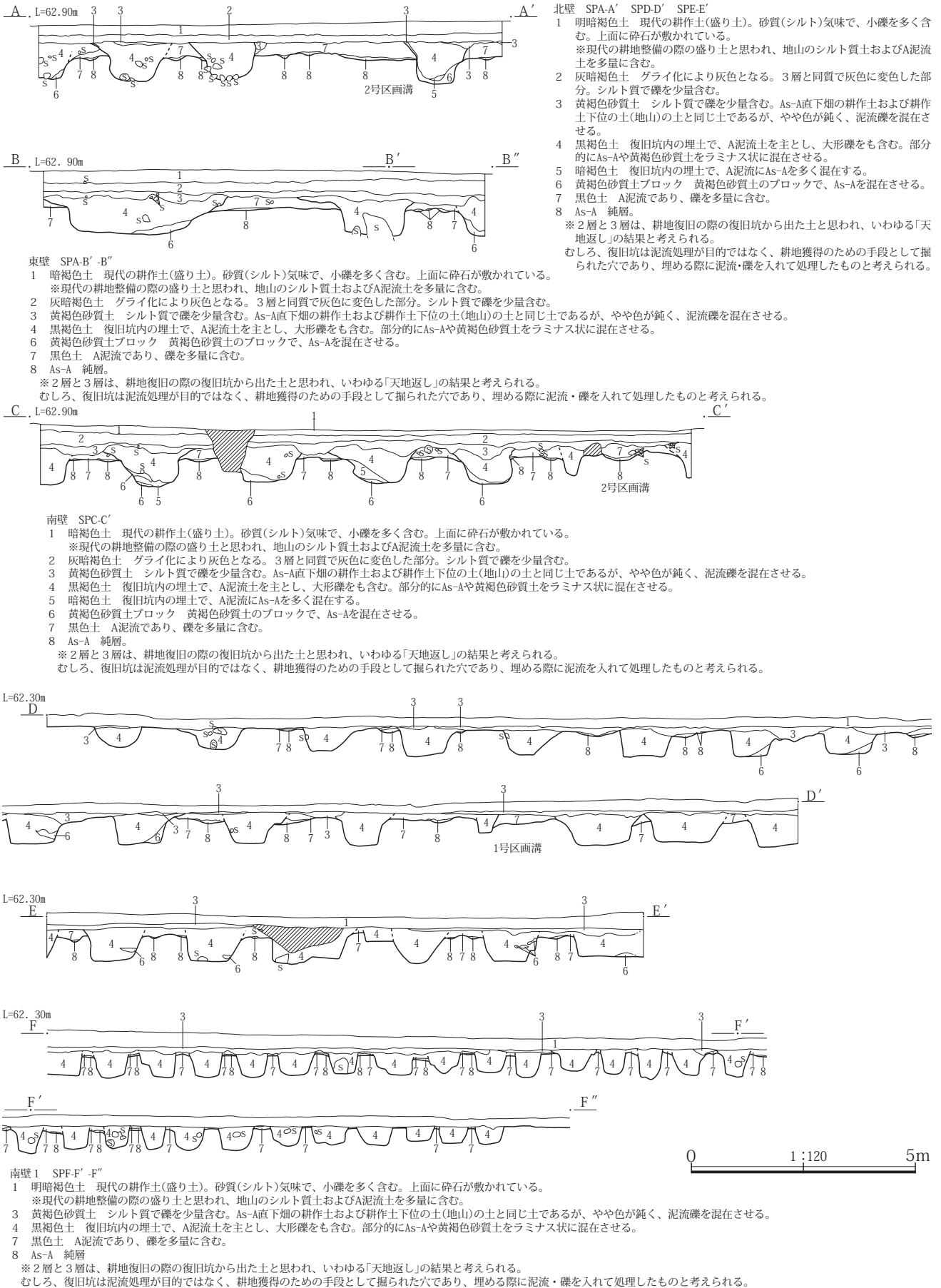
1号復旧畑では10条のサクを確認した。サクは95～130cm、平均107.19cmの間隔で掘削され、その長さは確認できず、深さは測定できなかったが、幅は25～55cm、平均40.50cm、隣接するサクの間隔は45～85cm、平均64.38cmを測った。

2号復旧畑ではサク1条を確認した。サクの長さ及び深さは確認できなかったが、その幅は40cmを測った。

3号復旧畑では2条のサクを確認した。サクは53cmの間隔で掘削され、その長さは確認できなかったが、幅は28～30cm、平均29.00cm、深さ2～3cm、平均2.5cm、隣接するサクの間隔は24cmを測った。

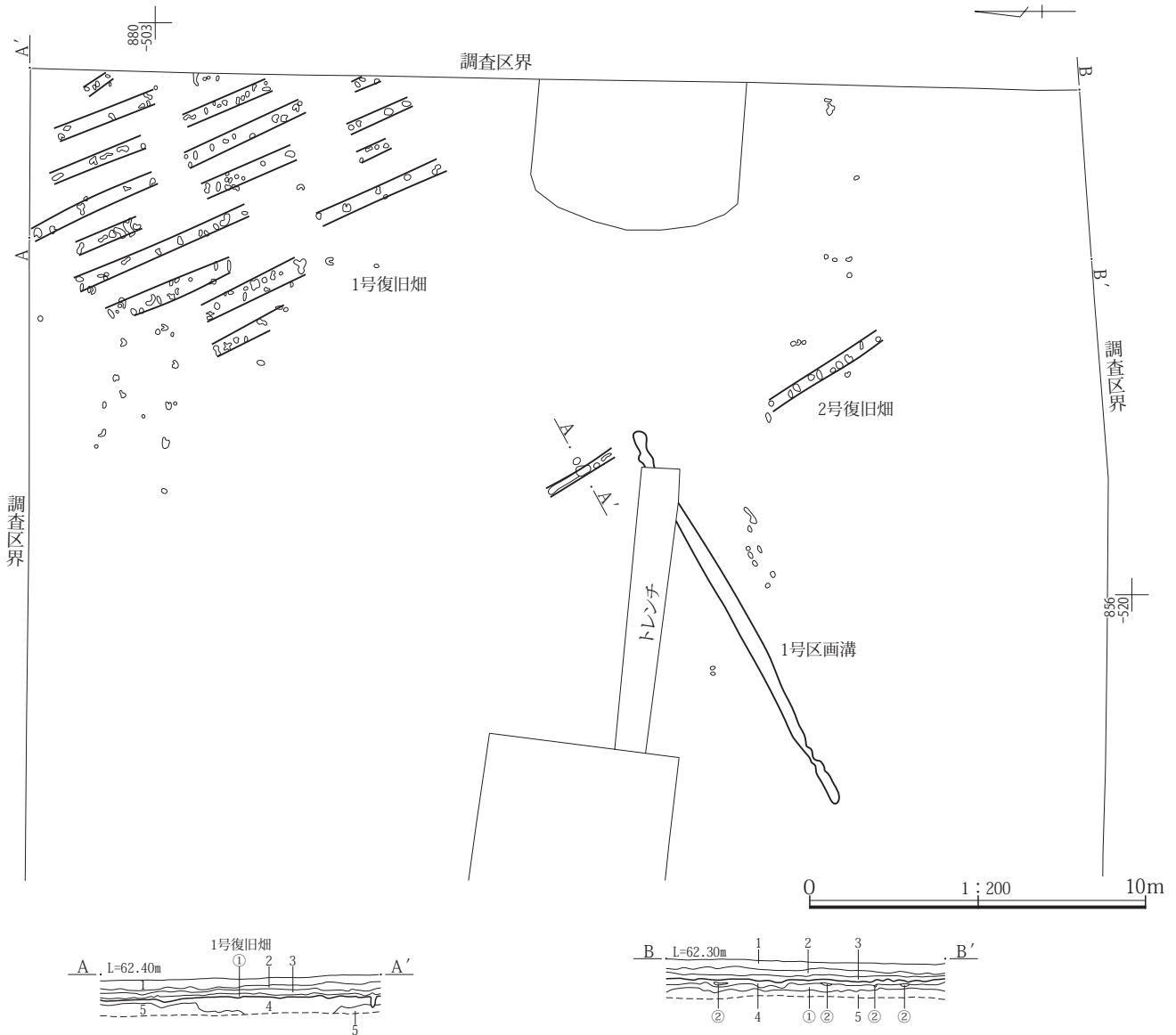
4号復旧畑では5条のサクを確認した。サクは85～110cm、平均100.83cmの間隔で掘削され、その長さは確認できず、幅は25～30cm、平均27.00cm、隣接するサクの間隔は60～85cm、平均75.00cmを測った。

5号復旧畑では3条のサクを確認した。サクは85～



第16図の2 2区1～3号復旧溝群断面

3区1・2号復旧畑、1号区画溝



北壁 5 SPA-A'

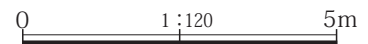
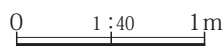
- 1 黒褐色土 耕作土。表土。しまり弱い。粘性なし。
- 2 暗褐色土 圃場整備時の土でグライ化している。わずかにAs-A混入。しまり強い。粘性なし。
- 3 褐色土 鉄分が酸化して黄色になっている。わずかにAs-A混入。しまりやや強い。粘性なし。
- 4 褐色土 地山。シルト質。しまり弱い。粘性あり。
- 5 明黄褐色土 地山。砂質が強い。酸化して黄色くなっている。しまり弱い。粘性なし。
- ① 褐色土 酸化層。As-Aをわずかに混入。しまり弱い。粘性ややあり。

南壁 5 SPB-B'

- 1 黒褐色土 耕作土。表土。しまり弱い。粘性なし。
- 2 暗褐色土 圃場整備時の土でグライ化している。わずかにAs-A混入。しまり強い。粘性なし。
- 3 褐色土 鉄分が酸化して黄色になっている。わずかにAs-A混入。しまりやや強い。粘性なし。
- 4 褐色土 地山。シルト質。しまり弱い。粘性あり。
- 5 明黄褐色土 地山。砂質が強い。酸化して黄色くなっている。しまり弱い。粘性なし。
- ① 黒褐色土 シルト質。しまり弱い。粘性あり。
- ② 灰白色土 砂の層。しまり弱い。粘性なし。

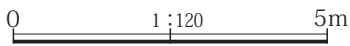
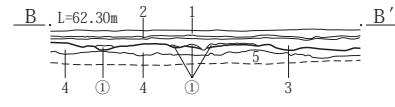
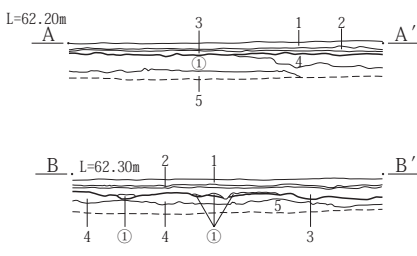
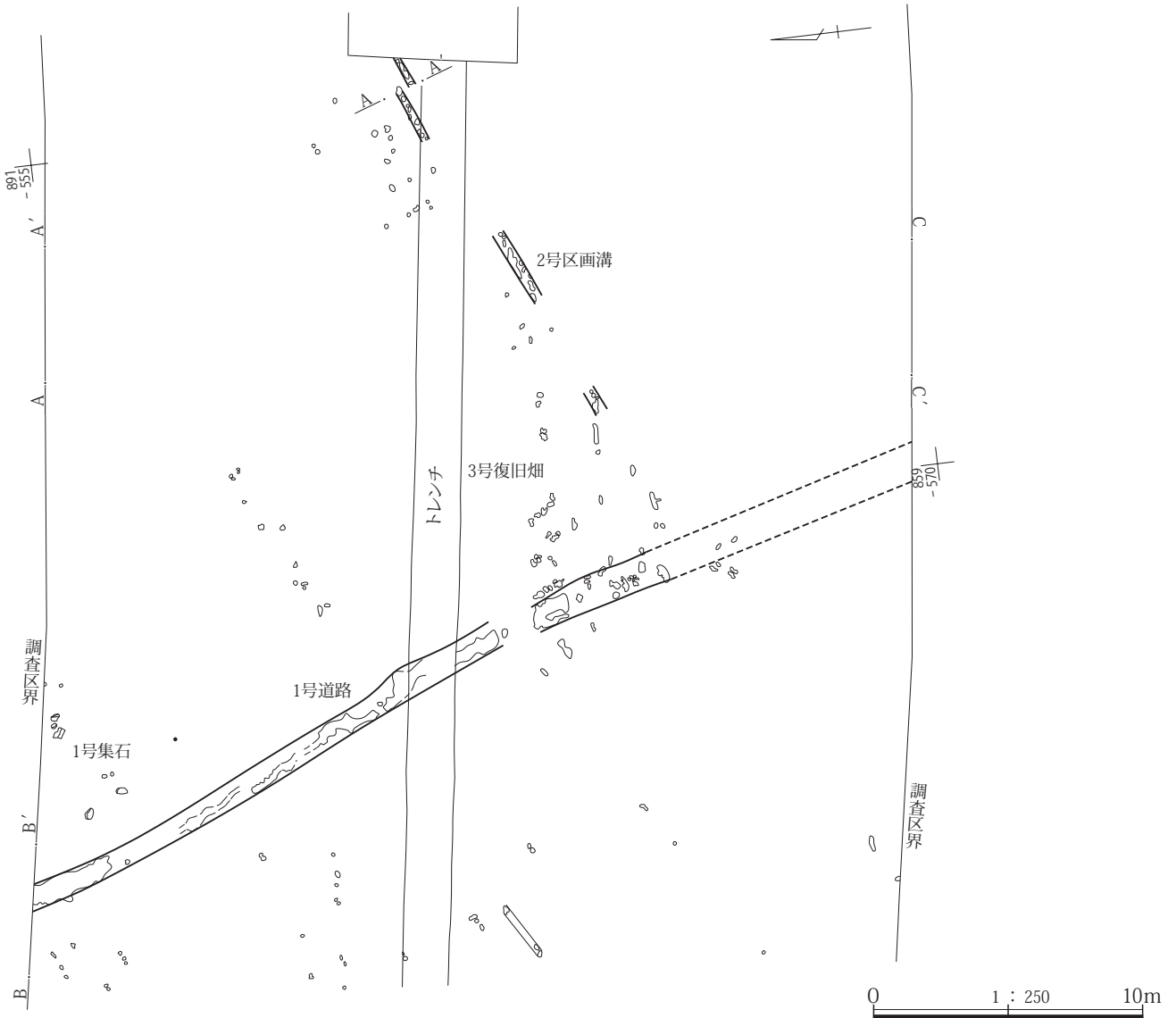


- ⑤ SPA-A'
- 1 As-A軽石。純層。

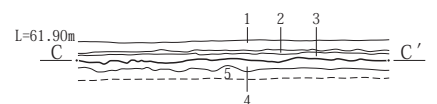


第17図 3区1号区画溝と1・2号復旧畑

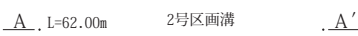
3区3号復旧畑 2号区画溝



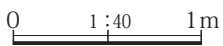
- 北壁3 SPA-A'
- 1 黒褐色土 耕作土。表土。しまり弱い。粘性なし。
 - 2 暗褐色土 圃場整備時の土でグライ化している。わずかにAs-A混入。しまり強い。粘性なし。
 - 3 褐色土 鉄分が酸化して黄色になっている。わずかにAs-A混入。しまりやや強い。粘性なし。
 - 4 褐色土 地山。シルト質。しまり弱い。粘性あり。
 - 5 明黄褐色土 地山。砂質が強い。酸化して黄色くなっている。しまり弱い。粘性なし。
 - ① 黒褐色土 混入物なし。しまり弱い。粘性あり。
- 北壁2 SPB-B'
- 1 黒褐色土 耕作土。表土。しまり弱い。粘性なし。
 - 2 暗褐色土 圃場整備時の土でグライ化している。わずかにAs-A混入。しまり強い。粘性なし。
 - 3 褐色土 鉄分が酸化して黄色になっている。わずかにAs-A混入。しまりやや強い。粘性なし。
 - 4 褐色土 地山。シルト質。しまり弱い。粘性あり。
 - 5 明黄褐色土 地山。砂質が強い。酸化して黄色くなっている。しまり弱い。粘性なし。
 - ① 灰白色土 軽石層。As-A軽石の層。



- 南壁1 SPC-C'
- 1 黒褐色土 耕作土。表土。しまり弱い。粘性なし。
 - 2 暗褐色土 圃場整備時の土でグライ化している。わずかにAs-A混入。しまり強い。粘性なし。
 - 3 褐色土 鉄分が酸化して黄色になっている。わずかにAs-A混入。しまりやや強い。粘性なし。
 - 4 褐色土 地山。シルト質。しまり弱い。粘性あり。
 - 5 明黄褐色土 地山。砂質が強い。酸化して黄色くなっている。しまり弱い。粘性なし。

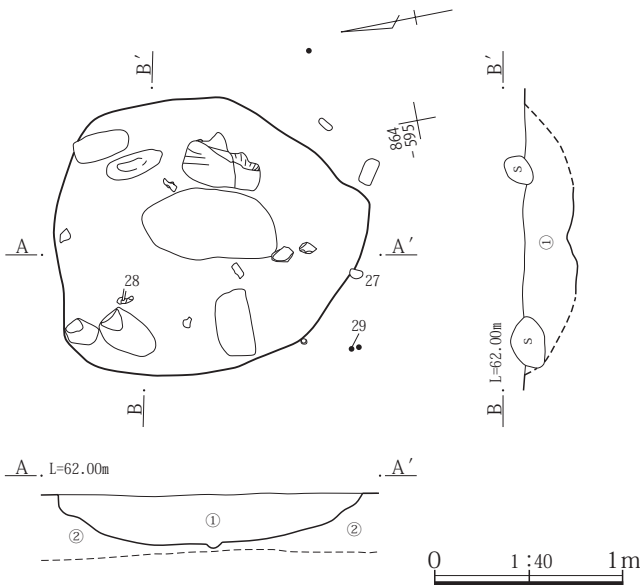


- ②~③ SPA-A'
- 1 As-A軽石。純層。



第18図 3区2号区画溝と3号復旧畑

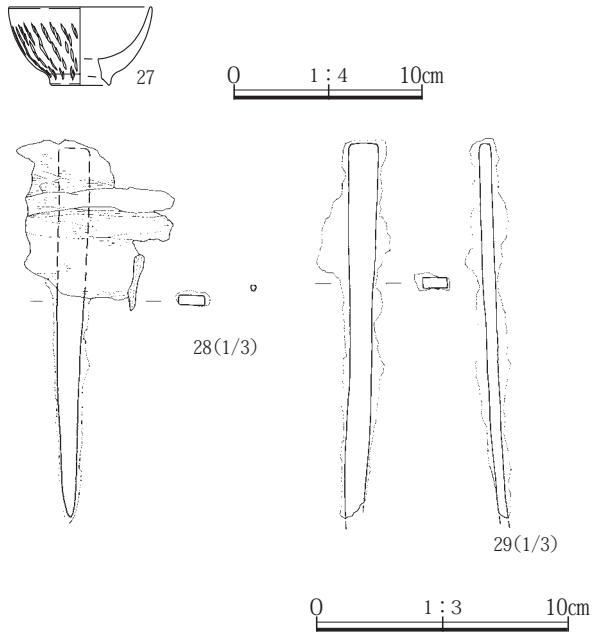
3区1号土坑



1号土坑 SPA-A'

- ① 暗褐色土 中央上面にAs-A軽石を多く含む。2層から落ち込んだ土が積もっている。つまり強い。粘性なし。
- ② 褐色土 自然たい石。シルト。しまり弱い。粘性あり。

1号土坑出土遺物



第19図 3区1号土坑と出土遺物

110cm、平均100.83cmの間隔で掘削され、その長さ
と深さは確認できなかったがその、幅は25~30cm、平均
27.50cm、隣接するサクの間隔は60~85cm、平均75.00cm
を測った。

遺物 3区の復旧畑からの出土遺物はなかった。

所見 3区1~5号復旧畑の掘削時期を特定することは
できず、天明3(1783)年以降の所産として把握されるに
過ぎなかった。

4. 1号土坑(第19図、PL. 6)

概要 本土坑は、大型の土坑である。

位置 本土坑は3区調査区南端西部に在り、864~866-
594~596グリッドに位置する。

重複 本土坑は他遺構との重複はなかった。

規模 長軸：172cm 短軸：146cm 深さ：30cm

覆土 暗褐色土で埋没するが、その中央上面にはAs-A軽
石を多く含む。

構造 本土坑は楕円形様のプランを呈し、その掘削形態
は摺鉢状を呈し、壁面は開き気味である。

遺物 本土坑からは瀬戸・美濃磁器クロム青磁小碗(27)
鉄釘(28・29)、不明鉄製品(30)が出土した。

所見 本土坑の掘削意図は特定されなかった

その時期は、出土遺物から推して下限は現代に下るも
のと判断される。

(d) 4区

1. 1号道路(第21~23図)

概要 本道路は、南北両側の側溝により確認された遺構
であり、本道路は東西両側が調査区外に出るため、全容
を詳らかにできなかった。

位置 本道路は4区中・東部、881~925-622~692グリッ
ドに位置する。

重複 本道路は他遺構との重複はなかった。

規模 残長：83.4m 幅：60cm

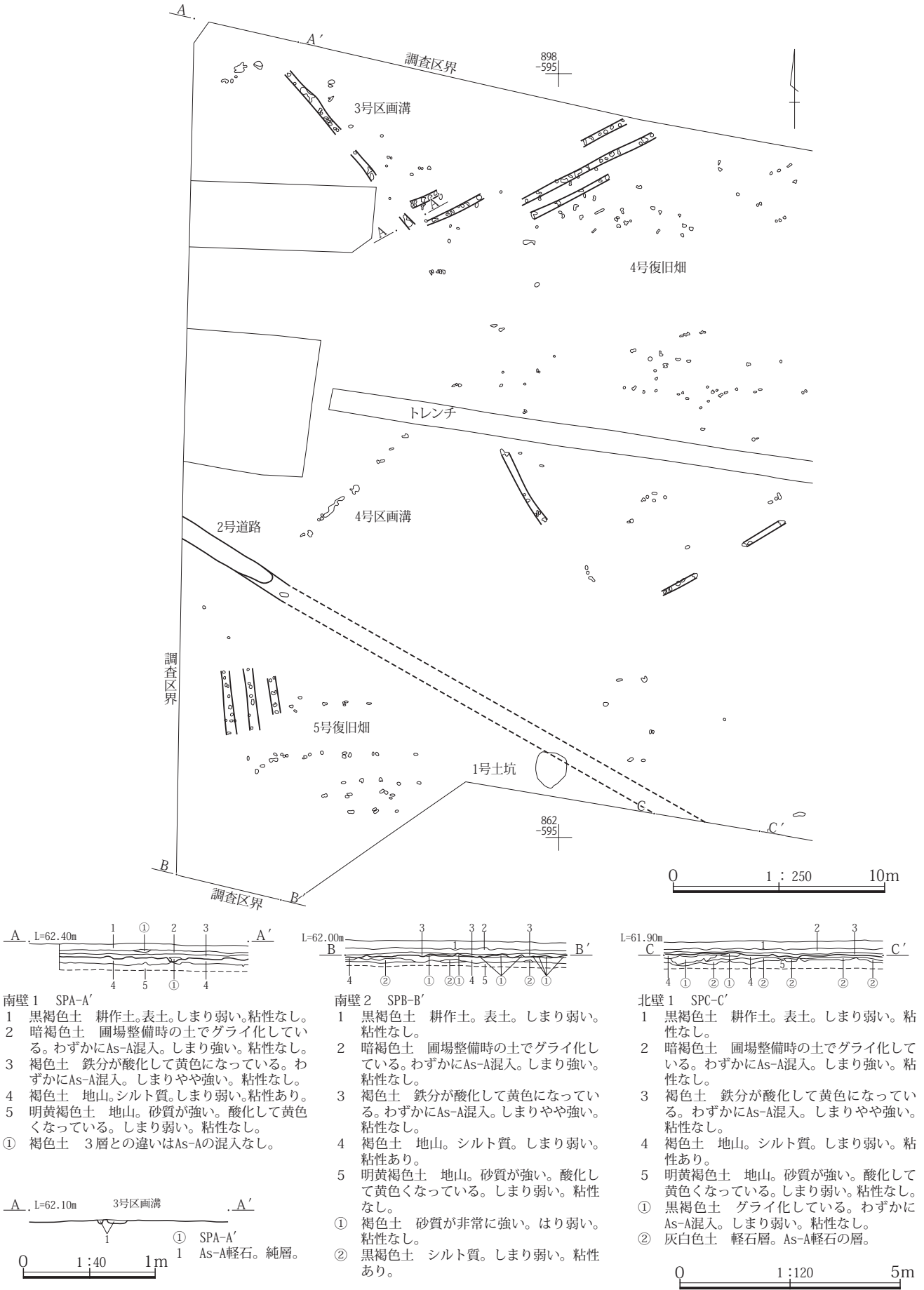
南側溝 幅：63cm 深さ：8cm

北側溝 幅：60cm 深さ：6cm

覆土 本道路は天地返しAs-A微量に含む灰色シルト質
土の下に確認され、側溝にAs-A含む暗褐色土が入る。

構造 本道路は調査区北から入り、極緩やかな弧状に走

3区4・5号復旧畑 3・4号区画溝 1号土坑 2号道路



第20図 3区2号道路、3・4号区画溝、4・5号復旧畑と1号土坑

4区1・4・5号復旧畑・1号道路

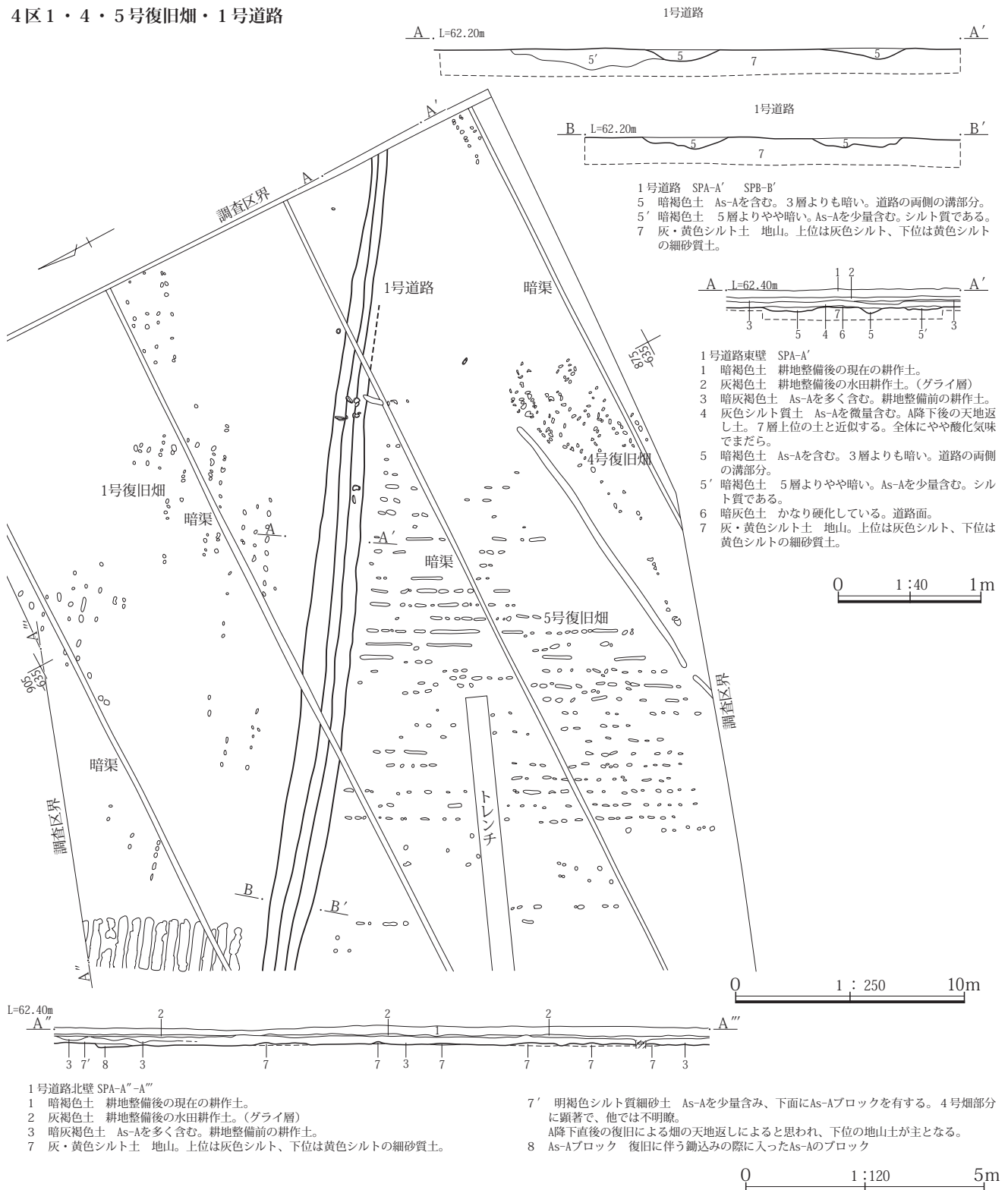
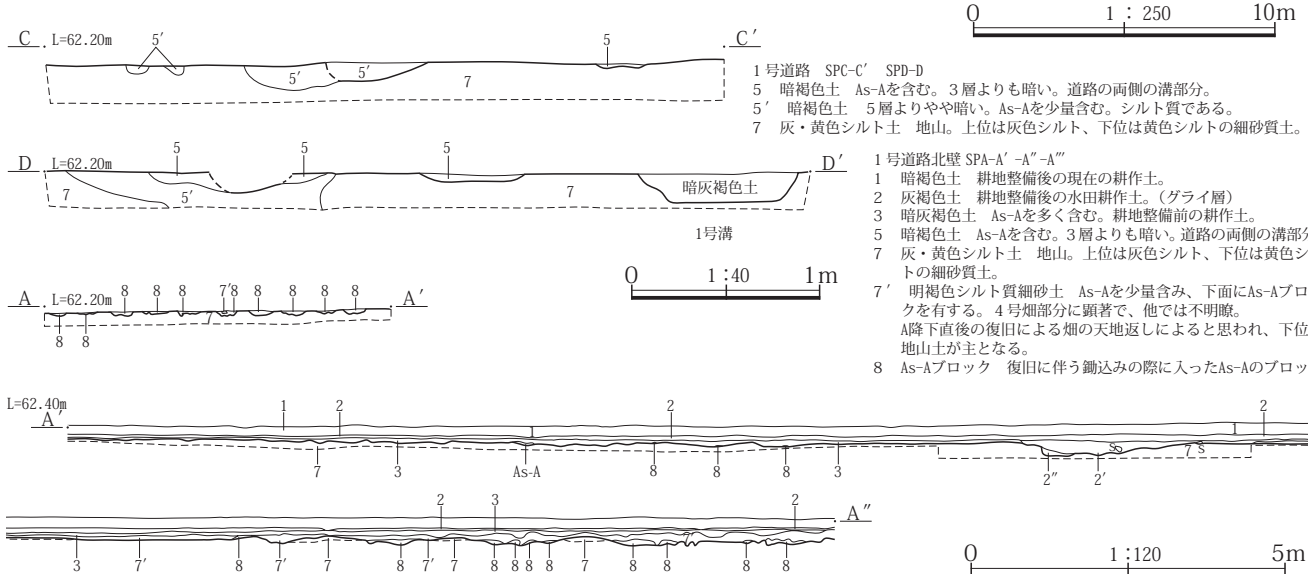
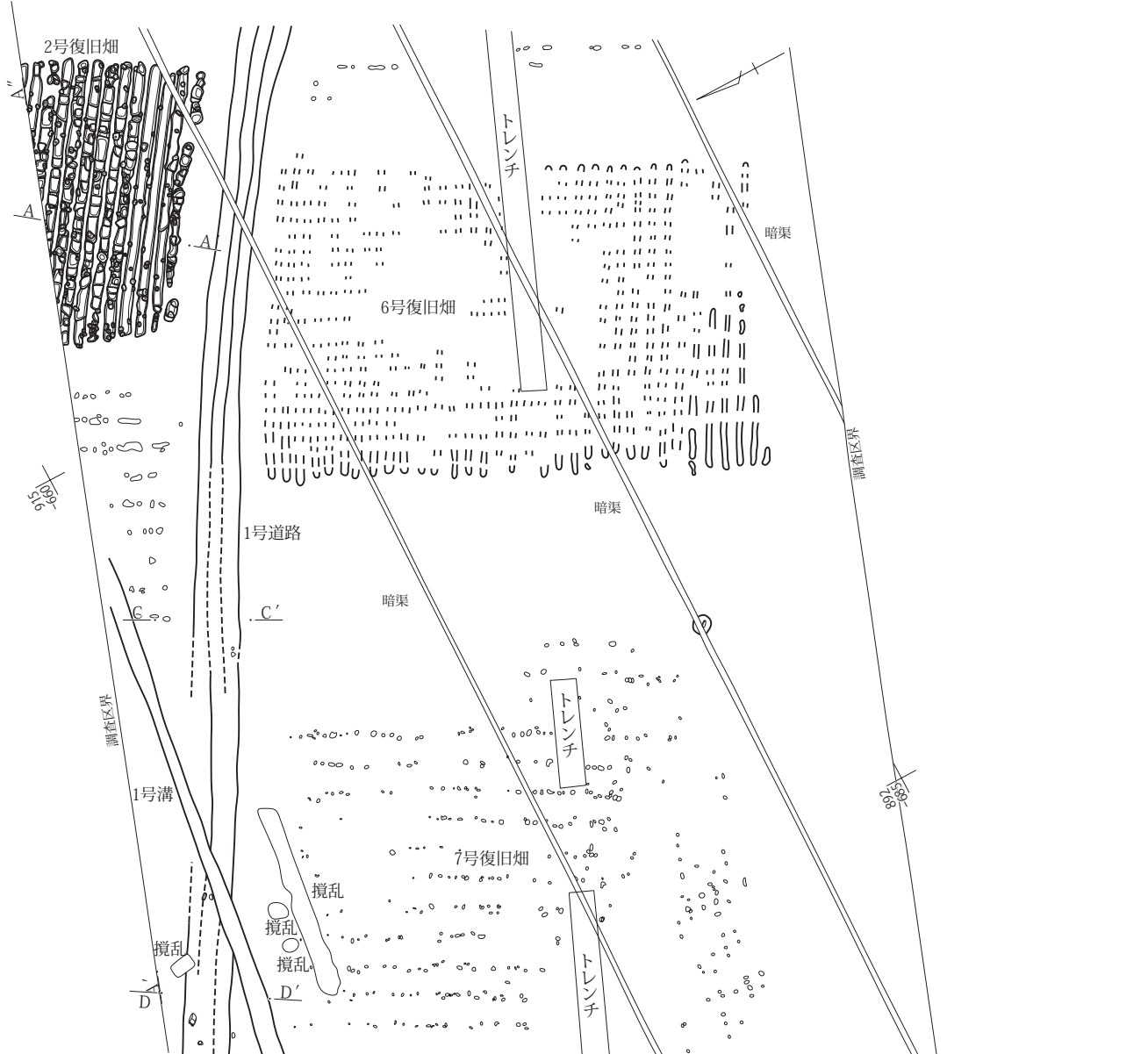


表3 4区1面復旧畑一覧

番号	所在グリッド	主軸方位	規模(m)	サク											
				条数	掘削間隔(cm)	(平均)	長さ(m)	(平均)	幅(cm)	(平均)	深さ(cm)	(平均)	畝間(cm)	(平均)	
1	892~905-621~645	N-53°-W	(26.60) × (9.60)	15	40~105	61.56	~ ~ ~	~	10~57	40.50	~ ~ ~	~	25	~105	48.13
2	902~911-645~657	N-53°-W	10.85 × (6.95)	13	47~65	57.00	10.85以下	~	13~65	33.77	2~8	5.80	10	~30	20.14
3	909~914-657~667	N-68°-W	(8.70) × (3.40)	5	35~105	70.83	~ ~ ~	~	15~30	21.00	~ ~ ~	~	15	~80	46.67
4	876~881-633~646	N-85°-E	(13.40) × (4.00)	9	33~68	45.00	~ ~ ~	~	10~25	14.44	~ ~ ~	~	20	~55	31.25
5	880~899-631~656	N-65°-W	(19.70) × (16.20)	32	15~108	46.63	~ ~ ~	~	10~20	10.64	~ ~ ~	~	45	~95	33.95
6	886~907-654~672	N-27°-E	(18.70) × (12.50)	34	15~108	48.70	~ ~ ~	~	15~32	19.82	~ ~ ~	~	23	~47	28.45
7	897~916-973~686	N-32°-E	(14.50) × (14.50)	14	85~115	100.00	~ ~ ~	~	13~57	19.29	~ ~ ~	~	70	~100	80.77
8	909~922-685~704	N-79°-W	(1640) × (12.30)	15	48~103	87.81	~ ~ ~	~	13~57	27.67	~ ~ ~	~	28	~78	63.00
9	897~909-682~702	N-63°-W	(21.80) × (12.10)	38	5~250	56.62	~ ~ ~	~	8~20	11.59	~ ~ ~	~	10	~240	44.32
10	908~917-708~725	N-15°-E	(22.80) × (20.20)	33	10~58	20.96	~ ~ ~	~	15~20	18.73	~ ~ ~	~	20	~40	31.79

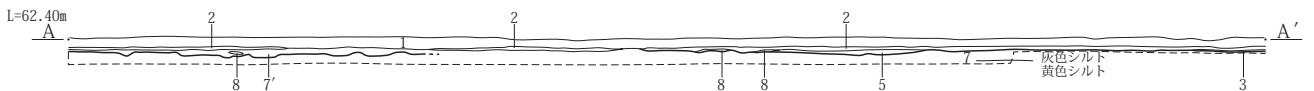
第21図 4区1号道路と1・4・5号復旧畑

4区2・3・6・7号復旧畑・1号溝・1号道路



第22図 4区1号道路、1号溝と2・3・6・7号復旧畑

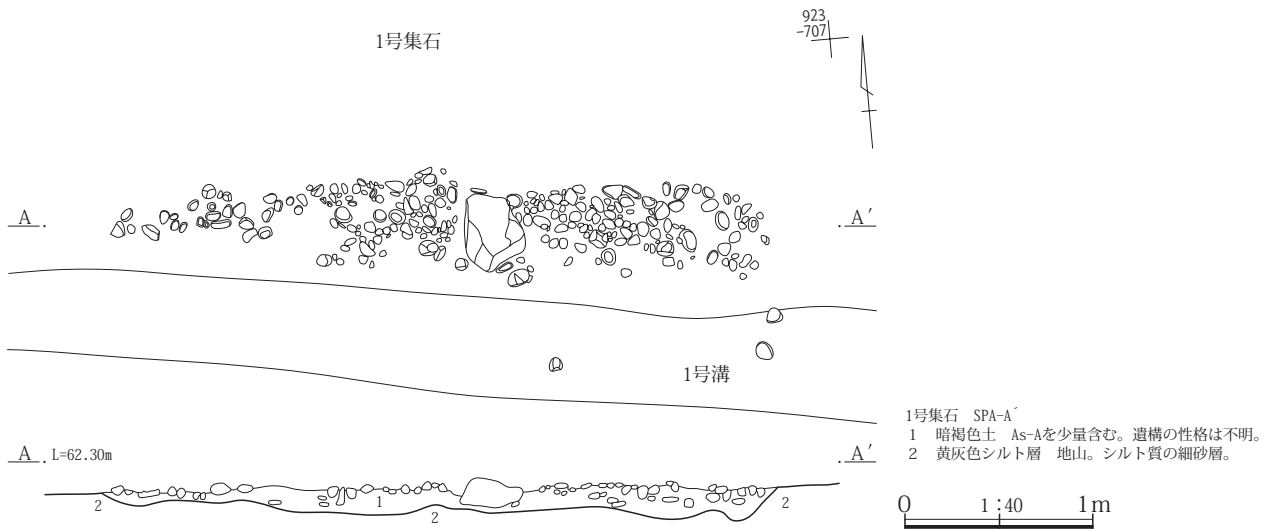
4区 8～10号復旧畑・1号道路



- 1 号道路北壁 SPA-A'
- 1 暗褐色土 耕地整備後の現在の耕作土。
- 2 灰褐色土 耕地整備後の水田耕作土。(グライ層)
- 3 暗灰褐色土 As-Aを多く含む。耕地整備前の耕作土。
- 5 暗褐色土 As-Aを含む。3層よりも暗い。道路の両側の溝部分。
- 7 灰・黄色シルト土 地山。上位は灰色シルト、下位は黄色シルトの細砂質土。
- 7' 明褐色シルト質細砂土 As-Aを少量含む、下面にAs-Aブロックを有する。4号畑部分に顕著で、他では不明瞭。
A降下直後の復旧による畑の天地返しによると思われ、下位の地山土が主となる。
- 8 As-Aブロック 復旧に伴う鋤込みの際に入ったAs-Aのブロック

第23図 4区 1号道路と8～10号復旧畑

4区1号集石



第24図 4区1号集石

行を取り、その走向は北端でN-60°-W、東端がN-54°-Wに走向を取る。

遺物 本道路からの遺物の出土はなかった。

所見 本道路の敷設の目的は特定されなかったが、北側の1～3号復旧畑と南側の5～7号復旧畑の境となっている。

なお、敷設の時期は、天明3年以降の所産として把握できたに過ぎなかった。

2. 1号溝(第22図)

概要 本溝は中規模な溝遺構である。

本溝の掘削位置は確認面より高いため、西部は確認できず、東側は調査区外に出るため、その全容を確認することはできなかった。

位置 本溝は4区中・西部に在り、914～923-663～722グリッドに位置する。

重複 本溝は7・8・10号復旧畑と重複し、これらを切っている。

規模 残長：61.2m 幅：67cm 深さ：25cm

覆土 As-Aを含む暗褐色土で埋没する。

構造 1号区画溝の走向はN-81°-Wに走向を取り、直線的な走行を取る。

遺物 本溝からの遺物の出土はなかった。

所見 本溝の掘削意図は確認できなかった。

また、その掘削時期は、覆土にビニールが入るためそ

の下限は現代であるが、掘削時期は近世後期以降として把握できるに過ぎない。

3. 復旧畑(第21～23図、PL. 7)

概要 4区では、天明3(1783)年の浅間山噴火の被災復旧のため、As-A軽石を鋤込んで耕作した復旧畑10面を確認した。

遺存状態は良好ではなく、底面付近を調査し、サクの痕跡を確認できたものが多かったが、2号復旧畑はサクが比較的良好に確認された。

位置 1号道路の北側に1～3号復旧畑は、南側に4～10号復旧畑が在り、4区東半部に1～6号復旧畑、西半部に7～10号復旧畑がある。

位置するグリッドは表3に記した。

規模・主軸方位 表3に記した。

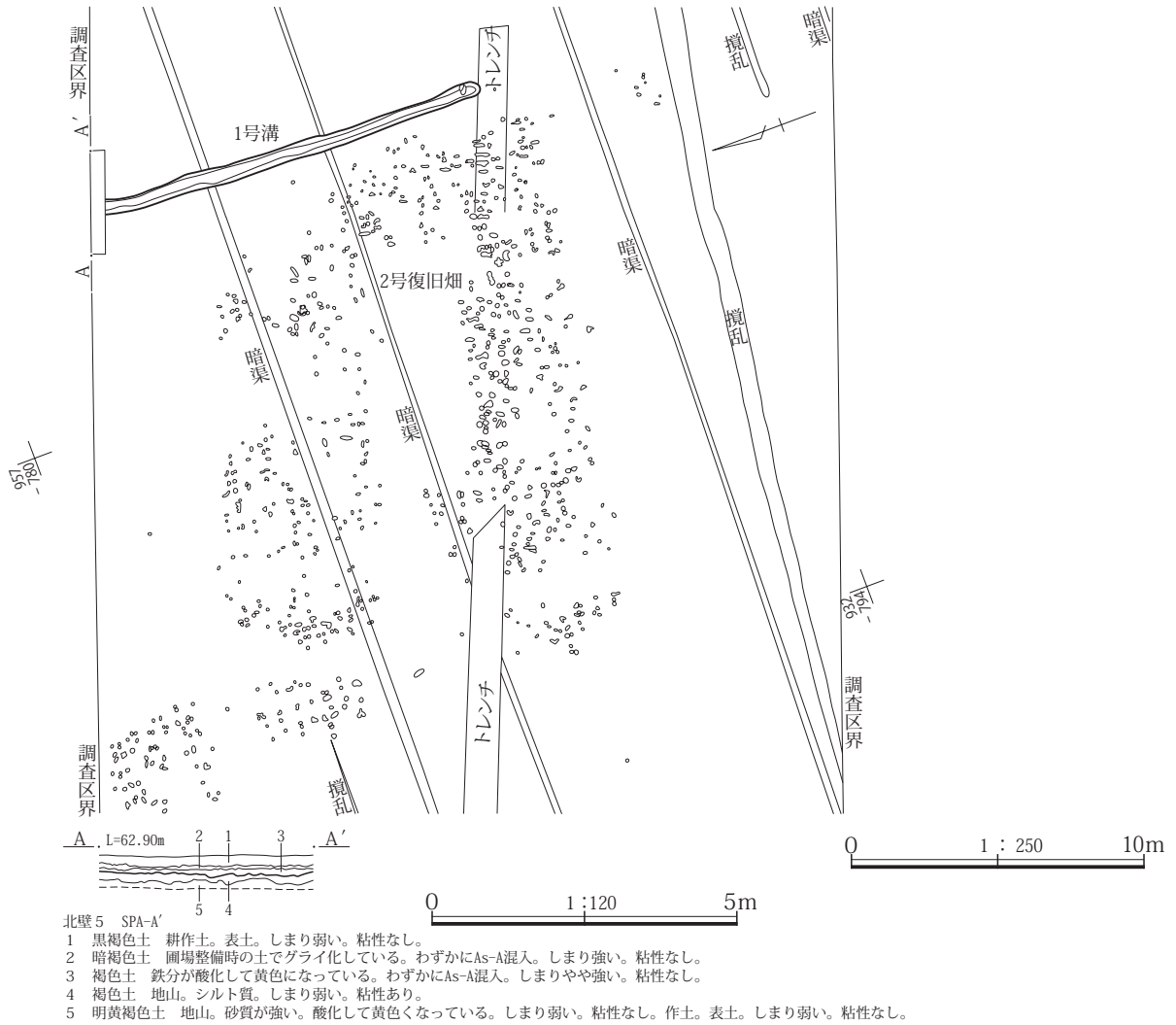
構造 復旧畑は鋤先痕で確認されるが、サクの範囲を想定できたものもあった。

個々の復旧畑のサクの掘削の間隔、サクの残存幅などは表3にまとめた。

遺物 4号畑からは少量の国産施釉陶器が出土したが、4区の他の復旧畑からの遺物の出土は見られなかった。

所見 4区1～10号復旧畑の掘削時期を特定することはできず、天明3(1783)年以降の所産として把握されるに過ぎなかった。

5区2号復旧畑、1号溝



第25図 5区1号溝と2号復旧畑

4. 1号集石(第24図)

概要 本遺構は、河床礫が分布する遺構である。

位置 本遺構は4区調査区西部に在り、921~922-707~710グリッドに位置する。

重複 本遺構は他遺構との重複はなかったが、南側に1号溝が近接してある。

規模 範囲：347×64cm

覆土 黄灰色シルト質土を掘り込み、As-Aを少量含む暗褐色土で埋め戻して、中・上位に河床礫が埋められる。

構造 大小の河床礫が集まる遺構であるが、その分布状況は、比較的密である。

遺物 本遺構からの出土遺物はなかった。

所見 本遺構の礫の配置意図は特定されなかった

その時期は、覆土から推して、天明3年以降の所産と見られるが、その時期を特定することはできなかった。

(e) 5区

1. 1・2号道路(第26図、PL. 8)

概要 本道路は、硬化面によって確認された道路遺構である。

また、1号道路は北側が削平により失われ、南側が調査区外に在り、2号道路は南北両側が調査区外に出ているため、共に全容を詳らかにすることはできなかった。

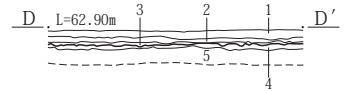
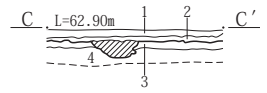
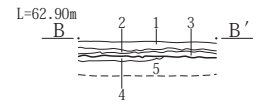
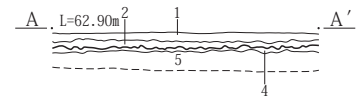
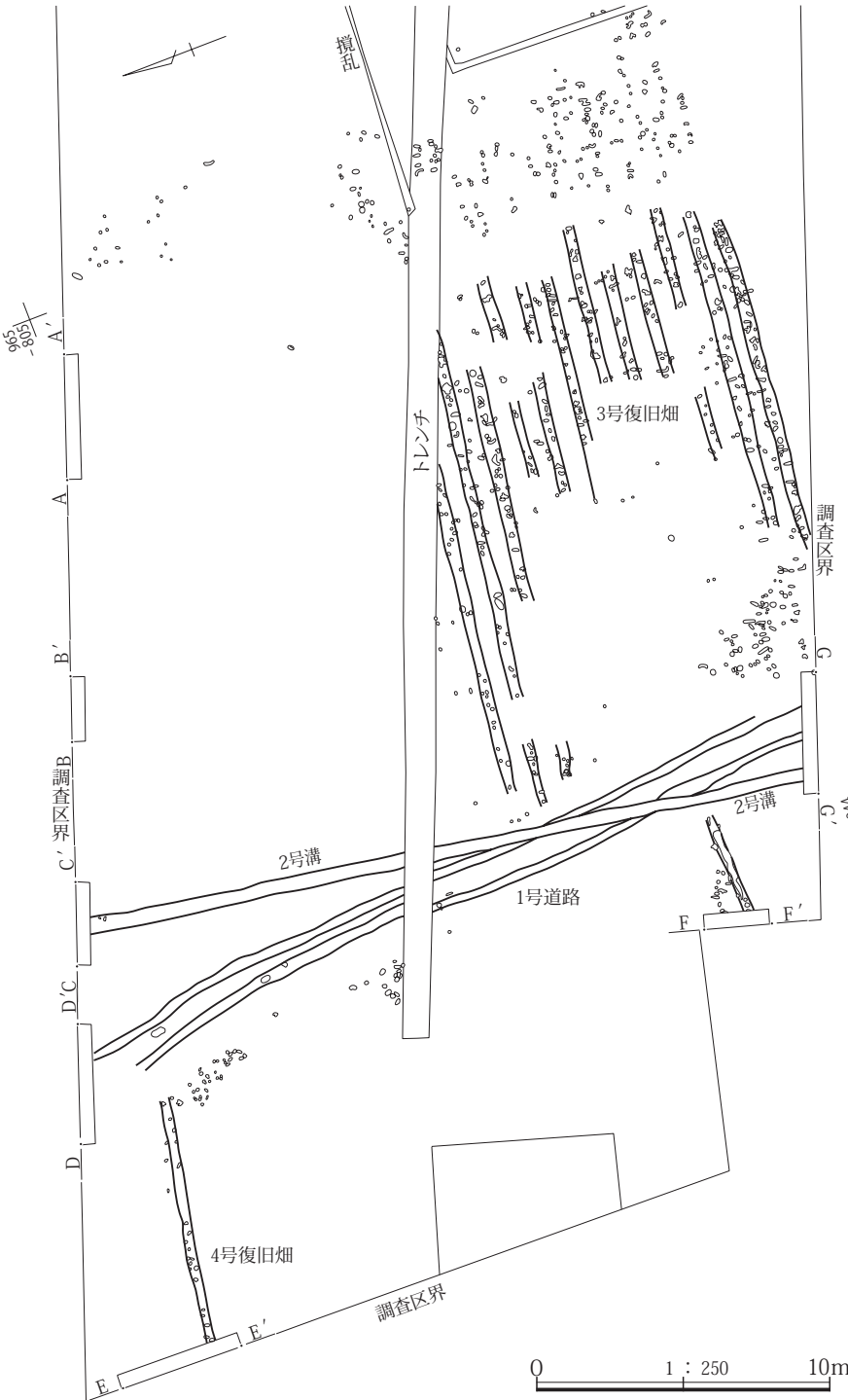
位置 1号道路は5区西部に在り、945~970-827~330グリッドに位置し、2号道路は区西部に在り、944~971-826~329グリッドに位置する。

重複 1・2道路は共に2号溝と重複するが、新旧関係を特定することはできなかった。また、両道路は30~75cm程隔てて、並走してある。

規模 1号道路 残長：25.3m 幅：30~46cm 深さ：

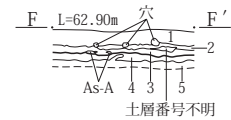
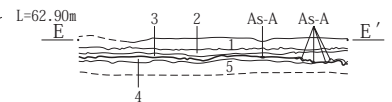
第1節 1面の調査

5区3・4号復旧畑、1号道路、2号溝



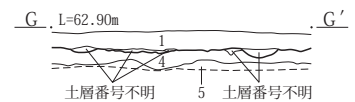
SPA-A' ~ SPD-D'

- 1 黒褐色土 耕作土。表土。しまり弱い。粘性なし。
- 2 暗褐色土 圃場整備時の土でグライ化している。わずかにAs-A混入。しまり強い。粘性なし。
- 3 褐色土 鉄分が酸化して黄色になっている。わずかにAs-A混入。しまりやや強い。粘性なし。
- 4 褐色土 地山。シルト質。しまり弱い。粘性あり。
- 5 明黄褐色土 地山。砂質が強い。酸化して黄色くなっている。しまり弱い。粘性なし。



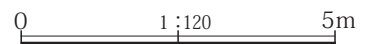
SPE-E' ~ SPF-F'

- 1 黒褐色土 耕作土。表土。しまり弱い。粘性なし。
- 2 暗褐色土 圃場整備時の土でグライ化している。わずかにAs-A混入。しまり強い。粘性なし。
- 3 褐色土 鉄分が酸化して黄色になっている。わずかにAs-A混入。しまりやや強い。粘性なし。
- 4 褐色土 地山。シルト質。しまり弱い。粘性あり。
- 5 明黄褐色土 地山。砂質が強い。酸化して黄色くなっている。しまり弱い。粘性なし。



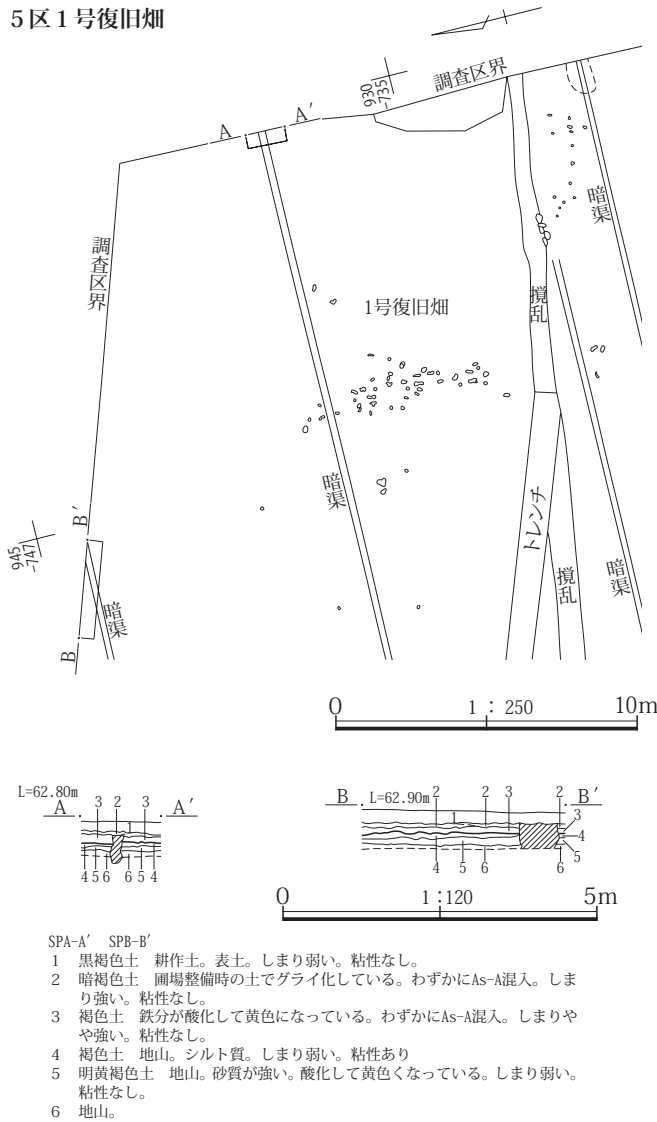
SPC-G'

- 1 黒褐色土 耕作土。表土。しまり弱い。粘性なし。
- 4 褐色土 地山。シルト質。しまり弱い。粘性あり。
- 5 明黄褐色土 地山。砂質が強い。酸化して黄色くなっている。しまり弱い。粘性なし。



第26図 5区1号道路、2号溝と3・4号復旧畑

5区1号復旧畑



第27図 5区1号復旧畑

—cm

2号道路 残長：25.3m 幅：24～41cm 深さ：—cm

覆土 1号道路の土層記録は残せなかった。また、2号道路は僅かにAs-Aを含む褐色土下で確認された。

構造 1号道路の走行は蛇行しているが、その走向は、北端はN-13°-W、中程でN-2°-E、南端でN-3°-Wに走向を取る。また2号道路全体としてN-4°-Wに走向を取り、北端ではN-10°-Wに走向をとるが、その走行は緩やかな蛇行を見せる。両道路の横断面は若干窪みを有する。

遺物 1・2号道路からの遺物の出土はなかった。

所見 両道路の敷設の目的は、特定されなかった。

また、その時期は1面上位面の遺構として報告しているが、その時期は近世以降の所産として把握されるに過

ぎない。

なお、両道路は並走していたが、新旧関係にあるか否かを特定することはできなかった。

2. 1・2号溝(第25・26図、PL. 8)

概要 1・2号溝は、中規模の溝遺構である。

また、1号溝は北側が、2号溝は南北両側が調査区外に出ているため、共に全容を把握できなかった。

位置 1号溝は5区中北部東寄りに在り、938～952-772～773グリッドに位置し、2号溝は5区西部に在り、945～970-824～828グリッドに位置する。

重複 1号溝は単独である。2号溝は1・2号道路と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

規模 1号溝 残長：13.8m 幅：60cm 深さ：4cm

2号溝 残長：25.8m 幅：55cm 深さ：8cm

覆土 覆土の記録は残せなかった。

構造 1号溝は、全体としてN-3°-Eに走向を取る、直線的な走行を呈するが、北端ではN-16°-Eに走向を転ずる。掘削形態は箱堀状を呈すると想定される。その底面の横断面形は丸底状を呈する。

2号溝は、全体としてN-9°-Eに走向を取る、直線的な走行を呈するが、南端ではN-10°-Eに走向を転ずる。掘削形態は箱堀状を呈すると想定される。その底面の横断面形は丸底状を呈する。

遺物 1号溝からは国産施釉陶器6gが出土したが、2号溝からの出土遺物は得られなかった。

所見 1号溝は2号復旧畑の東縁に沿って在り、2号溝は3号復旧畑の西縁に沿ってあることから、両溝は共に区画溝として掘削されたものと思慮される。

また、1・2号溝は1面上位面の遺構として報告しているが、その時期は近世以降の所産として把握されるに過ぎなかった。

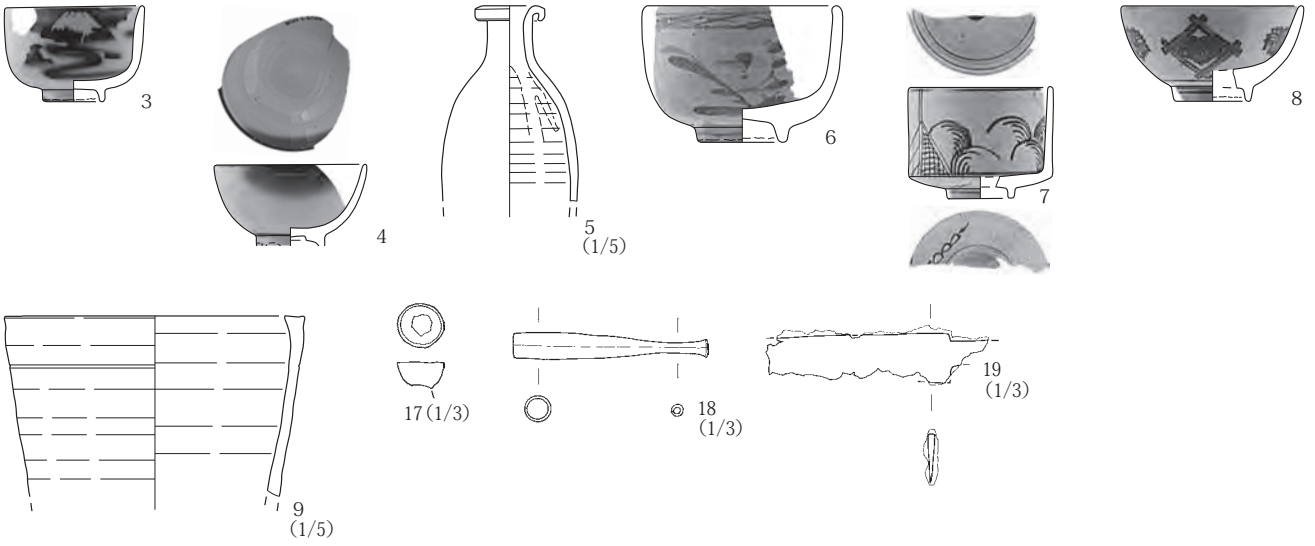
3. 復旧畑(第25～27図、PL. 8)

概要 5区では、天明3(1783)年の浅間山噴火の被災復旧のため、As-A軽石を鋤込んで耕作した復旧畑4面を確認した。

これらの復旧畑の遺存状態は不良で、底面付近を調査したに過ぎなかった。

位置 1号復旧畑は5区東部、2号復旧畑は5区中部、

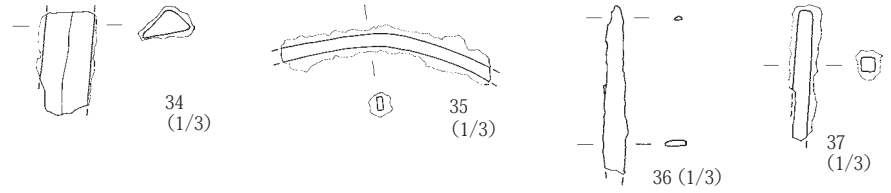
1区



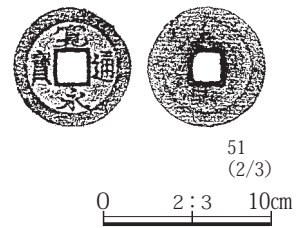
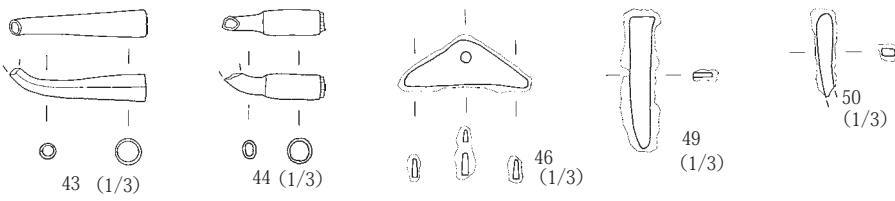
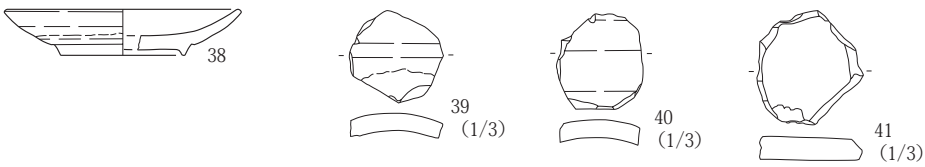
2区



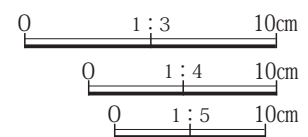
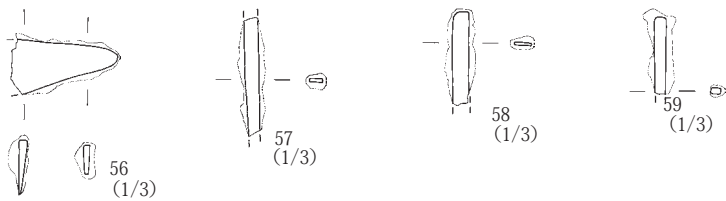
3区



4区



5区



第28図 1～5区1面遺構外出土遺物

3号復旧畑は5区南西部、4号復旧畑は5区西端部道にある。

位置するグリッドは、1号復旧畑は913～942-737～759グリッド、2号復旧畑は932～958-774～794グリッド、3号復旧畑は941～963-802～827、4号復旧畑は944～971-830～839グリッドである。

規模・主軸方位 1号復旧畑 確認範囲：28.4×19.3m

2号復旧畑 確認範囲：22.2×20.1m

3号復旧畑 確認範囲：24.5×13.15m 主軸方位：N-83°-W

4号復旧畑 確認範囲：23.4×9.2m

構造 復旧畑は鋤先痕で確認されるが、サクの範囲を想定できたものもあった。

1号復旧畑の鋤先痕の分布は薄く、サクなどを想定することはできなかった。

2号復旧畑本復旧畑の鋤先痕の分布は、1号復旧畑より濃い、サクなどを想定することはできなかった。

3号復旧畑の鋤先痕の分布は、5区南半部に集中し、12条のサクの痕跡を見出した。サクの痕跡の全長は4.1～16.6mを測った。また、サクの痕跡の測定によって、サクは92～114cm、平均102.55cmの間隔で掘削されることが確認され、サクの幅は32～47cm、平均39.64cm、畝間は47～75cm、平均63.07cmを測った。

4号復旧畑では、南北の2カ所でサクの痕跡は確認された。サクの痕跡の長さは8.5m以下を測り、幅は35cm程を測った。また、想定されたサクの走向は、北側のものはN-80°-W、南側のものはN-87°-Eを向く。

遺物 5区の復旧畑からの出土遺物はなかった。

所見 5区1～4号復旧畑の掘削時期は、天明3(1783)年以降の所産として把握されるに過ぎなかった。

(f) 1面の遺構外の出土遺物(第28図、PL.23)

1面の出土遺物のうち、1区のAs-A泥流から製作地不明の磁器湯呑(3・4)、瀬戸・美濃陶器徳利(5)があった。

その他の遺構外の出土遺物には、1区からは肥前陶器陶胎染付碗(6)、肥前磁器染付筒形碗(7)・碗(8)、瀬戸・美濃陶器半胴甕(9)、砥石、敲石、火打石、キセルの雁首(17)と吸い口(18)、刀子(19)、鉄釘(20)、鉄滓(21)、2区からは在地系土器皿(25)、不明鉄製品(26)、3区からは火打石、鉄釘(32・33)、不明鉄製品(34～37)、4区

からは瀬戸・美濃陶器皿(38)・円盤状製品(39・40)、在地系土器円盤状製品(41)、砥石、キセル雁首(43・44)、寛永通寶(45)、火打金(46)、鉄釘(47・48)、不明鉄製品(49・50)、5区からは寛永通寶(51)、鉄釘(52～55)、不明鉄製品(56～60)があった。

また、掲載しなかった遺物には、1区では国産磁器100g、国産施釉陶器187g、国産焼締陶器40g、在地系焙烙・鍋42g、2区では国産磁器96g、国産施釉陶器279g、国産焼締陶器42g、在地系焙烙・鍋203g、在地系皿10g、瓦65g、近現代の陶磁器10g、3区では国産磁器144g、国産施釉陶器708g、国産焼締陶器25g、在地系焙烙・鍋258g、在地系皿34g、近現代の陶磁器21g、4区では国産磁器176g、国産施釉陶器804g、国産焼締陶器172g、在地系焙烙・鍋325g、在地系皿53g、その他の在地系土器類76g、近現代の陶磁器58g、5区では国産磁器125g、国産施釉陶器481g、国産焼締陶器81g、在地系焙烙・鍋81g、在地系皿3g、近現代の陶磁器28gや土器類248gがあった。

(1) 1面下位面

1面下位面の遺構は1～3区で確認されたが、特に天明3(1783)年の泥流被災区域である、1区から2区東部にかけて確認された。

このうち1区東部では泥流で壊された、土塁に囲まれた屋敷や、As-A軽石で覆われた竹藪跡と思われる区域と、以西の区域と2区東部にかけて、同じくAs-A軽石で覆われた畑跡を確認した。

(a) 1区

1. 屋敷

① 概要(第29・30図、PL.2)

調査範囲 屋敷は1区南東隅部に確認された。東部が調査区外にあるため全容は詳らかでない。確認した遺構の範囲は900～933-301～323グリッドに位置する。

泥流被害 屋敷は旧暦7月7日午後からの軽石の被災を受けているが、旧暦7月8日昼過ぎに泥流が高さ1m程で北或いは西方から到達しているが、建物の内部に押し寄せて、屋敷そのものは廃絶している。しかし、上流の玉村町上福島の上福島中町遺跡に比して少なく、家財を運び出した可能性が窺われる。

屋敷の区画 屋敷はその北側と西側が土塁で囲まれ、南面は低い段差で区切られる。内部は北部、中部、南部に分けられた。

北部は北側の土塁を削って石組で土止めを施して造成した東西706cm、南北318cmを測る区画があり、その南東部に重なるように10cm程高い、東西580cm以上、南北205cmを測る区画があり、ここには1号井戸がある。またこの区画の北東部と重なるように1号井戸の区画より8cm程低い、東西166cm、南北146cmの残長を測る区画がある。なお、北部の区画は1号建物との間には西部で264cm、東部で90cm程の幅員を測る通路が東西に走行する。この道路は北側の区画より10cm程低く、井戸のある区画周辺では段差に沿って河床礫が据えられている。

中部に棟を東西方向に取る母屋(1号建物)がある。西側の土塁との間に265cm程を測る通路が残る。

南部では、西半に南北に棟方向を取る2号建物があり、東半はニワ(庭)がある。2号建物と西側の土塁との間は117cmを測る。また、ニワ(庭)の南縁は2号建物の南縁の延長線上に在り、南側の区画より10cm弱低く、石組が組まれるが、2号建物から462cm程の地点で南側に497cm程南に広がるものの、段差に石組は伴わない。そしてこの区画には建物の痕跡(3号建物)が確認された。

柱の径 礎石建物の礎石には、柱の当たり痕跡の残るものがあつた。その径は、6.4~12cm、平均7.96cm、おおよそ2寸半程を測った。

② As-A軽石降下後の痕跡(第29図、PL. 2)

概要 ここで1面中位面について述べる。

As-A泥流層土は硬く、As-A軽石下層は砂質で極めて軟質であるため、その上面をAs-A泥流から直接掘削することは困難なため、作業を単純化して効率化を図るため、As-A泥流層土除去後、As-A軽石層上面(中位面)を検出した。この中位面では、周辺の畑地などと異なり、屋敷内ではAs-A軽石の有無や、堆積量に濃淡が確認される箇所があつた。

軽石の有無 As-A軽石は周辺部では5~6cmの層厚で堆積しているが、1・2号建物と南東隅の建物が想定された箇所では、As-A軽石の堆積はなかつた。

軽石の濃淡 1・2号建物の外周部では、厚さ20cm以上のAs-A軽石の盛り土状の堆積が見られ、1・2号建物の

境付近では小山状に高さ40cm程の堆積も見られた。一方、ニワ(庭)では細かいAs-Aが散在する箇所があり、その周囲の軽石は、層厚15~24cmに盛り上げられたような箇所があつた。また、1号建物と北側の井戸との間には、軽石を除けて通路を確保した痕跡が見られた。

所見 上述のAs-A軽石の堆積状況により、1・2号建物は軽石降下後、泥流到達前の時点では屋根が残り、北部の1号井戸には覆屋が無かつたことが確認された。

また軽石の濃淡により、通路確保のため、庭や井戸との境の掃除が行われ、1号建物の北側の出入り口や2号建物の東側の出入り口も特定された。

2. 1号建物(第31・32・35~37図、PL. 2・3・23~25)

概要 本建物は本屋敷の母屋である。調査範囲の南東隅部に1号土坑が掘削される。

規模 残長：11.6m 幅：7.3m

竈 幅：76cm、奥行：76cm、高さ：36cm、

焚口 幅：36cm、高さ：25cm

かけ口 径：48×44cm

煙出し 幅：22cm 高さ：22cm

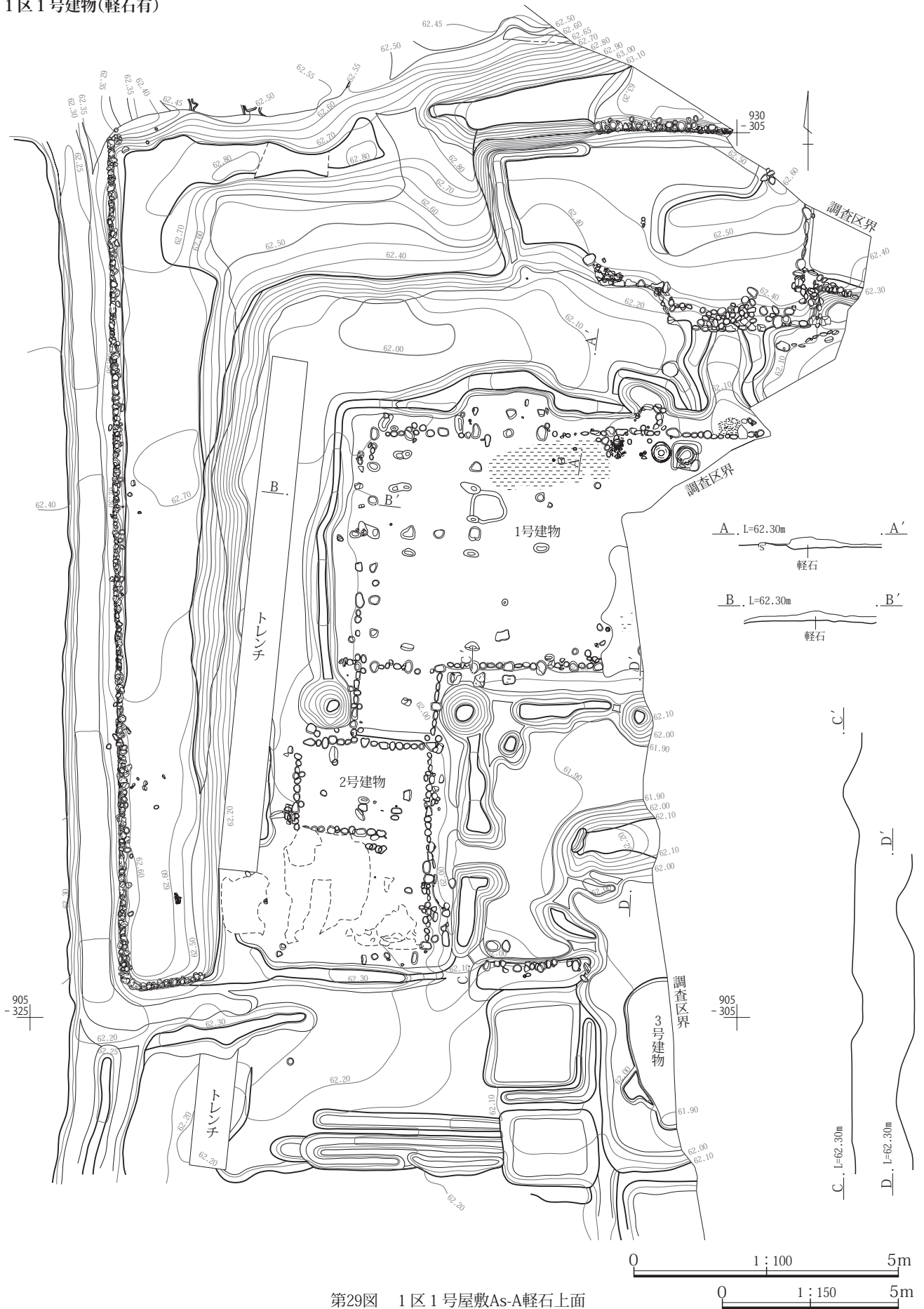
構造 本建物は棟方向がN-90°を向く礎石建物であり、西側4.6mと以東の区域に二分される。

本建物は深さ30cm以下の掘り方を有し、これを埋め戻して、明黄褐色土と黒褐色土などで敲きしめて床面を造っている。

西部は南北3間半、東西2間半に礎石(61~126)が配置されているが、東西も3間半の規格があつたことが確認される。西壁南寄りには2間幅で、1/4間西方に張り出しがあり、北壁は東から2間と3間が北側に半間張り出す。また、東側1間の北寄りと南寄りに灰が確認され、この位置には囲炉裏の設置が想定される。

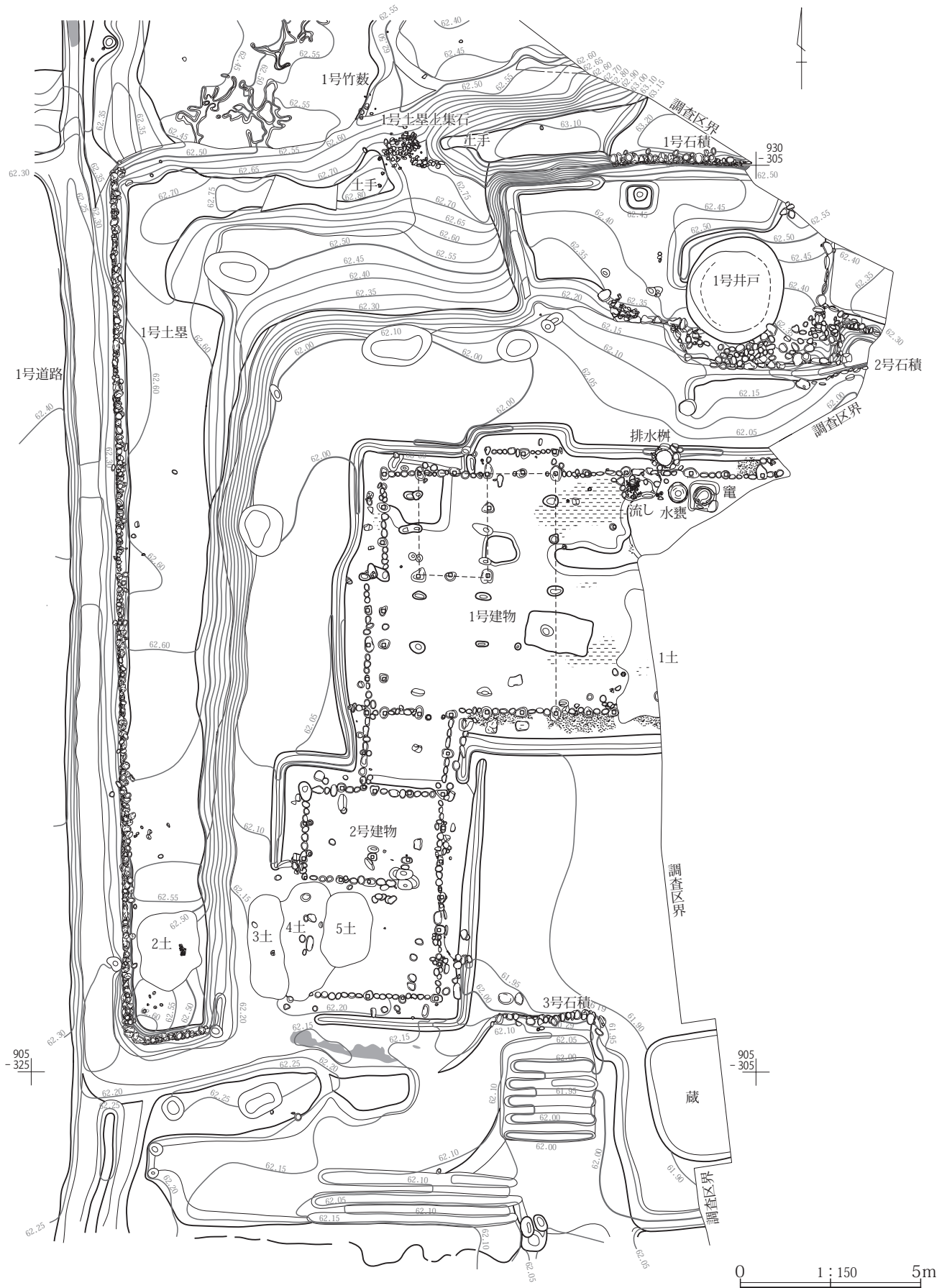
一方、東部は北西部が部分的に確認されたに過ぎなかつたが、その北西隅部にダイドコロがあり、東側に竈、西側に水甕(129)が並べて据えられていた。竈はにぶい黄褐色粘質土で作られる。かけ口には幅7cm以下の金具の抜き取り痕があり、釜も遺存しなかつた。また、水甕の西側に東西120cm、南北85cmを測り、北側と西側に河床礫を並べ、一部底面に砂利が残り、その北東側雨落溝の位置に、排水升として径52×50cm、深さ46cmを測り、肩に河床礫を廻らせる土坑が掘削されている。

1区1号建物(軽石有)



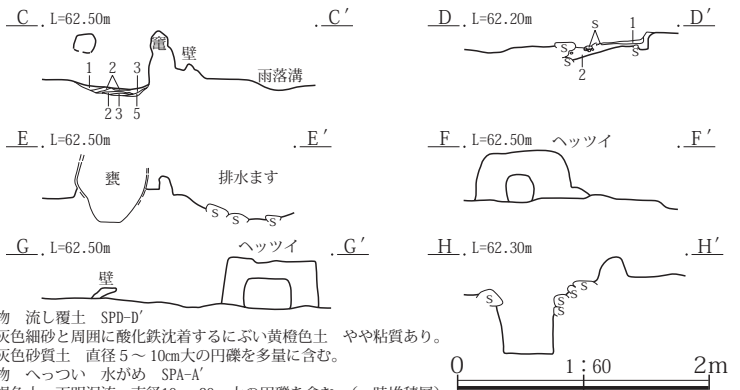
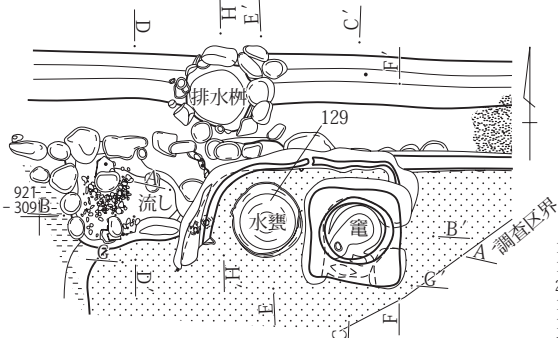
第29図 1区1号屋敷As-A軽石上面

1区1号建物

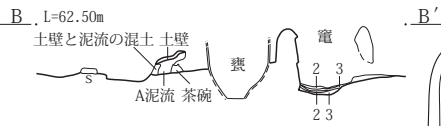
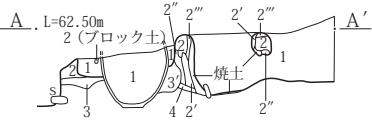


第30図 1区1号屋敷As-A軽石下面

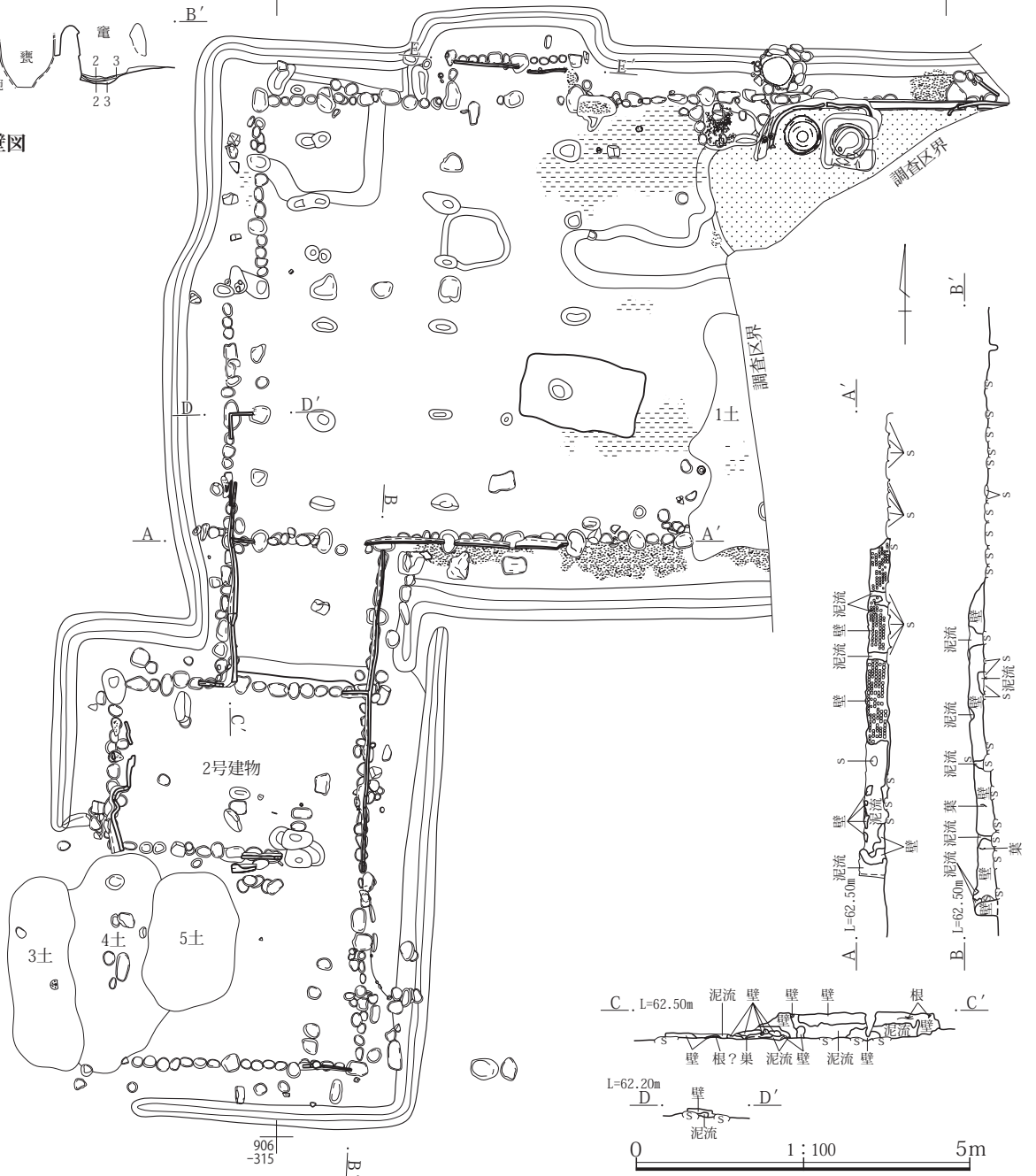
1区1号建物 カマド 水甕 流し



- 1号建物 流し覆土 SPD-D'
1. 褐灰色細砂と周囲に酸化鉄沈着するにぶい黄褐色土 やや粘質あり。
 2. 褐灰色砂質土 直径5~10cm大の円礫を多量に含む。
- 1号建物 へっつい SPA-A'
1. 黒褐色土 天明泥流 直径10~20cm大の円礫を含む。(一時堆積層)
 2. にぶい黄褐色土 粘質土 灰黄褐色土、黄褐色粘質土を含む。しまりあり。(へっついの構築土)
 - 2'. 2層だが非常によくしまる。(へっついの構築土)
 - 2'', 2'''. 2層だがややゆるい。
 3. 灰黄褐色粘質土 黄褐色土をブロック状に含む。 焼土粒を含む。
 - 3'. 灰黄褐色粘質土 黄褐色土をブロック状に含む。 焼土粒を含む。炭化物を含む。
 4. 灰黄褐色土 ややしまる。 黄褐色土をブロック状に含む。 焼土はない。(土間のしまった土)
 - 4'. 4層と同じだが、にぶい黄褐色ブロック土を含む
 5. 4層と同じだが、にぶい黄褐色ブロック土を含む

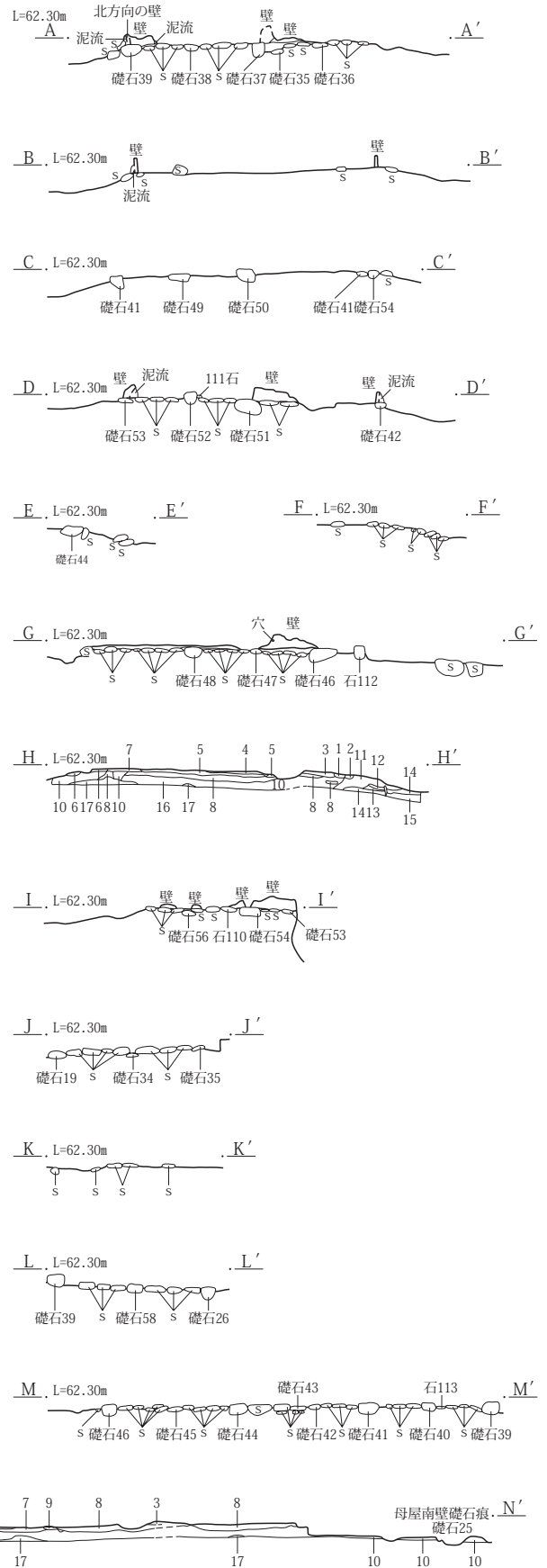
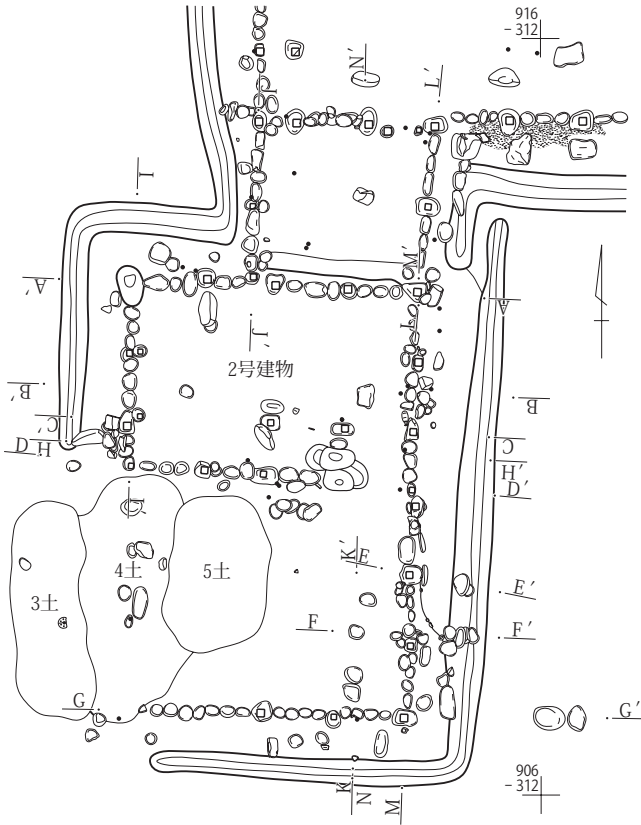


1区1号建物 壁図



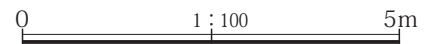
第31図 1区1・2号建物と土壁、及びガイドコロ

1区2号建物



- 離れ SPA-A' SPB-B'
1. にぶい黄褐色土 にぶい黄褐色土層入る。やや砂質でしまりあり。
 2. にぶい黄褐色土 やや砂質。しまりあり。
 3. 1層に似るが明黄褐色土粒入る。
 4. 褐灰色砂質土 明黄褐色を含む。
 5. 灰黄褐色砂質土 酸化鉄粒状に入る。
 6. にぶい黄褐色土 灰黄褐色砂質土粒入る。
 7. オリーブ褐色砂質土 褐灰色砂質土小ブロック入る。
 8. 灰黄褐色砂質土
 9. 明黄褐色砂質土 粘性あり。褐灰色砂質土小ブロック入る。
 10. にぶい黄褐色砂質土 8層土小ブロック混入。
 11. 褐灰色細砂
 12. 灰黄褐色土 褐灰色砂質土入り、やや砂質。
 13. 褐灰色砂質土 やや粘性あり。
 14. 褐灰色砂質土 粘性あり。
 15. 灰黄色砂質土 粘性あり。
 16. 褐灰色土
 17. 灰白色砂質土 酸化鉄小ブロック状に付着。

第33図 1区2号建物



北壁の突出部と東部、西壁南部、及び南壁の西側に土壁が遺されていた。南壁の土壁は、高さ34cm程を測り、柱が泥流と置換し、北側に縦横に1寸半の間隔で編まれたコマイの痕跡が見られた。また、北側突出部の土壁は南に8cm程押されている。

建物から35cm離れて、幅40cm、深さ7cm以下を測る、浅い雨落溝が遺されていた。

遺物 本建物のダイドコロからは鉄釘(127・128)、常滑陶器甕(129)が出土した他、肥前磁器白磁小杯(130)・染付小杯(131)・染付碗(132・133)・染付皿(134)、瀬戸・美濃陶器鉄絵碗(135)・腰鍔碗(136・137)・筒型香炉(138・139)、志戸呂陶器灯火受皿(140)、在地系土器皿(141)・鍋(142~144)・焙烙(145)、寛永通寶(146~152・155~157・159~162・164・165・168~171)、寛永通寶と見られる鉄銭(153・158)と銅銭(170・171)、癒着した銭(154・166・167)、キセル吸い口(172)・雁首(173)、鉄釘(174~177)、不明鉄製品(178~180・182)、砥石・不明石製品(184)が出土し、掘り方からは在地系土器皿(185)、スギ材の破片が出土した。

所見 本建物は18世紀中葉の建築と把握された。また、本建物の分析所見は第5章に鑑定結果を掲載した。

3. 2号建物(第31・33・37・38図、PL. 3・25)

概要 本建物は本屋敷の附属屋である。本建物の南西隅部に、3~5号土坑が掘削される。

規模 長さ：5.7m 幅：3.8m

北部附属建物 長さ：2.3m 幅：2.2m

構造 本建物はN-3°-Eに棟方向に向ける礎石建物であり、本体と北部の附属建物に二分される。

本建物は深さ27cm程を測る掘り方を有し、これを埋め戻して、褐灰色・明黄褐色砂質土などで床面を造る。

南部は南北6間強、東西2間に礎石が配置されているが、南から2間半強の位置に間仕切りの礎石列があった。

一方、北部は東壁が2号建物の東壁に、西壁が1号建物の西壁の延長線上にある。その規格は東西南北に1間+1/4を測る。

東壁の本体北部の間仕切り以北、附属建物にかけて、西壁の同一の過半と北壁の一部、間仕切りと南壁東端部の土壁が遺されていた。また西壁は15~20cm程東方に押し出されていた。

本建物も1号建物と同様に浅い雨落溝が遺されていた。

遺物 本建物からは火消壺と思われる在系土器(186)、鉄釘(187)、キセルと見られる銅製品(188)、また本体建物からは、瀬戸・美濃陶器腰鍔碗(189)・烏水入れ(190)・灯火皿(191)・十能(192)・徳利(193)・すり鉢(194)、堺・明石陶器すり鉢(195)、在地系土器皿(196)・焙烙(197・198)、寛永通寶(199~201)、鉄鉢(202)、キセル吸い口(203)、不明銅製品(204)、鉄釘(205~207)、不明鉄製品(208~210)、火打石、不明石製品、また、掘り方からは在地系土器皿(213)・円盤状製品(214)が出土した。

所見 本建物の所見は第5章に鑑定結果を掲載した。

4. 3号建物(第34図、PL. 4)

概要 本建物は本屋敷の附属屋である。

規模 東西残長：1.2m 南北長：4.3m

構造 本建物はN-15°-Wに方位を向ける建物である。

本建物は深さ3cm程を測る浅い窪地を伴う。

遺物 本建物からの遺物の出土はなかった。

所見 本建物の所見は第5章に鑑定結果を掲載した。

5. 土塁(第39~42図、PL. 4・23)

概要 上述のように、土塁は近世屋敷の北側と西側とを画するものであった。

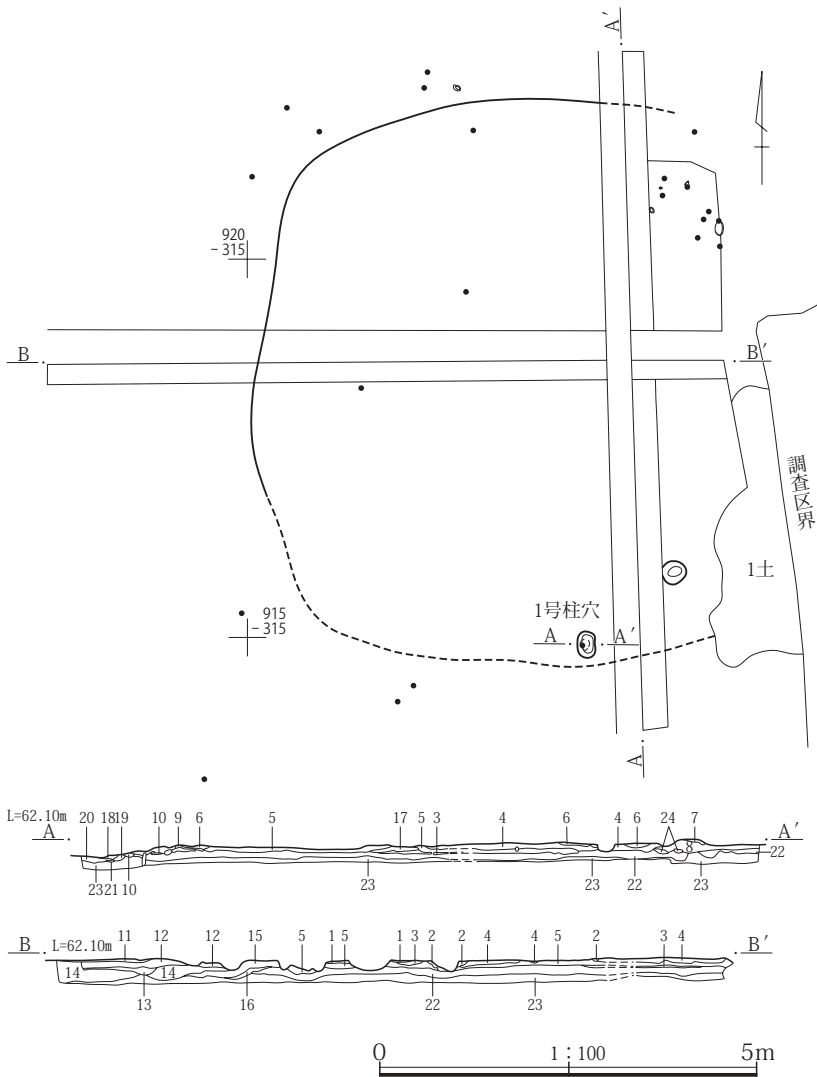
規模 長さ：36.7m 基底幅：326~346cm、上幅：188~365cm、高さ：31~84cm

構造 北側はN-89°-E、西側はN-1°-Wを向く。土塁は、黄褐色砂質土などを用い、東から西、北から南へ低くなるよう盛られている。

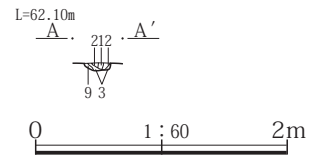
西側の土塁の西面には最下に長さ40cm以下の河床礫を横位に据え、その上に3・4段の河床礫を乗せた石組が施されているが、最下の石列は天明3年時点では埋もれていた。また北側の土塁の中部以東の南面には、幅34cm以下、高さ28cm以下に大型の礫を据え、その上にこれより小型の河床礫を4~5段乗せた石組を組んでいる。

遺物 肥前磁器染付碗(224)、同陶器陶胎染付碗(225)・火入香炉(226)、瀬戸・美濃陶器筒形小香炉(227・228)・半胴甕(229)・碗(230)、京・信楽系陶器上絵碗(231)、在地系土器皿(232・233)、釘と見られる鉄製品(234)、不明鉄製品(235)、砥石(236)

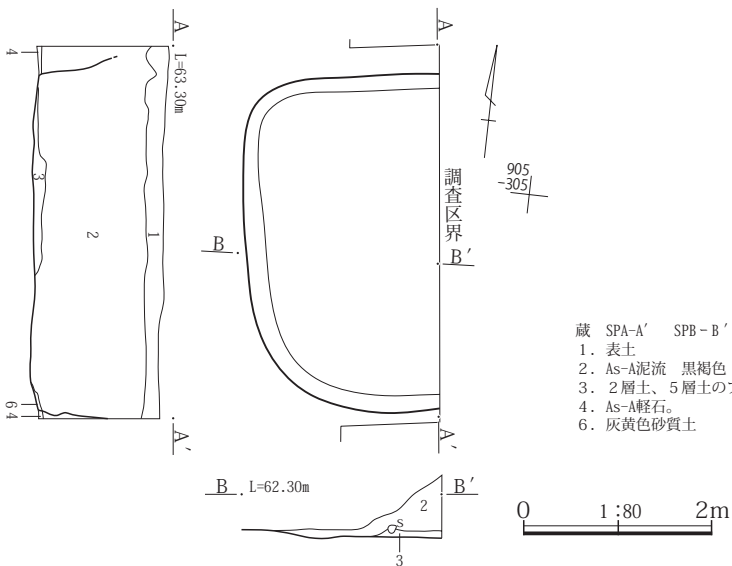
1区1号建物 掘り方



- 1号建物 屋敷 SPA-A' SPB-B'
1. 褐灰色土 粘性ありと3層砂のブロック混土。締まる。
 2. 灰黄褐色土 粘性あり。明黄褐色土粘性ありと褐灰色土の小ブロック混入。締まる。
 3. 灰黄色砂 締まる。
 4. 2層土と灰黄褐色土のブロック混土。5層土小ブロック混入。締まる。
 5. 明黄褐色土 黒褐色土のブロック混土。粘性あり。4層土小ブロック混入。締まる。
 6. 黒褐色土 4層土小ブロック混入。締まる。
 7. 暗灰黄色土 8層土小ブロック混入。
 8. 灰黄褐色砂質土 4層土小ブロック混入。
 9. にぶい黄褐色土 やや砂質だが粘性あり。締まる。
 10. 灰黄褐色砂質土 上位に暗黄色と 明黄褐色等の粘質土ブロック入る。締まる。
 11. 褐灰色土 やや砂質。12層土ブロック入る。
 12. 灰黄褐色砂質土 11層14層土ブロック混入。
 13. 褐灰色砂 川砂層。
 14. 灰黄褐色と褐灰色の砂質土の混土。
 15. 灰黄褐色 13層砂ブロック混入。
 16. 15層土と5層土のブロック混土。
 17. 灰黄褐色土 細砂と5層土小ブロック混入。
 18. 褐灰色土 やや砂質だが粘性あり。表面に10層土上位層土乗る。締まる。
 19. 18層土と20層土の混土。
 20. 暗灰黄色砂質土 表面に10層土上位層乗る。
 21. 18層土と5層土の混土。
 22. 暗灰黄色砂質土 黒褐色土粒入りよく敲き締められる。
 23. 黄灰色に褐灰色入る。砂層。
 24. 4・8・6層土の小ブロック混土。



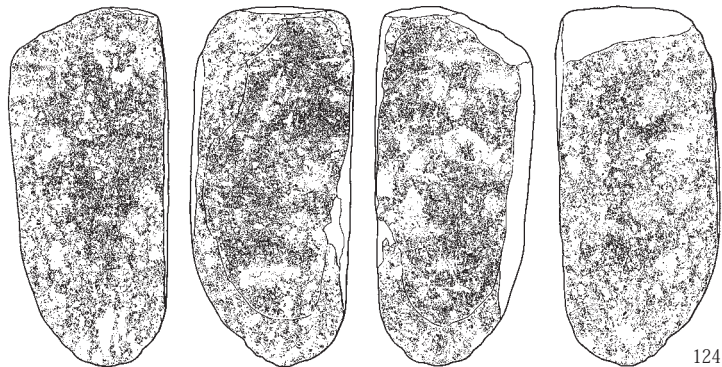
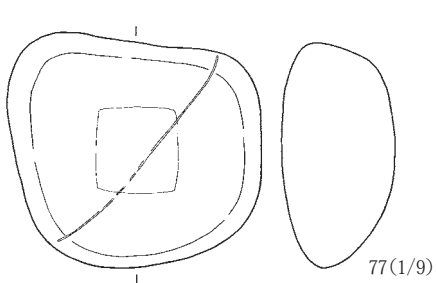
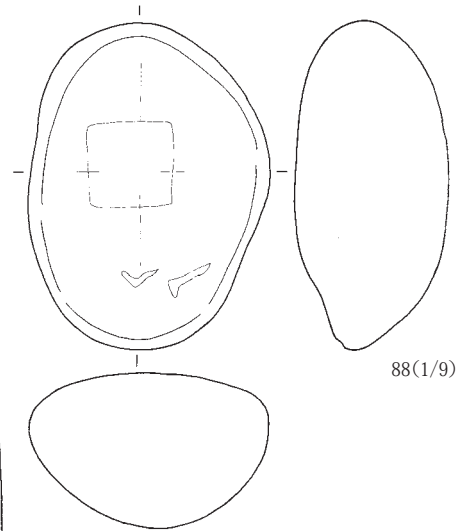
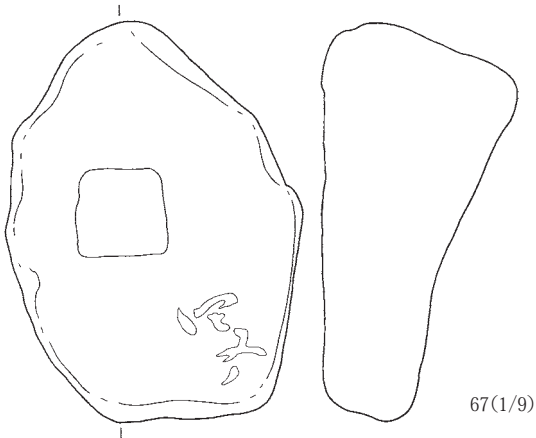
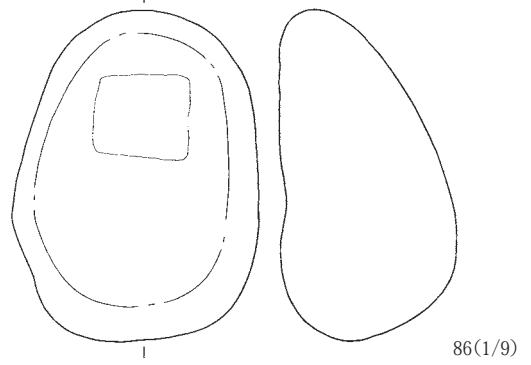
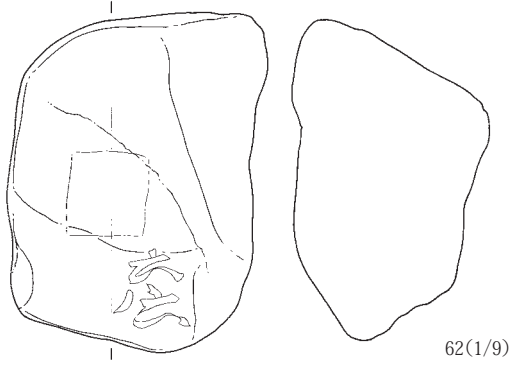
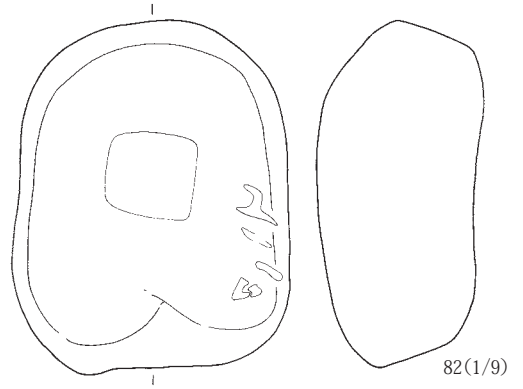
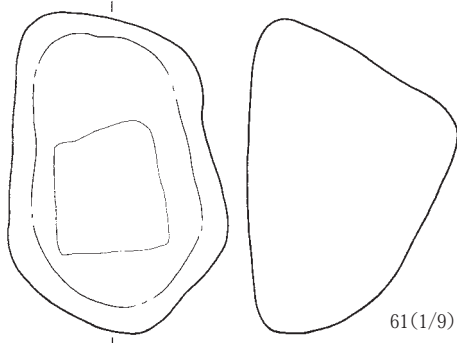
1区 蔵



- 蔵 SPA-A' SPB-B'
1. 表土
 2. As-A泥流、黒褐色
 3. 2層土、5層土のブロック土の混土。 灰黄色細砂質土少量入る。
 4. As-A軽石。
 6. 灰黄色砂質土

第34図 1区1号建物掘り方と3号建物

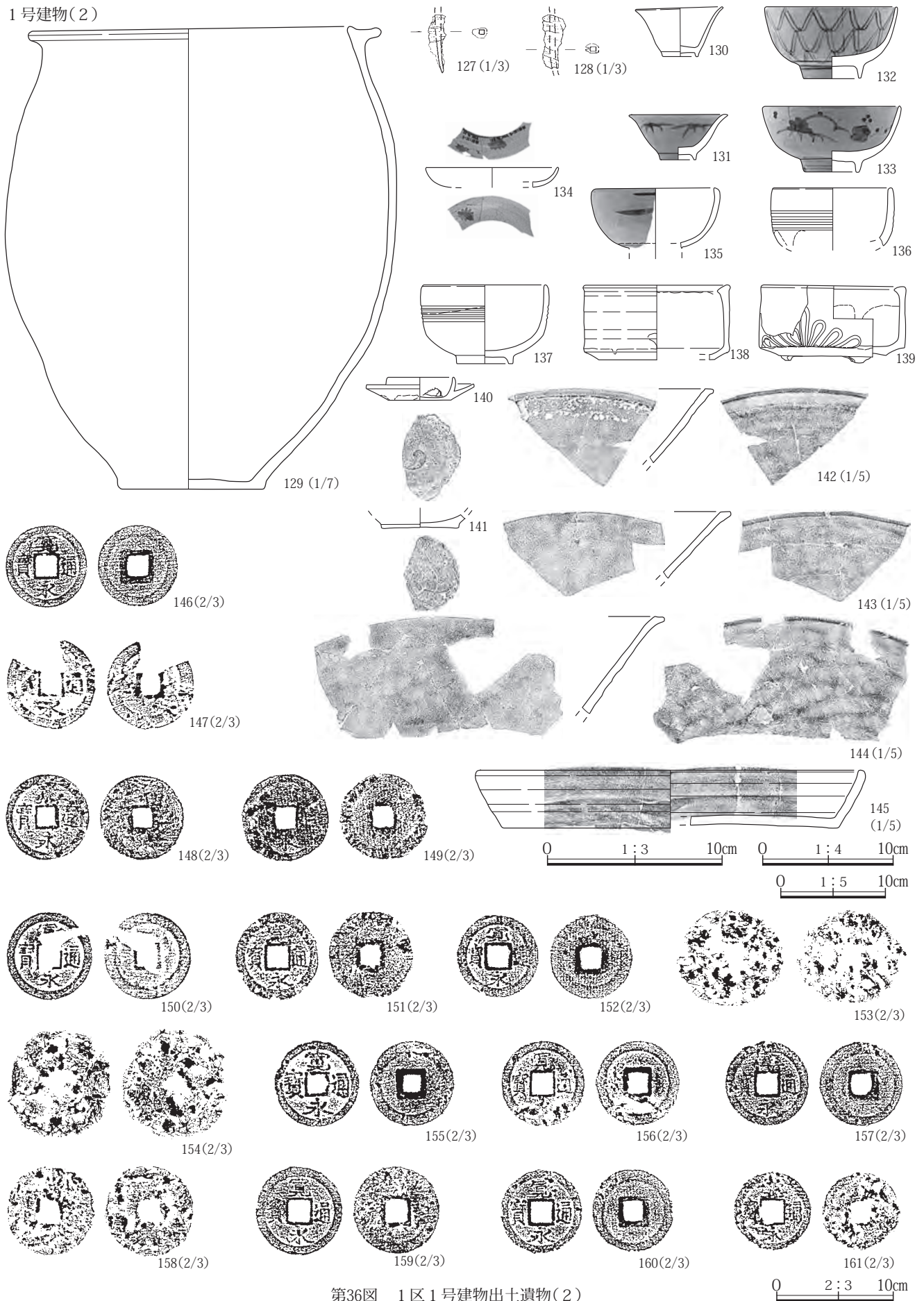
1号建物(1)
礎石



0 1:9 30cm

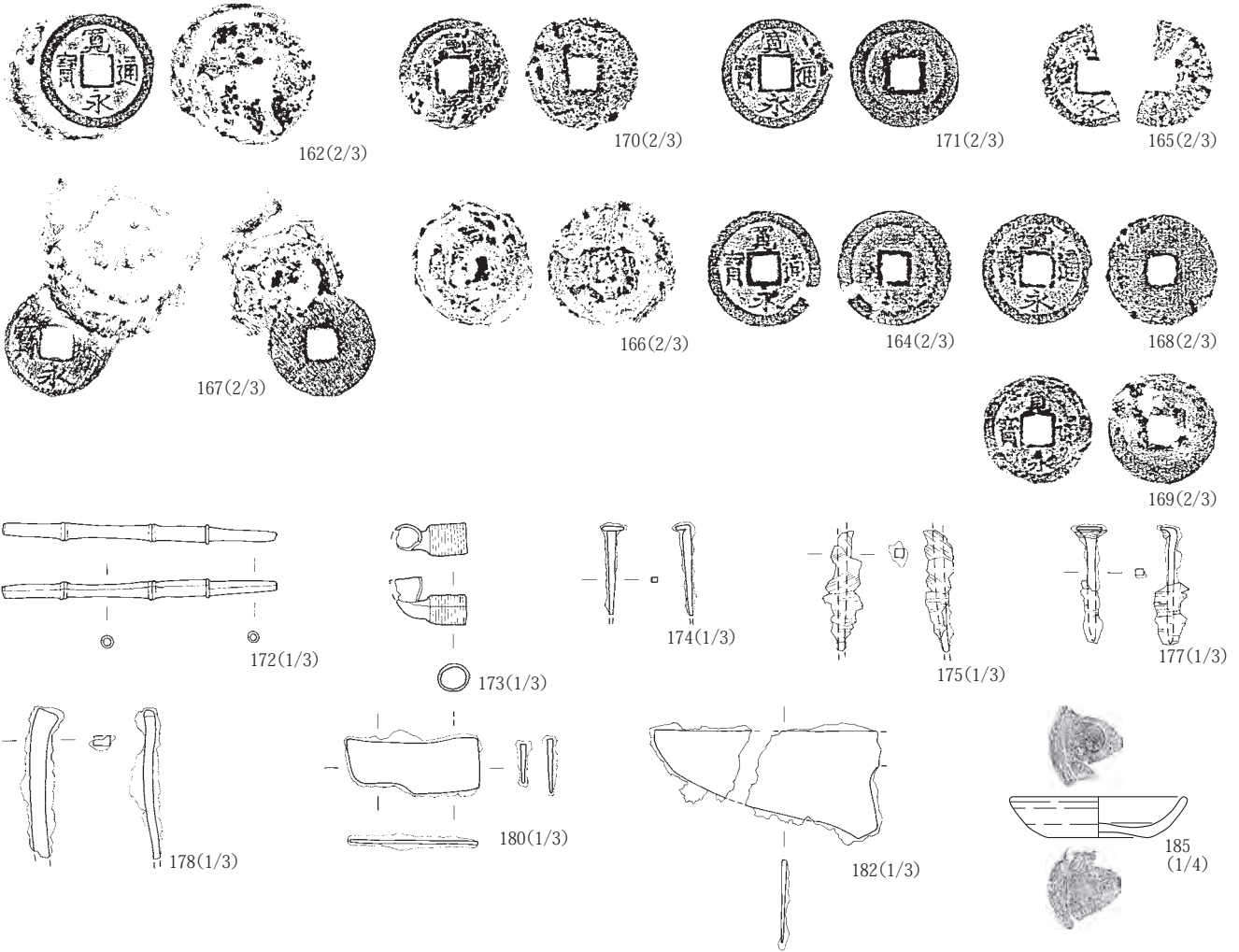
第35図 1区1号建物礎石

1号建物(2)

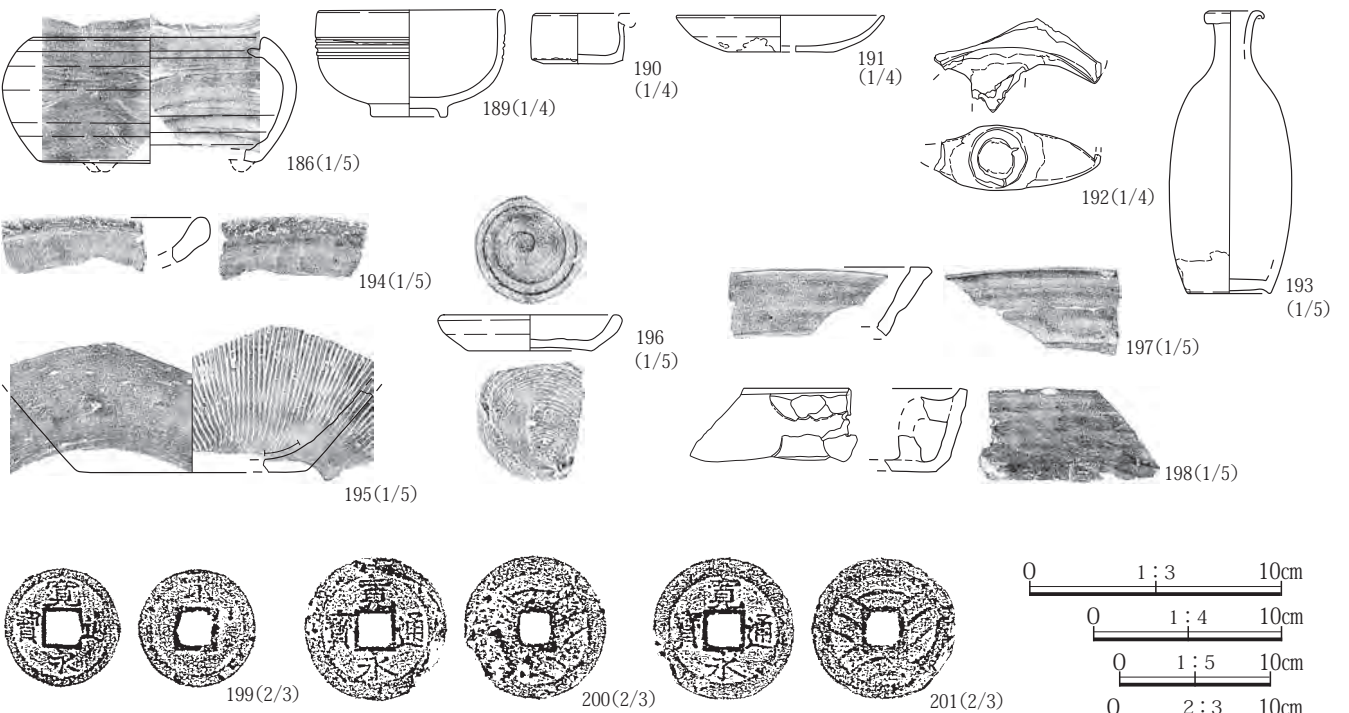


第36図 1区1号建物出土遺物(2)

1号建物(3)

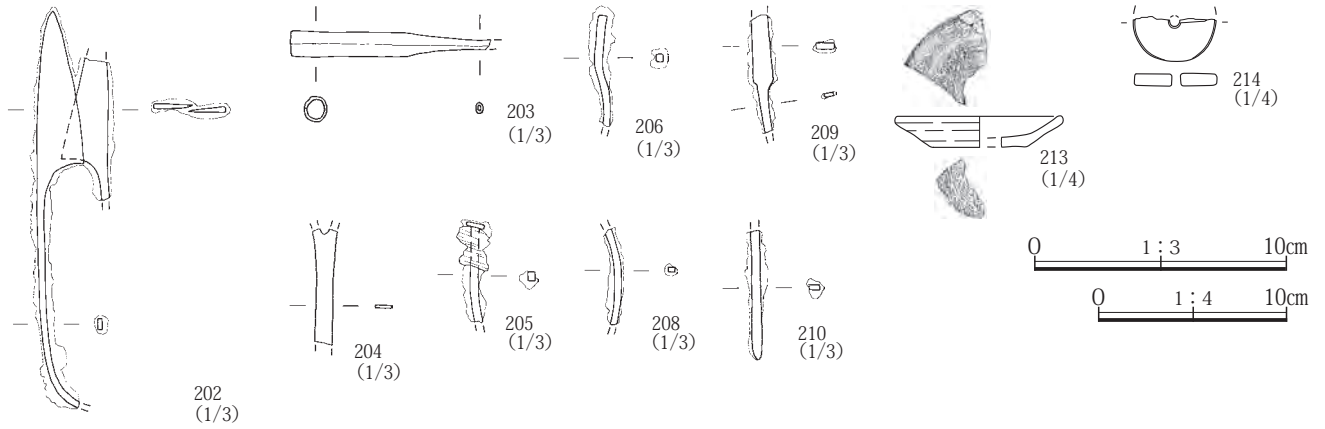


2号建物(1)



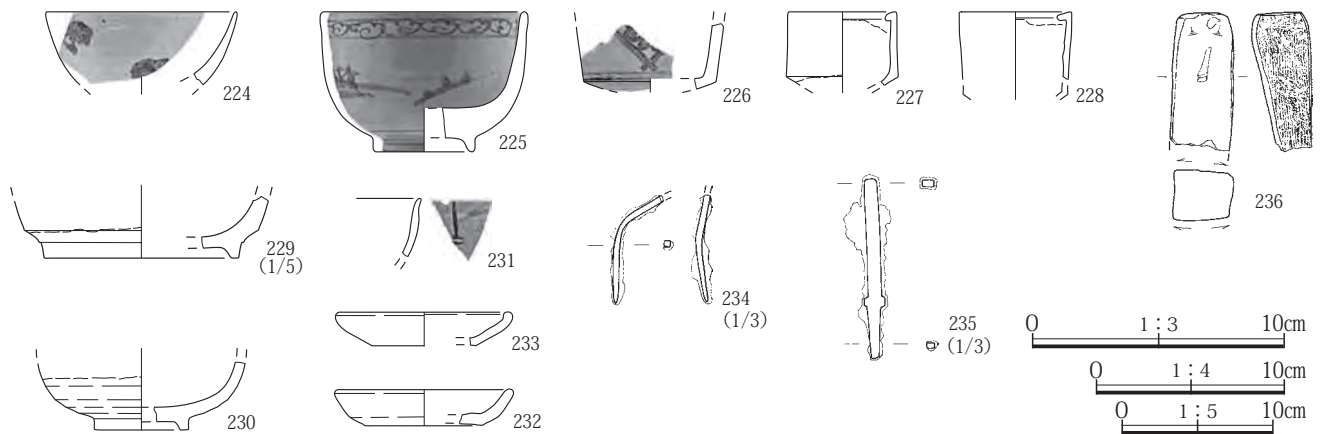
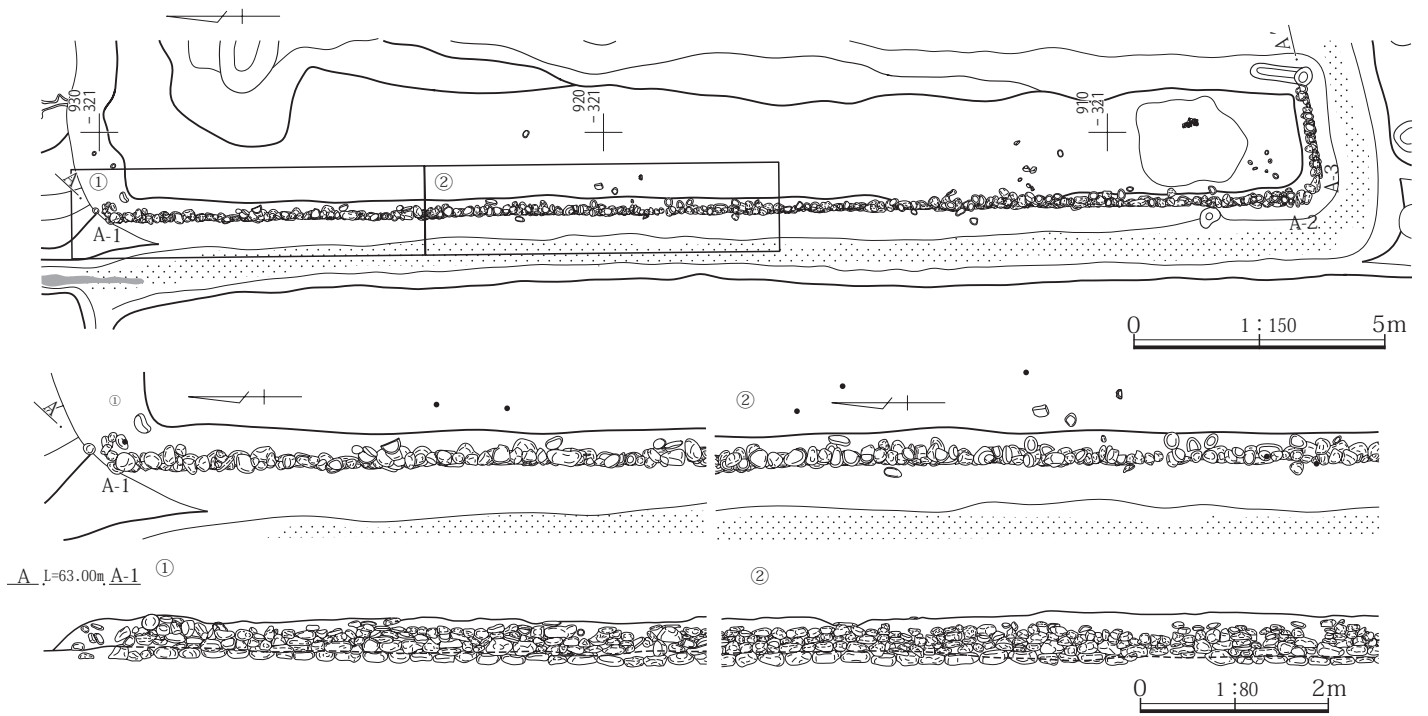
第37図 1区1号建物出土遺物(3)と2号建物出土遺物(1)

2号建物(2)



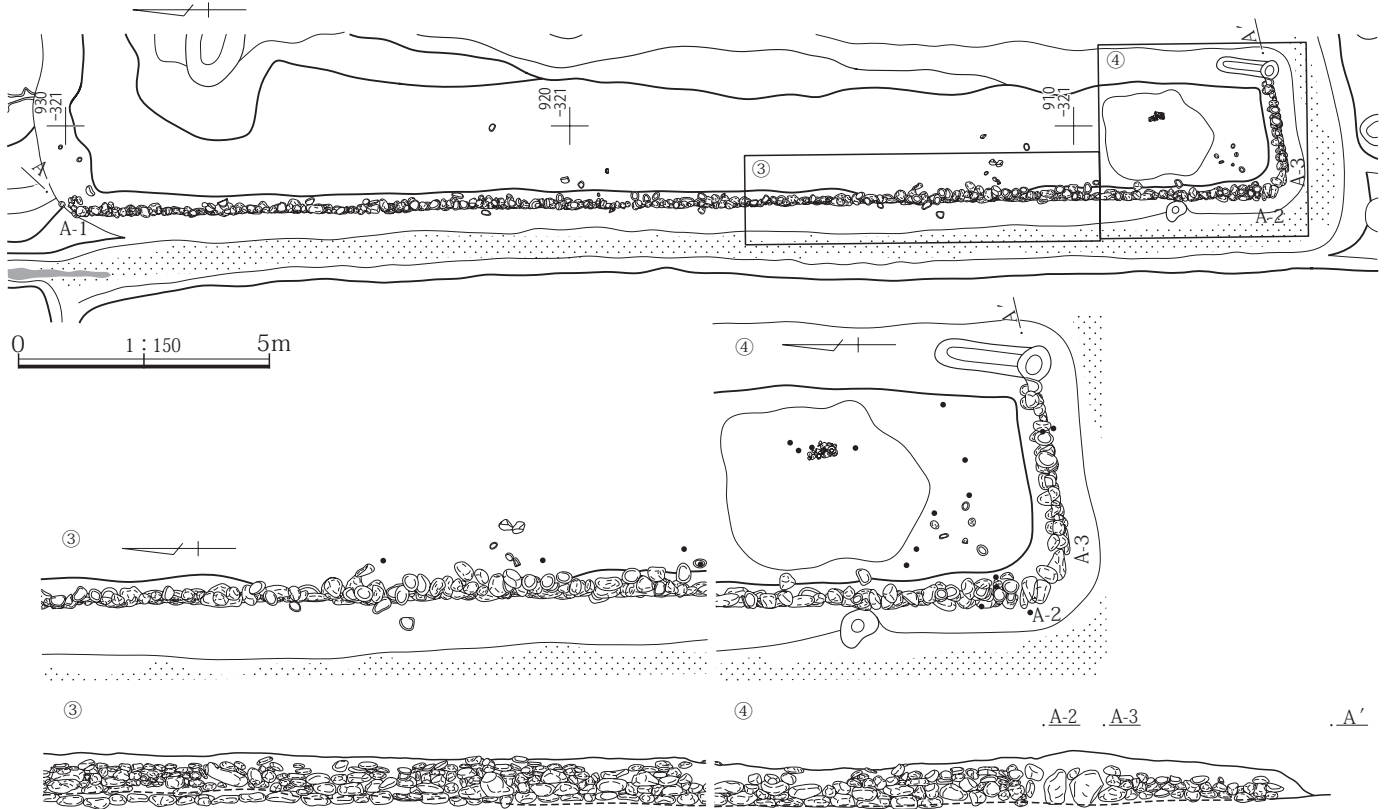
第38図 1区2号建物出土遺物(2)

1区1号土塁①②



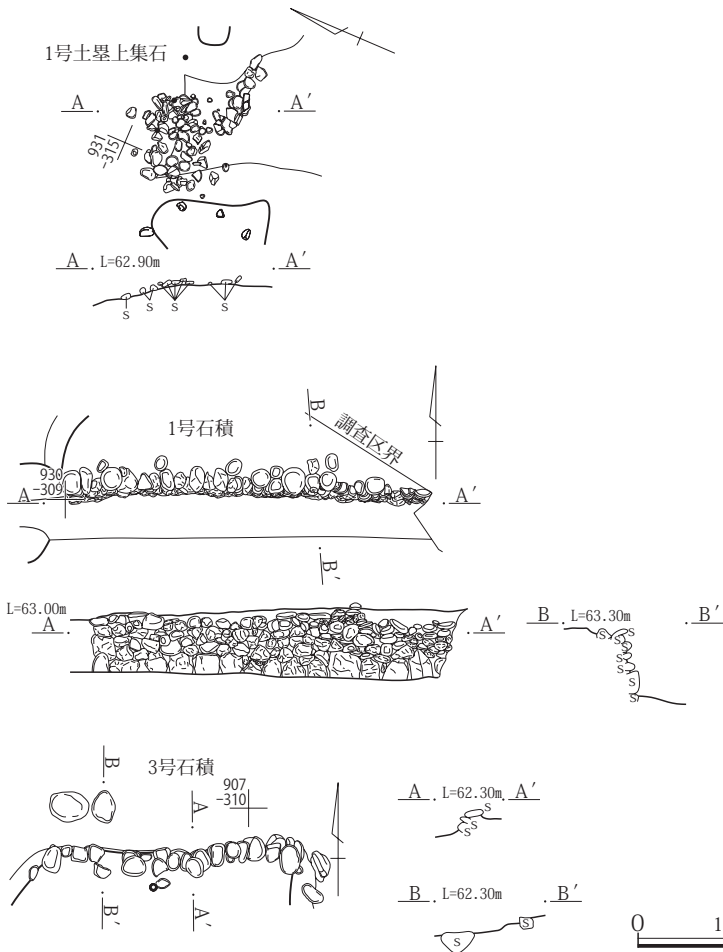
第39図 1区1号土塁北西部と出土遺物(位置は62頁第41図参照)

1区1号土塁③④



1区1号土塁上集石 1・3号石積

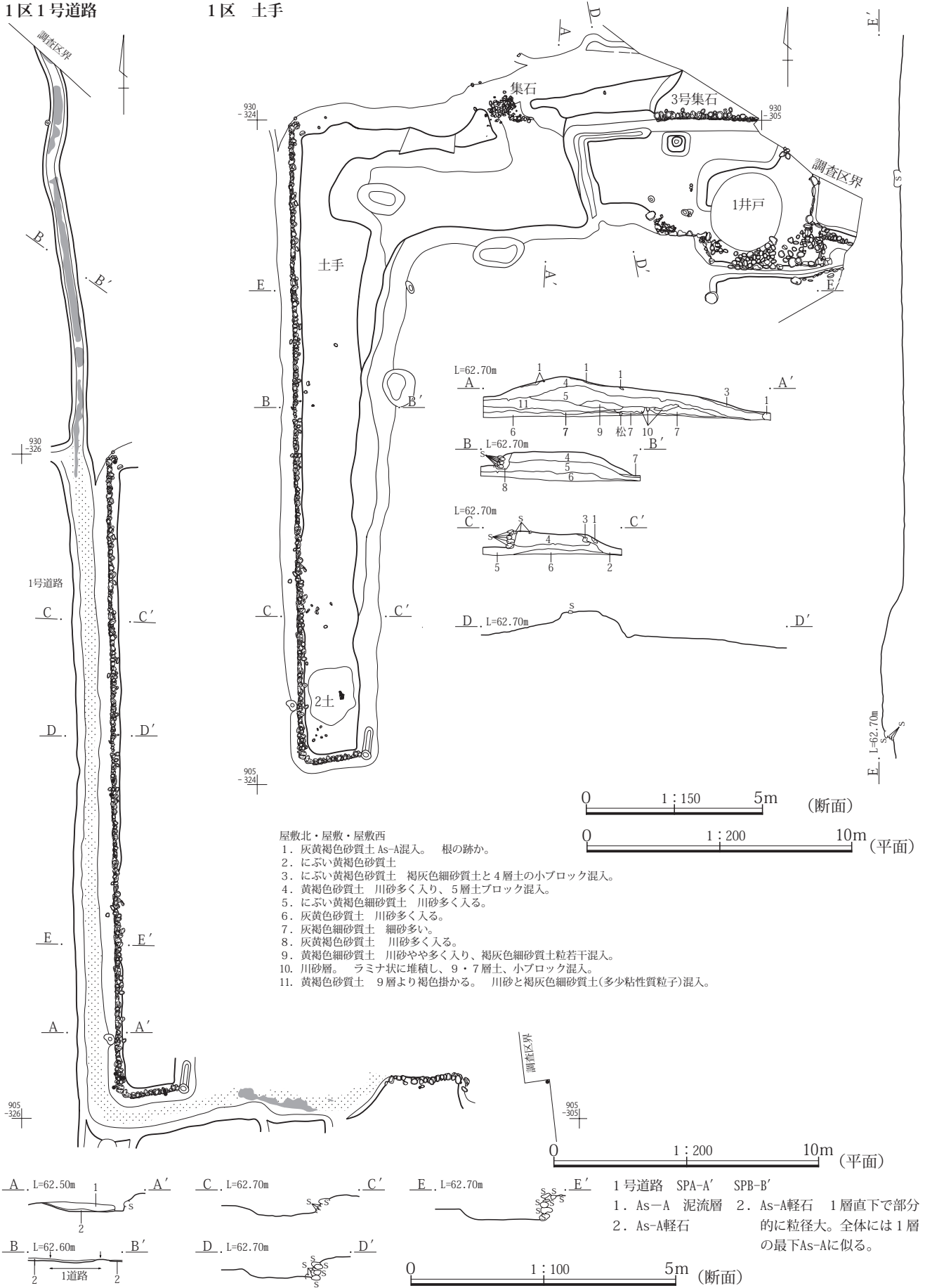
0 1:80 2m



第40図 1区1号土塁南部(上)と土塁上集石(中)及び3号石積

1区1号道路

1区 土手



第41図 1区1号道路と1号土塁

所見 植物同定により、土塁にはタケやマメガキが植えられていたことが確認された。

6. 1号井戸(第42～44図、PL. 4・25)

概要 本井戸は天明3年の泥流で埋没した井戸遺構である。本井戸は当初9号土坑として調査している。

位置 本井戸は屋敷北端部の中程に在り、925～923-304～306グリッドに位置する。

規模 径：315×270cm 深さ：388cm

構造 本井戸は井筒朝顔型の掘削形態を呈する。

径400cmで掘削し、泥流の痕跡から推して、1間程の幅を測る井筒を挿入し、その外部を埋め戻したものと思慮される。なお、底面に井桁に組んだマツ属の角材(237～240)が残る。

遺物 本井戸からは肥前系染付の碗(241～243)・筒形碗(244・245)・蓋(246)・蓋物と見られるもの(247)・端反碗(248)・碗(249)・小皿(250)・皿(251・252)・徳利(253)、瀬戸・美濃陶器皿(254)・腰鍔碗(261)・練鉢(262)・すり鉢(263)、同磁器染付端反碗(255～260)、堺・明石陶器すり鉢(264)、志戸呂陶器灯火受皿(265)、常滑陶器甕(266)、在地系土器焙烙(267・268)・置輪(269～271)、軒先瓦(272)、不明鉄製品(273)、砥石(274)が出土した。

7. 屋敷内の土坑(第44図、PL. 3)

概要 本屋敷内からは1～5号土坑が確認された。

位置 1号土坑は1号建物の調査範囲の北西隅部に、2号土坑は土塁南端近くに、3～5号土坑は2号建物南端部西寄りに位置し、隣接して掘削される。

規模 規模は表12に記した。

構造 平面形態は表12に記した。掘削形態は1・3～5号土坑は箱形を呈し、2号土坑はすり鉢状を呈する。

遺物 1号土坑からは在地系土器内耳鍋(275)、2号土坑からは在地系土器皿(276)が出土した。

所見 1号土坑は1号建物、3～5号土坑は2号建物に伴うものと思慮される。また2号土坑の掘削意図は不明であるが、土塁の職制に伴うものである可能性が考慮される。

このうち3号土坑と4号土坑の間には幅9cm、4号土坑と5号土坑の間には、幅24cmを測る障壁を隔てて掘削されていた。土層断面の観察では4、5、6号土坑の順

に新しいが、その覆土から推して、いずれもAs-A泥流が上記障壁を壊しながら埋没しており、西(3号土坑)から順に埋没していたものと判断される。

7. 屋敷内の出土遺物(第45図、PL.26)

上記以外の遺物には、建物に伴うものでは生産地不明の磁器ミニチュア(216)、鉄釘(217・218)、不明鉄製品、火打石があり、北端部の区画からは不明銅製品(215)の出土があった。この他、屋敷内からは、肥前磁器青磁染付碗(277・278)・染付碗(279)・染付小杯(280)、瀬戸・美濃陶器腰鍔碗(281～283)・柳碗(284)・灯火受皿(285)・筒型香炉(286)、堺・明石陶器すり鉢(287)、常滑陶器甕(288)、在地系土器焙烙(289・290)・壺と見られるもの(291)・蓋(292)、土人形(293)、寛永通宝(294)、キセル(295)、不明銅製品(296・297)、鉄釘(298～304)、不明鉄製品(305・306)、敲石(307・308)、凹石と見られる石製品(309)、不明石製品(310)、火打石(311)があった。

8. 1号道路(第41図、PL. 4)

概要 本道路は、1号屋敷の南東部から屋敷北東の竹藪あるいは利根川へ抜ける道路である。

位置 本道路は1区東部に在り、904～945-312～325グリッドに位置する。

本道路の中・南部の北は1号屋敷の2号建物、東には土塁、南と西には畑が近接し、北部は竹藪の間を抜ける。

重複 本道路は他遺構との重複はなかった。

規模 残長：52.4m 幅：61cm 深さ：-cm

覆土 本道路はAs-A軽石・泥流に覆われている。

構造 本道路は2号建物南東隅前から略南西方向に出て、2号建物沿いに直線的にN-85°-E、更に1号土塁沿いにN-1°-Wに走向を転じて直線的に走行する。北端近くでは蛇行しながら北側調査区外に抜けるが、北端部の走向はN-19°-Wに取る。

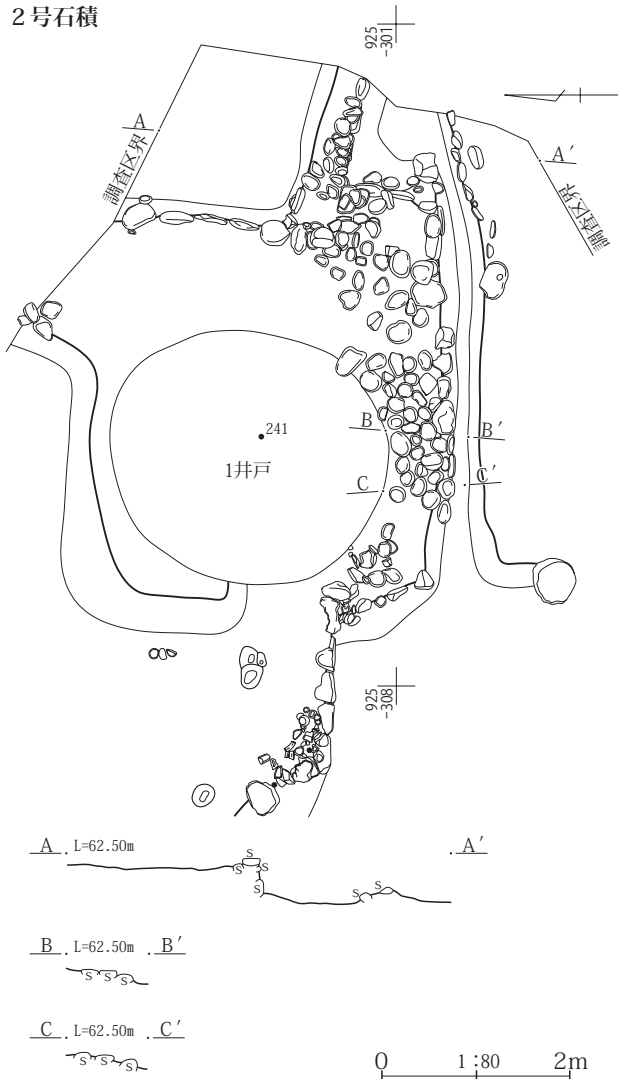
なお、東側の土塁下端から13cm、西の8号畑から22cm低い位置に在り、後述の竹藪の中では、5cm程周囲より低くなっている。

遺物 本道路からの遺物の出土はなかった。

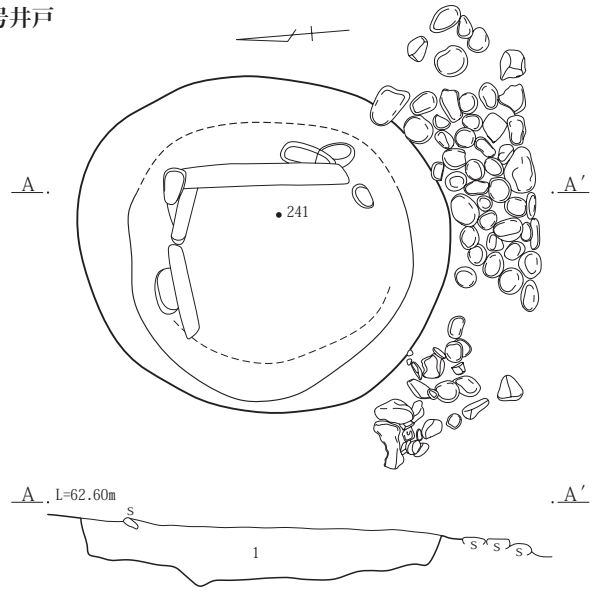
9. 1号溝(第46・48図、PL. 4・26)

概要 本溝は大規模な溝遺構であり、西あるいは南側の

2号石積

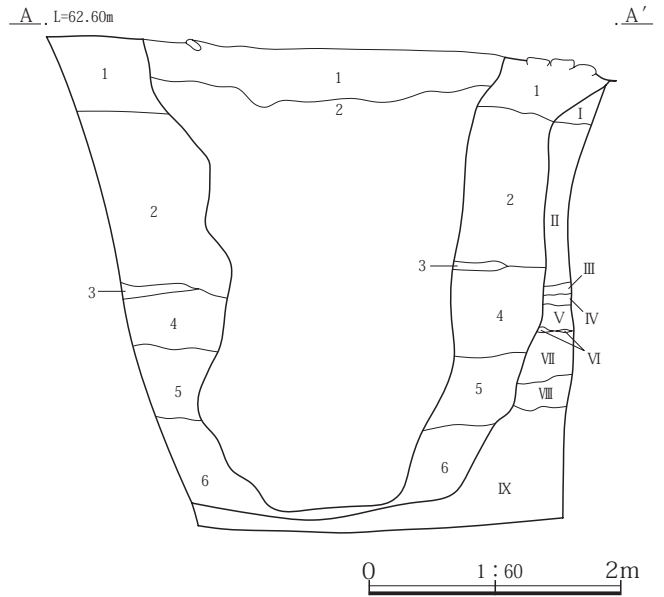


1区1号井戸



SPA-A'

1. にぶい黄色砂質土に、As-A流入、橙色砂質土、小ブロック、礫層入る混土。



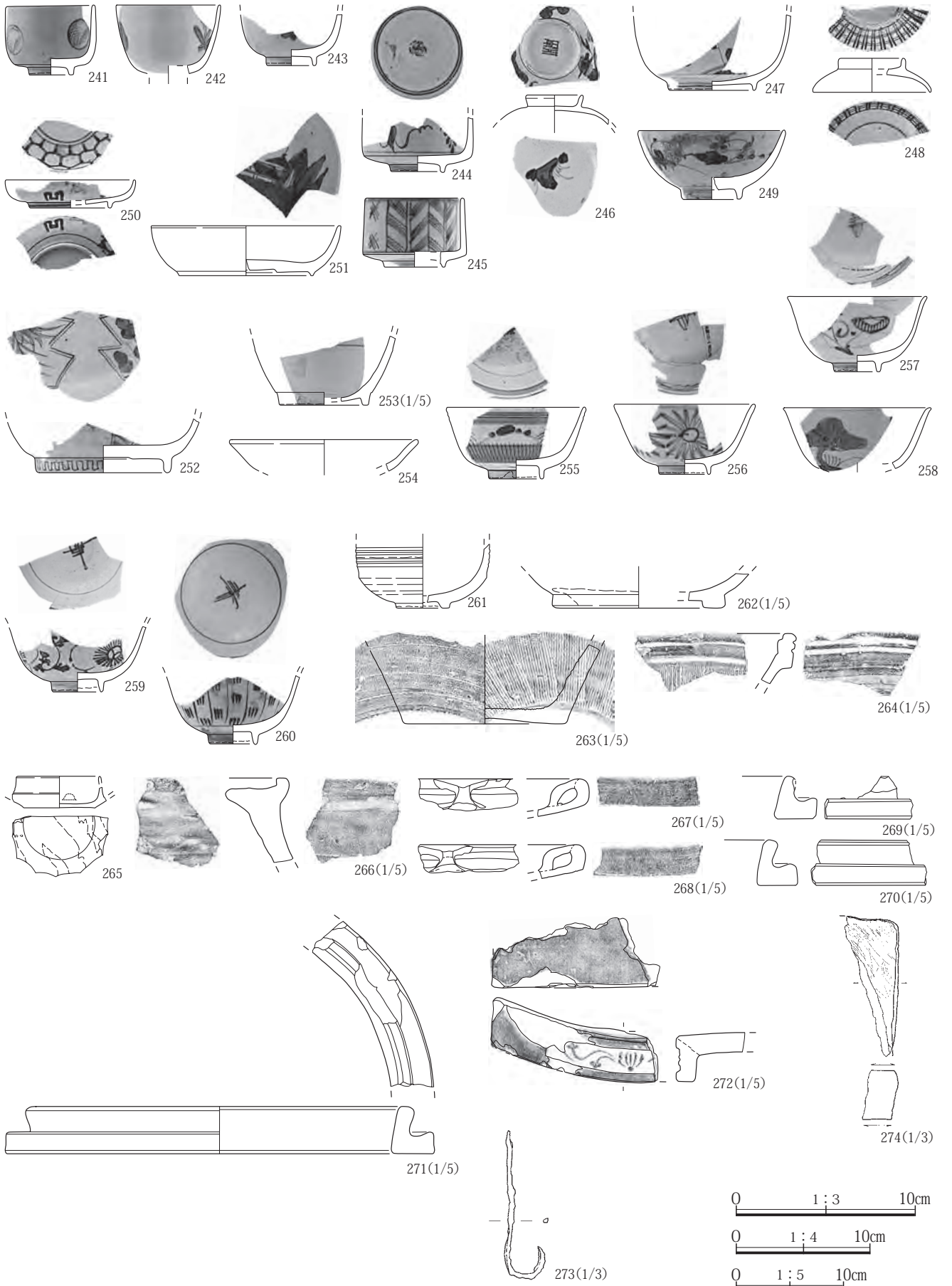
1号井戸

SPA-A'

1. にぶい黄色砂質土に、As-A流入、橙色砂質土、小ブロック、礫層入る混土。
2. 径20～30cm以下5～10cmの礫層：As-A混入。
3. 浅間石(天明泥流中の礫)。
4. にぶい黄橙色土 As-B 黄橙色ブロック土を含む。
5. にぶい黄橙色土 As-B やや黄橙色ブロック土多い。
6. 灰黄褐色土 As-Bを含む砂層ブロックを含まない。4～6が埋没した後一時、自然堆積したものか。
- I. 灰黄褐色土層 砂層。
- II. 灰黄褐色土層 ややしまる砂層。
- III. 灰黄褐色土層 粘土質、As-B混土。
- IV. 黒褐色土層 As-B混土層(IIIとIV層の間がAs-B層層当面)
- V. 褐灰色土層 粘土質。
- VI. FAか? 明黄褐色土層
- VII. 暗褐色土層 やや砂質であるがしまりあり。As-C混土。
- VIII. にぶい黄橙色土 粘土質。しまりあり。
- IX. 明黄褐色～灰白色土 しまりあり、粘質。最下層は灰白色土。(灰白色土層は前橋泥流相当か?)

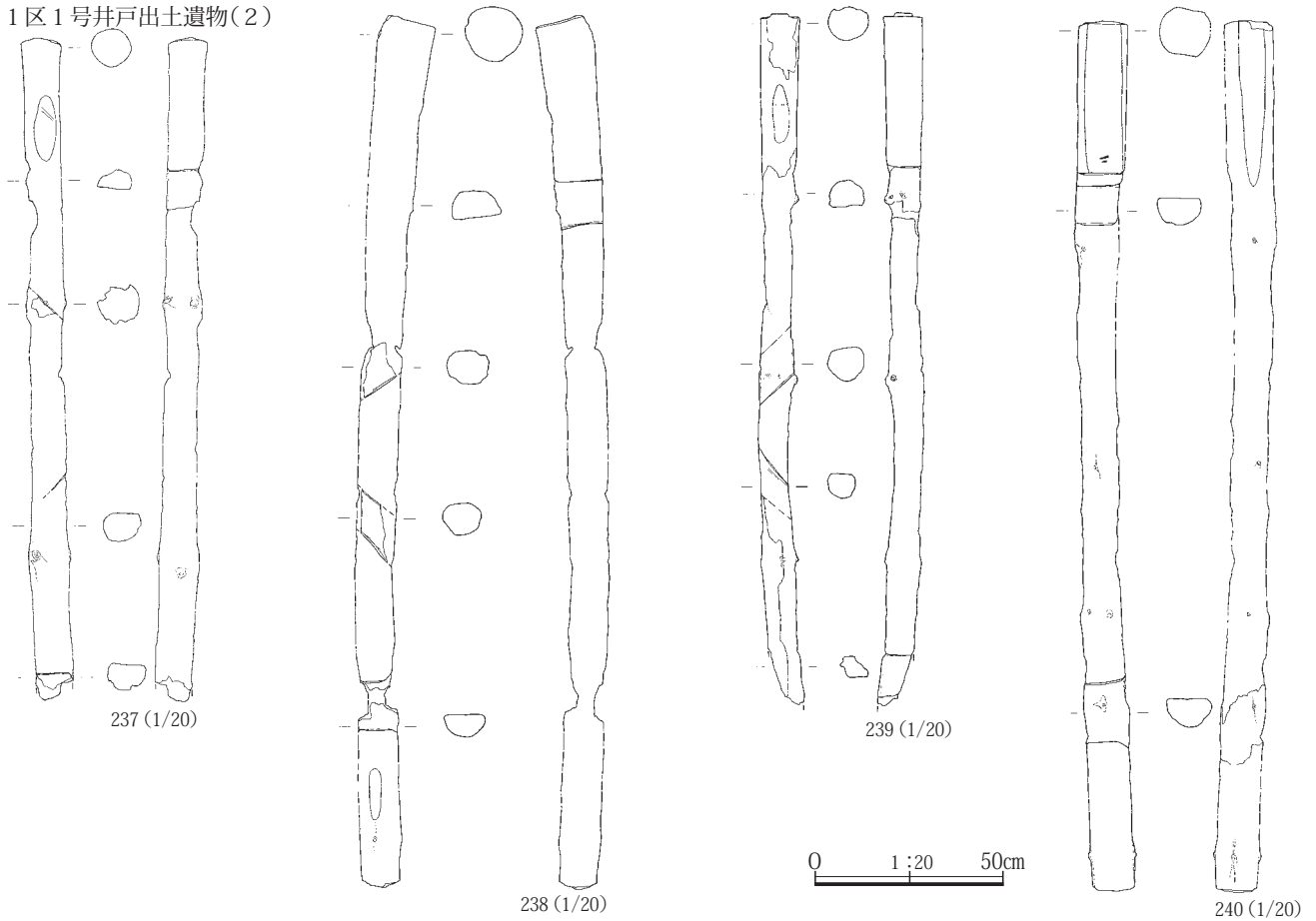
第42図 1区1号土塁2号石積と1区1号井戸

1区1号井戸出土遺物(1)

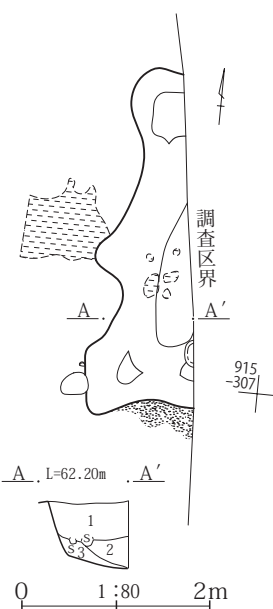


第43図 1区1号井戸出土遺物(1)

1区1号井戸出土遺物(2)



1号土坑

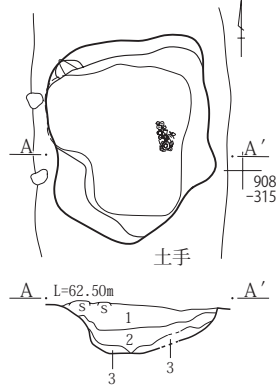


- 1号土坑 SPA-A'
1. 円礫主体 直径2~15cm程、天明泥流に含まれる円礫のみが含まれる。礫間層に土砂の混入がなくスカスカ。
 2. にぶい黄褐色土 砂質土(地山の黄褐色土層の崩落) 天明泥流を多く含む。
 3. にぶい黄褐色土 天明泥流を少量含む。

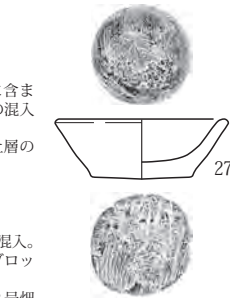
2号土坑 SPA-A'

1. 浅間石中心の礫層: 径大2層土とAs-A泥流混入。
2. 黄褐色石細砂質土 地山層土As-A泥流小ブロック混入。
3. As-A泥流層土と2層土のブロック混土。2号畑

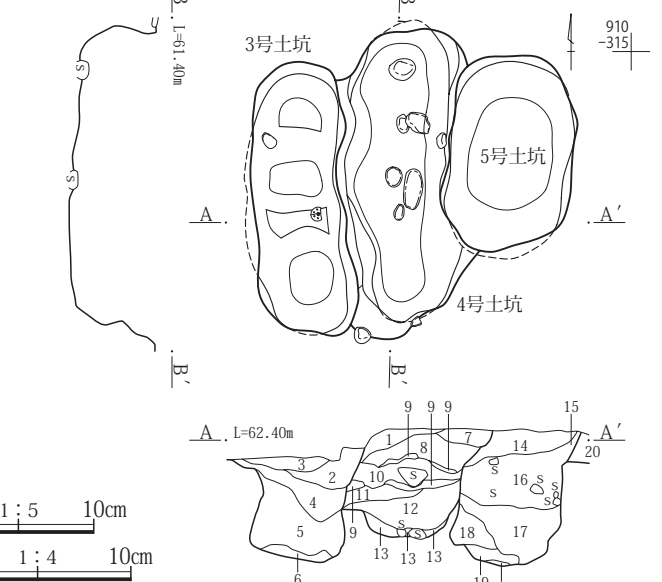
2号土坑



1区1、2号土坑出土遺物



3~5号土坑

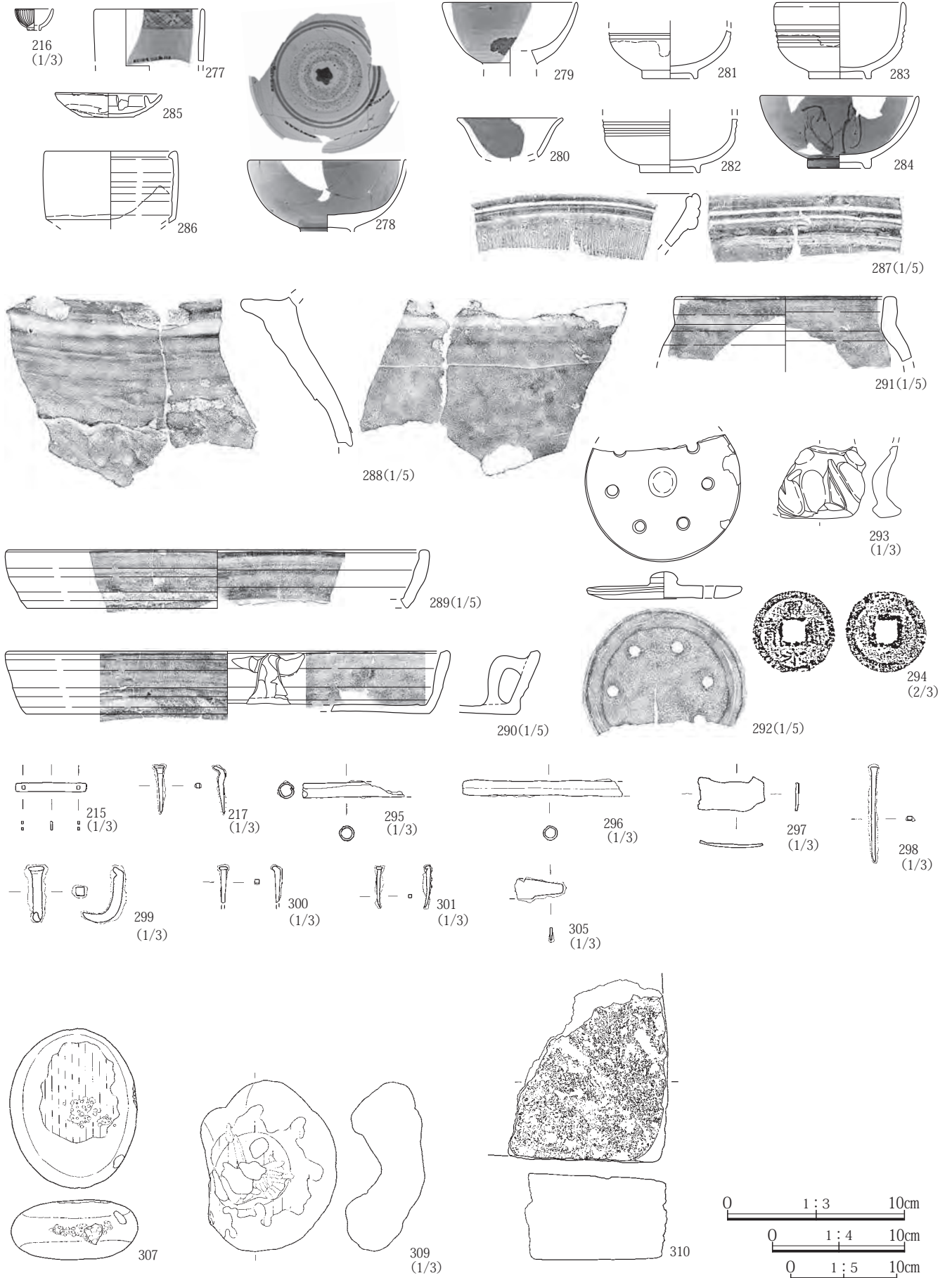


3・4・5号土坑 SPA-A'

1. にぶい黄褐色土 砂質しまりなし。天明泥流、As-A下の洪水土層。
2. 黒褐色土 礫多くしまる。(天明泥流) 1層をブロック状に極少量含む。
3. 黒褐色土 礫多くしまる。(天明泥流) 1層をブロック状に極少量含む。AS-A含む。
4. 黒褐色土 礫多くしまる。(天明泥流) 1層をブロック状に極少量含む。AS-Aは含まない。
5. 黒褐色土 礫ほとんどない。(天明泥流) 1層をブロック状に極少量含む。AS-Aは含まない。
6. 灰褐色(As-A)土 AS-A主体。
7. 2層と同じだが、1層のブロックがやや多い。
8. 2層とほぼ同じ。
9. 2層とAs-A As-A主体。
10. 4層とほぼ同じ。
11. 5層とほぼ同じで、1層のブロック土がやや多い。
12. 5層とほぼ同じで、1層のブロック土がやや多い。
13. 1層が主体。As-A、黒褐色の天明泥流を少量ブロック状に含む。
14. 1層と同じ。極少量の天明泥流、黒褐色土をブロック状に含む。
15. 1層と同じ。
16. 2層と同じ。
17. 5層と同じ。
18. 11層と同じ。
19. 18層と同じで、As-Aを少量含む。
20. 黒褐色土 礫多くしまる。(天明泥流)

第44図 1区1号井戸出土遺物(2)及び1~5号土坑と出土遺物

屋敷内出土遺物



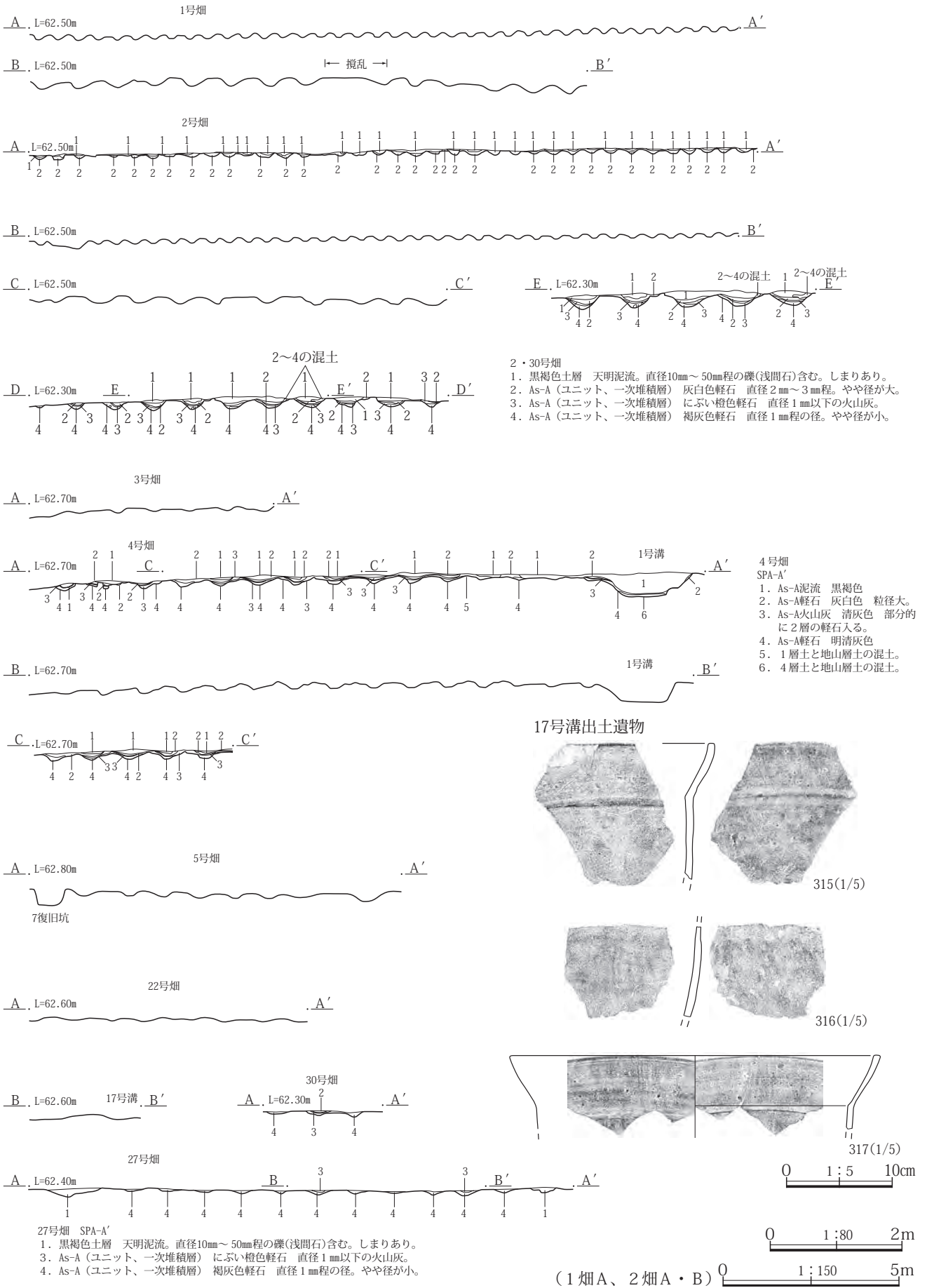
第45図 1区屋敷内出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

1区1~5・22・27・30号畑

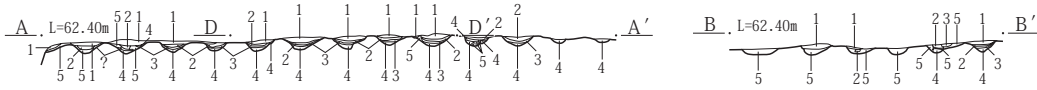


第46図の1 1区1・17・18号溝と1号溝出土遺物及び1~5・22・27・30号畑



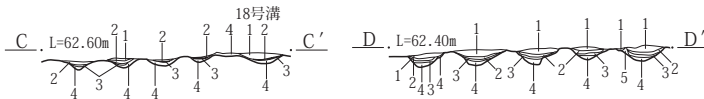
第46図の2 1区17号溝出土遺物及び1～5・22・27・30号畑土層断面

6号畑

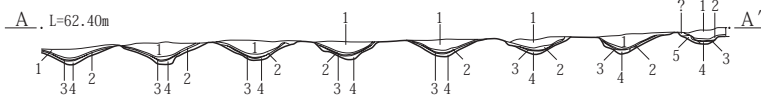


6号畑

1. 黒褐色土層 天明泥流。直径10mm～50mm程の礫(浅間石)含む。しまりあり。
2. As-A (ユニット、一次堆積層) 灰白色軽石 直径2mm～3mm程。やや径が大。
3. As-A (ユニット、一次堆積層) しぶい橙色軽石 直径1mm以下の火山灰。
4. As-A (ユニット、一次堆積層) 褐灰色軽石 直径1mm程の径。やや径が小。
5. 明黄褐色土 洪水層起源の土とAs-Aの混土。

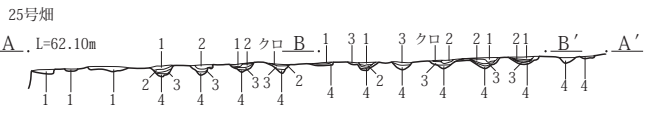
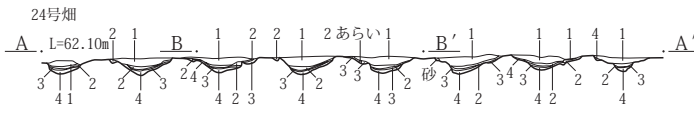
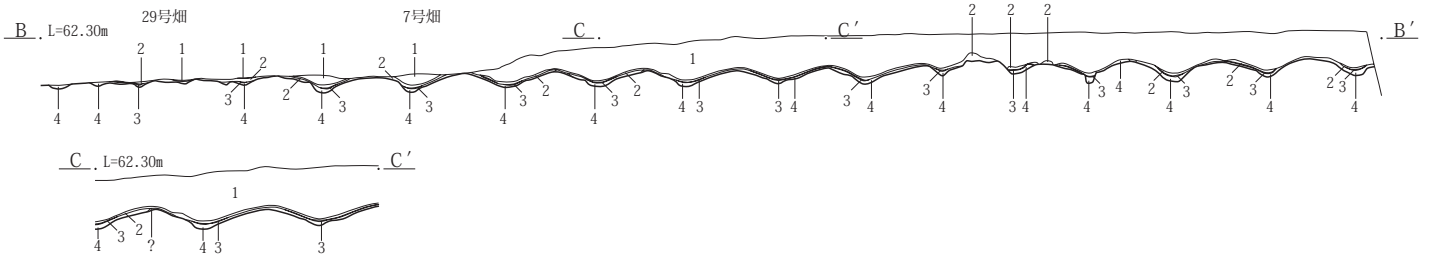


7号畑



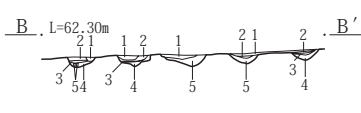
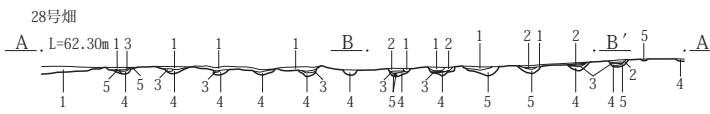
7号畑

1. 黒褐色土層 天明泥流。直径10mm～50mm程の礫(浅間石)含む。しまりあり。
2. As-A (ユニット、一次堆積層) 灰白色軽石 直径2mm～3mm程。やや径が大。
3. As-A (ユニット、一次堆積層) しぶい橙色軽石 直径1mm以下の火山灰。
4. As-A (ユニット、一次堆積層) 褐灰色軽石 直径1mm程の径。やや径が小。
5. 明黄褐色土 洪水層起源の土とAs-Aの混土。



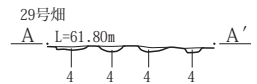
24号畑、25号畑

1. 黒褐色土層 天明泥流。直径10mm～50mm程の礫(浅間石)含む。しまりあり。
2. As-A (ユニット、一次堆積層) 灰白色軽石 直径2mm～3mm程。やや径が大。
3. As-A (ユニット、一次堆積層) しぶい橙色軽石 直径1mm以下の火山灰。
4. As-A (ユニット、一次堆積層) 褐灰色軽石 直径1mm程の径。やや径が小。
5. 明黄褐色土 洪水層起源の土とAs-Aの混土。



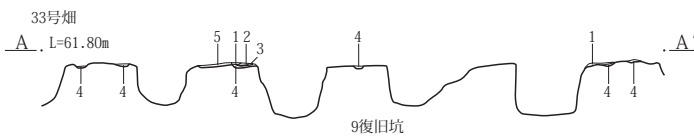
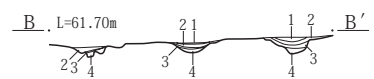
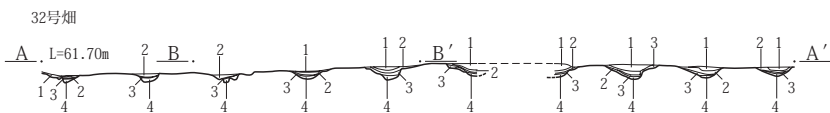
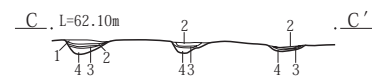
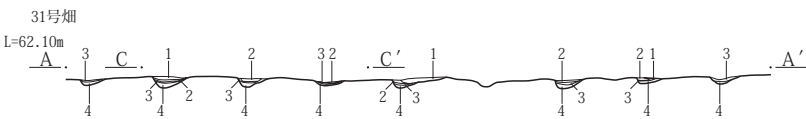
28号畑

1. 黒褐色土層 天明泥流。直径10mm～50mm程の礫(浅間石)含む。しまりあり。
2. As-A (ユニット、一次堆積層) 灰白色軽石 直径2mm～3mm程。やや径が大。
3. As-A (ユニット、一次堆積層) しぶい橙色軽石 直径1mm以下の火山灰。
4. As-A (ユニット、一次堆積層) 褐灰色軽石 直径1mm程の径。やや径が小。
5. 明黄褐色土 洪水層起源の土とAs-Aの混土。



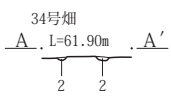
29号畑

4. As-A (ユニット、一次堆積層) 褐灰色軽石 直径1mm程の径。やや径が小。



31号畑～33号畑

1. 黒褐色土層 天明泥流。直径10mm～50mm程の礫(浅間石)含む。しまりあり。
2. As-A (ユニット、一次堆積層) 灰白色軽石 直径2mm～3mm程。やや径が大。
3. As-A (ユニット、一次堆積層) しぶい橙色軽石 直径1mm以下の火山灰。
4. As-A (ユニット、一次堆積層) 褐灰色軽石 直径1mm程の径。やや径が小。
5. 明黄褐色土 洪水層起源の土とAs-Aの混土。



34号畑

2. As-A。粒子やや小さい。直径1mm程度。

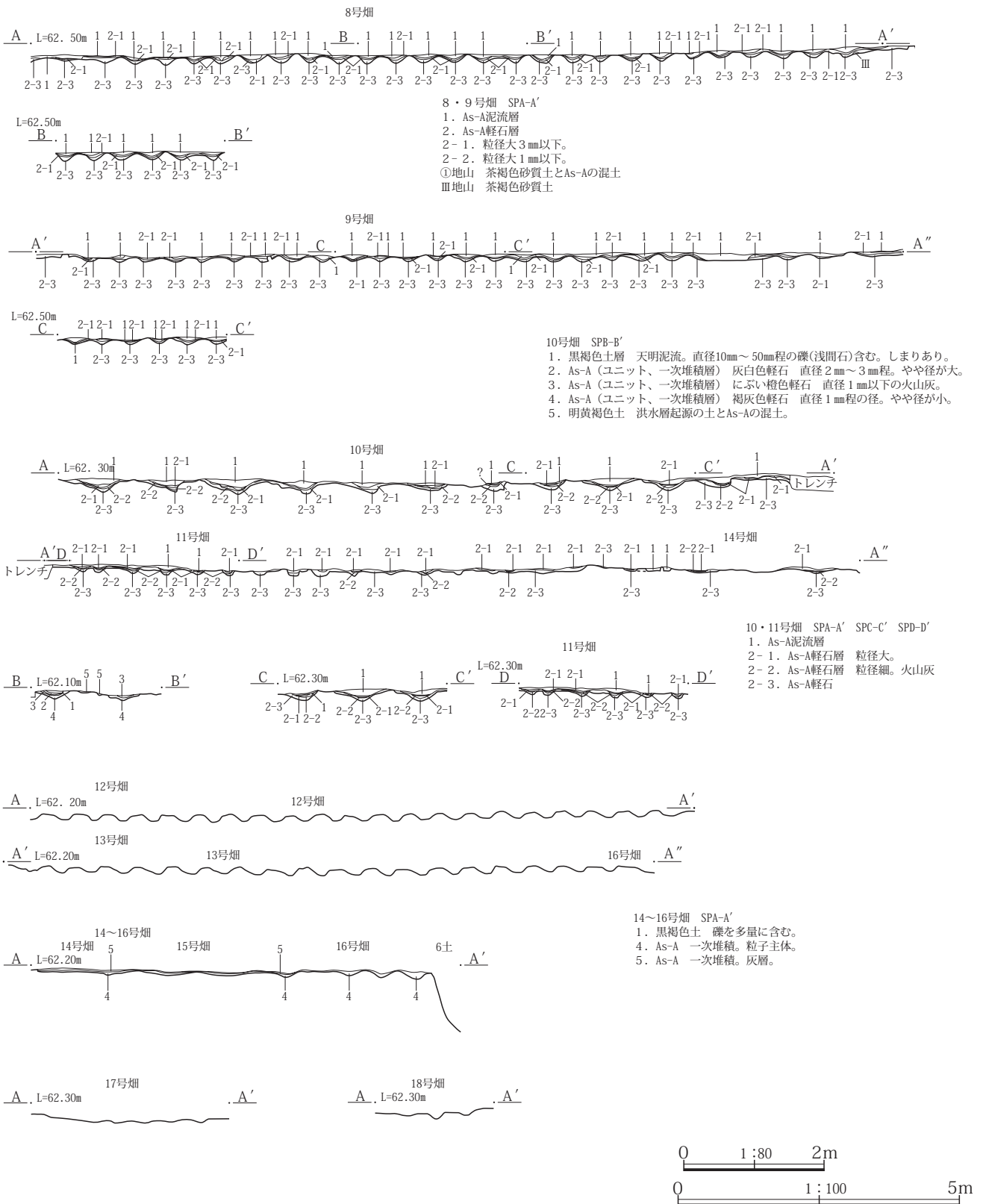


第47図の2 1区6・7・24～26・28・29・31～34号畑土層断面

1区8~18号畑・1号溝

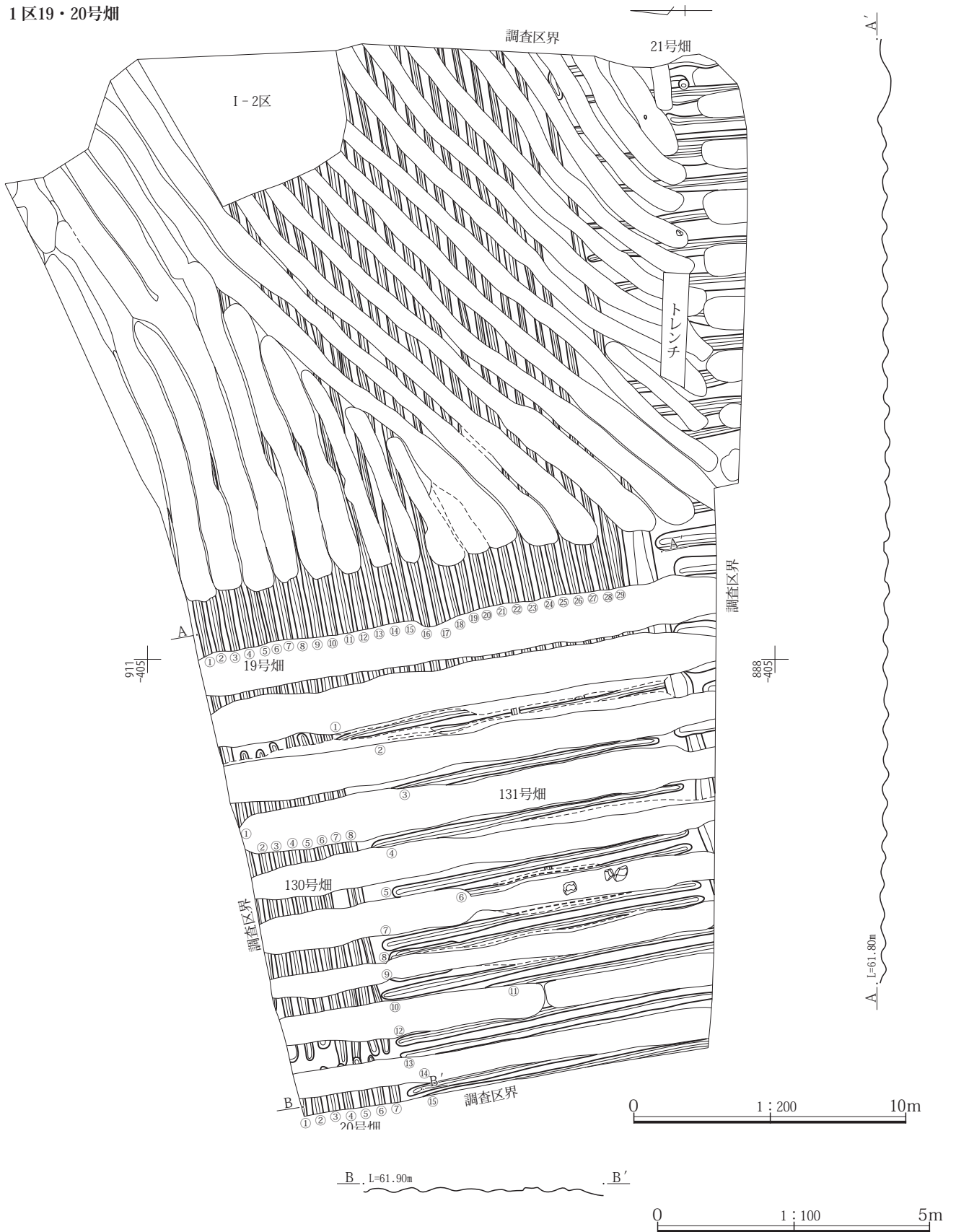


第48図の1 1区1号溝及び8~18号畑



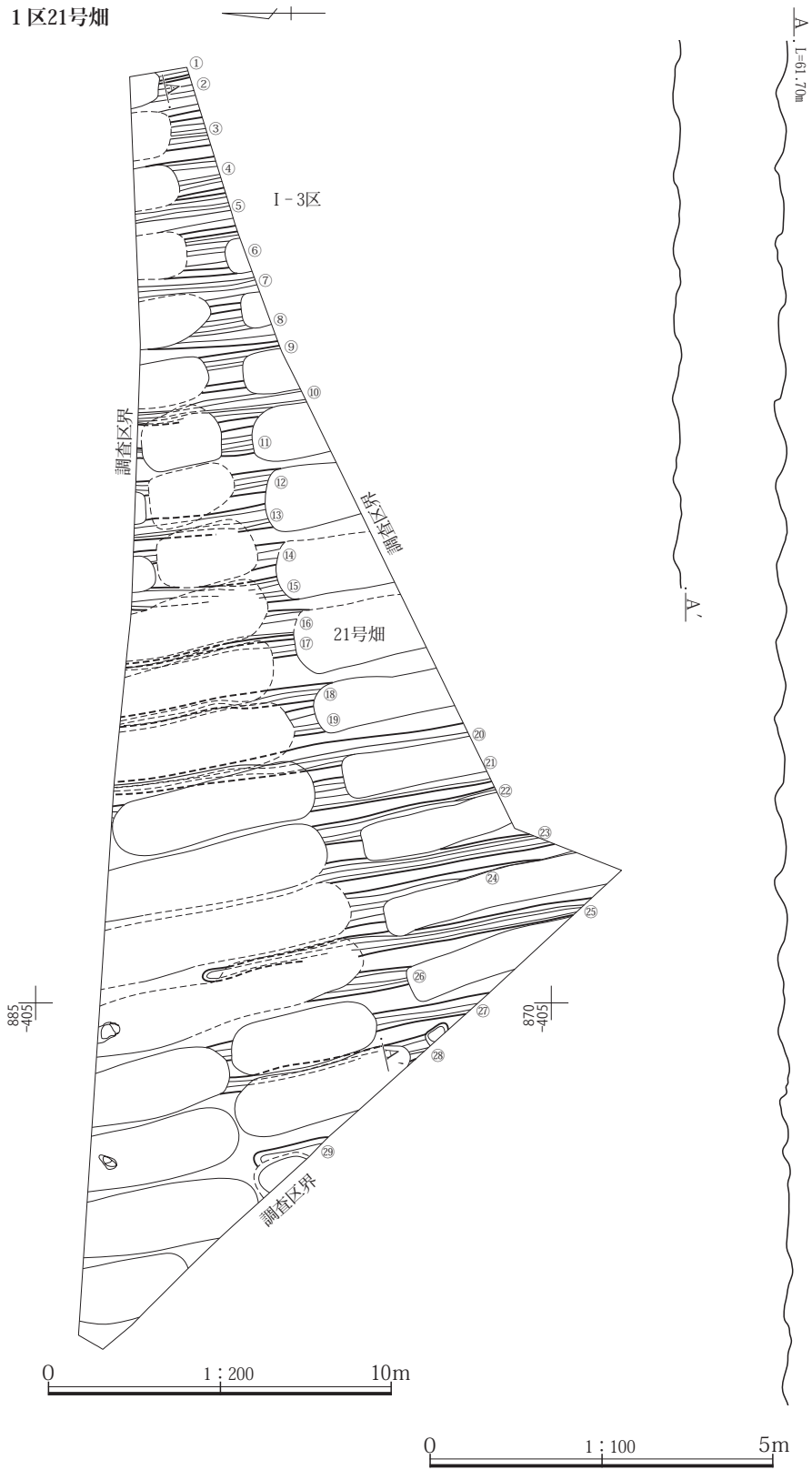
第48図の2 1区8～18号畑土層断面

1区19・20号畑



第49図 1区(1-2区)19・20号畑

1区21号畑



第50図 1区(1-3区)21号畑

第3章 発見された遺構と遺物

表4 1区1面下位面As-A下畑一覽

番号	所在グリッド	主軸方位	東西×南北(m)	サク								畝間(cm)		
				条数	掘削間隔(cm)	(平均)	長さ(m)	(平均)	幅(cm)	(平均)	深さ(cm)	(平均)	(平均)	
1	935～974-362～370	N-15°-E	7.35 × 39.13	72	47～70	54.81	—～—	—	26～47	40.54	4～11	13.04	6～34	14.19
2	934～974-360～368	N-08°-E	10.23 × 39.55	69	47～70	55.57	2.78～10.09	5.61	16～48	38.82	6～15	12.29	7～80	17.75
3	960～963-343～346	N-78°-W	3.13 × 2.33	9	32～60	46.38	—～—	—	21～33	24.38	3～8	5.44	6～34	19.40
4	948～961-338～346	N-10°-E	8.14 × 12.36	27	48～59	54.63	11.84～11.91	11.88	13～42	27.65	3～12	6.26	4～30	16.00
5	929～934-336～347	N-82°-W	10.68 × 4.65	7	51～71	58.08	9.81～9.81	9.81	31～41	35.57	8～10	9.17	12～35	32.00
6	920～934-336～350	N-83°-W	13.28 × 11.96	24	48～72	58.02	1.78～10.89	8.40	29～43	36.92	8～19	13.21	13～37	20.91
7	893～920-336～351	N-05°-W	14.56 × 26.24	24	79～208	123.71	6.85～14.52	10.90	44～167	86.43	9～32	19.63	18～63	37.64
8	900～915-323～336	N-05°-E	12.30 × 15.26	29	42～59	51.98	5.47～12.04	11.09	21～42	33.23	5～15	11.87	7～26	18.29
9	915～930-324～336	N-02°-E	12.27 × 15.22	28	42～56	51.20	3.45～12.02	10.88	27～47	32.97	5～15	9.69	9～23	17.68
10	890～900-320～334	N-04°-E	14.08 × 9.85	23	79～87	83.00	8.06～9.78	9.05	24～82	44.27	6～21	14.00	12～51	17.14
11	889～900-310～319	N-02°-E	9.22 × 9.73	28	35～63	44.64	5.12～9.59	8.77	23～44	31.11	2～16	7.46	5～27	4.52
12	888～891-321～335	N-87°-W	(14.40) × 2.71	23	51～61	54.26	—～—	—	14～44	33.13	7～13	11.04	16～38	17.93
13	886～891-310～321	N-87°-W	10.91 × (4.07)	20	48～61	56.43	—～—	—	30～49	37.89	6～15	11.95	9～33	17.16
14	894～900-305～310	N-06°-W	4.23 × (5.70)	5	51～119	87.31	—～—	—	23～85	64.10	3～25	6.60	4～34	17.20
15	892～895-305～310	N-90°	5.33 × 2.63	4	89～98	93.50	—～—	—	28～73	62.13	5～8	6.75	13～26	12.83
16	891～897-305～310	N-02°-W	5.53 × 5.47	13	33～60	52.53	—～—	—	17～45	32.73	1～17	8.77	8～29	15.88
17	903～905-309～311	N-88°-W	2.59 × 2.33	5	47～51	49.50	2.3～2.54	2.49	28～43	32.80	4～7	5.20	12～21	13.60
18	900～902-311～317	N-88°-W	5.92 × 1.65	3	51～54	52.38	5.47～5.79	5.68	33～45	34.50	7～12	10.00	17～18	17.50
19A	892～910-382～419	N-80°-E	39.4 × 16.95	11	52～59	55.54	11.37～11.55	11.49	29～98	39.20	5～15	8.91	17～42	17.29
19B				32	51～61	56.39			28～57	33.26	7～16	9.95	17～46	22.47
19C				33	46～61	56.47			15～38	27.75	4～10	6.40	12～46	27.17
20	900～905-419～421	N-08°-W	(2.29) × (3.70)	7	54～64	57.40	—～—	—	28～40	34.83	3～10	7.14	17～28	19.29
21	868～882-377～409	N-82°-E	(31.80) × (14.16)	28	74～136	97.95	—～—	—	35～90	57.28	9～16	12.25	8～68	38.00
22	943～947-346～348	N-07°-E	1.66 × 4.24	8	54～59	56.17	—～—	—	27～40	36.36	3～8	5.13	17～23	17.44
24	921～935-362～371	N-4°-E	9.13 × 13.70	9	100～108	104.75	11.32～13.44	12.71	59～90	81.44	7～23	17.80	13～29	18.78
25	914～921-362～370	N-88°-E	8.15 × 6.81	13	50～65	55.04	7.76～8.08	7.92	19～38	29.92	7～12	9.08	18～39	22.46
26	913～921-370～371	N-0°	(1.24) × 8.23	14	47～60	53.83	—～—	—	12～29	22.07	3～11	5.69	21～41	28.62
27	935～942-347～348	N-06°-E	(1.16) × 6.64	12	42～61	54.86	—～—	—	29～44	35.92	3～10	5.75	8～34	17.42
28	926～934-349～362	N-85°-W	13.60 × 8.05	14	51～62	57.77	10.56～13.56	12.24	27～49	33.25	6～14	11.14	8～41	22.62
29	888～893-336～348	N-90°	11.68 × (4.35)	10	29～62	47.28	11.15～11.58	11.40	8～45	24.00	3～8	5.50	8～35	20.05
30	934～937-348～357	N-84°-W	9.67 × (2.33)	5	41～59	51.38	—～—	—	14～41	21.80	5～7	5.80	23～34	23.70
31	904～912-350～361	N-0°	11.56 × (17.64)	12	80～112	100.61	—～—	—	22～37	31.38	2～13	7.75	51～93	63.17
32	893～904-361～371	N-80°-E	10.48 × 10.08	11	58～115	100.05	9.83～10.22	10.04	37～63	44.27	12～18	14.36	13～77	50.14
33	889～902-348～361	N-82°-E	12.58 × 12.40	17	54～54	53.50	11.31～11.95	11.63	9～27	18.40	2～7	5.27	30～34	13.85
34A	906～908-361～368	N-85°-E	(6.26) × 2.87	4	45～164	104.00	—～—	—	20～25	23.33	5～8	6.25	22～139	48.38
34B	890～892-360～371	N-88°-E	(10.85) × (2.36)	3	93～98	95.25	—～—	—	13～32	25.17	3～25	7.33	5～67	47.50
132	903～905-335～336	N-07°-W	(0.81) × 1.85	4	41～68	54.25	—～—	—	24～33	26.75	1～25	2.33	5～43	24.17
133	893～897-334～335	N-04°-E	(1.40) × 4.20	4	115～138	124.33	—～—	—	26～42	31.50	4～11	7.00	87～103	70.75
134	889～895-384～407	N-85°-E	23.96 × (6.34)	18	77～269	132.92	—～—	—	31～73	39.47	7～22	14.12	42～233	88.53

表5 2区1面下位面As-A下畑一覽

番号	所在グリッド	主軸方位	東西×南北(m)	サク								畝間(cm)		
				条数	掘削間隔(cm)	(平均)	長さ(m)	(平均)	幅(cm)	(平均)	深さ(cm)	(平均)	(平均)	
1	870～875・-418～427	N-67°-E	(7.80) × (4.40)	9	53～60	56.38	—～—	—	21～35	28.44	4～9	7.56	23～31	24.78
2	867～873・-426～436	N-75°-E	(9.40) × (3.40)	7	53～59	55.30	—～—	—	29～33	31.50	5～10	8.43	21～27	23.50
3	866～870・-436～444	N-77°-E	(7.50) × (3.00)	3	113～124	118.25	—～—	—	40～53	48.00	15～20	17.00	53～77	69.00
4	873～882・-421～434	N-24°-W	10.00 × (7.00)	17	45～61	55.54	1.83～1.83	1.83	19～51	27.69	3～9	6.56	7～51	27.67
5	871～881・-428～442	N-13°-W	10.20 × (9.10)	19	42～63	55.11	9.64～10.13	9.86	26～39	31.05	6～12	8.74	16～34	24.11
6	869～880・-438～452	N-75°-E	(11.50) × 10.30	10	104～126	112.44	9.29～9.61	9.51	38～38	47.10	10～18	15.90	50～86	64.22
7	873～877・-450～455	N-25°-W	4.60 × (2.40)	5	86～116	104.50	—～—	—	24～48	39.60	6～16	11.20	47～71	64.00
8	881～888・-436～451	N-70°-E	(9.10) × (9.00)	9	84～114	95.80	—～—	—	34～44	38.75	9～15	11.33	41～78	58.67
9	879～890・-447～459	N-20°-W	(12.40) × (8.40)	26	45～61	51.87	—～—	—	21～33	26.95	4～25	8.42	17～31	24.85
10	895～903・-439～452	N-42°-W	(10.00) × (8.40)	15	46～57	53.67	—～—	—	16～40	27.93	6～12	7.93	18～35	25.91
11	897～902・-448～454	N-50°-E	(6.20) × (2.60)	8	50～65	57.50	—～—	—	18～45	30.43	3～14	9.38	13～29	23.33

表6 1面土坑計測値表

1区1面						
番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(cm)		主軸方位	備考
1	914～918・-307～308	不整形	355	× (112)	× 72	
2	907～909・-315～317	楕円形	216	× 160	× 48	
3	906～909・-317～319	楕円形	285	× 95	× 112	
4	906～910・-316～317	楕円形	326	× (108)	× 82	
5	907～909・-315～316	楕円形	205	× 134	× 115	
6	887～889・-306～311	楕円形	398	× (186)	× 143	
7	886～887・-310～312	楕円形か	(124)	× (111)	× 84	
8	886～888・-305～307	不整形か	(158)	× (146)	× 80	

畑地と東あるいは北側の竹藪とを区画している。

本溝は北側が調査区外に在り、また攪乱により壊された箇所もあったため、全容は詳らかにできなかった。

位置 本溝は1-1区中北部に在り、931~956-330~338グリッドに位置する。

重複 本溝と他の遺構との重複はなかった。

規模 残長：28.9m 幅：156cm 深さ：26~64cm

覆土 As-A泥流で埋没する。

構造 1号溝は北からN-3°-Eの走向で調査区に入り、中位で東にクランクする直線的な走行を取り、南端でN-85°-Wの走向を取って東に折れる。

その掘削形態は箱堀状を呈するが、クランク部分で基底幅96cm、上幅15cm、高さ10cmを測るダム状の掘り残しがあり、クランク部分の南から屈曲部までは、前後の底面に対して37cm程深く掘削されていた。

遺物 本溝からは在地系土器皿(312・313)・焙烙(314)が出土した。

所見 本溝の掘削意図は確認できなかった。

10. As-A下畑(第46~50図、PL. 1・2・4)

概要 1区では、天明3(1783)年のAs-A軽石で覆われた畑38面を確認した。

位置 1区の畑のうち1~5・22・27・30号畑は1-1区北部、8~18号畑は1-1区南東部、6・7・24~26・28・29・31~34A・34B・132・133号畑は1-1区南西19・20・131・134号畑は1-2区、21号畑は1-3区にある。

位置するグリッドは表4に記した。

規模・主軸方位 表4に記した。

構造 これらの畑は粘性のほとんどない細砂質土を耕して造られている。

畑の規模、個々のサクの掘削間隔や規模、畝間などは表4にまとめた。

また、南東部にある17・18号畑は小規模であり、家庭菜園の様相を呈している。

遺物 1・12号畑から国産陶器片、6・9・23号畑からは在系土器片、18号畑からは国産陶器片と在系土器片、19号畑から国産磁器片が、いずれも少量出土した。また4号畑の表面から、耕作物ではないが、カナムグラの種子が出土している。

区画溝(17・18号溝) 1-1区では畑に伴う区画溝が見られた。17号溝は5号畑の西側の22・27号畑と、南側の6号畑を区画する区画溝であるが掘削されている。その規格は幅52cm、深さ6~13cmを測るもので、箱堀状の掘削形態を呈するこの溝は、5号畑の南東辺を走って、5号畑の東辺を走る1号溝に達する。また南東の屈曲部より175cmの地点で当方に分岐し、分岐した溝は、9号畑北縁の西部では北に1.4m以下の距離を以て離れるが、略東南東方向に走行を変じて、更に略東方向に東半部は9号畑の北縁に沿って走行し、1号道路に至る。

また、1-1区中・南部に、東側の9・8・10・12・132・133号畑と、西側の5・7・29号畑の間を画する区画溝、18号溝が走る。この溝はN-0°に走向を取り、極緩やかに蛇行する走行を呈する。その幅は65cm、深さ9cmを測り、その北端は上述の5号畑を廻る区画溝の東南部に接続する。

遺物 17号溝からは在地系内耳鍋(315~317)が出土している。

10. 竹藪(第51図、PL. 1)

概要 1-1区の北部で、耕作地ではない、区画が確認され、その地表面に遺された圧痕から、竹藪ではないかと想定している。

位置 1号屋敷の北辺とその延長線上にある9号畑北側の区画溝、そして1号溝に囲まれた区域であり、932~955-307~336グリッドに位置する。

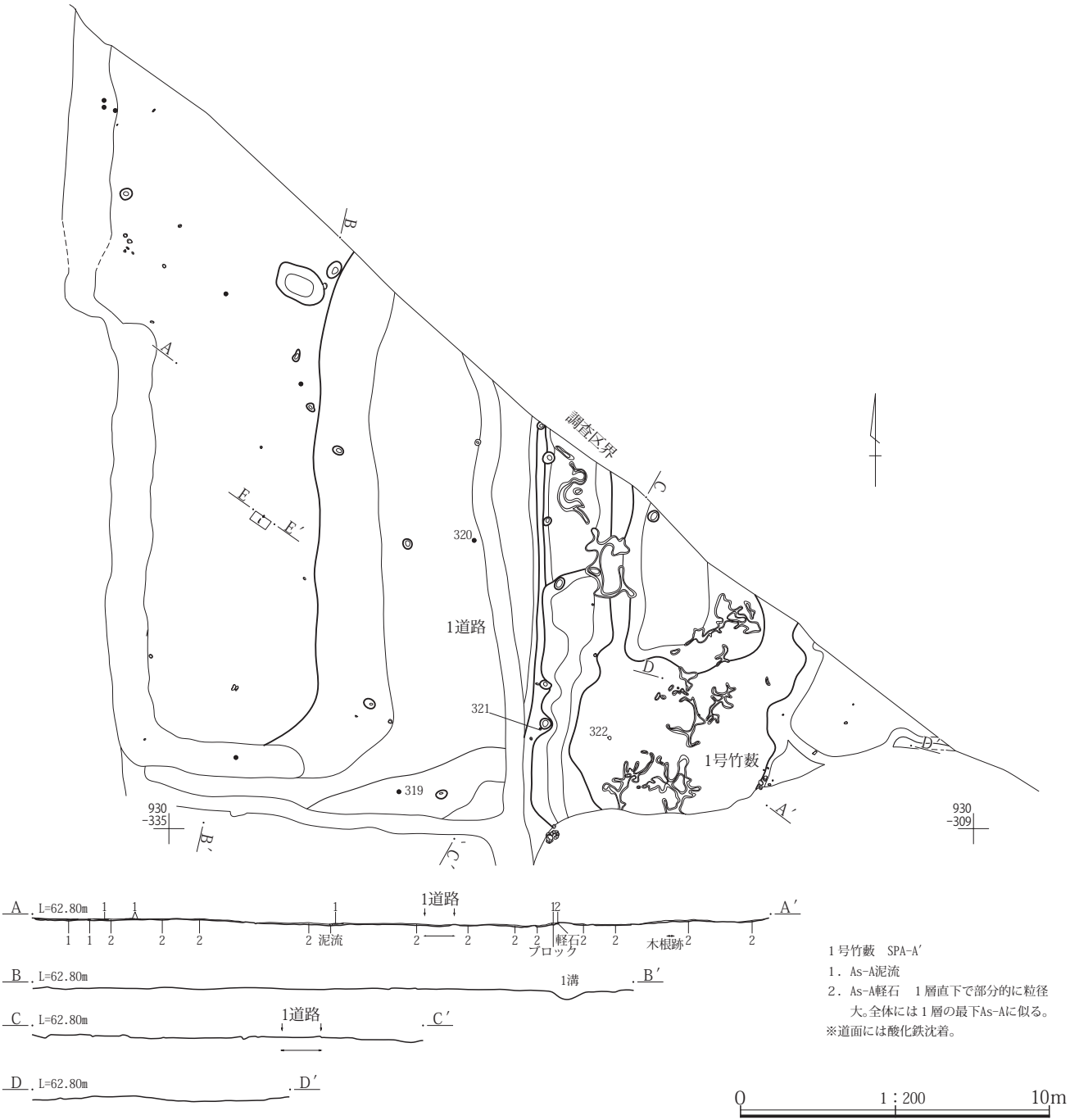
規模 本遺構面は、東西28.5m、南北24.5mを測る。

構造 本遺構面は、10cm以内の凹凸が前面に見られ、複雑な圧痕が見られた。また1号道路の東側では、根の痕跡の様なものが見られた。

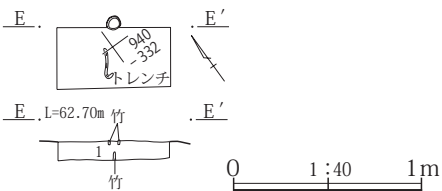
遺物 本遺構からは少量の国産施釉陶器片や在地系土器片が出土したが、この中には肥前磁器染付小杯(319)、瀬戸・美濃陶器腰鏝碗(320)と尾呂碗(321)、及び在地系土器片(322)があった。またマツ以外の針葉樹の樹皮が出土した。

所見 本遺構は耕作地ではなく、またその地表面の様相は、自然林の存在を想起させるものであった。しかし樹木が植生された積極的な痕跡は認められず、根の痕跡はタケを想起させるもので、第5章の1号屋敷の所見や本遺跡の東には利根川が近接してあることなどを勘案し

1区1号竹藪



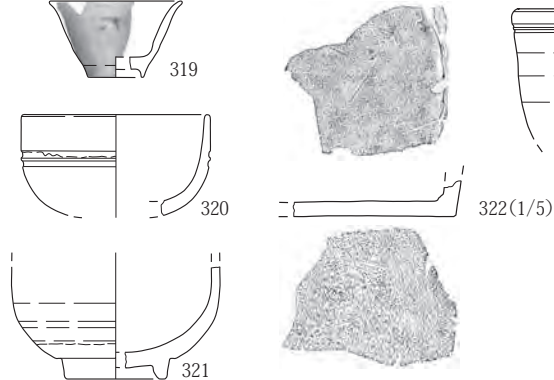
1区1号竹藪 残存地点



1号竹藪 竹残存地点

1. にぶい黄褐色砂質土 若干の川砂混入し酸化鉄沈着。根に沿ってAs-A入る。
竹。炭化し周囲に酸化鉄凝集。

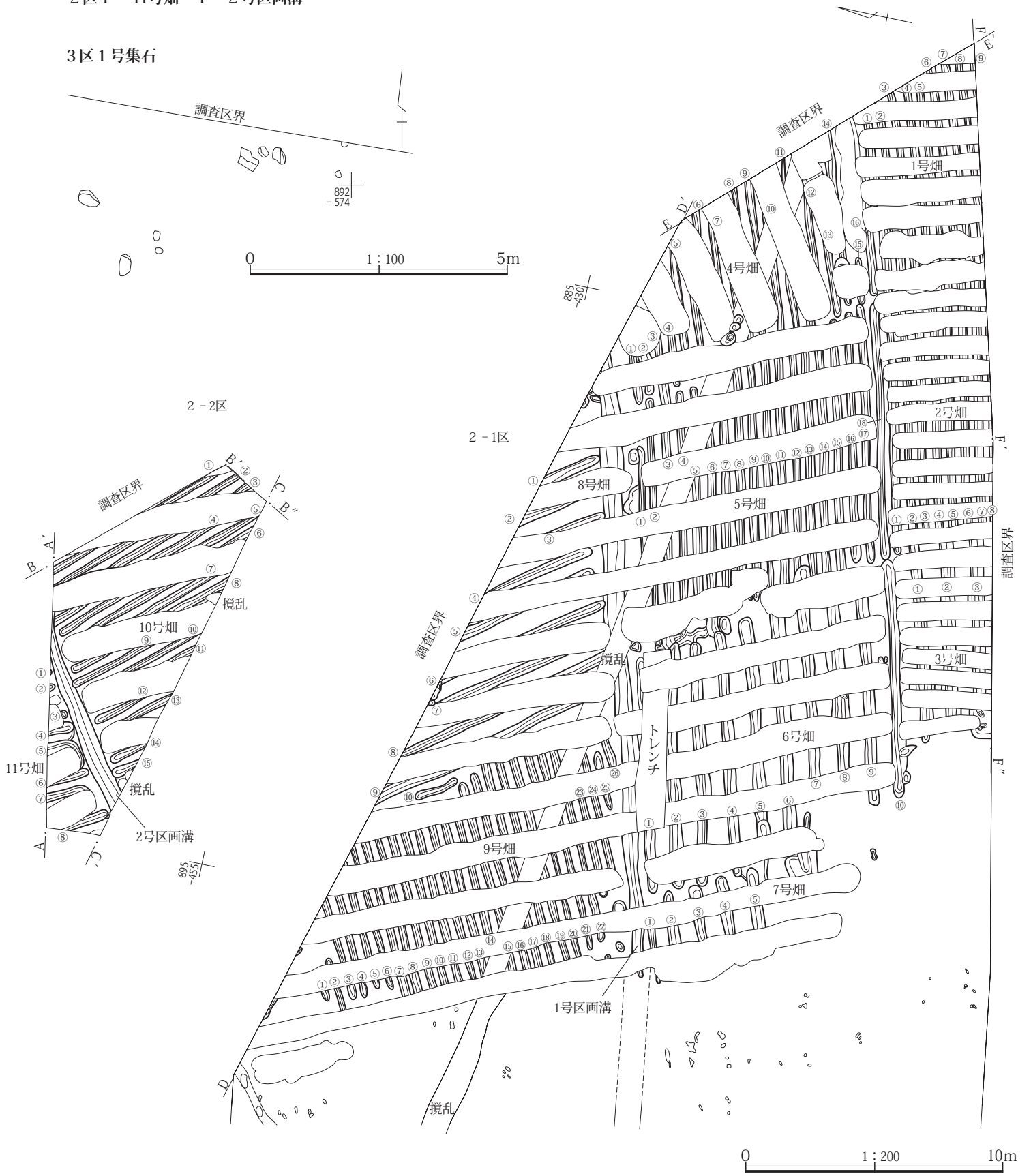
1号竹藪出土遺物



第51図 1区1号竹藪と出土遺物

2区1～11号畑・1・2号区画溝

3区1号集石



第52図 2区1・2号区画溝と1～11号畑、3区1号集石

て、本遺構面は竹藪であったものと判断される。

(b) 2区

1. As-A下畑(第52図)

概要 2区では、天明3年のAs-A軽石で覆われた畑11面を確認した。

位置 2区の畑は2-1区東部と2-2区にある。のうち1～3号畑は2-1区南縁部に、北部に8・9号畑が在り、10号畑は2-2区中東部に、11号畑は同西端部にある。

位置するグリッドは表5に記した。

規模・主軸方位 表5に記した。

構造 畑の規模、個々のサクの掘削間隔や規模、畝間などは表5にまとめた。

2区の畑は公道南の2-1区のサクは東北東-西南西方向に掘削され、公道北側の2-2区のサクは北西-南東方向に掘削されていた。

遺物 2区のAs-A下畑からの遺物の出土はなかった。

所見 上述のように、本畑群は、天明3(1783)年の浅間山の大噴火で降下したAs-A軽石で覆われた畑遺構である。また、本畑群の所在区域(2区東部)は、上記噴火に伴って発生した泥流の到達が確認された区域であった。

各畑の区画は、1面上位面の復旧溝群の区画とほぼ重なるものであった。

(c) 3区

1. 1号道路(第18図)

概要 3区1号道路は、硬化面によって確認された道路遺構である。

また、1号道路は南側が削平され、南北両側が調査区外に出るため、全容を詳らかにできなかった。

位置 1号道路は3区中・西部、859～894-569～582グリッドに位置する。

重複 1・2号道路は共に、他遺構との重複はなかった。

規模 1号道路 残長：36.8m 幅：96cm 深さ：5cm

覆土 本道路の上面にはAs-A軽石が乗る。

構造 本道路の走行は蛇行しているが、その走向は、北端はN-20°-W、南半部はでN-15°-Wに走向を取る。

本道路の横断面は若干窪みを有する。

遺物 本道路からの遺物の出土はなかった。

所見 本道路の敷設の目的は、特定されなかった。

本道路の時期は、天明3(1783)年に存在していたものと判断される。

2. 1号集石(第52図、PL.26)

概要 本遺構は、河床礫が分布する遺構である。

位置 本遺構は3区調査区北端部西寄りに在り、890～892-573～579グリッドに位置する。

重複 本土坑は他遺構との重複はなかった。

規模 範囲：107×99cm

覆土 覆土の明確な記録は残せなかった。

構造 大小の河床礫が集まる遺構であるが、その分布状況は粗である。

遺物 本遺構からの出土遺物はなかった。

所見 本遺構の礫の配置意図は特定されなかった

その時期は、確認面から推して、天明3年以前の所産と想定される。

(d) 1・2面の出土遺物(第51図)

1面か2面か出別できなかった遺物に瀬戸・美濃陶器片口鉢(323)、砥石(324)、火打石(325)があった。

第2節 2面の調査

(1) 2面の概要

2面は、およそ16世紀以降から天明3(1783)年の浅間山の大噴火の間の中近世面である。

2面の調査は、近世遺構のうち、寛保2(1783)年の大洪水に伴う被災遺構の調査であったが、層厚約1.5mを測る洪水層起源の土層中に、幾重にも洪水層が重なり、予想をはるかに上回る何面にも亘る復旧溝群や復旧畑が識別され、寛保2年の遺構面の検出に苦慮した。

そうした中、その可能性の見られた3面の畑跡を確認、調査したが、以下、この3面を上位面、中位面、下位面とし、上位面、中位面、下位面それぞれに報告する。なお、寛保2年面の可能性が最も高いのは下位面の遺構群であった。

また、2面の調査は1-1区のみで実施している。

(2) 2面上位面

2面上位面は、1-1区東部及び北部の1期調査区域で確認した。その後の調査で、下位に遺構面が検出されたため、寛保2年面である可能性が低くなり、1-1区中部以西、以南の2期調査区域では、調査対象から外した。

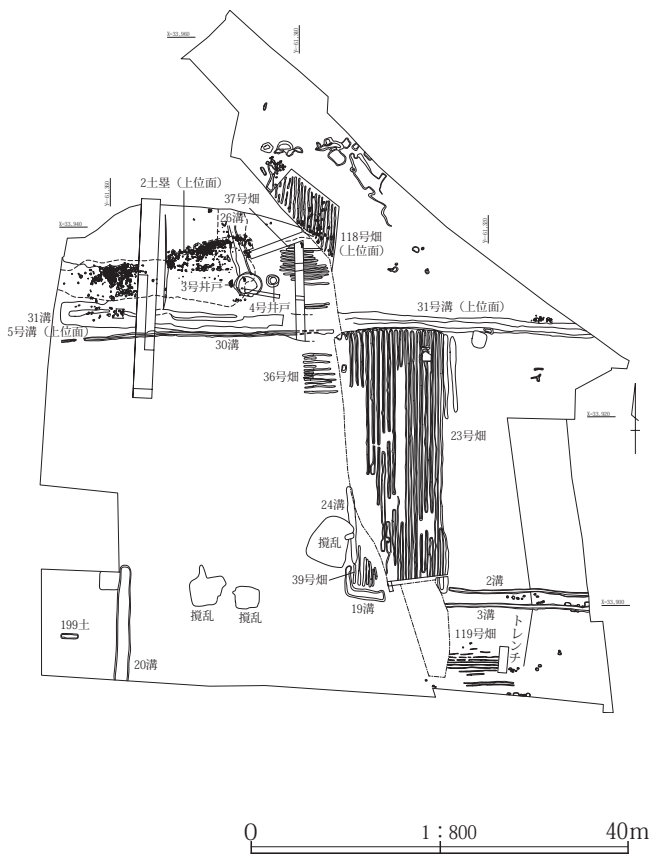
2面上位面では101~117号畑の、17面の畑遺構を確認した。また、2号竪穴と15号土坑を確認調査した。

1. 畑(第54図、PL. 9)

概要 2面上位面では、褐色土の地山層に、筋状にわずかに残されたにぶい黄褐色土によって畑跡が確認された。しかし、下位の畑跡の確認と調査期間に鑑みて、遺構を掘削せず、その範囲と形状の確認に留めた。

位置 畑跡は、101~105号畑は1-1区北西部に、106~110号畑は同中北部に、111号畑は同北東部に、112~116号畑は同中東部に、117号畑は同東南部に所在する。

位置するグリッドは表7に記した。



第53図 1-1区2面全体図(左:上・中位面 右:下位面)

規模・主軸方位 表7に記した。

重複 本面の畑遺構のうち、108号畑と109号畑、112号畑と113号畑が重複するが、108号畑と113号畑の方が新しい。なお、108号畑は109号畑に対して27cm程高い位置にある。

構造 2区上位面の畑遺構は掘削を行わなかったため、遺構の形状を明らかにすることはできなかった。

個々の復旧畑のサクの掘削の間隔、サクの幅などは表7にまとめた。

遺物 2面上位面の各畑からの遺物の出土はなかった。

所見 101～117号畑の耕作時期は、寛保2(1783)年と天明3(1783)年の間と想定されるものの、その耕作時期を特定することはできなかった。

2. 2号竪穴・3号竪穴(第59図、PL.10)

概要 2・3号竪穴は、縦列に連なる大型の遺構である。なお、調査段階で2号竪穴は1号井戸、3号竪穴は15号土坑と呼称していたことがあるため、遺構図や遺物注記にその呼称で記載されているものもある。

位置 2号竪穴と3号竪穴は1-1区中東部の調査区東際に位置し、2号竪穴は922～926-310～316、3号竪穴は923～925-305～311グリッドに位置する。

重複 2号竪穴と3号竪穴は併存しているが、他の遺構との重複はなかった。

規模 2号竪穴 長さ：532cm 幅：397cm 深さ：196cm

3号竪穴 残長：245cm 残幅：164cm 深さ：134cm

覆土 両遺構は灰黄褐色土や褐色土などで埋没する。

構造 2・3号竪穴の掘削形態は共に曲物形を呈し、両遺構の間は幅32cmを測るダム状の掘り残しが残るが、その頂部は2号竪穴の底面から80cm、3号竪穴の底面から18cmを測る。

遺物 2号竪穴からは少量の土師器片、中近世の在地系土器片、国産施釉陶器片が出土したが、3号竪穴からの遺物の出土はなかった。

所見 2・3号竪穴の掘削意図は共に特定できなかったが、縦列に連続して掘削される大型の遺構であり、2号竪穴からは湧水が見られた。

また、その時期は、寛保2年～天明3年の所産として把握されるものの、その掘削意図は特定できない。

(3) 2面中位面

2面中位面は、1-1期の調査段階で、上位面と下位面との間に検出されたものであるが、面的な広がりはなく、下位面が検出されたため、2期調査区域では調査対象から外した。

1. 畑(第59図、PL.9)

概要 2面中位面では、118号畑1面を確認したに過ぎなかった。

118号畑は、筋状にわずかに残された地山層と覆土の色調の違いから、確認された。しかし、上位面の畑跡と同様に、下位の畑跡の確認と調査期間に鑑みて、遺構を掘削せず、形状の確認に留めた。

位置 118号畑跡は、1-1区中北部南寄りに位置する。

位置するグリッドは表7に記した。

規模・主軸方位 表7に記した。

構造 118号畑も掘削を行わなかったため、遺構の形状を明らかにすることはできなかった。

また個々の復旧畑のサクの掘削の間隔、サクの幅などは表7にまとめた。

遺物 2面上位面の各畑からの遺物の出土はなかった。

所見 118号畑の耕作時期は、寛保2(1783)年と天明3(1783)年の間と想定されるものの、その耕作時期を特定することはできなかった。

(4) 2面下位面

2面下位面は、暗灰黄色砂で覆われた遺構面である。暗灰黄色砂が寛保2(1742)年の洪水砂と判断したものである。各所に凹凸が散見された。

2面下位面では溝遺構7条、畑5面、竪穴1基、土坑1基を確認調査した。また、3面の2号土塁の頂部にある、集石も調査し、3面で確認調査した、3・4号井戸26号溝も、本面に含まれるものとして報告する。

なお、2面下位面は31号溝を境に南側が10～43cm低くなり、南西部が北側より25～30cm低くなっている。

1. 溝(第565～8図、PL.9・10)

概要 2面下位面では、2・3・19・20・24・26・30・31号溝を確認した。このうち20・31号溝は大規模の溝遺

1-1区2面101~110号畑(上位面)



第54図 1区101~110号畑

1-1区2面111~117号畑(上位面)



第55図 1区111~117号畑

1-1区2面23.36.39.119号畑(下位面)5号溝(上位面)



第56図 1区5号溝の痕跡と23・36・39・119号畑

第3章 発見された遺構と遺物

構であり。他の溝は中小規模の溝遺構である。

また、19・24号溝以外の溝は、調査区外に出るため全容を確認することはできなかった。

なお、26・30号溝は3面に確認した遺構であるが、3面を切るため、本面に報告する。

位置 2・3号溝は1-1区南東部、19・24号溝は同中南部、20号溝は同南西部、26号溝は中部北寄りに、30号溝は中西部北寄りに、31号溝は中東部北寄りにある。所在グリッドは、2号溝は900~901-311~326、3号溝は899~900-311~326、19号溝は900~904-333~337、20号溝は892~904-359~361、24号溝は904~912-335~338、26号溝は904~940-345~347、30号溝は927~938-333~367、31号溝は928~931-310~(367)である。

なお、31号溝は3面の5号溝の埋土中にあるが、30号溝はその南に並走している。また、30号溝は東側の1期調査区域では確認できず、一方、31号溝は西側の2期調査区域では確認できなかった。

重複 各溝ともに、他遺構との重複はなかった。

規模 2号溝 残長：14.8m 幅：48cm 深さ：9cm

3号溝 残長：15.4m 幅：50cm 深さ：15cm

19号溝 長さ：6.6m 幅：113cm 深さ：22cm

20号溝 残長：12.2m 幅：152cm 深さ：10cm

24号溝 長さ：8.3m 幅：80cm 深さ：—cm

26号溝 残長：5.5m 幅：133cm 深さ：8cm

30号溝 残長：29.0m 幅：164cm 深さ：10cm

31号溝 残長：26.8m 幅：164cm 深さ：10cm

覆土 2・3号溝は川砂含む灰黄褐色砂質土、19号溝はにぶい黄褐色砂質土など、20号溝は灰黄褐色粘質土、24号溝は暗灰黄色砂で埋没した。

構造 2・3号溝は、全体としてN-90°に走向を取り、極緩やかに蛇行する走行を呈する。掘削形態は箱堀状を呈し、底面は平底を呈する。なお、2・3号溝は90~128cmの間隔を以て並走する。

19号溝はL字形に走行するが、その走向は西部はN-2°-W、南部はN-82°-Wに走向を取る。

20号溝は、N-3°-E、24号溝はN-4°-Wに走向を取り、共に直線的な走行を呈する。

26号溝はN-15°-Wに走向を取り、全体に直線的な走行を取るが、北端でN-0°に走向を転ずる。

30号溝は極緩やかに蛇行する走行を呈し、その走向は

おおよそN-89°-Wを向く。

31号溝は極緩やかに蛇行する走行をとるが、その走向は全体としてN-87°-Wを取る。

遺物 2号溝からは在地系土器皿(329)・内耳鍋(330)、不明鉄製品(331)、凹み石(332)が出土したが、他の溝からの遺物の出土はなかった。

所見 2・3号溝は並走することから、その間が道路であった可能性がある。19号溝は覆土の観察所見から流水の痕跡が確認された。26号溝はその位置から推して、3号井戸の揚水に対する排水機能を有するものと判断される。なお、31号溝は位置と形態から推して、道路としての機能が考慮される。30号溝はその覆土中に残された溝であるが、西側の2期調査区域では確認できなかった。他の溝の掘削意図を確認することはできなかった。

また、その時期は、20・26号溝は洪水前に埋没していたものと思慮されるが、他の溝は洪水で埋没したものと思慮される。

2. 畑(第59図、PL.9)

概要 2面下位面では、寛保2年と思慮される、洪水砂などで覆われた畑5面を確認した。

位置 2区下位面の畑のうち37号畑は1-1中北部に、23・36・39号畑は同中部から南部北寄りにかけて、119号畑は南東部にある。

位置するグリッドは表7に記した。

規模・主軸方位 表7に記した。

構造 畑の規模、個々のサクの掘削間隔や規模、畝間などは表7にまとめた。

なお、23号畑北縁は、23号畑側が低い、明瞭な段差を以て、31号溝と区画されている。

遺物 2面下位面の畑からの遺物の出土はなかった。

所見 上述のように、本畑群は寛保2(1742)年の大洪水で埋没したと思われる遺構群である。

このうち23号畑は、南側の1・2号溝と北側の段差に画された、付近で最も低い、長方形プランの区画に耕作されたものである。

3. 井戸(第61図、PL.10)

概要 3・4号井戸は3面に確認した井戸遺構であるが、調査の結果、2面の遺構であることを確認したため、2

面下位面の遺構として報告する。

位置 3・4号井戸は1-1区中北部に位置し3区調査区北端部西寄りに在り、3号井戸は932~935-343-346、4号井戸は933~934-342~343グリッドに位置する。

重複 3号井戸は北側で26号溝と接続する。新旧関係は特定できなかったが、併存していたものと思慮される。また4号井戸は他遺構との重複はなかった。

規模 3号井戸 径：249×213cm 深さ：214cm

4号井戸 径：112×90cm 深さ：228cm

覆土 3号井戸は、にぶい黄橙色粘質土などで埋められる。

4号井戸は、灰黄褐色土や黒褐色土などで埋められる。

構造 3号井戸はすり鉢型、4号井戸は井筒型の掘削形態を呈する。

湧水層 3・4号井戸は、共に、壁面最下層の灰黄色粘質シルトと小礫の混土と判断される。

遺物 3号井戸からは板碑(326)、4号井戸からは片口鉢と思われる在地系土器片(327)と板碑と思われる石片(328)が出土した。

所見 3・4号井戸の掘削時期は、16世紀から寛保2年間の所産として把握されるに過ぎなかった。

4. 199号土坑(第58図)

概要 199号土坑は比較的大型の土坑である。

位置 本遺構は1-1区南西隅部に在り、896~897-365

~367グリッドに位置する。

重複 本土坑は単独で在り、他遺構との重複はなかった。

規模 長軸：184cm 短軸：99cm 深さ：13cm

覆土 灰黄褐色粘質土で埋没する。

構造 プランは短冊形に近い隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-88°-Wに取る。また、掘削形態は箱堀状で、底面の横断面形はやや丸底気味である。

遺物 本遺構からの出土遺物はなかった。

所見 本遺構の掘削意図は特定されなかったが、中近世に多い貯蔵穴の可能性はある。

その時期は、覆土から推して、寛保2年以前の所産と想定される。

5. 集石遺構(第60図、PL.10・26)

概要 本遺構は3面に報告する2号土塁の頂部が、2面に露出したもので、ここに、河床礫が集中して出土した。また河床礫下の土壌は、周囲の砂質土とは異なる黒褐色粘質土であったため、検出されたものである。

位置 本遺構は1-1区中北部に在り、931~939-342~365グリッドに位置する。

重複 他の遺構との重複はなかった。

規模 範囲：19.0×4.1m

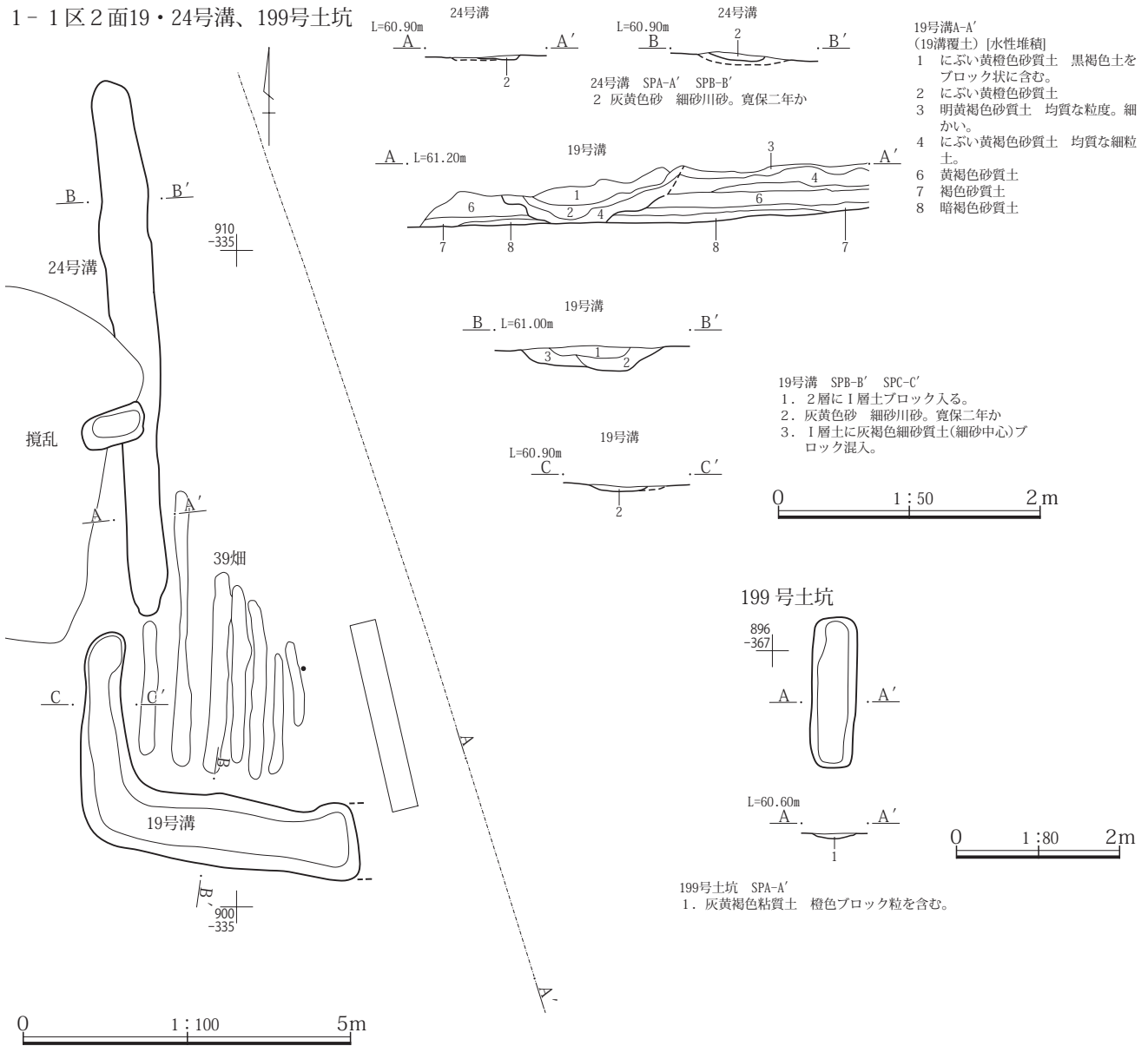
覆土 黄褐色土や褐色土で埋没する。

構造 河床礫が面的に密に分布する。

遺物 集石遺構からは肥前磁器染付皿(335)、瀬戸・美

表7 1区2面畑一覧

番号	所在グリッド	主軸方位	規模(m)	畝										
				条数	掘削間隔(cm)	(平均)	長さ(m)	(平均)	幅(cm)	(平均)	深さ(cm)	(平均)	畝間(cm)	(平均)
上位層														
101	965~971・-359~364	N-78°-W	5.80 × (2.50)	12	39 ~ 53	48.85	— ~ —	—	15 ~ 26	21.91	1 ~ 2	1.50	20 ~ 35	26.91
102	954~965・-362~365	N-8°-E	10.22 × (3.32)	22	37 ~ 55	47.65	— ~ —	—	11 ~ 39	23.18	5 ~ 7	5.50	16 ~ 33	24.55
103	946~949・-362~365	N-82°-W	2.44 × (2.44)	7	31 ~ 46	39.08	— ~ —	—	14 ~ 24	17.00	— ~ —	—	15 ~ 28	21.83
104	957~960・-360~361	N-11°-E	2.75 × (1.07)	9	25 ~ 45	31.38	— ~ —	—	16 ~ 31	22.22	— ~ —	—	5 ~ 17	9.63
105	955~966・-353~360	N-7°-E	(9.15) × (6.60)	15	40 ~ 50	44.82	— ~ —	—	15 ~ 38	26.47	2 ~ 7	4.83	15 ~ 26	18.64
106	947~953・-332~354	N-75°-W	21.80 × (7.75)	50	33 ~ 68	44.04	1.03 ~ 2.87	1.69	18 ~ 45	31.76	4 ~ 4	4.00	3 ~ 28	12.31
107	943~946・-344~346	N-4°-E	2.79 × 1.33	6	42 ~ 84	52.75	0.75 ~ 1.36	1.20	20 ~ 28	23.80	1 ~ 1	1.00	15 ~ 60	26.20
108	935~944・-335~343	N-15°-W	9.30 × (7.70)	23	33 ~ 46	40.98	2.82 ~ 4.73	3.76	18 ~ 39	26.35	1 ~ 8	4.17	8 ~ 22	14.57
109	939~944・-333~336	N-5°-E	5.60 × 3.10	8	33 ~ 45	37.64	2.88 ~ 5.52	3.72	7 ~ 22	14.63	5 ~ 5	5.00	18 ~ 28	23.00
110	931~936・-331~339	N-88°-W	(7.55) × 5.70	14	36 ~ 50	43.12	2.16 ~ 7.4	3.35	11 ~ 31	18.93	2 ~ 2	2.00	19 ~ 30	24.08
111	931~946・-313~331	N-90°	(18.00) × (14.12)	41	37 ~ 52	43.55	— ~ —	—	14 ~ 35	22.05	1 ~ 1	2.17	13 ~ 34	21.64
112	918~926・-323~325	N-4°-W	(7.50) × (2.15)	13	32 ~ 113	49.50	— ~ —	—	17 ~ 47	23.00	— ~ —	—	13 ~ 88	26.18
113	917~930・-323~326	N-0°	13.40 × 2.65	5	50 ~ 66	56.75	12.92 ~ 13.4	13.16	18 ~ 52	36.40	2 ~ 4	3.00	15 ~ 19	17.00
114	921~928・-318~321	N-4°-E	(6.50) × 2.65	7	38 ~ 44	40.42	2.73 ~ 6.24	5.49	6 ~ 19	13.29	1 ~ 3	1.80	23 ~ 32	26.67
115	919~929・-316~318	N-7°-W	2.30 × 2.00	3	54 ~ 110	81.75	2.07 ~ 2.29	2.17	20 ~ 27	24.33	1 ~ 3	1.67	31 ~ 83	57.00
116	911~916・-321~325	N-3°-W	5.03 × 1.15	3	38 ~ 54	46.00	2.14 ~ 5.03	3.32	19 ~ 27	22.33	— ~ —	—	15 ~ 30	22.50
117	908~911・-320~322	N-19°-E	2.30 × 1.95	5	43 ~ 63	51.88	0.61 ~ 2.02	1.31	16 ~ 24	19.00	1 ~ 1	1.00	24 ~ 41	32.50
中位層														
118	936~945・-338~344	N-45°-W	8.90 × 4.00	18	29 ~ 43	36.88	4.36 ~ 5.48	4.47	6 ~ 20	12.67	— ~ —	—	16 ~ 33	24.56
下位層														
23	901~929・-326~337	N-2°-W	28.12 × (10.80)	20	46 ~ 70	57.44	— ~ —	—	33 ~ 60	43.55	3 ~ 31	9.40	5 ~ 23	13.94
36	922~926・-338~341	N-3°-W	4.25 × 3.53	21	21 ~ 53	35.59	1.02 3.53	2.46	11 ~ 22	15.67	1 ~ 8	3.50	7 ~ 36	20.45
37	931~938・-339~344	N-86°-E	5.26 × (4.27)	15	26 ~ 224	46.89	2.37 5.09	3.86	12 ~ 26	18.40	1 ~ 4	2.53	7 ~ 205	28.71
39	902~906・-333~337	N-5°-E	4.35 × 2.50	7	29 ~ 55	38.83	1.27 4.17	2.54	15 ~ 26	20.29	1 ~ 4	3.14	10 ~ 30	18.33
119	891~895・-319~326	N-89°-E	(7.00) × (3.95)	18	29 ~ 43	36.88	4.36 ~ 5.48	4.47	6 ~ 21	12.67	— ~ —	—	16 ~ 33	24.56



第58図 1区19・24号溝と199号土坑

濃陶器碗(336)、常滑陶器片口鉢とみられるもの(337)・甕(338)、在地系土器皿(339~341)・内耳鍋(342~344)や内耳鍋とみられるもの(345)・片口鉢とみられるもの(346)や火鉢(347)、板碑、敲石、砥石、凹み石(352)、不明石製品が出土した他、埴輪片や少量の中世の在系土器片が出土した。

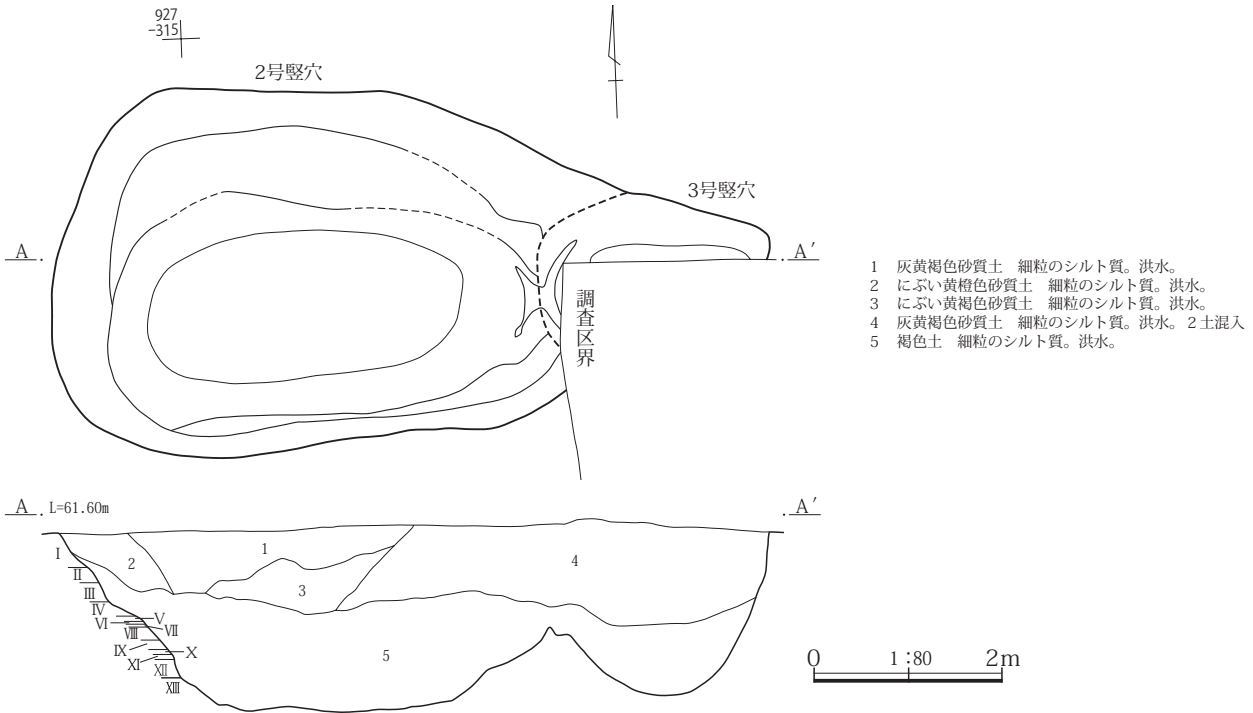
所見 本集石は2号土塁の崩落土中に含まれた礫の溜まりと考えられるが、投棄された礫も含まれるものと思慮される。

(5) 2面の遺構外の出土遺物(第62図、PL.26)

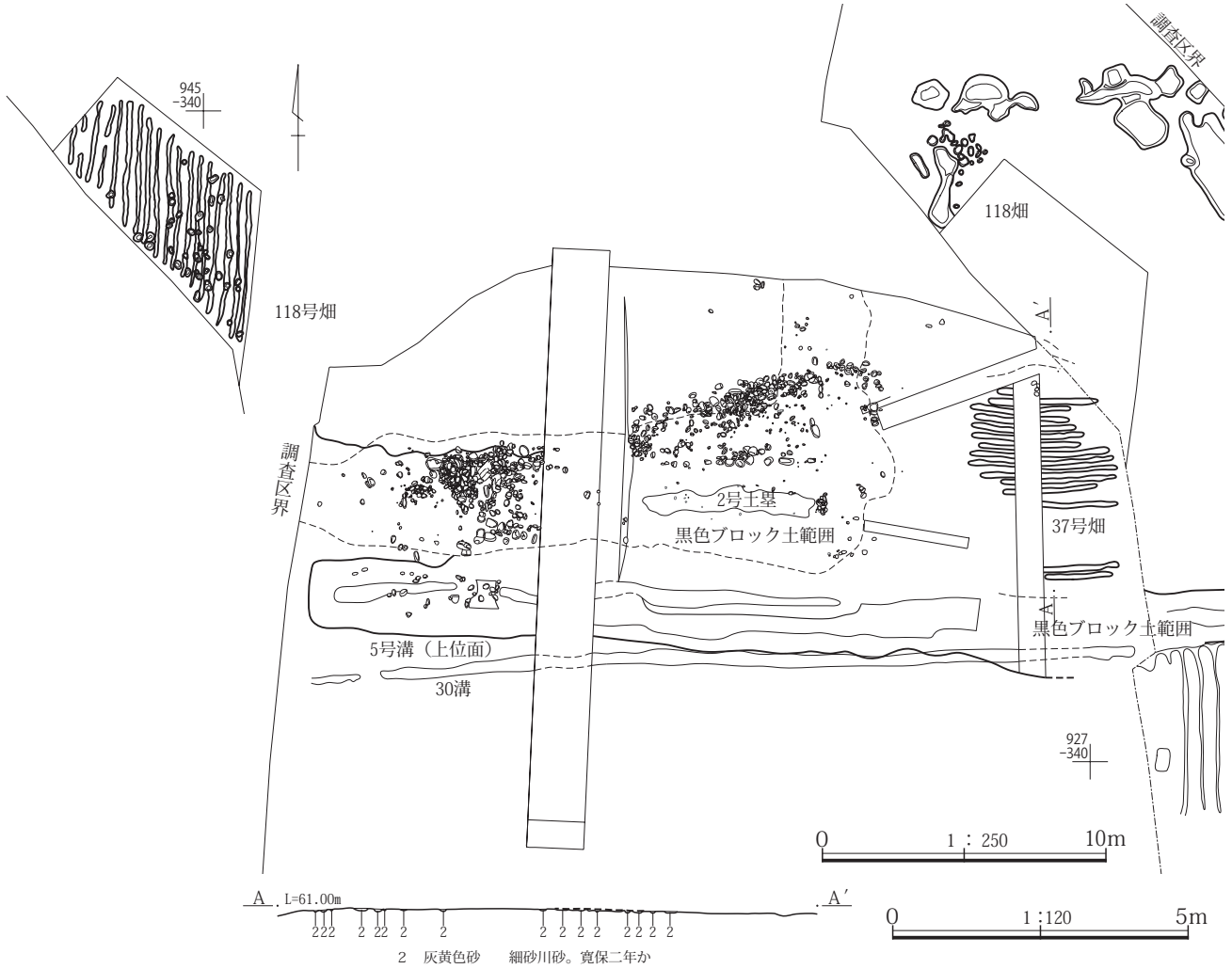
概要 遺構外の出土遺物には、龍泉窯系青磁碗(356)、中国磁器と見られる染付皿(357)、古瀬戸の平碗と見られるもの(358)、瀬戸・美濃陶器志野片(359・360)・折縁皿(361)、在地系土器内耳鍋(362)、洪武通寶(363)、皇宋通寶(364)、元符通寶と見られる銅銭(365)、鉄釘(366)がみられた他、少量の中近世の在地系土器片や近世陶磁器片、時期不明の土器類や瓦片などが出土している。

第3章 発見された遺構と遺物

1-1区2面2・3号竪穴

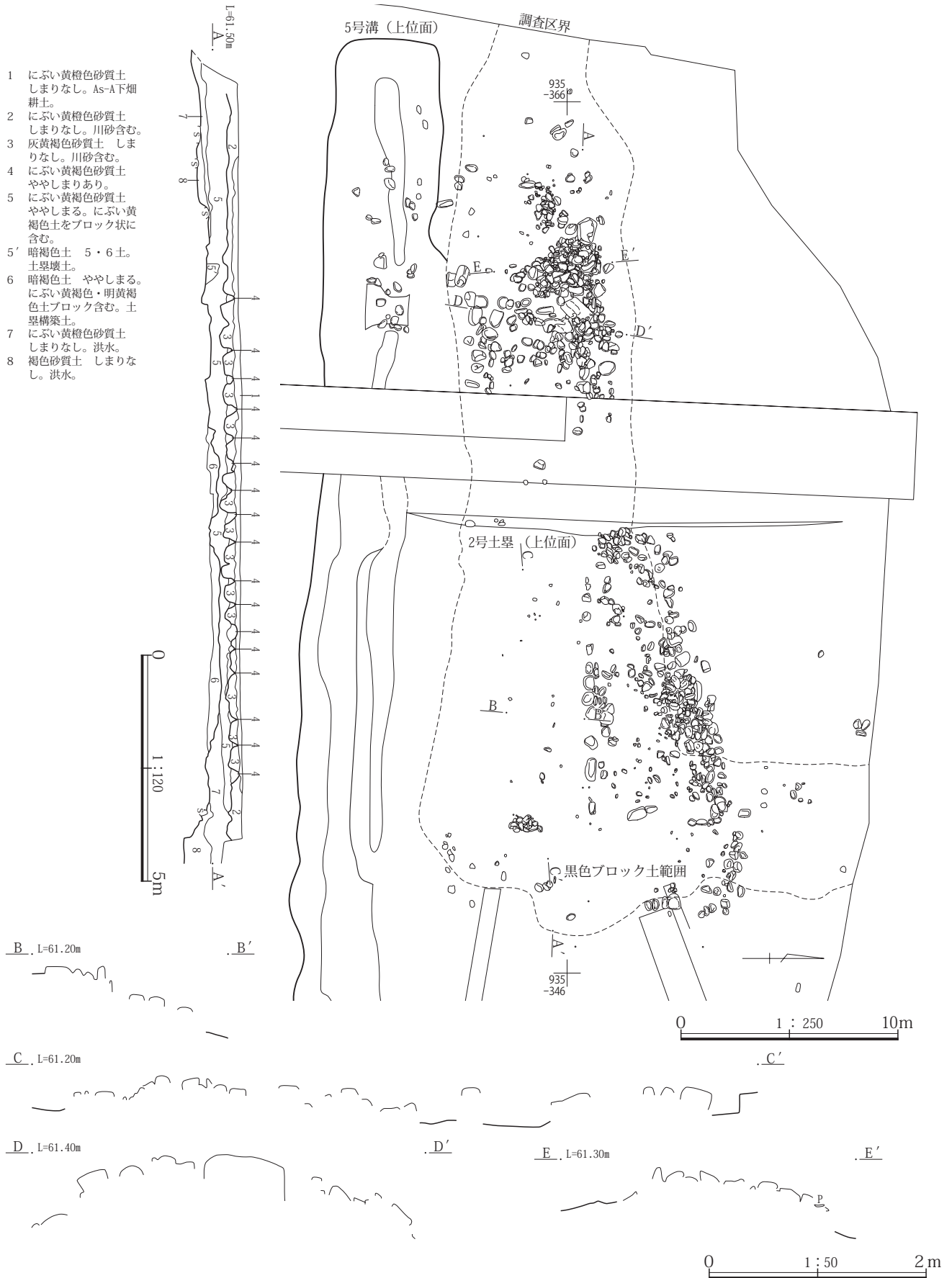


1-1区2面37・118号畑、2号土塁、5号溝



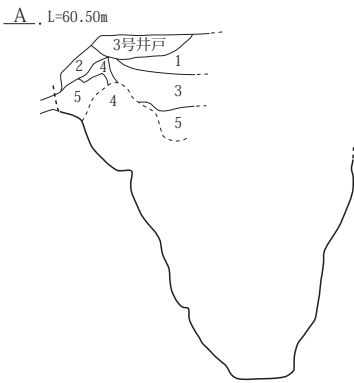
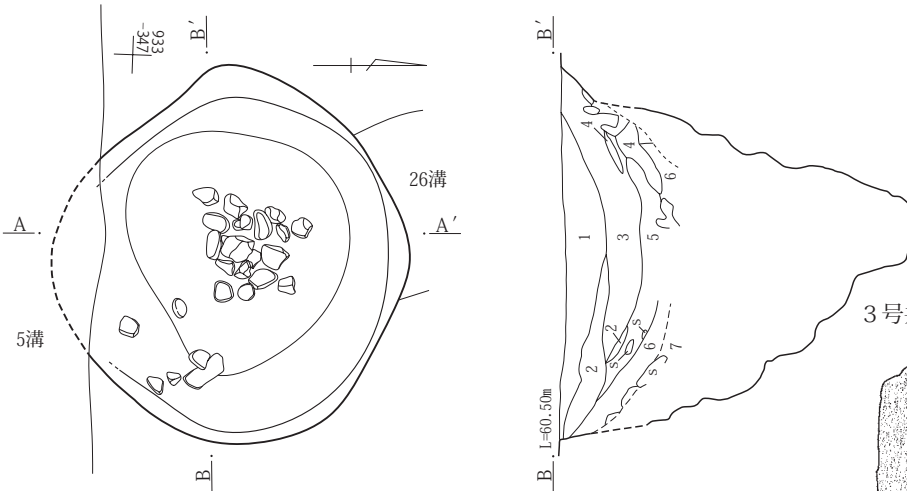
第59図 1区2・3号竪穴(上)、2号土塁上面と5号溝の痕跡及び37・118号畑

1-1区2面2号土塁、5号溝



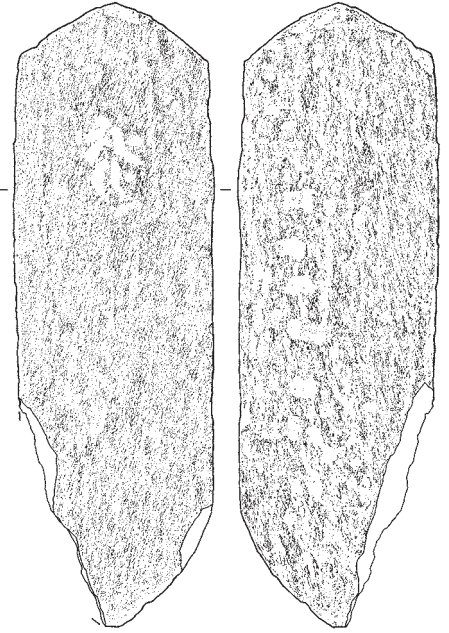
第60図 1区2号土塁上面の集石と5号溝の痕跡

1-1区2面3・4号井戸
3号井戸

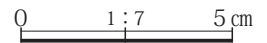


- 3号井戸
 1 にぶい黄褐色粘質土 シルト主体。黄褐色粘質土ブロック含む。
 1' 1よりやや明るい
 2 黄褐色粘質土ブロック主体 にぶい黄褐色粘質土含む。
 3 にぶい黄褐色粘質土 シルト主体。黄褐色粘質土ブロック1より多く含む。
 4 褐色粘質土 黄褐色粘質土ブロックを多量に含む。
 5 にぶい黄褐色粘質土 黄褐色粘質土ブロック含む。
 6 にぶい黄褐色粘質土
 7 黒褐色粘質土

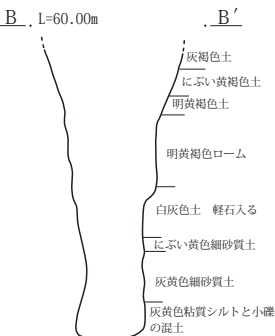
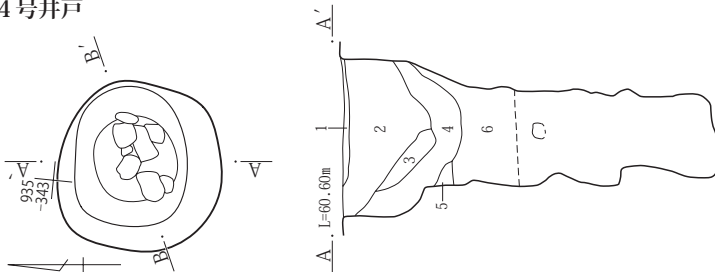
3号井戸出土遺物



326(1/7)

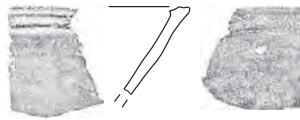


4号井戸

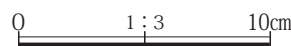


- 4号井戸
 1 灰黄褐色土 粘質。しまりあり。
 2 灰黄褐色土主体 粘質。しまりあり。明黄褐色土・灰白色土ブロックを多量に含む。
 3 褐灰色質土 粘質。しまりあり。黒褐色粘質土含む。
 4 褐灰色質土 粘質。しまりあり。As-B含む。
 5 黒褐色土 粘質。しまりあり。As-B含む。
 6 黒色土 粘質。しまりあり。As-B含む。

4号井戸出土遺物

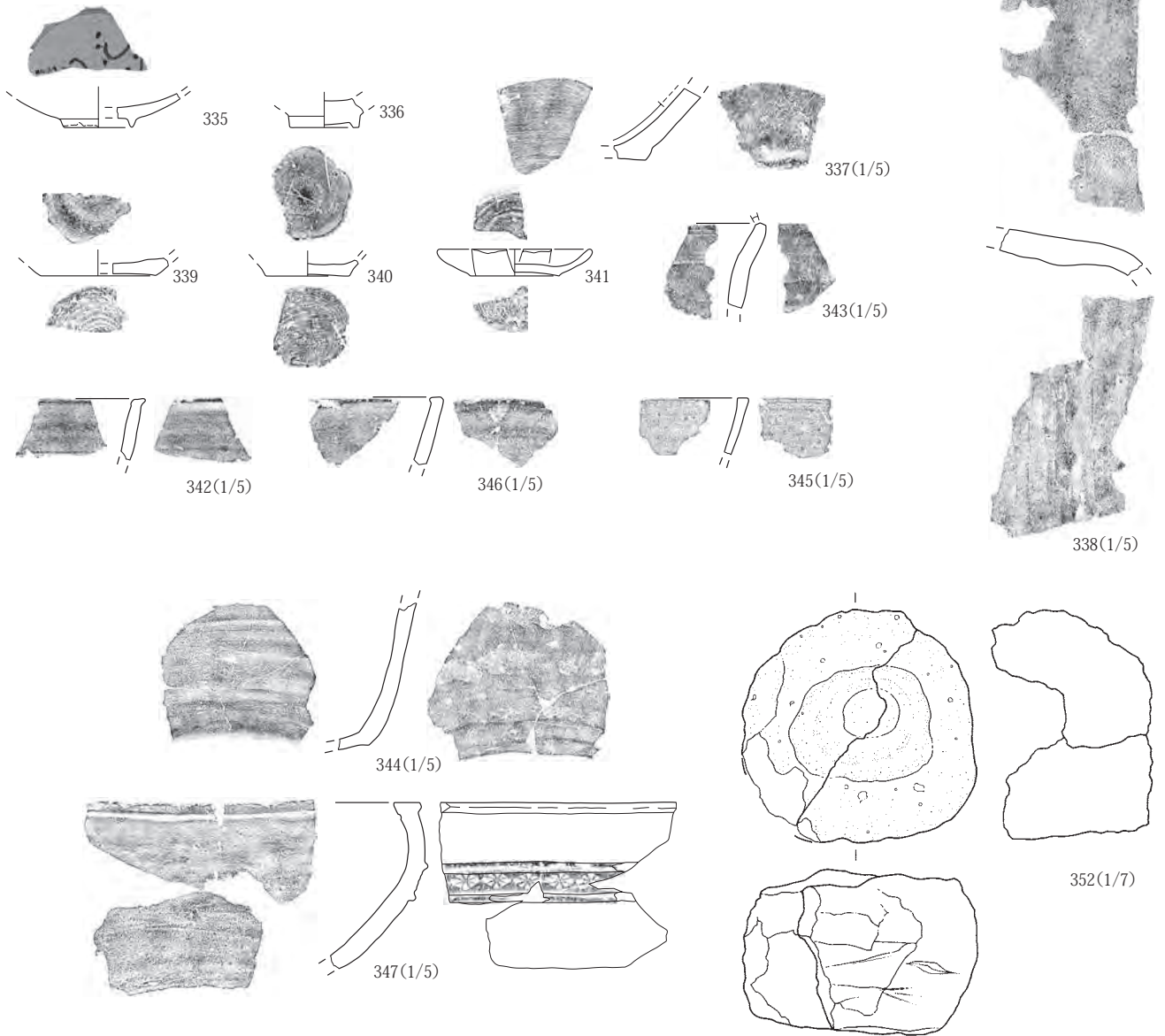


327(1/5)

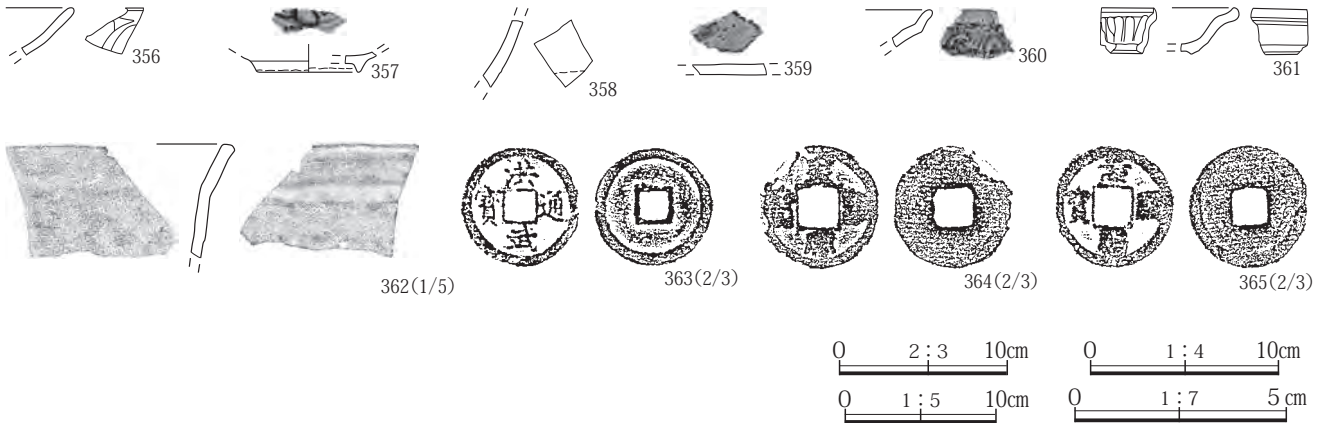


第61図 1区3・4号井戸と出土遺物

1区1号集石



2面遺構外出土遺物



第62図 1区1号集石と2面の遺構外の出土遺物

第3節 3面の調査

(1) 3面の概要

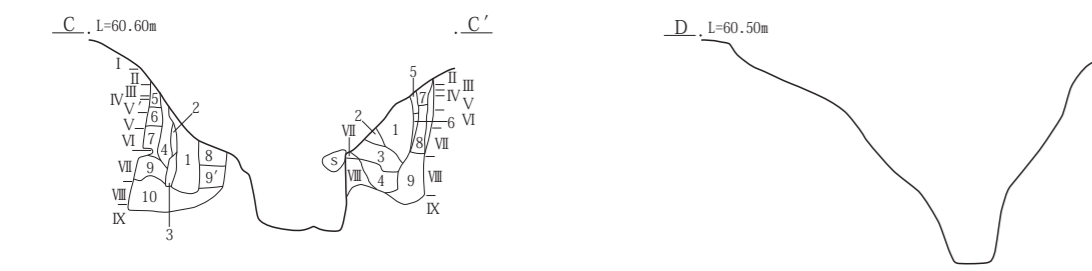
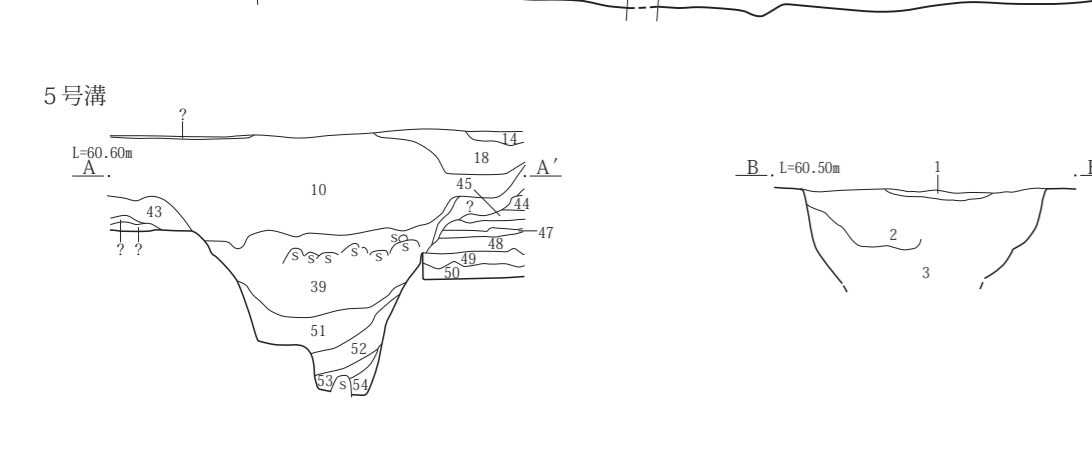
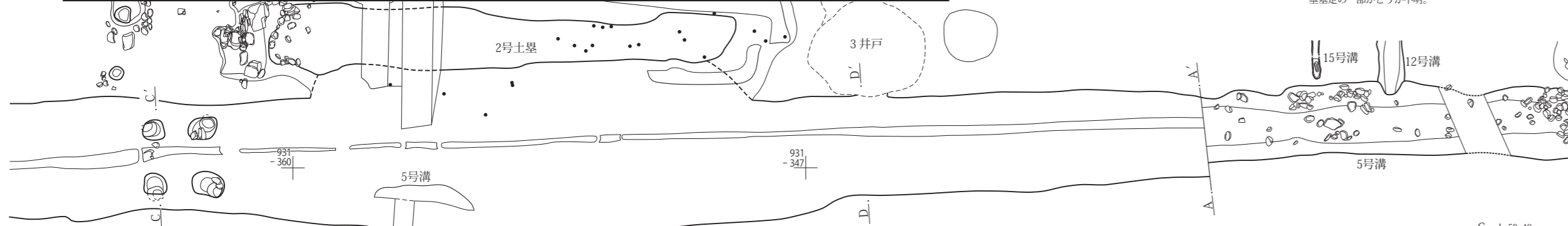
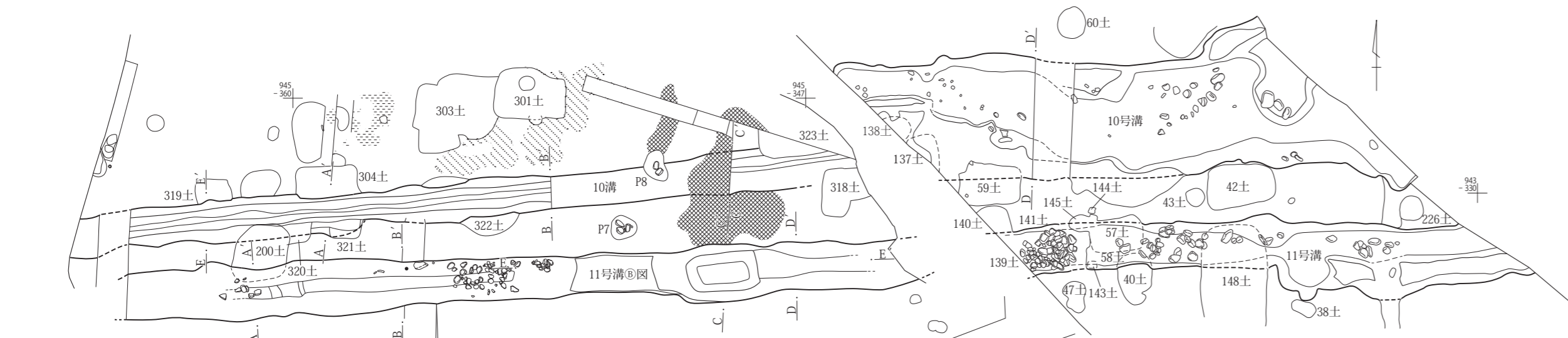
3面は中世面である。1-1区のみで確認、調査した。

1-1区東部と北部を対象とした1-1区の1期調査では、2面の調査終了後、東部南側より4面(As-B下面)

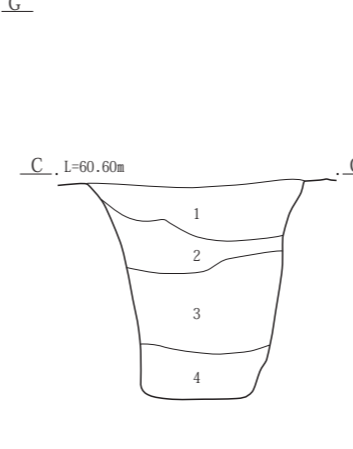
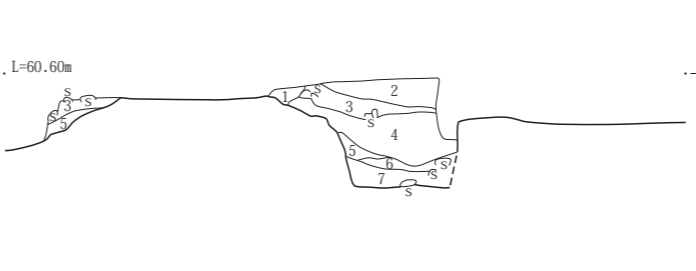
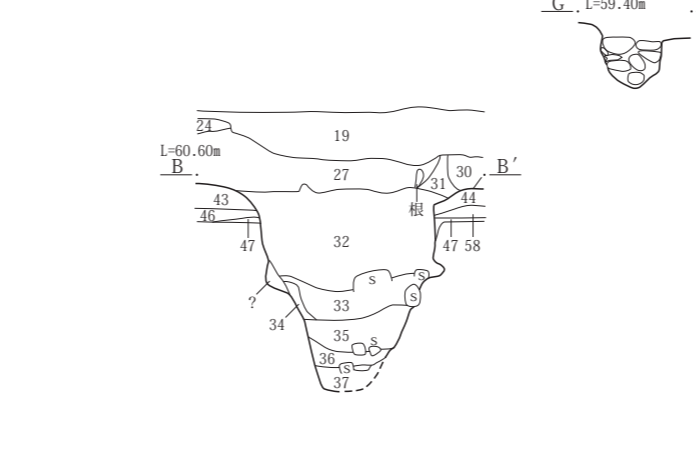
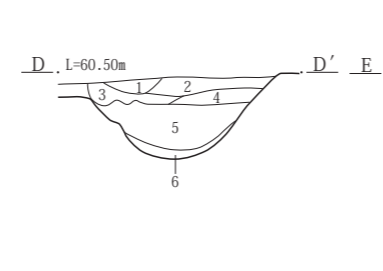
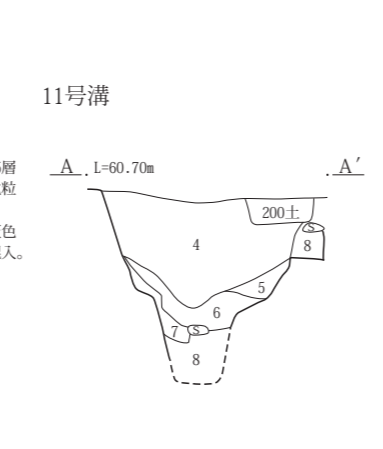
の調査に入った。東部の調査は順調に進んだが、1期調査区域の引渡し期限の2週間前になって、東部と北部の境付近に在る、後述の5号溝付近から中世遺構が現れ始め、以北・西の区域で、溝、土坑など合わせて200余りを数える遺構が確認され、館の存在が想定された。1期調査区域での本体工事は、当該区域が利根川に接しているため、その施工が渇水期に限られるため、期限に合わせた調査を行った。しかし、完掘できなかった遺構もあり、また、調査面が豊水期の利根川の水位に近かったことも



第63図 1-1区3面全体図



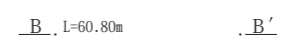
- 5号溝 SPB-B'
- 1 暗灰黄色細砂質土 粘性あり。
 - 2 にぶい黄褐色土 粘性あり。
 - 3 黄褐色土
- 5号溝 SPC-C'
- I 灰白色土 細砂質で粘性あり。若干の45層土小ブロック混入。小ブロック状に酸化粒若干沈着。
 - II 灰色粘質土 綿状に酸化粒沈着し暗黄灰色呈する所多し。黒色粘質土小ブロック混入。細かい川砂混入。
 - III 黒褐色土 As-B混土。砂質。B黒。
 - IV As-B
 - V 灰黄褐色粘質土
 - VI 黒色粘質土
 - VII 灰黄褐色土 細粒で粘性あり。
 - VIII 黒褐色土 細粒で粘性多少あり。
 - IX 明黄褐色土 硬質。粘性弱。
 - V' 灰褐色粘質土



- 11号溝 SPA-A'
- 4 黒褐色土 粘性あり。灰黄色シルト・黄褐色シルト・黒色粘質土・明黄褐色土小ブロック多く混入。
 - 5 黒褐色土 粘性やや強。明黄褐色土ブロックと黒色粘質土小ブロック多く混入。
 - 6 灰黄褐色土 粘性あり。明黄褐色土・黒色粘質土ブロックと若干の黄灰色シルトブロック混入。
 - 7 黄灰色土 粘性弱く細粒。明黄褐色土ブロック混入。
 - 8 黄灰色砂質土 粘性あり。細かい川砂混入。
- 11号溝 SPB-B'
- 19 灰黄色砂質土 粘性見られる。川砂若干混入。酸化粒沈着し橙色の縞模様多く広がる。
 - 24 25層砂に26層土小ブロック混入。
 - 27 にぶい黄褐色土 やや砂質で粘性あり。灰白色細砂質土粒混入。
 - 30 灰黄褐色砂質土 32層土小ブロック若干混入。
 - 31 灰黄褐色砂質土 32層土小ブロック混入。
 - 32 灰褐色土 明黄褐色土粘性弱ブロック・灰黒色土粘性ありの小ブロック。黄褐色土の小ブロック多く入る。
 - 33 35層土に褐灰色砂質土入る小ブロック混土。32層土の混入物粒若干混入。
 - 34 灰黄色砂質土 若干の明黄褐色土・黒褐色土小ブロック混入。
 - 35 黄灰色砂質土 川砂入り上位に33層土粒混入。
 - 36 黄褐色土 粘性やや弱。黒色粘質土の大ブロックの混土。
 - 37 黄灰色粘質土 川砂混入。36層土小ブロック混土。
 - 43 灰褐色土 粘性あり44・45・42層土小ブロック混入。
 - 44 灰白色土 細砂質で粘性あり。若干の45層土小ブロック混入。小ブロック状に酸化粒若干沈着。
 - 45 灰色粘質土 綿状に酸化粒沈着し暗黄灰色呈する所多し。黒色粘質土小ブロック混入。細かい川砂混入。
 - 46 黒褐色土 As-B混土。砂質。B黒。
 - 47 As-B
 - 58 褐色土 やや粘質。明黄褐色土ブロックをやや多量に含む。

- 11号溝 SPC-C'・SPD-D'
- a にぶい黄色～明黄褐色土 極細粒。締まる。粘性弱。
 - b 黒色粘質土
 - 1 2層土ににぶい黄色～明黄褐色土ブロック、黒色粘質土粒含む。5層土小ブロック混入。
 - 2 灰黄褐色土 粘性やや弱。少量のにぶい黄色～明黄褐色土・黒色粘質土粒含む。
 - 3 2層土ににぶい黄色～明黄褐色土・黒色粘質土含む。5層土小ブロック混入。
 - 4 にぶい黄色～明黄褐色土・黒色粘質土含む5層土と2層土の小ブロック混土。
 - 5 黒褐色土 粘性やや弱。細粒で粘性やや弱い灰黄褐色土・にぶい黄色～明黄褐色土ブロックやや多く入り、黒色粘質土小ブロック混入。
 - 6 黒色土に灰黄褐色土・にぶい黄色～明黄褐色土・黒色粘質土小ブロック混入。

10号溝



- 10号溝 SPA-A'
- 1 灰褐色粘質土 ややしまる。黄褐色粘質土B・暗褐色粘質土B含む。
 - 11 黄褐色粘質土Bと暗褐色土Bの混合土で少量の灰黄褐色土Bを含む。11層が灰黄褐色土少量。
 - 12 黄褐色粘質土Bと暗褐色土Bの混合土で少量の灰黄褐色粘質土Bを含む。
 - 13 灰黄褐色砂質土で、水性堆積

- 10号溝 SPB-B'
- 1 灰褐色粘質土 ややしまる。黄褐色粘質土B・暗褐色粘質土B含む。

- 2 灰褐色粘質土 黄褐色粘質土Bを多く含む。
- 3 1層に似るが暗褐色粘質土Bを多く含む。
- 4 1層に似るが暗褐色粘質土の含量での分層。
- 5 1層に似るが暗褐色粘質土の含量での分層。
- 6 2層に似るが暗褐色粘質土の含量での分層。
- 7 灰褐色砂質土 水性堆積。黄褐色粘質土B含む。
- 8 灰褐色砂質土 水性堆積。少量の暗褐色土を含む。
- 9 灰褐色砂質土 水性堆積。ラミナ。
- 10 灰褐色砂質土 水性堆積。ラミナ。

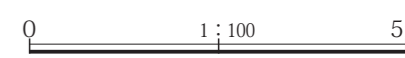
- 10号溝 PD-D'
- 1 にぶい黄褐色土 褐灰色土・灰赤色粘質土小ブロック混入。
 - 2 にぶい黄褐色土 灰白色粘質土小ブロック混入。粘性あり。
 - 3 灰黄色粘質土 灰赤色粘質土・黒褐色土小ブロック混入。
 - 4 褐灰色土 川砂と1層土小ブロック混入。
 - 5 灰色砂質土 川砂と褐灰色土・灰赤色粘質土ブロック入る。
 - 6 灰色細砂 川砂と灰赤色粘質土粒入り。小ブロック状に酸化鉄混入。

- 7 褐灰色粘質土 褐灰色土ブロック混入。
- 8 明黄褐色砂質土 粘性弱。
- 9 灰色粘質土 暗褐色土の酸化鉄粒混入。
- 10 褐灰色粘質土に黒褐色土入る。小ブロック混土層。

- 11号溝 EE'
- 1 暗灰黄色土 粘性あるが細砂質。ブロックか。にぶい黄色～明黄褐色土小ブロックと黒色粘質土粒若干混入。
 - 2 灰黄褐色土 粘性やや弱。にぶい黄色～明黄褐色土・黒色粘質土中ブロックやや多く入る。
 - 3 にぶい黄褐色土 粘性欠く。にぶい黄色～明黄褐色土・黒色粘質土ブロック多く入り、若干の1層土小ブロック混入。
 - 4 灰黄褐色土 とにぶい黄色～明黄褐色土・黒色粘質土のブロック混土。若干の1層土小ブロック入る。

- 5 灰黄褐色土 と黒色粘質土の小ブロック混土。にぶい黄色～明黄褐色土小ブロック混入。
- 6 5層土に似るがブロック大きい。
- 7 黄灰色土 粘性あるが川砂入る。にぶい黄色～明黄褐色土・黒色粘質土小ブロック入る。にぶい黄色～明黄褐色土外面は酸化鉄沈着。

- 11号溝 FF'
- 1 灰黄色粘質土 しまる。灰褐色土B少量含む。
 - 2 灰褐色粘質土 Bを含まない。
 - 3 灰褐色粘質土 1層より色調明るい。黄褐色土B微量含む。
 - 4 暗褐色粘質土 黒褐色粘質土B少量。黄褐色粘質土B微量含む。粘性強。
 - 5 灰褐色粘質土Bと黄褐色粘質土Bの混土。粘性強。
 - 6 灰褐色粘質土Bと黄褐色粘質土Bの混土。



11号溝 A-A'

第64図 1区2号土塁と5・11号溝

あって、一部の遺構では出水により調査が難航し、その結果、底面の誤認による掘削不足が生じるなどの不備も生じた。

一方、1-1区中央部以西、以南の区域を対象とした、2期調査では、2面の調査でその北部で周囲の砂質土と明らかに異質な黒褐色土から成る、後述の2号土塁が検出された。その調査に伴い、断ち割り調査を施したところ、館使用時の使用面が特定された、調査期間に鑑み、外堀である5号溝の南5m以北の区域に限って、この使用面を調査することとし、以南の区域では4面の調査と併せて調査を実施することとした。また、1期調査区域北部と2期調査区域北部の間に在る、3期調査区域も館の使用面を調査した。

3面の北部には館があり、これに伴う遺構と、中・南の館外の遺構とに分けられる。このうち館に伴う遺構は土坑・ピット262基、溝10条、土塁1条、橋脚1基、土橋1箇所、門1箇所があった。溝のうち5・6・8・9・10の6条は、堀と呼ぶべき遺構であった。また遺構の組み合わせによる虎口遺構1箇所が確認された。

一方、館外の遺構には、土坑16基、ピット4基があった。

(2)館内の遺構群

1. 2号土塁(第64～67図、PL.14・27)

概要 本土塁は、周囲の砂質土壌と異なる暗褐色粘質土であったため確認されたものである。埴輪や、周辺地域の古墳の石室に多用される角閃石安山岩が出土することから、古墳を壊して造られたと判断されるものである。また寛保(1742)2年と想定される洪水で一部が削られるが、当該洪水後も暫くは頂部が表出していた。

位置 1-1区西部北寄り、後述の5号溝の北側に接して在り、932～937-347～367グリッドに位置する。

規模 残長(東)：14.0m 残長(西)：2.9m

基底幅：348cm **上幅**：91cm **残高**：100cm

突出部 残長：1.8m **幅**：258cm **残高**：50cm

重複 本土塁は3面の他の遺構との重複は認められなかった。

尚、本土塁は南に2号が接している。

構築土 暗褐色粘質土等で埋没する。

構造 本土塁の走向はN-87°-Eを呈する、直線的な走

行を呈する。また東端部で北側に突出する。この突出部は現況では北側11号溝に達していないが、往時は達していたものと推定される。また、西部の後述の門の位置では、その上面が土塁裾部に対して20cm程高いものの、土塁本体としては3m途絶え、その西側は痕跡は残るものの、大きく削平されている。尚、本土塁の東側に土塁は確認されないが、館地表面の灰白色土とは異なる灰黄色土の痕跡が帯状に分布しているのが確認され、東部では堀の掘削土を用いて土塁を築いていることが分かる。

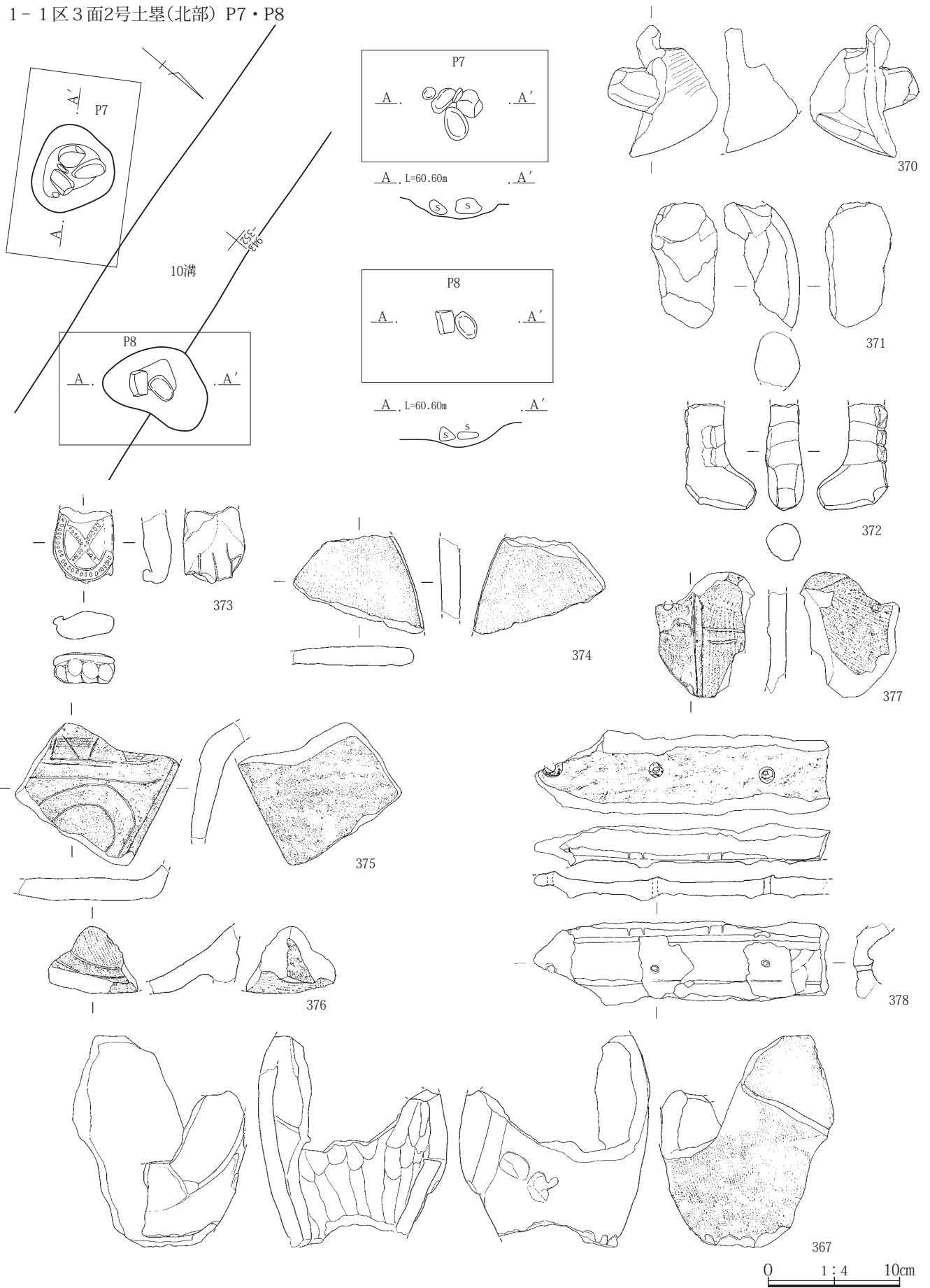
門の東側の土塁の北面西端部には複数段の石組が設置され、土塁の北面と土塁東部の突出部東西両側面に1段の石列が据えられていた。この石列の礎の基底は突出部東面を除いて、土塁裾端部から30cm程高い位置にあり、礎は浅い掘り込みの中に据えられ、下位10cm程が埋められていた。門の東側は礎の遺存状態から、土塁下位には、面取りされた石が据えられていたものと想定され、一方、門の西側の土塁下面には径36×33cm、深さ24cmを測る隅丸方形プランを呈するピットと径41×40cm、深さ34cmを測る不定形プランを呈する二つのピットが南北に1.5m程隔たって掘削されていた。また、土塁の北面と突出部西面は、この石列を境に崩れたように緩傾斜となっている。この石組の北西隅部のやや南東寄りには大型の礎が据えられ、北面の西端部を除く北面から突出部西面にかけては古墳の石室に使用されたとみられる、面取りされた角閃石安山岩が多く転用されている。

遺物 本土塁からは、人物埴輪男子(367)・女子(368)・頭部(369)・左手(370)・左腕(371)・不明(372・373)、形象埴輪で楯と思われるもの(374)・家(375～382)・基台部(383)・不明(384～390)、円筒埴輪(391～394)、在地系土器皿内耳鍋(395)、不明鉄製品(396～398)、砥石、礎石(400)、礎石と見られるもの(401)、板碑片(405)、茶臼、凹み石(407)、不明石製品などが出土している。
所見 本土塁はその残存高と館の建設位置から推して、高土居に属するものである。

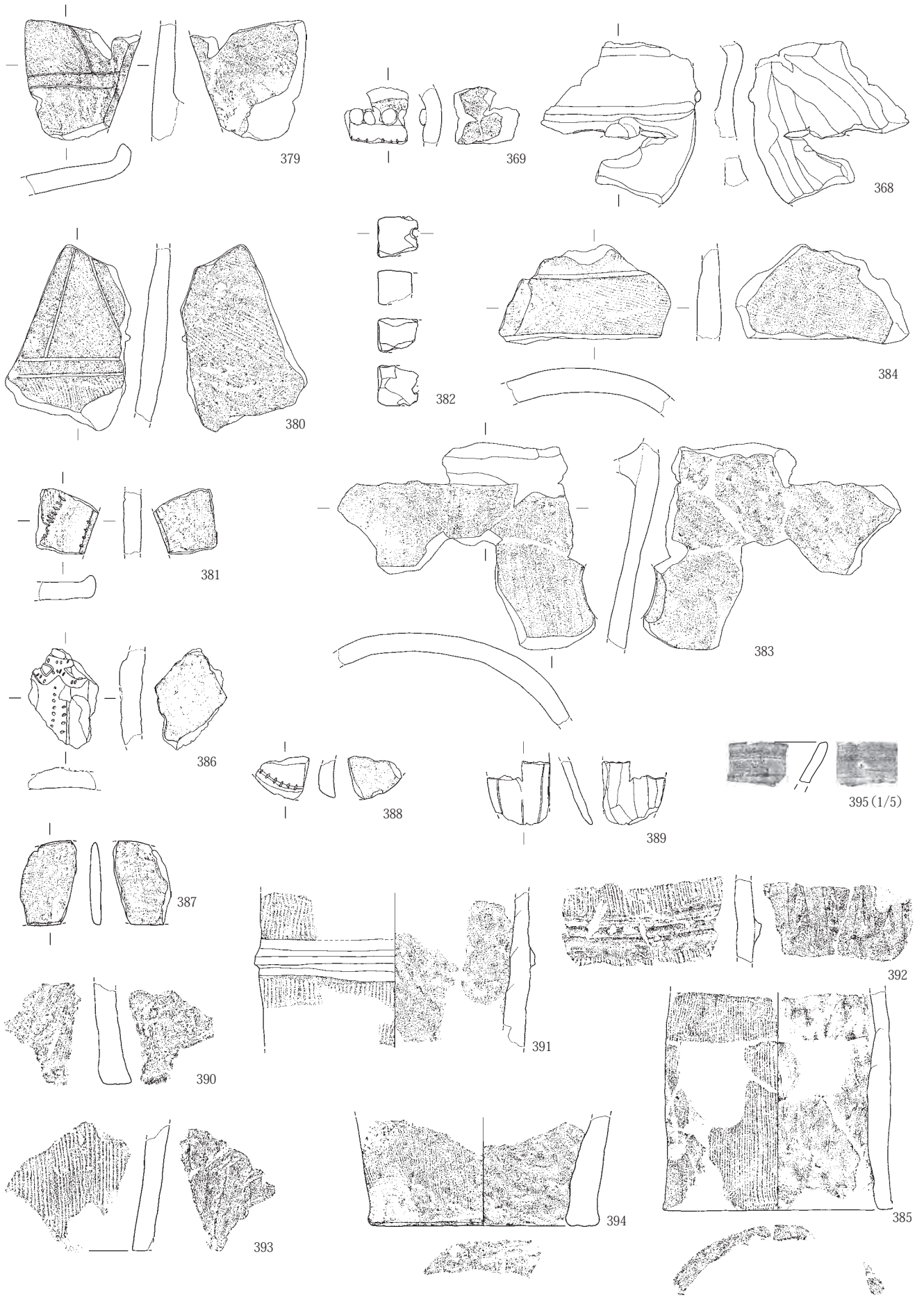
また、本土塁は、その痕跡等から推して、本来5号溝の北に側全体に設置されていたものと想定される。また東部の北側へ突出する部分は、調査段階では北側11号溝に達していないが、往時は達していたものと推定される。

一方、北面と突出部西面の石組の裾は、現在は崩れて

1-1区3面2号土塁(北部) P7・P8

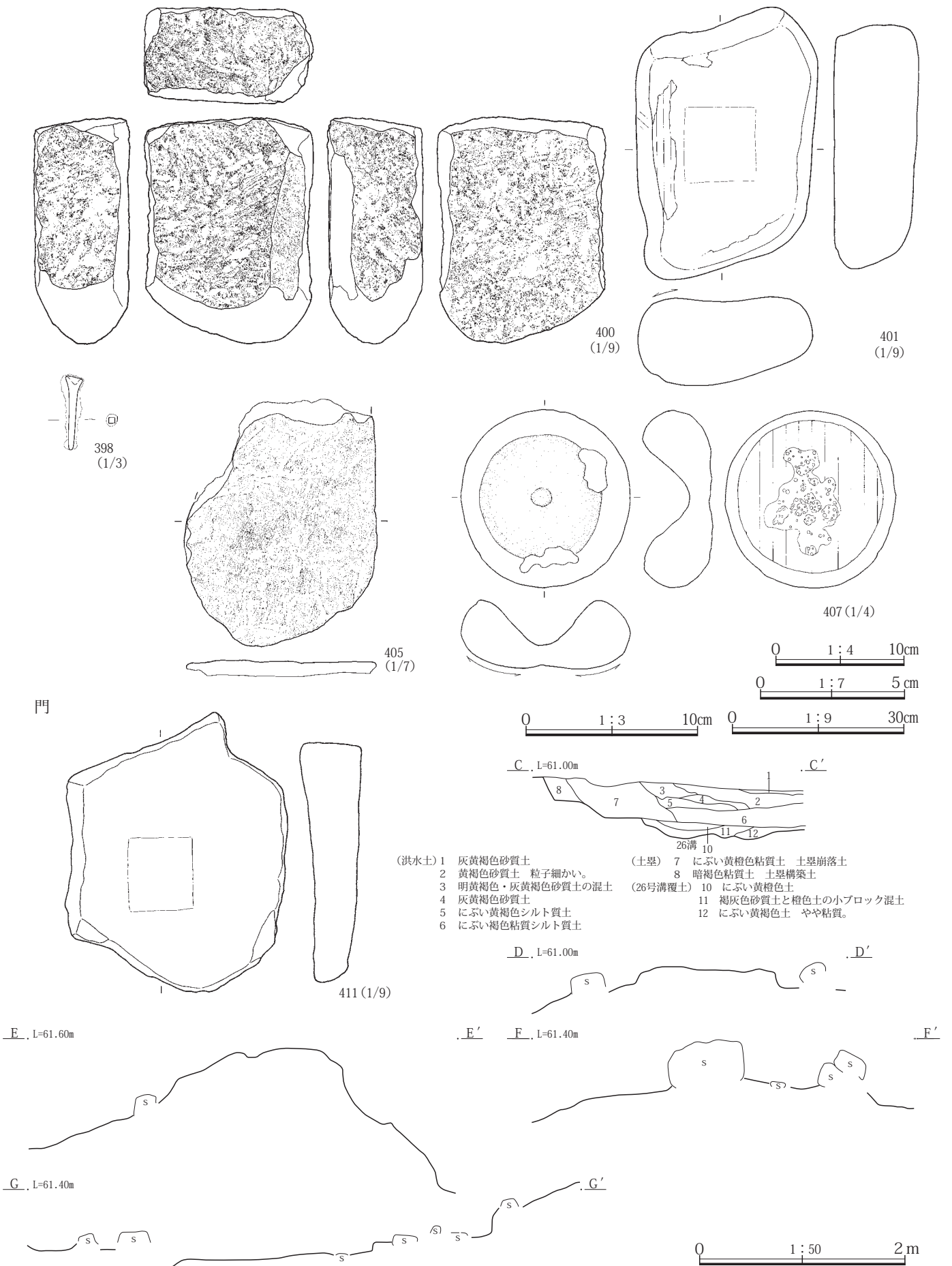


第65図 1区2号土塁下7・8号ピットと2号土塁出土遺物(1)



第66図 1区2号土壘出土遺物(2)

第3章 発見された遺構と遺物

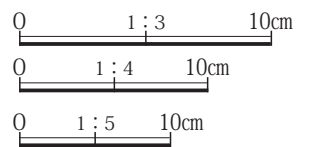


第67図 1区2号土塁の断面と出土遺物(3)

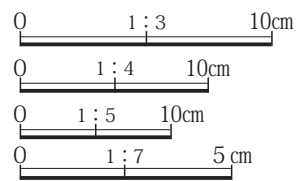
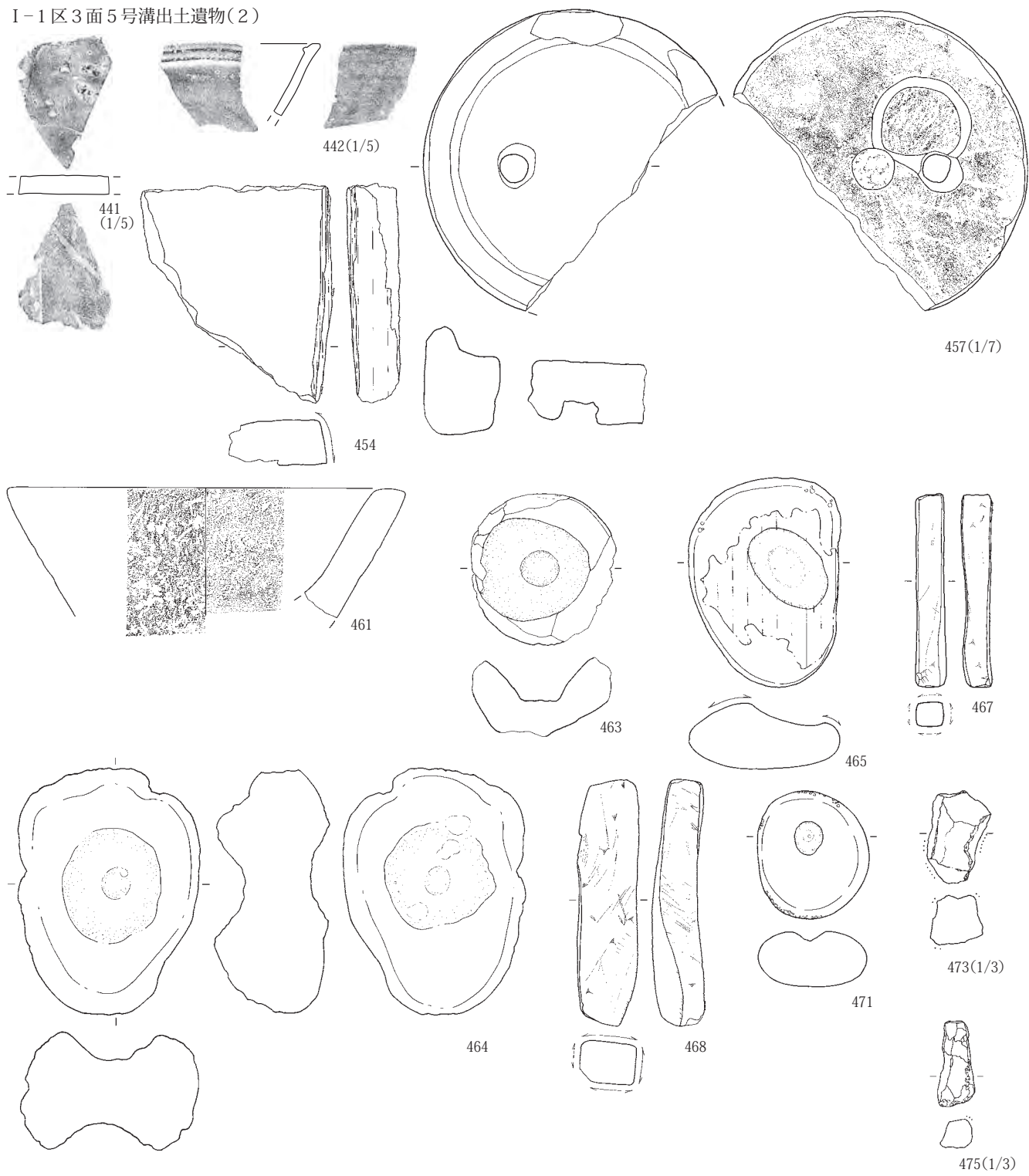
I-1区3面5号溝出土遺物(1)



第68図 I区5号溝出土遺物(1)



I-1区3面5号溝出土遺物(2)

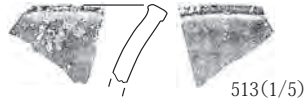


第69図 1区5号溝出土遺物(2)

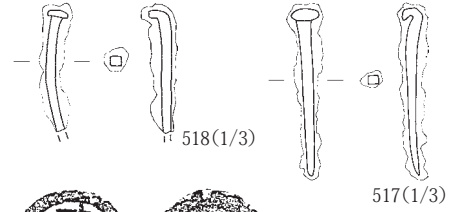
10号溝



511(1/5)



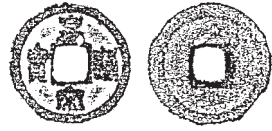
513(1/5)



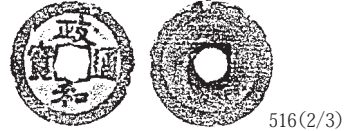
517(1/3)



512(1/5)



515(2/3)

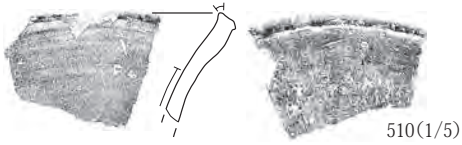


516(2/3)

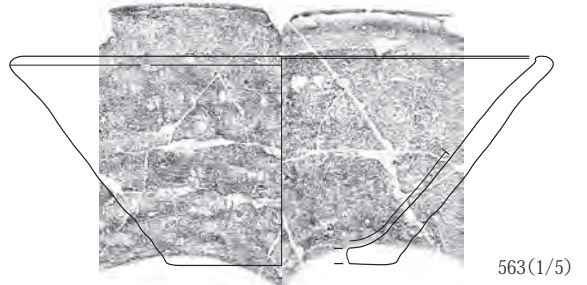


514(1/5)

141号土坑

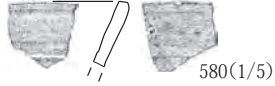


510(1/5)

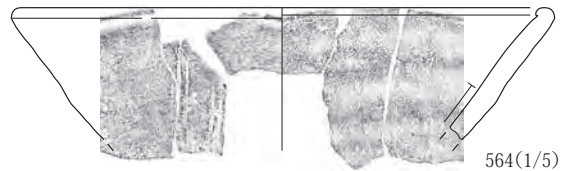


563(1/5)

10号溝内河道跡

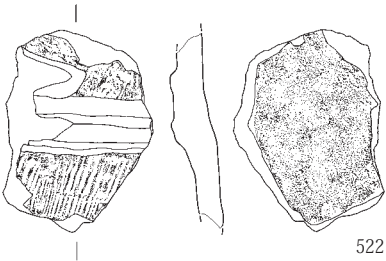


580(1/5)

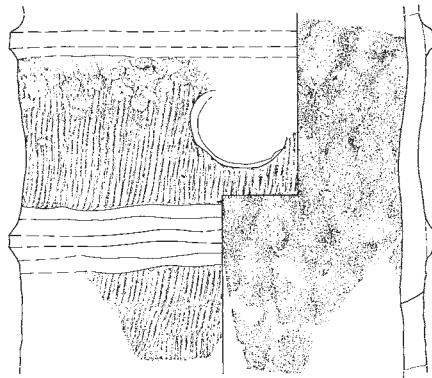


564(1/5)

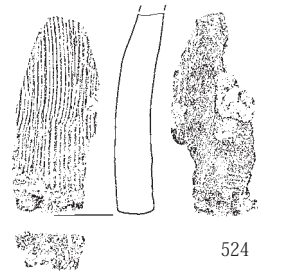
11号溝



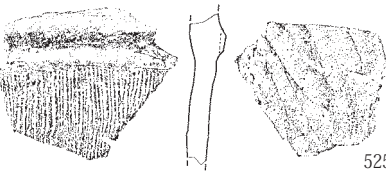
522



523



524



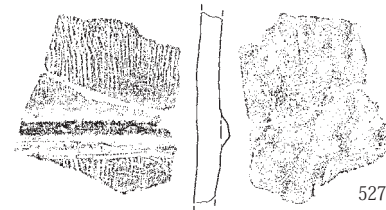
525



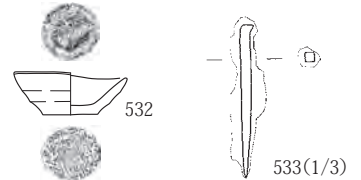
528



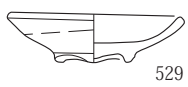
526



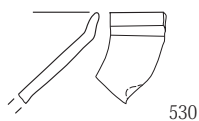
527



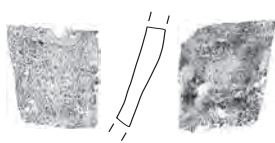
533(1/3)



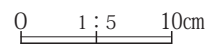
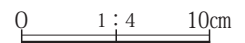
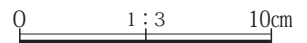
529



530

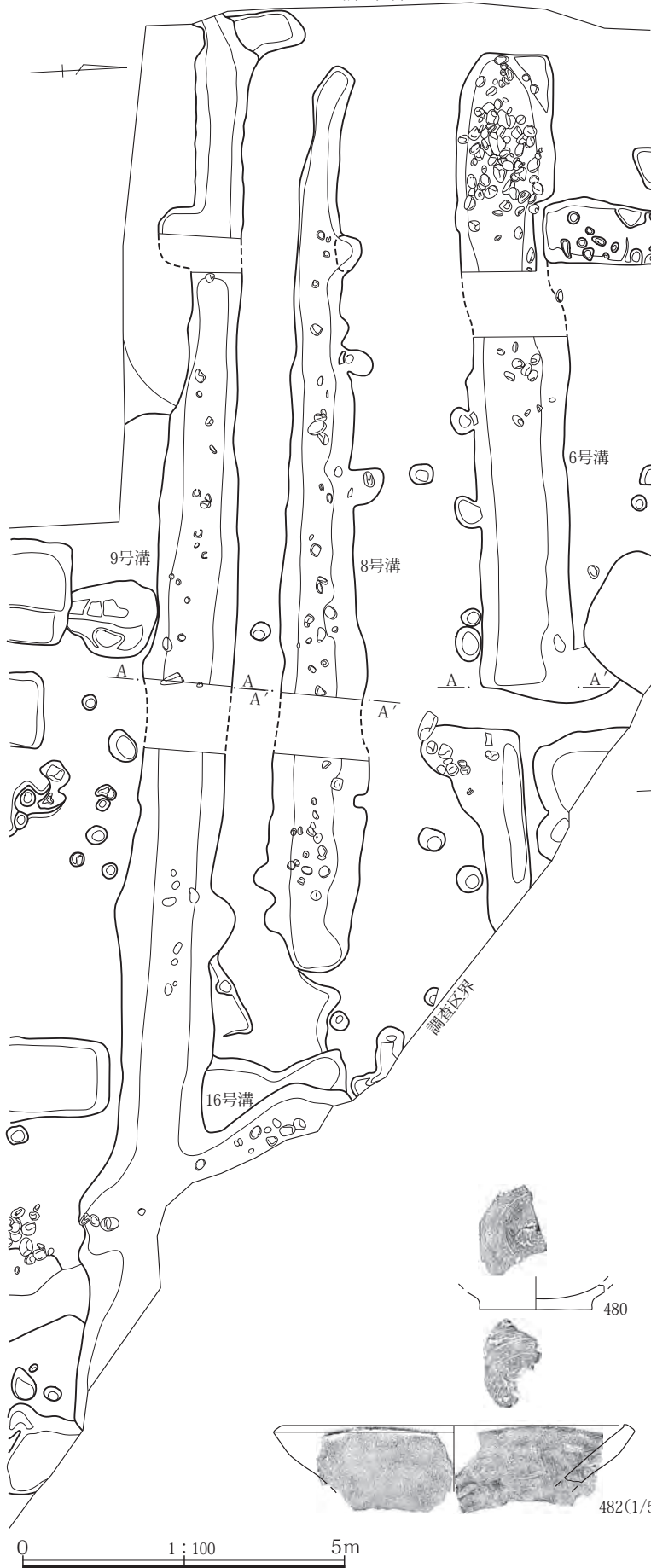


531(1/5)

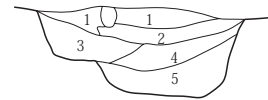


第70図 1区10・11号溝出土遺物

調査区界

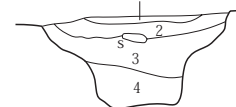


6号溝 SPA-A' A, L=60.50m A'



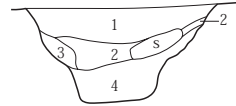
- 6号溝 SPA-A'
- 1 黄灰色細砂質土 明黄褐色土小ブロック、酸化鉄塊、2層土粒混入。
 - 2 明紫灰色細砂質土 粘性弱。
 - 3 青灰色細砂質土 粘性あり。酸化鉄と酸化鉄塊含む。
 - 4 明青灰色細砂 酸化鉄含む。
 - 5 青灰色土粒と細砂の混土 酸化鉄小ブロック・塊混入。

8号溝 A, L=60.50m A'



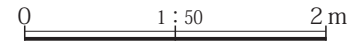
- 8号溝 SPA-A'
- 1 にぶい黄橙色シルト質土 粘性あり。As-Cと明黄褐色土混入。
 - 2 にぶい黄橙色・灰黄褐色のシルト質土の混土 灰白色シルト質土ブロック、明黄褐色土粒混入。
 - 3 灰黄褐色土 粘性あり。灰白色シルト質土・明黄褐色土小ブロック混入。
 - 4 にぶい黄褐色粘質土 灰白色シルト質土・黒褐色土ブロック混入。

9号溝 A, L=60.50m A'

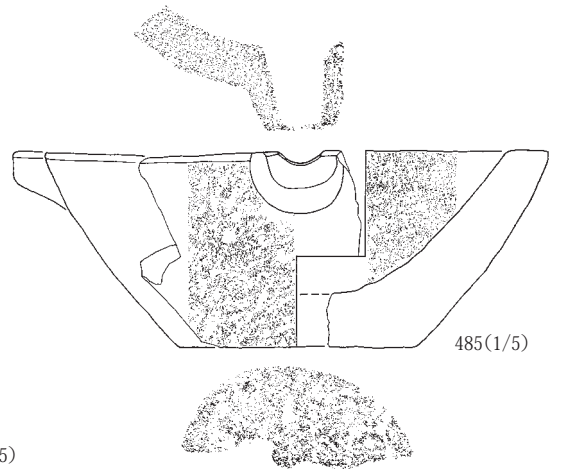
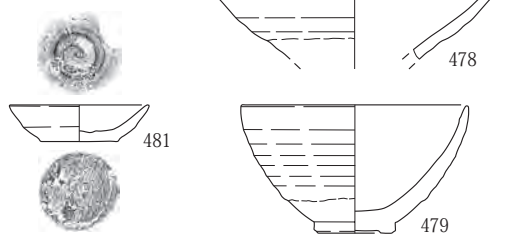


- 9号溝 SPA-A'
- 1 褐灰色土 灰白色シルト質土・明黄褐色土・黒褐色土混入。
 - 2 にぶい黄褐粘質土
 - 3 2層土に黒褐色土粒混入
 - 4 灰黄褐色粘質土

- a 灰白色シルト質土
b 明黄褐色土
c 黒褐色土

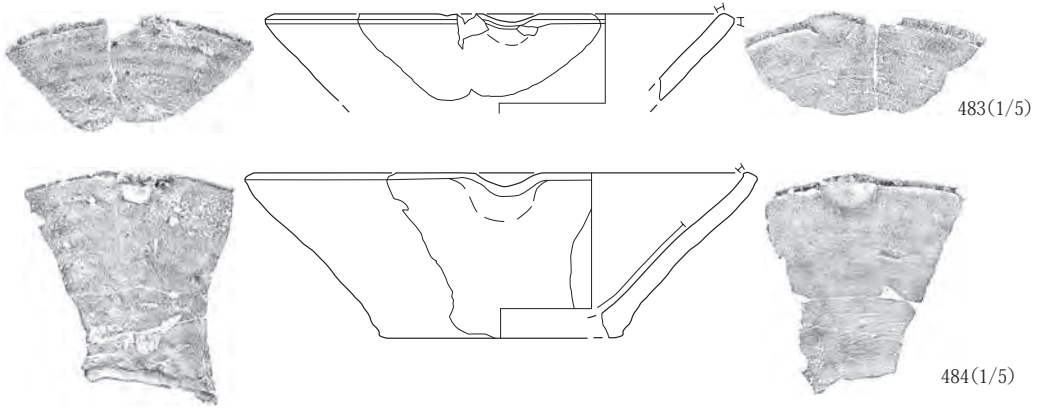


6号溝(1)



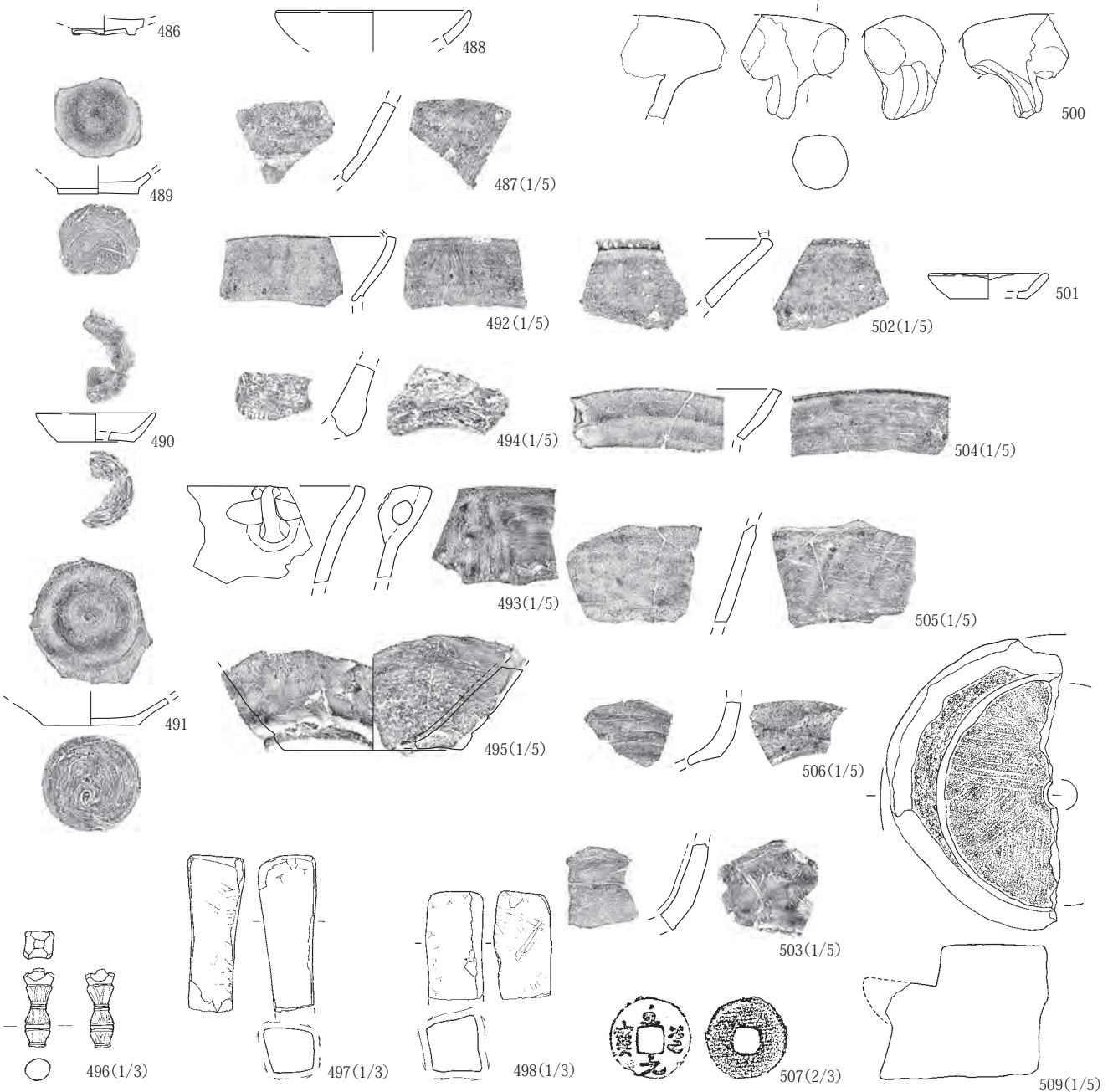
第71図 1区6・7・8・16号溝と出土遺物(1)

6号溝(2)

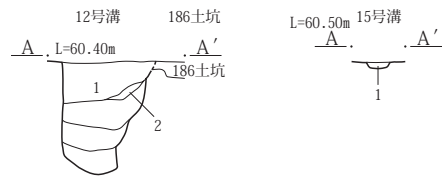
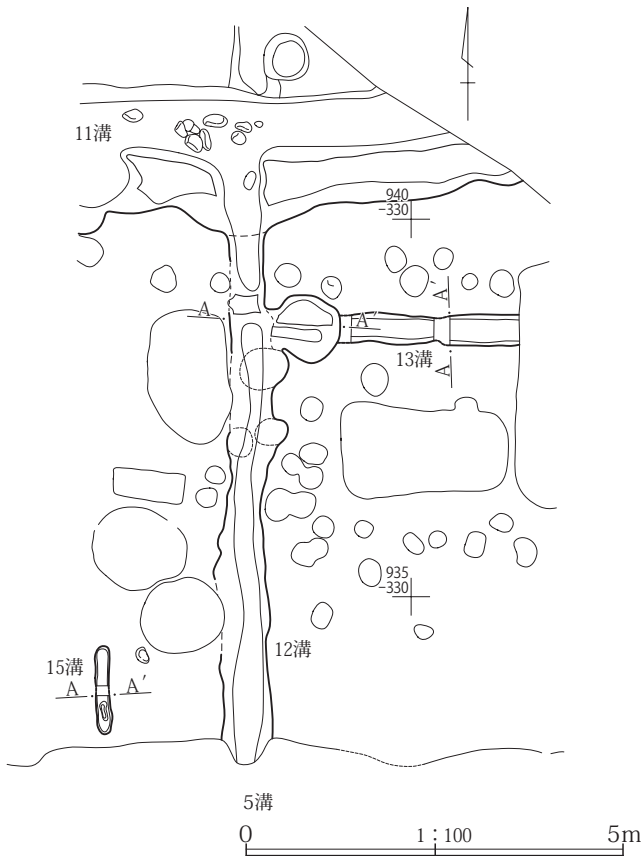


8号溝

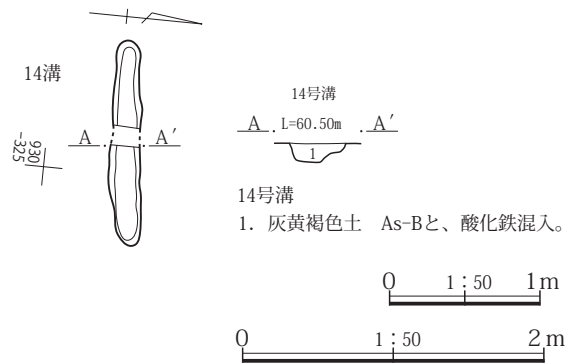
9号溝



第72図 1区6・8号溝出土遺物



- 13号溝
 1. 褐灰色土 粘性ややあり。地山(灰褐色粘質土)小ブロック混入。
 15号溝
 1. 灰黄褐色土 As-Bと、酸化鉄混入。



第73図 1区12～15号溝

いるが、その土量と、土塁北面の傾斜に鑑みて、この石組みの裾側に、裾端部より40cm程の高さで武者走りが設けられていたものと想定される。

本土塁の時期は、並走する5号溝から推して、14世紀後半から15世紀の所産として把握される。

2. 内郭側の堀(第64・68～70図、PL.12・13・28)

概要 6・8・9・16号溝は、内郭側に在る堀である。

位置 6・8・9・16号溝は1-1区北端部に在り、位置するグリッドは、6号溝は958・959-348～361、8号溝は955・956-347～361、9号溝は951～954-341～362、16号溝は951～955-343～345である。

規模 6号溝 残長：13.3m 幅：125cm 深さ：57cm

8号溝 残長：14.1m 幅：123cm 深さ：62cm

9号溝 残長：20.5m 幅：135cm 深さ：63cm

16号溝 残長：4.8m 幅：84cm 深さ：30cm

重複 6号溝は69・89・91・189・224号土坑、8号溝は95・96・196号土坑、9号溝は16号溝、105・196・197号土坑、16号溝は9号溝と重複するが、いずれも新旧関係

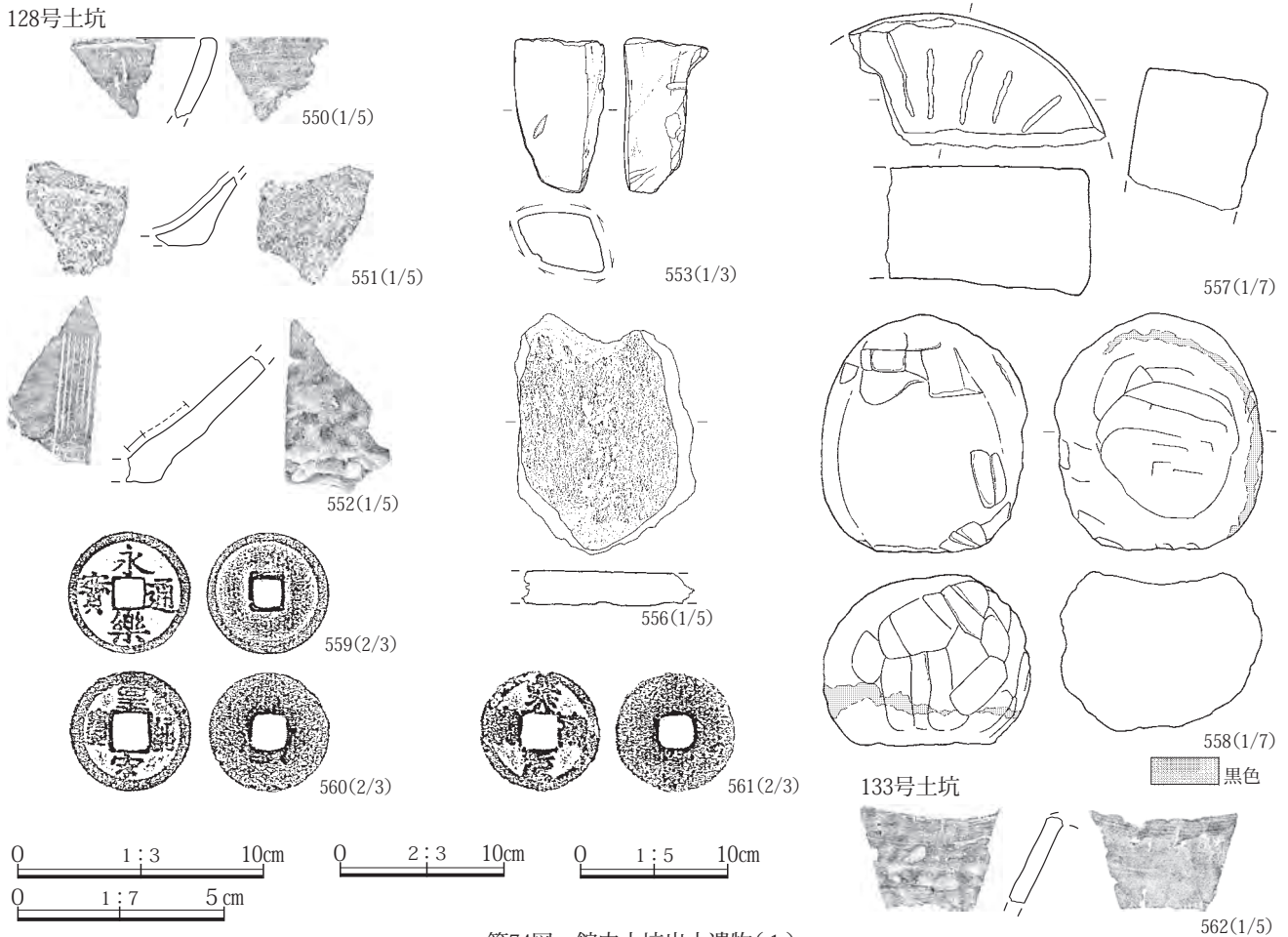
は特定できなかった。

覆土 8号溝は灰黄褐色土等、9号溝はにぶい黄橙色土等で埋没する。明青灰色土等で埋没する。

構造 各溝の走向は、6号溝はN-87°-W、8号溝は、9号溝はN-85°-W、16号溝はN-32°-Wに取り、その走行は共に直線的である。

4条の溝は、共に箱堀状を呈する。このうち6号溝は、その東部で南側に幅員を125cmから72cmに減ずる。その幅員減少区間の長さは、3.4m以上測る。また、8・9号溝はその規模も近似し、135cm程の間隔を以て並走し、8号溝が東部で途絶えてからの距離は175cm以上を測る。

遺物 6号溝からは古瀬戸陶器平碗(478)・天目碗(479)、在地系土器皿(480・481)・片口鉢(482～484)、石鉢(485)など、8号溝からは中国磁器白磁皿(486)、甕と見られる常滑陶器片(487)、在地系土器皿(488～491)・内耳鍋(492・493)・すり鉢(494)・片口鉢(495)、独鈷とみられる銅製品(496)、砥石(497～499)など、9号溝からは人物埴輪左腕(500)、在地系土器皿(501)・片口鉢(502・503)・内耳鍋(504～506)、至道元寶(507)、板碑片、茶



第74図 館内土坑出土遺物(1)

白下白(509)などが出土した。16号溝からの出土遺物はなかった。

所見 6・8・9号溝はその走向と規模から、館の堀と判断される。このうち8・9号溝は二重堀の可能性があり、6号溝東部の幅員減少箇所と8号溝の途絶えた以東に、虎口が在った可能性が考慮される。また、16号溝は土坑の可能性や、後述する10号溝東部と同様、利根川に削られた痕跡である可能性を有する。

また出土遺物から推して、6号溝は14世紀中葉から15世紀初頭、8・9号溝は14世紀後半から16世紀中葉の所産と認識されるが、8・9号溝は、6号溝が近接することから推して、15世紀以降に下る可能性を考慮したい。尚、16号溝の時期は特定できなかった。

3. 外郭側の堀(第71・72図、PL.12・28~29)

概要 5・10・11号溝は、外郭側に在る堀遺構である。

遺構番号については、5号溝は1-1区の2期調査では23号溝、10号溝は3期調査区では2号溝、11号溝は2期調査では25号溝も3期調査では1号溝と呼称していた

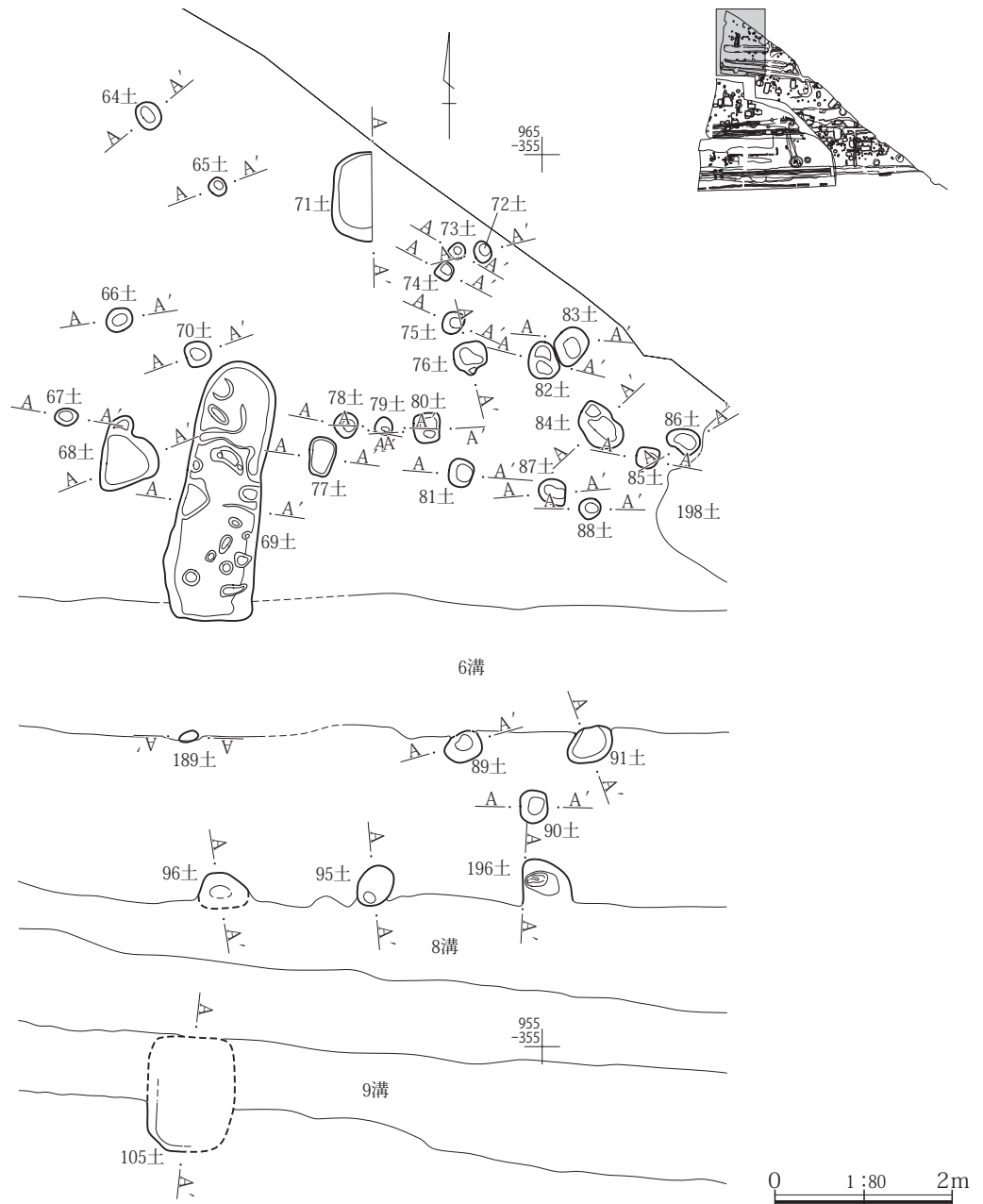
が、本報告では、1期調査期の呼称を用いて報告する。

5号溝では塵除けを伴う。また、5号溝の東部(1期調査区域)では、後述の薬研堀の底部部分は、埋め土土位が地山に近い土壌であったため、出水もあってこの埋土を底面と誤認して、完掘することができなかった。一方、5号溝は寛保2年と想定される洪水層によって埋没するまで、窪地として遺されていた。

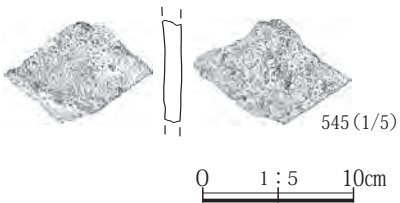
10号溝は1・2・3期調査で検出した遺構が11号溝の北に在ったため、一連の溝と解釈したが、再検討した結果、3条の溝が拘わり、また、東端部には利根川の氾濫の痕跡と思われる状態も見られた。3条の溝は北から、10a号溝、10b号溝、10c号溝と呼称することとした。

11号溝は1区調査区では、その西半で土坑群の重複が著しく、結果として完掘できなかったと判断している。位置 5・10・11号溝は1-1区中程の北寄り、所在グリッドは、5号溝は929~932-317~367、10号溝は940~942-330~365、11号溝は939~941-328~365である。

規模 5号溝 残長:50.4m 幅:28cm 深さ:169cm
10a号溝 残長:9.1m 幅:104cm 深さ:67cm



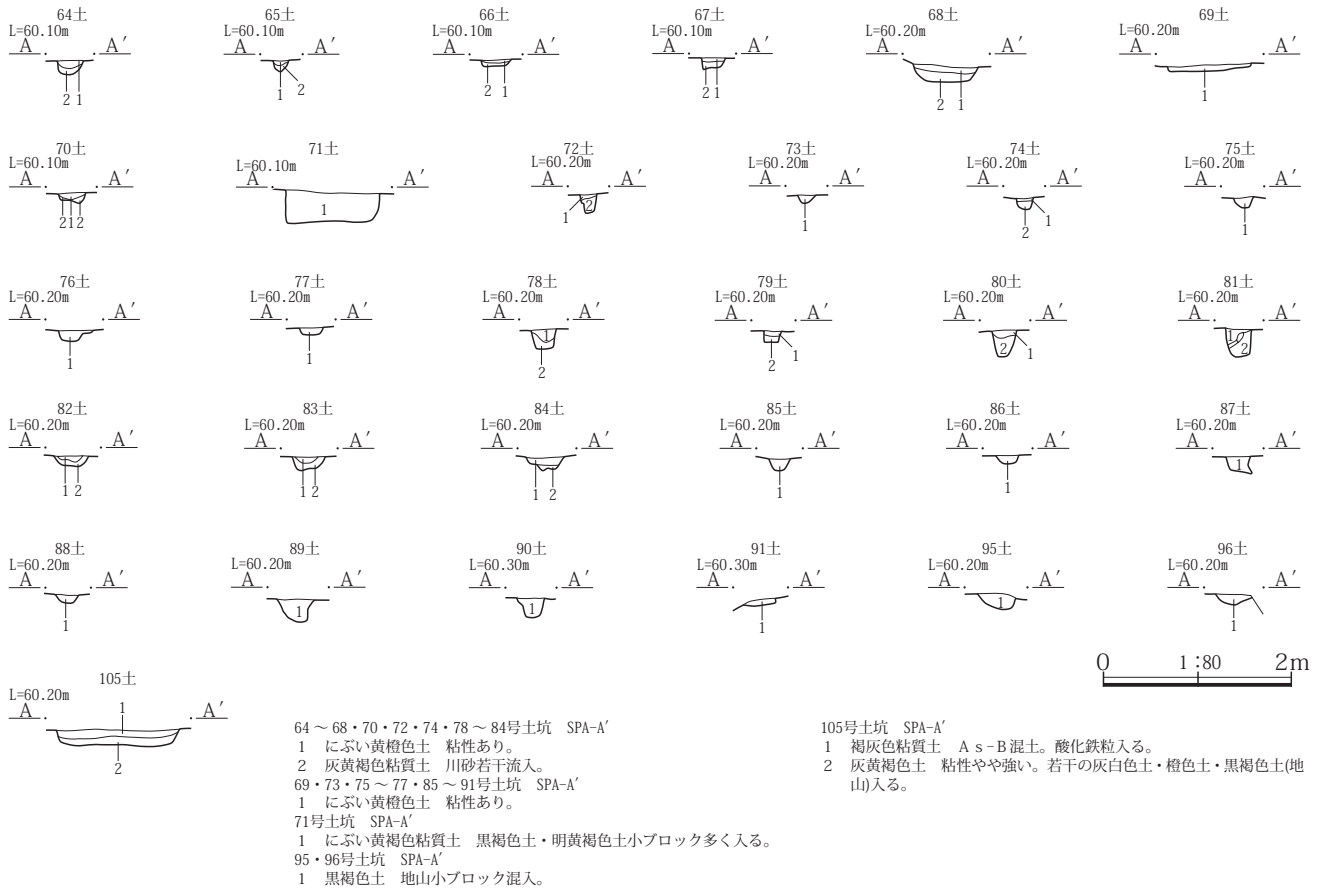
65号土坑



10 b号溝 残長：4.3m 幅：112cm 深さ：125cm
 10 c号溝 残長：18.4m 幅：112cm 深さ：138cm
 11号溝 残長：36.1m 幅：98cm 深さ：52cm、96cm
 重複 10 b号溝は10 c号溝と重複し10 b号溝の方が新しい。また、10 c号溝と11号溝は重複はなかったが、10 c号溝の覆土上面に11号溝の虎口の東側の土塁の痕跡と見られる灰黄褐色粘質土が面的に確認されたことから、11号溝の方が新しいものと思慮される。

この他、5号溝は12号溝、10 c号溝は318～322号土坑、11号溝は12号溝、40・57・58・139・140・142・143・145・148・200・225号土坑と重複するが、200号土坑が11号溝より古いことを確認した他は、いずれも新旧関係

第75図の1 館内土坑・ピット(1)と出土遺物(2)

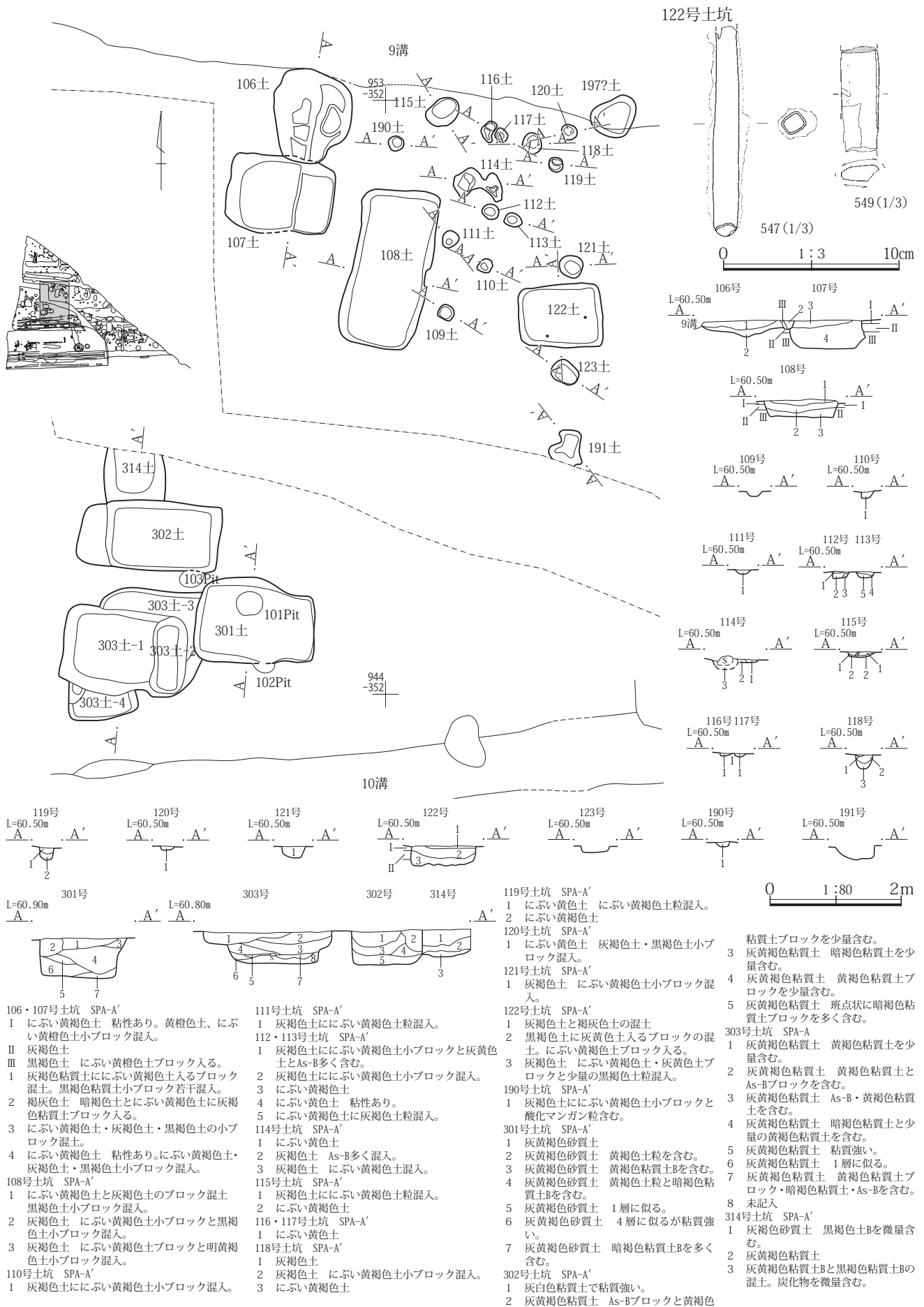


第75図の2 館内土坑・ピット土層断面(1)

表8 3面館内土坑一覧

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
17	935-326	隅丸長方形	184 × 93 × 23	N-90°
18	935-936-324-326	隅丸方形	156 × 140 × 27	N-89°-E
19	936-938-325-326	隅丸長方形	(146) × (122) × 30	
20	936-937-328-330	隅丸長方形	222 × 117 × 24	N-87°-E
27	937-938-331-332	隅方形	[66] × [53] × 13	
34	938-939-333-334	隅丸長方形	115 × 82 × 15	
36	935-936-336	楕円形	81 × 70 × 23	
38	939-334	隅丸長方形	64 × 38 × 18	
40	939-940-338-339	隅丸長方形	[130] × 86 × 32	
41	938-939-337-338	隅丸方形	137 × 126 × 26	
42	942-943-335-336	隅丸長方形	172 × 109 × 55	N-87°-E
44	937-938-332-333	隅丸長方形	178 × 106 × 8	
45	935-936-332-334	楕円形	128 × 106 × 83	
46	934-935-332-333	隅丸方形	110 × 99 × 70	
56	933-935-321-322	楕円形	175 × 152 × 69	
57	941-338-339	隅丸長方形か	[136] × [86] × 31	
58	940-941-338-339	隅丸長方形か	[145] × - × -	
59	942-943-341-343	隅丸長方形	154 × 107 × 37	N-89°-W
60	946-947-339-340	円形	81 × 70 × 4	
61	944-945-339-340	隅丸台形	140 × 113 × -	
62	936-939-326-328	隅丸長方形	342 × (204) × 31	N-3°-W
68	961-962-359	不整形	72 × 69 × 17	
69	959-962-358-359	隅丸長方形	294 × 94 × 12	N-9°-E
71	964-965-356-357	隅丸長方形	100 × (45) × 17	
93	959-961-349-350	隅丸長方形か	(138) × (95) × 67	
94	959-349	楕円形か	(75) × (42) × 44	
102	956-345-346	隅丸長方形か	85 × (34) × 11	
105	953-955-358-359	隅丸長方形	[127] × [98] × 18	
106	952-953-352-353	楕円形	140 × 118 × 18	
107	951-952-352-354	隅丸長方形	162 × 118 × 41	N-78°-W
108	949-951-351-352	隅丸長方形	242 × 116 × 26	N-14°-E
122	949-950-348-349	隅丸長方形	128 × 98 × 28	N-88°-E
126	950-952-345-346	隅丸長方形	200 × 123 × 21	N-5°-E
128	949-951-342-343	楕円形	221 × 105 × 24	N-8°-E
133	948-949-339-340	楕円形	157 × 90 × 63	
137	943-944-343-344	隅形か	[86] × [73] × 22	
138	943-944-344-345	隅丸長方形か	(53) × (53) × 24	
139	940-941-339-341	不整形	(196) × 114 × 28	

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
140	941-942-341-342	長円形	(78) × (66) × 37	
146	938-939-338-339	不整形	77 × (46) × 22	
147	938-939-338-340	不整形	(129) × (62) × 20	
148	938-941-335-336	隅丸長方形	[290] × 171 × 60	N-5°-W
157	937-938-337-338	不整形	86 × 60 × 14	
164	936-332-333	長方形	94 × 40 × 35	N-82°-W
183	933-934-326-328	円形	138 × 134 × 69	
184	935-326-327	不整形	[37] × 37 × 30	
186	938-330-331	隅丸方形	90 × 80 × 12	
196	956-354-355	楕円形	(54) × (51) × -	
197	952-953-348	略楕円形	68 × 65 × 35	
198	960-962-351-353	隅丸長方形	191 × (157) × 93	
200	940-941-360-361	隅丸方形	[144] × 131 × 46	
220	935-936-339	隅丸長方形	132 × 77 × 26	N-2°-E
221	938-939-346	隅丸長方形	90 × 66 × 41	N-6°-W
222	939-940-341-342	隅丸長方形	90 × (68) × 44	N-87°-E
224	957-958-350-351	楕円形	(144) × (95) × 67	N-11°-W
301	944-945-353-354	隅丸長方形	180 × 130 × 58	N-85°-W
302	945-946-354-356	隅丸長方形	211 × 105 × 52	N-85°-W
303	943-945-355-356	隅丸長方形	208 × 200 × 43	
304	942-943-358-359	隅丸長方形	153 × 88 × 53	N-87°-E
305	946-947-362-363	隅丸長方形	150 × 101 × 33	N-3°-E
306	946-948-359-361	略長方形	213 × 210 × 48	
307	946-362-363	隅丸長方形	105 × 75 × 23	N-86°-W
308	945-946-358	水滴形	89 × 42 × 27	
309	946-358	楕円形	89 × 70 × 15	
310	947-357-358	隅丸長方形	104 × 76 × 28	N-89°-W
313	949-950-357-358	隅丸長方形	85 × 74 × 16	
314	947-355-356	楕円形	93 × (72) × 36	
315	948-949-360-361	隅丸三角形	(150) × 126 × 20	
316	947-949-359-360	隅丸長方形か	(73) × (62) × 23	
317	943-944-364-365	隅丸長方形	72 × (29) × 21	
318	941-943-345-346	不整形	124 × (112) × 64	
319	942-361-362	楕円形か	92 × (54) × 16	
320	941-359-360	不整形	(64) × (48) × 31	
321	941-358-359	隅丸長方形	78 × (18) × 26	
322	941-942-354-355	隅丸長方形	145 × (48) × 20	
323	943-945-345-348	隅丸長方形	(134) × (60) × 125	



第78図の1 館内土坑・ピット(4)と出土遺物(5)

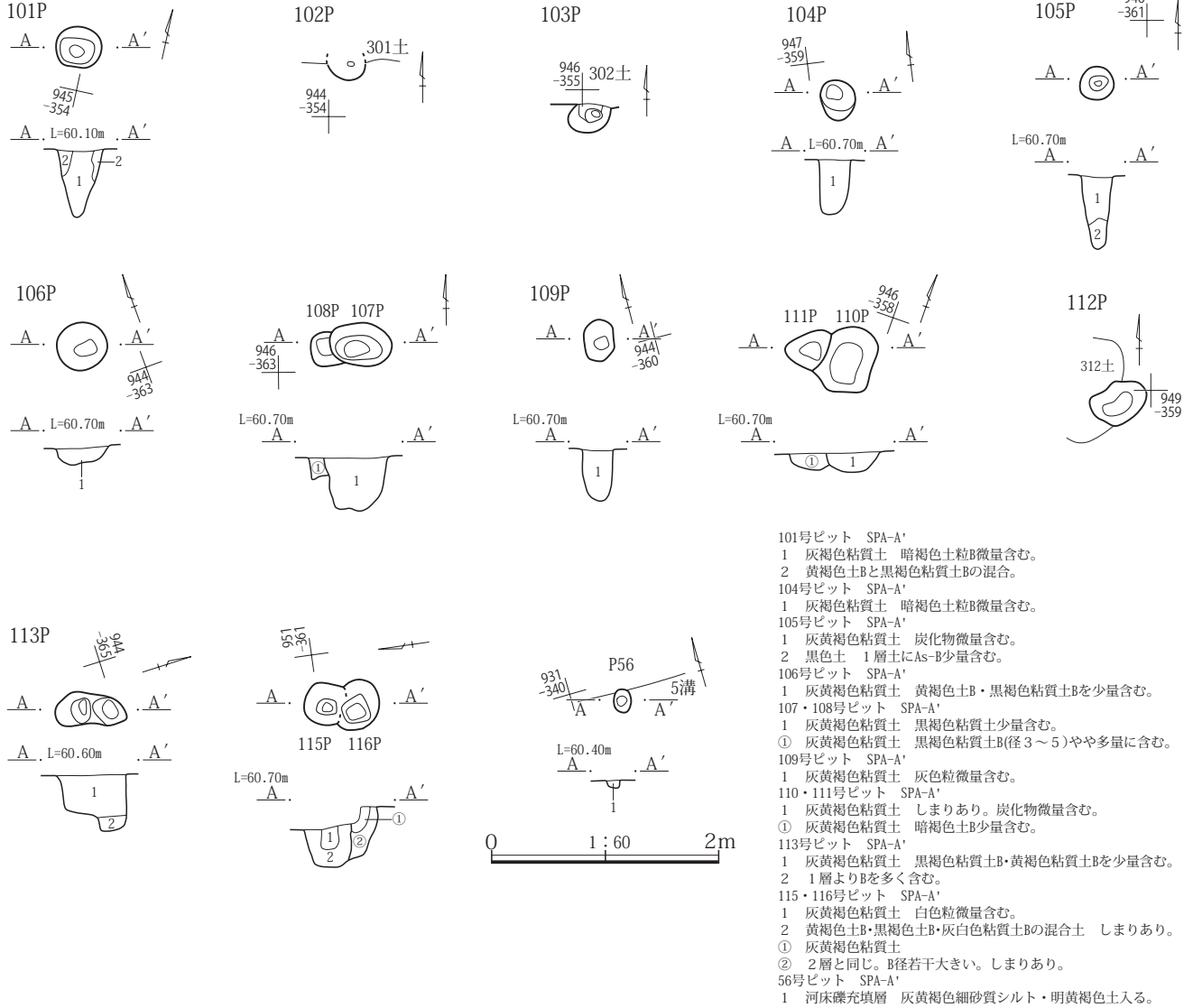
- 106・107号土坑 SPA-A'
- I にぶい黄褐色土 粘性あり。黄褐色土、にぶい黄褐色土小ブロック混入。
- II 灰褐色土
- III 黒褐色土 にぶい黄褐色土ブロック入る。
- 1 灰褐色粘質土ににぶい黄褐色土入るブロック混入。黒褐色粘質土小ブロック若干混入。
- 2 褐灰色土 暗褐色土とにぶい黄褐色土に灰褐色粘質土ブロック入る。
- 3 にぶい黄褐色土・灰褐色土・黒褐色土の小ブロック混入。
- 4 にぶい黄褐色土 粘性あり。にぶい黄褐色土・灰褐色土・黒褐色土小ブロック混入。
- 108号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄褐色土と灰褐色土のブロック混入。黒褐色土小ブロック混入。
- 2 灰褐色土 にぶい黄褐色土小ブロックと黒褐色土小ブロック混入。
- 3 灰褐色土 にぶい黄褐色土と明黄褐色土小ブロック混入。
- 110号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土ににぶい黄褐色土小ブロック混入。

- 111号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土ににぶい黄褐色土粒混入。
- 112・113号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土ににぶい黄褐色土小ブロックと灰褐色土とAs-B多く含む。
- 2 灰褐色土ににぶい黄褐色土小ブロック混入。
- 3 にぶい黄褐色土
- 4 にぶい黄色土 粘性あり。
- 5 にぶい黄褐色土に灰褐色土粒混入。
- 114号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄色土
- 2 灰褐色土 As-B多く混入。
- 3 灰褐色土 にぶい黄褐色土混入。
- 115号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土ににぶい黄褐色土粒混入。
- 2 にぶい黄褐色土
- 116・117号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄色土
- 118号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土
- 2 灰褐色土 にぶい黄褐色土小ブロック混入。
- 3 にぶい黄褐色土

- 119号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄色土 にぶい黄褐色土粒混入。
- 2 にぶい黄褐色土
- 120号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄色土 灰褐色土・黒褐色土小ブロック混入。
- 121号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土 にぶい黄褐色土小ブロック混入。
- 122号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土と褐灰色土の混入
- 2 黒褐色土に灰褐色土入るブロックの混入。にぶい黄褐色土ブロック入る。
- 3 灰褐色土 にぶい黄褐色土・灰褐色土ブロックと少量の黒褐色土粒混入。
- 190号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土ににぶい黄褐色土小ブロックと酸化マンガン粒含む。
- 301号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色砂質土
- 2 灰黄褐色粘質土 黄褐色土粒を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土 黄褐色粘質土Bを含む。
- 4 灰黄褐色粘質土 黄褐色土粒と暗褐色粘質土Bを含む。
- 5 灰黄褐色砂質土 1層に似る。
- 6 灰黄褐色砂質土 4層に似るが粘質強い。
- 7 灰黄褐色砂質土 暗褐色粘質土Bを多く含む。
- 302号土坑 SPA-A'
- 1 灰白色粘質土で粘質強い。
- 2 灰黄褐色粘質土 As-Bブロックと黄褐色

- 粘質土ブロックを少量含む。
- 3 灰黄褐色粘質土 暗褐色粘質土を少量含む。
- 4 灰黄褐色粘質土 黄褐色粘質土ブロックを少量含む。
- 5 灰黄褐色粘質土 斑点状に暗褐色粘質土ブロックを多く含む。
- 303号土坑 SPA-A
- 1 灰黄褐色粘質土 黄褐色粘質土を少量含む。
- 2 灰黄褐色粘質土 黄褐色粘質土とAs-Bブロックを含む。
- 3 灰黄褐色粘質土 As-B・黄褐色粘質土を含む。
- 4 灰黄褐色粘質土 暗褐色粘質土と少量の黄褐色粘質土を含む。
- 5 灰黄褐色粘質土 粘質強い。
- 6 灰黄褐色粘質土 1層に似る。
- 7 灰黄褐色粘質土 黄褐色粘質土ブロック・暗褐色粘質土・As-Bを含む。
- 8 未記入
- 314号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色砂質土 黒褐色土Bを微量含む。
- 2 灰黄褐色粘質土
- 3 灰黄褐色粘質土Bと黒褐色粘質土Bの混入。炭化物を微量含む。

1-1区3面ピット



第78図の2 館内土坑・ピット(4)

は特定できなかった。

尚、5・11・12号溝は併存していた可能性があり、5号溝の南には2号土塁が接している。

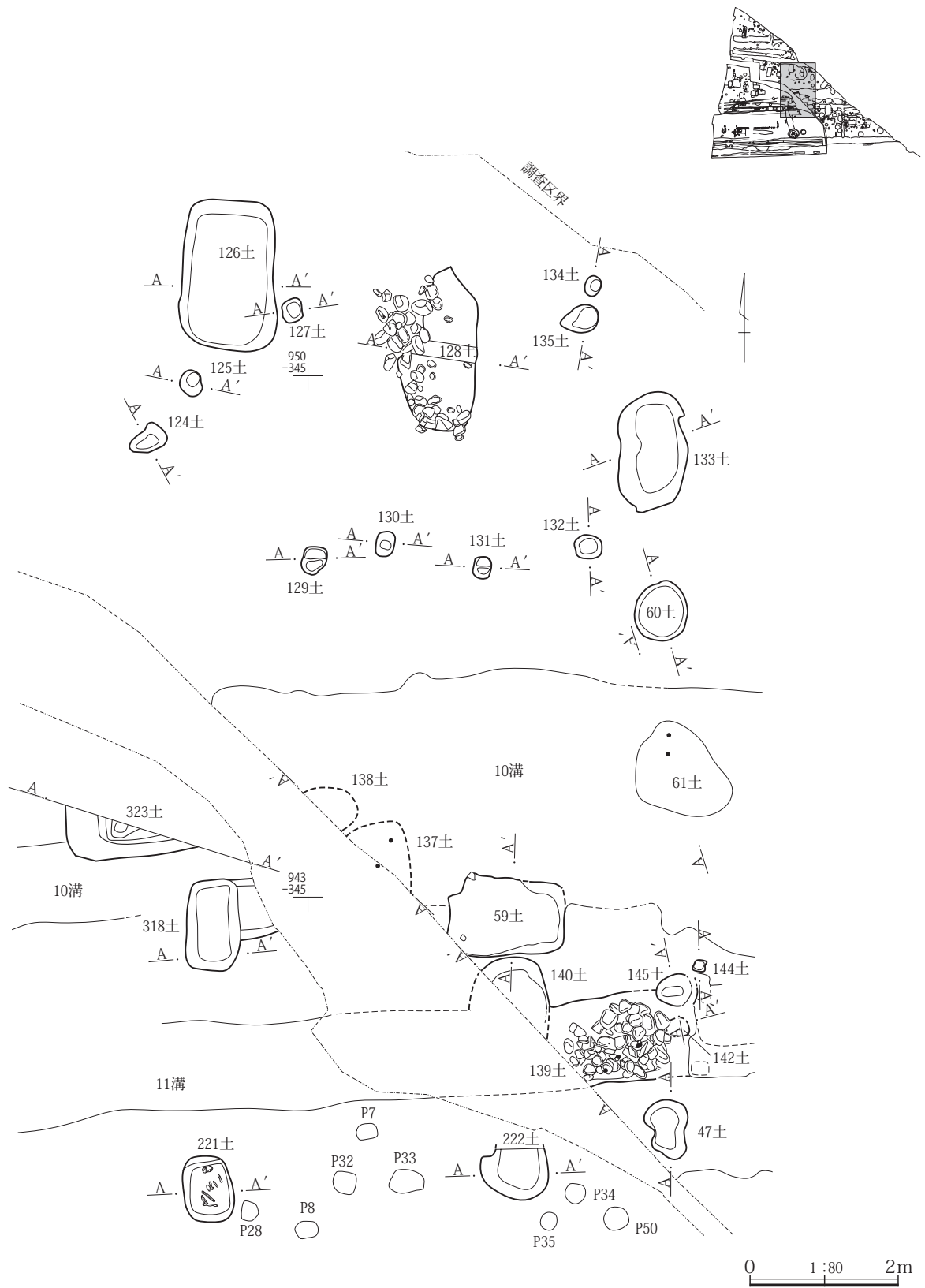
覆土 5号溝は灰色粘質土等、10号溝は灰褐色粘質土等、11号溝は灰褐色土等で埋没する。

構造 各溝の走向は、5号溝はN-87°-E、10a号溝はN-89°-E、10b号溝はN-87°-E、10c号溝はN-84°-E中、11号溝はN-88°-Eを取り、その走行は共に直線的である。

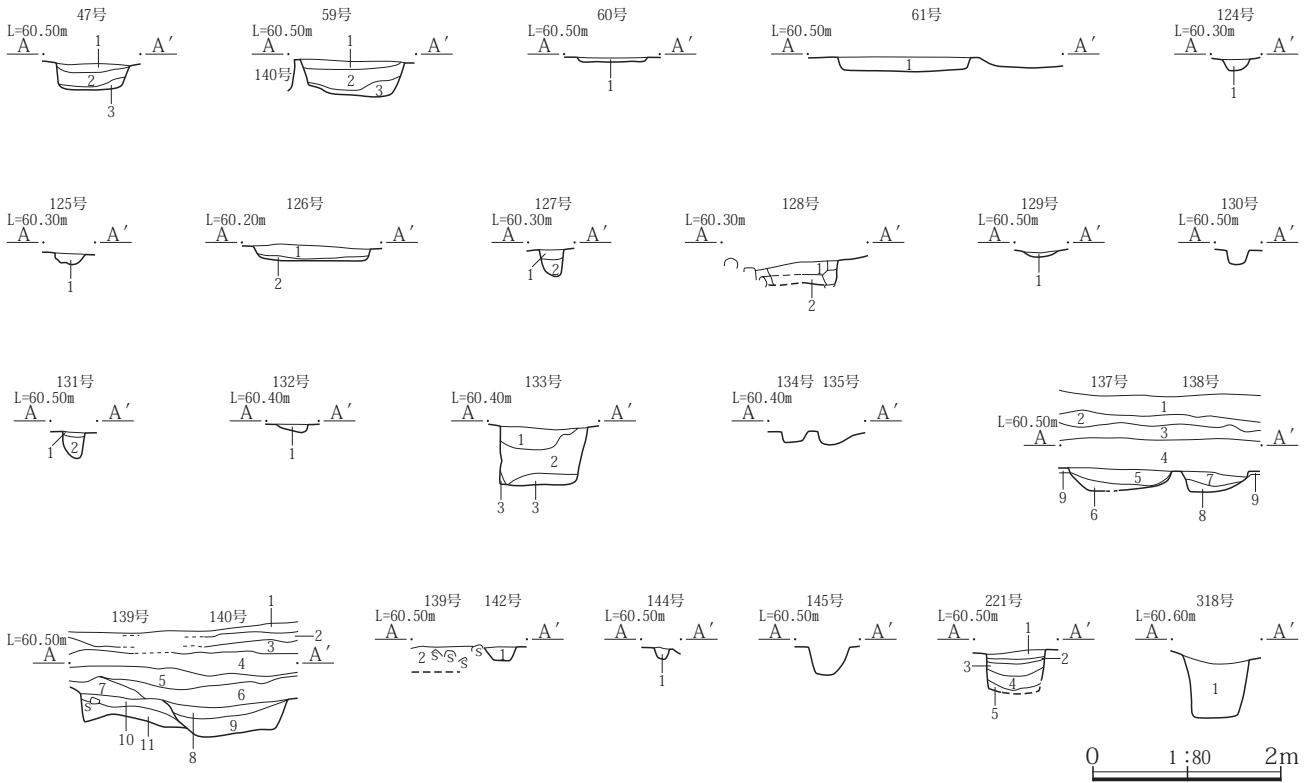
5号溝の掘削形態は、薬研堀から箱堀状に掘り直されている。この掘り直しは南側に拡張するもので、底面幅30cm程から80cm程に増すものの、その底面は50cm程高く

なっている。その上幅は、薬研堀の段階では80cm程と想定されるが、箱堀の段階では160cm程であり、堀幅は2倍となっている。薬研堀の底面の西寄り、2号土塁の断ち割り部には幅56cm、西側底面に対し56cm、東側底面に対し34cm高く、その東側に411cm隔てた地点にも、幅50cm、西側底面に対し46cm、東側底面に対し4cm高い、障壁様の掘り残しが見られ、後述の橋脚部分にも幅193cm、西側に対し38cm、東側に対し40cm高い掘り残しが見られる。また、5号溝の南から50cmの地点から、黄褐色土等で幅105cm、高さ26cmに塵除けが設けられていた。塵除けの側面は緩傾斜であった。

10号溝は上述のように3条に分かれるが、共に箱堀状



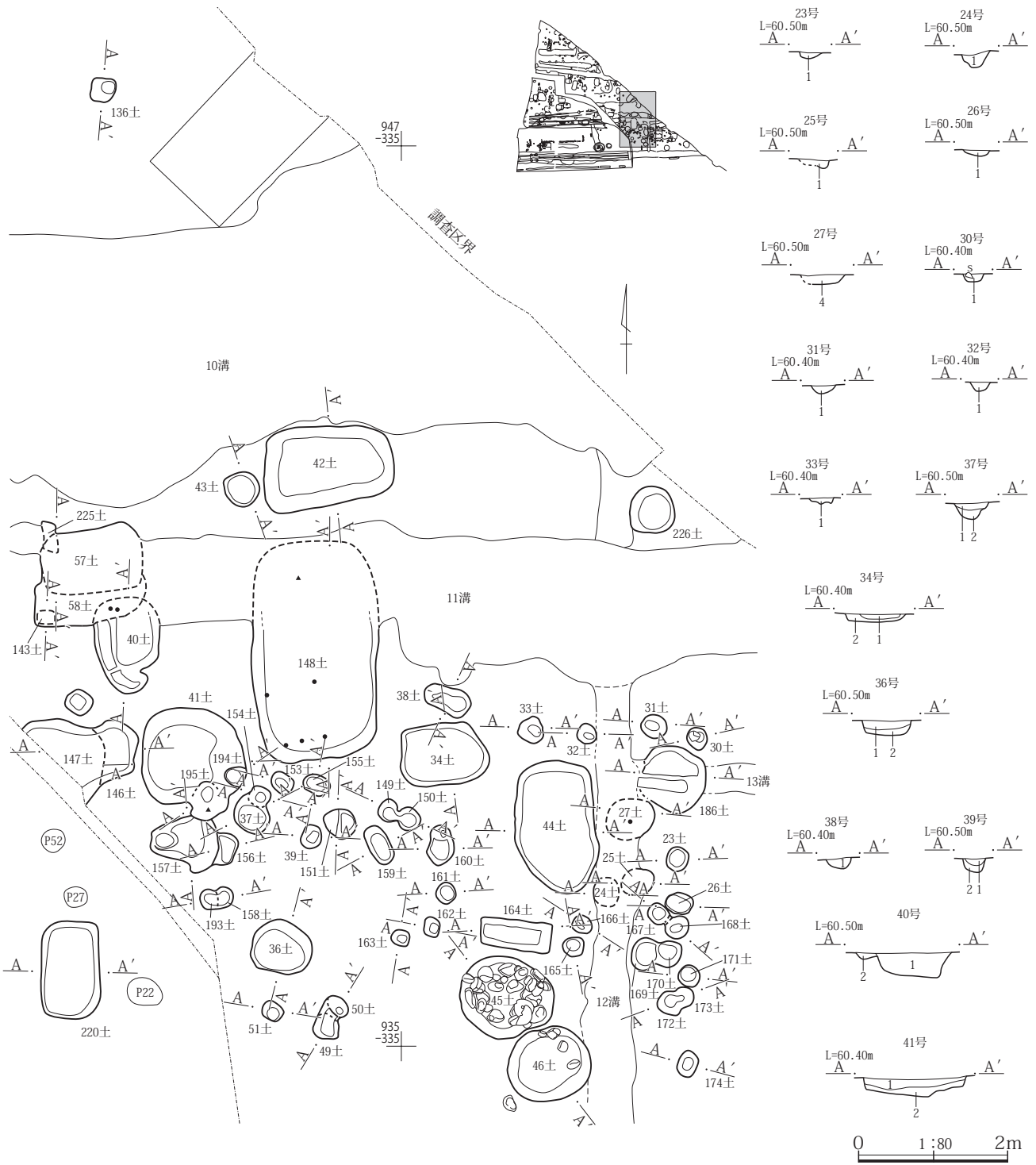
第79図の1 館内土坑・ピット(5)



- 47号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色粘質土 明黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色土小ブロック混入。
 - 2 灰黄褐色粘質土 明黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色土粒混入。
 - 3 灰黄褐色粘質土 明黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色土小ブロック混入。
- 59号土坑 SPA-A'
- 1 暗灰黄色土 粘性あり。細砂入る。
 - 2 灰黄褐色土 粘性あり。細砂入る。
 - 3 褐灰色粘質土 明黄粘質土大ブロックと黒褐色土ブロック混入。
- 60・61号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄橙色土 粘質。しまる。As-Bを含む。
- 124・125号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄色土 粘性あり。黒褐色粘質土小ブロック混入。
- 126号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄褐色粘質土 にぶい黄褐色粘質土と黒色土小ブロック多く入り、若干の明黄褐色土小ブロック混入。
 - 2 灰黄色粘質土 黒色土ブロックとにぶい黄褐色粘質土小ブロック混入。
- 127号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄褐色粘質土 灰黄褐色土ブロックと黒色土粒混入。
 - 2 灰黄褐色土 粘性あり。黒褐色土ブロック・にぶい黄褐色粘質土小ブロック混入。As-B。
- 128号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土 粘性あり。褐灰色土小ブロックと少量のにぶい黄褐色土入る。人骨入る。
 - 2 暗灰黄色粘質土 褐灰色粘質土小ブロック混入。
- 129号土坑 SPA-A'
- 1 褐灰色砂質土
- 131号土坑 SPA-A'
- 1 褐灰色砂質土に明黄褐色粘質土・灰黄褐色粘質土小ブロック混入。
- 132号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロック混入。
 - 2 褐灰色粘質土・明黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロックやや多く入る。
 - 3 褐灰色土に若干の褐灰色粘質土小ブロック混入。
- 137・138号土坑 SPA-A'
- 1 黄灰色川砂
 - 2 灰色細砂
 - 3 灰褐色土 にぶい黄色土小ブロック混入。
 - 4 にぶい黄褐色土 黄灰色土小ブロックと若干の明黄褐色土混入。
- 139・140号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色細砂質土
 - 2 黄灰色川砂
 - 3 灰色細砂
 - 4 にぶい黄褐色土 黄灰色土小ブロックと若干の明黄褐色土・浅黄色土ブロック混入。
 - 5 灰黄褐色土 にぶい黄褐色土粒入る。粘性あり。
 - 6 灰黄褐色土 粘性やや弱。黒褐色粘質土・褐灰色粘質土小ブロック混入。
 - 7 灰黄褐色土 褐灰色粘質土小ブロック・明黄褐色土・灰褐色粘質土・黒褐色粘質土・褐灰色粘質土粒入る。
 - 8 灰黄褐色土 黒褐色粘質土・褐灰色粘質土粒入る。粘性あり。
 - 9 褐灰色土 粘性あり。黒褐色粘質土・褐灰色粘質土粒入る。
 - 10 灰黄褐色粘質土 色調明るい。黒褐色粘質土・褐灰色土粒入る。
 - 11 褐灰色土 粘性あり。
- 139・142号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄橙色土 灰黄褐色土ブロック入り。炭化物やや多く入る。
 - 2 灰黄褐色土 粘性あり。灰黄褐色土小ブロック混入。
- 144号土坑 SPA-A'
- 1 褐灰色土 粘性ややあり。灰黄褐色土小ブロック入る。
- 145号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄褐色土 洪水層土。砂質。
 - 2 灰黄褐色細砂質シルトに若干の礫入る。
 - 3 2層土に褐灰色砂入る。
 - 4 灰褐色砂質土 酸化鉄粒入る。
 - 5 暗褐色砂質土 灰黄褐色細砂質シルト土に酸化鉄沈着。
- 221号土坑 SPA-A'
- 1 黒褐色土 天明泥流。にぶい黄褐色洪水層をブロック状に含む。浅間石直径10cm大を多く含む。
 - 2 1層と同じだが黄褐色洪水層がない。
 - 3 にぶい黄褐色土 砂質。洪水層土。
- 318号土坑 SPA-A'
- 1 黄褐色土B 黒褐色粘質土Bを少量含む。
- 323号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色粘質土 にぶい黄褐色土斑状に含む。炭化物微量含む。
 - 2 灰黄褐色粘質土 1層より含有物少ない。
 - 3 灰黄褐色粘質土 黄褐色土B少量含む。
 - 4 灰褐色砂質土 しまりなし。粘性なし。土質が他層と異なる。
 - 5 灰黄褐色粘質土 黄褐色土B少量。炭化物・砂質土微量含む。
 - 6 灰黄褐色粘質土 黄褐色土B・暗褐色土B斑に含む。
 - 7 灰褐色粘質土
 - 8 灰褐色粘質土 7層より色調明るい。
 - 9 灰褐色粘質土 色調上層に比べ非常に暗い。しまりなし。黄褐色土B少量含む。

第79図の2 館内土坑・ピット(5)土層断面

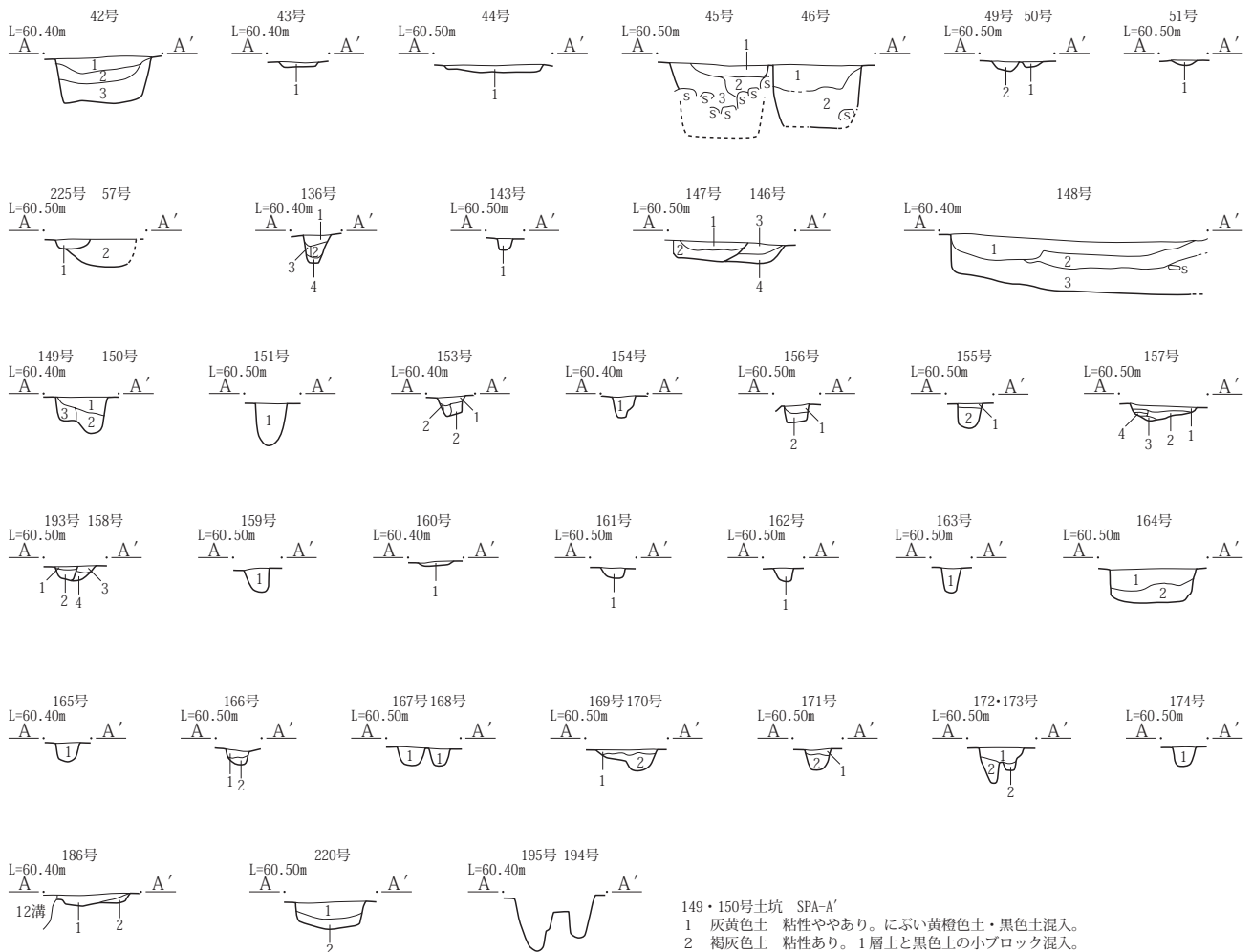
第3章 発見された遺構と遺物



- 22～33号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。
 - 2 灰黄褐色粘質土 酸化鉄沈着。
 - 3 1層土に炭化物と焼土ブロック含む。
 - 4 1・2層土の混土に黒褐色粘質土粒入る。
- 34号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。
 - 2 1層土と灰黄褐色土・黒褐色粘質土の混土。
- 36号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。
 - 2 1層土に地山ブロック入る。
- 37号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色砂質土 粘性あり。灰黄色土・明黄褐色土粒入る。
 - 2 褐灰色土 粘性あり。明黄褐色土粒入る。
- 38号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色砂質土 粘性あり。褐灰色土粒入る。
- 39号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土 粘性あり。
 - 2 褐灰色粘質土 黒褐色粘質土小ブロック入る。

- 40号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄粘質土 粘性あり。砂入り。灰黄色土・明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。
 - 2 にぶい黄褐色土と1層土の小ブロック混土。灰黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロック多く入る。
- 41号土坑 SPA-A'
- 1 暗灰黄色土 灰黄褐色土・黒褐色粘質土粒入り。粘性あり。
 - 2 灰黄褐色粘質土 1層土ブロックと黒褐色粘質土小ブロック混入。

第80図の1 館内土坑・ピット(6)

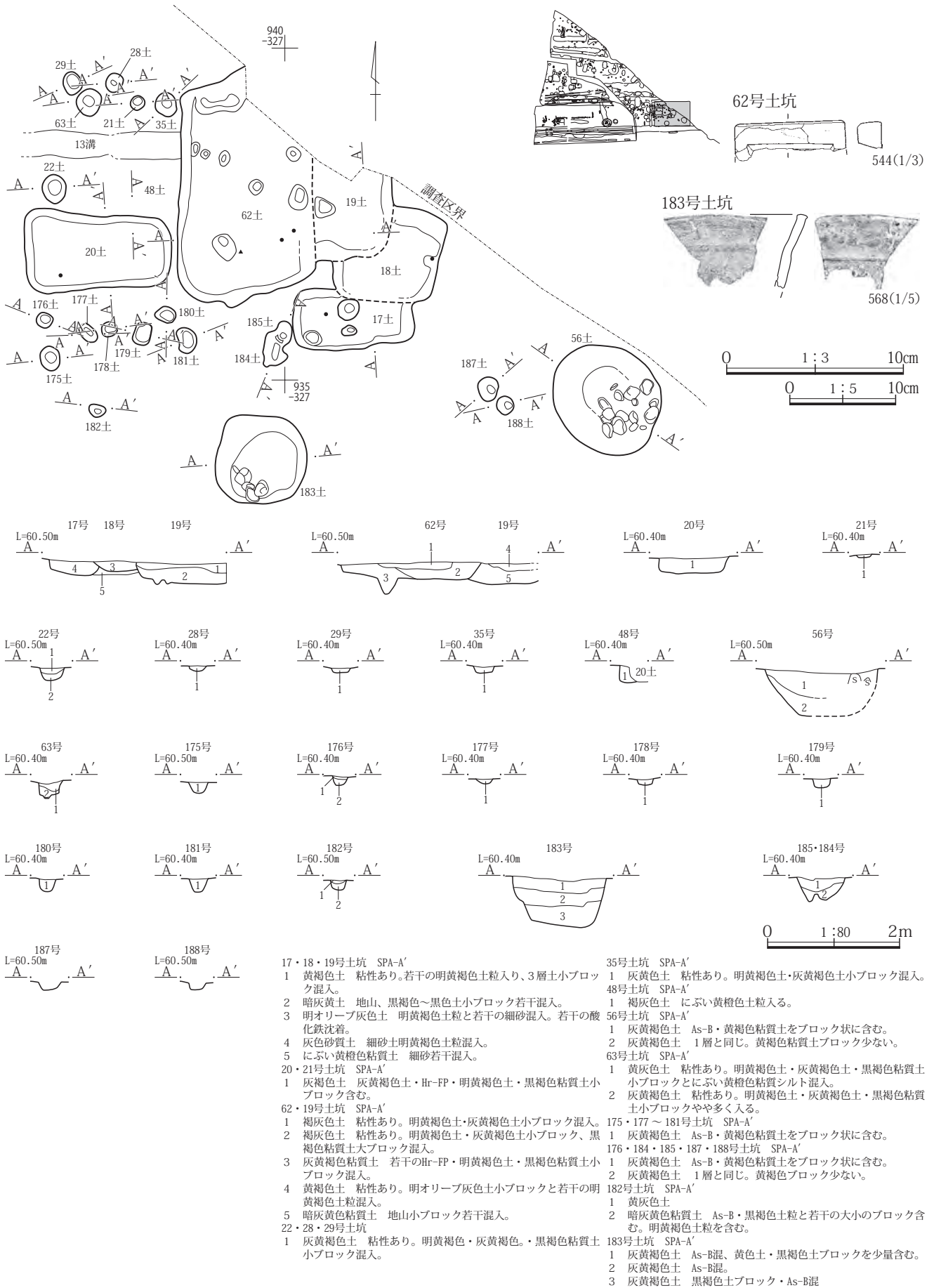


- 42号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土 明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。
 - 2 明黄褐色土・灰黄褐色土と3層土の小ブロック混入。黒褐色粘質土粒入る。
 - 3 灰褐色土 灰黄褐色土ブロックと若干の黒褐色粘質土小ブロック混入。
- 43号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄褐色土 粘質。しまる。As-Bを含む。
- 44号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土 粘性あり。As-Bと明黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロック入る。
- 45号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土 粘質土。僅かににぶい黄褐色粘質土を含む。As-Bを含む。
 - 2 灰黄褐色土 1層でややにぶい黄褐色ブロック土・灰白色ブロックを多く含む。As-Bを含む。
 - 3 灰白色ブロック土とにぶい黄褐色ブロック土の混入。As-Bを含む。
- 46号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土 黒褐色ブロック土を少量含む。As-Bを含む。
 - 2 灰黄褐色土 As-Bを含む。
- 49・50号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。
 - 2 1層土と褐灰色土・灰黄褐色粘質土の混入。
- 51号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック多く混入。
- 57・225号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土
 - 2 灰黄褐色土 明黄褐色土・灰黄色土小ブロック含む。Hr-FP混入。
- 143号土坑 SPA-A'
- 1 褐灰色土 粘性ややあり。灰黄褐色土小ブロック入る。
- 136号土坑 SPA-A'
- 1 黄灰色土 粘性ややあり。ややしまり欠く。Hr-FP・灰黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロック混入。
 - 2 灰黄褐色土 粘性あり。灰黄褐色土粒入る。
 - 3 にぶい黄褐色土 黒褐色粘質土粒入る。
 - 4 褐灰色土 粘性あり。
- 146・147号土坑 SPA-A'
- 1 褐灰色土 粘性あり。細砂質。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。
 - 2 灰褐色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。
 - 3 灰褐色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色粘質土粒含む。
 - 4 灰褐色粘質土 明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロックと黒褐色粘質土粒入る。
- 148号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄褐色土 As-B粒・黒褐色土ブロックを少量含む。粘性やや締まる。
 - 2 にぶい黄褐色土 As-B粒・黒褐色土ブロックを少量含む。粘性やや締まる。
 - 3 灰黄褐色土 As-B粒・黒褐色土ブロックを少量含む。

- 149・150号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄色土 粘性ややあり。にぶい黄褐色土・黒色土混入。
 - 2 褐灰色土 粘性あり。1層土と黒色土の小ブロック混入。
 - 3 褐灰色土 粘性あり。灰白色土小ブロック混入。
- 151号土坑 SPA-A'
- 1 褐灰色土 明黄褐色粘質土小ブロック混入。
- 153号土坑 SPA-A'
- 1 褐灰色土と灰黄色土のブロック混入。黒・橙色土小ブロックやや多く入る。
 - 2 灰黄褐色粘質土 細砂少量入り、黒・橙色土粒入る。
- 154号土坑 SPA-A'
- 1 褐灰色土と灰黄色土のブロック混入。黒・橙色土小ブロックやや多く入る。
- 156号土坑 SPA-A'
- 1 灰色粘質土 にぶい黄褐色土粒入る。
 - 2 灰黄褐色粘質土 細砂少量入り、黒・橙色土粒入る。
- 155・159・164号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土 As-B・黄褐色粘質土をブロック状に含む。
 - 2 灰黄褐色土 1層と同じ。黄褐色ブロック少ない。
- 157号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土 川砂多く入り、にぶい黄褐色土小ブロック混入。
 - 2 灰褐色粘質土 3層土粒入る。
 - 3 黒褐色土
 - 4 橙色土
- 158・193号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土 粘性あり。にぶい黄褐色土ブロック入る。
 - 2 褐灰色土 粘性あり。灰白色土小ブロック入る。
 - 3 1層土と灰褐色土の小ブロック混入。
 - 4 2層土と灰褐色土の小ブロック混入。
- 160・164・165・167・168号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土 As-B・黄褐色粘質土をブロック状に含む。
- 161・162・163号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土 粘性あり。灰黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロック混入。
- 166号土坑 SPA-A'
- 1 黄褐色土 粘性あり。明黄褐色土小ブロック・礫混入。
 - 2 灰黄褐色土 粘性あり。明黄褐色土小ブロック混入。
- 169～173号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄褐色土 As-B混。黄褐色ブロック土を含む。
 - 2 灰黄褐色土 As-B混。黄褐色ブロック土を含む。
- 174号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土 As-B・黄褐色粘質土をブロック状に含む。
- 186号土坑 SPA-A'
- 1 にぶい黄褐色土 As-B混。ややしまる。黒褐色ブロック・黄褐色ブロック土を含む。
 - 2 にぶい黄褐色土 1層と同じだがやや黒褐色ブロック多い。
- 220号土坑 SPA-A'
- 1 河床礫充填層 灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土入る。
 - 2 にぶい黄褐色砂質土 細かい川砂入る。

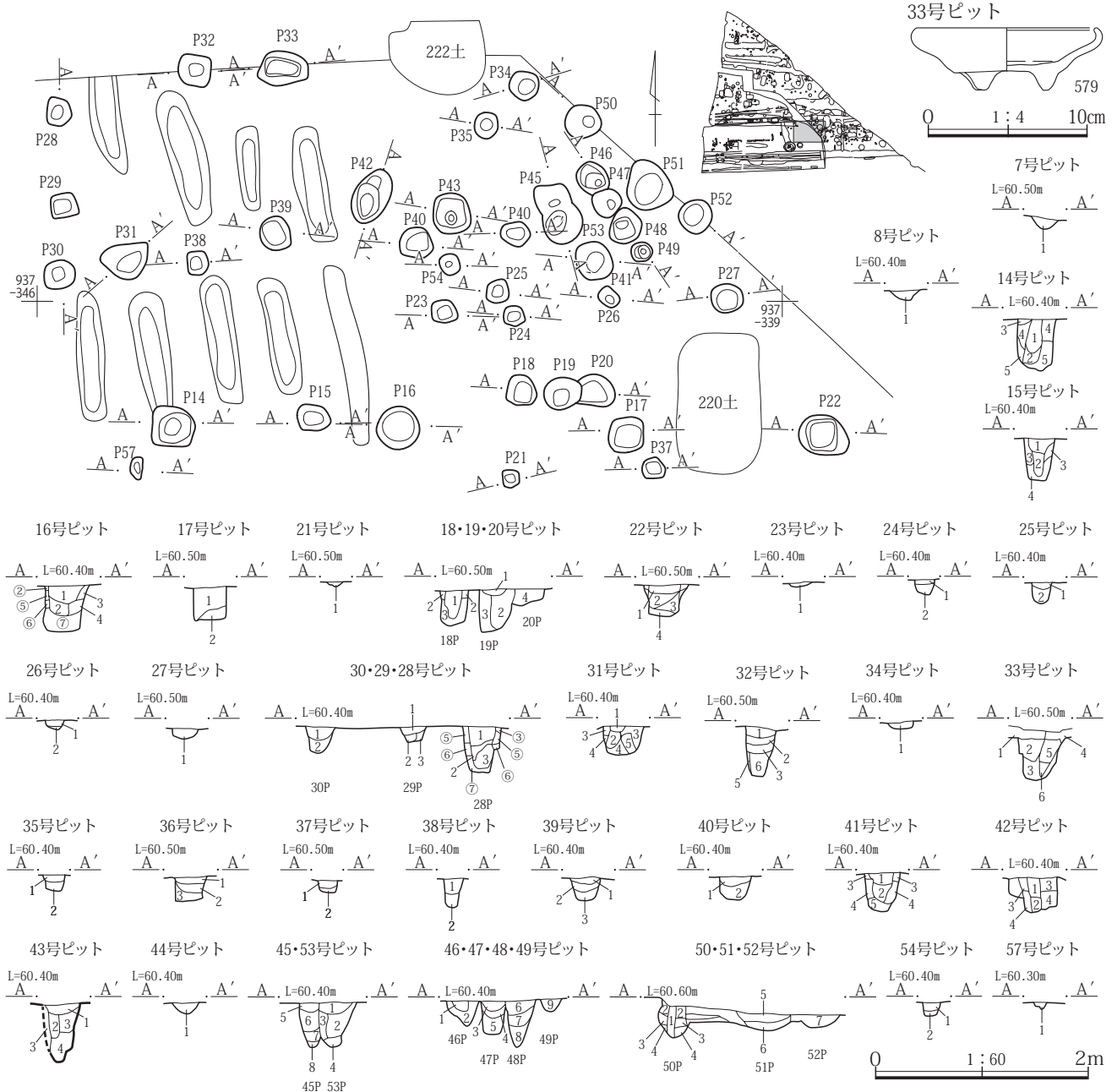
第80図の2 館内土坑・ピット(6)土層断面

第3章 発見された遺構と遺物



第81図の1 館内ピット(7)

第3節 3面の調査

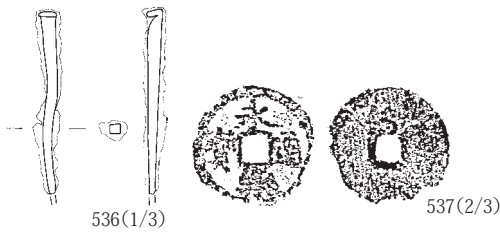


- | | |
|---|---|
| <p>7号ピット SPA-A'</p> <p>1 灰黄褐色土 粘性ややあり。褐色粘質土小ブロック混入。若干のAs-B。</p> <p>8号ピット SPA-A'</p> <p>1 灰黄色土 粘性やや弱。若干の黒褐色砂質土小ブロック混入。</p> <p>14号ピット SPA-A'</p> <p>1 灰黄褐色土 灰褐色土・褐色土・にぶい黄褐色土小ブロック混入。</p> <p>2 灰黄褐色土 若干の褐色土・にぶい黄褐色土小ブロックとAs-B混入。</p> <p>3 灰黄褐色土ににぶい黄褐色土入るブロック混入。</p> <p>4 12層に似るが、にぶい黄褐色土小ブロック多く混入。</p> <p>5 褐色土ににぶい黄褐色土・黒褐色土小ブロック混入。</p> <p>15号ピット SPA-A'</p> <p>1 灰黄褐色土・As-Bの混入 にぶい黄褐色土・明黄褐色土小ブロック灰化物混入。</p> <p>2 褐色土ににぶい黄褐色土・黒褐色土小ブロック混入。</p> <p>3 褐色土ににぶい黄褐色土入るブロック混入。明黄褐色土小ブロック混入。</p> <p>4 褐色土 若干の黒褐色土小ブロック混入。</p> <p>16号ピット SPA-A'</p> <p>1 灰黄褐色土・明黄褐色土・As-B にぶい黄褐色土ブロックの混入</p> <p>2 にぶい黄褐色土 褐色土小ブロック混入。</p> <p>3 にぶい黄褐色土 若干の褐色土小ブロック混入。</p> <p>4 にぶい黄褐色土 褐色土小ブロック混入。</p> <p>② 明黄褐色砂質土</p> <p>③ 褐色土 粘質土。</p> <p>④ にぶい黄褐色土 粘質土。</p> <p>⑦ 黒褐色土 粘質土。</p> <p>17号ピット SPA-A'</p> <p>1 灰黄褐色土 褐色土・にぶい黄褐色土小ブロックと黒色粘質土大ブロック混入。</p> <p>2 褐色土・にぶい黄褐色土小ブロックと1層土の黒色粘質土ブロック混入。</p> <p>18号ピット SPA-A'</p> <p>1 灰黄褐色土 粘性あり。褐色土・にぶい黄褐色土・黒褐色土混入。</p> <p>2 灰黄褐色土 褐色土・にぶい黄褐色土混入。</p> <p>3 灰黄褐色土 褐色土ブロックの混入。</p> | <p>19・20号ピット SPA-A'</p> <p>1 灰黄褐色土 褐色土・にぶい黄褐色土ブロック入る。</p> <p>2 灰黄褐色土・明黄褐色土・As-Bブロックの混入</p> <p>3 As-B 褐色土ブロック入る。</p> <p>4 灰黄褐色土 褐色土・にぶい黄褐色土・黒褐色土小ブロック入る。</p> <p>21号ピット</p> <p>1 河床礫充填層 灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土入る。</p> <p>22号ピット SPA-A'</p> <p>1 にぶい黄褐色土 洪水層土。砂質。</p> <p>2 1層土に若干の礫入る。</p> <p>3 2層土に褐色砂入る。</p> <p>4 灰褐色粘質土 酸化鉄粒入る。</p> <p>23号ピット SPA-A'</p> <p>1 河床礫充填層 灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土入る。</p> <p>24・34・40・44・57号ピット SPA-A'</p> <p>1 河床礫充填層 灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土入る。</p> <p>2 As-A泥流土と灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土・黒褐色粘質土の混入</p> <p>25・26号ピット SPA-A'</p> <p>1 黒褐色土 店名泥流土。径2~3cmの浅開軽石含む。</p> <p>28-30号ピット SPA-A'</p> <p>1 灰黄褐色砂質シルトに黒褐色粘質土と若干のAs-A泥流土混入。</p> <p>2 As-A泥流土と灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土・黒褐色粘質土の混入。</p> <p>3 明黄褐色砂</p> <p>③ As-B</p> <p>④ 褐色土</p> <p>⑥ にぶい黄褐色土</p> <p>⑦ 黒褐色土</p> <p>31号ピット SPA-A'</p> <p>1 灰黄褐色細砂質シルトと若干のAs-A泥流土混入。</p> <p>2 As-A泥流土と灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土・黒褐色粘質土の混入。</p> <p>3 明黄褐色砂</p> <p>4 灰黄褐色土 店名泥流土。径2~3cmの浅開軽石含む。</p> <p>37・38・54号ピット SPA-A'</p> <p>1 河床礫充填層 灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土入る。</p> <p>2 にぶい黄褐色砂質土 細かい川砂入る。</p> <p>3 明黄褐色砂</p> <p>4 灰黄褐色土 店名泥流土。径2~3cmの浅開軽石含む。</p> <p>33号ピット SPA-A'</p> <p>1 灰黄褐色細砂質シルトと若干のAs-A泥流土混入。</p> <p>2 As-A泥流土と灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土・黒褐色粘質土の混入。</p> <p>3 明黄褐色砂</p> <p>4 灰黄褐色細砂質土 川砂多く入り、酸化マンガン粒入る。</p> <p>5 明黄褐色土 川砂層</p> <p>6 As-A泥流土と灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土・黒褐色粘質土の混入</p> <p>7 明黄褐色砂</p> <p>8 にぶい褐色土に黒褐色粘質土入る。</p> <p>9 灰黄褐色土 褐色土とにぶい黄褐色土入る。</p> <p>50・51・52号ピット SPA-A'</p> <p>1 灰黄褐色細砂質シルトと若干のAs-A泥流土混入。</p> <p>2 As-A泥流土と灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土・黒褐色粘質土の混入。</p> <p>3 明黄褐色砂</p> <p>4 灰黄褐色土 店名泥流土。径2~3cmの浅開軽石含む。</p> <p>5 明黄褐色土 川砂層</p> <p>6 As-A泥流土と灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土・黒褐色粘質土の混入</p> <p>7 明黄褐色砂</p> <p>8 にぶい褐色土に黒褐色粘質土入る。</p> <p>9 灰黄褐色土 褐色土とにぶい黄褐色土入る。</p> <p>54号ピット SPA-A'</p> <p>1 灰黄褐色細砂質シルトと若干のAs-A泥流土混入。</p> <p>2 As-A泥流土と灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土・黒褐色粘質土の混入。</p> <p>3 明黄褐色砂</p> <p>4 灰黄褐色細砂質土 川砂多く入り、酸化マンガン粒入る。</p> <p>5 明黄褐色土 川砂層</p> <p>6 As-A泥流土と灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土・黒褐色粘質土の混入</p> <p>7 明黄褐色砂</p> <p>8 にぶい褐色土に黒褐色粘質土入る。</p> <p>9 灰黄褐色土 褐色土とにぶい黄褐色土入る。</p> <p>57号ピット SPA-A'</p> <p>1 河床礫充填層 灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土入る。</p> |
|---|---|

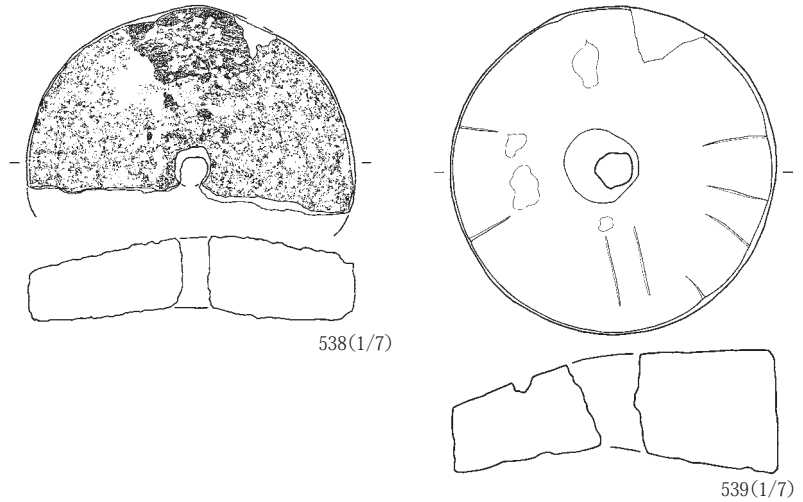
第81図の2 館内ピットの土層断面(7)と館内土坑出土遺物(7)

第3章 発見された遺構と遺物

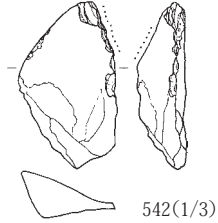
40号土坑



45号土坑



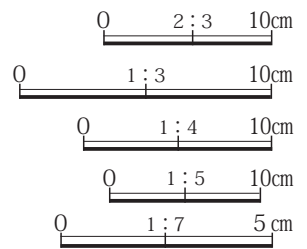
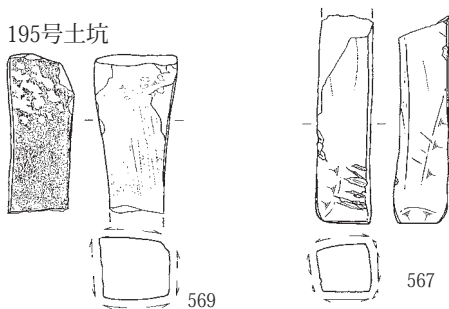
57、58号土坑



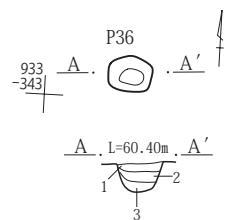
148号土坑



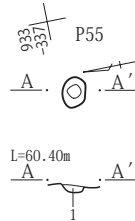
195号土坑



36号ピット



55号ピット



- 36号ピット SPA-A'
- 1層土にⅢ層土と若干のAs-A泥流層土混入。
 2. As-A泥流土と1～Ⅲ層土の混土。
 3. Ⅱ層砂

- 55号ピット SPA-A'
1. 河床礫充填層。Ⅰ・Ⅱ層土入る。

第82図 館内土坑・ピット(8)と出土遺物(8)

表9 3面館内ピット一覧

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(cm)	備考
土坑番号を付したピット				
21	939-329	隅丸方形	22 × 22 × 3	
22	937-938-330	楕円形	45 × 36 × 17	
23	937-331	円形	33 × 29 × 4	
24	936-937-332	楕円形	[38] × [34] × 22	
25	936-937-331-332	楕円形	[45] × [36] × 10	
26	936-937-331	楕円形	35 × 29 × 5	
28	939-329	隅丸長方形	28 × 27 × 14	
29	939-330	隅丸長方形	33 × 29 × 9	
30	938-939-330-331	楕円形	31 × 27 × 12	
31	939-331	楕円形	35 × 31 × 12	
32	939-332	円形	27 × 25 × 11	
33	939-333	円形	35 × 33 × 9	
35	938-939-328	隅丸方形	37 × 32 × 16	
37	937-938-336-337	隅丸長方形	50 × 40 × 24	
39	937-336	楕円形	32 × 28 × 21	
43	942-336-337	円形	46 × 46 × 6	

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(cm)	備考
47	939-940-339-340	瓢箪形	78 × 57 × 26	
48	937-329	隅丸方形か	31 × - × 25	
49	935-335-336	隅丸方形	[33] × 29 × 15	
50	935-335	楕円形	34 × 21 × 24	
51	935-336	隅丸方形	28 × 23 × 13	
63	938-939-329-330	隅丸方形	42 × 37 × 23	
64	965-359	楕円形	32 × 27 × 12	
65	964-358	円形	19 × 18 × 13	
66	963-359	楕円形	31 × 25 × 9	
67	961-962-360	楕円形	27 × 19 × 9	
70	961-358	円形	28 × 28 × 15	
72	963-964-355	楕円形	25 × 19 × 8	
73	963-964-355-356	隅丸方形	17 × 17 × 7	
74	963-356	隅丸方形	20 × 19 × 14	
75	962-963-355-356	楕円形	28 × 23 × 13	
76	962-355-356	隅丸長方形	37 × 30 × 16	
77	961-357	隅丸方形	44 × 30 × 5	

第3節 3面の調査

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(cm)	備考
78	961~962-357	隅丸方形	28 × 28 × 14	
79	961~962-356	隅丸三角形	20 × 19 × 9	
80	961~962-356	隅丸長方形	33 × 28 × 9	
81	961-355~356	隅丸長方形	30 × 27 × 15	
82	962-354~355	楕円形	42 × 32 × 11	
83	962~963-354	隅丸長方形	44 × 36 × 18	
84	961~962-354	楕円形	56 × 41 × 14	
85	961-351	隅丸方形	25 × 25 × 15	
86	961-351	楕円形	38 × 27 × 12	
87	961-354~355	楕円形	30 × 28 × 14	
88	960~961-354	隅丸方形	24 × 24 × 10	
89	958-355~356	楕円形	42 × 34 × 27	
90	957-354~355	隅丸長方形	37 × 31 × 23	
91	958-354	楕円形	52 × 39 × 12	
92	958-352	楕円形	54 × 41 × 24	
95	956~957-356~357	楕円形	46 × 37 × 17	
96	956-358	隅丸三角形	56 × [40] × 11	
97	957~958-348~349	円形	42 × 42 × 25	
98	957-349	隅丸長方形	41 × 34 × 26	
99	957-346~347	隅丸方形か	33 × 23 × 20	
100	954-347	隅丸方形	28 × 27 × 22	
101	954~955-352	隅丸方形	32 × 28 × 15	
103	956-346	楕円形か	42 × 25 × 13	
104	955~956-346	隅丸方形	29 × 28 × 12	
109	949-350~351	隅丸方形	23 × 22 × 6	
110	950-350	隅丸三角形	22 × 19 × 6	
111	950~951-350~351	楕円形	26 × 23 × 7	
112	951-350	円形	25 × 22 × 9	
113	951-349~350	楕円形	27 × 20 × 6	
114	951-350	不整形	72 × 42 × 16	
115	952~953-350~351	楕円形	53 × 39 × 13	
116	952-350	不整形	30 × 19 × 5	
117	952-350	隅丸方形	19 × 19 × 6	
118	952-349	隅丸方形	33 × 29 × 17	
119	951~952-349	円形	22 × 22 × 8	
120	952-349	隅丸方形	25 × 23 × 14	
121	950-349	円形	36 × 35 × 14	
123	948~949-349	隅丸長方形	42 × 31 × 14	
124	948~949-346~347	不整形	52 × 30 × 9	
125	949~950-346	楕円形	36 × 29 × 18	
127	950~951-345	隅丸方形	30 × 27 × 14	
129	947-344~345	隅丸長方形	39 × 32 × 5	
130	947-343~344	隅丸長方形	34 × 25 × 15	
131	947-342	隅丸長方形	30 × 23 × 29	
132	947-341	隅丸方形	37 × 32 × 9	
134	951-341	楕円形	29 × 21 × 11	
135	950-341	水滴形	53 × 37 × 13	
136	947-338~339	隅丸方形か	32 × 30 × 30	
142	941-339~340	楕円形	[29] × [23] × 14	
143	940-339	隅丸方形	[25] × [17] × 16	
144	942-339	方形	16 × 14 × 12	
145	941-339~340	楕円形	54 × 44 × 30	
149	937~938-335	隅丸方形	30 × (26) × 23	
150	937~938-334~335	円形	(31) × 30 × 23	
151	937~938-335~336	隅丸方形	43 × 40 × 25	
152	939-339	楕円形	35 × 32 × 24	
153	938-336	隅丸長方形	31 × 25 × 20	
154	938-336~337	隅丸長方形	28 × 27 × 20	
155	938-335~336	楕円形	38 × 26 × 18	
156	937-337	隅丸方形	44 × 24 × 24	
158	936~937-337	円形	27 × (20) × 10	
159	937-335	隅丸長方形	55 × 30 × 24	
160	937-334	楕円形	54 × 34 × 5	
161	936~937-334	隅丸方形	28 × 26 × 12	
162	936-334	隅丸方形	24 × 21 × 14	
163	936-334~335	隅丸方形	25 × 22 × 15	
165	936-332	円形	28 × 26 × 18	
166	936-332	隅丸方形	28 × 24 × 16	
167	936-331	隅丸方形	28 × 24 × 17	
168	936-331	楕円形	33 × 27 × 17	
169	936-331	楕円形	45 × (33) × 11	
170	936-331	隅丸方形	35 × 34 × 26	
171	935~936-331	隅丸方形	29 × 29 × 24	
172	935-331	隅丸方形	34 × (28) × 38	
173	935-331	円形	27 × (23) × 23	
174	934-331	隅丸長方形	33 × 26 × 21	
175	936-330	楕円形	37 × 30 × 19	
176	936-330	隅丸方形	24 × 22 × 16	
177	936-929~930	楕円形	33 × 21 × 19	
178	936-329	円形	25 × 24 × 17	
179	936-329	隅丸長方形	34 × 25 × 20	

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(cm)	備考
180	935~936-329	隅丸長方形	32 × 24 × 24	
181	935-328	豆形	39 × 28 × 21	
182	934-329	隅丸三角形	26 × 19 × 14	
185	935-326~327	隅丸長方形	[30] × 25 × 28	
187	934~935-323~324	楕円形	37 × 31 × 11	
188	934-323	隅丸長方形	28 × 26 × 12	
189	958-358~359		- × - × -	
190	952~953-351~352	隅丸方形	24 × 23 × 10	
191	947~948-349	不整形	(52) × 46 × 21	
193	936~937-337	円形	28 × (25) × 10	
194	938-337	楕円形	28 × 24 × 32	
195	937~938-337	隅丸長方形	56 × 47 × 33	
223	958-352	円形	30 × 27 × 22	
225	941-339	長方形	(42) × 19 × 12	
226	941~942-331	円形	62 × 60 × 5	
ビット番号を付したビット				
5	939-343	楕円形	30 × (27) × 10	
6	939-343	楕円形	28 × (26) × 10	
7	939-344	楕円形	26 × 22 × 10	
8	938-344~345	隅丸方形	31 × 24 × 7	
9	938-345	楕円形	33 × 21 × 18	
14	935~936-344	隅丸方形	40 × 37 × 45	
15	935~936-343	楕円形	32 × 24 × 31	
16	935~936-342	円形	40 × 40 × 22	
17	935-340	隅丸方形	34 × 32 × 29	
18	936-341	隅丸方形	28 × 27 × 32	
19	936-340~341	楕円形	37 × 30 × 40	
20	936-340	隅丸三角形	(31) × 30 × 12	
21	935-341	隅丸方形	17 × 15 × 6	
22	935-338	隅丸方形	49 × 38 × 46	
23	936~937-342	隅丸方形	26 × 23 × 4	
24	936-341	隅丸方形	20 × 19 × 19	
25	936~937-341	隅丸方形	22 × 22 × 20	
26	936~937-340	隅丸長方形	21 × 15 × 8	
27	936~937-339	楕円形	30 × 28 × 9	
28	938-345	隅丸方形	26 × 24 × 22	
29	937~938-345	方形	25 × 22 × 13	
30	937-345	隅丸方形	30 × 26 × 39	
31	937-344~345	隅丸三角形	46 × 34 × 30	
32	939-344	方形	31 × 28 × 24	
33	939-343	楕円形	45 × 33 × 32	
34	938~939-341	隅丸方形	28 × 26 × 6	
35	938-341	円形	24 × 23 × 16	
36	933-342	楕円形	35 × 28 × 25	
37	935-340	隅丸方形	22 × 19 × 13	
38	937-344	隅丸方形	22 × 19 × 22	
39	937-343	隅丸方形	32 × 28 × 17	
40	937-342	隅丸方形	31 × 29 × 19	
41	937-340	隅丸方形	37 × 32 × 47	
42	937~938-342~343	楕円形	53 × 33 × 32	
43	937~938-341~342	隅丸方形	38 × 35 × 61	
44	937-341	楕円形	28 × 23 × 14	
45	937~938-341	隅丸方形	34 × (20) × 39	
46	938-340	隅丸方形	33 × 28 × 28	
47	937~938-340	隅丸方形	26 × 26 × 35	
48	937-340	隅丸方形	34 × 28 × 48	
49	937-340	隅丸方形	20 × 18 × 12	
50	938-340~341	円形	33 × 31 × 12	
51	937~938-340	楕円形	48 × 41 × 7	
52	937-339	楕円形	32 × 30 × 5	
53	937-340~341	隅丸長方形	36 × 36 × 43	
54	937-342	隅丸方形	21 × 18 × 17	
55	932-337	楕円形	23 × 16 × 5	
56	930-339	楕円形	20 × 15 × 7	
57	935-345	楕円形	19 × 12 × 7	
101	945-353~354	楕円形	40 × 36 × 58	
102	944-353	楕円形	33 × (22) × 57	
103	945-354~355	楕円形	38 × 25 × 53	
104	946-358	楕円形	35 × 30 × 47	
105	945-361	円形	31 × 29 × 65	
106	944-363	円形	44 × 42 × 14	
107	946-362	楕円形	55 × 37 × 47	
108	946-362	隅丸方形	30 × (22) × 28	
109	943~944-360	楕円形	36 × 26 × 45	
110	945-358	隅丸方形	60 × 48 × 17	
111	945-358	隅丸三角形	42 × 30 × 15	
112	948~949-359	楕円形	48 × 35 × 35	
113	943~944-365	楕円形	63 × 30 × 55	
114		円形	44 × 40 × 32	
115	950~951-361	隅丸方形	40 × 39 × 76	
116	950-361	隅丸方形	47 × 38 × 62	

第3章 発見された遺構と遺物

を呈し、底面は平底で、壁面は急傾斜を呈する。また、10 a 号溝と10 b 号溝は17cmの間隔を以て並走する。

11号溝は箱堀状を呈し、底面は平底で、壁面は急傾斜を呈する。最終使用面では中部西寄りに上幅196cm、基底幅422cmを測る埋戻し土橋が残る。この土橋の東側基底端から東に170cm程の位置から、77°の傾斜で比高差104cmの立ち上がりが見られる。そして、この位置には、完掘状態で東西164cm、南北88cm、深さ150cmを測る隅丸長方形プランの土坑の掘削が見られたが、本土坑の底面は、堀の西側底面より38 cm、東側底面より50cm程低い。またその直ぐ東側28cmの間には、基底幅16cm、深さ100cmを測る薬研堀の痕跡が遺されていたが、最終段階では54cm程の高さに埋め戻されていた。また、11号溝の南縁は幅60cm、深さ20cm程低くなっている。

遺物 5号溝からは形象埴輪(413)・不明(414)・家形と思われるもの(415)・靱と思われるもの(416)・人物(417)、円筒埴輪(418)、龍泉窯系青磁(419・420)、古瀬戸陶器平碗(421)、甕と見られる常滑陶器甕(422・423)、在地系土器皿(424~427)・内耳鍋(428~434)・片口鉢(435~439)・火鉢(440)・火鉢と見られるもの(441)・器種不明(442)、板碑片、板碑片と思われるもの(454)、石製硯、石臼、石臼上臼(457)、石鉢(461)、石鉢と見られるもの、凹み石(463~465)、敲石、砥石(467・468)、礫石器の凹み石(471)、火打石(473・475)、不明石製品など、10 a・b号溝からは在地系土器片口鉢(510~514)、皇宋通寶(515)、政和通寶(516)、鉄釘(517・518)、砥石、敲石など、11号溝からは人物埴輪(522)、円筒埴輪(523~527)、円筒埴輪と見られる埴輪片(528)、中国陶磁白磁皿(529)、瀬戸・美濃陶器天目碗(530)、常滑陶器甕(531)、在地系土器皿(532)、鉄釘(533)などが出土している。また10号溝東部の河道と思われる個所からは在地系土器内耳鍋(580)と板碑片が出土している。

所見 5・10 a・10 b・10 c・11号溝は、その走向と規模から推して、館の堀と判断される。

5号溝は、後述の虎口遺構の存在により11号溝と2重堀を成している。薬研堀から箱堀に掘り直されているが、薬研堀の底面の二箇所の掘り残しは、障子掘りに類する機能があったものと思慮される。また、西部の虎口部に残る掘り残しは、当初ここに土橋が設けられていたことを示唆するものと思われる。

このうち10 a 号溝と10 b 号溝は走向と規模が近似し、西端の位置が近接することから掘り直しの可能性がある。また、西端が調査区内で途絶えて、対応する溝が西側に掘削されないことから、その掘削意図は今後検討する必要がある。そして、10 a・10 b 号溝と10号 c 溝の走向が異なることから、別遺構と解釈される。また、10号溝東端は斜め方向に577cm程広がっており、この部分は利根川に浸食されたものと解釈され、調査区東から9 m程の間の10(b)号溝の南縁は蛇行が著しく、10 b 号溝の南端想定ラインより88cm程広がっていたことから、この区間の南縁も利根川の浸食による可能性が考えられる。

11号溝は、5号溝と同様に、薬研堀から箱堀に掘り直され、箱堀の段階では橋脚から土橋に入り口構造を変更している。また、11号溝の最終段階の遺構は2号土塁の突出部の延長部を境に東西に分けられ、虎口側(西側)に対し、東側は浅く、西側東端は障壁となっており、西側が外、東側が内という認識があったことが窺われる。

また各溝の出土遺物からは、5号溝は14世紀中葉から15世紀前半、10号溝は14世紀後半から15世紀前半という時期が得られた。10 a・10 b 号溝は10号溝出土遺物の時期が当てられ、10 c 号溝はそれ以前の所産と考えられる。一方、5・11号溝は14世紀中葉から15世紀前半という期間が与えられる。

4. 郭内の溝遺構(第73図、PL.13)

概要 郭内では、12・13・15号溝の、4条の中小規模の溝を確認調査した。

位置 12~15号溝は1-1区北東部、館の南東部に在り、位置するグリッドは、12号溝は933~942-331・332、13号溝は938-328~331、15号溝は933・934-334である。

規模 12号溝 残長：9.8m 幅：62cm 深さ：74cm

13号溝 残長：3.2m 幅：37cm 深さ：8 cm

15号溝 長：1.2m 幅：45cm 深さ：9 cm

重複 12号溝は11・13号溝、24・25・27・46・156・186号土坑と重複する。本溝は11・13号溝との新旧関係は特定できなかったが併存の可能性があり、24・25・27・46号土坑は本溝より新しく、156・186号土坑は古い。13号溝は12号溝、62・186号土坑と重複するが、両土坑との新旧関係は特定できなかった。

覆土 12号溝は灰色細砂等、13号溝は褐灰色土、15号溝

は灰黄褐色土で埋没する。

構造 各溝の走向は、12号溝はN-1°-E、13号溝はN-88°-W、15号溝はN-1°-Wに取り、その走行は共に直線的である。また、13号溝は、11号溝南肩から2.2m程の地点で12号溝より垂直東方に分岐する。

各溝は、共に箱堀状を呈し、平底を呈する。また12号溝は、13号溝の分岐点の北側に基底幅43cm、上幅20cmを測る低い障壁が設けられるが、その頂部と12号溝底部との比高差は北側で20cm、南側で50cmを測る。

尚、12号溝は、11号溝との交差点から北では、明瞭ではなくなるが、僅かな段差によって、北側の10号溝まで達していたものと思慮される。

遺物 15号溝からは土師器片と少量の中世在地系土器片が出土したが、図示すべきものはなかった。また、12・13号溝からの遺物の出土はなかった。

所見 12・13・15号溝はその走向と規模から、郭内の区画溝と館の堀と判断される。

また、その時期は、館の存続時期として把握されるだけで、特定することはできなかった。

5. 郭内の土坑とピット(第74~82図、PL.16・29)

概要 本館の郭内では多数の土坑とピットが確認された。しかし、1-1区1期調査では、上述のように短期間で遺構を処理する必要があったため、調査の効率上、遺構番号を土坑とピットで分けることはせず、一括土坑として処理したが、本項では土坑とピットに分けて報告するが、遺構番号を変更することはしなかった。

また、3期調査では遺構番号を独自に付したが、本稿では、混乱を避けるため、敢えて遺構番号を振り直していることを附記する。

本項に報告する土坑は78基、ピットは184基(うち土坑番号を付したものは129基)である。

位置 表8・9に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位 表8・9に記した。

重複 重複したもののうち、新旧の特定できたものを下に記す。尚、溝と重複したものは省略する。

54号土坑←55号土坑、62号土坑←18号土坑、107号土坑←106号土坑、140号土坑←139号土坑、147号土坑←146号土坑、150号土坑←149号土坑、203号土坑←209号土坑、17号ピット←48号ピット号土坑、53号ピット

←45号ピットの順にそれぞれ新しい。

覆土 各土坑ピットの断面図を参照されたい。

構造 77基の土坑のプランは、隅丸方形5基、隅丸長方形42基、円形等5基、楕円形14基、その他12基であり、隅丸長方形が全体の53.8%、楕円形17.9%を占める。掘削形態は箱堀状を呈し、底面は総じて平底を呈するものが多い。

一方、ピット184基のプランは、隅丸長方形23基、隅丸方形65基、方形3基、円形24基、楕円形62基であり、方形様のものが49.5%、円形様のもの46.7%であり、隅丸方形或いは方形プランのものが37.0%を占めた。掘削形態は柱穴状で、底面形は総じて丸底を呈するものが多かった。

遺物 27号土坑からは敲石、40号土坑からは鉄釘(536)と永楽通寶(537)、45号土坑からは石臼下白(538・539)、57・58号土坑からは火打石(542)、62号土坑からは不明銅製品と石製品硯(544)、65号土坑からは常滑陶器甕(545)、114号土坑からは礎石、122号土坑からは不明鉄製品(547)、刀子(548)、砥石(549)、128号土坑からは在地系土器片口鉢(550・551)とすり鉢(552)、砥石(553)、板碑片(556)、石臼下白(557)、不明石製品(558)、永楽通寶(559)、皇宋通寶(560)、銅銭(561)、133号土坑からは常滑か渥美製の陶器甕(562)、141号土坑からは在地系土器すり鉢(563・564)、148号土坑からは平碗と見られる古瀬戸陶器片(565)、在地系土器片口鉢(566)、砥石(567)、183号土坑からは在地系土器内耳鍋(568)、195号土坑からは砥石(569)、198号土坑からは甕と見られる常滑陶器片(570)、306号土坑からは瀬戸・美濃柳碗(573)と志戸呂陶器灯火皿(574)、308号土坑からは肥前磁器染付仏飯器(575)が出土している。また、遺構番号の重複から混乱が生じているが、310号土坑または館外の10号土坑から在地系土器皿(576)、19号土坑または319号土坑から出土したものに龍泉窯系青磁鎗蓮弁文碗(577)があり、33号ピットは在地系土器香炉(579)が出土している。

所見 128・221号土坑は北頭西向横臥屈葬による人骨の埋葬が認められたため、墓地であることが確認された。このうち127号土坑は北部9号溝の南に在り、西半分の壁際に礫が積まれており、被葬者は成人男性であった。また221号土坑は11号溝南側、虎口遺構の東側に掘削されたもので、被葬者は10歳の男子であった。この他の土

坑では、大型の隅丸長方形プランの土坑は貯蔵穴の可能性はあるが、他の土坑の掘削意図は想定できなかった。

またピットは柱穴或いは杭後の可能性が高いが、現時点で建物を想定することはできていない。尚、2号土塁北縁の東側延長線付近に在る、14・16・17・22号ピットは170cm程の柱間を以て東西に連なっている。対応する柱穴が無く、建物を想定することはできなかったが、土塁構築に伴うものである可能性が考慮される。

各土坑の時期は、出土遺物から推して、53号土坑は14世紀から15世紀中葉、128号土坑は15世紀後半、141号土坑は15世紀後半から16世紀、148号土坑は14世紀後葉から15世紀初頭、183号土坑は15世紀後半、204号土坑は15世紀末から16世紀中頃、4号ピットは14世紀後半から15世紀後半、5号ピットは16世紀、65・133・164号土坑は中世の所産として把握されるが、他の土坑ピットの時期は特定できなかった。

6. 虎口遺構(第64図、PL.15)

概要 下之宮高仮遺跡では、中世館に於いて、明瞭な構造を有する虎口遺構が確認された。この遺構は2号土塁、5・11号溝を取り込むもので、橋脚跡、門遺構を伴うものである。

位置 本遺構は、1-1区西部北寄りに在り、929～941-347～364グリッドに位置する。

規模 東西17.6m 南北12.8m

橋脚 柱穴 P 1 径：72×50cm 深さ：101cm

柱穴 P 2 径：74×66cm 深さ：84cm

柱穴 P 3 径：57×54cm 深さ：89cm

柱穴 P 4 径：75×65cm 深さ：86cm

門 範囲 東西：236cm 南北：312cm

門柱間：266cm

帯郭 東西(残長)：16.7m 南北：336～364cm

構造 外側の堀である5号溝を渡る橋は、最終段階では木橋であり、5号溝の壁面に径の平均63.9cm、溝の肩部から平均90.0cmの深さを測る、規模の大きな柱穴を4基掘削して、橋脚を渡す。橋脚の柱穴の桁間は東側が150cm、西側が129cmを測り、梁間は南側が140cm、北側が130cm、橋脚は土層断面から推して6、7寸程度と想定される大型のものである。

木橋を渡ると両側の土塁に挟まれた、やや縦長、即ち

南北方向に長い空間がある。その中位に両側に礎石を据えた門が設置されるが、その柱間は1間半程を測るものである。この門の構造は不明であるが、支脚は伴わない。

門を越えると、2号土塁と11号溝に挟まれた、帯郭上の空間に出る。左方(西側)は調査区外に在るため、確認できないが、門の直近で空間が閉鎖された痕跡は認められなかった。一方、右方(東側)へ折れると12.6m程で2号土塁の北側突出部に突き当たり、左(北)に折れると11号溝の埋戻しの土橋があり、これを渡って内郭側に入る。11号溝に土塁は伴わなかったが、灰黄褐色粘質土の分布から、土塁があったことが窺われた。尚、内額側の門の遺構は確認できなかった。

遺物 東西の門の礎石(東：411、西：401)の他2号土塁、5・11号溝からの遺物の出土はあったが、該当遺構の項を参照されたい。

所見 本遺構は有機的に遺構を結合して造られた、城塞化された虎口遺構である。また、土塁等を撤去して遺構確認を行ったが、2号土塁の項で述べた、門西側のピット2基を除いて、土坑、ピットは全く確認されなかったことから、当初より虎口遺構として構築されたものと解釈される。

また、その時期は、出土遺物から推せば、本館の使用期間の終盤と想定されることから、15世紀前半ということになる。最も館全体としては16世紀の出土遺物も見られるが、堀幅が3m或いは1.2mなどと狭いことを勘案すれば、16世紀半ばまで時期が下るとは考え辛い。また、城塞化の契機としては、15世紀後半の享徳の乱にその可能性が高いように思われる。

(3)館外の遺構群

1. 土坑群・ピット(第83・84図、PL.16)

概要 館の南側では、土坑16基と、ピット4基を確認調査した。このうちピットと土坑14基は、館の外堀である5号溝から13m以内に掘削され、土坑の主軸方向は、15基が略南北方向にある。

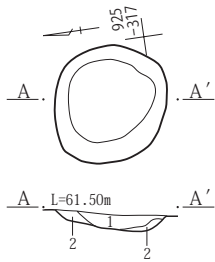
位置 表10・11に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位 表10・11に記した。

重複 202号土坑と208号土坑、203号土坑と209号土坑が重複しているが、202・209号土坑が新しい。

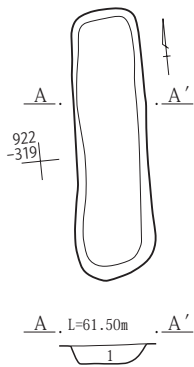
他の土坑は他の遺構との重複はなかった。

10号土坑



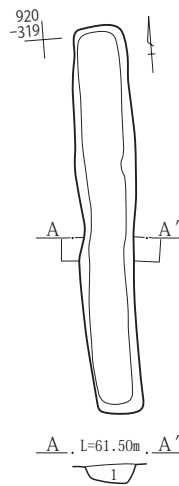
10号土坑 SPA-A'
1 にぶい黄橙色土 洪水層土。砂質。
2 明黄褐色土 洪水層土。砂質。

11号土坑

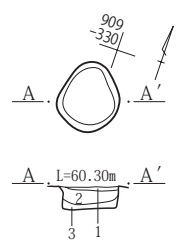


11・12号土坑 SPA-A'
1 にぶい黄橙色土 洪水層土。砂質。

12号土坑

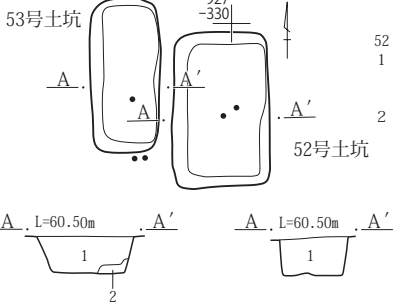


16号土坑



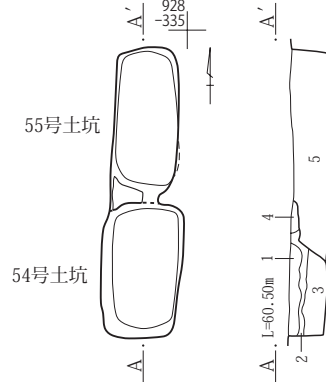
16号土坑 SPA-A'
1 褐灰色砂質土 As-B多く入り黄褐色土粒混入。酸化鉄も入る。
2 褐灰色砂質土 As-B多く入り、酸化鉄粒・小ブロック状に沈着。
3 黒褐色砂質土 As-B多く入り、酸化鉄粒・ブロック状に沈着。

52、53号土坑



52・53号土坑
1 灰黄褐色土 にぶい黄褐色・黒褐色粘質土含む、As-B混ブロック混土。
2 灰黄褐色土 1に比し黒褐色粘質土多い、As-B混ブロック混土。

54、55号土坑

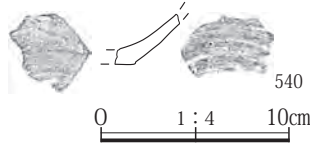


54・55号土坑
1 灰黄褐色土 明黄褐色粘質土含むブロック混土。As-B含む。
2 灰白色粘質土 黒褐色・明黄褐色粘質土とAs-B含む。
3 黒褐色土 As-Bと少量の明黄褐色粘質土含む。
4 灰白色粘質土 As-B含む。
5 褐灰色粘質土 As-Bとブロック状の明黄褐色土含む。

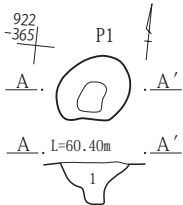
53号土坑



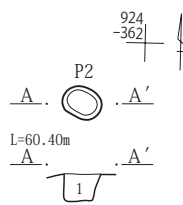
52号土坑



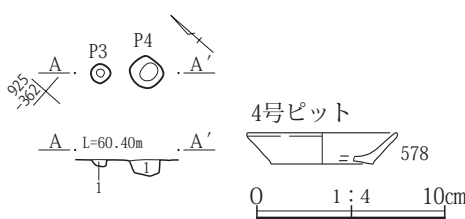
1号ピット



2号ピット



3、4号ピット



1号ピット SPA-A'
1 にぶい黄褐色土 ややしめる。As-B混。黄褐色土をブロック状に含む。

2・3号ピット SPA-A'
1 灰黄褐色土 粘質。やしめる。

第83図 館外の土坑とピット(1)と出土遺物(1)

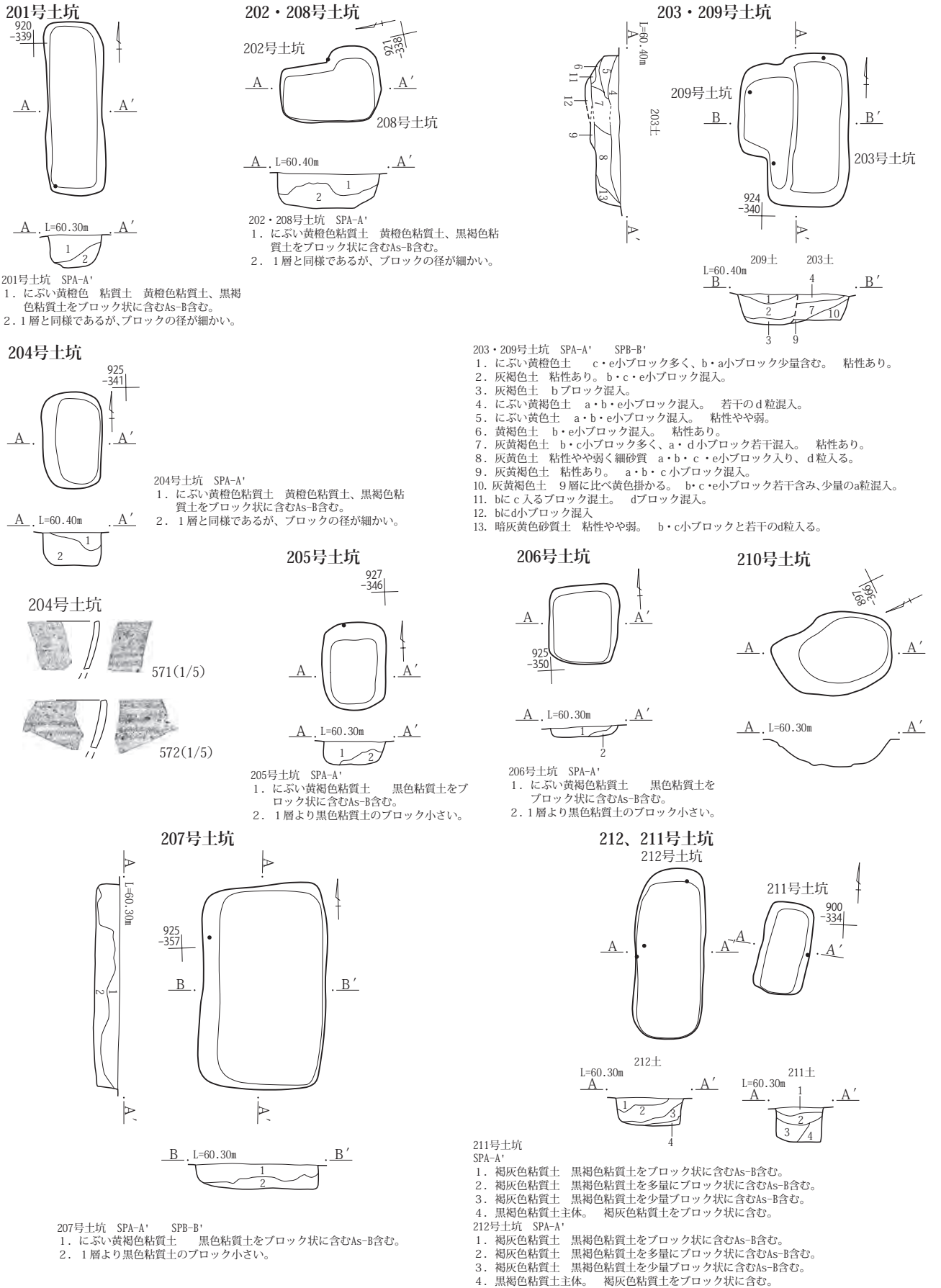
表10 3面館外土坑一覽

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
52	924~926-329~330	隅丸長方形	218 × 136 × 52	N-1°-W
53	925~927-330~331	隅丸長方形	218 × 100 × 55	N-1°-W
54	923~925-335~336	隅丸長方形	192 × 115 × 53	N-0°
55	925~927-335~336	隅丸長方形	[220] × 90 × 56	N-2°-E
201	939-329	隅丸長方形	22 × 22 × 3	N-1°-W
202	937~938-330	隅丸長方形	45 × 36 × 17	N-9°-E
203	937-331	隅丸長方形	33 × 29 × 4	N-0°
204	936~937-332	隅丸長方形	[38] × [34] × 22	N-0°
205	936~937-331~332	隅丸長方形	[45] × [36] × 10	N-2°-E
206	936~937-331	隅丸長方形	35 × 29 × 5	N-6°-E
207	937~938-331~332	隅丸長方形	[66] × [53] × 13	N-3°-E
208	939-329	隅丸長方形	28 × 27 × 14	N-84°-E
209	939-330	隅丸長方形	33 × 29 × 9	N-0°
210	938~939-330~331	略楕円形	31 × 27 × 12	N-12°-E
211	939-331	隅丸長方形	35 × 31 × 12	N-11°-E
212	939-332	隅丸長方形	27 × 25 × 11	N-0°

表11 3面館外ピット一覽

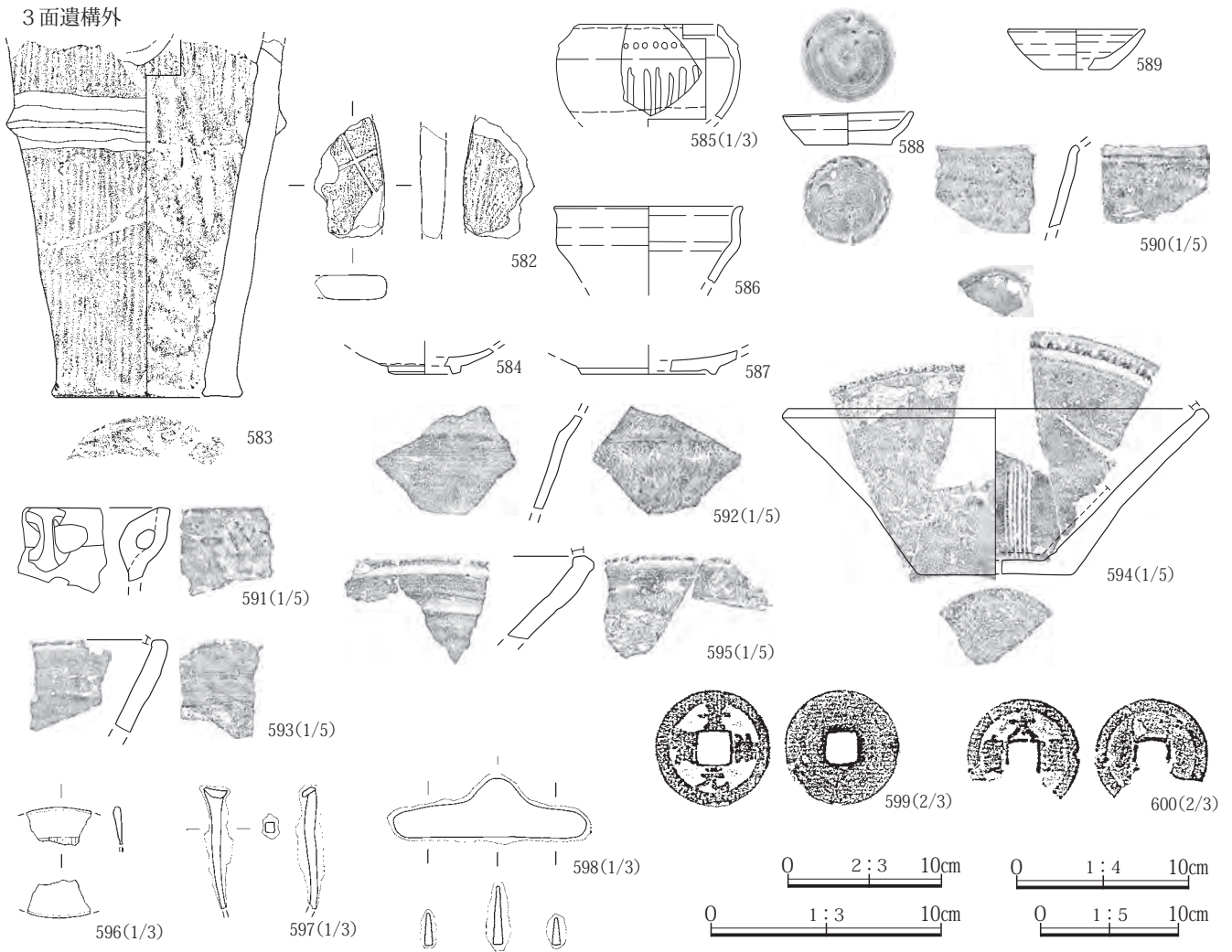
番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(cm)	備考
1	921-364	略楕円形	63 × 50 × 29	
2	923-362	隅丸長方形	31 × 25 × 20	
3	924-361	円形	15 × 15 × 4	
4	924-361	隅丸方形	25 × 23 × 10	

第3章 発見された遺構と遺物



0 1:80 2m

第84図 館外の土坑(2)



第85図 1区3面の遺構外の出土遺物

覆土 各土坑ピットの断面図を参照されたい。

構造 16基の土坑のプランは、隅丸長方形15基、略楕円形1基、であり、その殆どが隅丸長方形を呈する。掘削形態は箱状で、平底を呈する。

一方、ピット4基のプランは、2基が方形様、2基が円形様を呈する。また掘削形態は1号ピットがすり鉢状を呈する他は、筒状で平底を呈する。

遺物 52号土坑からは在地系土器皿(540)、53号土坑からは古瀬戸陶器盤類(541)、204号土坑からは在地系土器内耳鍋(571・572)があり、4号ピットからは在地系土器皿(578)が出土している。

所見 隅丸長方形プランの土坑は貯蔵穴の可能性を有するが、210号土坑と1～4号ピットの掘削意図を想定することはできなかった。

各土坑の時期は、出土遺物から推して、53号土坑は14世

紀から15世紀中葉、204号土坑は15世紀末から16世紀中頃、4号ピットは14世紀後半から15世紀後半の可能性を有する。

(4) 3面遺構外の出土遺物(第85図、PL.29)

概要 3面の遺構外の出土遺物には、形象埴輪(582)、円筒埴輪(583)、中国磁器白磁皿(584)・青白磁小壺(585)、瀬戸・美濃陶器白天目碗(586)・皿類(587)、在地系土器皿(588・589)・内耳鍋(590～592)・片口鉢(593～595)、銅製鏡(596)、鉄釘(597)、火打金(598)、嘉祐元寶(599)、銅銭(600)、板碑片、火打石の出土がみられた他、少量の須恵器、土師器や中近世の在地系土器片が出土している。

第4節 4面の調査

(1) 4面の概要

4面では、天仁元(1108)年の浅間山の大爆発に伴って降下したAs-B軽石で被覆された、古代末の調査面である。本面は1-1、1-2区のみで確認、調査した。

1-1区では、北東部から北部と、南西隅部を除く南半部では削平されて、遺構を確認することができなかった。また、1-2区は2013年9月始めの台風14号の降雨後の出水と、排土置場の問題等から東半部の過半と、西半部はトレンチ調査ができたに過ぎなかった。

4面では、遺構確認範囲のほぼ全域で11面のAs-B下畑が検出された。また、1-1区の南部に溝3条と土坑1基が確認された。

(2) 4面の遺構と遺物

1. 4・27・28・29号溝(第図、PL.)

概要 4・27・28号溝は中規模、29号溝は大型の溝遺構である。

1-1区1期調査の4号溝と2期調査区の28号溝は同一の溝遺構である。

位置 27・29号溝は1-1区南西隅部に、4・28号溝は1-1区南部南寄りに在る。所在グリッドは、4号溝は904-329~332、27号溝は892~898-357~369、28号溝は892~899-311~369、29号溝は892~903-352~369である。

規模 4・8号溝 残長： 4号溝：14.4m、28号溝：59.1m 幅：65cm 深さ：7cm

27号溝 残長：13.7m 幅：78cm 深さ：33cm

29号溝 残長：18.1m 幅：232cm 深さ：7cm

重複 28号溝は27・29号溝と重複するが、新旧関係を特定することはできなかった。

覆土 4面各溝は灰黄色土等で埋没する。

構造 4・28号溝は極緩やかに蛇行する走行を呈するが、28号溝の西端でN-85°-E、4号溝の東端でN-90°を測る。その掘削形態は箱堀状で平底を呈する。

27号溝はN-63°-Wに走向を取り直線的な走行を呈するが、北西端で略西方に、みなみはして略南西方向に走行を転ずる。本溝は箱堀状を呈する左右2条の溝から成る。

底面の横断面形は平底状の箇所と丸底状の箇所がある。

29号溝N-47°-Wに走向を取り、直線的な走行を取る。掘削形態は箱堀状を呈するが、壁面は開き、底面の横断面形はV字形を呈する。

遺物 4号溝は敲石、28号溝からは須恵器片1片と不明鑄造鉄製品(608)等が出土した。

所見 4・27・28・29号溝の掘削意図は想定できなかった。

またその時期は、覆土の観察から平安時代以前の所産として把握されるだけで、特定することはできなかった。

2. 畑(第87~89図、PL.19)

概要 4面では、天仁元年のAs-B軽石で覆われた11面の畑を確認した。

尚、全体的に畝間は低かったが、特に東部では遺存状態は良くなかった。

位置 4面の畑は1-1区東部に120~125号畑、中・西北部に41号畑、南西隅部に40号畑、1-2区東半部に126号畑、北西部に127(128)・129号畑が在る。

位置するグリッドは表12に記した。

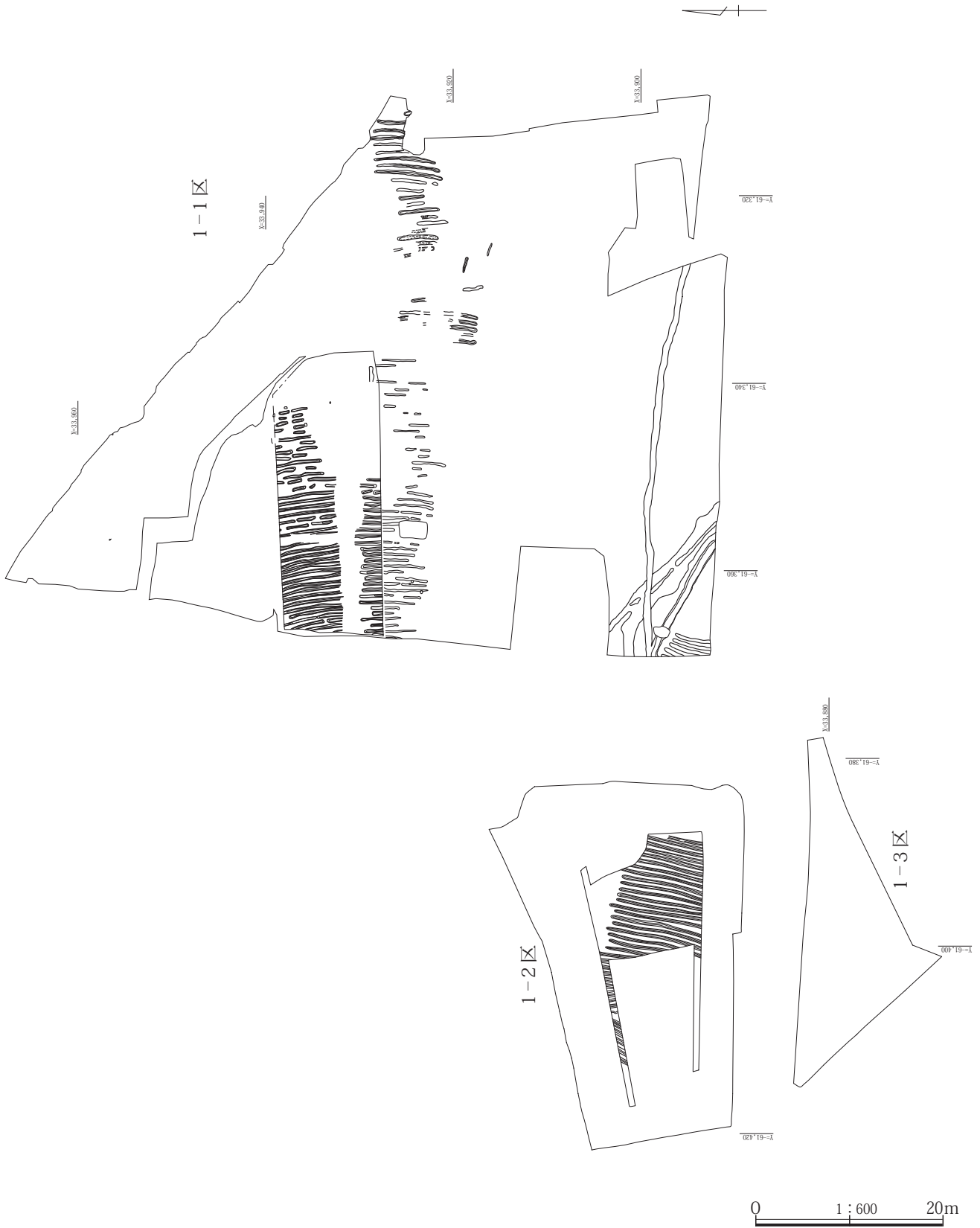
規模・主軸方位 表12に記した。

構造 畑の規模、個々のサクの掘削間隔や規模、畝間等は表12にまとめた。

遺物 4面の畑からの出土遺物は得られなかった。

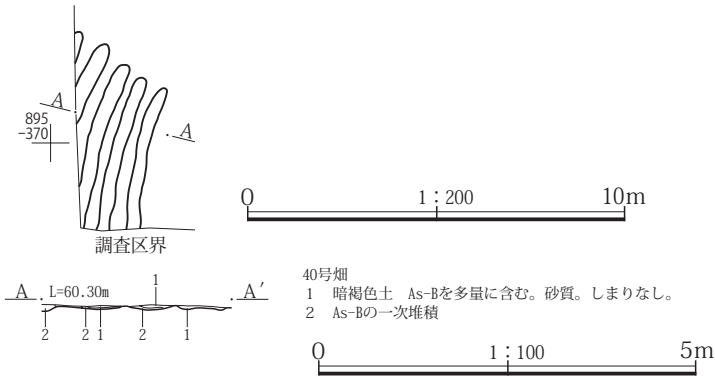
(3) 遺構外の出土遺物

概要 4面では少量の土師器、須恵器片が出土したが、図示すべきものはなかった。

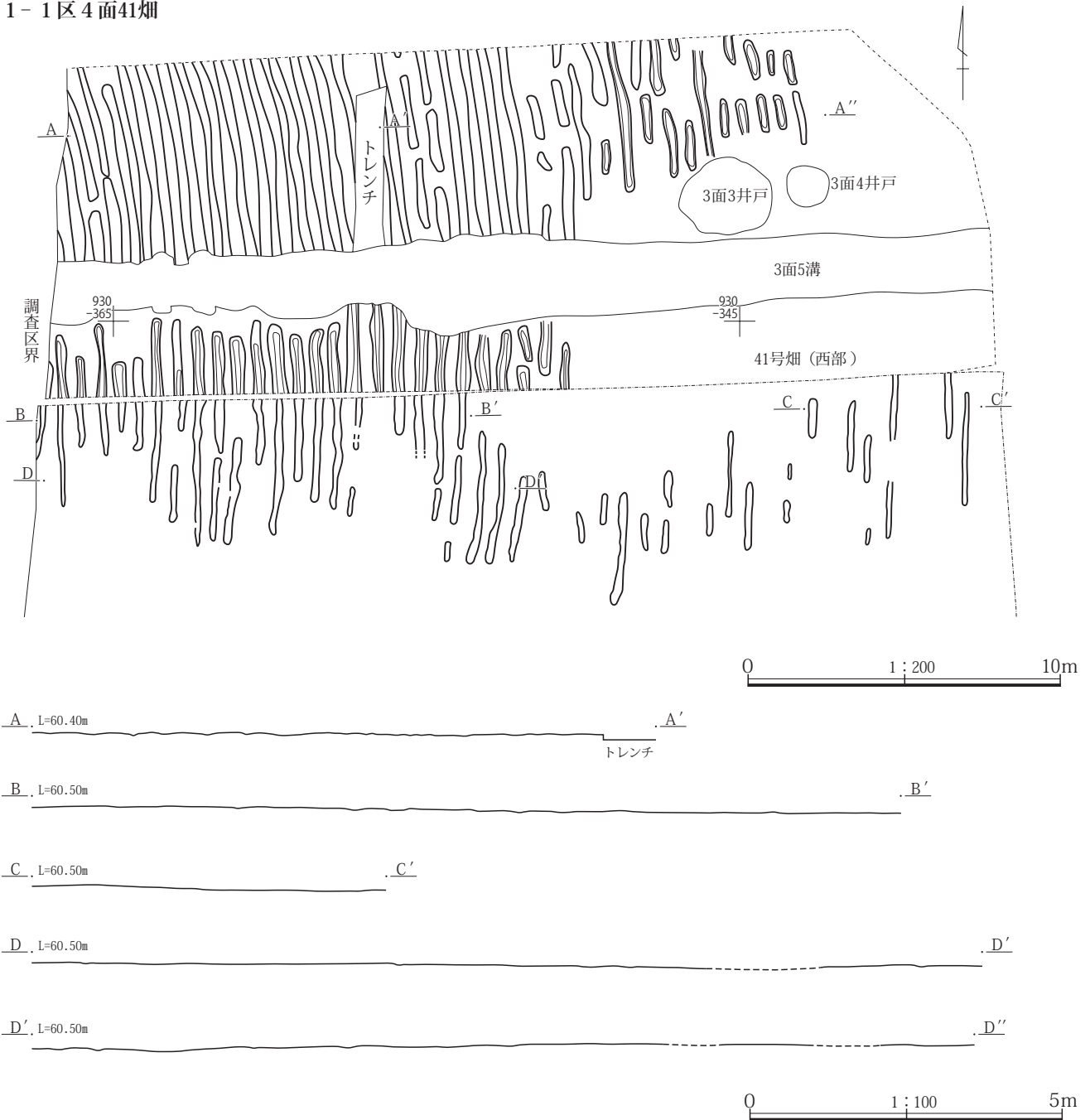


第86図 1区4面全体図

1-1区4面40畑

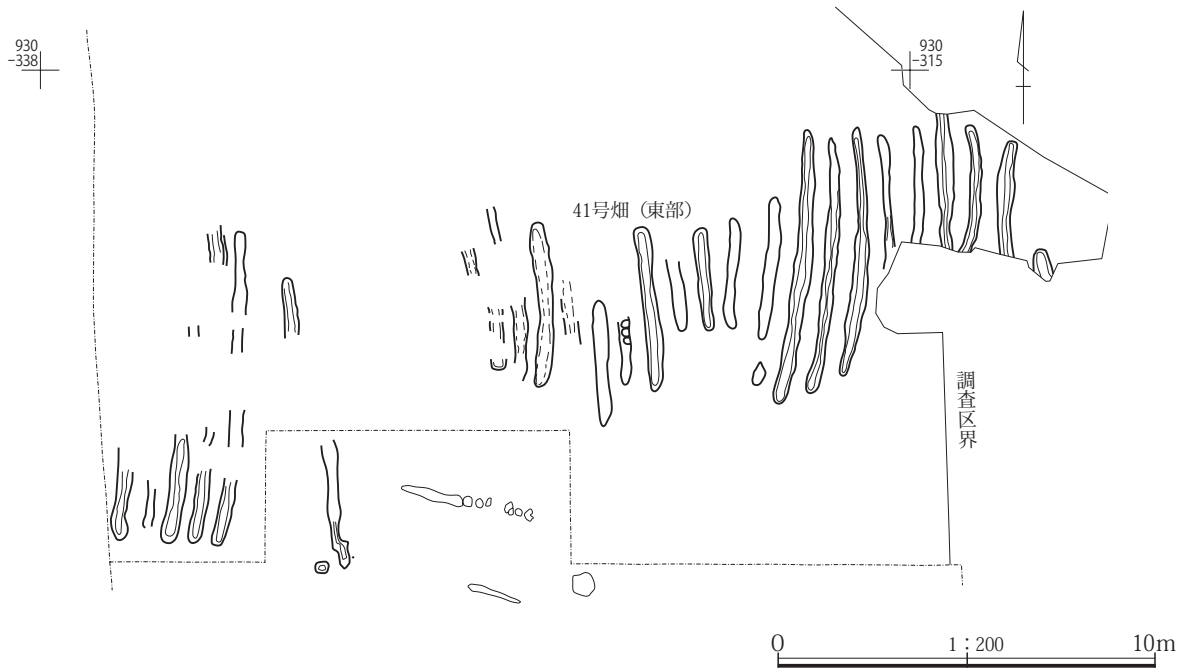


1-1区4面41畑



第87図 1区40・41号畑

1-1区4面41畑

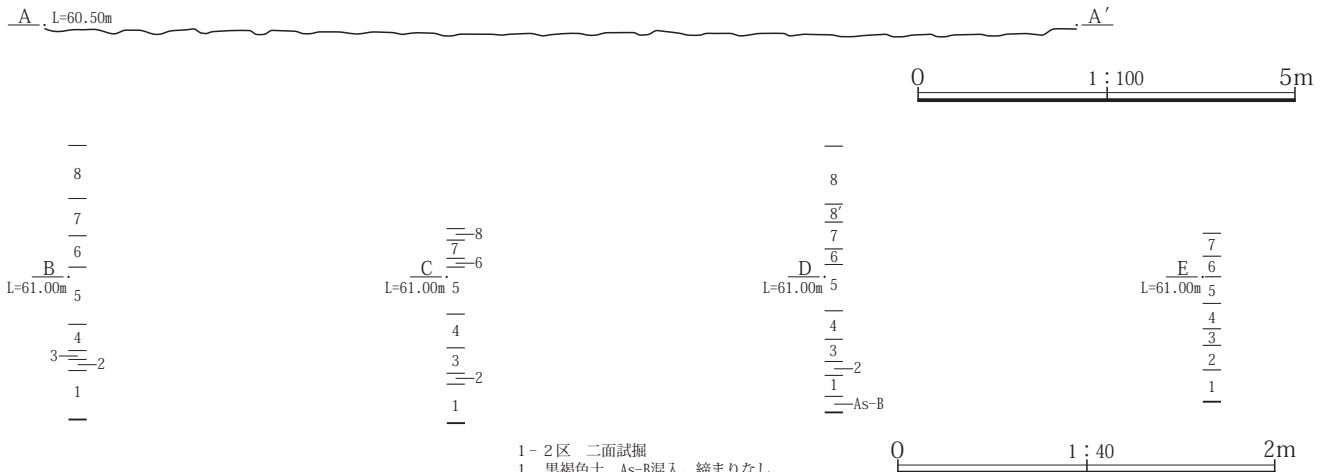


1-1区4面126～129畑



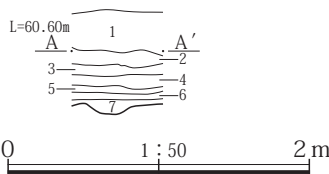
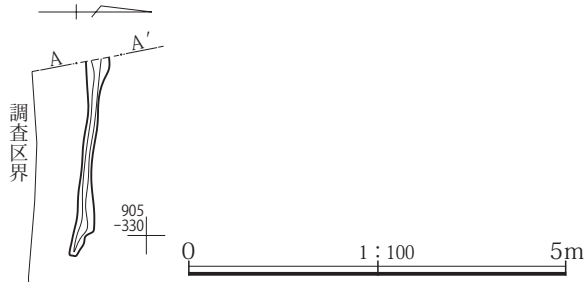
第88図 1区41・126～129畑

1-1区4面126~129号断面



- 1-2区 二面試験
1. 黒褐色土 As-B混入。締まりなし。
 2. 明黄褐色土 As-B混入。締まりなし。
 3. 褐色土 As-B混入。やや粘性。やや締まる。
 4. 灰黄褐色土 やや締まる。
 5. 灰黄褐色土 やや締まる。6層混入。
 6. 明黄褐色土 砂質。
 7. 灰黄褐色土 砂質。
 8. 褐灰色土 砂質。

1-1区4面4号溝

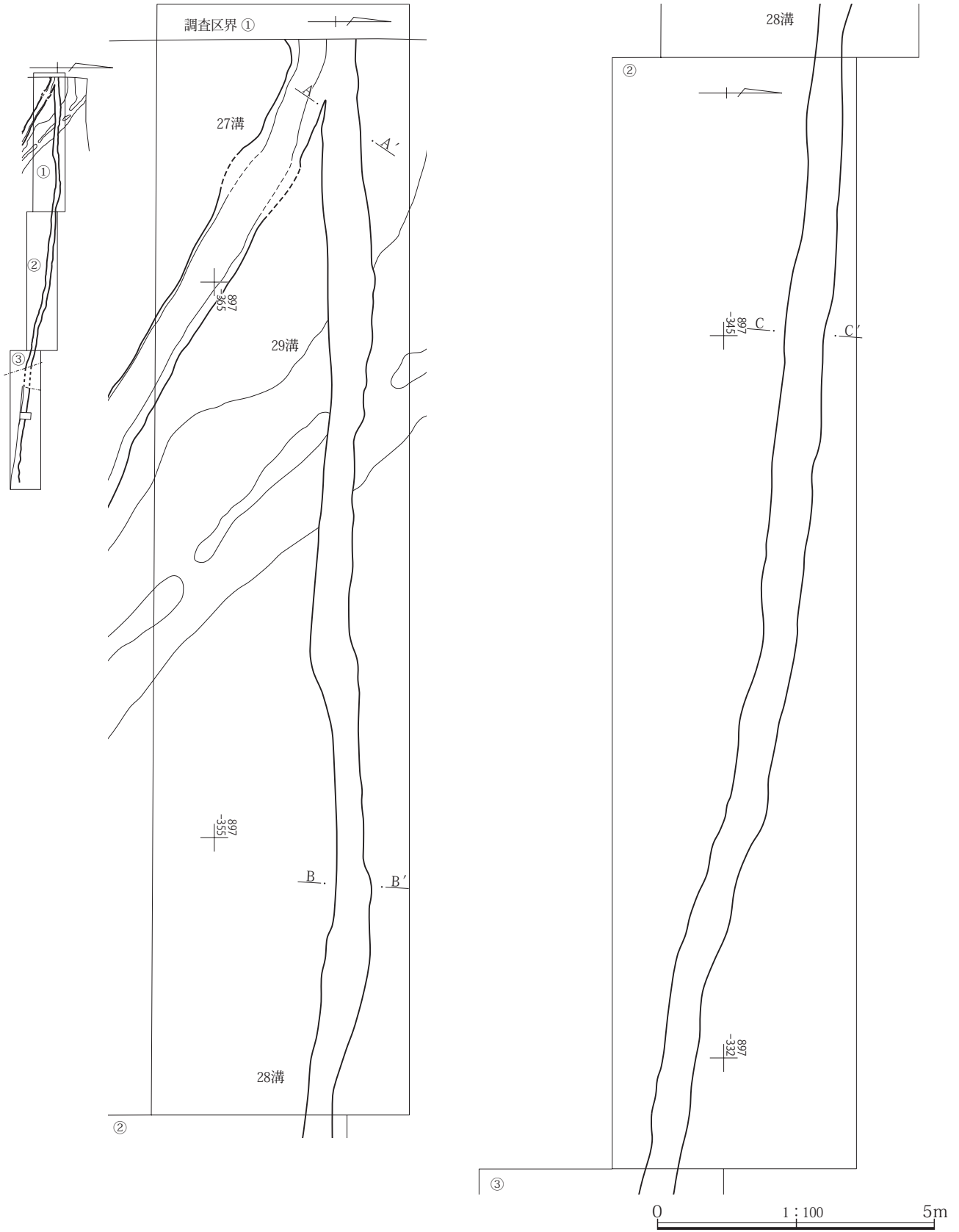


- 4号溝 SPA-A'
1. 灰黄褐色土 粉質だが粘性あり。
 2. 褐灰色土 粘性あり。川砂含む。
 3. 橙色土 粘性あり。
 4. 灰赤色土 粘性あり。As-B若干混入。
 5. 灰色土 As-B含む。酸化鉄粒入る。
 6. 褐灰色砂質土 酸化鉄多く沈着するAs-B混土。
 7. 褐灰色土 酸化鉄粒多く沈着。6層土と地山ブロック、As-B混入。
- 地山 黒褐色粘質土

表12 1区4面As-B下畑一覧

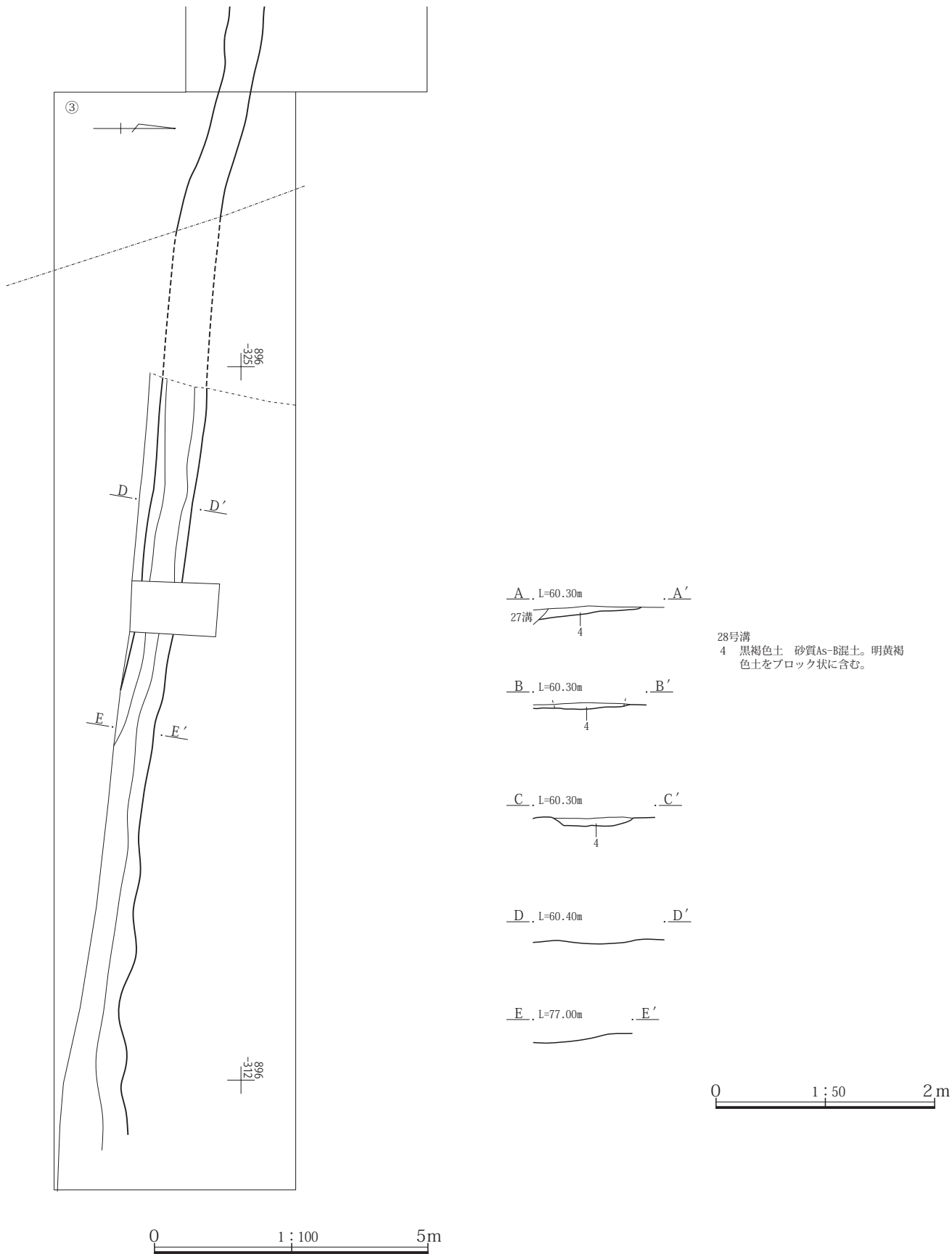
区	面	番号	所在グリッド	主軸方位	規模(m)	サク										
						条数	掘削間隔(cm)	(平均)	長さ(m)	(平均)	幅(cm)	(平均)	深さ(cm)	(平均)	畝間(cm)	(平均)
I-1	4面	40	892~897-366~369	N-18°-E	(4.45) × (2.94)	5	58~75	67.38	~ ~ ~	~	23~45	35.20	1~4	2.75	20~37	30.25
I-1	4面	41	916~939-311~367	N-85°-W	(56.28) × (17.92)	72	48~179	70.56	~ ~ ~	~	15~47	31.42	1~3	2.36	15~159	38.95
I-1	4面	120	915~919-324~328	N-75°-W	(3.60) × (2.51)	2	~ ~ ~	~	~ ~ ~	~	15~28	21.50	2~2	2.00	~ ~ ~	~
I-1	4面	121	912~916-322~324	N-11°-W	(4.25) × (2.16)	4	34~102	61.17	0.97~0.97	0.97	23~41	30.75	1~1	1.00	7~76	31.67
I-1	4面	122	904~914-312~319	N-19°-W	(12.00) × (3.15)	4	59~137	98.00	1.13~8.75	6.19	27~41	34.00	3~5	3.50	31~104	67.50
I-1	4面	123	894~904-310~317	N-13°-W	(10.38) × (7.30)	8	67~221	98.29	6.75~8.44	7.32	32~59	43.38	2~5	3.50	19~184	55.00
I-1	4面	124	894~898-315~320	N-77°-W	(3.9) × (3.35)	3	119~179	149.00	1.45~1.45	1.45	17~57	43.00	3~4	2.67	83~123	103.00
I-1	4面	125	895~900-321~323	N-10°-E	4.77 × 2.23	6	36~239	82.80	1.82~2.11	1.96	19~37	29.83	2~4	2.67	11~204	53.20
I-2	4面	126	893~904-388~401	N-75°-W	14.00 × (11.50)	22	49~73	63.08	~ ~ ~	~	13~57	32.55	3~20	10.38	15~42	30.60
I-2	4面	127	902~904-401~406	N-80°-E	5.30 × (0.70)	8	62~76	68.00	~ ~ ~	~	35~50	43.00	~ ~ ~	~	16~36	24.57
I-2	4面	129	901~903-408~412	N-80°-E	4.50 × (0.70)	5	59~81	73.13	~	~	33~56	44.20	~ ~ ~	~	18~34	~
I-2	1面	131	890~902-405~421	N-80°-E	×	~	~	~	~	~	~	~	~	~	~	~

1-1区4面28号溝



第90図 1区27・28・29号溝(1)

1-1区4面28号溝



第91図 1区28号溝(2)

第5節 5面の調査

(1) 5面の概要

5面は古墳時代前期の面で、遺構確認面は地表下約4mの深度に在る。5面の調査範囲は、1区東部の1-1区に限られた。

この1-1区のうち、1期調査区域(1-1区東部及び北部)の確認面は、後述する第5面以降の実確認面よりは若干高い層位にありその下位層は、調査過程で遺物包含層として認識されていたが、遺物の集中的分布は、調査区南東隅部(第92図右下寄り)から認められ、南東隅部を掘り下げて遺物の分布を確認したが、当該期の遺構は東側調査区外に在ると想定していた。

一方、2期調査区域(1-1区中央から南あるいは西側)ではHr-FA下面に遺構は確認できず、その下位層で遺構の存在を認めたが、遺構の輪郭等が明瞭でなかったため、さらに確認面を下げて、基本XV層付近を確認面として遺構を確認した。その結果、竪穴住居9軒、掘立柱建物1棟、焼土遺構、土坑5基、ピット15基、溝状遺構群3か所を確認、調査した。

3期調査区域(1-1区北寄りの第1・2期調査区域の間)では、調査期間の関係から第3面と一括の調査としていたが、第2期調査区域北端の8号住居の北半部を確認した。なお、8号住居以北の区域は、遺構壁面の観察等から、5面に相当する時期の遺構は分布していないものと判断された。

なお、平成23年度の2期調査域に於いて検出された2・5・9号住居は調査域の東方に延伸していたが、1期調査域は既に工事側に引き渡され、建設資材置き場となっており、且つ第2期調査域の東壁は十分な傾斜角を設定して掘削していたものの、埋土であることもあり、安全上拡張して調査することはできなかった。

(2) 5面の遺構と遺物

1. 住居群(第92図、PL.18)

上述のように5面では9軒の竪穴住居を検出した。このうち、2～5・7～9号住居は、N-17°-Wの軸方向

を示す直線に沿って配置し(以下「住居ライン」とする)、6号住居は9m程、1号住居15m程は西側による位置に在る。また2～5・7～9号住居の位置は、確認面に於いて、西側に比べて高い位置に在るため、本住居群は、利根川西遷以前に、現利根川の河道付近に流下していた中小河川に伴う自然堤防上に営まれた集落であるものとみられる。

また、本住居群の中では8・9号住居の規模が大きいことから、集落の中心的建物であった可能性がある。

2. 1号住居(第93図、PL.18・30)

概要 本住居は竪穴住居であるが、遺存状況は良好ではなく、掘り方が確認されているに過ぎない。

位置 本住居は1-1区2期調査区域北東部中程、住居ラインより西に外れた位置に在り、922～926-353～358グリッドに位置する。

重複 本住居は1号掘立柱建物と重複するが、土層断面観察から推して本住居の方が新しい。

規模 長軸：413cm 短軸：378cm 深さ：-

構造 [竪穴]本住居のプランは、隅丸長方形を呈する。主軸はN-63°-Eを向く。

[掘り方] 幅10～52cm、深さ1～8cmを持つ周溝が一周し、北壁西部に於いては、周溝の外側(北側)に幅20cmで掘り方底面とほぼ同高のテラス状の掘り残しが見られる。また掘り方底面の中央付近には幅45cm以下、深さ6cm以下の鈎形状の溝が掘削される。この掘り方は黒色土、黒褐色土、暗褐色土等で埋め戻されている。

[柱穴・貯蔵穴] 上述のように床面は確認されないが、掘り方に於いて、柱穴、貯蔵穴等を確認した。

遺物 甕(609)等の土師器が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、凡そ古墳時代前期中段階頃の所産と判断される。

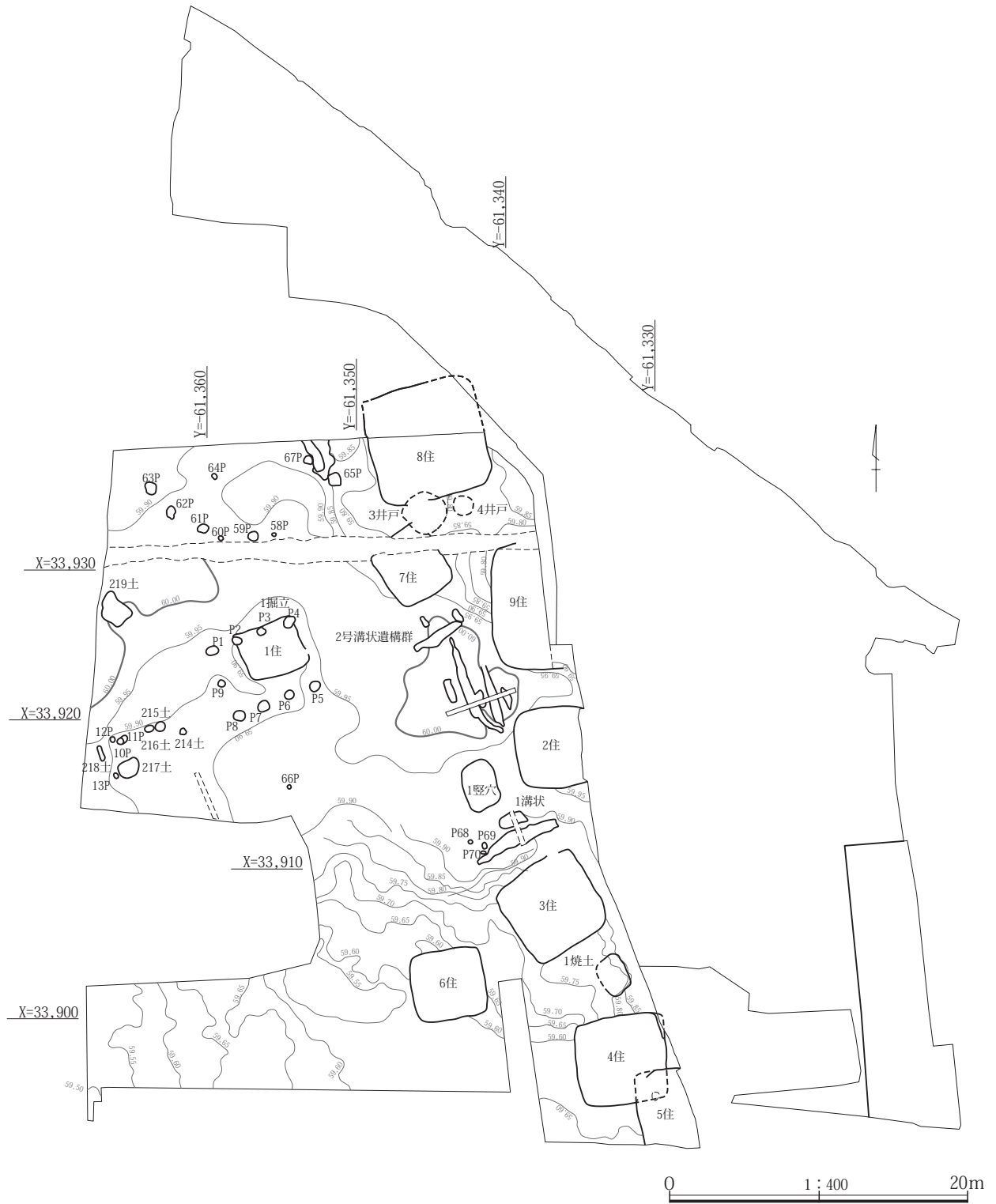
3. 2号住居(第94図、PL.18・19・30)

概要 本住居は焼失した竪穴住居であるが、上述の理由から、その東部を調査できなかった。

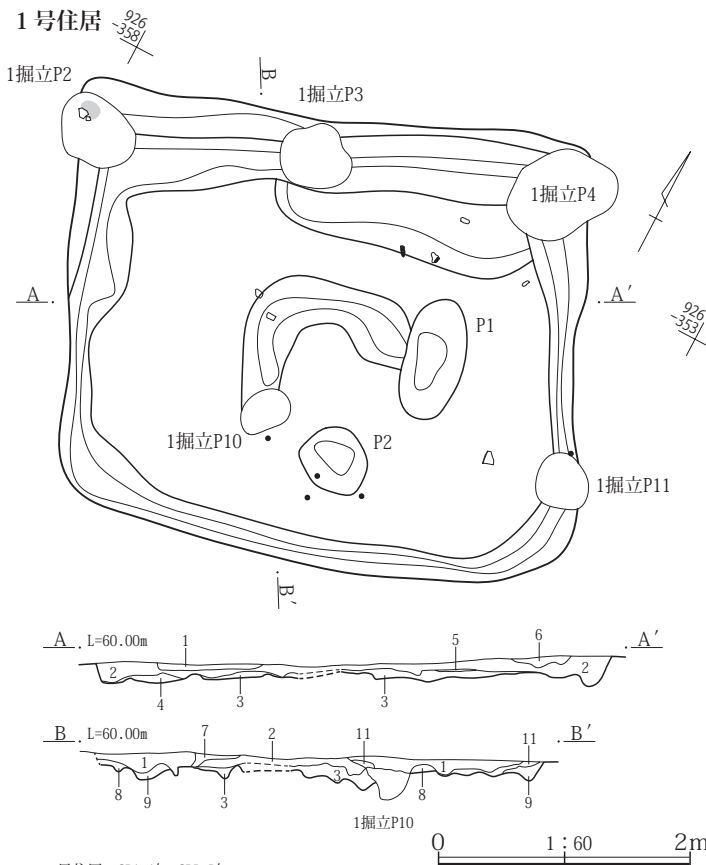
位置 本住居は住居ラインの中程に在り、915～921-334～340グリッドに位置する。

重複 本住居は単独で在り、重複する遺構はなかった。

覆土 本住居はロームやローム漸移層土、黒褐色土等(3

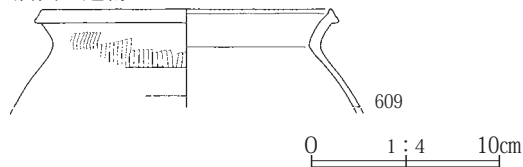


第92図 1区5面全景



- 1号住居 SPA-A' SPB-B'
1. 黒褐色土層 黄褐色土をブロック状に少量含む。炭化物を含む。
 2. 黒褐色土層 炭化物を少量含む。
 3. 暗褐色土層 炭化物を少量含む。
 4. 暗褐色土層 黄褐色土をブロック状に含む。
 5. 黒色土層 炭化物層。
 6. にぶい黄褐色土層 黄褐色土をブロック状に含む。炭化物を含む。
 7. 黄褐色土 ブロック主体。炭化物を少量含む。
 8. にぶい黄褐色土層 炭化物を少量含む。
 9. 褐色土層 ブロック主体。炭化物を少量含む。
 11. 灰黄褐色土層 黄褐色土をブロック状に少量含む。
- 1号住居全土層。炭化物と粘質土のブロック、床面は未検出。セクションの下は堀方面。

1号住居出土遺物



第93図 1区1号住居と出土遺物

～25・32層)で埋没する。また壁際にいわゆる三角堆積層(39～44層)が確認され、その上面にはローム漸移層等の土葺き材(30・31・33～38層)と判断される層や、焼土・炭化物・灰等(26～29層)の堆積も見られた。

規模 長軸：545cm 短軸：(452)cm以上 深さ：51cm

- P 1 径：50×28cm 深さ：60cm
- P 2 径：38×32cm 深さ：71cm 柱痕径：[12]cm
- P 3 径：50×40cm 深さ：69cm 柱痕径：[10]cm
- P 4 径：30×(25)cm 深さ：2cm
- P 5 径：25×21cm 深さ：17cm
- P 6 径：26×22cm 深さ：7cm

P 7 径：22×22cm 深さ：1～5cm

P 8 径：26×23cm 深さ：2cm以下

周溝 幅：4～16cm 深さ：4～7cm

炉 径：73×46cm 深さ：6cm

構造 [竪穴]本住居のプランは、隅丸長方形を呈する。その主軸方向はN-84°-Eを向く。周提帯は確認できない。

[掘り方・床] 本住居は、外周には幅9～70cmのテラスを有し、その内側、北西部から北側と西部から南側に、幅38～75cm、深さ16cmの溝状に掘り込み、住居中央部以東には外周部より8cm以下の高さの掘り残しが見られる掘り方を有し、これを黒褐色土からローム等で埋戻し、上位に黒色土からローム漸移層土を用いて床面を造る。

[周溝]調査範囲に於いて、南壁から西壁、東部を除く北壁にかけて周溝が確認された。

[柱穴]床面にはP 1(北東)・P 2(北西)・P 3(南西)・P 4(南東)の4基の柱穴が確認される。このうち、P 1～3基はしっかりした掘り方を有するが、南東のP 4の掘り込みは浅い。柱穴のプランは楕円形を基本とする。

間尺はP 1・2が315cm、P 3・4が305cm、P 1・4が288cm、P 2・3が289cmを測り、東西列より南北列が短いので、前者を桁間、後者を梁間とするが。

また南壁に沿って柱穴P 5～8が確認されたが、このうちP 5・6は壁材固定の用に供し、P 7・8は浅い掘り込みで、入り口に伴うものと判断される。

[貯蔵穴] 貯蔵穴は確認できなかった。

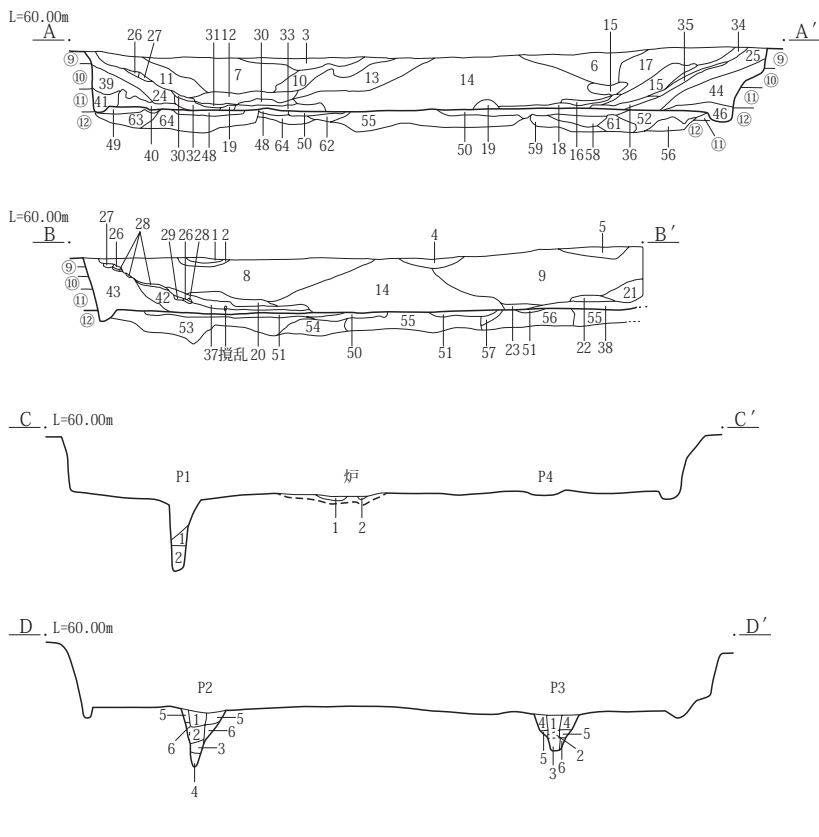
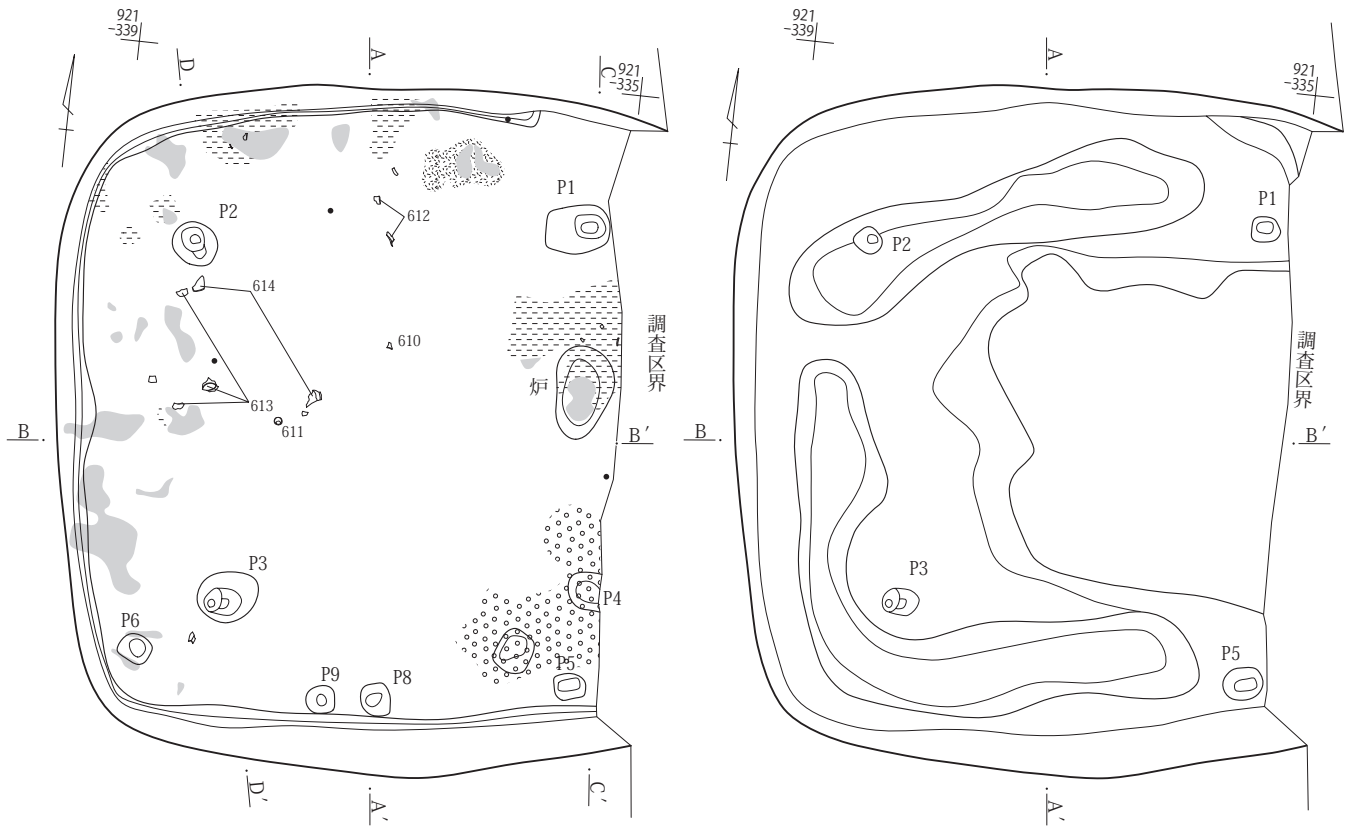
[炉]炉は地床炉で、東側の柱穴P 1と3の間に確認された。炉は楕円形プランを呈し、浅い掘り込みを伴う。

[上屋]本住居の棟方向は、柱の配置から略東西方向を向き、焼失家屋であるため、柱の横に梁桁を結束したと想定される。柱痕から推定される柱材の径は、10～12cm程と細い。渋川市中筋遺跡で得られた屋根の傾斜角度28度(大塚昌彦1988、以下「大塚斜度」とする)を基に推計すると、本住居の床面から梁・桁までの高さは2.0m以上、棟までの高さは2.4m以上、地表から棟までの高さは1.8m以上を測ることになる。

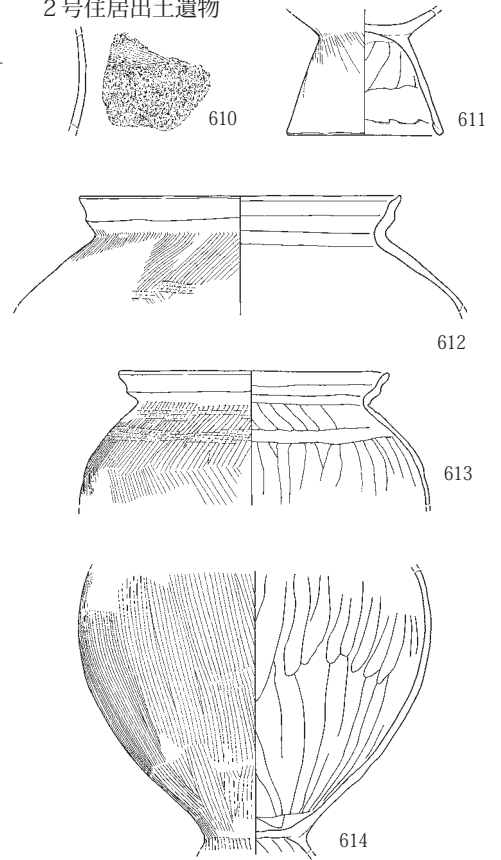
土層断面観察、焼土、灰、ローム等の平面分布から、葺き材は薄い葺き材と厚さ3・4cm程の土葺き材で構成される。

遺物 本住居からは甕(610・611)・台付甕(612～614)等

2号住居



2号住居出土遺物



0 1:60 2m

0 1:4 10cm

第94図の1 1区2号住居と出土遺物

- 2号住居 SPA-A' SPB-B'
- ①. 黒褐色土 粘性あり。
 - ②. ローム漸移層漸移層層 にぶい黄褐色土(②a) - (②b) 粘性あり。
 - ③. ローム漸移層 明黄褐色土、黄褐色土。粘性あり。
 1. 2・②・③層小ブロックの混土。上住ビット。
 2. 灰褐色粘質土 褐色灰色粘質土小ブロック混入。上住ビット。
 3. にぶい黄褐色土層 ①・③層土小ブロック多く入る。住居覆土。
 4. ②に①・③小ブロック多く入る。住居覆土。
 5. ②aに①・③小ブロック若干混入。住居覆土。
 6. ②aに①・③小ブロック若干混入。住居覆土。
 7. ②a・②bの小ブロック混土。①・③小ブロック多く入る。住居覆土。
 8. ②bに①・②b・③小ブロック混入。住居覆土。
 9. ②a ①・②b・③小ブロックやや多く入る。住居覆土。
 10. ②aに若干の①・②b少量の②小ブロック混入。住居覆土。
 11. ②bに①・②a・③小ブロック混入。住居覆土。
 12. 10層に似るが①層土入らない。住居覆土。
 13. ②bに③と若干の②a・①小ブロック混入。住居覆土。
 14. ②a・②bに③大ブロック、①・③小ブロックやや多く混入。住居覆土。
 15. ②aに若干の①・②b・③小ブロック混入。住居覆土。
 16. ②a 少量の①・③小ブロック混入。住居覆土。
 17. ②b ②a・③小ブロック、①小ブロック入る。住居覆土。
 18. ②bに③と若干の①小ブロック混入。住居覆土。
 19. ③小ブロック。住居覆土。
 20. ②a ③小ブロックと若干の①・②b小ブロック混入。住居覆土。
 21. ②a ①・②b・③小ブロック入る。9層に比し、ブロック多い。住居覆土。
 22. ②a ①小ブロック混入。住居覆土。
 23. ②b ①小ブロック、③粒混入。住居覆土。
 24. ②b ②a・③と若干の①小ブロック混入。住居覆土。
 25. ②b ①・②a大ブロックと③小ブロック混入。住居覆土。
 32. ②b ①・③小ブロックと③粒多く入る。住居覆土。
 26. 炭化物。焼土炭化物。
 27. 焼土(橙色) 焼土炭化物。
 28. 焼土(灰赤色) 灰混入。焼土炭化物。
 29. 28層土と炭化物の混土。焼土炭化物。
 30. ②a 少量の③小ブロック混入。土葺き材。
 31. ① ②・③小ブロック混入。土葺き材。
 33. 黒褐色土 粘性あり。①最下層土、僅かに③小ブロック入る。土葺き材。
 34. ②b ①・③小ブロック若干混入。土葺き材。
 35. ②aに②b入る小ブロック混土。③小ブロック少量入る。土葺き材。
 36. ②a ①・②b・③小ブロック若干混入。土葺き材。
 37. 35層土に似るが③層入らない。土葺き材。
 38. ②b ①・②aと少量の③小ブロック混入。土葺き材。
 39. ②b ①小ブロック混入。若干の②aと少量の③大ブロック入る。三角堆積。
 40. ②a ①・②b・③小ブロック入る。三角堆積。
 41. ① 少量の③小ブロック入る。三角堆積。
 42. ②b ①・②a小ブロックやや多く入り、③小ブロック混入。三角堆積。
 43. ②a ①大ブロックと②b・③小ブロック混入。三角堆積。
 44. ①に②a入る大ブロック混土。②b大ブロックと③小ブロック若干混入。三角堆積。
 45. ①・②a小ブロック混土。

46. ②b ①・②a・③小ブロック多く入る。
47. ②a ①・③小ブロック混入。
48. ①・②a・b・③小ブロックと③小ブロックの混土。しまる。
49. ②b ①・③小ブロック混入。
50. ①・黒色土 ②a・b・③の小ブロック混土。
51. ②a・bの小ブロック混土。黒色土・③の小ブロック混入。
52. ②aと黒色土の混土。②b・③小ブロック混入。
53. ②b ①・③小ブロック混入。
54. ①・②a・bの混土。③小ブロック混入。
55. ②b ③小ブロックと若干の②a・①小ブロック混入。
56. ③大ブロック。①・②a・b小ブロック多く入る。
57. ③小ブロック層。
58. ②b ①・②a・③粒混入。
59. ②a 黒色土小ブロック混入。
60. ②a・bの小ブロック混土 黒色土小ブロック・③小ブロック混入。
61. 56層に黒色土小ブロック混入。
62. ②b・黒色土・③小ブロック混入。
63. ②b ③大ブロック混入。
64. ②a・bの小ブロック混土 ①・③小ブロックと若干の黒色土小ブロック混入。

- P 1
1. ②b・③の混土。
 2. ②b ②a・③粒多く入る。

- P 2
1. ②b ①・②a小ブロック入る。
 2. ②b ①・③小ブロック入る。
 3. ②b ①・③小ブロック多く入る。
 4. ①
 5. ②b ③小ブロック入る。
 6. ③と②b小ブロックの混土。

- P 3
1. ②b ②a・③小ブロック混入。
 2. ②a ③多く入る。
 3. ②b ③多く入る。
 4. ②b ③小ブロックと若干の②a小ブロック混入。
 5. ① ②b・③小ブロック入る。
 6. ①～③粒の混土。

- 炉
1. 黒色灰 ②b小ブロックと焼土、若干の灰色灰混入。
 2. 黒色灰 焼土化した②bに黒色灰混入。

第94図の2 1区2号住居土層注記

の土師器、コナラ等の炭化材が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、古墳時代前期中段階の所産と判断される。

なお、本建物の焼失は、炭化材等の遺存状況から推して、南風の日に南面を着火点したものと想定される。

4. 3号住居・1号溝状遺構群

(第95図の1・2、第96図の1・2、PL.19・30・31)

概要 本住居は竪穴住居であり、焼失住居である。

位置 本住居は2期調査区域東端部、住居ラインのやや南よりに在り、903～911-336～340グリッドに位置する。

重複 本住居は北壁東部で324号土坑と重複するが、本住居の方が古い。なお、北に1号溝状遺構が近接して在る。

覆土 本住居はローム漸移層土を中心とした土層(1～21層)で埋没している。また壁際には黒色土からローム漸移層土によるいわゆる三角堆積層(41～43層)が確認され、その上位には黒褐色土からローム等の土葺き材と判断される層(22～33・35～40層)も見られた。また床面に

は炭化物や灰の堆積も見られた。

なお、土層断面には幅2cm以下の噴砂の痕跡(浅黄橙色細砂質土)が確認されたが、この噴砂は弘仁9年(818年)の地震に伴うものと想定される。

規模 3号住居 長軸：605cm(最大651cm)

短軸：589cm(最大610cm) 深さ：67cm

P 1 径：27×26cm 深さ：31cm

P 2 径：40×37cm 深さ：19cm

P 3 径：38×32cm 深さ：11cm

P 4 径：42×39cm 深さ：10cm

P 5 径：21×18cm 深さ：24cm(床から：30cm)

P 6 径：43×40cm 深さ：25cm(床から：29cm)

P 7 径：31×26cm 深さ：10cm

貯蔵穴 径：112×88cm(坑部径54×48cm) 深さ：37cm

炉 径：72×(52)cm 深さ：5cm

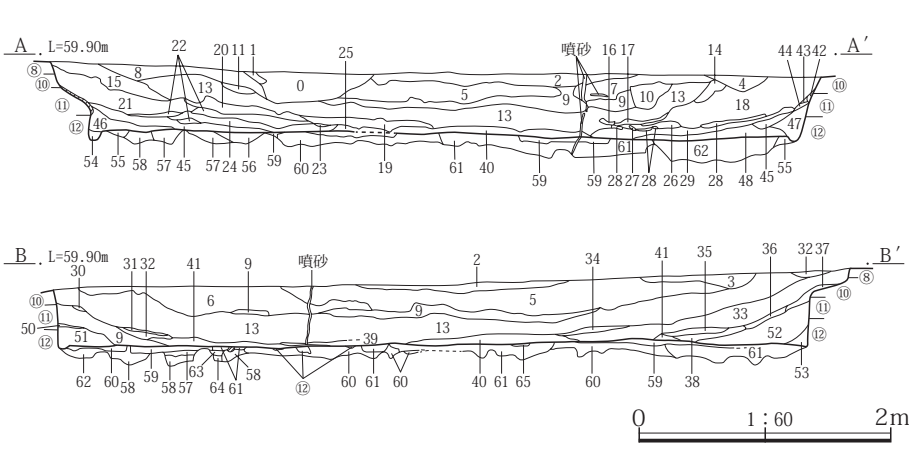
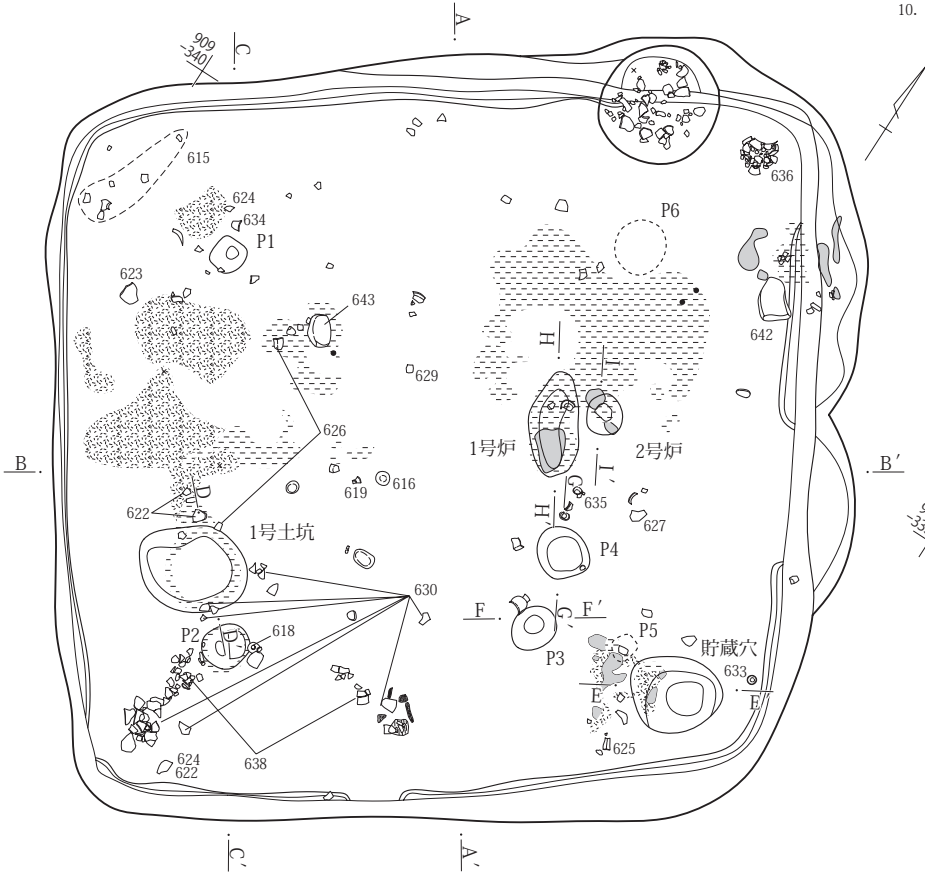
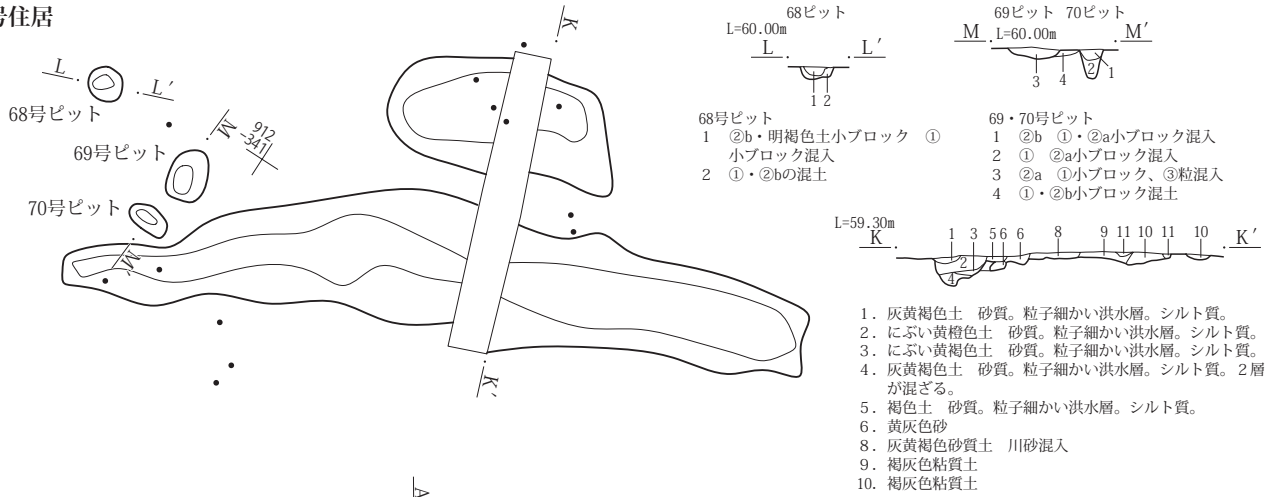
周溝 幅：5～15cm 深さ：1～6cm

(1号溝状遺構群)

溝1(北) 長さ：116cm 幅：91cm 深さ：14cm

溝2(南) 長さ：59cm 幅：102cm 深さ：11cm

3号住居



- 3号住居
① 黒褐色土 粘性あり。
② ローム漸移層層 にぶい黄褐色土(2a) - (2b) 粘性あり。
③ ローム漸移層 明黄褐色土、黄褐色土。粘性あり。
- 3号住居 SPA-A' SPB-B'
黒色土 粘性あり。
① 黒褐色土。
②a ローム漸移層層
②b ローム漸移層層
③ローム漸移層
④浅黄褐色細砂質土 填砂
1. ①・②a小ブロック混土 ③小ブロック混入。住居覆土。
2. ①に黒色土・③小ブロック若干混入。住居覆土。
3. ②a・②bのブロック混土 ③黒色土小ブロック若干混入。住居覆土。
4. ②b ②a・黒色土ブロック入り、⑧小ブロックやや多く入る。住居覆土。
5. ②b ②a・③ブロックと若干の黒色土小ブロック混入。住居覆土。

第95図の1 1区3号住居と1号溝状遺構群

6. ②b ②a・③・黒色土ブロック多く入る。住居覆土。
7. ②b ③小ブロック・①・②aブロック混入し、灰黄色土小ブロックと炭化物若干混入する。住居覆土。
8. ②b ②aブロック、①・③小ブロック、灰黄色土小ブロック(粘性やや欠く)大ブロック混入。住居覆土。
9. ②a ①小ブロック、③粒若干混入。住居覆土。
10. ①・②a・②b・③、灰黄色土のブロック混入。住居覆土。
11. ②a・②bの混入。③の小ブロック若干混入。住居覆土。
12. ① 若干の③ブロック混入。住居覆土。
13. ②b 黒色土・①・②a・③ブロック多く入る。住居覆土。
14. ②aに①入るブロック混入。③・②b・灰黄色土小ブロック混入。住居覆土。
15. ②b ①・③・灰黄色土小ブロック混入。住居覆土。
16. 黒色土。住居覆土。
17. ①層土。住居覆土。
18. ①・②a・②bブロックの混入。③小ブロックと若干の灰黄色土大ブロック混入。住居覆土。
19. ②b ①・③小ブロック混入。住居覆土。
20. ②b ①・③小ブロック若干混入。住居覆土。
21. ②b ①大ブロック、②a・③小ブロック混入。住居覆土。
22. ① ②a・③小ブロック若干混入。葺き材。
23. ③ ②a小ブロック混入。葺き材。
24. ①～④小ブロックの混入。葺き材。
25. ②a ③小ブロック多く入る。葺き材。
26. ②b ①・③粒入る。葺き材。
27. ②b 葺き材。
28. ①・②aの小ブロック混入。少量の③粒含む。葺き材。
29. ②b ①ブロック、②小ブロック、③粒やや多く入る。葺き材。
30. ②b ①・③粒若干混入。葺き材。
31. ②b ③粒僅かに入る。葺き材。
32. ②a ①・③粒若干入る。葺き材。
33. ②b ①・③・黒色土ブロックやや多く入る。覆土。
34. ②b 灰黄色土・③粒混入。葺き材。
35. ②b 黒色土・②a小ブロックと③粒入る。葺き材。
36. ②a・②b ③粒混入。葺き材。
37. ②a ②b小ブロックと若干の③粒入る。葺き材。
38. ① ③粒混入。葺き材。
39. 黒色土。炭化物、ローム漸移層粒を若干含む。葺き材。
40. ②a ①・③・黒色土小ブロック若干入る。葺き材。
41. 青黒色 炭化物と灰白色灰。若干の②b・③粒入る。葺き材。
42. ① ②a小ブロック入る。三角堆積。
43. ②a 三角堆積。

第95図の2 1区3号住居土層注記

構造 [竪穴]本住居のプランは、隅丸方形を呈する。本住居の主軸方向はN-51°-Eを向く。

[周溝帯]本住居に周提帯そのものは確認できなかったが、住居北壁の北側140～370cm程の範囲で1号溝状遺構群(南北2条の溝から成る)が、本住居の北壁面に並走して在り、本住居の周提帯の一部と思慮される。

1号溝状遺構群は南北2条の溝から成り、北側の溝(溝1)と南側の溝(溝2)は24～44cm程隔てて概ね並走する。溝1は緩やかな弧状を呈して、その走行は東半がN-64°-E、西半がN-53°-Eを向き、溝2はへんの字状を呈して、その走行は中・東部はN-80°-E、西部はN-54°-Eを向く。プランは整っておらず、底面には凹凸が見られる。

[掘り方・床] 外周に幅9～70cmのテラス、その内側、北西部ら北側と西部から南側は、幅38～75cm、深さ16cmの溝状に掘削され、住居中央部以東には外周部より8cm以下の高さを測る掘り残しが見られる掘り方を有する。床面は、これを黒褐色土やローム漸移層土等で埋戻して造る。

[周溝]北東部と東壁及び南壁沿いの一部を除いて周溝が確認された。

[柱穴]床面と掘り方面に4基づつの小型のピットが確認された。

検出された小型ピットのうち床面で検出されたP1・P2と掘り方面で検出されたP5・P6は支柱穴と見られる。プランはP1が隅丸方形、P2・5は楕円形、P6は円形を呈するが、底面は何れも挿鉢状を呈し、掘り込みは凡そ30cm程である。また、支柱穴の柱間は、P1・

6及びP2・5では共に320cm、P1・2、P5・6は共に315cmを測る。

[貯蔵穴] 貯蔵穴は住居南西隅近くにあり、南壁から21cm、東壁からは33cmほど離れて、床面下12cm程で開く井筒浅顔形に掘削される。プランは隅丸長方形に近いが、底面は円形を呈する。底面は平底気味である。

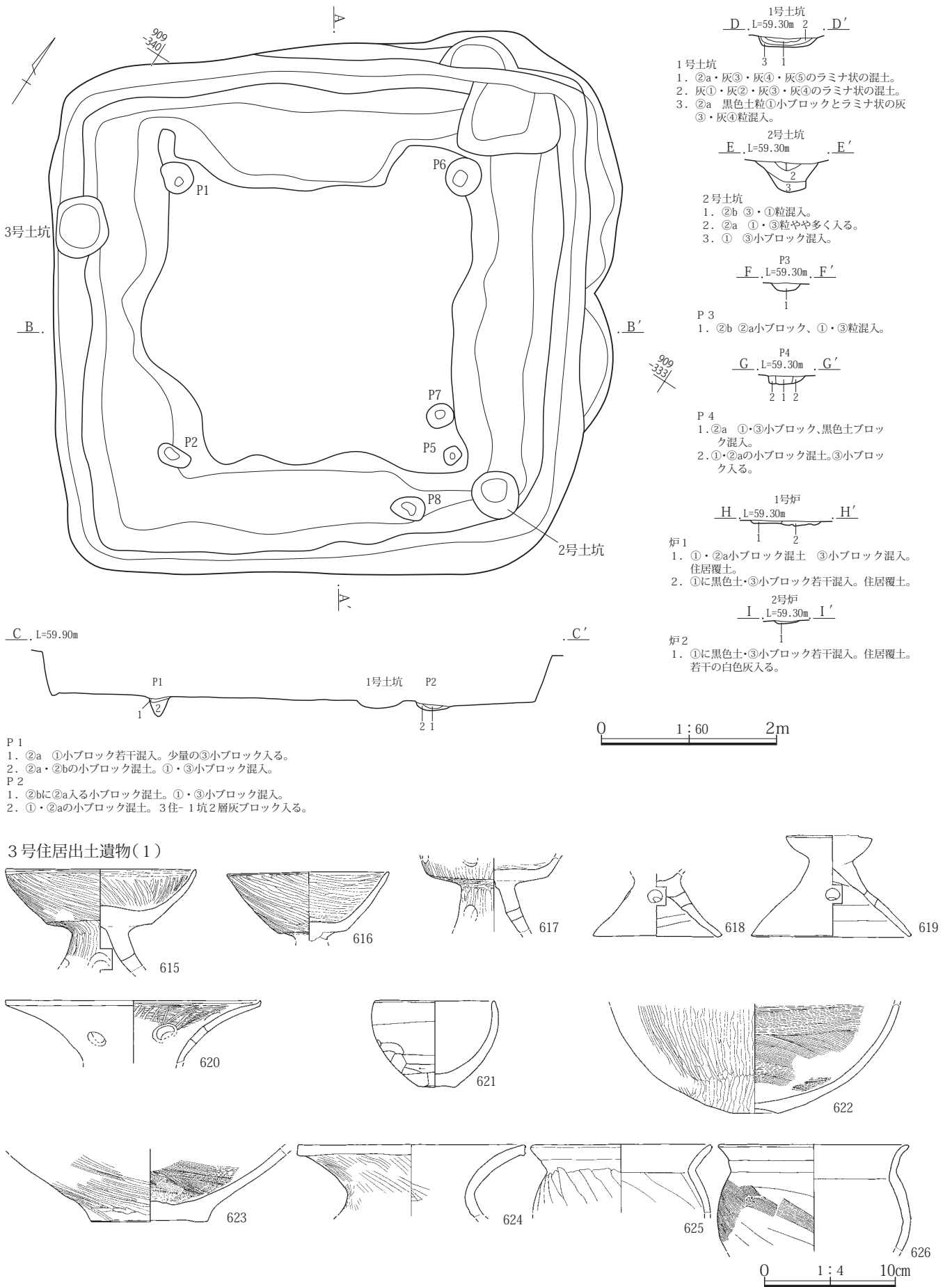
[炉]炉は浅い掘り込みの地床炉で、東側の柱穴P2とP8を結ぶ線の中点より40cm北側に設けられる。南側に礫が据えられ、東側で焼土化が見られる。

[上屋]本住居の棟方向は、柱の配置から略東西方向を向くものと想定される。焼失家屋であることから、梁・桁を柱の横に結束した構造を呈するものと想定される。柱材の径は特定できない。大塚斜度(大塚1988)を基に推計すると、本住居の床面から梁・桁までの高さは1.3m以上、棟までの高さは2.2m以上、地表から棟までの高さは1.6m以上を測るものと想定される。

葺き材は土層断面観察、焼土、灰の平面分布から推して、薄い葺き材と厚さ4～10cmの土葺き材で構成される。遺物 高杯(615～619)・器台(620)・鉢(621)・壺(622～624)・甕(625～630)・台付甕(631～636)・台付甕と思われるもの(637)・小型台付甕(638・639)等の土師器、砥石(640)、敲石(641)、台石(642)、礎石の可能性のある礫があったが、これらの中には、近江辺り或いは山陰に近い甕があり、南関東系の台付甕が含まれている。

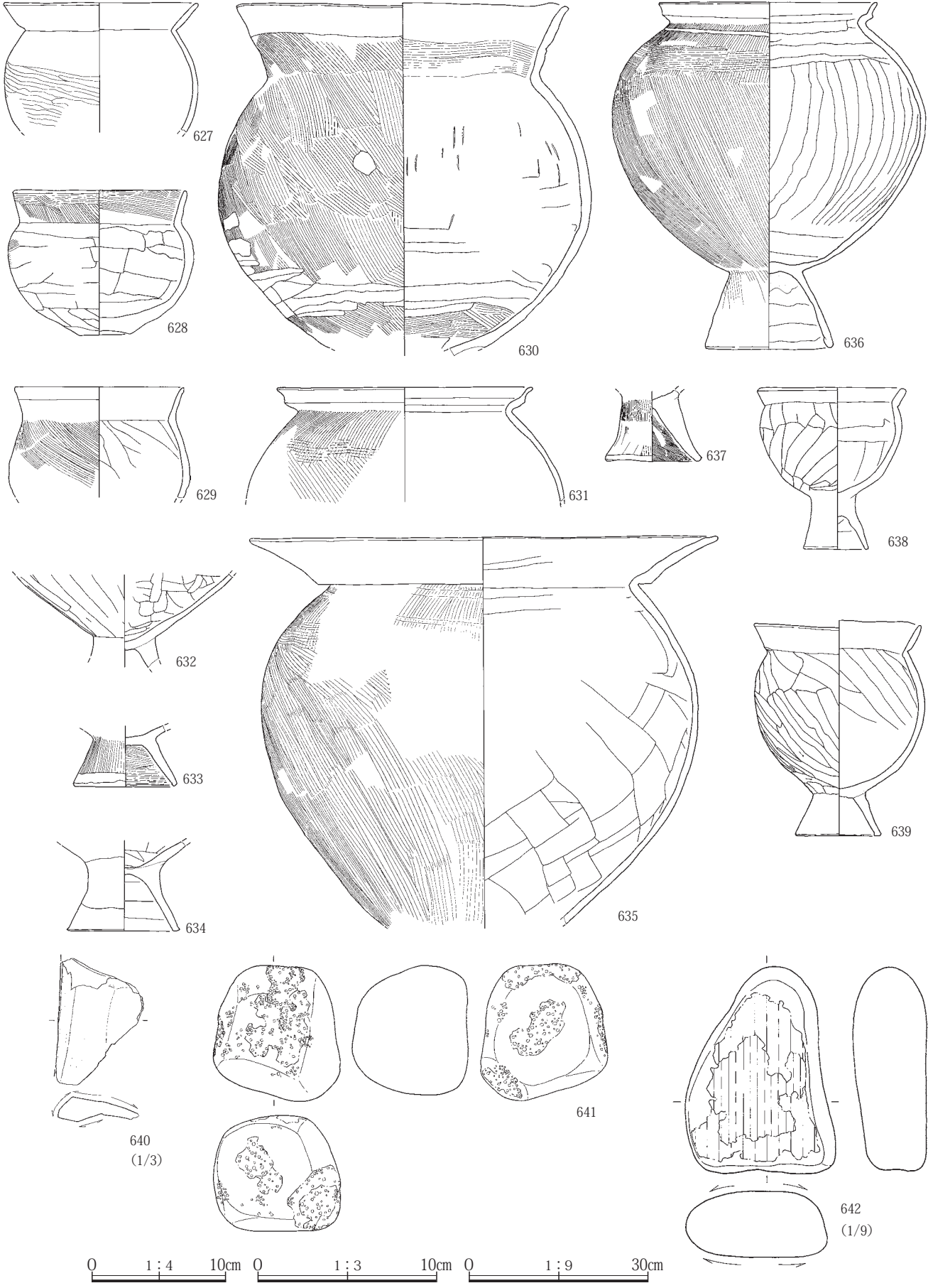
所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、古墳時代前期古段階の所産と判断される。

なお、焼失時の着火点等は想定できなかった。また、灰は粉殻を主体としたものであった。



第96図の1 1区3号住居掘り方と出土遺物(1)

3号住居出土遺物(2)



第96図の2 1区3号住居出土遺物(2)

5. 4号住居(第97の1・2図、PL.19・20・31)

概要 本住居は竪穴住居であり、焼土、灰の遺存等から焼失住居と判断される。

位置 本住居は2期調査区域東端南部、住居ラインの南寄りに位置し、891～900-328～335グリッドに位置する。

重複 本住居は南東部で5号住居と重複するが、本住居の方が古い。

覆土 本住居はローム漸移層土を中心とした土層(1～14層)で埋没している。また壁際にローム漸移層土を中心とした土壌でいわゆる三角堆積層(26～32層)が確認され、黒褐色土・ローム漸移層土・ローム等の土葺き材と判断される層(15～22・24層)も見られた。

また床面には炭化物や焼土ブロックの堆積も見られた。

規模 長軸：606cm 短軸：592cm 深さ：64cm

P 1 径：33×24cm(掘り方面径：25×25cm)深さ：29cm

P 2 径：22×20cm(掘り方面径：27×26cm)深さ：36cm

P 3 径：18×17cm(掘り方面径：34×34cm)深さ：21cm

P 4 径：28×20cm 深さ：6cm

P 5 径：48×36cm 深さ：28cm

P 6 径：52×40cm 深さ：33cm

P 7 径：21×18cm 深さ：35cm(床から：38cm)

P 8 径：26×25cm 深さ：23cm(床から：29cm)

貯蔵穴 径：122×88cm 坑径：54×48cm 深さ：48cm

炉 径：72×(52)cm 深さ：3cm

周溝 幅3～7cm 深さ：6cm

構造 [竪穴]本住居のプランは、隅丸方形を呈する。主軸方向はN-81°-Eを向く。

[掘り方・床] 本住居は、中央は東西280cm、南北350cmを測る、床面から数cm内外の深さの掘り残しが在り、外周には幅7～25cmの堤状の掘り残しを伴う、内側に幅36～130cm、深さ3cm程、外側に幅19～30cm、深さ9cm程を測る二重の溝が廻る掘り方を有する。このうち両者の間にはが見られるが、床面は、掘り方を黒褐色土やローム漸移層土等で埋戻して造られる。

[周溝]南壁沿いの西寄り1/3から西壁、北壁、東壁の北寄り1/3にかけて周溝が確認された。

[柱穴]床面には5基の小型ピットが確認され、掘り方面に於いては更に3基の小型のピットを確認した。小型ピットは何れも楕円形のプランを呈する。

検出された小型ピットのうち、床面で検出されたP 1(北東)・P 2(北西)と掘り方面で検出されたP 7(南東)・P 8(南西)は支柱穴と見られる。

また、支柱穴は、P 1・2の桁間は307cm、P 7・8の桁間は309cm、P 1・7の梁間は294cm、P 2・8の梁間は共に298cmを測り、東西列より南北列の柱間の方が短い。

[貯蔵穴] 南壁から20cm、東壁からは26～30cmほど離れて掘削される貯蔵穴を、住居南東隅近くに確認した。そのプランは床面では隅丸三角形を呈するが、底面は隅丸方形に近い。底面は丸底を呈する。

[炉]炉は東側の柱穴P 5と6を結ぶ線の西寄り(内側)に確認された。東西に並ぶ2箇所を炉として認識した。共に地床炉であり、共に浅い掘り込みを有する。

[上屋]本住居の上屋は、柱の配置から棟方向は略東西方向を向くものと想定される。焼失家屋と認識されることから、梁・桁を柱の横に結束した構造を呈するものと想定される。柱材の径は特定できない。大塚斜度(大塚1988)を基に推計すると、床面から梁・桁までの高さは1.5m以上、棟までの高さは2.3m以上、地表から棟までの高さは1.6m以上を測るものと想定される。

葺き材は土層断面観察、焼土、灰等の平面分布から、薄い葺き材と厚さ6cm以下の土葺き材で構成される。

遺物 高杯(644～651)、高杯と思われるもの(652・653)、器台(654)、柑(655)、小型柑と見られるもの(656・657)、壺(658・659)、台付甕(660～667)等の土師器が出土したが、この中には吉ヶ谷・赤井戸式土器が含まれる。この他、敲石、鉄鏃(669)が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、古墳時代前期古段階の所産と判断される。

なお、焼失時の着火点は南または北側と認識されるが、南の場合は南南東、北側の場合は北北西の風であったことが想定される。

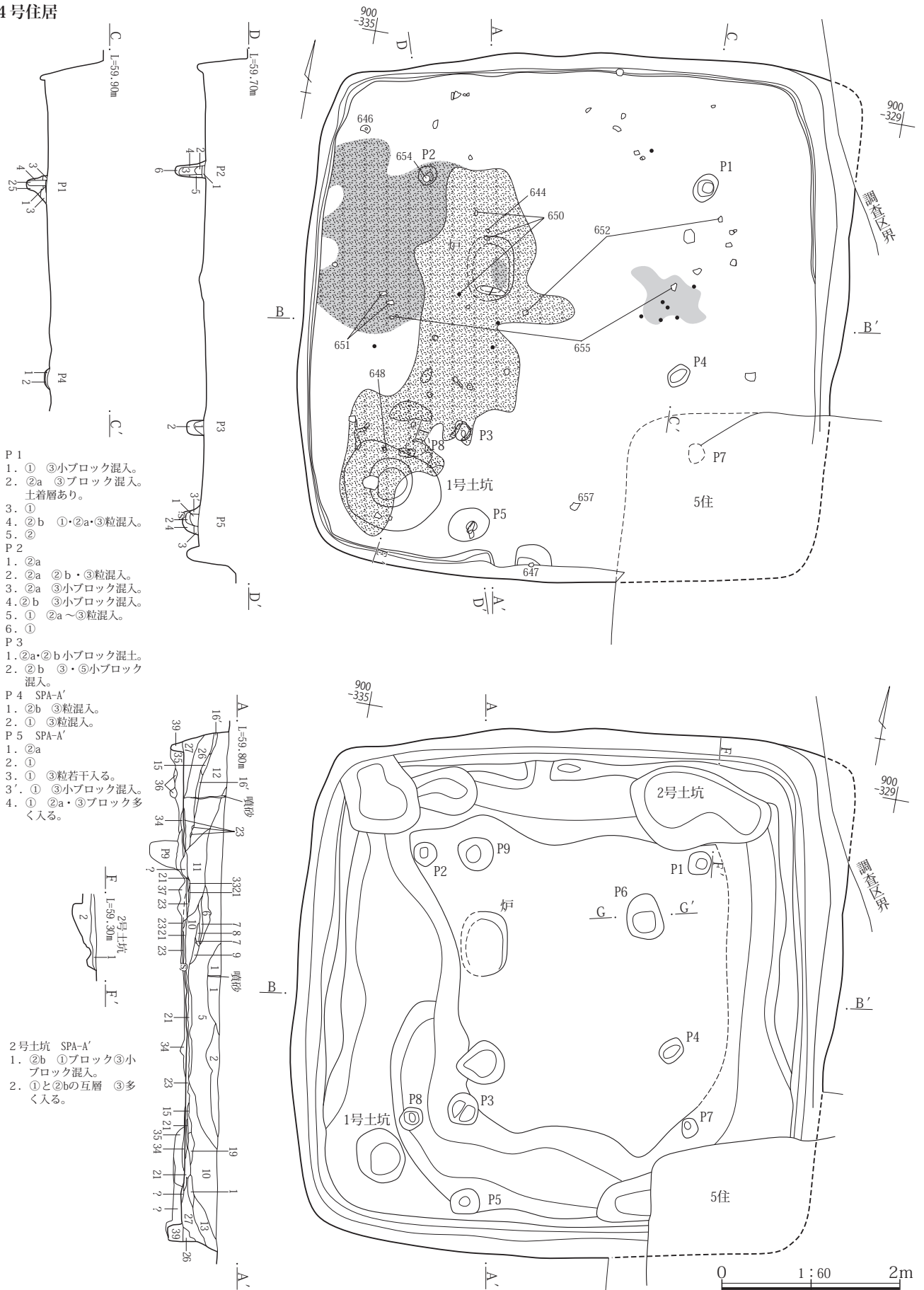
6. 5号住居(第98図、PL.19・20・31)

概要 本住居は竪穴住居であり、焼土の遺存等から焼失住居と判断される。

なお、その東部は調査できなかった。

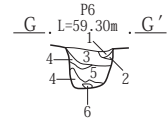
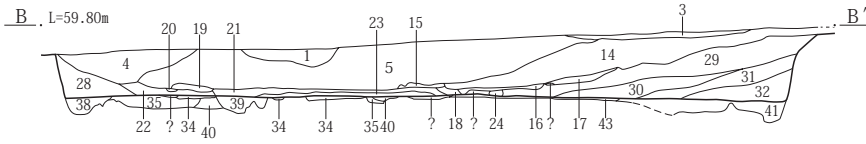
位置 本住居は2期調査区域東南隅、住居ラインの最南

4号住居



第97図の1 1区4号住居

第3章 発見された遺構と遺物



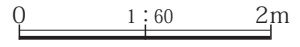
4号住居 A-A' B-B'

- ①. 黒褐色土 粘性あり。
- ②. ローム漸移層層 にぶい黄褐色土(2a) - (2b) 粘性あり。
- ③. ローム漸移層 明黄褐色土、黄褐色土。粘性あり。
- ④. 灰白色土 前橋泥流風化層。粘性あるが、もろい。
1. ②b ①・②a・③ブロック混入。
2. ②a 黒色土・③ブロック若干混入。
3. ②a・②bの混土。黒色土・③小ブロック混入。
4. ②b ①・②a・③ブロック混入。
5. ②b ①・③大ブロック粒と若干の⑤ブロック混入。
6. ②bに①・②a・③入る小ブロック混土。
7. ① 若干の②bの帯状の小ブロック混入。
8. ②b・③の小ブロック混土。①小ブロック混入。
9. ②a ②b・③小ブロック混入。
10. ②a・②bのブロック混土。①・③小ブロック混入。
11. ②b ①・②a・③の小ブロック混入。
12. ②b ①が厚さ3cm程のラミナ状に入り③ブロック混入。
13. ②a ①粒・③小ブロック混入。
14. ②a・②bの混土。黒色土・①・③ブロック混入。
15. ②a 黒色土②b小ブロック混入。
16. ②a 若干の③小ブロック混入。弱い焼土化見る。
- 16'. ②a 若干の③小ブロック混入。焼土化しない。
17. 16層土と明赤褐色焼土の混土。
18. ②b 黒色灰と③粒混入。

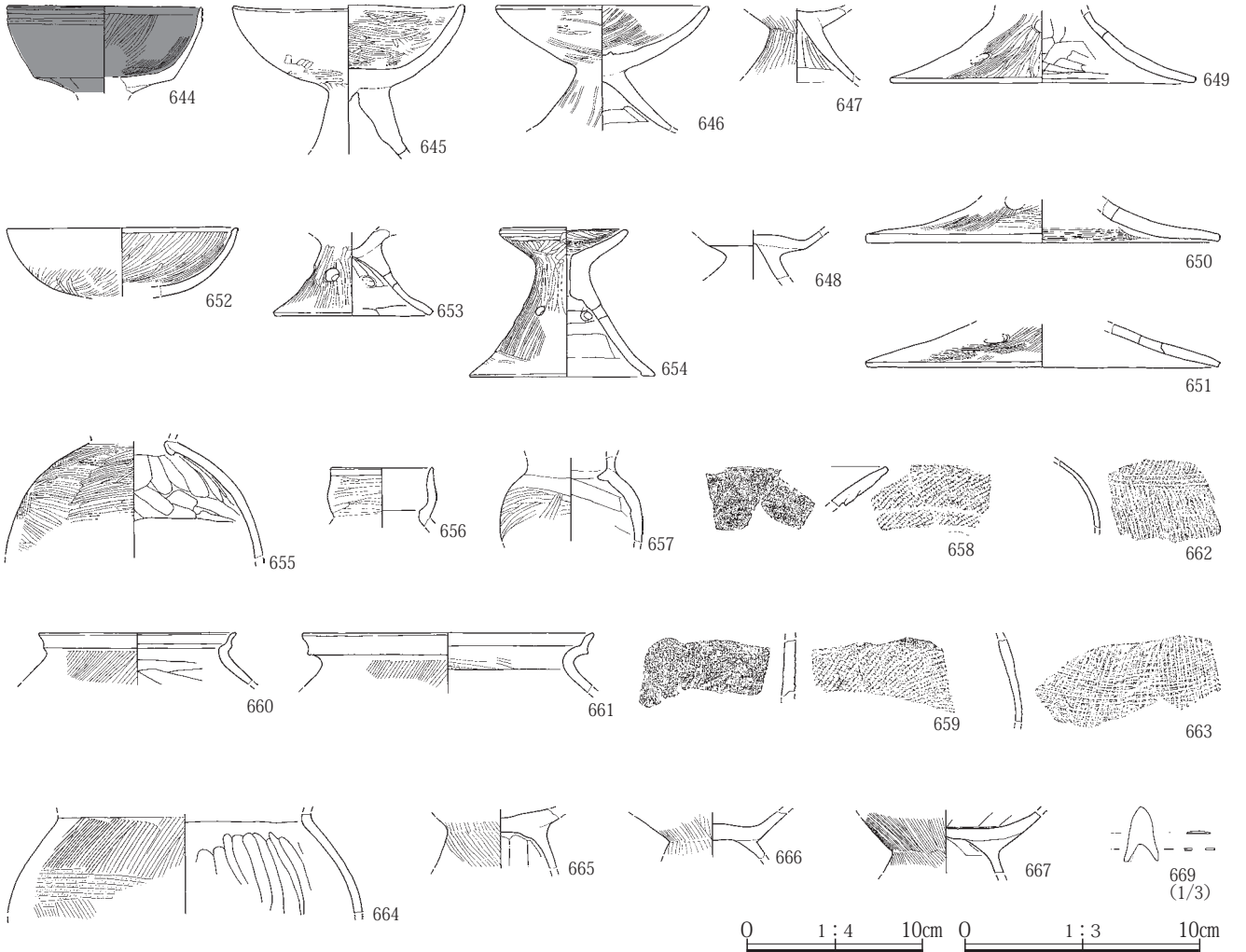
19. ②b ①・③小ブロック混入。
 20. 19層土に白色灰混入。
 21. ②b ②a・③小ブロック混入。
 22. ①と②bの混土。③粒若干入る。
 23. 黒色灰 ②小ブロック混入。
 24. ③ブロック。
 26. ②b ②a小ブロックと、③粒若干混入。
 27. ②a ②bブロック混入。
 28. ①・②aブロックの混土。
 29. ②a 弱い焼土化見る。③・焼土小ブロック粒(17層中)混入。
 30. ②a 黒色土ブロックと②b小ブロック・③粒混入。
 31. ②b ②a・③小ブロック混入。
 32. ②a ①・②b・③小ブロック混入。
 33. ②b 焼土粒、若干混入。
 34. ① ②a・③小ブロック入る。
 35. ①~③のブロック混土。
 36. ②a ①・②b・③小ブロック混入。
 37. ②b(焼土化見る)と③のブロック混入。上位に黒色灰混入。
 38. ①~③のブロック混土。
 39. ①~②b小ブロックに③大ブロック入る混土。
 40. ②b・③の大ブロックに①・②a混入。
 41. ②b ①・②a小ブロックと③大ブロック混入。
 43. ③に②b混入。
- ※1~14層まで覆土。15層~25層まで土葺き。

P6 SPA-A'

1. ②a ②b・③粒混入。
2. 黒色灰 焼土混入。
3. ②bと③の小ブロック混土。
4. 黒色灰。
5. ②a~③粒の混土。



4号住居出土遺物



第97図の2 1区4号住居土層断面と出土遺物

に位置し、891～896-327～331グリッドに位置する。

重複 本住居の北部で4号住居と重複するが、本住居の方が新しい。

覆土 本住居はローム漸移層土を中心とした土層(1～11層)で埋没している。また壁際もローム漸移層下層土を中心とした土層でいわゆる三角堆積層(33・34層)が確認され、焼土化の見られる黒褐色土等(20・21層)の土葺き材と判断される層も見られた。

一方、住居北壁沿いのいわゆる三角堆積土、住居中央付近の床面の土葺き材と判断される土層の上に焼土の分布が見られた。

規模 残存範囲：559×356cm 深さ：55cm

P 1 径：59×47cm 深さ：54cm(床から：54cm)

構造 [竪穴]本住居のプランは、隅丸方形を呈する。主軸方向はN-81°-Eを向く。

[掘り方・床] 本住居は掘り方を有する。調査範囲の西壁際から北壁側にかけて、幅36～122cmの範囲が、南東側(中央部)に比して7cm以下で深くなっている。

この掘り方にローム漸移層土を薄く盛り、黒色土・黒褐色土等を用いて床を貼るが、底面から15cm程の間に、ローム漸移層土を間層として3枚の床面が確認された。

[柱穴]床面には1基の小型のピットが確認されたが、このピットは位置的に支柱穴の可能性が考慮される。

[貯蔵穴] 調査範囲に、貯蔵穴は確認されなかった。

[炉] 炉は調査範囲の東端中央に焼土範囲が見られたが、炉と特定はできなかった。

[上屋]本住居の棟方向等は特定できなかった。

葺き材は土層断面観察、焼土等の平面分布から、ローム漸移層や黒褐色土等の薄い土葺き材が用いられていたことが確認された。

遺物 本住居からは台付甕(670～673)や甕(674)等の土師器が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、古墳時代前期中段階の所産と判断される。

なお、着火点等は確認されなかった。

7. 6号住居(第99図の1・2、PL.20・21・31・32)

概要 本住居は竪穴住居である。焼土、灰の遺存等から焼失住居と判断されるが、床面に灰層が厚く堆積する特徴がある。

位置 本住居は2期調査区域東南部、住居ラインから西に9mほど離れた位置に在り、899～904-641～346グリッドに所在する。

重複 本住居は単独で在り、他の遺構との重複は見られなかった。

覆土 本住居はローム漸移層土を中心とした土層(1～22層)で埋没する。また壁際にはローム漸移層土を中心としたいわゆる三角堆積層(23・29・31・35層)も確認され、葺き材と渾然となる堆積状況を示している。また黒褐色土等の土葺き材とみられる層(39層)も確認した。

また本住居の最も特徴とするところは、床面の中央から西部及び北壁寄りの床面に堆積する灰白色(28・33・36層)或いは黒色灰(34層)の面的堆積が見られたことである。その層厚は7cm程を測るが、執筆の時点で、このような灰の堆積の例を知らない。

規模 長軸：495cm 短軸：468cm 深さ：70cm

P 1 径：37×34cm 深さ：43cm

P 2 径：27×21cm 深さ：51cm

P 3 径：26×23cm 深さ：27cm

P 4 径：21×18cm 深さ：40cm

P 5 径：32×30cm 深さ：17cm

貯蔵穴 径：100×79cm 坑径：62×60cm 深さ：31cm

周溝 幅3～9cm 深さ：5cm

構造 [竪穴]本住居のプランは、方形に近い隅丸方形を呈するが、南西隅部は強く湾曲する。主軸方向はN-9°-Wを向く。

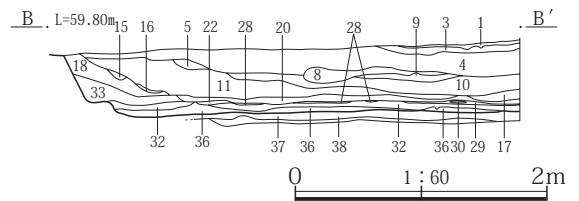
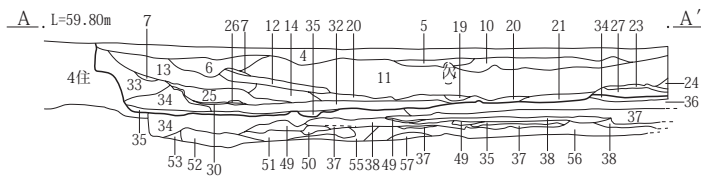
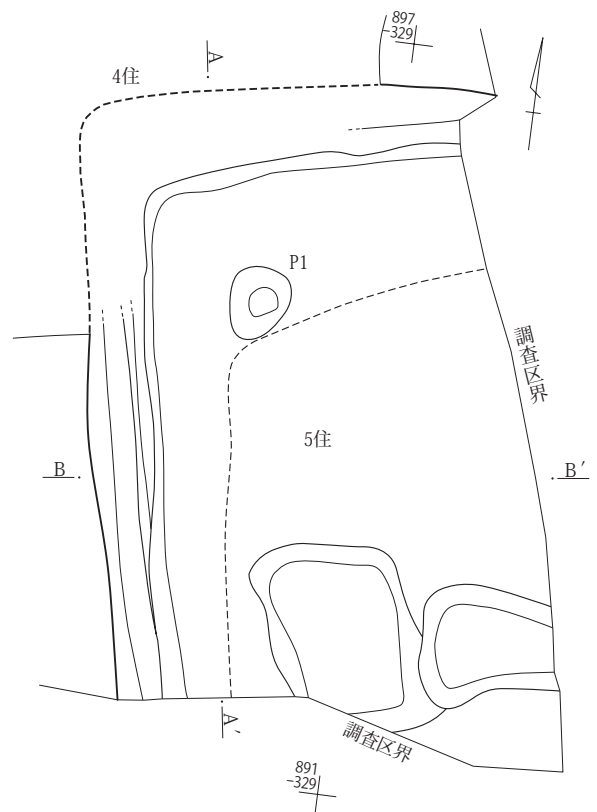
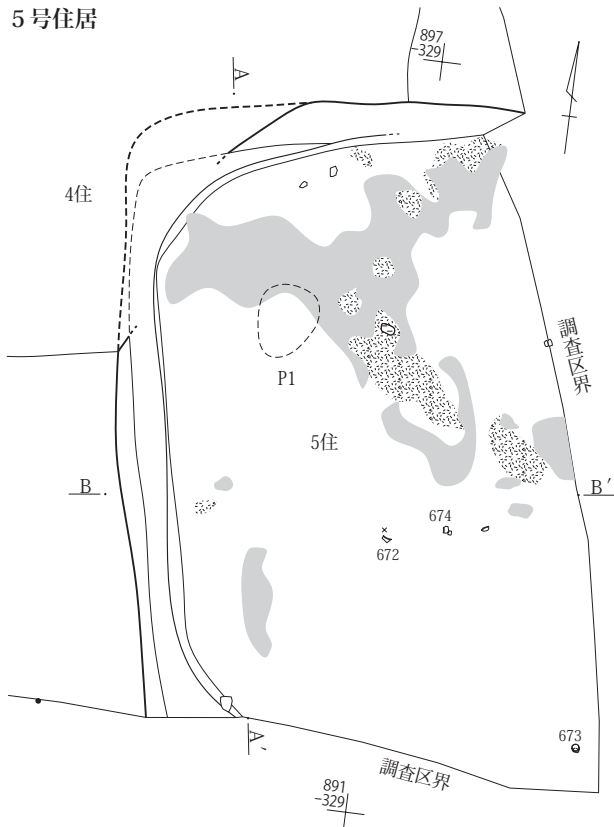
[掘り方・床] 本住居は、幅62～102cm、深さ10数cm程を測る、周溝状の掘り込みを伴う掘り方を有する。掘り方南部西寄りには径115×86cm、深さ18cmを測る、楕円形プランの土坑が掘削されている。掘り方をローム漸移層土やローム層土で埋め戻して、床面を造る。

[周溝]南東隅から反時計回りに一周し、東壁から60cm程の間は南壁を離れて、南東隅から北側20cmの地点で東壁に達する。

[柱穴]床面には5基の小型のピットが確認されているが、このうちP 1(北東)、P 2(北西)、P 3(南西)、P 4(南東)が支柱穴である。

小型ピットのプランはP 1が隅丸方形、P 2・3・5は円形、P 4は楕円形を呈する。また、P 1・2は240cm、P 3・4は236cm、P 1・4は243cm、P 2・3

5号住居

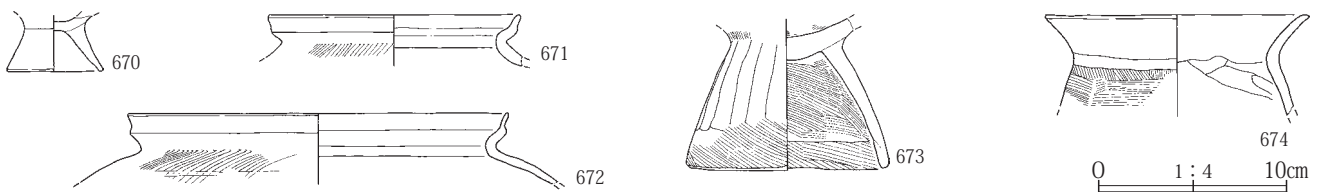


5号住居 SPA-A' SPB-B'

- ①. 黒褐色土 粘性あり。
- ②. ローム漸移層層 にぶい黄褐色土(2a) - (2b) 粘性あり。
- ③. ローム漸移層 明黄褐色土、黄褐色土。粘性あり。
- ④. 灰白色土 前橋泥流風化層。粘性あるが、もろい。
1. 灰黄褐色土 ③小ブロックが入る。粉質。
3. ① 若干のAs-C・③粒混入。
4. ②a ②b・③小ブロック若干混入。
5. 2に似るが黒色土小ブロック若干混入。
6. ②b ①・②a・③小ブロック、③ブロック多く入る。
7. ②b
8. ②a ③大ブロック・⑤小ブロック混入。
9. ②b
10. 9層より下位の②b ラミナ状の①と⑥小ブロック混入。
11. ①~③の大ブロックの混土。⑤ブロック混入。
12. ②b ③の小ブロック混土。黒色土・①・②小ブロック混入。
13. ①~③の小ブロック混土。
14. ③に②b入る小ブロック混土。①・②a小ブロック混入。
15. 焼土化見る②a (暗赤灰色)と焼土ブロック混入。
16. 焼土化見る① ②b粒入る。
17. ②b ③ブロック混入。
18. ③に②b入るブロック混土。①・②a小ブロックと若干の橙色焼土
19. ③ ②b小ブロック混入。
20. 弱い焼土化見る①(褐灰色土) 若干の③粒と少量の焼土小ブロック混入。

21. 焼土と焼土化見る①・黒色土(青黒色)小ブロックの上下をはさむ。
23. 16に焼土粒、黒色灰混入。
24. ②b ①・②a小ブロック混入。
25. ②b・③小ブロック。①・②小ブロック混入。
26. 焼土化見る①層土。
27. ②b ③小ブロック混入。23層土境に黒色灰入る。
28. ②a
29. 焼土化見る黒色土と①の混土。焼土入る。
30. 焼土。
32. ②a ①・③小ブロック混入。随所に、混入物の濃淡有り。
33. ②a・②b・③のブロック混土 ①小ブロック混入。
34. ②b 若干の③・黒色土粒入る。
35. ①・②a・③小ブロック混土。
36. ① ②a小ブロックと若干の③粒入る。
38. ②aに①入る小ブロック混土。若干の③混入。
49. ②a ③入る小ブロック混土。
50. ⑤ブロックに①・②a入る。
51. ②a・③ブロック ①・②b小ブロックと若干の①小ブロック混入。
52. ③・⑤ブロック ①・②a小ブロック混入。
53. ②b
55. ①に③ブロックと若干の②a小ブロック混入。
56. ③に②aブロック混入。
57. ②a・①ブロック。

5号住居出土遺物



第98図 1区5号住居と出土遺物

は246cmを測り、東西列の方が南北列より長い。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴は住居南西隅部に確認したが、貯蔵穴は住居南部西半を囲む低い小堤に囲まれた区域の西端に掘削されている。この小堤は、住居南壁の中央から、周溝を挟んで90cm程直線的に北方に延び、直角に西に折れて、極緩やかに北側に湾曲しながら、柱穴P 3付近まで1m程西に進み、ここから西壁まで1.1m程の間は、貯蔵穴の北を巻くように北側に屈曲する。小堤は南壁際からP 3付近までは基底幅33～35cm、上幅6～10cm、高さ5cm以下で、P 3以西は、基底幅46～80cm、上幅10～18cm、高さ2cm以下を測る。

貯蔵穴は井筒朝顔形の掘削形態で、床面のプランは崩楕円形を呈し、井筒部は方形に近い隅丸方形を呈する。

〔炉〕 炉は柱穴P 2・3の間の浅い掘り込みが連なる箇所とその可能性を考慮したが、位置は特定できなかった。

〔上屋〕 本住居の棟方向は、柱の配置等から略南北方向にあると想定したが、東西を向く可能性も残る。建築材はクヌギ等を用い、柱材の径は特定できないが、P 3・4が柱痕そのものである可能性も考慮される。大塚斜度(大塚1988)を基に推計すると、本住居の床面から梁・桁までの高さは1.5m以上、棟までの高さは2.1m以上、地表から棟までの高さは1.3m以上となる。

底面に層厚7cm程の灰が広い範囲で分舞していたが、科学分析所見から、この灰には靱殻が多く含まれていることから、葺き材の可能性が低いことが確認された。

遺物 本住居からは、高杯(675～682)・高杯と思われるもの(683)・器台(684)・蓋(685)・鉢(686・687)・小型壺(688・689)・罎(690)・壺(691～694)・甕(695～698)・甕と見られるもの(699)・小型台付甕(700・701)・台付甕(702～710)を含む土師器、敲石(711・712)が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、古墳時代前期古段階の所産と判断される。

なお、着火点は南または北側と認識されるが、南の場合は南南東、北側の場合は北北西の風であったことが想定される。

8. 7号住居(第100図の1・2、PL.21・32・33)

概要 本住居は竪穴住居である。3面5号溝の調査中に確認された。また本住居は床面の焼失住居と判断される。

位置 本住居は2期調査区域北東部、住居ラインの北寄

りにあり、927～933-343～348グリッドに位置する。

重複 同時期の他の遺構との重複は見られなかった。

覆土 本住居は黒色土からローム漸移層土等の土壌(1～11層)で埋没し、壁際では同様の土壌でいわゆる三角堆積層(18・20層)を確認している。また黒褐色土やローム漸移層土から成る土葺き材の層(13・14層)も確認された。

規模 長軸：490cm 短軸：419cm 深さ：32cm

P 1 径：63×33cm 深さ：23cm

P 2 径：78×66cm 深さ：15cm

P 3 径：64×60cm 深さ：15cm

P 4 径：69×60cm 深さ：11cm

P 5 径：54×41cm 深さ：3cm

P 6 径：14×10cm 深さ：14cm

P 7 径：27×25cm 深さ：18cm(床から：36cm)

P 8 径：29×24cm 深さ：18cm(床から：32cm)

P 9 径：22×19cm 深さ：14cm(床から：25cm)

P 10 径：22×20cm 深さ：8cm

1号炉 径：65×40cm 2号炉 径：37×36cm

3号炉 径：72×43cm 4号炉 径：50×(23)cm

周溝 幅3～11cm(凡そ8cm) 深さ：5cm

構造 〔竪穴〕 本住居のプランは、隅丸長方形を呈する。

主軸方向はN-34°-Eを向く。

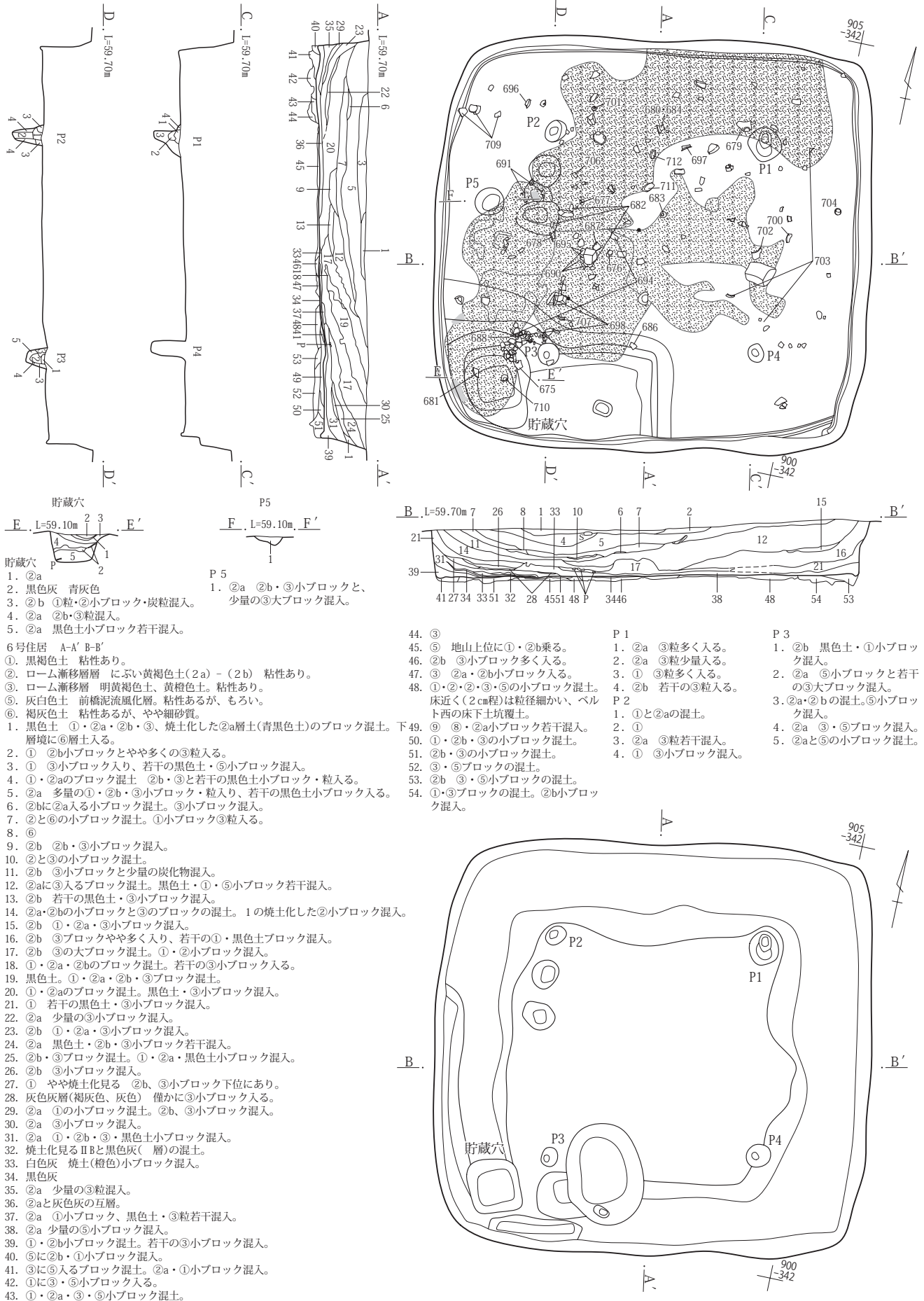
〔掘り方・床〕 本住居は、西側が東側より5cm程深く、土坑状の掘り込みが散見される掘り方を有し、これを下位にローム、上位に黒褐色土を主体とする土で埋め戻して床面を造る。

〔周溝〕 重複箇所を除く残存範囲では、南壁東寄りの土坑P 5を含む60cmを除く範囲で、壁面下を巡る。

〔柱穴〕 床面では四隅近くに、隅丸方形を呈する土坑が確認され、このうち北西隅のP 2の底面に、柱の荷重による塑性変形と判断される径24×21cm、深さ12cmを測る、隅丸方形プランの小ピットがある。またP 2～4は、平面規模が大きく、礎板の設置が窺われる。なお、P 1～4を主柱穴とした場合、その柱の径は20cm程であり、掘削位置は住居の隅に寄り過ぎるため、いわゆる壁柱穴に近いものと想定される。

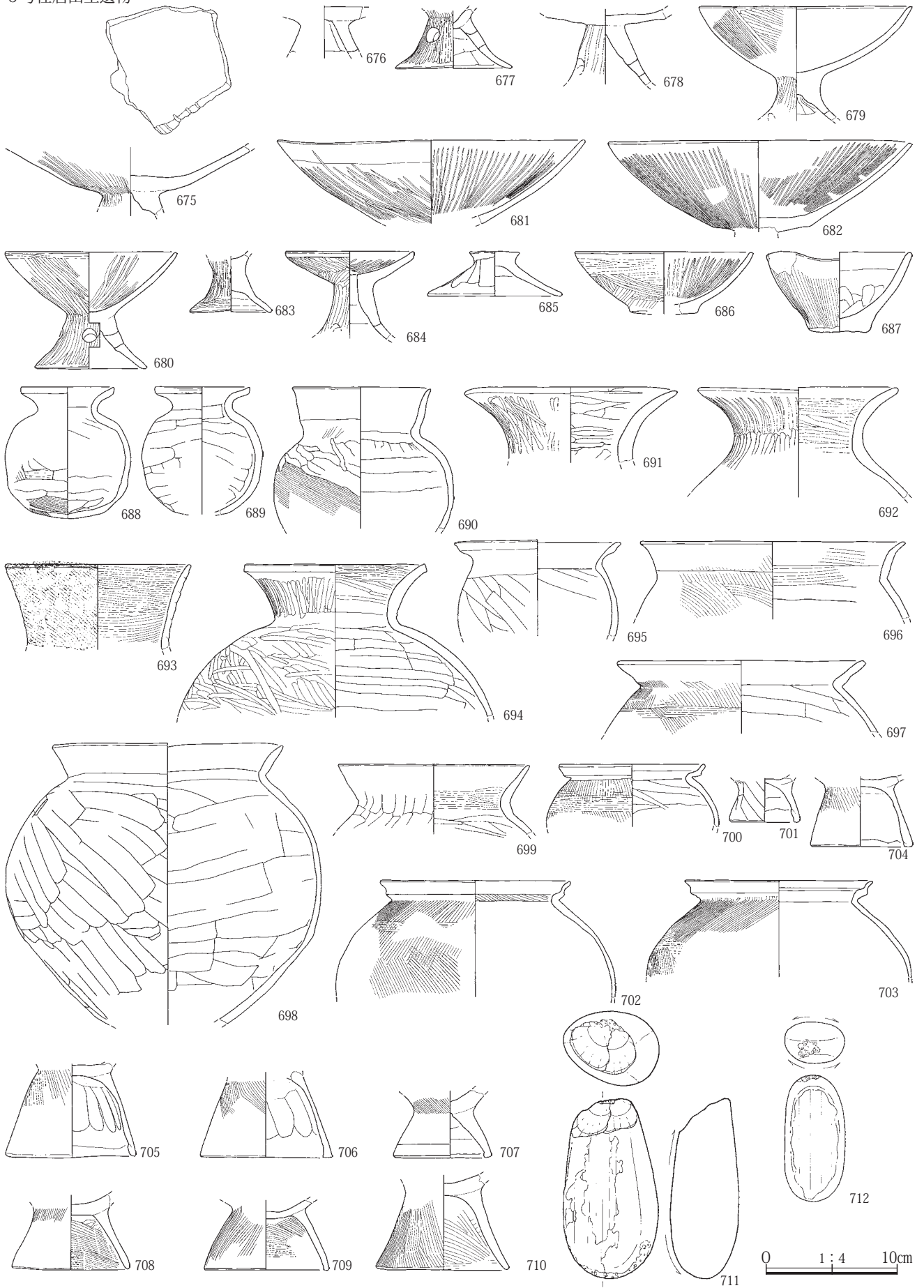
一方、掘り方面では、明らかに主柱穴と見られるP 7～9の3基を確認した。これらが床面に現れなかったのは、床面の形成により検出し辛かったか、建て替えによ

6号住居



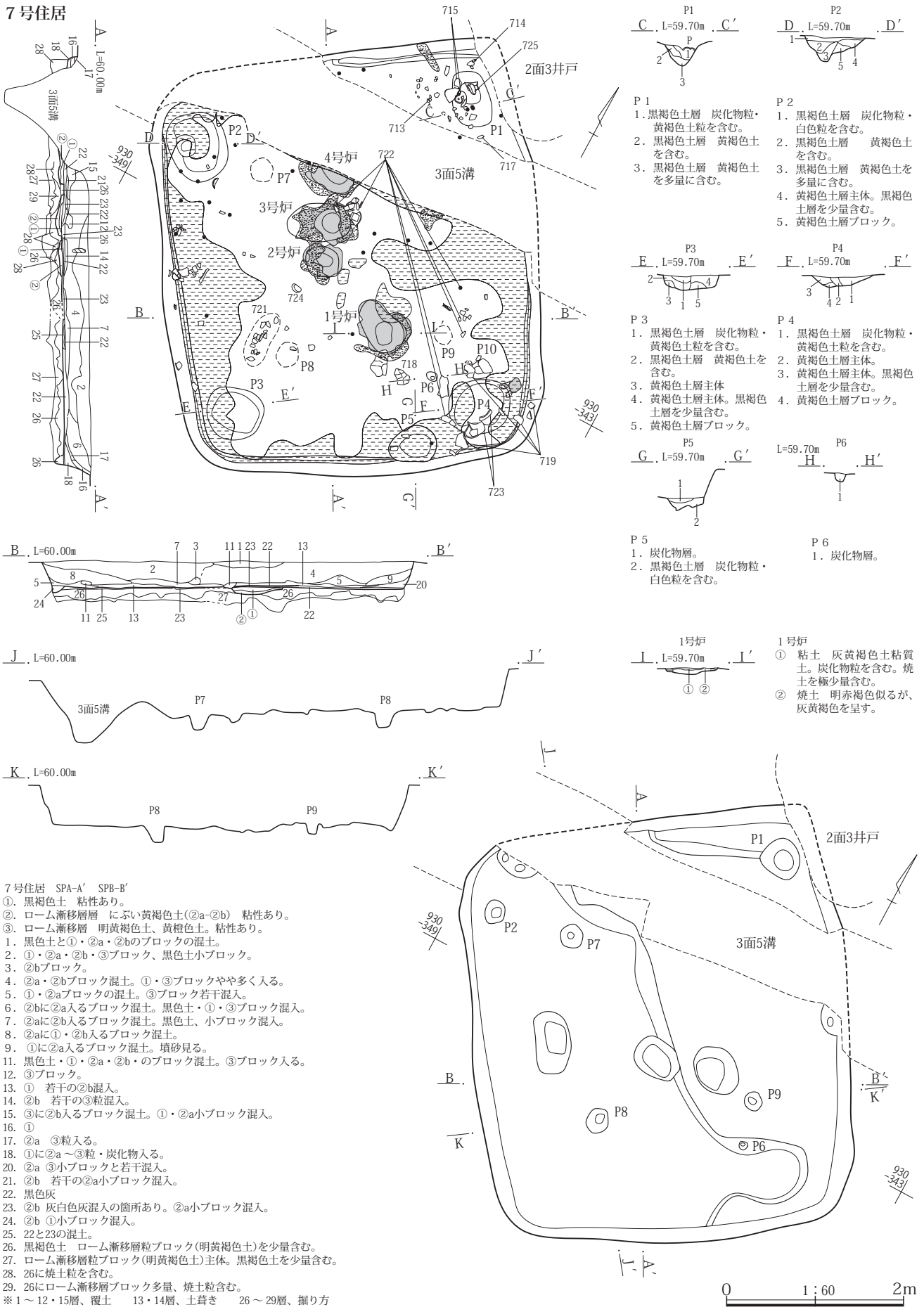
第99図の1 1区6号住居

6号住居出土遺物



第99図の2 1区6号住居出土遺物

7号住居

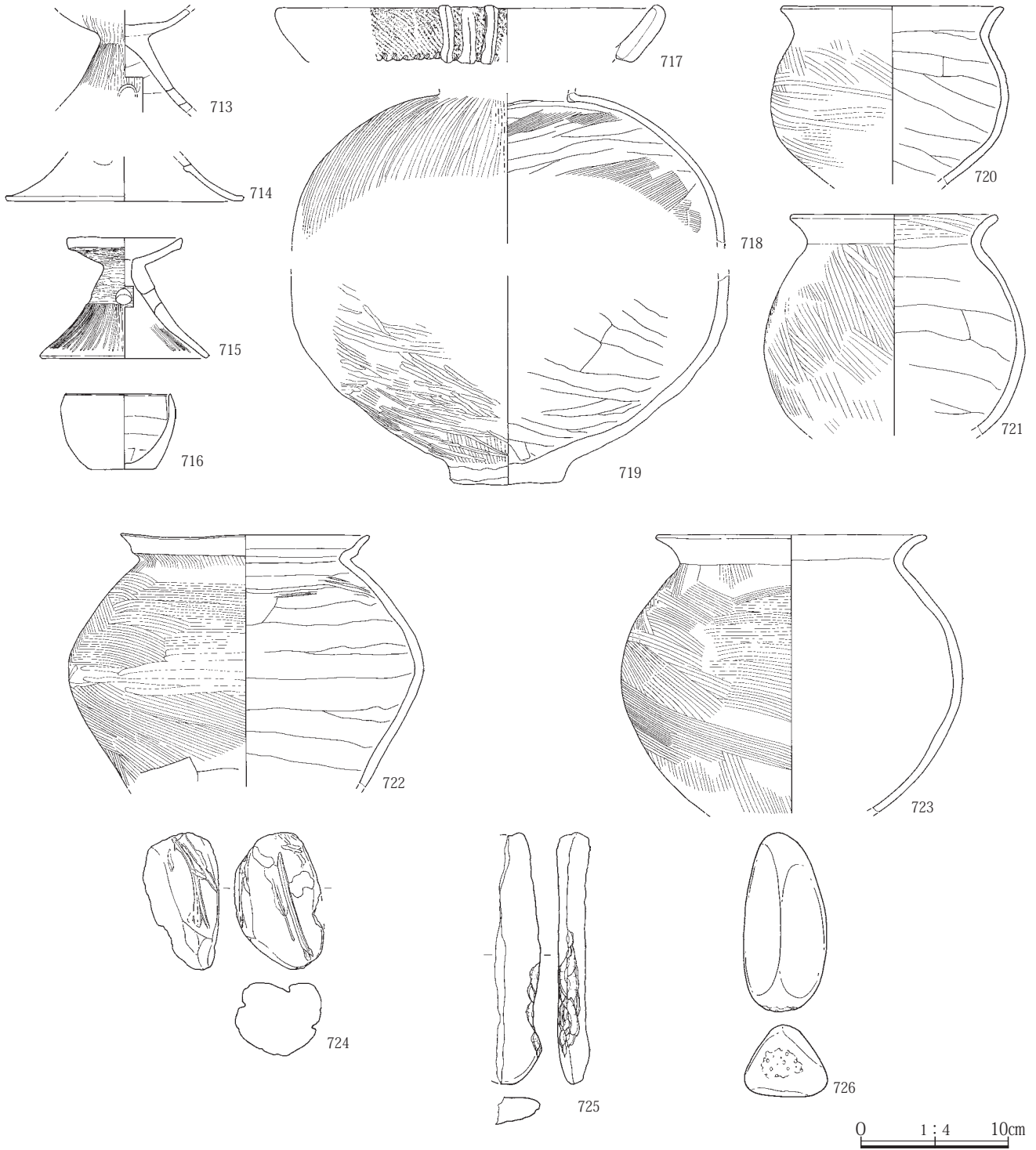


- P1** C, L=59.70m, C'
- P2** D, L=59.70m, D'
- P3** E, L=59.70m, E'
- P4** F, L=59.70m, F'
- P5** G, L=59.70m, G'
- P6** H, L=59.70m, H'
- P1**
1. 黒褐色土層 炭化物粒・黄褐色土粒を含む。
 2. 黒褐色土層 黄褐色土を含む。
 3. 黒褐色土層 黄褐色土を多量に含む。
- P2**
1. 黒褐色土層 炭化物粒・白色粒を含む。
 2. 黒褐色土層 黄褐色土を含む。
 3. 黒褐色土層 黄褐色土を多量に含む。
 4. 黄褐色土層主体。黒褐色土層を少量含む。
 5. 黄褐色土層ブロック。
- P3**
1. 黒褐色土層 炭化物粒・黄褐色土粒を含む。
 2. 黒褐色土層 黄褐色土を含む。
 3. 黄褐色土層主体。
 4. 黄褐色土層主体。黒褐色土層を少量含む。
 5. 黄褐色土層ブロック。
- P4**
1. 黒褐色土層 炭化物粒・黄褐色土粒を含む。
 2. 黄褐色土層主体。
 3. 黄褐色土層主体。黒褐色土層を少量含む。
 4. 黄褐色土層ブロック。
- P5**
1. 炭化物層。
 2. 黒褐色土層 炭化物粒・白色粒を含む。
- P6**
1. 炭化物層。

- 7号住居 SPA-A' SPB-B'
- ①. 黒褐色土 粘性あり。
 - ②. ローム漸移層層 にぶい黄褐色土(②a-②b) 粘性あり。
 - ③. ローム漸移層 明黄褐色土、黄褐色土。粘性あり。
 1. 黒色土と①・②a・②bのブロックの混土。
 2. ①・②a・②b・③ブロック、黒色土小ブロック。
 3. ②bブロック。
 4. ②a・②bブロック混土。①・③ブロックやや多く入る。
 5. ①・②aブロックの混土。③ブロック若干混入。
 6. ②bに②a入るブロック混土。黒色土・①・③ブロック混入。
 7. ②aに②b入るブロック混土。黒色土、小ブロック混入。
 8. ②aに①・②b入るブロック混土。墳砂見る。
 9. ①に②a入るブロック混土。
 11. 黒色土・①・②a・②b・のブロック混土。③ブロック入る。
 12. ③ブロック。
 13. ① 若干の②b混入。
 14. ②b 若干の③粒混入。
 15. ③に②b入るブロック混土。①・②a小ブロック混入。
 16. ①
 17. ②a ③粒入る。
 18. ①に②a~③粒・炭化物入る。
 20. ②a ③小ブロックと若干混入。
 21. ②b 若干の②a小ブロック混入。
 22. 黒色灰
 23. ②b 灰白色灰混入の箇所あり。②a小ブロック混入。
 24. ②b ①小ブロック混入。
 25. 22と23の混土。
 26. 黒褐色土 ローム漸移層粒ブロック(明黄褐色土)を少量含む。
 27. ローム漸移層粒ブロック(明黄褐色土)主体。黒褐色土を少量含む。
 28. 26に焼土粒を含む。
 29. 26にローム漸移層ブロック多量、焼土粒含む。
- * 1~12・15層、覆土 13・14層、土葺き 26~29層、掘り方

第100図の1 1区7号住居

7号住居出土遺物



第100図の2 1区7号住居出土遺物

り埋没したものの可能性が窺われる。

また、支柱穴の柱間は174cm、P 8・9の柱間は210cmを測る。一方、床面に確認された柱穴の柱間は、P 1・2は325cm、P 3・4は280cm、P 2・3は302cm、P 1・4は351cmを測る。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴は把握できなかった。

〔炉〕 炉は地床炉であったが、床面に焼土面が散見されたため、明確に把握できなかった。

〔上屋〕 本住居の上屋は、柱の配置等から棟方向は北東-南西方向にあると想定した。柱材の径は、P 1～4では径20cm程、P 7～9は最大でも径20cm以下と想定される。大塚斜度(大塚1988)を基に推計すると、本住居の床面から梁・桁までの高さは1.1m以上、棟までの高さは1.55m以上、地表から棟までの高さは1.15m以上を測る。

埋没土地中に壁沿いに炭化物の分布が見られ、床面に焼土面が見られる。土葺き材は厚さ3cm程である。

遺物 高杯(713・714)・器台(715)・鉢(716)・壺(717～719)・甕(720～723)等の土師器、砥石と見られる石製品(724)、敲石(725・726)が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、古墳時代前期中段階の所産と判断される。

なお、本住居も焼失家屋であるが、着火点は想定できなかった。

9. 8号住居・3号溝状遺構群(第101図、PL.21・22・33)

概要 本住居は竪穴住居である。本住居は南半部が1-1区2期調査で、北西部が1-1区3期調査で調査したが、北東部は1・3期調査区域の狭間に入って、調査できなかった。

位置 本住居は、略北北西-南南東方向に連なる住居群の北端に在り、1-1区2期調査区域北東隅部、3期調査区域の南東隅部に位置する。934～941-340～349グリッドに所在する。

重複 本住居は同時期の他遺構との重複はなかった。

覆土 本住居はローム漸移層下層土を中心とする土壌(13・18・31層)等で埋没し、壁際も黒褐色土やローム漸移層土等の土壌でいわゆる三角堆積層(33～38層)も確認される。またローム漸移層下層土やロームから成る土葺き材と思われる土層(21・21'・24層)も確認された。

規模 (8号住居)

長軸：773cm 短軸：770cm 深さ：42cm

P 1 径：72×66cm 深さ：80cm

P 2 径：80×80cm 深さ：87cm

P 3 径：77×76cm 深さ：46cm

P 4 径：72×69cm 深さ：46cm

土坑1 径：72×61cm 深さ：46cm

土坑2 径：120×57cm 深さ：50cm(床から：56cm)

周溝 幅10～31cm 深さ：14cm

(3号溝状遺構群)

溝 長さ：157cm 幅：106cm 深さ：14cm

構造 〔竪穴〕 本住居のプランは、隅丸方形を呈する。主軸方向はN-11°-Wを向く。

〔周溝帯〕 本住居に周溝帯を明確には確認できなかったが、住居西方2.2m程の位置に3号溝状遺構群がある。この遺構は交差する2条の溝に見えるが、交差点から北側が東、南側が西に出る溝が遺構である。

この溝は、N-8°-Wに走向をとり、直線的に走行する。掘削形態は不整で、底面にも凹凸が見られる。

〔掘り方・床〕 本住居は、壁沿いには幅10～22cmを測るテラス状の掘り残しの内側に、幅112～181cm(標準120cm程)、高さ48cm以下の周溝状の掘り込みが見られる掘り方を有し、これを黒褐色土からローム層土で埋戻し、ロームを含む灰黄褐色粘質土で床面を造る。

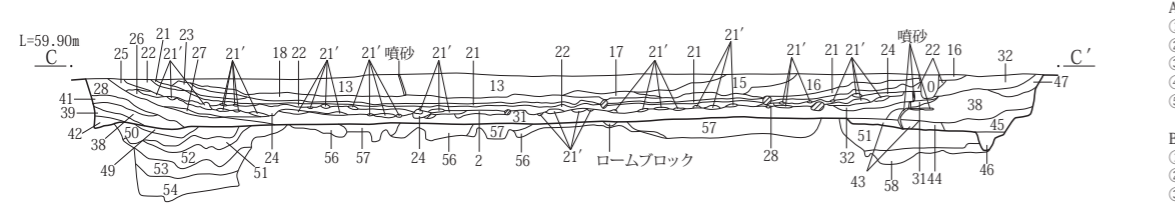
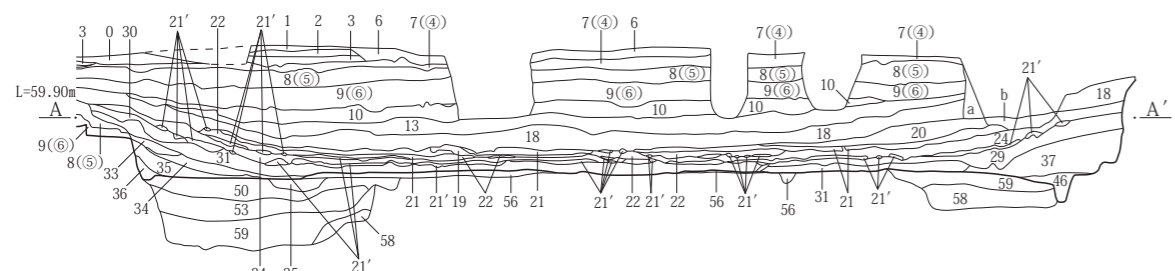
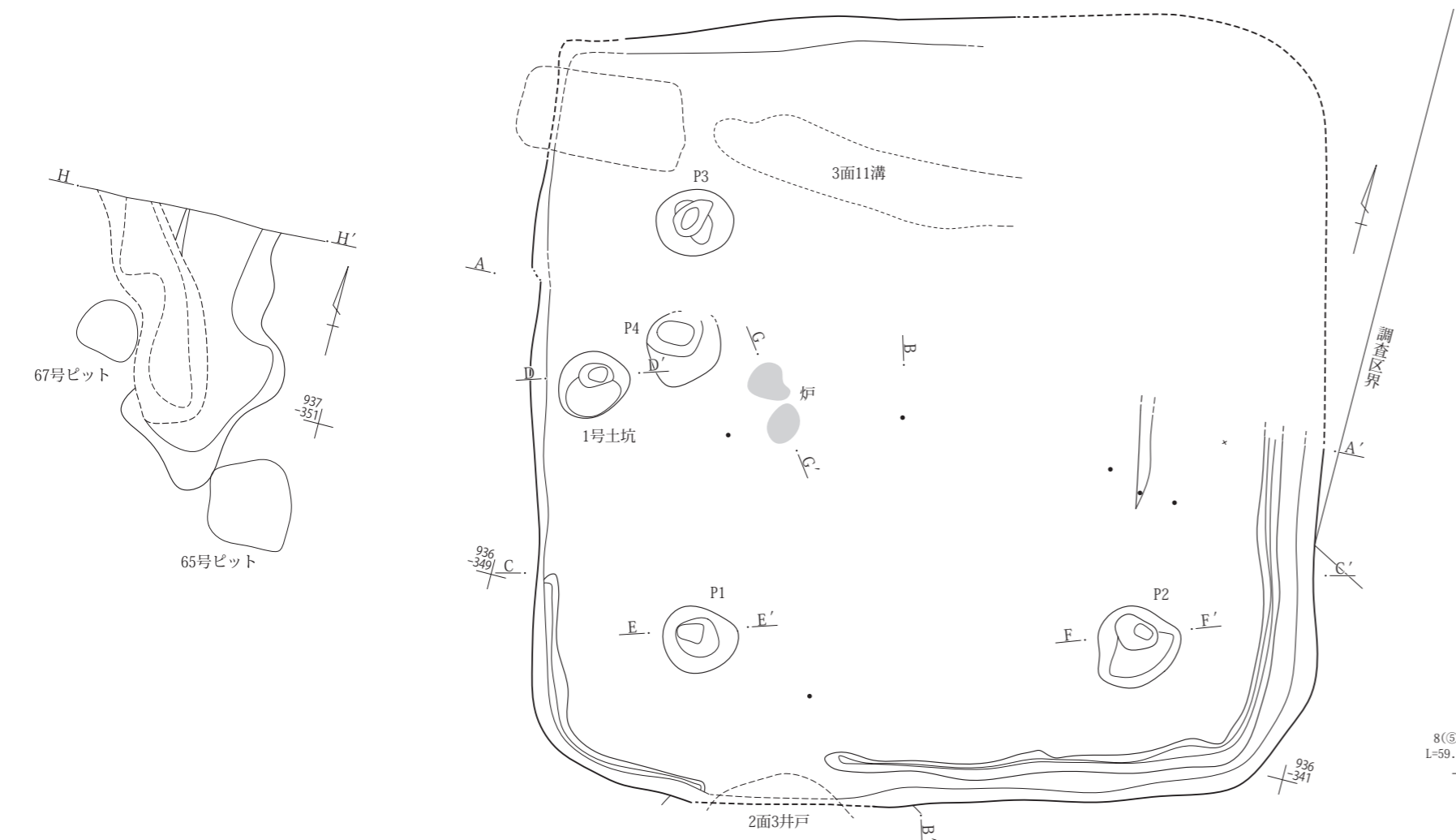
〔周溝〕 周溝は、東壁(南半)から南壁、西壁南部にかけて、壁面下を巡る。

〔柱穴〕 本住居の床面には5基の柱穴・土坑があった。このうち支柱穴は、P 1(南西)、P 2(南東)、P 3(北東)で、そのプランは、P 1・2は楕円状、P 3は隅丸方形を呈する。共に底面には柱の荷重による塑性変形と見られる窪みが見られる。なお、P 2は、床面より、掘り方面の方が平面的に大きく、その径は96×85cmを測る。

また柱間は、P 1・P 2では445cm、P 1・P 3では404cmを測る。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴の可能性のあるのは、床面の西壁際や北寄りで確認した、楕円形プランの土坑1である。一方、掘り方面の南壁西端付近に確認された土坑2は、東西に長い隅丸長方形のプランを呈するものであるが、これが当初の貯蔵穴であった可能性が考慮される。

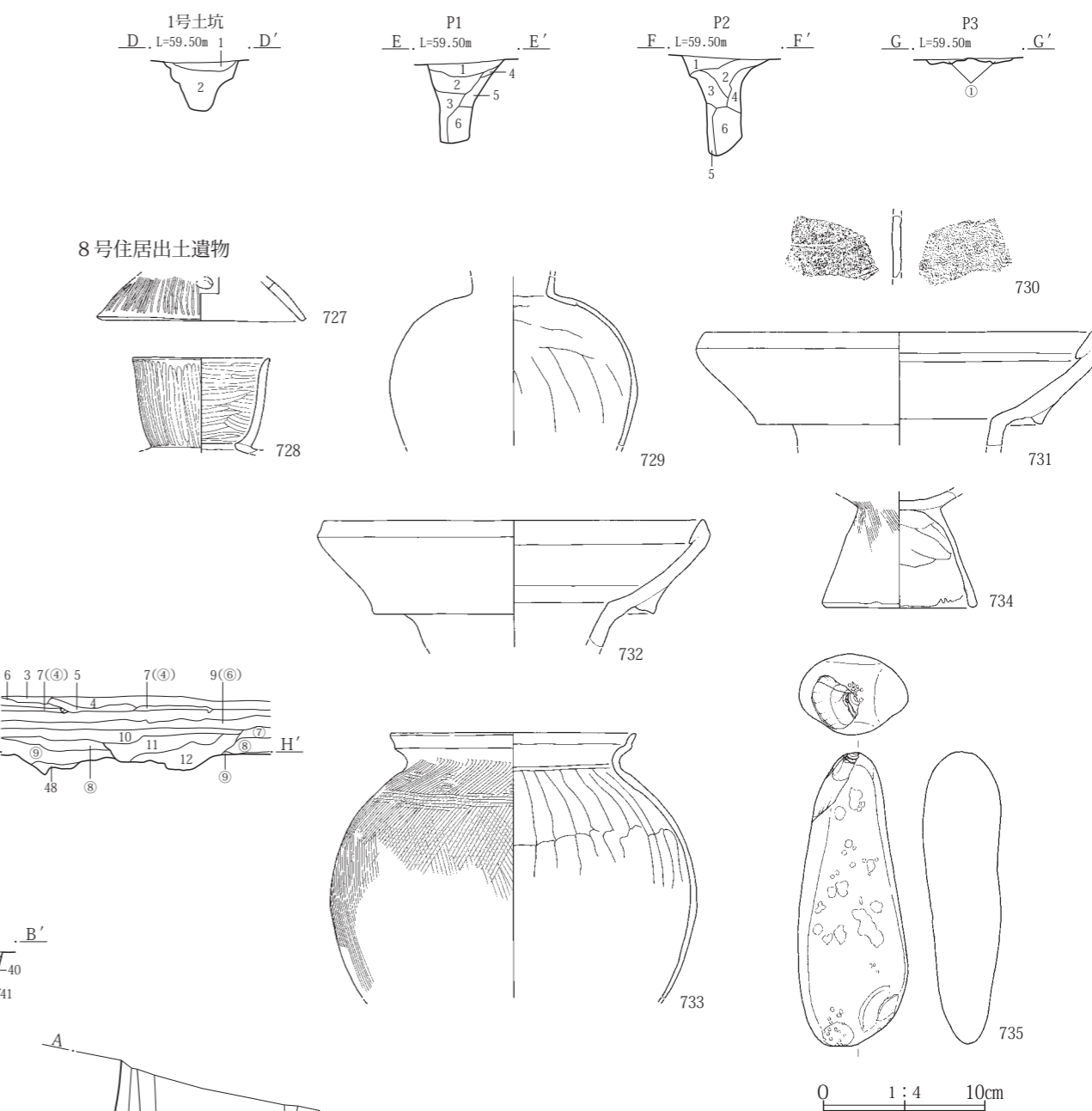
〔炉〕 炉は地床炉と想定されるが、特定はできなかった。



- 8号住居 A-A' (北壁) B-B'、C-C' (ベルト) SPA-A' SPB-B' SPC-C'
- ①. 黒褐色土 粘性あり。
 - ②. ローム漸移層 にぶい黄褐色土 (2a-2b) 粘性あり。
 - ③. ローム漸移層 明黄褐色土、黄褐色土。粘性あり。
 - ④. 灰白色土 前橋泥流風化層。粘性あるが、もろい。
 - ⑤. 5面掘削時の埋土。攪乱。
 1. 褐色粘質土 中世(室町)地表。
 2. 黄灰色粘質土 酸化鉄多く入り、橙色掛かる。
 3. 灰黄褐色砂質土 As-B入り、酸化鉄やや多く沈着。
 4. 灰褐色砂質土 As-B入り。酸化鉄小ブロック状に沈着。
 5. 褐色砂質土 As-B多く入る。
 6. 褐色砂質土 As-B多く入る。いわゆるB混黒の一種。
 7. As-B
 8. 褐色砂質土
 9. 明黄褐色砂質土 Hr-PP若干混入。PP泥流。
 10. 褐色土 9小ブロックとHr-PP若干混入。粘性あり。
 11. ①・②a層士の混土。③小ブロック混入。
 12. ①・②a・②bの混土。③小ブロック多く入る。
 13. ②bに②a・③小ブロック混入。
 14. ②bに②a入るブロック混土。③・⑤ブロック混入。
 15. ①・②aブロック混土。②b・③ブロック混入。
 16. ②b ②a・③ブロックと若干の①小ブロック混入。
 17. ②a ①・②bと若干の③小ブロック混入。
 18. ②a・②b・③ブロック混入。
 19. ②a・②b小ブロック混土。①・③小ブロック若干混入。
 20. ②b ②aブロックと③小ブロック混入。
 21. 黄灰色土 5・酸化鉄粒域に沈着し、橙色掛かる。
 - 21' . 21層に似るが、灰黄褐色を呈す。

22. ②b (③に近い) に②a小ブロック、若干の⑤小ブロック混入。部分的に筋状の①層土混入。
23. ②b ②a・⑤小ブロック混入。若干の③粒入る。
24. ②bに②a入る混土。⑤小ブロック混入。
25. ②b ②a・③粒混入。
26. ① ②ブロックと、⑤小ブロック若干混入。
27. ②a
28. ②a・②b・③のブロック混土。
29. ②b ②aブロックと③小ブロック若干混入。
30. ②a ②bと若干の③・⑤小ブロック混入。
31. ②a ②b・③ブロック混入。
32. ②a ②bブロック多く入る。
33. ②b ②a小ブロック混入。
34. ②b (③に近い) ③小ブロック混入。
35. ②b ②a・③小ブロック混入。
36. ②a・②bの小ブロック混土。③小ブロック混入。
37. ②b 黒色土と②ブロック入り、③ブロック多く混入。
38. ①～③のブロック混土。
39. ②bに②a・③入る小ブロック混土。
40. ②b (③に近い) と③の小ブロック混土。
41. ②b (③に近い) ②a・③ブロック混入。
42. ②b (③に近い) ②a小ブロック、③ブロック混入。
43. ②b ②a小ブロックと若干の③小ブロック混入。
44. ①～③の小ブロック混土。
45. ②a・③のブロック混土。①小ブロック混入。
46. ②b ③粒・酸化鉄粒入る。
47. ③に②b入る小ブロック混土。②a小ブロック若干混入。
48. ②aと②bの小ブロック混土。

- A-A' (北壁) 掘り方
- ①. 灰黄褐色粘質土主体。黄褐色ローム漸移層ブロック含む。
 - ②. 黒褐色粘質土 黄褐色ローム漸移層ブロック多量に含む。
 - ③. 黒褐色粘質土主体。ローム漸移層粒を含む。
 - ④. 黄褐色ローム漸移層ブロック主体。黒色粘質土黒色粘質土を含む。
 - ⑤. 黒色粘質土 ローム漸移層粒を含む。
- B-B'、C-C' (ベルト) 掘り方
- ①. にぶい黄褐色土 締まりあり。ローム漸移層粒を含む。
 - ②. 黒褐色粘質土 黄褐色ローム漸移層ブロック多量に含む。
 - ③. にぶい黄褐色土 黄褐色ローム漸移層ブロック多量に含む。
 - ④. にぶい黄褐色土 黄褐色ローム漸移層ブロック多量に含む。黒褐色粘質土を多量に含む。
 - ⑤. 黒褐色粘質土主体。ローム漸移層粒を含む。
 - ⑥. 黒褐色粘質土主体。ローム漸移層粒を含む。黄褐色ローム漸移層ブロックを含む。
 - ⑦. 灰黄褐色粘質土主体。黄褐色ローム漸移層ブロック含む。
 - ⑧. 灰黄褐色粘質土主体。黄褐色ローム漸移層ブロック含む。(ローム漸移層ブロックが大型)
 - ⑨. 黒色粘質土 ローム漸移層粒を含む。
- 1号土坑 SPA-A'
1. にぶい黄褐色土 小型の黄褐色土ローム漸移層ブロックを含む。
 2. にぶい黄褐色土 大型の黄褐色土ローム漸移層ブロックを含む。
- P1 SPA-A'
1. にぶい黄褐色土 黄褐色土ローム漸移層粒を少量含む。
 2. にぶい黄褐色土 黄褐色土ローム漸移層粒を多量に含む。
 3. 黒色土層 ローム漸移層黄褐色土ローム漸移層ブロックを少量含む。
 4. 黄褐色土ローム漸移層ブロック主体。にぶい黄褐色土を少量含む。
 5. 4+3を少量含む。
 6. 3+灰白色粘質土を含む。
- P2 SPA-A'
1. にぶい黄褐色土 黄褐色土ローム漸移層粒を少量含む。
 2. にぶい黄褐色土 黄褐色土ローム漸移層粒を多量に含む。
 3. にぶい黄褐色土 黄褐色土ローム漸移層粒を含む。
 4. 黒褐色土層 黄褐色土ローム漸移層ブロックを多く含む。
 5. 4+3を少量含む。
 6. 5で黄褐色土ローム漸移層ブロックがやや多い。
- 炉 SPA-A'
- ①. にぶい黄褐色土 焼土粒を多量に含む。



第101図 1区8号住居と3号溝状遺構群及び出土遺物

なお、P1とP3を結ぶラインの80cm程北側に、径42×38cm、南側に径41×31cmを測る焼土面がある。

〔上屋〕本住居の棟方向は東北東-西南西方向を向くものと想定した。また、大塚斜度(大塚1988)を基に推計すると、本住居の床面から梁・桁までの高さは1.3m以上、棟までの高さは2.4m、地表から棟までの高さは2.0m程を測るものと想定される。

また、住居の断面観察から、屋根には土葺きが施されていた可能性が考慮される。

遺物 高杯(727)・埴(728)・壺(729~732)・台付甕(733・734)等の土師器と敲石(735)が出土した。

所見 本住居の時期は明瞭ではないが、出土遺物から推して、古墳時代前期の所産と判断される。

10. 9号住居・2号溝状遺構群

(第102図の1・2、第103図、PL.22・33)

概要 本住居は竪穴住居である。

本住居は1-1区の第1期調査では確認できず、第2期調査で確認したが、その東半を調査できなかった。

位置 本住居は2期調査区域東端部中央やや北寄り、住居ラインの中程、923~321-336~340グリッドに位置する。

重複 同時期の遺構との重複はなかった。

〔覆土〕本住居はロームから黒褐色土等で埋没する。また壁際には黒褐色土やローム漸移層土等によるいわゆる三角堆積層(50~56層)が確認されている。また層厚の薄い14層(浅黄橙色土)や18層(褐灰色土)、24層(明黄褐色土)は土葺き材の可能性が考慮される。

規模 (9号住居)

長軸：(855)cm 短軸：(372)cm以上 深さ：67cm

P1 径：75×72cm 深さ：32cm 柱痕径：[19]cm

P2 径：72×55cm 深さ：54cm 柱痕径：[12]cm

周溝 幅：2~10cm 深さ：2~10cm

(2号溝状遺構群)

溝1 長さ：76cm 幅：38cm 深さ：-cm

溝2 長さ：99cm 幅：46cm 深さ：-cm

溝3 長さ：319cm 幅：83cm 深さ：-cm

溝4 長さ：161cm 幅：53cm 深さ：3cm

溝5 長さ：745cm 幅：68cm(本体幅：40cm)
深さ：19cm

溝6 長さ：116cm 幅：52cm 深さ：8cm

溝7 長さ：424cm 幅：64cm 深さ：6cm

溝8 長さ：154cm 幅：48cm 深さ：8cm

構造 〔竪穴〕本住居は凡そ西半部を調査したに過ぎず、調査範囲の北端も3面5号溝に壊されていたため、全容は詳らかではないが、隅丸形状を呈すると判断される。本住居の主軸方向はN-6°-Wを向く。

〔周溝帯〕本住居に周提帯は明確にできなかったが、住居南西方1.1~1.9m程隔たった位置に2号溝状遺構群がある。2号溝状遺構群は8条の溝状遺構から成るが、溝3を除き、略北北西-南南東方向にほぼ並走行し、溝3のみがこれに直交する。掘削形態に特段の規格性は見られないが、底面は凹凸が見られる。また、特に溝5は、9号住居の壁から240~400cm程隔たるものの、その走行は、9号住居の西壁から南壁に沿うように在ることから、本遺構群は周提帯に伴うものと思慮される。

〔掘り方・床〕本住居は、掘り方の外周に幅72~140cm、深さ9cm以下の周溝状の掘り込みと、浅い土坑状の掘り込みを伴う掘り方を有する。これをローム漸移層土下層土等で埋め戻して床を造るが、床の一部にはロームを主体とした貼床(57層)が施されている。

〔周溝〕調査範囲全体の壁際には、幅の狭い周溝が設けられる。

〔柱穴〕床面には、支柱穴と判断されるP1(南西)・P2(北西)の2基の柱穴を確認した。P1・2間の柱間は、440cmを測った。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴は確認できなかった。

〔炉〕炉も確認できなかった。

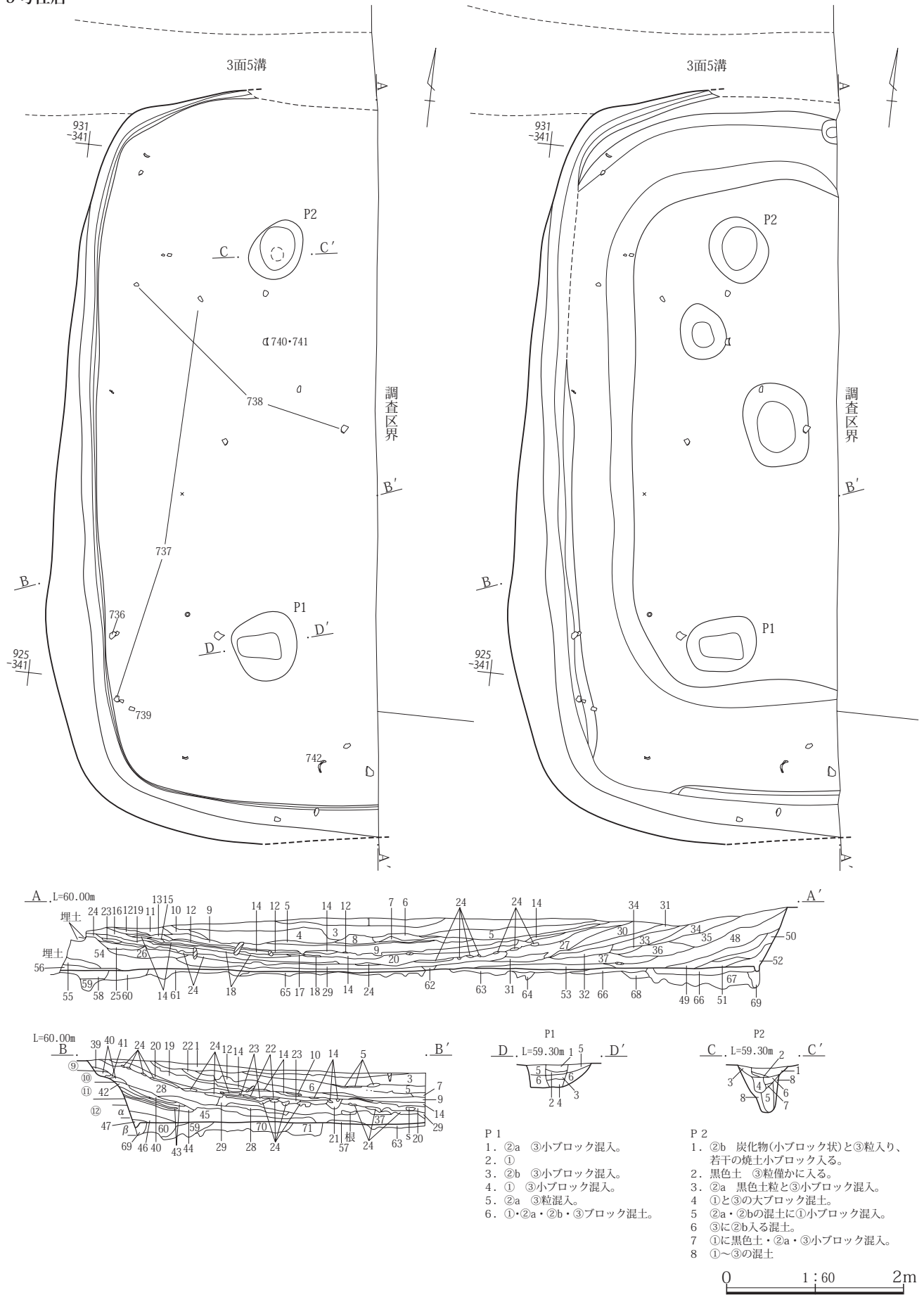
〔上屋〕大塚斜度(大塚1988)に勘案すれば、床から棟までの高さは3m以上と想定される。

遺物 高杯(736・737)・埴(738)・壺(739)・台付甕(740~742)等の土師器が出土した。

所見 本住居の時期は、古墳時代前期中段階の所産と判断される。

11. 1号掘立柱建物(第104図、PL.22・33)

概要 本建物は、中央列の柱が、西側内寄りのものを除いて確認されているため総柱の掘立柱建物に分類される。しかし、南北両側列の柱穴と中央列の柱穴の規格が

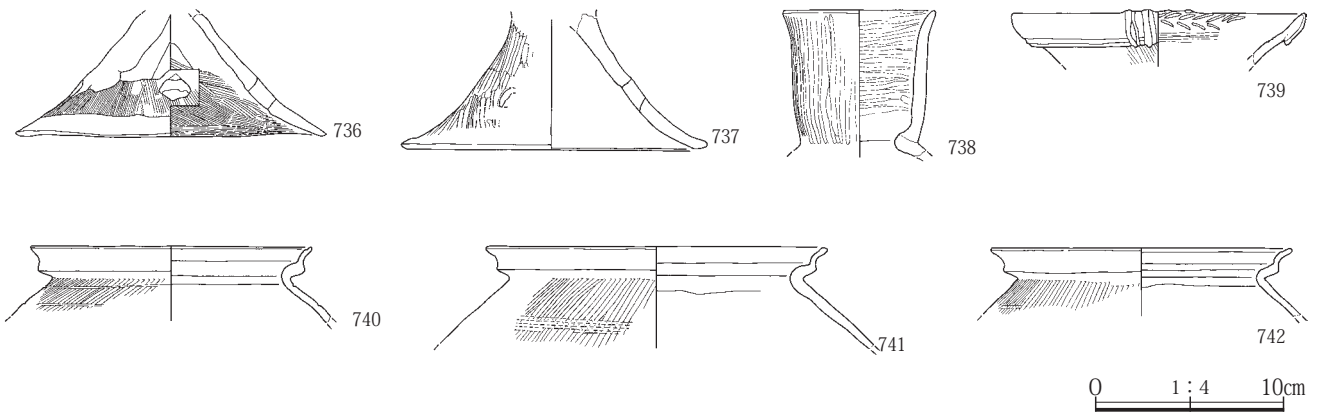


第102図の1 1区9号住居と3号溝状遺構群

9号住居A-A' B-B'

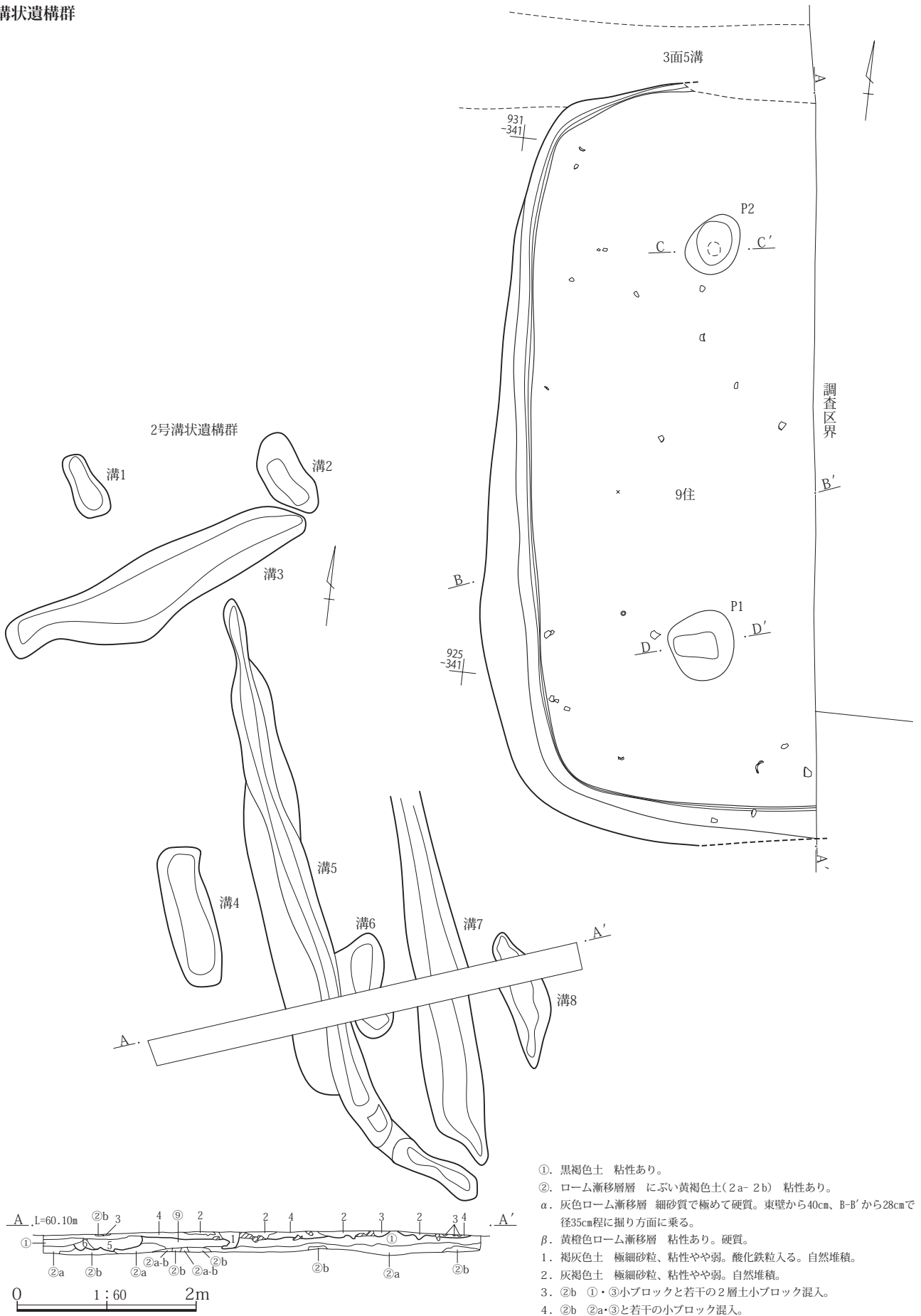
- ①. 黒褐色土 粘性あり。
- ②. ローム漸移層層 にぶい黄褐色土(2a-2b) 粘性あり。
- ③. ローム漸移層 明黄褐色土、黄褐色土。粘性あり。
- ⑤. 灰白色土 前橋泥流風化層。粘性あるが、もろい。
- α. 灰色ローム漸移層 細砂質で極めて硬質。東壁から40cm、B-B'から28cmで径35cm程に掘り方面に乗る。
- β. 黄褐色ローム漸移層 粘性あり。硬質。
1. 褐灰色土 極細砂粒、粘性やや弱。酸化鉄粒入る。自然堆積。
2. 灰褐色土 極細砂粒、粘性やや弱。自然堆積。
3. ②b ①・③小ブロックと若干の2層土小ブロック混入。
4. ②b ②a・③と若干の小ブロック混入。
5. 褐灰色土 粘性あり。
6. ②a ②b・③ 2層土小ブロック混入。
7. 5層土に②b小ブロック混入。北寄りで②a大ブロック。
8. ②b ②a・③小ブロック混入。
9. ②a・②bブロック混入。③小ブロック混入。
10. ②a ②b小ブロック混入。
11. ②b Hr-FA泥流ブロック混入。
12. 灰黄褐色土シルト質。洪水層土か、Hr-FA泥流の一部か。
13. 12・14・②b粒の混土。
14. 浅黄褐色土 シルト質。酸化鉄粒状に沈着。Hr-FA泥流か。
15. 14層土と16層土の小ブロック混土。
16. ②bと14層土の小ブロック混土。
17. 18層土と③の小ブロック混土。
18. 褐灰色土 シルト質。粘性あり。
19. 5層土と⑤の小ブロック混入。
20. ②b ③ブロック混入。②aブロック混入。
21. 14・20層土の混土。
22. 浅黄褐色 シルト質。Hr-FA混入。
23. ②b 若干の22層土小ブロック混入。
24. 明黄褐色土 Hr-FA混入。
25. ②a ②bブロック・③小ブロック若干混入。
26. 上位①、下位②a中心の混土。
27. ②b ③小ブロックと少量の黒色土大ブロック混入。
28. ②a 若干の③小ブロック混入。
29. ①・②aのブロック混土。②b・③ブロック混入。
30. ②a・②b・③の小ブロック混土。黒色土小ブロック若干混入。
31. ②a ③粒若干混入。
32. ②b ③粒若干混入。
33. ②b 黒色土・②a・③小ブロック多く入る。
34. ②a 黒色土粒・②a粒混入。
35. ②b ②a・③ブロックと若干の黒色土小ブロック混入。
36. 35に似るが、混入物の粒径小さい。
37. ②a・②bのブロック混土 ①・③小ブロック混入。
39. ②a ①小ブロック入る。
40. ①・②aの混土 ③小ブロック入る。
41. ②b
42. ②b ①小ブロック入る。
43. ①に②a入る小ブロック混土。
44. ②a ③小ブロック入る。
45. ②a ①・②b・③ブロック入る。
46. ②a・①のブロック混土 ②b・③小ブロック入る。
47. 46に似るが、混入物僅か。
48. ②b ①・②a・③ブロック入る。
49. ①～③の小ブロック混土。
50. ①・②aのブロック混土。②bブロック若干入る。
51. ①・②a・③のブロック混土。
52. ②b ②a小ブロック入る。
53. ③に②a・②b入る小ブロック混土。
54. ②a ①・②b・③ブロック多く入る。
55. ②b ①・②a・③粒若干混入。
56. ②a・②b の混土。③小ブロックと少量の焼土小ブロック入る。
57. ③に若干の②a入る小ブロック層。
58. ②bと③のブロック混土。①・②a小ブロック混入。
59. ②a・②bの混土 黒色土・①・③小ブロック混入。
60. ②a～③のブロック混土 ①小ブロック混入。
61. ③・⑤ブロック混土 ①～②b小ブロック混入。
62. ②b・③粒の混土 ①小ブロック混入。
63. ②bに③と若干の②a・①ブロックの混入。②a多く入る。
64. ①～③粒の混土。
65. ②b ③と若干の②a小ブロック入る。
66. ②bと③小ブロック混土 ②a粒若干混入。
67. ②b ①・②a・③小ブロックと若干の③大ブロック混入。黒色土小ブロック混入。
68. ②a・②b小ブロックと③ブロック混土。
69. ②a～③の小ブロック混土 ややしまり欠く。
70. 黒色土・①～②aの小ブロックと③ブロックの混土。
71. ③ブロックと②b小ブロックの混土 黒色土・②a小ブロック混入。

9号住居出土遺物



第102図の2 1区9号住居掘り方と土層注記及び出土遺物

溝状遺構群



第103図 1区9号住居と2号溝状遺構群

異なる(前者に比し後者が小さく掘削深度も浅い)ため、倉庫棟の総柱の建物とは性格が異なる。

位置 本建物は1-1区2期調査区域北東部中程、略北北西-南南東方向に連なる住居群より西に12m程外れた位置に在り、319~326-353~358グリッドに位置する。

重複 本建物は北東部で1号住居と重複するが、土層断面観察から推して本建物の方が古いと認識される。

覆土 本建物の覆土は、柱痕、埋土共に黒褐色土やローム漸移層下層土を主体とした土壌で構成されている。

規模 範囲：432×428cm

P 1	径：56×39cm	深さ：75cm	柱痕径：12cm
P 2	径：43×36cm	深さ：58cm	柱痕径：5~12cm
P 3	径：39×34cm	深さ：84cm	柱痕径：6~12cm
P 4	径：61×43cm	深さ：70cm	柱痕径：12~16cm
P 5	径：50×44cm	深さ：57cm	柱痕径：12cm
P 6	径：43×38cm	深さ：55cm	柱痕径：8~14cm
P 7	径：54×46cm	深さ：77cm	柱痕径：6~13cm
P 8	径：52×45cm	深さ：76cm	柱痕径：14cm
P 9	径：33×32cm	深さ：33cm	柱痕径：10cm
P 10	径：28×20cm	深さ：25cm	
P 11	径：29×28cm	深さ：35cm	

構造 上述のように本建物は3×2間の掘立柱建物である。主軸(棟)方向はN-68°-Eを向く。

〔柱穴の配置〕本建物は南北列に各4基、中央列に3基の柱穴が掘削される。このうち中央列のものは、西側の内寄りのものが確認できなかった。また南列東端のP5は南西方向に15cm程寄っており、中央列では西端のP9が西側に12cm程、東端のP4は東に8cm程張り出しており、全体のプランは長方形に近い亀甲形を呈する。

〔柱穴の形態及び規模〕柱穴のプランはいずれも楕円形を呈する。掘削形態はP1・2・7・8は井筒片朝顔形、P3~6は井筒形を呈し、P9~11は播鉢状で、底面はP3・8が平底を呈する以外は丸底を呈する。

柱穴の径は20~60cm、平均40.59cm、深さは25~84cm、平均58.64cmを測る。しかし、南北列の柱穴の径は34~61cm、平均45.19cm、深さは55~84cm、平均69.00cmであるのに対し、中央列の柱穴の径は20~33cm、平均28.33cm、深さは25~35cm、平均31.00cmと、明らかな規格の相違が認められる。

〔柱間〕本建物の桁間は、隣接する柱の柱間は、106~

157cmと幅があり、その平均は127.4cmを測る。また東西両側の柱の柱間は365~402cmでこれも差が有るが、平均は379.3cmを測るが、南北列について見るとその差は4cmと小さく、その平均は367cmを測る。

梁間は、隣接する柱の柱間は、132~180cmと幅があり、その平均は159.2cmを測る。一方、南北両側の柱の柱間は311~324cmと、その誤差は13cm以内と少なく、その平均は316.8cmを測る。

桁間に対して梁間は30cm程長いが、基準となる正確な尺はなかったものと思慮される。

〔上屋〕柱は土層断面から、凡そ12cm程であったと推定される。また北列のP1・4と南列のP5~7の底面には、柱の荷重による塑性変形が確認される。中央列の柱穴が浅いことを勘案すると、建物の荷重は南北両側の柱に掛る構造であったものと思慮される。

また、中央列の柱穴P10の存在から、少なくとも東部に床が貼られていたことが想定される。

なお、柱穴底面の塑性変形が見られることから、ある程度の荷重が掛かったことは明らかではあるものの、柱材の径を想定した12cm程とした場合、ローム層では1本の荷重が60~70kgと算出される(石守晃1986)ことから推しても、比較的単純な構造であったと窺われる。

遺物 P1から土師器鉢(779)・壺(780~782)が出土した。

所見 本住居の時期は明瞭ではないが、1号住居の時期から推して、凡そ4世紀後半以前の所産と判断される。

12. 1号竪穴(第105~107図、PL.22・34・35)

概要 本遺構は竪穴構造を持つ遺構である。本遺構からは、完形若しくは完形に近い状態の32個の土師器が出土した。一部に火を起こした痕跡も見られた。

位置 本遺構は、2期調査区域中東部に在り、住居ライン付近に在る。913~917-340~342グリッドに位置する。

重複 本遺構は他の遺構との重複は見られなかった。

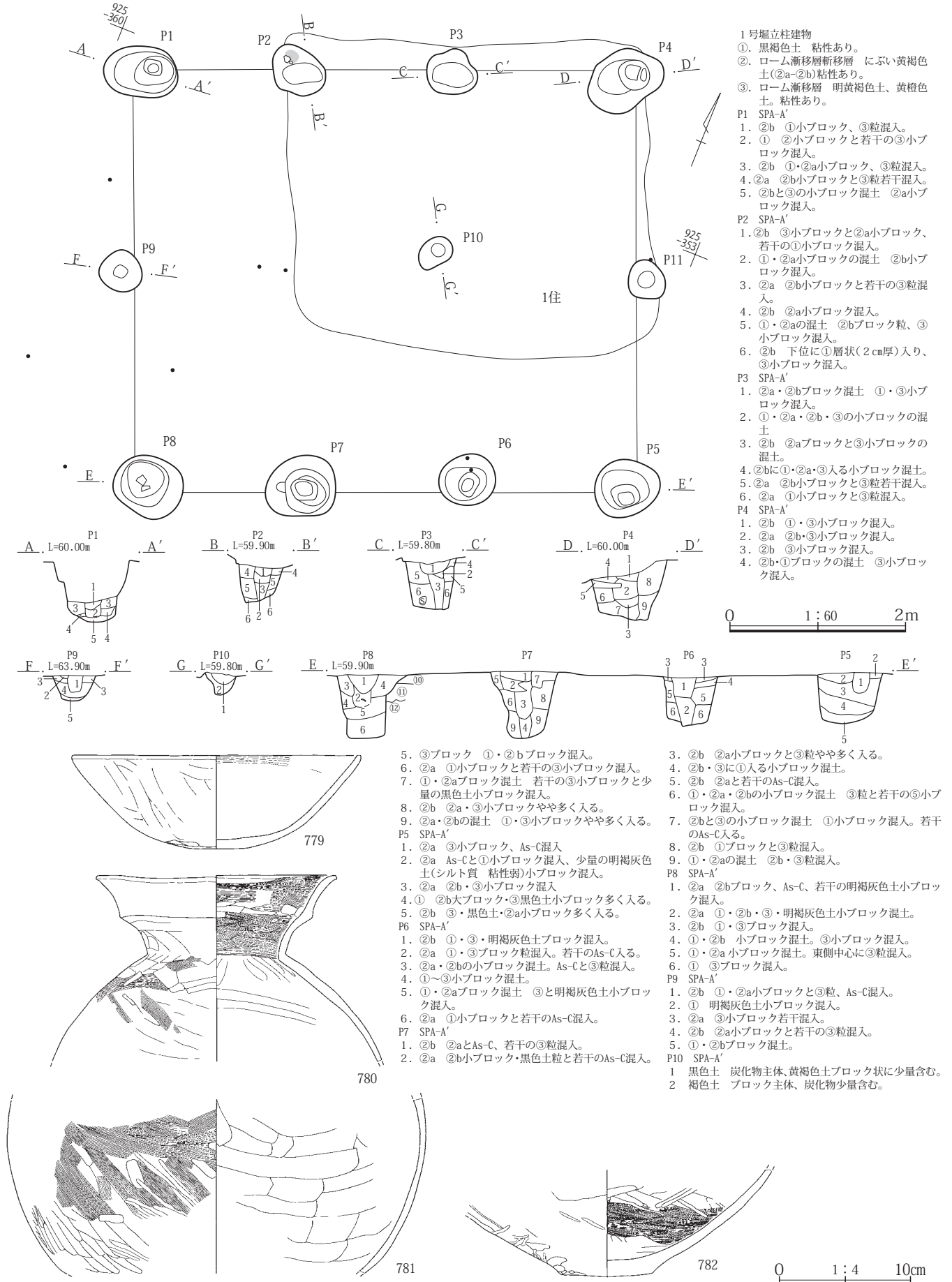
覆土 本遺構は黒褐色土やローム漸移層土を中心とする土壌で埋没する。また南部では焼土が確認され、床上2~4cm付近に部分的な面的分布も確認された。

規模 長軸：330cm 短軸：239cm 深さ：20cm

ピット 径：44×42cm 深さ：8cm

構造 本遺構のプランは、西辺に比べ東辺が北方に出る、

1号掘立柱建物



第104図 1区1号掘立柱建物と出土遺物

隅丸平行四辺形を呈する。主軸方向はN-17°-Wを向く。

〔床〕本遺構は、掘り方を持たないいわゆる直床の構造である。掘削形態は箱形を呈し、底面は平底である。

〔ピット〕北部東寄りにピットが確認された。これが、柱穴として使用されたものか否かは確認できなかった。

遺物 遺物は南東側に集中して出土したが、集中域はN-27°-W方向に列を成す東西2列に分かれるが、東西列は7~20cm程離れる。東列の分布は、幅40~80cmの範囲で、北端はピット手前まで濃い、北寄りでは希薄になる。また西列の分布は、東辺は東列に併行に在る、幅70cm、長さ90cmを測る三角形の範囲には濃く、以北は北壁から1m手前の範囲で、粗く分布する。

出土した遺物には土師器高杯(743~751)・埴(752~754)・小型壺(755)・壺(756~759)・小型甕(760~765)・甕(766・767)・小型台付甕(768・769・775)・台付甕(770~774・776~778)が出土した。760は山陰系土器である。

所見 本遺構の時期は、出土遺物から推して、古墳時代前期古段階の所産と判断される。

小型の遺構ながら、遺物が集中して出土したこと、西列の遺物分布域以西の範囲で火が焚かれた痕跡が見られたことから推して、本遺構は祭祀遺構の可能性を持つものと判断される。

13. 1号焼土(第105図)

概要 本遺構は、竪穴住居群の遺構確認途中に、焼土を確認し、その存在を把握した。当初は住居の可能性も考慮したが、プランが限定的で、掘削深度も浅いため、焼土遺構として調査した。

位置 本遺構は、1-1区2期調査区域南部東端近く、略北北西-南南東方向に住居群が連なるライン上に所在する。本遺構の北には3号住居、南には4号住居が近接して在る。本遺構は、A-7グリッドに位置する。

重複 本遺構は単独で在り、他の遺構との重複は見られなかった。

〔覆土〕明確な覆土は確認されなかった。

規模 長軸：259cm 短軸：(196)cm 深さ：-cm

ピット 径：40×36cm 深さ：5cm

構造 本遺構のプランは、西辺に比べ東辺が北方に出る、隅丸平行四辺形状を呈する。主軸方向はN-31°-Wを向

く。

〔床〕本遺構は、小さな分布ではあるが、底面上8cm程に焼土や灰の平面的分布が見られることから推して、掘り方を有するものと判断される。掘り方は確認面下、深さ9cm程まで掘削し、これを、黒褐色土やローム漸移層土で埋め戻して床を造る。

〔ピット〕北東隅部にピットが掘削されている。なお、これが柱穴として使用されたものか否かは確認できなかった。

遺物 少量の土師器片が出土した。

所見 本遺構では火が焚かれていること、1号竪穴とその規模、平面形態が近似し、北壁近く遺構東半にピットが掘削されるという共通点があるため、本遺構も祭祀遺構の可能性を持つものと判断される。

本遺構の時期は、特定できなかった。

14. 5面の土坑・ピット群(第107・108図)

概要 5面では土坑6基、ピット17基を確認した。

位置 5面の土坑・ピットは、58~65・67号ピットが8号住居の西、3面の5溝以北の区域に分布し、214~218号土坑と10~13号ピットが1号掘立柱建物の西に集中して位置する他は、1号掘立柱建物の北西に219号土坑、南に66号ピット、3号住居の周提帯に伴うと見られる1号溝状遺構群の北西に68~70号ピットの分布が見られた。これらの所在グリッドは表12・13に記した。

重複 10号ピットと11号ピットが重複するが11号ピットの方が新しい。他の土坑・ピットは何れの遺構も単独で在り、重複は見られなかった。

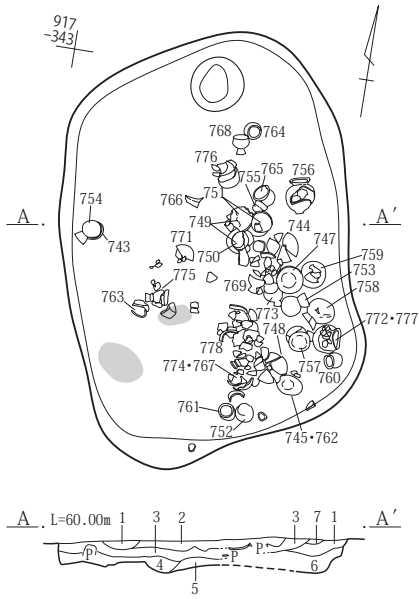
覆土 黒褐色土を中心とする土壌で埋没するが、何れも土層観察に於いて柱痕等を確認することはできなかった。

規模 表12・13参照

構造 平面形態 215・216号土坑、11・13・58・59・61・68号ピットは楕円形、217号土坑は空豆形、10号ピットは隅丸三角形、214号土坑、60・65・66号ピットは隅丸方形、63・64・69号ピットは隅丸長方形、218号土坑、70号ピットは隅丸短冊形、67号ピットは隅丸五角形、219号土坑は不定隅丸五角形、62号ピットは不整形を呈する。

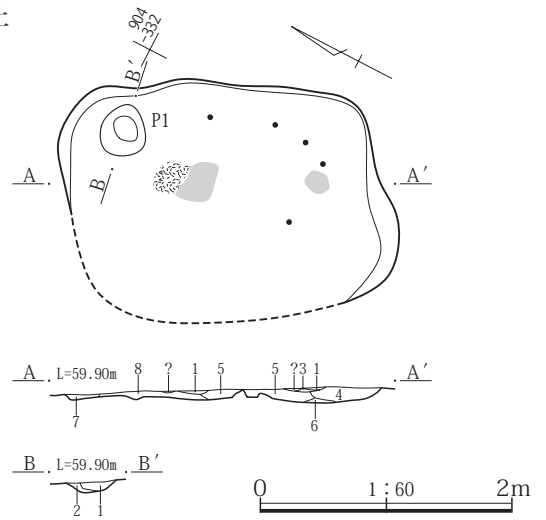
また掘削形態は、215号土坑は挿鉢形、216号土坑は尖

1号竪穴住居



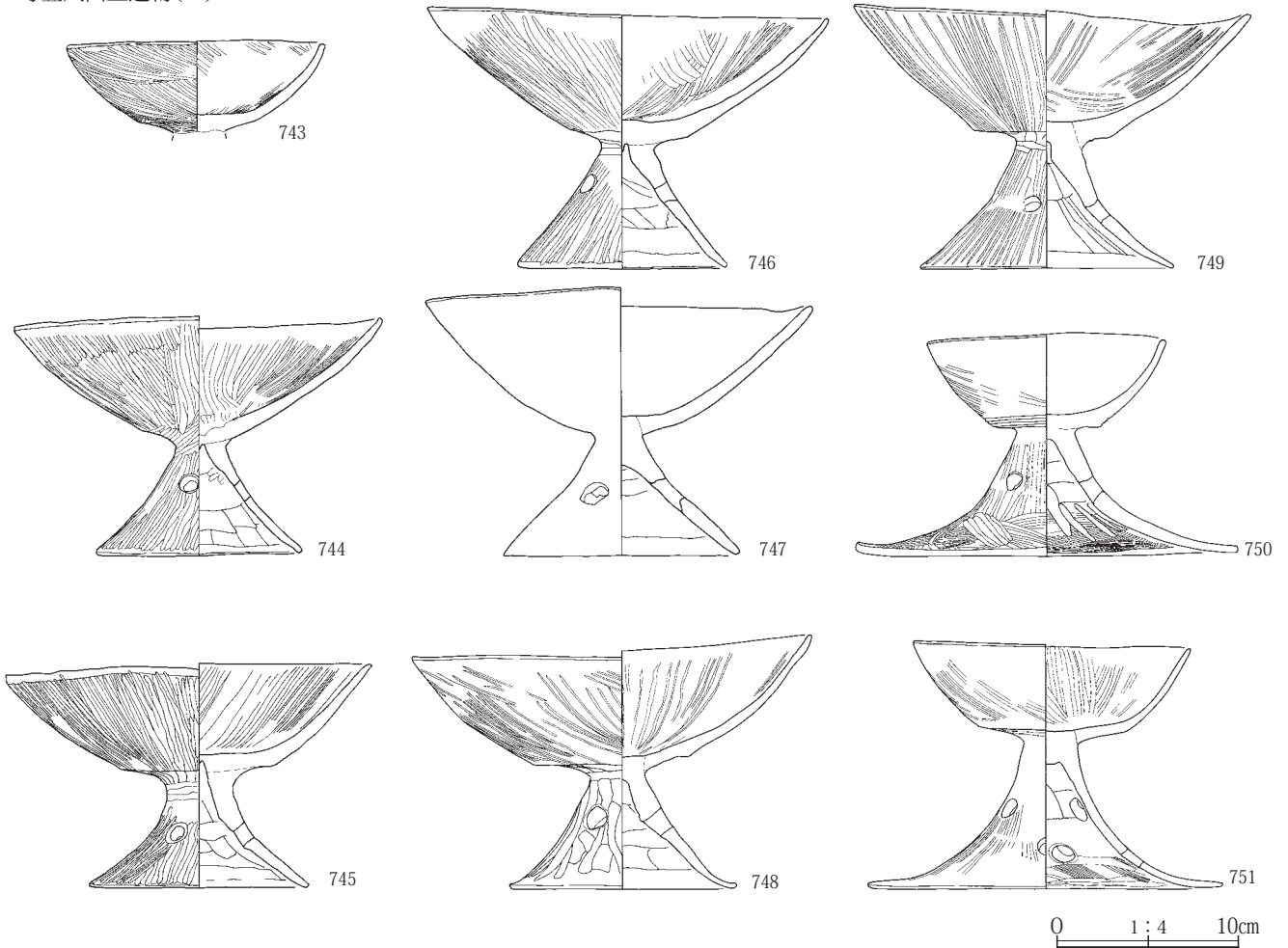
- 1号竪穴 SPA-A'
- ①. 黒褐色土 粘性あり。
 - ②. ローム漸移層層 にぶい黄褐色土(②a-②b) 粘性あり。
 - ③. ローム漸移層 明黄褐色土、黄褐色土。粘性あり。
1. ②a
 2. ②b ①・③大ブロック、②a小ブロック混入。
 3. ②a ①小ブロックに、にぶい黄褐色土・③小ブロック混入。
 4. ①・②aの混土。
 5. ②a ②bブロックと③小ブロック混入。焼土面は本層中にあり。
 6. ②a ①小ブロック混入。
 7. ②a・②b

1号焼土



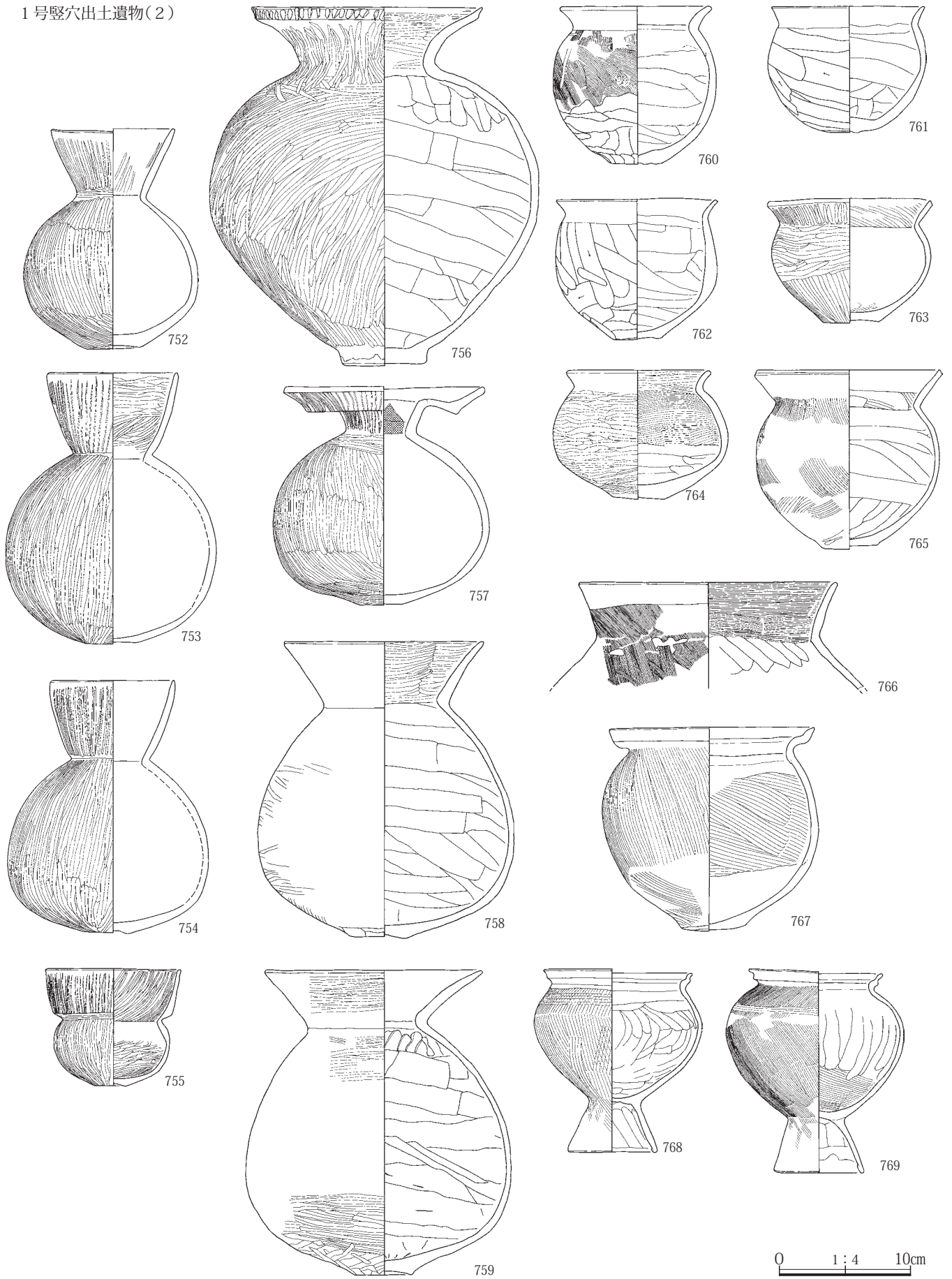
- 1号焼土 SPA-A'
1. 橙色焼土。
 2. ②bに②b・③小ブロック混入。
 3. 黒色土 ②a・bの小ブロック混土。
 4. ②a・②bの小ブロック混土。①小ブロック、③粒と若干の黒色土粒混入。
 5. ①~②b小ブロックの混土。③粒混入。
 6. ②b ①・③粒混入。
 7. ②b
 8. ②a 北寄りに②b・③小ブロック混入。
- SPB-B'
1. ②a ①・黒色土小ブロックと③粒若干混入。
 2. ②b ①・②a・黒色土・③粒含む。

1号竪穴出土遺物(1)



第105図 1区1号竪穴と出土遺物(1)及び1号焼土

1号竪穴出土遺物(2)



第106図 1区1号竪穴出土遺物(2)

1号竖穴出土遺物(3)

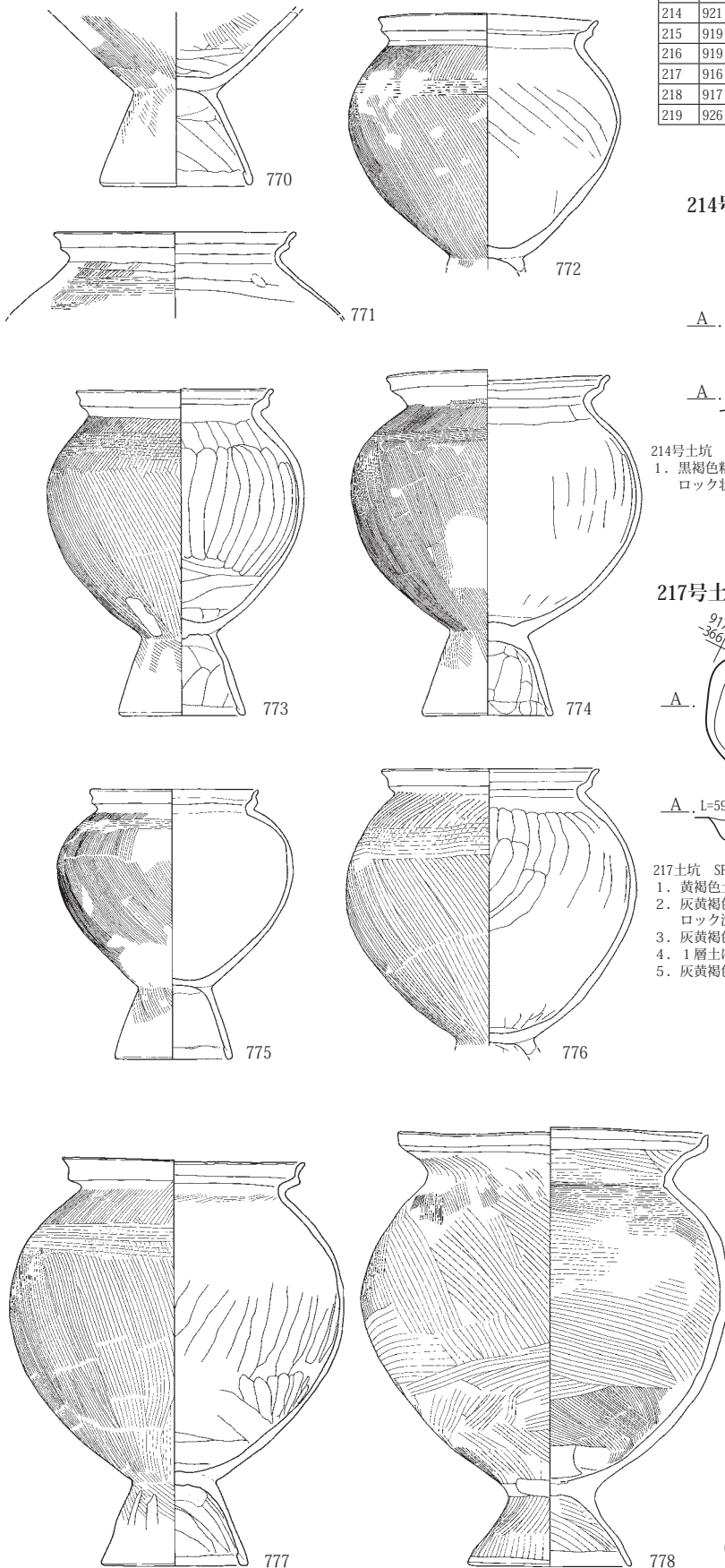
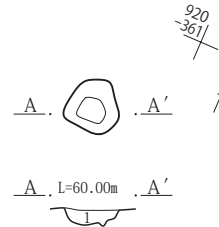


表13 5面土坑一覧

番号	所在グリッド	形状	寸法内[]は推定値、()は残存値	
			長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
214	921・-361	楕円形	43 × 42 × 12	
215	919・-363 ~ 364	楕円形	62 × 43 × 68	
216	919・-362 ~ 363	円形	68 × 62 × 22	
217	916 ~ 917・-364 ~ 365	楕円形	146 × 113 × 23	
218	917 ~ 918・-366 ~ 367	楕円形	103 × 30 × 13	N-18°-W
219	926 ~ 928・-364 ~ 367	不整形	205 × 161 × 94	

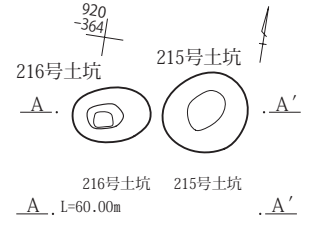
214号土坑



214号土坑 SPA-A'

1. 黒褐色粘質土 明黄褐色粘質土をブロック状に少量含む。

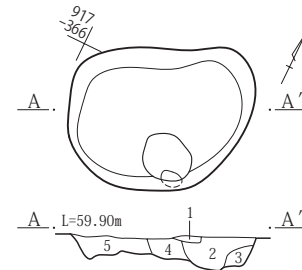
215、216号土坑



215・216号土坑 SPA-A'

1. 黒褐色粘質土 明黄褐色粘質土をブロック状に少量含む。

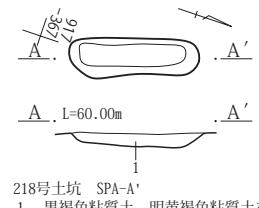
217号土坑



217号土坑 SPA-A'

1. 黄褐色土 粘性あり。I層土小ブロック混入。
2. 灰黄褐色土 粘性あり。I層土ブロックと若干の2層土小ブロック混入。
3. 灰黄褐色土とI層土のブロック混入。
4. I層土にI・II層土ブロック多く入る。
5. 灰黄褐色土 粘性あり。I・II層土小ブロック混入。

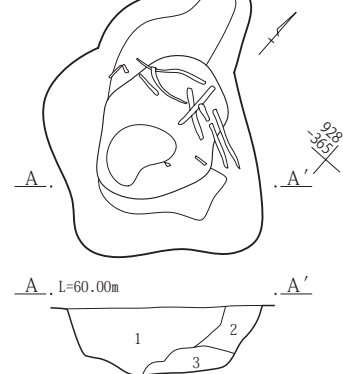
218号土坑



218号土坑 SPA-A'

1. 黒褐色粘質土 明黄褐色粘質土をブロック状に少量含む。

219号土坑



219号土坑 SPA-A'

1. 黒褐色粘質土 明黄褐色粘質土をブロック状に少量含む。
2. にぶい黄褐色土 明黄褐色土をブロック状に少量含む。
3. 明黄褐色粘質土主体。黒褐色粘質土を含む。

0 1:80 2m

0 1:4 10cm

第107図 1区1号竖穴出土遺物(3)及び5面の土坑群

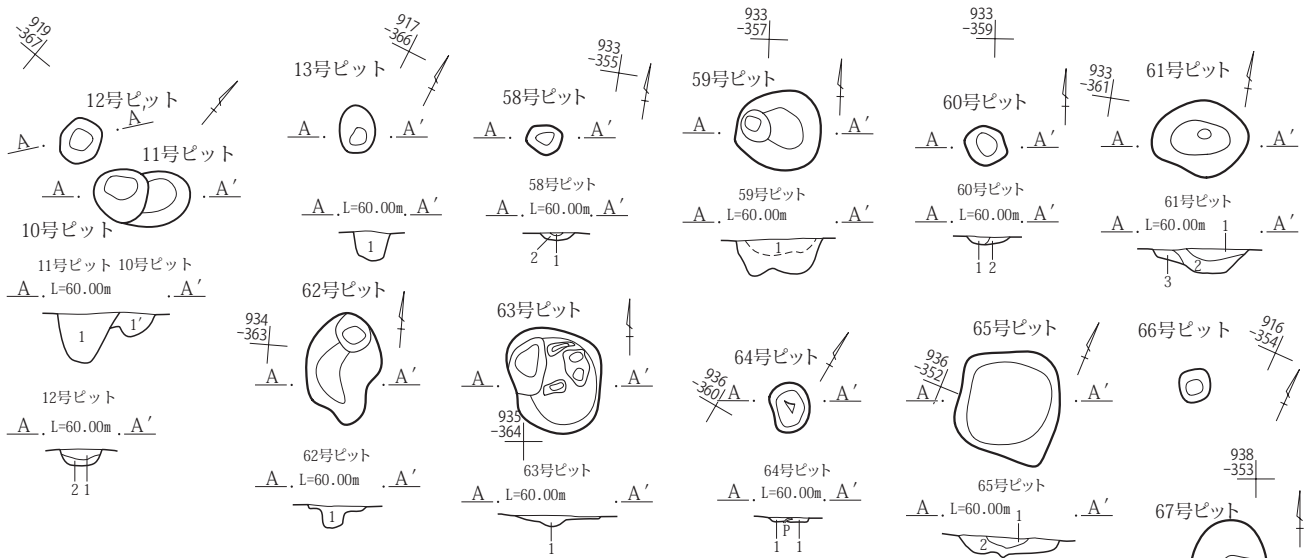


表14 5面ピット一覧

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(cm)	備考
10	918-364	円形	43 × 42 × 48	
11	918-364	楕円形	(40) × 43 × 18	
12	918-365	円形	36 × 31 × 12	
13	916-365 ~ 366	楕円形	37 × 28 × 25	
58	932-355	楕円形	28 × 23 × 8	
59	931 ~ 932-356 ~ 357	円形	67 × 64 × 35	
60	931 ~ 932-358 ~ 359	円形	31 × 31 × 7	
61	931 ~ 932-359 ~ 360	楕円形	78 × 61 × 32	
62	933 ~ 934-362 ~ 363	不整形	82 × 61 × 20	
63	935-363 ~ 364	楕円形	91 × 80 × 5	
64	936-359	楕円形	40 × 30 × 3	
65	935 ~ 936-361	隅丸方形	84 × 81 × 17	
66	915-354	円形	26 × 24 × 15	
67	937-352 ~ 353	楕円形	60 × 54 × 13	
68	911 ~ 912-342 ~ 343	楕円形	28 × 27 × 10	
69	911 ~ 912-341 ~ 342	隅丸長方形	42 × 31 × 8	
70	911 ~ 912-341 ~ 342	隅丸短冊形	34 × 19 × 19	

10～13号ピット

- 1 黒褐色粘質土 明黄褐色粘質土ブロック少量含む。
 - 1' 1層に同じ。11号ピットの境でブロック切れる。
 - 2 にぶい黄褐色粘質土 明黄褐色土ブロック少量含む。
- 58号ピット
- 1 にぶい黄褐色粘質土・明黄褐色土・黒色土粒混入。
 - 2 にぶい黄褐色土 にぶい黄褐色土小ブロック混入。

59号ピット SPA-A'

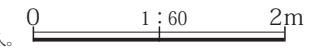
- 1 にぶい黄褐色土 にぶい黄褐色粘質土・黒色土小ブロック混入。

60号ピット SPA-A'

- 1 にぶい黄褐色土 明黄褐色土、黄橙色土ブロック・にぶい黄褐色粘質土粒混入。
- 2 にぶい黄褐色土 若干の明黄褐色土、黄橙色土粒混入。

61号ピット SPA-A'

- 1 黒褐色土 にぶい黄褐色土小ブロックと若干の明黄褐色土、黄橙色土粒混入。
- 2 にぶい黄褐色土 にぶい黄褐色土ブロックと少量の明黄褐色土、黄橙色土小ブロック混入。



第108図 1区5面のピット群

形、217～219号土坑は箱形、10～13・68・70号ピットは柱穴状を呈する。また底面の形態は214・215・219号土坑、10～12・58～59・63・66・69・70号ピットは丸底、216・217・218号土坑、62・64・65・68号ピットは平底、60号ピットは尖底を呈する。

遺物 219号土坑からは、その底面より50～80cmの位置で、7本の木片の出土が見られた。なお、この木片には加工痕跡は確認されなかった。

所見 本土坑・ピット群の土坑、ピットは、北西部の58・60・64号ピットと1号掘立柱西部の214号土坑、12・13号ピットは、共に鉤形の配列を見せるが、建物や柵列を想定するには至らなかった。また何れに対しても掘削意図等を想定することはできなかった。

(3) 5面の遺構外の出土遺物(第109図、PL.36)

5面の遺構外の出土遺物には高杯(783・784)・器台(785)・脚付鉢(786)・台付甕(787)等の土師器片があった。

第6節 縄文時代・弥生時代の遺物

(第109図、PL.36)

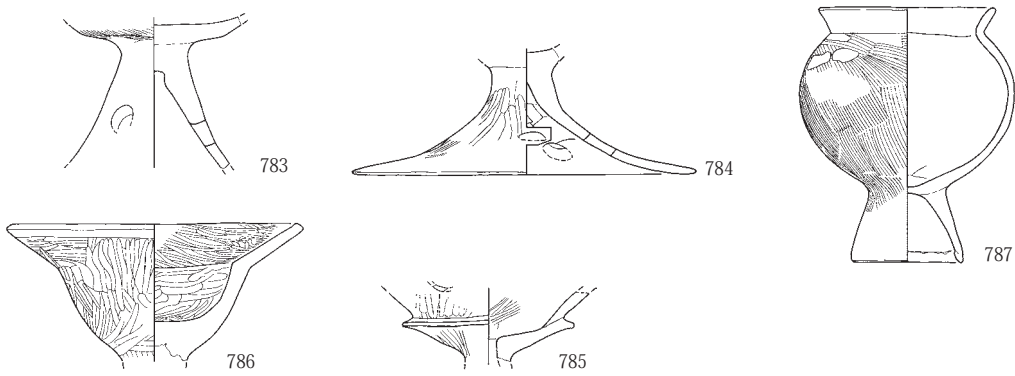
概要 本遺跡に於いては、5面を中心に若干の縄文・弥生時代の出土遺物を得た。

出土遺物 縄文土器片には前期、有尾式(788～791)、諸磯b式(792～798)、諸磯c式(799)、後期、堀之内1式(800～804)、堀之内2式(805～810)、加曾利b式(811)のものがあ、弥生土器には中期(812・813)のものがあ。

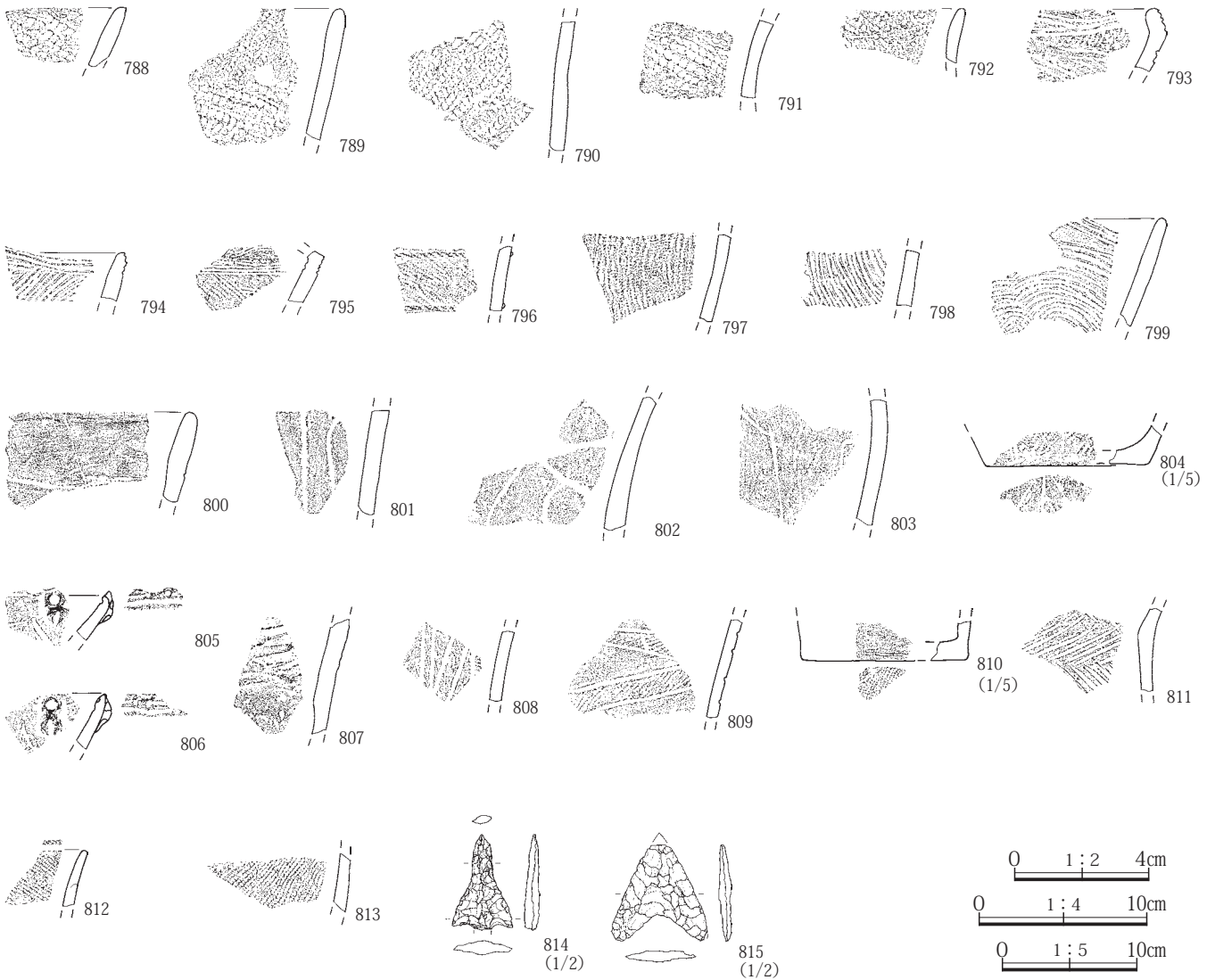
また、石器には石鏃(814・815)、加工痕のある石器、石核や石核と見られるもの、打製石斧(824～827)があ。

第3章 発見された遺構と遺物

5面遺構外の出土遺物



縄文時代・弥生時代の遺物



第109図 1区5面の遺構外の出土遺物と縄文・弥生時代の出土遺物

【参考文献】

- 石守 晃1986「掘立柱建物の重量に関する一試験」『研究紀要』3、pp57-62、財団法人群馬埋蔵文化財調査事業団
 石守 晃2001「復元住居を用いた焼失実験再び」『研究紀要』19、pp95-104、財団法人群馬埋蔵文化財調査事業団
 大塚昌彦「IV古墳時代」『中筋遺跡 第2次発掘調査概要報告書』、渋川市教育委員会

第4章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の委託

(1) 概要

本遺跡では、自然遺物等が出土したが、このうち、人骨、獣歯骨、木材、炭化材、種子、葉、灰については、遺構の理解に与すると判断し、餞別の上、科学分析を委託した。

(2) 人骨の鑑定

本遺跡では中世館址の128・221号土坑から、人骨が出土した。両土坑共に、北頭位西向横臥屈葬の所謂中世土墳墓ではあったが、被葬者に対する情報が無かったため、鑑定を生物考古学研究所、榑崎修一郎氏に委託した。

鑑定要件は以下の通りである。

- ① 人骨であるか否かの判定
- ② 年齢
- ③ 性別
- ④ 埋葬状態
- ⑤ その他(古病理、特記事項)

鑑定書は本章第2節に掲載したため、詳細は記さないが、128号土坑出土人骨は成人男子、221号土坑出土人骨は少年男子のものと鑑定された。

(3) 獣歯骨の鑑定

本遺跡では中世館址の2号土壘、堀である10号溝、95・221号土坑、As-B混土、As-B畠下から11個体の獣歯骨が出土した。そこで、これらの獣種等を確認するため、鑑定を宮崎貞雄氏に委託した。

鑑定要件は以下の通りである。

- ① 獣歯骨であるか否かの判定
- ② 歯骨の部位
- ③ 年齢
- ④ その他(古病理、特記事項)

鑑定書は本章第3節に掲載したため、詳細は省略するが、種はウマのみが特定され、8頭以上の遺存が確認された。これにより、館内で馬が飼育されていたことが確認された。

(4) 木材及び炭化材の樹種同定

本遺跡では各遺構から炭化材、或いは木材が出土したが、当事業団で同定できなかったもののなかで、遺構の解釈に与すると考えられた、近世屋敷の1号建物、1号土壘、1号井戸、および竹藪、中世の33号ピット、及び古墳時代前期の6号住居から出土した炭化材または木材の同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。

同定報告は本章第4節に掲載したため、詳細は省略するが、土壘に竹が植生され、井戸底部には近世の湿地に遺構で多用される松材が使用され、古墳時代の6号住居稲朶が出土していることなどが確認された。

(5) 灰の植物珪酸体同定

古墳時代前期の3・6号住居からは、厚みを持った灰が出土した。これは竪穴住居の屋根の葺き材が燃えたものであり、その種を特定できることにより、葺き材の種類が特定できるものと予測して、同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。

その同定結果は本章第5節に掲載したため、詳細は省略するが、予想に反して、灰は稲の朶殻を主体とするものであることが確認された。

(6) 葉と種実の同定

天明3年の火山災害の復旧溝群と、天明3(1783)年の災害被災畑、古墳時代前期の6号住居から種子と見られるものが確認され、天明3年の泥流中から葉が多数出土した。上記種子と、葉のうち、As-A軽石面に近接するか、根や茎がAs-A軽石下に延びていると判断されたものについて同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。

その同定結果は本章第6節に掲載したため、詳細は省略するが、同定できなかった資料もあったが、近世土壘に渋柿ではあるが柿が植生されていたことなどが確認された。

以下、これらの化学分析報告を、次節に掲載する。

第2節 下之宮高俣遺跡 出土 中世人骨

(1)はじめに

下之宮高俣遺跡は、群馬県佐波郡玉村町下之宮に所在する。(公財)群馬県埋蔵文化調査事業団による発掘調査が、2010(平成22)年10月から2012(平成24)年4月まで断続的に行われた。

本遺跡の1区128号土坑及び221号土坑から、中世人骨が出土したので以下に報告する。

出土人骨は、水洗後観察・計測写真撮影を行った。なお、歯の計測方法は藤田恒太郎に従い(藤田1949)、歯冠計測値の比較は現代人権田和良(権田1959)を、中近世人骨は松村博文(Matsumura1995)を引用した。

(2)1区128号土坑出土人骨

①埋葬形態

本土坑は、長軸(南北)約220cm・短軸(東西)約104cm・深さ約28cmの規模である。人骨は、土坑中央部から出土している。出土状況の写真で推定すると、頭位は北で顔面部を西に向け、右側を下にした屈葬で埋葬されたと推定される。

②副葬品

副葬品は、銭貨の永楽通寶(507)・皇宋通寶(508)などが3点検出されている。なお、出土歯は銭貨の緑青により青く染色されている。

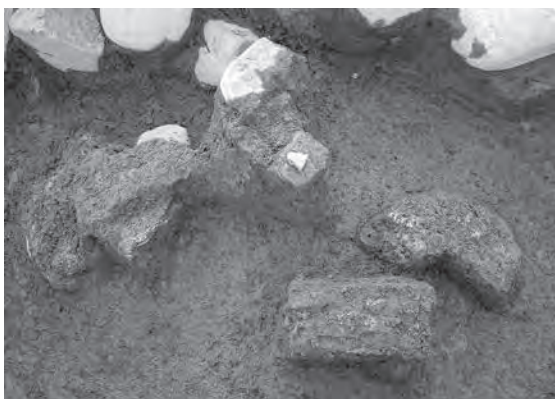


写真2 1区128号土坑出土人骨(頭蓋骨)

③被葬者の個体数

出土遊離歯には、重複部位が認められないため被葬者の個体数は1個体であると推定される。

④被葬者の性別

出土歯の歯冠計測値は大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

⑤被葬者の死亡年齢



写真3 1区128号土坑全景

出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質一部が露出する程度のマルティン2度と象牙質が全面に露出する程度のマルティン3度の状態中間である。被葬者の死亡年齢は約40歳代であると推定される。但し、本個体は右側だけで咬む傾向があった可能性も高いため幅をもたせて約30歳

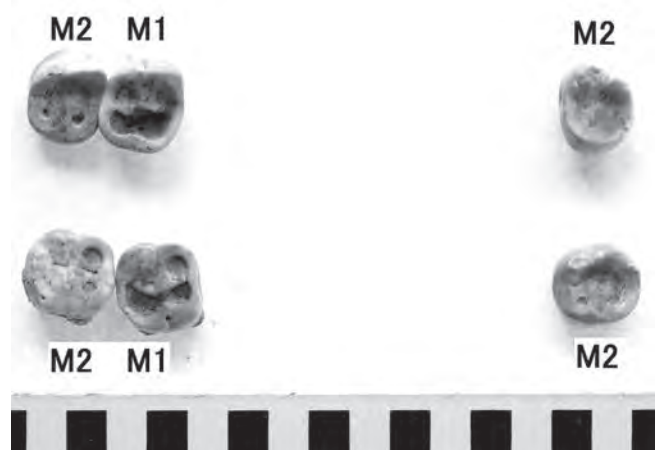


写真4 1区128号土坑出土人骨(出土歯咬合面観)

代～40歳代と推定される。

⑥古病理

・歯石

下顎切歯に、一部歯石が認められた。

・齲蝕(虫歯)

出土歯には、俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は、認められなかった。

・咬合

本個体の上下大白歯の咬耗度を観察すると、上下共に右側の咬耗度が高く、左側が低い。したがって、本個体は何らかの理由で左右均等ではなく、右側で主に咬む傾向があったと推定される。

(3) 1区221号土坑出土人骨

①埋葬形態

本土坑は、長軸(南北)約90cm・短軸(東西)約66cm・深さ約40cmの規模の隅丸長方形土坑である。人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北にして顔面部を西に向け、右側を下した横臥(側臥)屈葬で埋葬されたと推定される。

被葬者は、約10歳の男性(児)と推定されている。現代日本人の1975年の統計では、10歳の男性(子)の身長は約135.4cm・女性(子)の身長は約136.6cmである(鈴木1996)

②副葬品

副葬品は、検出されていない。



写真5 1区221号土坑出土人骨出土状況

③被葬者の個体数

出土遊離歯には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

④被葬者の性別

出土遊離歯の内、永久冠の計測値は、比較的大きいため、被葬者の性別は男性(児)であると推定される。

⑤被葬者の死亡年齢

出土遊離歯は、永久歯と乳歯の混合列である。歯の咬耗度・歯冠形成・歯根の形成過程から、被葬者死亡年齢は約10歳であると推定される。

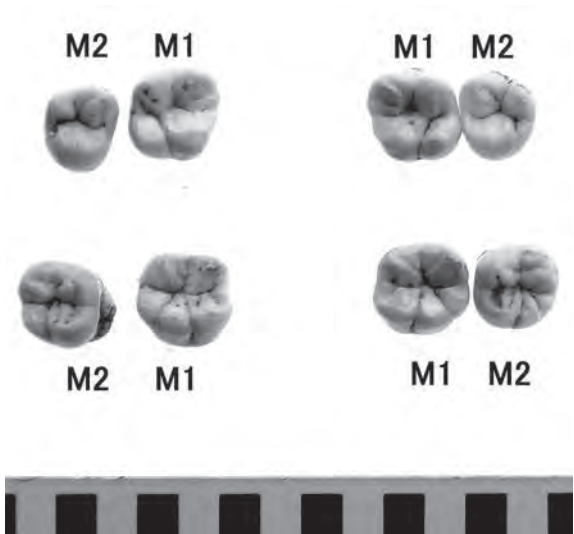


写真6 1区221号土坑出土永久歯咬合面観
[M]：第1大白歯 M2：第2大白歯

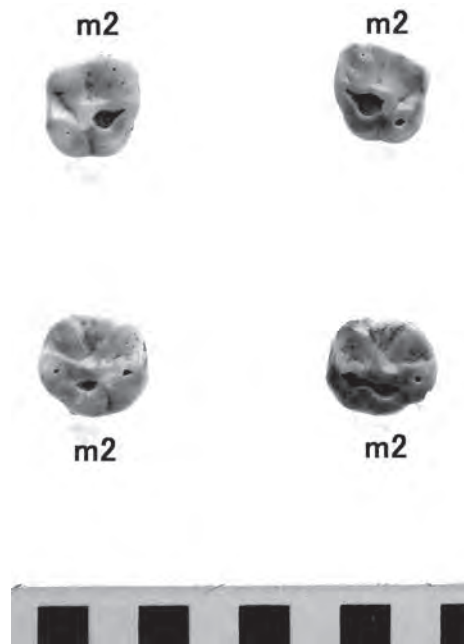
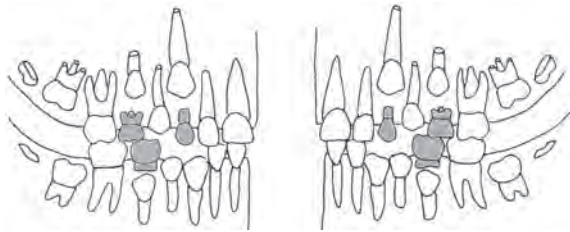


写真7 1区221号土坑出土人骨出土状況



第110図 221号土坑出土人骨の歯の萌出状態推定
[網掛け部が乳歯。それ以外は、永久歯]

⑥古病理

・歯石

出土歯には、歯石は認められなかった。

・齲蝕(虫歯)

出土歯には、俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は認められなかった。

・エナメル質減形成

出土歯の内、上顎切歯には明瞭なエナメル質減形成が認められた。このエナメル質減形成は、発育期において飢餓・タンパク質やビタミン欠乏等の栄養障害・胃腸疾患・発疹性高熱疾患・肺炎・結核・内分泌異常等で起きると推定されている(山本1988)。また、出現状態は線状タイプ・小窩タイプ、溝状タイプの3つに分類されるが、本

事例は線状タイプである。日本の中世人骨ではエナメル質減形成が認められた個体の線状タイプは山本美代子による室町時代人には100%(5例中5例)が、古賀英也による吉母浜遺跡出土中世人には81.8%(22例中18例)が認められている(山本1988・古賀2003)。

(4)まとめ

下之宮高俣遺跡の1区128号土坑と1区221号土坑から、中世人骨が出土した。1区128号土坑出土人骨は、約30歳代～40歳代男性と推定され、古病理として歯の咬耗度から右側で咬む傾向が認められた。1区221号土坑出土人骨は、約10歳の男性(男児)と推定され、古病理として出土歯にエナメル質減形成が認められた。

引用文献

藤田恒太郎 1949 歯の計測規準について、「人類学雑誌」61(1): 27-32
 藤田恒太郎 1949 『歯の解剖学』、金原出版
 権田和良 1959 歯の大きさ性差について、「人類学雑誌」67(3): 151-163
 古賀英也 2003 西南日本古代人のストレスマーカー、「人類学雑誌」111(1): 51-67
 MATSUMURA, Hirofumi 1995 A microevolutional History of the Japanese people as viewed from dental morphology, National Science Museum Monographs, No.9, National Science Museum
 鈴木隆雄 1996 『日本人のからだ』、朝倉書店
 山本美代子 1988 日本古人骨永久歯のエナメル質減形成、「人類学雑誌」96(4): 417-433

表15 下之宮高俣遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表

歯種	計測項目	下之宮高俣遺跡				中世時代人*		江戸時代人*		現代人**		
		128号土坑		221号土坑		Matsumura, 1995		Matsumura, 1995		権田, 1959		
		右	左	右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀	
上顎	I 1	MD	8.0	8.1	8.6	8.7	8.48	8.29	8.78	8.38	8.67	8.55
		BL	破損	破損	7.0	7.0	7.29	7.00	7.52	7.06	7.35	7.28
	I 2	MD	7.1	—	6.7	6.8	6.98	6.85	7.16	6.97	7.13	7.05
		BL	破損	—	6.1	6.0	6.55	6.26	6.74	6.33	6.62	6.51
	C	MD	7.8	7.7	8.2	7.9	7.96	7.43	8.01	7.60	7.94	7.71
		BL	8.4	8.5	8.1	8.2	8.50	7.94	8.66	8.03	8.52	8.13
	P 1	MD	7.2	7.2	7.4	7.3	7.25	7.02	7.41	7.23	7.38	7.37
		BL	9.5	9.5	9.1	8.9	9.46	9.03	9.67	9.33	9.59	9.43
	P 2	MD	6.8	—	7.0	6.7	6.87	6.69	7.00	6.82	7.02	6.94
		BL	9.5	—	8.9	8.7	9.39	8.88	9.55	9.29	9.41	9.23
	M 1	MD	10.3	—	10.7	10.6	10.45	10.09	10.61	10.18	10.68	10.47
		BL	11.8	—	11.6	11.6	11.81	11.30	11.87	11.39	11.75	11.40
M 2	MD	9.6	9.5	9.2	9.3	9.65	9.42	9.88	9.48	9.91	9.74	
	BL	11.9	11.9	10.8	10.9	11.72	11.19	12.00	11.52	11.85	11.31	
下顎	I 1	MD	5.4	5.4	5.4	5.6	5.42	5.22	5.45	5.32	5.48	5.47
		BL	6.0	6.0	5.5	5.6	5.78	5.61	5.78	5.65	5.88	5.77
	I 2	MD	6.5	6.3	6.0	6.0	6.04	5.78	6.09	5.97	6.20	6.11
		BL	6.7	6.4	5.9	6.0	6.22	5.98	6.29	6.11	6.43	6.30
	C	MD	6.8	6.8	7.2	6.9	6.88	6.55	7.06	6.69	7.07	6.68
		BL	8.0	8.1	7.3	7.1	7.82	7.33	8.04	7.39	8.14	7.50
	P 1	MD	7.1	7.0	7.2	7.0	7.07	6.96	7.32	7.05	7.31	7.19
		BL	8.3	8.0	8.3	8.2	8.10	7.72	8.34	7.89	8.06	7.77
	P 2	MD	7.3	7.4	7.0	6.9	7.12	7.00	7.45	7.12	7.42	7.29
		BL	8.5	8.4	7.7	8.0	8.49	8.06	8.68	8.30	8.53	8.26
	M 1	MD	10.7	—	11.9	11.9	11.56	11.06	11.72	11.14	11.72	11.32
		BL	11.2	—	11.1	11.3	11.00	10.49	11.15	10.62	10.89	10.55
M 2	MD	11.3	11.2	10.6	10.9	11.06	10.65	11.39	10.78	11.30	10.89	
	BL	10.4	10.6	10.5	10.4	10.55	9.97	10.75	10.21	10.53	10.20	

註1. 計測値の単位は、すべて、「mm」である。
 註2. I 1(第1切歯)・I 2(第2切歯)・C(犬歯)・P 1(第1小白歯)・P 2(第2小白歯)・M 1(第1大白歯)・M 2(第2大白歯)
 註3. 計測項目は、MD(歯冠近遠径)・BL(歯冠唇舌径)を意味する。
 註4. 「破損」とは、歯冠が破損しており計測不能であることを示す。
 註5. 「*」は、MATSUMURA (1995)より引用。
 註6. 「**」は、権田(1959)より引用。



写真8 1区221号土坑出土上顎左右切歯のエナメル質減形成

第3節 下之宮高俣遺跡の馬歯

指示のあった事項に就いて鑑定したが、遺存状態が部位骨であったため、鑑定結果は個別に示す。



No. 2 (1-1区221土坑・一括)

左下顎第1又は第2切歯片。歯冠長(左右幅) 13.7mm, 歯冠幅(前後幅) 5.0+mm、歯冠高(長さ) 38.2mmである。



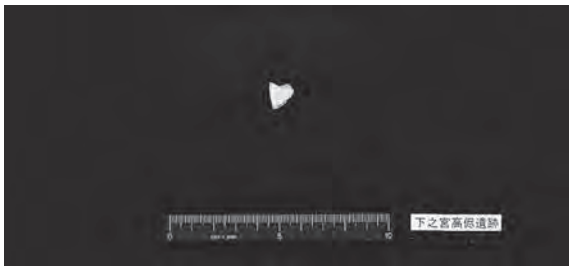
No. 3a (1-1区2号土壘基底No. 2)

10数片に分離した白歯片。最大歯冠高7.5+mm。詳細を知るのは困難である。



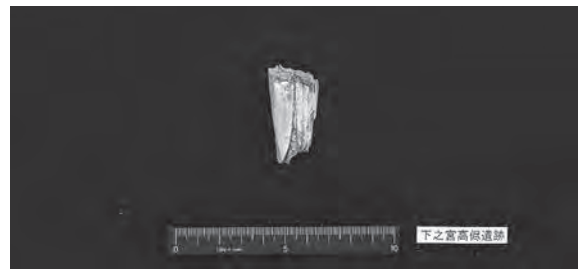
No. 3b (1区1G・2号土壘基底No. 3)

右上顎白歯片。10片ほどに分離している。中附錘幅が5.1mmと大きいことなどから、前白歯と思われる。舌側歯冠高が40.0mm前後であり、壮齡馬と判断される。



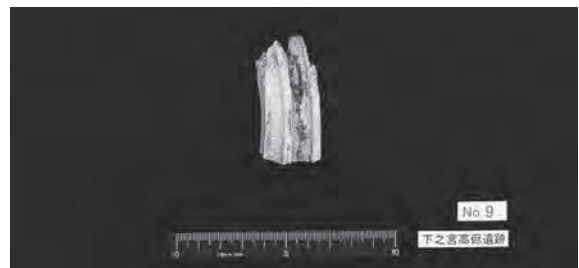
No. 4 (1-1区17土坑)

灰白色をした焼骨片。最大骨片12.5×11.4mm。詳細を知るのは困難である。



No. 7 (1-1区10号溝・4面)表-

左下顎白歯片である。歯冠高42.0mmを計測し、壮齡馬と判断される。



No. 9 (1-1区23号溝)

右上顎第3前白歯又は第4前白歯である。歯冠高49.4mmを計測し、壮齡馬と判断される。



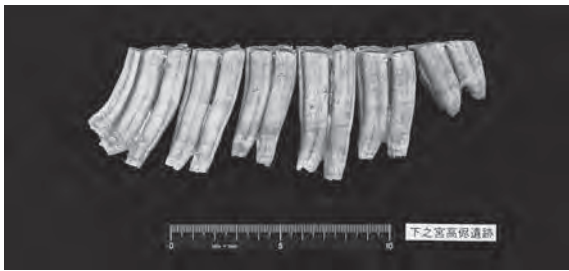
No. 10a (1-1区2号土壘 No. 1)

細かく分離して10数片となった白歯片で、最大歯冠高15.8+mmである。



No. 10b (1-1区2号土壘)

細かく分離して10数片となったウマの下顎歯。最大歯冠高34.8+mmで、壮齡馬と思われるが詳細を知るのは困難である。



No. 12a



No. 12b



No. 12c



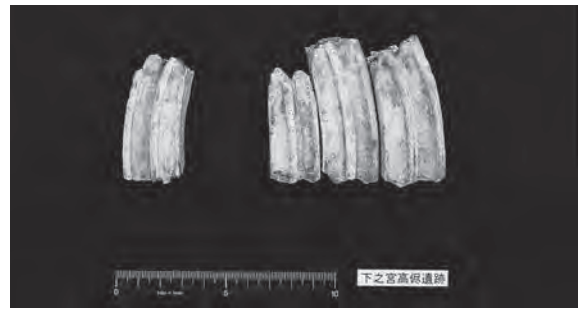
No. 13 (1-1区 41号畑 一括)

細かく分離して10数片となったウマの下顎歯。最大歯冠高54.8+mmで、壮齢馬と思われるが詳細を知るのは困難である。

表16 切歯計測値

遺物番号	No.12		
	歯冠長	歯冠幅	歯冠高
右第1切歯	13.7	9.5	42.7+
右第2切歯	13.5	7.7+	44.7
右第3切歯	12.7	8.8	35.3+

単位：mm



No. 14 (1区As-B混土上)

右上顎第3前臼歯・第4前臼歯・第1後臼歯と左上顎第2後臼歯が出土している。歯冠高からは5~8才程の馬齢が推定される。

本遺跡からは、少なくとも8頭分の馬歯が出土している。

年齢の推定可能なのは7個体であり、幼齢馬の可能性もある1個体を除けば、他はみな壮齢馬であり、老齢馬はいない。

なお本稿では、歯冠高による年齢推定は西中川・松元(1991)によった。

主な参考文献

- 西中川駿・松元光春(1991)遺跡出土骨同定のための基礎研究一特在種および現代種の骨、歯の計測値の比較「古代遺跡から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書、164-188。
- 野村晋一(1977)「概説馬学」西川書店。

表17 上顎臼歯計測値

遺物番号	No. 9		No.14		
	第3 or 第4前臼歯	第3前臼歯	第4前臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯
	右	右	右	右	左
歯冠近遠心径	24.4	28.0	25.0	23.1	24.7+
歯冠頬舌径	22.0+	27.5	24.8	23.6	
原錘幅		11.0	12.4	11.8	
歯冠高頬側	49.4	53.8	58.5	44.9	50.0
歯冠高舌側		52.3	56.7	42.2	
咬合面の傾斜	95°	92°	80°	83°	
中附錘幅	4.3	5.6	4.8	3.7	4.0

単位：mm

表18 下顎臼歯計測値

遺物番号	No.12						No.7
	No.27						No.10
取上げ番号	第2前臼歯	第3前臼歯	第4前臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯	第3後臼歯	臼歯
	右	右	右	右	右	右	左
歯冠近遠心径	30.1	26.3	25.6	23.8	24.0	29.2	22.0+
歯冠頬舌径	13.4	15.0	15.1	13.7	13.5	12.2	10.7+
歯冠高頬側	21.0	40.8	47.1	38.1	50.2	48.6	
歯冠高舌側	19.6	39.1	47.0	36.1	47.7	49.4	42.0
下後錘谷長	5.4	9.9	8.7	6.7	7.4	6.7	11.6
下内錘谷長	14.3	11.5	10.8	7.2	8.8	9.2	
doubleknot長	15.0	16.8	15.4	14.9	13.5	13.2	
咬合面の傾斜	105°	90°	85°	75°	80°	67°	80°
下内錘幅	5.6	5.7	5.1	4.2	4.1	3.9	

単位：mm

第4節 下之宮高俣遺跡出土木材 および炭化材の樹種同定

1. はじめに

佐波郡玉村町に所在する下之宮高俣遺跡から出土した木材5点と炭化材4点について樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、天明3年(1783年)の泥流で被覆された1号建物から出土した炭化材が1点(No. 1)と、竹林?から採取された炭化材が1点(No. 4)、1号井戸の基部に使用されていた木材が4点(No. 5~8)、1号土塁から採取された木材が1点(No. 9)、室町時代(15世紀頃)の33号ピットから採取された炭化材が1点(No. 2)、古墳時代前期の6号住居の床面から採取された炭化物が1点(No. 3)の、計9点である。

木材試料は、剃刀を用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)の切片を採取し、ガムクロールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察および同定し、写真撮影を行った。

炭化材試料は、まず肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面(横断面・接線断面・放射断面)を割り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。その後、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製VE-9800)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。プレパラートはパレオ・ラボに保管、残りの試料は群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3. 結果

樹種同定の結果、針葉樹はマツ属複維管束亜属とスギ、分類群不明の針葉樹樹皮の3分類群、広葉樹はサンショウ属?のみ1分類群、その他にタケ亜科が確認された。また、古墳時代前期の6号住居から採取された炭化物は木材ではなく、イネ籾と単子葉類の稈などの炭化物で構成されていた。結果の一覧を表19に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1)マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxyylon* マツ科 図版1 1a-1c(No. 7)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、韌性は太である。

(2)スギ *Cryptomeria japonica (L.f.) D. Don* スギ科 図版1 2a-2c(No. 1)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

(3)針葉樹 *Coniferous wood* 図版1 3a-3c(No.

表19 下之宮高俣遺跡出土木材および炭化材の樹種同定結果

No.	種類	区	遺構	層位	時期	樹種	形状	サイズ	年輪数
1	炭	1-1区	1号建物	-	天明3年(1783年)泥流被災	スギ	破片(節)	< 3cm	不明
2	炭	1-1区	33号ピット	-	室町時代(15世紀頃)	サンショウ属?	破片(節)	< 1cm	1
3	炭	1-1区	6号住居	5面(床面)	古墳時代前期	イネ籾殻・単子葉植物(稈)	破片	-	-
4	炭	1-1区	竹林?	As-A泥流中	天明3年(1783年)泥流被災	針葉樹(マツ科以外の樹皮)	破片	< 3cm	-
5	木	1-1区	1号井戸	井戸基部	天明3年(1783年)泥流被災	マツ属複維管束亜属	丸木	-	-
6	木	1-1区	1号井戸	井戸基部	天明3年(1783年)泥流被災	マツ属複維管束亜属	丸木	-	-
7	木	1-1区	1号井戸	井戸基部	天明3年(1783年)泥流被災	マツ属複維管束亜属	丸木	-	-
8	木	1-1区	1号井戸	井戸基部	天明3年(1783年)泥流被災	マツ属複維管束亜属	丸木	-	-
9	木	1-1区	1号土塁	-	天明3年(1783年)泥流被災	タケ亜科	不明	-	-

4)

樹皮：師細胞と柔細胞、単列の放射組織で構成される針葉樹の樹皮である。コルク組織がみられないため、マツ科以外の針葉樹である。

(4)サンショウ属? *Zanthoxylum*? ミカン科 図版1 4 a-4 c (No. 2)

大型の道管がまばらに分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は1~4列幅で、同性である。試料は節の部分で、組織が歪んでおり、なおかつ1年輪未満で晩材部が確認できなかったため、サンショウ属?とした。

サンショウ属には、温帯から暖帯に分布するサンショウとイヌザンショウ、暖帯から亜熱帯に分布するカラスザンショウがある。サンショウの材は強靱で折れにくい、カラスザンショウとイヌザンショウの材はやや軽軟である。

(5)タケ亜科 *Subfam. Bambusoideae* イネ科 図版1 5 a (No. 9)

柔細胞と維管束で構成される単子葉類で、維管束は柔細胞中に散在する。維管束は一对の道管と、それと直行する原生木部間隙と師部で形成され、その周囲を厚膜組織からなる維管束鞘が取り囲む。

タケ・ササの仲間、日本では12属が含まれるが、稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。

(6)イネ *Oryza sativa* L. 炭化籾殻 図版1 6 b. イネ籾(No. 3)

本来は楕円形であるが、形状は破片である。表面に、縦方向に規則的に並ぶ顆粒状突起がみられる。

(7)単子葉類 *Monocotyledons* 図版1 6 c (No. 3)

状態が悪く横断面が観察できなかったが、維管束と柔組織からなる単子葉類の稈である。なお、稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。

4. 考察

近世の1号建物から出土した炭化材は、スギであった。スギは軽軟で加工しやすい材である。近世の群馬県内でのスギの利用は、井戸側や桶、曲物容器、建築部材、器具の柄などにみられる(伊東・山田編, 2012)。今回の試料は3cm角以下の破片となっており、元の形状や用途は不明であった。

近世の1号井戸では、基部に使用されていた木材はすべてマツ属複維管束亜属であった。木取りはいずれも丸木である。マツ属複維管束亜属は、アカマツ、クロマツともに水中における心材の保存性が高いため(平井, 1996)、近世以降の土木材や施設材に多用され、群馬県内では甘楽町の名勝楽山園でも近世の井戸材にマツ属複維管束亜属が利用されている(伊東・山田編, 2012)。今回の1号井戸でも、水場での利用に耐えられるマツ属複維管束亜属が選択的に利用されたと推測される。

近世の竹林?においてAs-A泥流中から出土した炭化材は、針葉樹(マツ科以外)の樹皮であった。製品に利用されていた可能性もあるが、竹林?から出土しているため、自然木から剥がれた樹皮と考えられる。

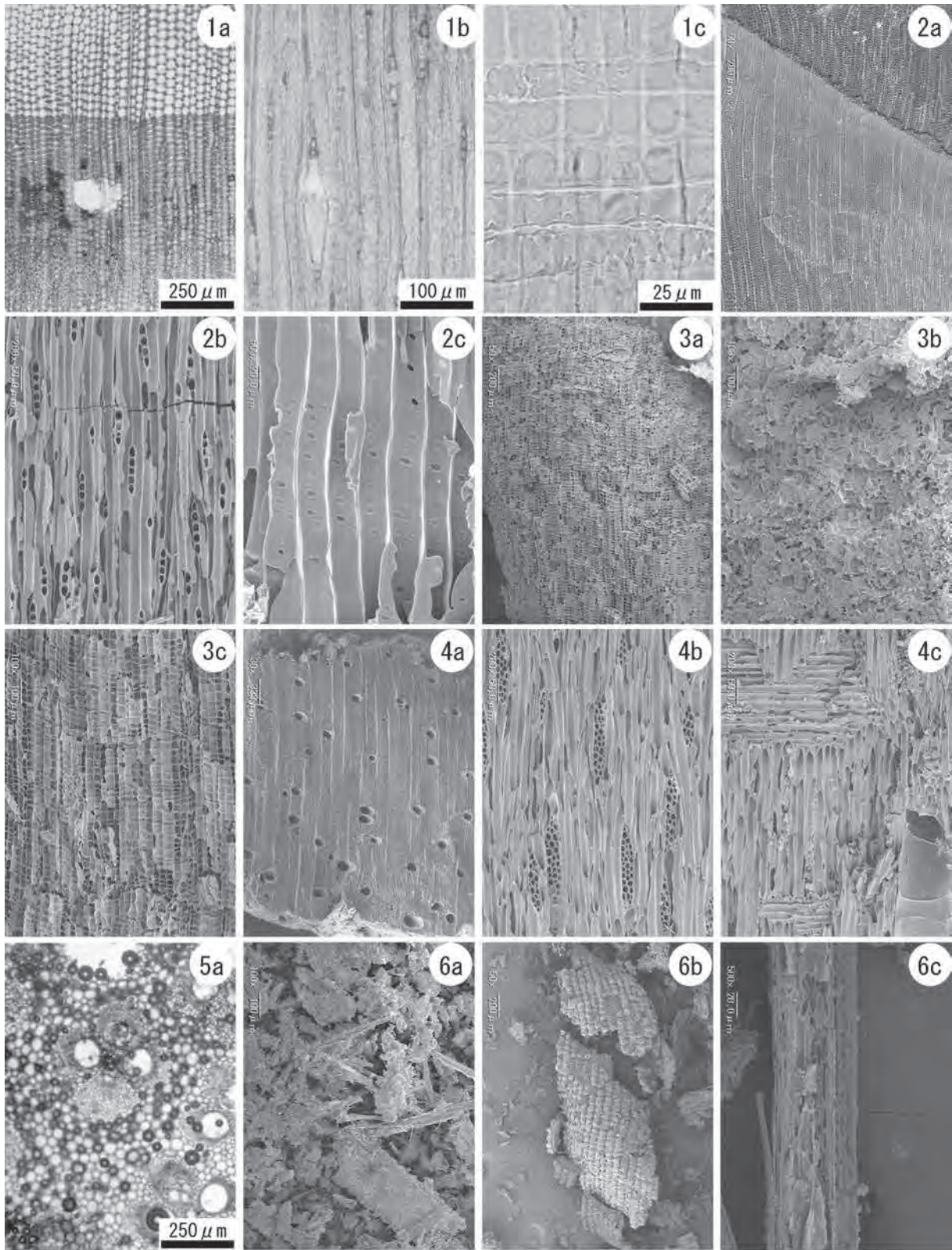
室町時代の33号ピットから出土した炭化材は、サンショウ属?であった。遺跡出土のサンショウ属は建築部材や土木材、用途不明の加工材、燃料材などとしての利用が確認されており、群馬県内では中村遺跡で古墳時代の柱材と杭、新保遺跡で弥生時代~古墳時代の自然木、五目牛南組遺跡で戦国~明治時代の加工木が確認されている(伊東・山田編, 2012)。今回の試料は1cm角以下の破片となっており、元の形状や用途は不明である。

古墳時代前期の6号住居の床面から出土した炭化物は、木材は含まれておらず、イネ籾と単子葉植物の稈が確認できた。同じ地点で採取された灰について植物珪酸体分析が行われており、イネ籾が多く確認されている(植物珪酸体分析の項参照)。したがって、元の素材は灰と同じで、本試料は灰にはならず黒色に炭化した部分であったと思われる。

1号土塁から出土した木材は、タケ亜科であった。土塁からの出土であり、土木材の可能性はある。タケ亜科は、軽量で割裂性が高く、弾力性と屈曲性が大きい(島地ほか, 2002)、土木材としても有用である。

引用文献

平井信二(1996)木の百科. 394p, 朝倉書店.
伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学—出土製品用材データベース—. 449p, 海青社.
島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司(2002)木材の構造. 276p, 文永堂出版.



図版1 下之宮高俣遺跡出土木材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真
 1a-1c. マツ属複雑管束亜属 (No. 7)、2a-2c. スギ (No. 1)、3a-3c. 針葉樹 (樹皮: No. 4)、4a-4c.
 サンショウ属? (No. 2)、5a. タケ亜科 (No. 9)、6a. No. 3の産状、6b. イネ籾殻 (No. 3)、6c. 単
 子葉植物 (稈: No. 3)
 1-5 = a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第5節 下之宮高俣遺跡出土の灰の植物珪酸体

1. はじめに

下之宮高俣遺跡で検出された竪穴住居から、灰が採取された。ここでは、灰の母植物を検討する目的で植物珪酸体分析を行った。分析No. 3 (試料No.15)については、樹種同定も行われている(別項参照)。以下に、分析結果と考察を記す。

2. 試料と方法

試料は、1-1区の3号竪穴住居の覆土から採取された分析No. 1 (試料No.13)と、分析No. 2 (試料No.14)、6号竪穴住居の床面から採取された分析No. 3 (試料No.15)の、計3点の灰試料である。なお、2軒の竪穴住居の時期は、いずれも古墳時代前期である。

試料を実体顕微鏡下で観察し、灰をピンセットで取り上げ、グリセリンを用いてプレパラートを各5枚作製後、検鏡して、植物珪酸体を手掛かりに母植物の検討を試みた。

3. 観察の結果

観察の結果を表20に示す。

分析No. 1 (試料No.13: 3号竪穴住居、覆土、P 2-6 / 6)

最も多く観察されたのはイネの籾殻に形成される珪酸体であった。次いで、棒状型の不明植物珪酸体が多く観察された。このほかに、ウシクサ族の機動細胞珪酸体とイネ型の短細胞珪酸体列が、検鏡用プレパラート5枚中に1~2点とごくわずかに検出された。なお、棒状型の不明植物珪酸体については、すべてのイネ科植物に類似した形態の植物珪酸体が存在するため(近藤, 2010)、由来した分類群の同定は難しい。

分析No. 2 (試料No.14: 3号竪穴住居、覆土、P 2-4

/ 6)

最も多く観察されたのはイネの籾殻に形成される珪酸体であった。次いで、棒状型の不明植物珪酸体が多く観察された。このほかに、ウシクサ族の機動細胞珪酸体とイネ型の短細胞珪酸体列が、検鏡したプレパラート5枚中に、1~2点とごくわずかに検出された。

分析No. 3 (試料No.15: 6号竪穴住居、床面)

最も多く観察されたのは棒状型の不明植物珪酸体であった。次いで、イネの籾殻に形成される珪酸体が多く観察された。

4. 考察

古墳時代前期の2軒の竪穴住居から検出された灰の母植物について検討した結果、3号竪穴住居の覆土から採取された灰(分析No. 1とNo. 2)の母植物は、主にイネの籾殻であった。また、ススキやチガヤなどのウシクサ族の葉由来の機動細胞珪酸体も、ごくわずかに含まれていた。3号竪穴住居の覆土からイネの籾殻を主体とした灰が検出された背景としては、何らかの理由で住居内に持ち込まれた籾殻が燃やされたか燃えた可能性、あるいは外で燃やされた籾殻の灰が住居内に持ち込まれた可能性などが挙げられる。

6号竪穴住居の床面から採取された灰(分析No. 3)の母植物は、イネの籾殻であった。一方、由来不明の棒状型の植物珪酸体が多量に含まれており、イネの籾殻以外の別の部位、あるいはイネ以外の植物の灰が混在しているとみられる。6号竪穴住居の床面からイネの籾殻の灰が検出された背景としては、何らかの理由で住居内に持ち込まれた籾殻が燃やされたか燃えた可能性や、除湿など何らかの目的で籾殻などの灰が床に敷かれた可能性などが挙げられる。

引用文献

近藤鍊三(2010)プラント・オパール図譜, 167p,北海道大学出版会.

表20 下之宮高俣遺跡出土の灰の植物珪酸体(◎非常に多い、○多い、△含まれる)

分析No.	試料No.	種類	遺構	面	採取位置			遺構の時期	機動細胞珪酸体	短細胞珪酸体列	イネ籾殻の珪酸体	不明植物珪酸体
					ウシクサ族	イネ型	棒状型					
1	13	灰	3号竪穴住居	5面	覆土	P 2	6/6	古墳時代前期	△	△	◎	○
2	14					4/6	△		△	◎	○	
3	15				6号竪穴住居	床面	-	-	○	◎		

第6節 下之宮高俣遺跡出土の大型植物遺体

1. はじめに

佐波郡玉村町に所在する下之宮高俣遺跡の古墳時代の住居跡と天明泥流下の遺構から検出された種実と葉の同定を行い、当時の植生について検討した。なお、葉の同定にあたっては、千葉大学大学院園芸学研究所百原新氏にご教示いただいた。

2. 試料と方法

種実試料は、調査区1-1の4号畑1面と復旧坑の覆土、6号住居の5面から採取された。葉試料は、1号溝、1号溝南、土手1、北部畑のAs-A泥流中から採取された。遺構の時期は、4号畑と復旧坑、1号溝、1号溝南、土手1、北部畑が近世中期で、天明3年(1783)の浅間山の噴火に伴う泥流で埋没した。6号住居は古墳時代前期の遺構である。

大型植物遺体の抽出・同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。同定された試料は、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3. 結果

種実試料を同定した結果、草本植物のカナムグラ核の1分類群が得られた(表21)。

以下、種実試料の産出傾向を遺構別に記載する。

4号畑1面：カナムグラが少量得られた。

復旧坑：カナムグラがわずかに得られた。

6号住居5面：同定可能な種実は得られなかった。

葉試料を同定した結果、木本植物のマメガキ-リュウキュウマメガキ1分類群、草本植物のイタドリ1分類群の計2分類群が得られた。また、残存状態が悪いため、科以上の詳細な同定ができなかったものを不明A~Cに分類した(表22)。

以下、葉試料の産出傾向を遺構別に記載する。

1号溝：マメガキ-リュウキュウマメガキと不明Aが各1点得られた。

1号溝南：不明Bが1点得られた。

土手1：マメガキ-リュウキュウマメガキが1点得られた。

北部畑：イタドリと不明Cが各1点得られた。

以下、大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1)マメガキ-リュウキュウマメガキ *Diospyros lotus* L. - *Diospyros japonica* Siebold et Zucc. 葉 カキノキ科

表21 下之宮高俣遺跡から出土した種実遺体(括弧内は破片数)

分類群	No.	1-1区		
		10	11	12
カナムグラ	核	26 (24)	4 (8)	
	種実なし			

表22 下之宮高俣遺跡から出土した葉遺体(括弧内は破片数)

分類群	No.	1-1区					
		16	20	17	18	19	21
マメガキ-リュウキュウマメガキ	葉		1		1		
	イタドリ						1
不明A	葉	1					
不明B	葉			1			
不明C	葉						

第4章 自然科学分析

縁は部分的にしか残存していないが全縁で、全体形は卵形か。最大幅はほぼ中央にある。基部も葉先も尖る傾向が強いが残存していない。主脈は厚く太い。二次脈は基部側で互生だが、葉先にむかってやや対生になる。残存長35.4mm、残存幅26.6mm (No.18)と、残存長39.9mm、残存幅31.1mm (No.20)。

(2) カナムグラ *Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.
核 アサ科

褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は円形。一端に黄白色で心形の着点がある。壁は薄く、やや硬い。長さ4.6mm、幅4.6mm、厚さ3.2mm。

(3) イタドリ *Fallopia japonica* (Houtt.) Ronse Decr.
var. *japonica* 葉 タデ科

葉の残存状態は非常に悪い。主脈は厚く、非常に長い。二次脈は葉の縁に沿って走る。残存長37.2mm、残存幅34.9mm。

(4) 不明 A Unknown A

主脈と二次脈が観察できるが、科以上の同定に必要な識別点は残存していなかった。残存長42.3mm、残存幅17.0mm。

(5) 不明 B Unknown B

主脈と二次脈が観察できるが、科以上の同定に必要な識別点は残存していなかった。残存長41.2mm、残存幅17.2mm。

(6) 不明 C Unknown C

主脈と二次脈が観察できるが、科以上の同定に必要な識別点は残存していなかった。残存長52.7mm、残存幅15.2mm。

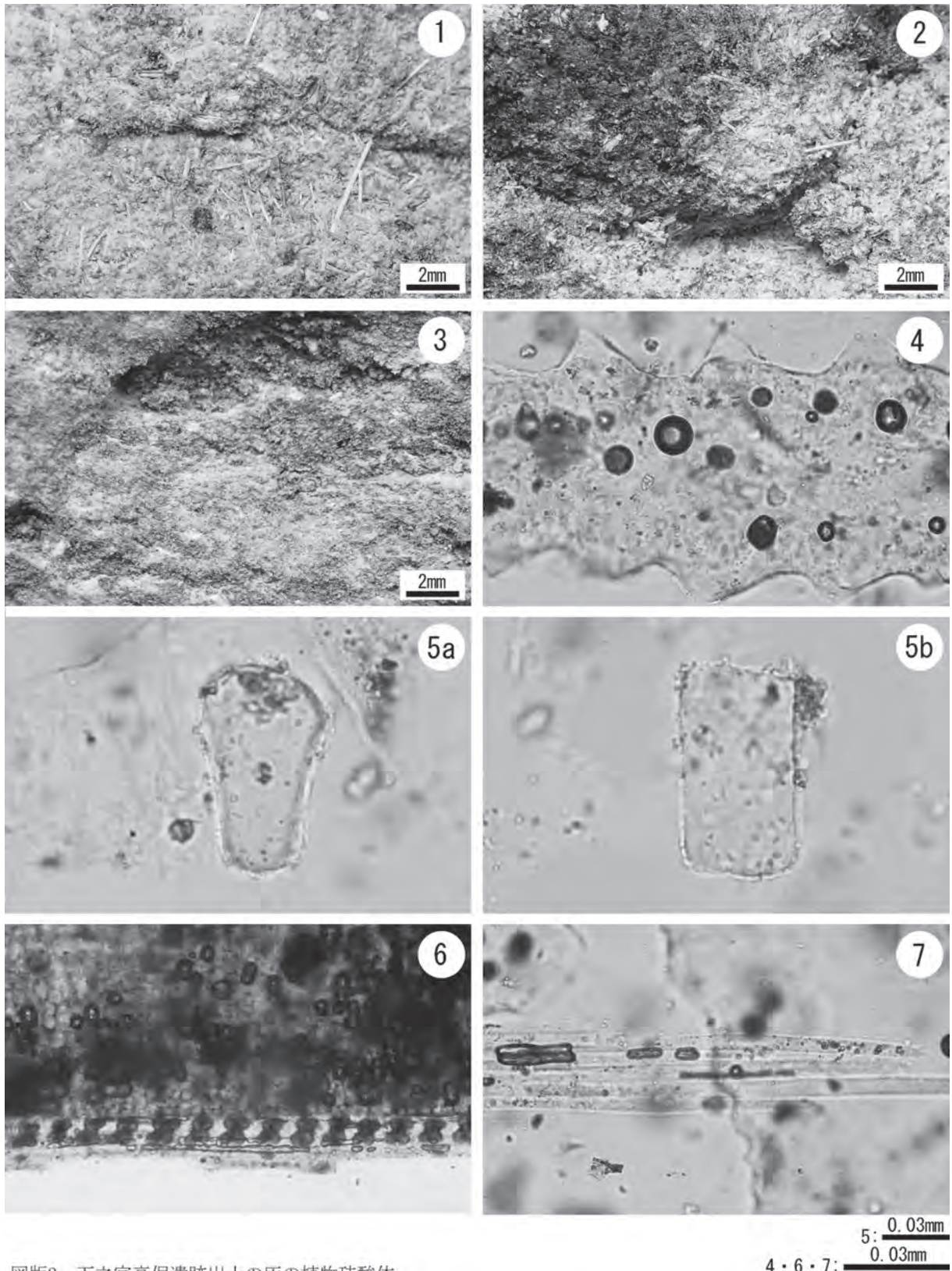
4. 考察

天明泥流下の遺構から検出された種実を同定した結果、4号畑と復旧坑からつる植物のカナムグラが得られた。カナムグラは道端や荒地などに生育する草本植物である。通常、畑などを構成する土壌は陸成土壌のため、生の大型植物遺体は残存しないが、泥流で埋没し、より低湿地側に位置している場合は、生の植物遺体が良好に残存する場合がある(例えば、東宮遺跡(佐々木・バンドリ, 2012)など)。今回は現地でも取り上げられた試料であるため、なかでも比較的大型の種実が取り上げられたと考えられる。

1号溝と土手1から産出した葉はマメガキもしくはリュウキュウマメガキであった。マメガキは中国原産の栽培植物で、低地～山地でやや稀に野生化している。リュウキュウマメガキは日本では関東地方以西に分布し、山地の日当たりのよい谷間や斜面に生育する落葉高木である。果実は渋柿で食べられないが、熟して黒くなった果実は渋が抜けて食べることもできる。柿渋を採って塗ると紙や布が強化される。防水・防腐作用もあり、渋団扇や番傘などに利用される。マメガキやリュウキュウマメガキは、溝の脇や土手の上など乾いた場所に生育していたと考えられる。北部畑から産出したイタドリは、日当たりの良い路傍から荒地までさまざまな場所に生育でき、やや湿ったところを好む。また、攪乱を受けた場所に生育するパイオニア植物でもある。畑の脇などに生育していたと考えられる。

引用文献

佐々木由香・バンドリ スダルシャン(2012)東宮遺跡から出土した大型植物遺体. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「東宮遺跡(2)-遺物編-」: 437-461, 巻頭図版, 群馬県埋蔵文化財調査事業団.

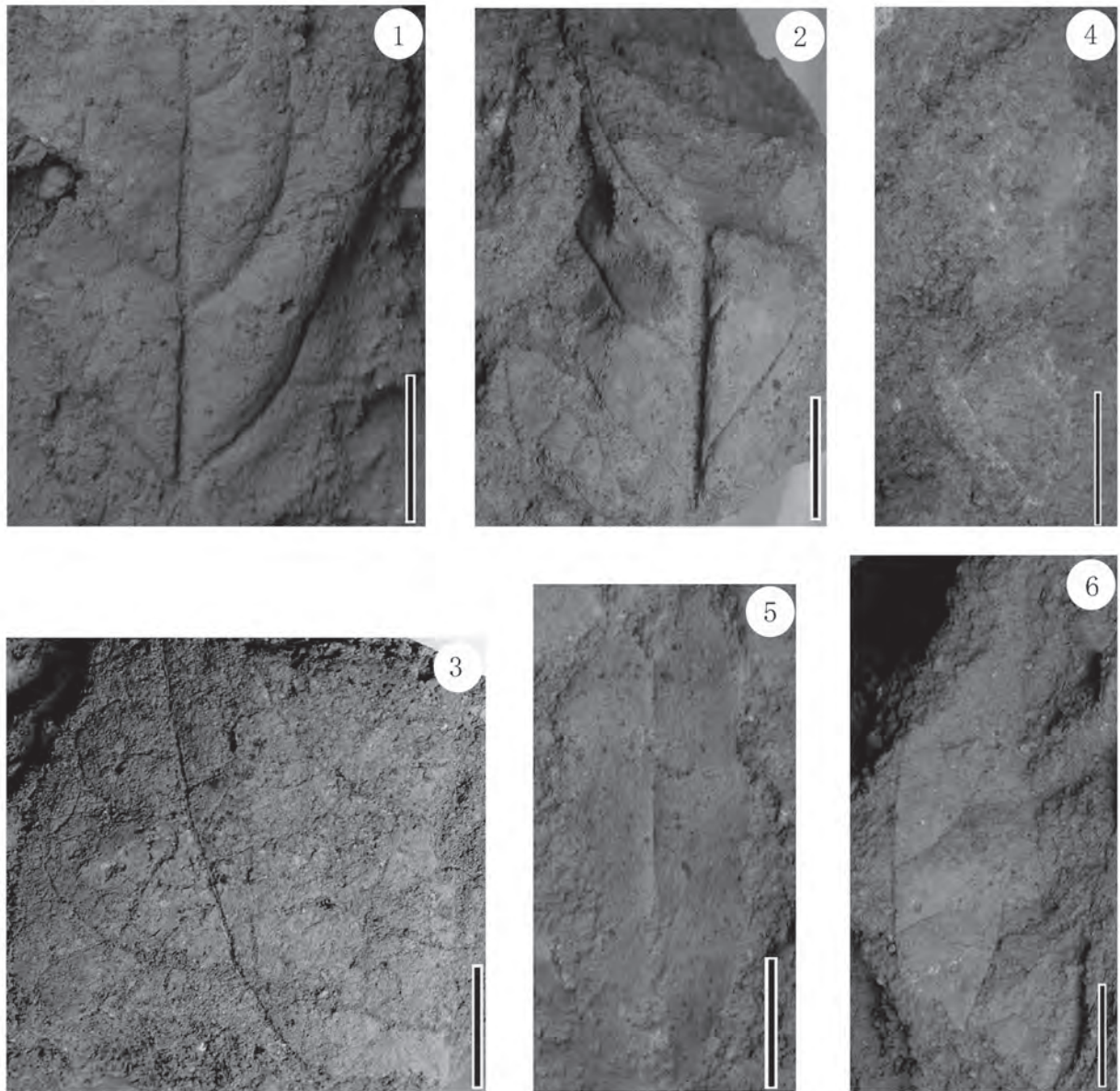


図版2 下之宮高俣遺跡出土の灰の植物珪酸体

1. 試料拡大写真(分析No.1)、2. 試料拡大写真(分析No.2)、3. 試料拡大写真(分析No.3)、4. イネ籾殻の珪酸体(分析No.1)、5. ウシクサ族の機動細胞珪酸体(分析No.2)、6. イネ型短細胞珪酸体列(分析No.1)、7. 棒状型不明植物珪酸体(分析No.3)

a: 断面、b: 側面

4・6・7: 0.03mm
5: 0.03mm



スケール 1-6:10mm, 7:1mm

図版3 下之宮高俣遺跡から出土した大型植物遺体

1. マメガキリーリュウキュウマメガキ葉(土手1、No. 18)、2. マメガキリーリュウキュウマメガキ葉(1号溝、No. 20)、
3. イタドリ葉(北部畑、As-A泥流中、No. 21)、4. 不明A葉(1号溝、No. 16)、5. 不明B葉(1号溝南、No. 17)、
6. 不明C葉(北部畑、As-A泥流中、No. 19)、7. カナムグラ核(4号畑、1面、No. 10)

第5章 総括

第1節 概要

(1) 1面の概要

以上のように、本遺跡では5面8期の遺構を確認し、出土遺物を得た。確認遺構は5面合せて、屋敷、館各1か所、竪穴住居9軒、掘立柱建物1棟、礎石建物2棟、建物跡1軒、竪穴遺構3基、土塁2条、溝44条、道路6条、橋脚、土橋、門各1か所、井戸3基、復旧溝群15面、復旧畑22面、畑83面、竹藪1か所、集石遺構3か所、焼土遺構1基であった。しかし、細砂質土の厚い堆積や、出水による安全確保の観点から、5面を調査できたのは東端の1区東部(1-1区)だけであり、諸般の事情から、面によっては調査出来ない箇所もあった。

各遺構の詳細は繰り返さないが、各調査面の概要を記してまとめる。

1面では天明3(1783)年の浅間山の大噴火に伴う屋敷や畑、竹藪などの火山災害被災遺構(1面中・下位面)や、その後の洪水被災を含めた耕地復旧に伴う遺構群(1面上位面)を調査した。特に屋敷遺構の礎石建物は、建築

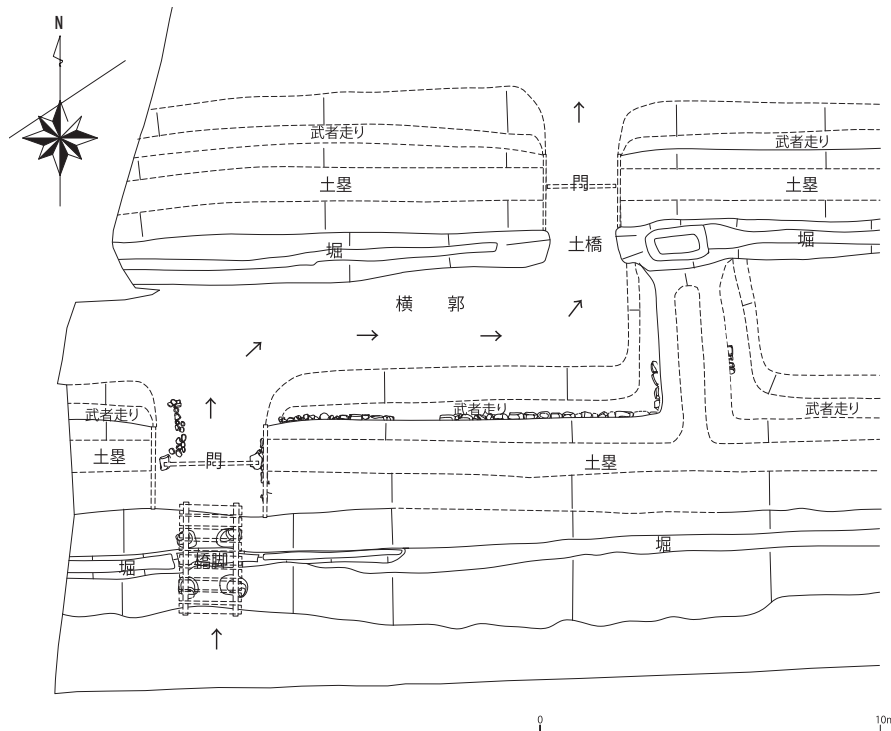
学に即した実測データを測定し、村田敬一先生(群馬県文化財保護審議会専門委員)に分析を依頼したが、その分析報告は本章2節に掲載する。

2面の調査は1-1区に限定され、寛保2(1742)年の大洪水など、度重なる洪水被災と復旧を示す畑跡を調査した。

3面も1-1区のみでの調査であったが、1-1区北部に、15世紀のものだと判断する未周知の館跡を調査した。この館については後述するが、明らかに城塞化した構造を持つ虎口遺構を伴うものであった。また館外には、館の外堀に沿うように、貯蔵穴と推定される隅丸長方形プランの大型土坑が掘削されているのが確認された。

4面では、1-1天仁元(1108)年の浅間山の大噴火に伴って降下したAs-Bテフラで覆われた島遺構を確認した。しかし、遺存状態が悪く、特に東部では天仁元年に耕作されていたか否かの検討が必要と思われる。

5面では、古墳時代の集落遺構を確認した。竪穴住居は、西遷前に、現利根川の位置に流下していた中小河川によるものと想定される自然堤防上に構築されていた。竪穴住居の中には灰が厚く堆積していたものもあり、葺



第111図 中世館虎口遺構概要図

き材の灰化したものの可能性を考えたが、珪酸体分析により、粉殻を主体とするものと同定されたことから、単純に葺き材とすることができないことが分かった。また、祭祀遺構と判断される竪穴遺構も確認された。

(2) 中世館と虎口遺構

上述のように、1-1区3面では、明らかに城塞化を意図した虎口遺構を伴う館遺構が発見された。この館は、短郭方形、或いは回字状プランを呈するものと推定され、外堀の確認長と、虎口位置がから推して、一辺100mを越えるものと想定される。

本虎口は喰違虎口であり、95頁の第63図に記したように、土塁(2号土塁)を伴う2条の堀(5・11号溝)と、5号溝に掛けられた4脚の橋脚、11号溝の埋め戻しの土橋、そして礎石建ちの門(木戸)遺構から成る。尤も5号溝が堀幅2m程の薬研堀、11号溝が浅い薬研堀であった時期もあり、構造に変遷があったことが窺われる。

本虎口の進入路は、第111図に示したように、木橋で外堀(5号溝)を渡り、幅1間半程の門(木戸)をくぐると内堀(11号溝)に突き当たる。土塁と内堀の間には横郭と呼ぶべき横長の空間が在るが、左側(西側)に障壁は確認されなかったことから、導線を左右に選択できる、並(ならび)虎口であったと推定される。導線を右に選択すると突出した土塁で進路を阻まれ、左折して内堀を埋め戻した土橋を通り、内郭に入る。内堀の内郭側にも門が設置されたものと思慮される。また、内堀の土橋の両側は、深く掘られているが、その東側は浅く、内郭側と外郭側の違いが明確にされている。

本虎口遺構は、堀の掘削も小規模で、防御機能としては未熟である。また横長の印象を受けるが、その構造は機能的に造られている。浅学もあって、現状では当該期の虎口遺構の調査例は確認できておらず、少し時期の下る宮城県桑折町桑折西城例を含め、古い段階の、類例の少ない虎口遺構として評価されるものである。

参考文献

群馬県教育委員会(1989)『群馬県の中世城館跡』
桑折町教育委員会(2011)『史跡桑折西山城跡発掘調査報告書(第3次調査)』
児玉幸多、坪井清足監修(1981)『日本城郭体系』別巻II、新人物往来社
山崎 一(1978)『群馬県古城址の研究』上巻、群馬県文化事業振興会

第2節 下之宮高尽遺跡の建築遺構

本稿は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が作成した実測図、写真、及び調査担当者からの聞き取りをもとに作成したものである。本稿で引用する各市町村のデータは、各市町村が実施した民家調査報告書¹による。また、屋敷構えの構成要素や平面図における室呼称等は、地元玉村町の民家調査報告書による。

I 屋敷構えと付属建物

屋敷全体が発掘対象でないことから、明らかになったのは屋敷のほぼ西半分である。今回発掘された部分において、屋敷に直接接した道はなく、屋敷への主の出入口となるカイド²は見当たらない。建築遺構は1号建物、その南西部に接続し張り出す2号建物の2棟である。

以下、当遺跡の屋敷構えを玉村町、及び近接する伊勢崎市、境町等の調査結果より考察すると次の通りである。なお、以下における付属建物の主家から見た方位は第112図による。

1 土塁・竹藪と屋敷規模

建築遺構の西、北西、北に土塁、北西、北に竹藪がみられる。この方位の土塁と竹藪は玉村町の利根川右岸沿いの農家の屋敷構えでは時々見られるものであり、これらは利根川の氾濫と空っ風への備えと考える。屋敷の東側は不明だが、土塁は北東、東、竹藪は北東まであったと推定する³。

2 主家と井戸の配置

1号建物は礎石から判断して農家の主家⁴とみてよい。当屋敷に見られるように、主家が南面して建ち井戸が主家の背面(北)にあるのは特別なケースでなくよく見られるものである(表1)。

3 屋敷の出入口

2号建物の南西に西側の道からの屋敷出入口がある。しかし、この道幅は40～70cm程度あることから、この屋敷出入口は補助的なものであり主のものは、主家の東から南にかけての方位にあると推定する⁵。このことは、当地域の特徴ではなく、県下の農家屋敷出入口にみられる一般的な傾向である。敷地に接する道が北側や西側にあっても直接そこに設けず、カイドで誘導して東、南東、

南に設ける場合が多い。

4 付属建物

主家と付属建物の配置状況をパターン化してみると、主家一棟型直列型、並列型、かぎ型、コの字型、口の型、分散型に分類できる(第113図)。これらの型における付属建物の棟数や種類は列記した順に多くなることから、これらの型は屋敷構えの発展過程を示しているといえよう⁶。伊勢崎市と境町の調査結果からみると、主家が広間型の6件をみると、直列型1件、かぎ型2件、コの字型が2件、口の字1件であり、分散型はみられない。

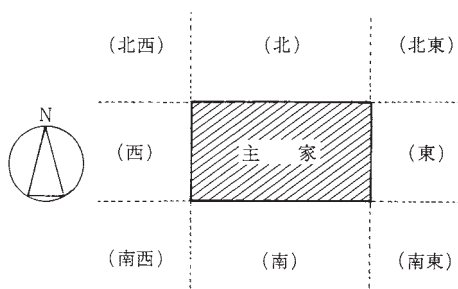
当屋敷は北に建物跡がないこと、2号建物の東側(主家からニワ(庭)を隔てた南)に建物が建てられた跡の一部が確認できたことから、コの字型または口の字型の屋敷構えと推定する。このことから発掘対象とならなかった範囲に設けられたと想定できる付属建物は、北東から東にかけて、味噌蔵、東から東南にかけて便所、南東から南にかけて蔵であり、2号建物の東側にはバラックに相当する納屋である。

II 建物

建物に関わる主な出土資料は土壁(床下部)の一部、礎石、炭化物、流し、排水桝、水瓶、竈等である。礎石の多くは柱当て痕⁷(柱の圧痕)と柱心を示す十字の墨書を残すが、番付の符帳(墨書)が判明している礎石は2つのみである⁸。土壁以外、柱・桁・梁等の建築部材は出土していない。

1 発掘データ資料からの復原平面図作成

柱礎石幅、柱当て痕寸法、礎石幅、柱心々寸法を示す①～③通りの礎石実測断面図(群馬県埋蔵文化財調査事業団作成)を第114図に、第114図より作成した柱間寸法図を第115図、復元平面図を第116図に示す。



第112図 主家からの方位第129図

表23 主家からみた付属建物の建造位置(境町)

方位	付属建物	便所	バラック	物置	畜舎	倉	離れ	蚕室	井戸上家	風呂場	門	木小屋	台所	農機具庫	車庫	その他	(棟数)計	全体に占める割合(%)
東		11	4	4	3	1	1						1			1	26	14.286
南東		10	3	2	5	1	2	2	1		2				1	5	34	18.681
南		1	14	5	3	3	3	3			2					5	39	21.429
南西			2	3			2	4	1							1	13	7.1
西						1	2										3	1.6
北西				1		8						1					10	5.5
北		2	2	8	4	3	1	2	5	7	2	3	1	2		1	43	23.7
北東		2		2	8				1			1					14	7.7
計(棟数)		26	25	25	23	19	13	8	7	7	6	5	2	2	1	13	182	99.996

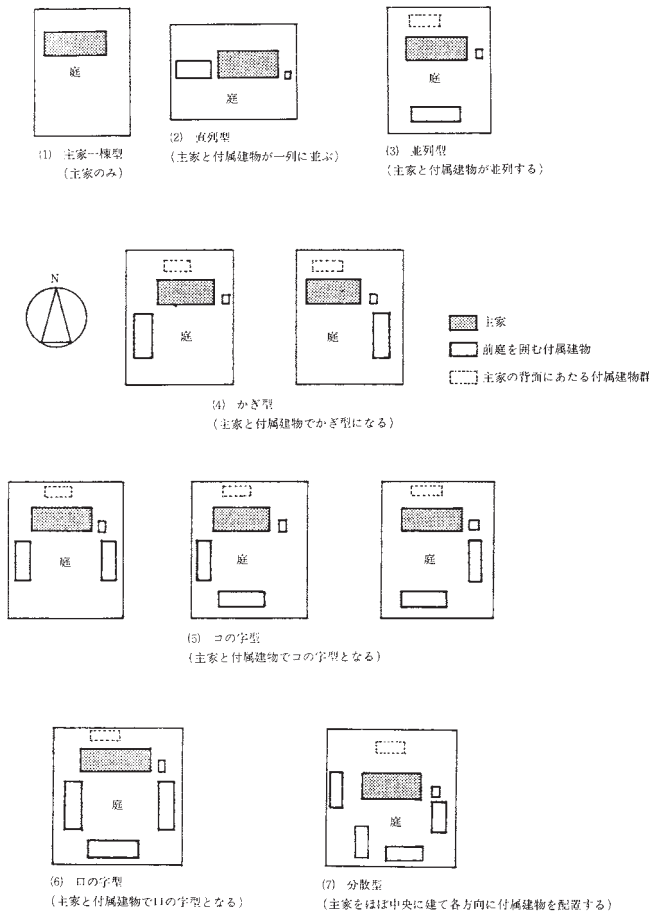
第115図において第114図から直接採用したデータは柱間心々寸法、柱当て痕の寸法である。①～③の通りのうち部屋間仕切の間隔が明らかでない通りのデータは、他のデータがない場合は除き不採用とし、より長く多くの実測値が明らかになっている通りを優先的に採用することを原則とした⁹。なお、礎石は浅間押しの泥流が動いていることも予想されることから、同じ箇所において異なる寸法の場合は民家の過去の調査例でよく見られるモジュール(部屋においては3尺・1間、張り出し部においては1尺5寸・2尺等)に近い方を採用した。また、礎石30、31、32、55、57は、移動したもので当初の位置でないと判断し、第115図では除いた。

2 1号建物

当建物は礎石の配置からみると広間型の民家(農家)の土間部分が欠損しているものと推定する(第116図)。広間型は過去の県内の調査によると、床上の土間側の広間は「ザシキ」〔又は「ザスキ」、一般的には「広間」と呼ばれ、用途はケ(藝)としての団欒・食事の場、日常における客間、その奥の南側は「コザ」〔県内他地区では「オクリ」「デイ」「デー」などとも〕と呼ばれ、用途はハレ(晴)としての客間、北側は「ナンド」〔県内他地区では「ヘヤ」とも〕と呼ばれ、用途は寝室である。また、「コザ」の西側の張り出し部は「トコ(床の間)」、ザシキの北側の張り出し部は「戸棚(仏壇・物入)」であり、共に下屋(げや)の造りと考える。

各部屋の広さをみると、「ザシキ」は梁行3間半、桁行2間の14帖、「ナンド」が梁行・桁行とも1間半の4帖半、「コザ」は梁行2間、桁行1間半の6帖である。

「ナンド」「コザ」の桁行1間半は、過去の調査におい



第113図 附属建物の配置形式

て数少ないものである。調査済みの玉村町(4例)、伊勢崎市(8例)、境町(3件)、藤岡市(14件)、富岡市(19件)、渋川市(7件)、子持村(3件)、高山村(3件)、中之条町(4件)、黒保根村(13件)の広間型では、その部分は多くが桁行2間である。参考までに玉村町、伊勢崎市、藤岡市の広間型の概要を表24、25、26に示す。

「ザシキ」のイロリは出土した炭化物より推定した。北側のものは過去の調査例からもよく見られるものである。南側のものは建造年代が降ると設けるもので、あまり見られないものである。これは客専用のものと考える。

「ダイドコロ」の東端は明らかになっていないが、過去の調査例からみて床土とほぼ同じ桁行の広さであり、ダイドコロの南東隅には「ウマヤ(馬屋)」を設けていたと推定する¹⁰。

3 2号建物

当建物は北から南に連なる3室からなる。過去の調査からみると主家に接する部分は南側2室の建物との接続部の部屋(トリツキ、ヨリツキなどと呼ばれる)、南側2

室が隠居屋、若しくは北側が隠居屋で南側が納屋であると推定する〔表23、第116図(南側2室を隠居屋として作図)〕。

4 建造年代推定

発掘した民家の建造年代の指標として考えられるのは、主家における平面形式、客間2間の柱内法寸法、構造、部材等である。以下、それらをもとに建造年代を考察する。

(1) 平面形式

近世民家〔石場建て(いしばだて)¹¹の広間型〕は畿内とその周辺で16世紀末～17世紀中頃までに、中部、関東、中国、四国地方ではやや遅れて17世紀後半、東北地方では17世紀末～18世紀初頭、九州でもやや遅れて成立したとされている¹²。

過去の民家調査によると、広間型は高山村が18世紀初期まで、中之条町が18世紀中期まで、伊勢崎市、子持村では18世紀末期まで、渋川市、黒保根村が19世紀初期まで、境町が19世紀中期まで、玉村町、藤岡市、富岡市が19世紀末期までみられる。広間型の発展形式とされる四間取り(不整形四間取り、喰違い四間取り、田の字型)は、渋川市、富岡市が17世紀末期以降、玉村町、伊勢崎市、高山村、中之条町が18初期以降、藤岡市、境町が18世紀中期以降、子持村、黒保根村が18末期以降に採用されていたことが分かる。

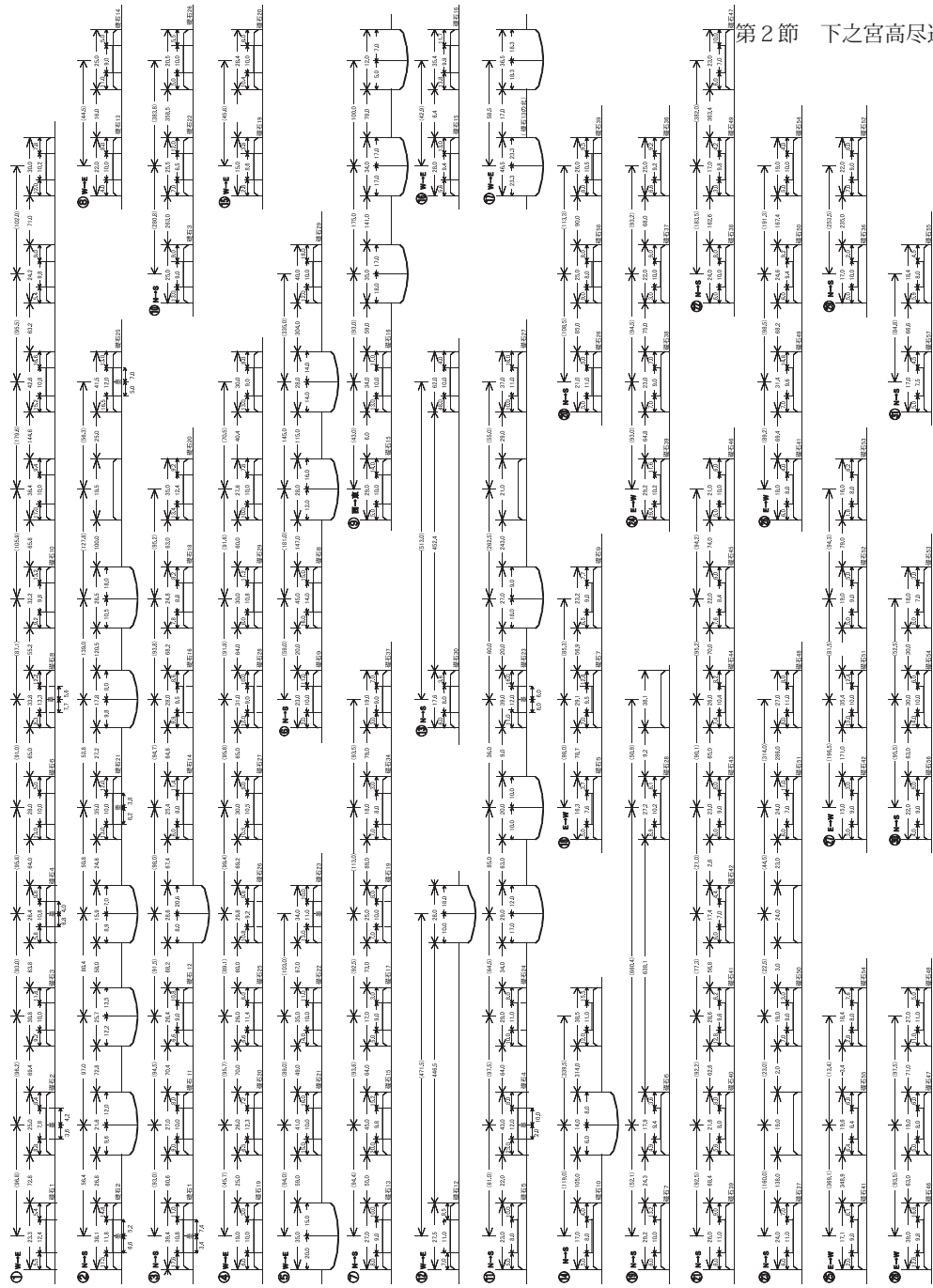
これら明らかのように、四間取り(田の字型)が普及しても広間型は無くならず両者は混在していたといえよう。群馬県では四間取りが多くなるのは市町村によって異なるが、おおよそ18世紀中期以降、それ以前は広間型とされている。

(2) 1号建物の客間の桁行2間の柱間内法寸法

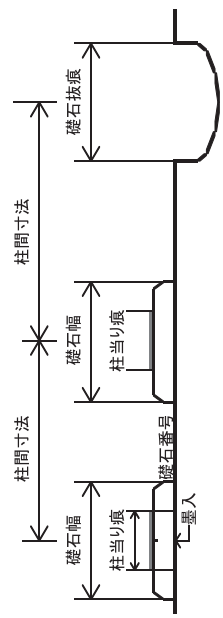
農家主家における客間2間の柱間内法寸法¹³と建造年代関連についてまとめた資料を表27に示す。これによれば建造時代が遡るにつれてその値が大きくなる傾向が窺ええ、おおよその目安として19世紀中期が12.0尺、12.0尺以上であればそれより前、12.0尺以下であればそれより後といえる。

当建物の客間であるコザの桁行は1間半のため梁間2間の内法寸法をみると366.0cm(12.08尺)である。この長さは表27から推定すると18世紀中期となる。

(3) 構造



第2節 下之宮高尺遺跡の建築遺構



第114図 礎石実測断面図(群馬県埋蔵文化財調査事業団作成)

第5章 総括

表24 玉村町の広間型

タイプ(括弧内は件数)	T 1 (2)	T 2 (1)	T 3 (1)
ナンド(梁行×桁行)	2.0×2.0	1.0×1.5	1.0×2.4
コザ(梁行×桁行)	2.0×2.0	2.0×1.5	2.0×2.0
ザシキ(梁行×桁行)	4.0×2.0	3.0×2.0	3.0×2.0
土間の桁行長さ	0.5、053	0.36	0.31
コザの下屋の床の間・押入	有	有	有(上屋内)
ザシキの下屋の張り出し(仏壇・押入)	不明	不明	不明
ウマヤ	2件とも有り	無し	無し
コザ・ザシキの正面側(南側)土庇又は濡れ縁の縁側	2件とも無し	無し	無し
建造年代	17末 17末	19中	19末

表25 伊勢崎市の広間型

タイプ(括弧内は件数)	I 1 (4)	I 2 (1)	I 3 (2)	I 4 (1)
ナンド・ヘヤ(梁行×桁行)	1.5×2.0	1.0×1.5	1.0×2.0	2.0×2.0
オクリ・コザ(梁行×桁行)	2.0×2.0	2.0×1.5	2.0×2.0	2.0×2.0
ザシキ・ザスキ(梁行×桁行)	3.5×2.0	3.0×2.0	3.0×2.0	4.0×2.5
土間の桁行長さ	0.49(2)、 0.50、0.51	0.54	0.46、048	0.54
オクリ・コザの下屋の床の間・押入	4件とも有り	有り	2件とも上屋内に設置	無し
ザシキの下屋の張り出し(仏壇・押入)	3件は不明、 1件は上屋内に設置	不明	2件とも不明	不明
ウマヤ	4件とも有り	有り	2件とも有り	有り
コザ・ザシキの正面側(南側)土庇又は濡れ縁の縁側	2件は土庇、 1件は縁側、 1件は無し	土庇	土庇(2件)	無し
建造年代	2件は18中、 2件は18末	18末	18初、18末	17初

構造の年代指標となるのは階数(平屋か2階建か)、基礎の構法(掘っ立てか、玉石か、切石か)、小屋組(椽首組におけるオダチ(棟木を支える小屋束)の有無)、柱間隔(半間か、1間か、2間か)、土台・納戸構え・差鴨居(有無)等がある。しかし、当建物で明らかなのは、石場建てで土台及び地覆を使用していないことである。

過去の民家調査によると石場建ては中之条町、高山村、黒保根村では19世紀初期まで、玉村町、伊勢崎市、境町、子持村、渋川市が19世紀中期まで、富岡市、藤岡市が19世紀末期まで、土台の使用は中之条では

18世紀末以降、子持村では19世紀初期以降、玉村町、伊勢崎市、藤岡市、境町、渋川市、高山村、黒保根村が19世紀中期以降、富岡市が19世紀末期以降である。このような調査結果であるが、おおよそ指標として石場建ては18世紀末期まで、土台の使用は19世紀初期以降とされている。

(4)部材

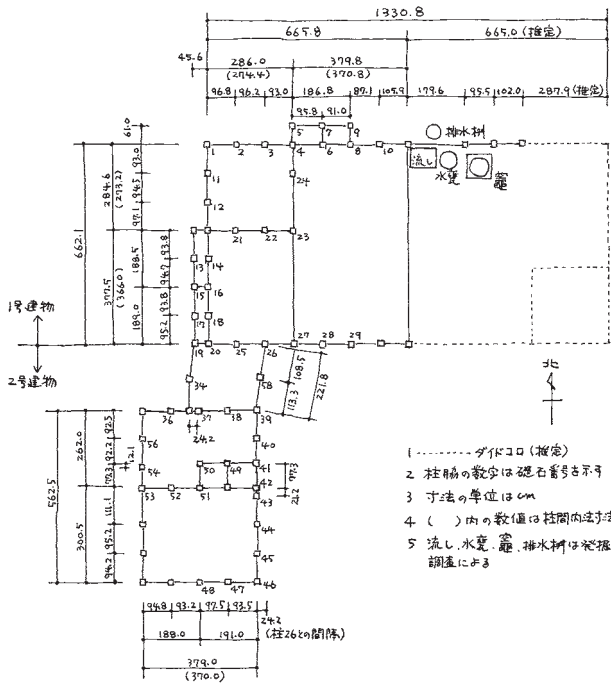
部材の材質、鴨居・敷居の溝数(2本か、3本か)、手斧仕上(蛤刃か、平刃か)等があるが、当遺跡からはこれらを確定できる部材は出土していない。

以上から、1号建物の建造年代は、ナンドの梁行が1間半であること¹⁴、広間型の平面形式であること、コザやザシキの張り出しが上屋内でなく下屋である、それらの張り出し寸法が3尺未満であること¹⁵、石場建てで土台や地覆を用いていないこと、これらと客間の桁行2間の柱間内法寸法の採寸誤差を考慮し18世紀前期と推定する。

2号建物は、1号建物との境の床下に土壁¹⁶を設けて

表26 藤岡市の広間型

タイプ(括弧内は件数)	F 1 (7)	F 2 (3)	F 3 (1)	F 4 (1)	F 5 (1)	F 6 (1)
ヘヤ・ナンド(梁行×桁行)	1.0×2.0	1.5×2.0	2.0×2.0	1.4×2.0	1.7×2.0	1.5×2.0
デイ・デー(梁行×桁行)	2.0×2.0	2.0×2.0	2.0×2.0	2.5×2.0	2.5×2.0	2.5×2.0
ザシキ・ザスキ(梁行×桁行)	3.0×2.0	3.5×2.0	4.0×2.5	3.5×2.0	3.5×2.0	3.5×2.0
土間の桁行長さ	0.33、0.45(3)、0.46(2)、0.48	0.46(2)、0.47	0.50	0.45	0.44	0.46
デイ・デーの下屋の床の間・押入	2件は無し、1件中1間有り、1件は中2間有り、3件は不明	1件は無し、2件は有り	無し	無	有り	無し
ザシキの下屋の張り出し(仏壇・押入)	4件は有り、2件は無し、1件は不明	1件は無し、2件上屋内に設置	不明	上屋内に設置	上屋内に設置	不明
ウマヤ	7件とも有り	3件とも有り	有り	有り	有り	有り
コザ・ザシキの正面側(南側)土庇又は濡れ縁の縁側	1件濡れ縁の縁側、4件は土庇、2件は無し	2件は濡れ縁の縁側、1件は無し	無し	土庇	濡れ縁の縁側	無し
建造年代	18初(2)、18中、18末、19初(3)	17末、19初、19中	18初	19初	19末	18中



第115図 柱間寸法図

いることから、1号建物に後から増築されたものである。建造年代は石場建てであることから18世紀中期と推定する。

5 まとめ

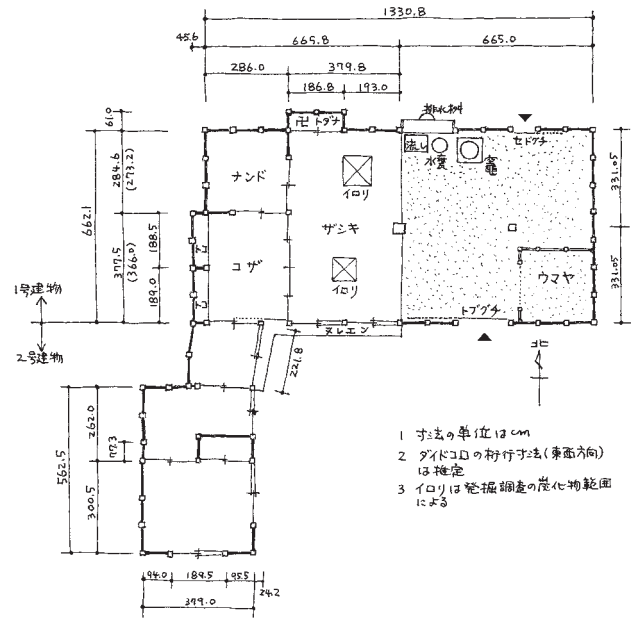
以上の考察及び県内の民家調査結果から推定する建築概要は次の通りである。

(1) 1号建物

- ・用途 養蚕が本格化する前の農家の主家
- ・建造年代 18世紀前期
- ・平面形式 広間型(三間取り)
- ・規模 桁行1330.8m、梁行6.621m
- ・構造 木造平屋階建、屋根は草葺の寄棟造。石場建て、土台・地覆なし。
- ・柱間装置 普通鴨居の三本溝(床上の外回り)、12尺の間に中柱あり。
- ・柱間寸法 2間の内法寸法(梁行)3.660m(12.08尺)。
- ・その他 床の奥行柱心々寸法45.6cm(1.39尺)。天井はコザのみにあり。

(2) 2号建物

- ・用途 主家に増築された隠居屋、若しくは隠居(北側)・納屋(南側)
- ・建造年代 18世紀中期
- ・規模 桁行5.625m、梁行3.790m。



第116図 復元平面図

[取り付けは桁行2.218、梁行2.386m]

- ・構造 木造平屋建、屋根は草葺の寄棟造。石場建て、土台・地覆なし。[取り付けは木造平屋建、屋根は草葺(もしくは板葺)の切妻造。石場建て、土台・地覆なし]
- ・柱間装置 普通鴨居の三本溝(外回り)。取り付けを除いて天井あり。

あとがき

群馬県埋蔵文化財調査事業団で作図した礎石実測断面図は、建造年代推定において大変有効な資料の一つと考える。表27で示したように、近世民家のモジュールは固定したものでなく、時代の経過とともに変化している。柱心々寸法、柱の大きさが明らかになる場合は、平板測量での縮尺を記し実寸法が記されていない礎石平面図でなく、実寸法を記した実測図は必要不可欠なものと考えられる。

本調査において礎石実測断面図の作成に尽力していただいた関係者の方々に敬意を表したい。

特に近世以降の発掘調査及び歴史的建造物整備に係る建築調査においては、いずれの場合も、発掘の専門家と建築史の専門家の協力は不可欠なことといえよう。今後は建築に関する具体的な調査目的、作成する図面、取るデータ等を事前に把握してから調査に着手すべきと考える。

第5章 総括

表27 客間における2間の柱間内法寸法と建造年代
(玉村町、伊勢崎市、境町、高崎市東部地区、藤岡市の農家主家169棟より)

構造年代 内法(尺)	20世紀		19世紀			18世紀			17世紀		計
	20中	20初	19末	19中	19初	18末	18中	18初	17末	17中	
12.22								1			1
12.20								1			1
12.18									1		1
12.17						1					1
12.16									1		1
12.15							1				1
12.13								1			1
12.12				1							1
12.11			1	1				2			4
12.10			1			1	1	2			5
12.09							2				2
12.08				2	3		1	1			7
12.07					1	2	2				5
12.06			1	1		1		2		1	6
12.05	1	6	6	2	7	1					23
12.04	1	1				1					3
12.03	1	1	2	1	1	1					7
12.02	1	4	1	2	1						9
12.01			1	2	1						4
12.00	1	1	28	14	4	2					50
11.98		1		1							2
11.97		1	1								2
11.96		1									1
11.95		5	3	5							13
11.94		1	1								2
11.93			1								1
11.92		2	1								3
11.91				1							1
11.90		1	1								2
11.87		1									1
11.85		1									1
11.70			1								1
11.69				1							1
11.65		1		1							2
11.60		1									1
11.59		1									1
11.50			1								1
計	1	22	52	40	15	17	9	10	2	1	169
平均① (尺)		11.91	11.99	12.00	12.04	12.05	12.08	12.12	12.17		
平均② (尺)		11.91		12.00			12.08		12.17		

注

- 客間は床の間・違い棚、書院等を設える部屋で、デー、デイ、コザ、オクリ等などと呼ばれる部屋。
- 柱間2間の内法寸法は、桁行方向のもの。
- 市町は平成合併前の旧市町を示す。
- 末・中・初はそれぞれ世紀の末期・中期・初期を示す。
- 169棟の内訳は玉村町31棟、伊勢崎市40棟、境町36棟、高崎市東部地区16棟、藤岡市46棟である。
- 平均①は世紀における末期・中期・初期の平均値、平均②は世紀における平均値を示す。なお、平均値は〔内法寸法×棟数÷棟総数〕により算出したものである。また、データが1棟のみの20世紀中期と17世紀中期は、平均算出から除外した。

注

- 『玉村町の建造物(玉村町誌別巻Ⅲ)』(玉村町、平成3年)、『伊勢崎の民家(伊勢崎市史建造物調査報告書第一集)』(伊勢崎市、昭和57年)、『境町の民家と洋風建造物(境町史資料集第5集歴史編)』(境町、平成元年)、『藤岡市の民家と社寺洋風建築』(藤岡市教育委員会、昭和55年)、『富岡市史・民俗編(民家)』(富岡市、昭和59年)、『渋川市の建造物』(渋川市、昭和63年)、『子持村の民家と社寺建築』(子持村村誌編纂室、昭和56年)、『高山村の民家と宗教建築』(高山村教育委員会、昭和53年)、『中之条町誌第三巻(民家)』(中之条町役場、昭和53年)、『黒保根の民家・社寺建築(黒保根村誌別巻Ⅲ)』(黒保根村誌刊行委員会、昭和63年)。以下、本稿において各市町村について使用するデータは、これらの報告書による。
- 道から屋敷への主の導入路。カイドウ、ケイドなどとも呼ばれる。
- 農家の屋敷面積はセンゼ(敷地内を作る畑で主家の南に位置することが多く、センザイバタケとも呼ばれる)を入れて最小でも300坪であり、400坪以下が県内の一般的な規模である。
- 敷地の中で中心的建物を指す。建築史では一般的に主屋を用いるが、民家研究においては主家を用いることが多い。文化財指定では主屋を用いる。
- 主家からみた農家の屋敷出入口の方位をみると、玉村町31件では南東が13件(41.9%)、南13件(41.9%)、南西が4件(12.9%)、北東が1件(3.3%)、伊勢崎市27件では、南東が12件(44.5%)、南9件、(33.3%)、南西が4件(14.8%)、北東が2件(7.4%)、境町35件では南東16件(45.8%)、南9件(25.7%)、南西4件(11.4%)、北東4件(11.4%)、東2件(5.7%)、である。南東と東を合計すると、玉村町では83.9%、伊勢崎市では77.7%、境町では71.4%となる。
- 境町は直列型2.0棟、並列型3.7棟、かぎ型4.3棟、コの字5.8棟、ロの字7.0棟、分散型10.0棟、伊勢崎市は2.5棟、並列型2.5棟、かぎ型2.4棟、コの字3.3棟、ロの字型6.2棟、分散型7.7棟である。付属建物の種別で多く建てられていたベスト3(その建物が建てられていた戸数)をみると、境町では便所、バラック、畜舎と物置、境町では便所とバラック、物置である。
- 柱だけでなく床束の場合あると考える。
- 礎石2に「六ノ六」、礎石8に「四ノ六」の墨書が記されている。他の礎石にもあったと推定するが判明していない。数字の組み合わせ番付であることは分かるが、起点がどこであるかについては特定できない。
- これら図面作成においてデータを直接採用した断面図は①、②(⑥と⑨と近似)、③(一部採用)、⑪、⑮、⑲、⑳、㉑、㉒(一部採用)、㉓(全長)、㉔。採用した数値との比較検討の資料とした断面図は④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑫、⑬、⑭、⑯、⑰、⑱、⑲、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚である。なお、復元平面における柱は、礎石の柱当て痕・床下部の土壁残存状況を元に推定した。
- 表24~26から全桁行に対する土間部分の桁行が占める割合をみると0.31~0.54となっている。細かく見ると0.31~0.45は26件中8件(30.8%)であるが、26件中18件(69.2%)は0.46~0.54である。ウマヤは26件中24件(92.3%)が有している。
- 民家において礎石(玉石)上に直接柱を立てる工法。柱の下端を礎石の凹凸に合わせることからヒカリツケ工法ともいう。時代が降ると壁最下部で柱脚間を結ぶ材(「地覆(じふく)」と呼ぶ)を入れるようになる。土台は地覆の後の構法である。
- 『日本列島民家史』(宮澤智士、住まいの図書館出版局、平成元年)
- 桁行を原則として、2間でない場合は梁間を採用する。
- 広間型のナンドの梁行をみると初期のものは1間である。
- 広間型は初期のものは、コザの張り出し(床屋や押入)、ザシキの張り出し(仏壇や物入)は共になく、設ける場合はじめは下屋であるが、時代が降ると上屋内に設けるようになる。コザの張り出し寸法が3尺になるのは19世紀以降とされている。
- 床下の土壁は外回りに設けるのが一般的である。

表28 遺物観察表

〔1.1 面上位面〕

1 区

1号復旧溝群

挿図 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	厚 重	高			
第10図 PL.23	1	鉄製品 不詳	破片	4.5 0.9	0.9	5.35		断面四角形の角棒状鉄製品で、端部はやや丸みを持つ角形で終わる。たの端部は劣化破損する。木質等の痕跡は見られない。	

2号復旧溝群

挿図 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高	厚 重			
第11図 PL.23	2	瀬戸・美濃 陶器蓋	1/2	6.9 3.6	1.3		淡黄	揃みほとんど欠損。口縁部開く。切り離し部右回転糸切無調整。口縁部内面から天井部外面錆色の鉄釉。天井部外面斑状に灰釉かかる。	

1面遺構外

挿図 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高	厚 重			
第28図	3	製作地不詳 磁器湯飲み	口縁部一部欠	7.4 3.0	5.1		白	外面1箇所黒色絵具による富士山吹き絵。	近現代。
第28図	4	製作地不詳 磁器湯飲み	口縁部1/4、底 部完	(8.0) 3.5	4.4		白	体部と高台境1重もしくは2重圏線。口縁残存部1箇所、内外面に呉須を吹き付ける。内面から高台外面クロム青磁釉。口錆。高台内面から高台内無釉。	近現代。
第28図 PL.23	5	瀬戸・美濃 陶器徳利	上半	4.6 -	-		灰白	口縁部下方に折り返し、傘状を呈する。頸部内面から外面灰釉。	
第28図	6	肥前陶器 陶胎染付碗	口縁部1/6、底 部3/4	(10.2) 4.7	7.2		灰	口縁部外面簡略化した四方襷文。体部外面簡略化した東屋山水文。内面無文。貫入入る。	
第28図	7	肥前磁器 染付筒形碗	1/3	(7.6) (3.4)	6.0		白	外面2重線区画内に格子文と草文?。高台脇にも染め付け。口縁部内面簡略化した四方襷文。底部1重圏線内に不明文様。釉白濁し、焼成不良。	
第28図	8	肥前磁器 染付碗	1/2	(9.5) (3.9)	4.9		灰白	外面コンニャク印判による桐文と井桁内に桐文。両者を交互に施文か。内面無文。	
第28図 PL.23	9	瀬戸・美濃 陶器 半胴甕	口縁部1/8	(19.7) -	-		灰白	口縁部小さく内湾し、端部「T」字状。端部上面窪む。外面口縁部下1条の横線。内外面錆釉。	
第28図 PL.23	17	銅製品 キセル・雁 首	破片	1.8 1.8	1.0 2.12			キセルの雁首部分で、火皿部分のみの破片。火皿内部には黒色の残渣がこびりついている。	
第28図 PL.23	18	銅製品 キセル・吸 い口	ほぼ完形	7.7 1.0	1.0 12.94			キセルの吸い口部分で表面は深緑黒色で平滑だがメッキ・装飾等は確認できない。	
第28図 PL.23	19	鉄製品 刀子	破片	8.8 2.4	0.9 15.13			劣化した刀子破片で、棟・刃側共に関を持ち刃先側・茎とも劣化破損する。柄の木質等は見られない。	
PL.23	20	鉄製品 釘	ほぼ完形	3.2 1.2	0.6 1.43			断面正方形に近い角釘で、先端に向かい細くなり尖る。先端から1cm程でくの字に曲がる。頭は薄く広げ折り曲げる。	
PL.23	21	鉄滓	破片	5.4 3.0	1.5 27.63			表面は黒褐色で凹凸が有る、一部を茶褐色の酸化土砂が覆う。	

2 区

復旧溝群

挿図 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高	厚 重			
第15図	22	肥前磁器 染付碗	1/6	-	-		白	外面丸文内にコンニャク印判による桐文か。内面無文。	
第15図	23	肥前磁器 染付皿	底部1/4	- (9.1)	-		白	内面染め付け。外面高台脇1重圏線、高台外面から境2重圏線。蛇の目凹型高台。	
第15図	24	製作地不詳 磁器 小杯	下半1/4	- (3.0)	-		白	酸化コバルトによる染め付け。内面無文。	近・現代。

遺構外

挿図 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高	厚 重			
第28図 PL.23	25	在地系土器 皿	口縁部1/10、底 部1/2	(10.5) 6.7	2.1		橙	外面体部下端外反し、体部中位内湾。底部内面左回転螺旋状轆轤目。底部左回転糸切無調整。	
PL.23	26	鉄製品 不詳	破片	4.0 1.2	0.5 4.74			断面長方形の舌状をした鉄製品で、茎の可能性が有るが端部は破損し錆化しているため詳細は不明。	

3 区

1号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高	厚 重			
第19図	27	瀬戸・美濃 磁器 クロム青磁 小碗	口縁部1/2、底 部1/5	(7.4) (3.0)	4.1		白	外面飛び鉋。内面から高台外面クロム青磁釉。	近・現代。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚			
第19図 PL.23	28	鉄製品 釘	ほぼ完形	15.1 6.3	2.6 69.95	2.6 0.8	白	断面長方形の大型の釘。先端に向かい徐々に細くなり尖る。頭部分は錆化した板目材に覆われ詳細不明。	
第19図 PL.23	29	鉄製品 釘		2.9 0.8	厚 2.13	0.8 2.13		断面円形の丸釘。現代物か	
PL.23	30	鉄製品 不詳		15.0 2.8	厚 1.8 47.43	1.8 47.43		断面長方形の厚い板状鉄製品で、端部は角型に終わり他の端部は劣化破損する、端部から破損部に向かい僅かに細くなるが破損のため全体形状は不明。	

遺構外

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚			
PL.23	32	鉄製品 釘	破片	3.6 1.2	厚 1.0 3.57	1.0 3.57		断面長方形の角釘、中央で浅くねじれる様に曲がる、先端は細くなるが鋭利には尖らない、頭側は劣化破損する。	
PL.23	33	鉄製品 釘	破片	3.0 0.7	厚 0.5 1.62	0.5 1.62		断面ほぼ正方形の角釘。先端に向かい僅かに細くなり端部は劣化破損、頭側も劣化破損し詳細は不明。	
第28図 PL.23	34	鉄製品 不詳	破片	4.1 2.4	厚 1.8 41.93	1.8 41.93		断面三角形の鋳造鉄製品破片で両端とも劣化破損する。	
第28図 PL.23	35	鉄製品 不詳	破片	8.2 2.4	厚 1.4 14.60	1.4 14.60		断面長方形でややカーブする棒状の鉄製品破片で両端とも劣化破損する。	
第28図 PL.23	36	鉄製品 不詳	破片	6.7 1.1	厚 0.4 7.67	0.4 7.67		元部分断面長方形で先部分断面三角形の鉄製品で、表面は錆化剥落しているため関等は確認できない。	
第28図 PL.23	37	鉄製品 不詳	破片	5.2 1.3	厚 1.2 8.77	1.2 8.77		断面ほぼ正方形の角棒状鉄製品で、端部はやや細くなり角型に終わる、他の端部側は劣化破損する。木質等の痕跡は見られない。	

4区

遺構外

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第28図 PL.23	38	瀬戸・美濃 陶器皿	口縁部1/3、底部1/2	(12.2) (6.6)	高 2.4	2.4	灰白	体部から口縁部内湾。外面口縁部以下回転鋳削り。高台脇削り込む。内面から体部外面中位灰釉。底部内面重ね焼き痕。	
第28図 PL.23	39	瀬戸・美濃 陶器 円盤状製品 (徳利)	完形	縦 3.6 横 3.7	厚 0.8	0.8	灰白	飴釉徳利の体部下位部の周囲を打ち欠いて円盤状に成形。外面下位を除き飴釉。内面無釉。	二次加工品。
第28図 PL.23	40	瀬戸・美濃 陶器 円盤状製品 (徳利)	完形	縦 3.8 横 3.4	厚 0.7	0.7	灰白	飴釉徳利の体部片の周囲を打ち欠いて円盤状に成形。外面飴釉。内面無釉。	二次加工品。
第28図 PL.23	41	在地系土器 円盤状製品 (焙烙か)	完形	縦 4.3 横 5.6	厚 0.9	0.9	黒	断面中央黒色、器表付近灰白色、器表黒色。内面回転横撫で。外面型痕。底部片の周囲を打ち欠いて円盤状に成形。	二次加工品。
第28図 PL.23	43	銅製品 キセル・雁 首	一部欠損	長 5.4 幅 1.1	厚 1.2 7.04	1.2 7.04		キセルの雁首部分の破片で火皿部分を欠く。表面は劣化により荒れメッキ・装飾等は確認できない。	
第28図 PL.23	44	銅製品 キセル・雁 首	一部欠損	長 4.0 幅 1.0	厚 1.1 7.9	1.1 7.9		キセルの雁首部分の破片で火皿部分を欠く。表面は劣化により荒れメッキ・装飾等は確認できない。吸い口側端部に羅印の木質が残存する。	
PL.23	45	銅製品 銭貨	完形	縦 2.299 横 2.315	厚 0.121 2.48	0.121 2.48		寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭、裏面は彫浅めだが外縁・郭ともやや明瞭。	
第28図 PL.23	46	鉄製品 火打金	ほぼ完形	長 5.3 幅 3.3	厚 0.9 11.08	0.9 11.08		三角形の火打金で中央上部に丸孔を持つ。繊維・木質等の痕跡は見られない	
PL.23	47	鉄製品 釘	破片	長 3.9 幅 1.5	厚 1.3 9.04	1.3 9.04		断面長方形の角釘、先端に向かい細くなり端部は劣化破損する。頭は幅広くなり折り返しと見られるが、土砂を巻き込んだ硬い錆に覆われ本体は脆弱なため詳細は不明。	
PL.23	48	鉄製品 釘	破片	長 2.5 幅 0.9	厚 0.6 1.92	0.6 1.92		断面ほぼ正方形の角釘。先端に向かい僅かに細くなり端部は劣化破損、頭側も劣化破損し詳細は不明。	
第28図 PL.23	49	鉄製品 不詳	ほぼ完形	長 5.2 幅 1.6	厚 1.1 10.05	1.1 10.05		断面長方形の舌状をした鉄製品で、錆化が進み土砂を巻き込んだ錆に覆われ詳細は不明。	
第28図 PL.23	50	鉄製品 不詳	破片	長 3.4 幅 1.1	厚 0.8 4.95	0.8 4.95		断面長方形の棒状鉄製品で、端部は丸みを持ち終わる。他の端部は劣化破損する。	

5区

遺構外

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				縦	厚	厚			
第28図 PL.23	51	銅製品 銭貨	完形	縦 2.381 横 2.367	厚 0.122 2.88	0.122 2.88		寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭、裏面は彫浅く外縁・郭ともやや不明瞭。	
PL.23	52	鉄製品 釘	破片	長 3.3 幅 0.8	厚 0.6 2.21	0.6 2.21		断面ほぼ正方形の角釘。先端側は劣化破損、頭側は斜めに急激に細くなり、折り返し部分が劣化破損したものと考えられる。木質等の付着は見られない。	
PL.23	53	鉄製品 釘	破片	長 3.8 幅 1.2	厚 1.0 3.55	1.0 3.55		断面ほぼ正方形の角釘破片。先端側は破損し、頭側は広げ折り返していると思われるが全体に硬い錆に厚く覆われ本体脆弱なため詳細は不明。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.23	54	鉄製品 釘	破片	長幅 2.5 0.6	厚 0.6	重 0.4 0.67		断面四角の角釘破片、先端に向かい細くなり尖る、頭側は破損。	
PL.23	55	鉄製品 釘	破片	長幅 2.2 0.9	厚 0.6	重 1.13		断面やや丸みをおびた角釘、先端側は劣化破損。頭は薄く広がる。	
第28図 PL.23	56	鉄製品 不詳	破片	長幅 4.3 2.5	厚 0.8	重 11.31		断面は薄い長方形から狭三角形に変わり刀子の破片とも考えられるが、その間に関等の形状は認められない。木質等の痕跡も見られない。	
第28図 PL.23	57	鉄製品 不詳	破片	長幅 4.2 1.1	厚 0.7	重 3.92		薄い板状の鉄製品で、両端とも劣化破損する。	
第28図 PL.23	58	鉄製品 不詳	破片	長幅 3.7 1.2	厚 0.8	重 3.62		薄い板状の鉄製品で、端部は角の取れた角型で他の端部側は劣化破損する。	
第28図 PL.23	59	鉄製品 不詳	破片	長幅 3.3 1.3	厚 0.9	重 4.80		断面長方形の角棒状鉄製品で、端部は角形で他の端部は劣化破損し全体形状は不明。	
PL.23	60	鉄製品 不詳	破片	長幅 3.4 1.3	厚 0.9	重 4.09		断面長方形の角棒状鉄製品で両端とも劣化破損する。	

〔2.1 面下位面〕

1区(屋敷)

1・2号建物(礎石)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第35図 PL.23	61	礎石	礎石1	長幅 38.0 26.0	厚 24.8	重 36960	粗粒輝石安山岩	礎平坦部を上面に使用。柱当たり痕(15.6×13.2cm)あり。	第114図参照
第35図 PL.23	62	礎石	礎石2	長幅 40.4 30.8	厚 23.6	重 40980	粗粒輝石安山岩	「六ノ六」の墨書、墨線あり。柱当たり痕(10.0×9.6cm)あり。	第114図参照
第32図	63	礎石	礎石3	長幅 35.0 24.5	厚 19.0	重 23800	溶結凝灰岩	柱当たり痕(10.0×9.5cm)あり。	第114図参照
第32図	64	礎石	礎石5	長幅 25.0 17.5	厚 14.5	重 10000	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.7×8.0cm)あり。	第114図参照
第32図	65	礎石	礎石6	長幅 27.5 27.0	厚 13.5	重 14020	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.5×8.2cm)あり。	第114図参照
第32図	66	礎石	礎石7	長幅 28.5 23.0	厚 10.8	重 10120	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.5×10.0cm)あり。	第114図参照
第35図 PL.23	67	礎石	礎石8	長幅 45.0 32.5	厚 24.5	重 47480	粗粒輝石安山岩	「四ノ六」の墨書あり。柱当たり痕(11.9×11.0cm)あり。	第114図参照
第32図	68	礎石	礎石9	長幅 28.0 25.0	厚 15.9	重 16360	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.7×8.2cm)あり。	第114図参照
第32図	69	礎石	礎石10	長幅 32.5 24.0	厚 20.2	重 21680	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.7×10.0cm)あり。	第114図参照
第32図	70	礎石	礎石11	長幅 41.5 26.0	厚 24.2	重 36380	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(12.8×11.3cm)あり。	第114図参照
第32図	71	礎石	礎石12	長幅 28.0 28.0	厚 14.0	重 18160	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.5×9.0cm)あり。	第114図参照
第32図	72	礎石	礎石13	長幅 31.5 30.0	厚 13.4	重 15000	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.4×8.5cm)あり。	第114図参照
第32図	73	礎石	礎石14	長幅 32.5 24.0	厚 18.0	重 23880	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.2×9.3cm)あり。	第114図参照
第32図	74	礎石	礎石15	長幅 45.5 29.5	厚 13.0	重 27160	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.0×9.2cm)あり。	第114図参照
第32図	75	礎石	礎石16	長幅 40.5 26.5	厚 21.0	重 33880	ひん岩	柱当たり痕(10.7×9.0cm)あり。	第114図参照
第32図	76	礎石	礎石17	長幅 19.0 16.5	厚 5.7	重 2640	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(7.8×7.2cm)あり。	第114図参照
第35図 PL.23	77	礎石	礎石18	長幅 28.0 30.4	厚 13.6	重 17660	粗粒輝石安山岩	斜方向に墨線あり。柱当たり痕(10.0×9.6cm)あり。	第114図参照
第32図	78	礎石	礎石19	長幅 28.5 20.0	厚 9.4	重 7960	石英閃緑岩	柱当たり痕(8.0×8.0cm)あり。	第114図参照
第32図 PL.23	79	礎石	礎石20	長幅 38.0 32.0	厚 14.1	重 34220	粗粒輝石安山岩	礎平坦部を上面に使用。柱当たり痕(10.7×10.0cm)あり。	第114図参照
第32図	80	礎石	礎石21	長幅 45.0 40.5	厚 24.5	重 46600	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(11.0×10.0cm)あり。	第114図参照
第32図 PL.23	81	礎石	礎石22	長幅 36.0 27.0	厚 21.2	重 22160	粗粒輝石安山岩	礎平坦部を上面に使用。柱当たり痕(10.5×10.3cm)あり。	第114図参照
第35図 PL.23	82	礎石	礎石23	長幅 42.4 32.8	厚 18.8	重 45180	粗粒輝石安山岩	墨痕あるが、判読不能。柱当たり痕(10.0×10.4cm)あり。	第114図参照
第32図	83	礎石	礎石24	長幅 36.0 29.0	厚 19.7	重 33760	溶結凝灰岩	柱当たり痕(9.8×9.8cm)あり。	第114図参照
第32図	84	礎石	礎石25	長幅 41.0 27.0	厚 16.3	重 29.38	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.0×9.5cm)あり。	第114図参照
第32図	85	礎石	礎石26	長幅 31.5 24.0	厚 17.0	重 20440	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.0×9.0cm)あり。	第114図参照
第35図 PL.23	86	礎石	礎石27	長幅 39.6 29.2	厚 20.8	重 36340	石英閃緑岩	礎平坦部を上面に使用。柱当たり痕(10.0×11.2cm)あり。	第114図参照

遺物観察表

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				長 幅	厚 重	重 量			
第32図	87	礎石	礎石28	32.0 27.0	27.0 34220		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.5×8.7cm)あり。	第114図参照
第35図 PL.23	88	礎石	礎石29	38.8 28.8	18.8 28020		粗粒輝石安山岩	墨痕、十字の墨線あり。柱当たり痕(10.0×10.0cm)あり。	第114図参照
第32図	89	礎石	礎石30	18.5 18.0	6.2 3220		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.3×7.5cm)あり。	第114図参照
第32図	93	礎石	礎石34	19.0 18.5	5.2 3160		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.0×7.5cm)あり。	第114図参照
第33図	95	礎石	礎石36	25.0 17.5	6.9 5240		アプライト	柱当たり痕(9.0×7.8cm)あり。	第114図参照
第33図	96	礎石	礎石37	30.0 23.5	21.7 18080		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.0×8.8cm)あり。	第114図参照
第33図	97	礎石	礎石38	24.0 23.0	6.5 5920		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.7×8.5cm)あり。	第114図参照
第33図	98	礎石	礎石39	33.5 29.0	17.6 21320		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.5×9.4cm)あり。	第114図参照
第33図	99	礎石	礎石40	22.5 17.5	11.5 8460		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.5×7.5cm)あり。	第114図参照
第33図	100	礎石	礎石41	33.5 22.0	19.0 18300		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.8×9.0cm)あり。	第114図参照
第33図	101	礎石	礎石42	17.5 18.0	7.0 2800		文象斑岩	柱当たり痕(8.5×8.0cm)あり。	第114図参照
第33図	102	礎石	礎石43	28.5 18.0	8.6 6600		石英閃緑岩	柱当たり痕(8.3×6.9cm)あり。	第114図参照
第33図	103	礎石	礎石44	34.0 29.0	15.4 18820		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.0×8.5cm)あり。	第114図参照
第33図	104	礎石	礎石45	26.5 20.0	5.9 4420		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.5×8.5cm)あり。	第114図参照
第33図	105	礎石	礎石46	34.5 23.0	22.0 27080		細粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.0×9.0cm)あり。	第114図参照
第33図	106	礎石	礎石47	22.5 19.5	9.4 5180		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.5×8.0cm)あり。	第114図参照
第33図	107	礎石	礎石48	33.5 26.0	16.8 16600		変はんれい岩	柱当たり痕(11.0×10.5cm)あり。	第114図参照
第33図	108	礎石	礎石49	32.0 17.5	9.9 11000		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.7×8.0cm)あり。	第114図参照
第33図	109	礎石	礎石50	32.0 29.5	18.5 18020		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(11.5×11.5cm)あり。	第114図参照
第33図	110	礎石	礎石51	43.0 26.0	21.5 33360		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.0×10.0cm)あり。	第114図参照
第33図	111	礎石	礎石52	22.5 19.5	15.2 9120		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(11.0×9.0cm)あり。	第114図参照
第33図	112	礎石	礎石53	19.5 16.5	4.9 2740		石英閃緑岩	柱当たり痕(8.0×8.0cm)あり。	第114図参照
第33図	113	礎石	礎石54	32.5 23.0	14.5 14920		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.5×9.3cm)あり。	第114図参照
第33図	114	礎石	礎石55	19.0 16.0	6.3 2920		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(6.5×6.5cm)あり。	第114図参照
第33図	115	礎石	礎石56	21.5 18.0	8.0 4200		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(7.8×7.6cm)あり。	第114図参照
第33図	116	礎石	礎石57	20.5 16.5	5.7 3080		石英閃緑岩	柱当たり痕(7.2×7.0cm)あり。	第114図参照
第33図	117	礎石	礎石58	36.0 34.0	25.4 58150		粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(12.0×10.0cm)あり。	第114図参照
第33図 PL.23	118	礎石	礎石59	31.0 23.5	14.8 16600		粗粒輝石安山岩	礫平坦部を上面に使用。柱当たり痕(9.0×9.0cm)あり。	第114図参照
第35図	124	礎石	完形 礎石112	42.8 19.6	19.2 15520		ニッ岳軽石	円礫の上下面および側面の3面に平ノミ・丸タガネ状工具により平坦面を造り出す。面は平滑。古墳石室の石を転用。	

1号建物(ガイドコロ)

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				長 幅	厚 重	高 度			
第36図 PL.24	127	鉄製品 釘	破片	3.4 1.1	0.7 1.70			断面ほぼ正方形の角釘破片で先端に向かい細くなり尖る。頭側は劣化破損し形状不明。破損部付近に板目材の木質が錆化残存する。	
第36図 PL.24	128	鉄製品 釘	破片	3.1 1.3	0.6 1.35			断面ほぼ正方形の角釘破片で先端および頭部分とも劣化破損する。全体に板目材の木質が錆化残存する。	
第36図 PL.24	129	常滑陶器 甕		47.7 20	62.0		褐灰	口縁部逆「L」字状を呈し、上面やや窪む。口縁部内面上方に小さく突き出る。	

1号建物

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				口 底	6.7 2.7	高 3.6			
第36図 PL.24	130	肥前磁器 白磁小杯	口縁部1/4欠	6.7 2.7	3.6		灰白	体部から口縁部朝顔状に開く。残存部無文。高台端部平坦に削る。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第36図	131	肥前磁器 染付小杯	完形	口底	7.5 2.7	高	3.5	灰白	体部は膨らみ、口縁部は開く。外面一方に笹文2つ。反対側に小さい山状文の染付。
第36図	132	肥前磁器 染付碗	口縁部～体部 1/4欠	口底	10.1 4.4	高	5.5	白	外面2重網目文。高台脇1重圏線。高台境2重圏線。内面無文。
第36図	133	肥前磁器 染付碗	口縁部～体部 1/4欠	口底	10.5 4.1	高	5.0	白	外面梅の折れ枝文。高台脇1重圏線。高台境2重圏線。見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部白濁した泥状アルミナ塗布。
第36図	134	肥前磁器 染付皿	口縁部から体部 1/5	口底	(10.0) -	高	-	白	内外面コンニャク印判による染め付け。底部内面周縁圏線。やや焼成不良で貫入する。
第36図	135	瀬戸・美濃 陶器鉄絵碗	口縁部から体部 1/4	口底	(9.0) -	高	-	灰	口縁部内湾。残存部口縁部外面に1箇所鉄絵。内面から高台脇灰釉。粗い貫入する。
第36図	136	瀬戸・美濃 陶器腰錆碗	口縁部から体部 1/5	口底	(9.0) -	高	-	灰	外面口縁部下螺旋状凹線。凹線以下鉄釉。内面から凹線部灰釉。灰釉に粗い貫入する。
第36図 PL.24	137	瀬戸・美濃 陶器腰錆碗	口縁部1/4、底 部完	口底	(9.2) 4.3	高	6.0	灰白	外面口縁部下螺旋状凹線。内面から口縁部外面灰釉。灰釉に貫入する。凹線部から高台内錆色の鉄釉。高台端部無釉。
第36図 PL.24	138	瀬戸・美濃 陶器 筒形香炉	1/7	口底	(10.8) (8.8)	高	-	淡黄	口縁部外面下凹線状に窪む。口縁端部上面から体部外面下端鉛釉。残存部わずかに鑿状工具による文葉端部残存。
第36図 PL.24	139	瀬戸・美濃 陶器 筒形香炉	口縁部1/5欠	口底	10.8 8.2	高	5.8	灰白	体部外面下半1箇所に鑿状工具による松文。口縁部内面から体部外面下端鉛釉。脚3箇所貼り付け。
第36図 PL.24	140	志戸呂陶器 灯火受皿	完形	口底	8.3 4.8	高	1.8	にぶい赤褐	受け部1箇所にアーチ状抉り。口縁部外面以下回転篋削り。内面から体部外面錆釉。
第36図	141	在地系土器 皿	底部1/2	口底	- (5.8)	高	-	黄橙	底部左回転糸切無調整。底部内面左回転螺旋状轆轤目。
第36図	142	在地系土器 鍋	口縁部片	口底	- -	高	-	灰白・黒	断面中央黒色、器表付近浅黄橙色、内面器表灰白色、外面器表煤付着により黒色。口縁端部外方に小さく折れる。口縁端部上面平坦。内面丁寧な回転横撫で。口縁部外面回転横撫で口縁部内面器表斑状に剥離。
第36図	143	在地系土器 鍋	口縁部片	口底	- -	高	-	黒～灰白	断面淡黄色、内面器表黒色、外面器表灰白色から黒色。外面部分的に煤付着。口縁端部外反し、内面は稜をなして上面を平坦にする。
第36図	144	在地系土器 鍋	1/4	口底	- -	高	-	黒～浅黄橙	断面灰白色、内面器表灰白色、外面器表黒色。外面煤付着。口縁端部屈曲気味に外反。端部内面は稜をなし、上面を平坦にする。上面やや窪む。
第36図 PL.24	145	在地系土器 焙烙	1/4	口底	(36.2) (32.0)	高	5.6	灰～黒	断面にぶい橙色、口縁部から体部外面黒色、底部外面褐灰色、内面灰色から黒色。内面轆轤目残る。外面調整は丁寧で接合痕ほとんど撫で消す。外面下位の型痕も一部の窪みを残し削り取る。残存部端内面に内耳貼り付け痕の一部が残る。
第36図 PL.24	146	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.326 2.316	厚重	0.115 2.44		寛永通寶。表面は彫浅めだが錆状況の違いにより外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。
第36図 PL.24	147	銅製品 銭貨	破片	縦横	- 2.6	厚重	0.193 1.57		寛永通寶とみられるが寛の字部分を劣化破損する。表裏とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。
第36図 PL.24	148	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.418 2.406	厚重	0.160 1.74		寛永通寶。表面は彫深く外縁・郭とも明瞭だが錆化のため文字一部不明瞭。裏面は平坦で不明瞭。
第36図 PL.24	149	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横	2.488 2.556	厚重	0.209 1.98		寛永通寶。表裏とも錆化により外縁・文字・郭とも不明瞭。
第36図 PL.24	150	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横	2.485 2.476	厚重	0.132 1.88		寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが寛～通部分の一部を劣化破損する。裏面は彫浅めだが外縁・郭とも明瞭。
第36図 PL.24	151	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横	2.559 2.462	厚重	0.166 2.18		寛永通寶。表面は彫浅めだが外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。外縁の一部は劣化破損する。
第36図 PL.24	152	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.359 2.373	厚重	0.116 2.06		寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦で外縁・文字・郭とも不明瞭。
第36図 PL.24	153	鉄製品 銭貨	ほぼ完形	長幅	2.659 2.932	厚重	0.684 5.57		鉄製寛永通寶と見られるが錆化が著しく詳細は不明。
第36図 PL.24	154	鉄製品 銭貨	ほぼ完形	縦横	2.954 3.056	厚重	0.924 9.84		複数の鉄銭錆化癒着したものと考えられるが、錆化が著しく枚数等詳細は不明。
第36図 PL.24	155	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.449 2.439	厚重	0.150 2.81		寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面も彫深く外縁・郭とも明瞭。
第36図 PL.24	156	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.430 2.436	厚重	0.135 2.30		寛永通寶。表面は彫深く外縁・郭とも明瞭文字は一部鉄錆びに覆われるが明瞭。裏面も彫深く外縁・郭とも明瞭。
第36図 PL.24	157	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.394 2.404	厚重	0.129 2.78		寛永通寶。表面は彫深く外縁・郭とも明瞭文字は一部鉄錆びに覆われるが明瞭。裏面も彫深く外縁・郭とも明瞭。
第36図 PL.24	158	鉄製品 銭貨	ほぼ完形	縦横	2.529 2.539	厚重	0.294 2.22		鉄製寛永通寶と見られるが錆化が著しく詳細は不明。
第36図 PL.24	159	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.531 2.512	厚重	0.159 3.19		寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦で一部鉄錆びが覆い不明瞭。
第36図 PL.24	160	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.334 2.359	厚重	0.148 2.66		寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面も彫深く外縁・郭とも明瞭。
第36図 PL.24	161	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.214 2.243	厚重	0.217 2.53		寛永通寶。表面は硬い鉄錆びに覆われ外縁・文字・郭とも一部不明瞭。裏面も錆化のため外縁・郭とも不明瞭。
第37図 PL.24	162	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.513 2.500	厚重	0.166 -		寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は鉄銭が錆び付詳細不明。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				縦 横	厚 重	0.158 3.14			
第37図 PL.24	164	古銭		縦 横	2.498 2.486	厚 重	0.158 3.14		寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は彫浅いが外縁・郭とも明瞭。永の字部分裏面より外力を受け変形破損する。
第37図 PL.24	165	古銭		縦 横	2.275 -	厚 重	0.181 0.66		寛永通寶とみられるが寛の字一部と通の部分の劣化破損する。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は錆化により不明瞭。
第37図 PL.24	166	金属製品 銭貨	破片	縦 横	- -	厚 重	- 33.68		複数(5枚以上)の鉄銭および銅銭が錆化癒着したものと考えられるが、錆化が著しく枚数等詳細は不明。
第37図 PL.24	167	金属製品 銭貨	破片	縦 横	- -	厚 重	- 14.27		1枚の銅製寛永通寶と鉄銭3枚?が錆が癒着する。寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦で不明瞭。鉄銭は寛永通寶と見られるが錆化が著しく詳細不明。
第37図 PL.24	168	銅製品 銭貨	一部欠損	縦 横	2.396 2.394	厚 重	0.160 2.80		寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦で錆化により不明瞭。
第37図 PL.24	169	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.335 2.306	厚 重	0.210 2.64		寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は彫浅いが外縁・郭とも明瞭。
第37図 PL.24	170	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.384 2.390	厚 重	0.207 2.71		寛永通寶。表面は彫浅いが錆化により外縁・文字・郭とも一部不明瞭。裏面は平坦で不明瞭。
第37図 PL.24	171	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.329 2.337	厚 重	0.136 2.99		寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。
第37図 PL.25	172	銅製品 キセル・吸い口	破片	長 幅	11.6 0.9	厚 重	0.9 8.58		キセルの吸い口部分で、全体に竹を模した形状で3箇所を節を作り出している。吸い口端部から1つ目の節までが一体で節部分で繋いで作られている。雁首側は破損しており本来一体造りの可能性も有るが破損により詳細不明。
第37図 PL.25	173	銅製品 キセル・雁首	一部欠損	長 幅	3.1 1.4	厚 重	2.0 7.00		キセルの雁首部分。火皿の一部を劣化破損する。吸い口側に11条の溝を掘り12段の模様を作り出している。
第37図 PL.25	174	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	3.8 1.2	厚 重	1.0 1.69		断面ほぼ正方形の角釘で先端に向かい細くなるが先端部は劣化破損する。頭は薄く広く広げ直角に折り曲げる。木質等の痕跡は見られない。
第37図 PL.25	175	鉄製品 釘	破片	長 幅	5.1 1.7	厚 重	1.3 5.40		断面ほぼ正方形の角釘で先端に向かい僅かに細くなるが先端部分は劣化破損する。頭側も劣化破損し形状不明。全体に木質が錆化残存する。
PL.25	176	鉄製品 釘	破片	長 幅	2.7 1.0	厚 重	0.5 1.13		断面四角の角釘破片。全体に土砂を巻き込んだ錆に覆われ、詳細形状不明。
第37図 PL.25	177	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 幅	5.0 1.5	厚 重	1.5 4.57		断面ほぼ正方形の角釘で先端に向かい細くなり尖る。頭は幅広く薄く広げ折り曲げる。頭付近と先端から2.5cm付近に板目材木質等の痕跡が見られるが両者の軸方向は90°ずれている。
第37図 PL.25	178	鉄製品 不詳	破片	長 幅	6.9 1.9	厚 重	1.4 11.53		断面長方形の板状鉄製品で、端部でやや幅広くなり横に曲がる端部は角形で終わる。他の端部は劣化破損し不明。全体に木質等の痕跡は見られない。
PL.25	179	鉄製品 不詳	破片	長 幅	2.4 1.0	厚 重	1.0 2.39		断面四角から楕円形の棒状鉄製品で、両端とも劣化破損する。
第37図 PL.25	180	鉄製品 不詳	破片	長 幅	5.8 2.8	厚 重	0.7 18.30		薄い板状の鉄製品で片側はやや薄くくびれる様に曲がっているが刃とは判定できない。両端は錆びに覆われるが破損後錆化した可能性が有り全体形状は不明。
第37図 PL.25	182	鉄製品 不詳	破片	長 幅	5.9 5.1	厚 重	0.9 21.44		薄い板状の鉄製品で181と同一個体と見られるが劣化破損し直接接合はできない。
PL.25	184	石製品? 不明	完形	長 幅	6.3 1.5	厚 重	0.6 8.7	珪質頁岩	小形の棒状礫素材。上部に横方向の溝が1条刻まれている。正面左側縁に横位のキズ、裏面右側縁に連続した微小剝離痕が残り、この部分が機能部と推定される。

1号建物(掘り方)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	(9.7) (5.8)	高 2.2			
第37図 PL.25	185	在地形土器 皿	1/4	口 底	(9.7) (5.8)	高 2.2	にぶい橙		口に比して器高やや高い。底部右回転糸切無調整。底部内面右回転螺旋状軸轆目。

2号建物(北部)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	(15.4) (14.0)	高 -			
第37図	186	在地系土器 火消壺か	1/8	口 底	(15.4) (14.0)	高 -	黒		断面中央暗灰色、器表付近褐色、器表黒色。蓋受け部付近の器表のみにぶい橙色。口縁部内面に蓋受け。内面回転横撫で。外面磨き。底部に脚わずかに残存。底部外面型痕。
PL.25	187	鉄製品 釘	破片	長 幅	3.5 1.2	厚 重	0.8 2.92		断面四角の角釘破片。先端側は破損、頭近くで曲がり端部は角形で終わる。
PL.25	188	銅製品 キセル?		長 幅	2.7 0.8	厚 重	0.6 0.71		断面円形の筒状銅製品で、キセルの吸い口側端部の可能性が有るが劣化が著しく詳細は不明。

2号建物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	9.8 4.2	高 5.6			
第37図 PL.25	189	瀬戸・美濃 陶器腰錆碗	口縁部1/2、底 部完	口 底	9.8 4.2	高 5.6	灰白		外面口縁部下螺旋状凹線。内面から口縁部外面灰釉。灰釉に貫入る。凹線部から高台内錆色の鉄釉。高台端部無釉。
第37図 PL.25	190	瀬戸・美濃 陶器 鳥水入れ	取っ手欠	口 底	4.8 3.6	高 2.7	灰白		取っ手貼り付け部は口縁部だけに認められ、棒状取っ手であろう。底部周縁から底部外面回転篋削り。底部周縁面取り。内面から体部外面下端灰釉。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第37図	191	瀬戸・美濃 陶器灯火皿	1/8	口底 (10.8) (5.6)	高	2.0	灰	外面中位以下回転削り。錆釉施釉後底部付近を拭う。	
第37図	192	瀬戸・美濃 陶器十能	基部片	口底 -	高	-	浅黄橙	基部片で取っ手基部残る。内面から底部外面周縁錆釉。	
第37図 PL.25	193	瀬戸・美濃 陶器德利	完形	口底 3.8 5.5	高	18.7	灰白	撫で肩で口縁端部を下方に折り返す。頸部内面から外面に灰釉施釉後、体部外面下位以下を拭う。	
第37図	194	瀬戸・美濃 陶器すり鉢	口縁部片	口底 -	高	-	淡黄	口縁部薄い玉縁状。錆釉。口縁端部の釉剥離多く、使用痕か。	
第37図	195	堺・明石陶 器すり鉢	下半1/3	口底 (15.2)	高	-	赤橙	体部外面回転削り。体部内面下位以下使用により摩滅。	
第37図 PL.25	196	在地系土器 皿	1/2	口底 (9.2) (6.7)	高	1.9	浅黄橙	底部右回転糸切無調整。底部内面右回転螺旋状轆轤目。	
第37図	197	在地系土器 焙烙	口縁部から体部 片	口底 -	高	-	黒	断面中央暗灰色、器表付近灰白色。口縁部器壁厚い。口縁端部上面平坦。内面から外面上半回転横撫で。外面中位接合痕残る。外面下位窪みに型痕残る。外面下端削り。	
第37図	198	在地系土器 焙烙	口縁部から底部 片	口底 -	高	5.5	黒・灰褐	断面灰白色、器表黒色、底部内面灰白色、底部外面灰褐色。内面に内耳1箇所。外面の左端割れ口に焼成後の補修孔2箇所残る。外面下端削り。	
第37図 PL.25	199	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.360 2.375	厚重	0.148 2.11		寛永通寶。表面は彫深く外縁・文字とも明瞭。裏面は彫浅めだが外縁・郭とも明瞭。	
第37図 PL.25	200	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 2.847 2.350	厚重	0.171 4.66		寛永通寶(裏波)。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は彫浅くかつ錆が著しいため外縁・波・郭とも不明瞭。	
第37図 PL.25	201	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 2.855 2.858	厚重	0.145 3.74		寛永通寶(裏波)。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は彫浅いが外縁・波・郭とも明瞭。	
第38図 PL.25	202	鉄製品 鉢	一部欠損	長幅 16.0 3.3	厚重	1.2 33.44		握り鉢の破片で破先をあわせて形で片側先端を劣化破損する。握り部分の半分も劣化破損する。	
第38図 PL.25	203	銅製品 キセル・吸 い口	一部欠損	長幅 7.9 0.9	厚重	1.0 9.96		キセルの吸い口部分で、雁首側表面に装飾の痕と見られる凹凸が残るが、劣化が著しく表面は有れているため識別困難。雁首側内面に木質が残存する。	
第38図 PL.25	204	銅製品 不詳	破片	長幅 4.5 1.0	厚重	1.0 3.61		厚さ1mm程の板状銅製品で、端部で幅広くなり2つに分かれ劣化破損する。他の端部も斜めに劣化破損し全体形状は不明。	
第38図 PL.25	205	鉄製品 釘	一部欠損	長幅 4.0 1.4	厚重	0.9 4.64		断面ほぼ正方形の角釘で、先端部分は劣化破損する。頭は薄く広げ折り曲げる。頭から2cm付近まで木質が錆化残存する。	
第38図 PL.25	206	鉄製品 釘	破片	長幅 4.7 1.1	厚重	0.8 4.74		断面正方形の角釘と見られる鉄製品破片。頭側は角形で終わり先端側は劣化破損する。木質等の痕跡は見られない。	
PL.25	207	鉄製品 釘	破片	長幅 2.3 0.7	厚重	0.5 1.38		断面やや丸みをおびた角釘。先端側は劣化破損、頭は角形で終わる	
第38図 PL.25	208	鉄製品 不詳	破片	長幅 3.8 0.8	厚重	0.6 2.82		断面四角形でややカーブした棒状鉄製品で両端とも劣化破損する。	
第38図 PL.25	209	鉄製品 不詳	破片	長幅 4.7 1.2	厚重	0.7 5.15		断面薄い長方形の鉄製品で、中央付近両側に関状のくびれを持つが両端とも劣化破損し全体形状は不明。木質等の痕跡は見られない。	
第38図 PL.25	210	鉄製品 不詳	破片	長幅 5.0 0.9	厚重	1.0 3.63		断面薄い長方形の鉄製品で、端部は丸みを持ち尖らない他の端部は劣化破損する。全体に木質等の痕跡は見られない。	

2号建物(掘り方)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第38図	213	在地系土器 皿	1/5	口底 (8.7) (5.1)	高	1.5	橙	体部緩く外反し、口縁端部付近内湾気味に立ち上がる。底部左回転糸切無調整。口縁端部灯芯痕1箇所。		
第38図 PL.25	214	在地系土器 円盤状製品	1/2	径	3.0	厚	0.4	灰・黒	焙烙か銅の底部片を擦って円盤状に仕上げる。中央に直径3mmの穿孔。	二次加工品。

ミソグラカ

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図 PL.25	215	銅製品 不詳	ほぼ完形	長幅 4.0 0.5	厚重	0.1 1.12		幅5mm厚さ1mm程の細長い板状の銅製品で両端近くに四角形の孔を持つ。表裏で表面の遺存状況が異なる。	

建物一括

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図 PL.25	216	製作地不詳 磁器 ミニチュア	1/2	口底 2.3 0.7	高	1.2	白	型押成形により高台脇に尊状の三角形文、口縁部外面から体部外面に縦条線文。白磁。	
第45図 PL.25	217	鉄製品 釘	ほぼ完形	長幅 2.3 0.9	厚重	0.8 0.81		断面ほぼ正方形の角釘で先端に向かい細くなり尖る。頭は薄く広げ浅く折り曲げる。木質等の痕跡は見られない。	
PL.25	218	鉄製品 釘	破片	長幅 2.1 0.8	厚重	0.7 1.84		断面ほぼ正方形の角釘。先端側は劣化破損、頭側は角形だが硬い錆に覆われ不明瞭。	

1号土塁

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第39図	224	肥前磁器 染付碗	口縁部1/4	口底 (10.0) -	高	-	灰白	外面コンニャク印判による染め付け。内面無文。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第39図	225	肥前陶器 陶胎染付碗	1/2	(10.4) (5.2)	高	7.4	灰	体部外面植物文。口縁部外面1重圏線間に雲状文。内面無文。高台脇1重圏線。高台外面2重圏線。	
第39図	226	肥前陶器 陶胎染付火 入か香炉	体部下位片	口底 -	高	-	灰色	外面染め付け。内面無釉。	
第39図	227	瀬戸・美濃 陶器 筒形小香炉	口縁部1/8、体 部1/4	口底 (5.7) -	高	-	灰白	口縁部内側に折り曲げる。口縁部内面から体部外面下端灰釉。貫入入る。	
第39図	228	瀬戸・美濃 陶器 筒形小香炉	1/4	口底 (6.0) -	高	-	灰白	口縁部内側に折り曲げる。口縁部内面から体部外面下端灰釉。貫入入る。	
第39図 PL.25	229	瀬戸・美濃 陶器 半胴甕	底部1/4	口底 (13.0)	高	-	浅黄	高台脇面取り状に篋削り。高台境小さく挟り込む。内面から体部外面下位錆釉。底部内面目跡1箇所。	
第39図	230	瀬戸・美濃 陶器碗	体部下位以下 1/4	口底 (5.0)	高	-	灰白	外面回転篋削り。内面から体部外面下位灰釉。底部内面目跡1箇所。	
第39図	231	京・信楽系 陶器上絵碗	口縁部片	口底 -	高	-	灰白	外面赤、黄緑、青灰色の上絵。	
第39図	232	在地系土器 皿	1/4	口底 (9.3) (6.3)	高	1.9	にぶい橙	底部回転糸切無調整。	
第39図	233	在地系土器 皿	1/4	口底 (9.2) (5.5)	高	1.8	にぶい橙	口縁部付近で内湾。	
第39図 PL.25	234	鉄製品 釘?	破片	長幅 4.3 2.1	厚重	0.9 2.58		断面ほぼ正方形のくの字状の鉄製品で、端部は細くなり尖る他の端部側は劣化破損する。	
第39図 PL.25	235	鉄製品 不詳	破片	長幅 7.3 1.9	厚重	1.1 11.19		工具の茎付近と見られる鉄製品。茎との境には両側に大きく棘を持つ。茎には木質が錆化残存し端部は劣化破損する。先端側は角形で終わり錆に覆われるが、破損後錆化した可能性が有る。	
第39図 PL.25	236	石製品 砥石	破片	長幅 (7.3) 3.4	厚重	3.1 111.8	砥沢石	2面使用。左右側面と上端小口面に櫛歯タガネ痕が残る。	

1号井戸

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長幅	厚	重			
第44図 PL.25	237	木製品 井戸杵		長幅 175 10.8	厚	10.5 11.360		ノコギリにより切断した丸木の枝を落として利用し、端部より35cm付近に10cm程の幅で切り込みを施す。約120cm離れた反対面にも切り込みの一部が見られるがその先は破損・欠失し不明。	179頁
第44図 PL.25	238	木製品 井戸杵		長幅 229 15.2	厚	14.4 22.620		ノコギリにより切断した丸木の枝を落として利用。両端部より42cm付近の表裏面にそれぞれ11cmおよび12.5cm程の幅で切り込みを施す。片面の中ほどの二か所に逆方向に傾く形で幅9cm程の圧痕と見られる平坦な凹みがある。	179頁
第44図 PL.25	239	木製品 井戸杵		長幅 183 10.7	厚	10.5 11.100		ノコギリにより切断した丸木の枝を落として利用し、端部より40cm付近に12cm程の幅で切り込みを施す。約120cm離れた同一面にも11cm程の幅で切り込みが見られるがその先は破損・欠失し不明。切り込み面の中ほどの逆方向に傾く形で二か所に圧痕と見られる平坦な凹みがある。	179頁
第44図 PL.25	240	木製品 井戸杵		長幅 228 13.4	厚	13.4 22.640		ノコギリにより切断した丸木の枝を落として利用。両端部より40cm付近の同一面にそれぞれ14cmおよび15cm程の幅で切り込みを施す。株元側端部両面に切り込み面とそろえる様に削りが見られ、その切込近くに二の字の墨書が残る。	179頁
第43図	241	肥前系磁器 染付碗	口縁部1/3、底 部完	口底 6.7 3.3	高	5.1	白	高台脇水平に近く開き、体部境は稜をなす。残存部3方に同じ丸文を1つずつ描く。配置からして4方であろう。内面無文。	242・243と組み物か。
第43図	242	肥前系磁器 染付碗	口縁部～体部 1/4	口底 (7.8) -	高	-	白	外面に文様を線刻して濃みを入れ、輪郭線状に見せる。残存部2方に簡略化した草文と花文を各1つ描く。内面無文。	241・243と組み物か。
第43図	243	肥前系磁器 染付碗	体部1/2、底部 3/4	口底 3.6	高	-	白	外面に文様を線刻して濃みを入れ、輪郭線状に見せる。残存部1箇所草文の一部が残る。内面無文。	241・242と組み物か。
第43図	244	肥前磁器 染付筒形碗	体部下位以下	口底 3.9	高	-	白	体部外面染め付け。体部下端と高台脇1重圏線。高台境2重圏線。底部内面周縁2重圏線。見込み簡略化した五弁花。	
第43図	245	肥前磁器 染付筒形碗	口縁部1/2、底 部1/10	口底 7.3 (3.8)	高	5.1	白	外面矢羽根文と井桁文を交互に描く。高台脇1重圏線。口縁部内面2重圏線。底部内面周縁1重圏線。やや焼成不良で貫入入る。	
第43図	246	肥前磁器 染付碗蓋	摘み～天井部	口摘 4.3	高	-	白	天井部外面植物と麒麟か鹿文。摘み内不明字銘。天井部内面岩文。	
第43図	247	肥前磁器 染付蓋物か	体部一部、底部 3/4	口底 6.3	高	-	白	外面染め付け。残存部内面無文。口縁部欠損	
第43図	248	肥前磁器 染付端反碗 蓋	1/3	口摘 (8.8) (4.8)	高	2.6	白	天井部外面と口縁部内面垣状文。天井部内面1重圏線。	
第43図	249	肥前磁器 染付碗	1/2	口底 (10.8) (4.2)	高	5.1	灰白	外面梅の折れ枝文。高台脇1重圏線。高台境2重圏線。見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部白濁した泥状アルミナ塗布。	
第43図	250	肥前磁器 染付小皿	口縁部一部、底 部1/4	口底 (9.5) (5.9)	高	2.1	白	外面不明文様。高台脇と高台境1重圏線。口縁部内面から底部周縁1重圏目文。	
第43図	251	肥前磁器 染付皿	口縁部1/8、底 部1/4	口底 (14.0) (10.0)	高	3.6	灰白	外面無文。底部内面山と建物を描く。蛇の目凹型高台。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第43図	252	肥前磁器 染付皿	底部1/4	口底	-	高	-	白	体部外面不明文様。高台外面歯齒状文。底部内面2重鋸歯文内に植物を描く。蛇の目凹型高台。	
第43図	253	肥前磁器 染付德利	体部下位以下 1/4	口底	-	高	-	灰白	体部外面下位1重圏線か。内面と高台端部無釉。	
第43図	254	瀬戸・美濃 陶器皿	口縁部1/6	口底	(13.7)	高	-	灰白	内外面白土刷毛塗り。内外面灰釉。細かい貫入入る。	
第43図	255	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	口縁部1/8、体 部以下1/4	口底	(10.2)	高	5.4	白	外面中位と高台脇の文様、高台境の圏線は手描き。口縁部外面素地に凹線3条を刻み、濃みを入れる。体部下位は素地に飛び鉋を施し、濃みを入れる。口縁部内面飛び鉋状の染め付け。底部内面周縁1重圏線。見込み不明文様。	
第43図	256	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	口縁部1/10、底 部1/2	口底	(10.3)	高	5.1	白	外面1重圏線内に花状文。高台脇1重圏線間に不明文様。高台外面1重圏線。口縁部内面簡略化した四方禪文か。底部内面1重圏線内に寿字文。	
第43図	257	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	口縁部1/10、底 部1/3	口底	(10.1)	高	5.6	白	外面1重圏線内に草花文。高台外面2重圏線。口縁部内面簡略化した雷文帯状文。底部内面1重圏線内に寿字文。	
第43図	258	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	口縁部1/8	口底	(10.8)	高	-	白	外面松文。口縁部内面3重圏線。底部内面周縁2重圏線。	
第43図	259	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	体部1/3、底部 1/2	口底	-	高	-	白	酸化コバルトによる染め付け。外面花と唐草文。高台脇1重圏線。高台境付近2重圏線。口縁部内面不明文様帯。底部内面1重圏線内に寿字文。	
第43図	260	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	体部以下	口底	-	高	-	白	酸化コバルトによる染め付け。外面縦線区画内に3本線。高台脇1重圏線間に不明文様と井桁文。口縁部内面3重圏線か。底部内面1重圏線内に寿字文。	
第43図	261	瀬戸・美濃 陶器腰鉋碗	口縁部下1/3	口底	-	高	-	灰白	外面口縁部下螺旋状凹線。腰部外面緩い稜をなし、稜部分に釉が溜まる。高台径小さく低い。内面から口縁部外面灰釉。外面口縁部下から高台内錆色の鉄釉。高台端部無釉。	
第43図	262	瀬戸・美濃 陶器練鉢	底部1/4	口底	-	高	-	白	内面から高台脇灰釉。底部内面団子状の目跡2箇所残存。	
第43図 PL.25	263	瀬戸・美濃 陶器すり鉢	体部下位～底部 1/2	口底	-	高	-	淡黄	体部外面から底部外面回転削り。錆釉。体部内面下位から底部内面使用により若干摩滅。	
第43図	264	堺・明石陶 器すり鉢	口縁部片	口底	-	高	-	橙	残存部の半分は片口部で口縁部を内側から外面側に押し広げる。口縁端部内面の突起は低く丸く、段差は凹線状となる。無釉。	
第43図 PL.25	265	志戸呂陶器 灯火受皿	体部から底部 1/2	口底	-	高	2.3	橙	残存部外面回転削り。内面錆釉。残存部アーチ状抉り認められない。口縁部意図的な打ち欠き。	二次加工。
第43図	266	常滑陶器 甕	口縁部片	口底	-	高	-	浅黄橙	断面浅黄から橙色、内面器表橙色、外面器表灰褐色。口縁端部内面は内側に大きく突き出る。端部外面は上方に丸める。	
第43図 PL.25	267	在地系土器 焙烙	口縁部から底部 片	口底	-	高	-	明赤褐	口縁部外面から底部外面煤付着。丸底。内耳1箇所残存。底部外面型痕。	
第43図 PL.25	268	在地系土器 焙烙	口縁部から底部 片	口底	-	高	-	明赤褐	口縁部外面から底部外面煤付着。丸底。内耳1箇所残存。底部外面型痕。	
第43図	269	在地系土器 置輪	破片	口底	-	高	4.4	黒・にぶい橙	断面黒色、器表付近にぶい橙色、器表黒色、口縁部付近の器表のみにぶい橙色。底部外面釘書きによる文字か記号。	底部に記号か文字。
第43図	270	在地系土器 置輪	破片	口底	-	高	4.6	橙・黒	断面と口縁部外面から内面器表橙色、基部上面から底部外面器表黒色。基部の器壁やや厚い。	
第43図	271	在地系土器 置輪	破片	口底	-	高	-	橙・黒	断面中央黒色、器表付近と口縁部外面から内面器表橙色。基部上面から底部外面器表黒色。	
第43図 PL.25	272	瓦 軒先	瓦頭部片	長幅	-	厚	1.8	暗灰	断面灰白色、器表暗灰色。燻し焼成。唐草文。棧瓦の軒先であろう。	
第43図 PL.25	273	鉄製品 不詳	破片	長幅	8.3	厚重	0.5 2.3 2.97		劣化の著しい棒状鉄製品で、表面は全体に錆化剥落し本来の形状を留めない。	
第43図 PL.25	274	石製品 砥石	破片	長幅	(11.7)	厚重	4.2 226.9	ホルンフェルス	表裏面2面使用。砥面には線状痕が多数残る。上面および左側面は摩滅しているものの、研磨に使用していない。	

1号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第44図	275	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底	-	高	-	灰	断面淡赤橙色、器表灰色。口縁部内湾。器壁薄い。口縁端部外面は丸く小さく突き出る。

2号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第44図	276	在地系土器 皿	口縁部一部、底 部完	口底	(6.7)	高	2.4	黒～にぶい橙	口縁端部わずかに外反。底部左回転糸切無調整。

屋敷内

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図	277	肥前磁器 青磁染付碗	口縁部から体部 1/6	口底	(8.1)	高	-	灰白	口縁部内面四方禪文。内面透明釉、外面青磁釉。
第45図	278	肥前磁器 青磁染付碗	口縁部～体部 1/2欠	口底	(11.7)	高	5.9	白	底部周縁太い2重圏線。見込み五弁花コンニャク印判。口縁部外面から高台外面青磁釉。高台内と内面透明釉。見込み蛇の目鉋剥ぎ。釉剥ぎ細かい砂付着。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図	279	肥前磁器 染付碗	口縁部から体部 1/5	口底 -	(10.0) -	高 -	灰白	外面残存部コンニャク印判による桐文。高台脇1重圏線。	
第45図	280	肥前磁器 染付小杯	口縁部から体部 1/6	口底 -	(7.8) -	高 -	灰白	口縁部付近外反。体部外面染付一部残存。	
第45図	281	瀬戸・美濃 陶器腰鍔碗	体部1/3、底部 完	口底 4.3	-	高 -	灰白	外面口縁部下螺旋状凹線。凹線部から高台内胎釉に近い鉄釉。高台端部無釉。内面灰釉。灰釉に粗い貫入入る。	
第45図	282	瀬戸・美濃 陶器腰鍔碗	体部下位以下	口底 4.7	-	高 -	淡黄	外面口縁部下凹線。内面灰釉。凹線部から高台内錆色の鉄釉。高台端部無釉。	
第45図 PL.26	283	瀬戸・美濃 陶器腰鍔碗	口縁部1/2、底 部完	口底 4.7	(9.5) 4.7	高 5.6	灰白	外面口縁部下螺旋状凹線。内面から口縁部外面灰釉。灰釉に貫入入る。凹線部から高台内錆色の鉄釉。高台端部無釉。	
第45図	284	瀬戸・美濃 陶器柳碗	口縁部1/2、底 部完	口底 4.7	11.9 4.7	高 5.5	灰白	外面一方に鉄絵具による枝垂れ柳文。内面から高台脇灰釉。貫入入る。	
第45図 PL.26	285	瀬戸・美濃 陶器 灯火受皿	口縁部一部欠	口底 3.8	8.0 3.8	高 1.8	灰白	受け部1箇所「コ」字状に抉る。外面口縁部以下回転篋削り。錆釉施釉後、口縁部外面以下を拭う。	
第45図 PL.26	286	瀬戸・美濃 陶器 筒形香炉	1/7	口底 -	(9.8) -	高 -	灰白	口縁部内面、断面三角形状に突き出る。体部内面から体部外面下端深井製品に似た灰釉。貫入入る。残存部に摺絵など認められない。口縁部外面に小剥離2箇所。火入れとして使用か。	
第45図	287	堺・明石陶器 すり鉢	口縁部1/7	口底 -	-	高 -	灰赤	断面暗灰色、器表灰赤色。口縁部内面突起は低く丸い。外面口縁部以下回転篋削り。	
第45図	288	常滑陶器 甕	口縁部片	口底 -	-	高 -	橙	口縁部「T」字状をなし、端部外方は斜め上方に伸びる。	
第45図	289	在地系土器 焙烙	1/5	口底 -	(39.6) -	高 -	黒	断面灰白色、器表黒色。中位の器壁やや厚い。内外面轆轤目顕著。外面接合痕残らない。外面下位窪みに型痕残る。外面下端篋削り。	
第45図 PL.26	290	在地系土器 焙烙	1/4	口底 -	(41.6) (38.0)	高 5.8	黒・灰褐	断面中央暗灰色、器表付近灰褐色。口縁部から体部内外面器表黒色、底部内外面器表灰褐色。内外面轆轤目。残存部内面に内耳1箇所。外面下位型痕残る。外面下端篋削り。	
第45図	291	在地系土器 壺か	口縁部1/5	口底 -	(20.5) -	高 -	黒	断面中央黒色、器表付近灰白色、器表黒色。内外面回転横撫で。外面肩部以下撫で。	
第45図 PL.26	292	在地系土器 蓋	2/3	口底 11.9	14.7 11.9	高 2.7	黒	落とし蓋。天井部内面型痕。天井部周縁と端部篋削り。天井部外面回転横撫で。中央に摘み貼り付け。天井部に焼成前の円孔6箇所。	
第45図 PL.26	293	土製品 人形	前面下部片	口底 -	-	高 -	にぶい橙	型押し成形。下面は塞いでいない。意匠は不明。	
第45図 PL.26	294	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.318 2.342	厚重 0.158 2.03			寛永通寶。表面は彫深く外縁・郭とも明瞭だが錆化のため文字一部不明瞭。裏面は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	
第45図 PL.26	295	銅製品 キセル		長幅 5.7 0.9	厚重 1.0 3.60			直径1cm厚さmm程の筒状金属製品で両端とも劣化破損する。296とともにキセルの一部と考えられるが吸い口部・火皿等の接続痕跡・羅卯等の痕跡も確認できない。	
第45図 PL.26	296	銅製品 不詳	破片	長幅 9.0 0.8	厚重 1.0 6.92			直径1cm厚さ1mm程の筒状金属製品で端部は直角で他の端部は劣化破損する。キセルの一部と考えられるが吸い口部・火皿等の接続痕跡・羅卯等の痕跡も確認できない。	
第45図 PL.26	297	銅製品 不詳	破片	長幅 3.8 2.0	厚重 0.3 7.36			厚さ1～2mm程の板状金属製品で、外形は劣化破損部分が多く本来形状は不明。片面は青緑色で比較的平滑反対縁は灰緑色で錆化凹凸が多い。	
第45図 PL.26	298	鉄製品 釘	破片	長幅 5.5 0.6	厚重 0.6 3.64			断面長方形の角釘で、先端側は斜めに劣化破損し、頭側も僅かに広がり劣化破損するため全体形状は不明。木質等の痕跡は見られない。	
第45図 PL.26	299	鉄製品 釘	ほぼ完形	長幅 3.2 1.4	厚重 2.5 5.57			断面正方形の角釘でJの字状に折れ曲がる。先端付近で急に細くなり尖る。頭は薄く広げ浅く折り曲げる。木質等の痕跡は見られない。	
第45図 PL.26	300	鉄製品 釘	一部欠損	長幅 2.2 0.7	厚重 0.7 0.63			断面ほぼ正方形の角釘で、先端に向かい細くなり端部は劣化破損する。頭は薄く広げ浅く折り曲げる。木質等の痕跡は見られない。	
第45図 PL.26	301	鉄製品 釘	ほぼ完形	長幅 2.4 0.6	厚重 0.5 0.54			断面ほぼ正方形の角釘で、先端に向かい細くなり端部は尖る。頭は小さく広げ直角に折り曲げる。木質等の痕跡は見られない。	
PL.26	302	鉄製品 釘	ほぼ完形	長幅 2.7 0.8	厚重 1.0 0.84			断面ほぼ正方形の角釘。先端に向かい細くなり尖る、頭は薄く広げ強く折り返す。木質等の付着は見られない。	
PL.26	303	鉄製品 釘	破片	長幅 3.0 0.5	厚重 0.4 0.79			断面ほぼ正方形の角釘。先端に向かい細くなり尖る、頭は薄く広げやや折り曲げたところで劣化破損する。木質等の付着は見られない。	
PL.26	304	鉄製品 釘	破片	長幅 2.2 0.5	厚重 0.5 0.62			断面ほぼ正方形の角釘。先端に向かい細くなりやや尖る、頭側は破損し錆化する。	
第45図 PL.26	305	鉄製品 不詳	破片	長幅 2.9 1.4	厚重 0.6 2.67			断面長方形の鉄製品破片で、中央付近に開状のくびれを持ち刀子の破片の可能性が有るが破損しているため刃部を確認できない。	
PL.26	306	鉄製品 不詳	破片	長幅 3.2 1.4	厚重 1.0 3.06			薄い板状鉄製品で、土砂を巻き込み錆化し本体空洞化し脆弱で詳細形状は不明。	
第45図 PL.26	307	礫石器 敲石	完形	長幅 11.9 9.4	厚重 4.5 701.2		粗粒輝石安山岩	正面中央部に敲打痕および磨面、周辺礫稜部に敲打痕を有する。	
第45図 PL.26	309	石製品？ 凹み石	完形	長幅 9.7 7.6	厚重 4.4 287.7		粗粒輝石安山岩	不整な楕円礫素材。正面中央部に播り鉢状の凹み(長径4.8cm)をもつ。凹み内部と周辺は平滑である。凹み内部では、棒状工具による加工痕が平滑面を切っている。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第45図 PL.26	310	石製品 不明	不明	長 幅	(13.7) (11.9)	厚 重	6.5 790.9	角閃石安山岩	形状は直方体である。表裏面および側面を研磨により整形。	

1区(屋敷外の遺構)

1号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第46図1 PL.26	312	在地系土器 皿	底部	口 底	- 4.1	高 -	-	橙	底部器壁厚く、底部は台状をなす。底部静止糸切無調整。底部内面不定方向の撫で。	
第46図1 PL.26	313	在地系土器 皿	口縁部1/4、底 部1/3	口 底	(8.7) (5.4)	高 -	2.8	にぶい橙	口縁部外反。口縁部歪む。口に比して器高高い。底部右回転糸切無調整。	
第46図1 PL.26	314	在地系土器 焙烙か	底部片	口 底	- -	高 -	-	灰黄	外面型痕。胎土、焼成から、江戸時代焙烙か鍋底部の可能性高い。	

17号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第46図2 PL.26	315	在地系土器 内耳鍋	口縁部から体部 片	口 底	- -	高 -	-	にぶい赤褐	口縁部長く、内湾。口縁部外反。屈曲部内面稜をなし、段差はゆるい。外面煤付着。	
第46図2 PL.26	316	在地系土器 内耳鍋	体部片	口 底	- -	高 -	-	灰	断面にぶい橙色。器表灰色。残存部下位1/3胎土中の夾雑物多く、異なった胎土を使用。外面煤付着。	
第46図2 PL.26	317	在地系土器 内耳鍋	口縁部1/5	口 底	- -	高 -	-	灰	断面にぶい橙色、器表灰色。器壁薄い。口縁下端で屈曲し、口縁部内湾。口縁端部内面稜をなす。端部上面平坦。屈曲部内面低い段差。外面煤付着。	

6号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第14図 PL.26	318	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.362 2.354	厚 重	0.139 2.28		表面は彫は深い外縁・文字・郭とも不明瞭、裏面は彫は浅く外縁・郭ともやや不明瞭。文字は不明瞭だが○寧元寶と読み取れる。	

竹藪

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第51図	319	肥前磁器 染付小杯	1/4	口 底	(7.9) (2.0)	高 -	4.0	灰白	口縁部外反。底部器壁厚い。外面不明文様。	
第51図	320	瀬戸・美濃 陶器腰錆碗	口縁部1/8、体 部1/4	口 底	(9.8) -	高 -	-	灰白	外面口縁部下螺旋状凹線。内面から口縁部外面灰釉。外面口縁部下錆色の鉄釉。灰釉に粗い貫入。	
第51図	321	瀬戸・美濃 陶器尾呂碗	体部以下1/4	口 底	(5.2) -	高 -	-	淡黄	内面から高台脇胎釉。高台脇以下薄い胎釉。口縁部外面薬灰釉。	
第51図	322	在地系土器 不詳	底部片	口 底	- -	高 -	-	浅黄橙	断面中央黒色、器表付近から器表浅黄橙色。内面底部境の調整やや粗く、焙烙でない可能性高い。底部外面型痕。	

〔3.1・2面〕

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第51図	323	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	1/7	口 底	(19.8) -	高 -	-	淡黄	口縁部肥厚し、内側に丸く突き出る。外面口縁部下凹線状に窪む。外面下半回転篋削り。体部内面中位から外面灰釉。	

遺物観察表

[4.2面]

3号井戸

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長幅	57.5 18.5	厚重 2.7 5000			
第61図 PL.26	326	石造物 板碑	略完形	長幅	57.5 18.5	厚重 2.7 5000	緑色片岩	左下端部欠。碑面摩滅甚大。紀年銘不明。2条線・稜線なし。僅かに浅い丸彫りの阿弥陀如来一尊種子(キリーク)と蓮座の一部が残る。裏面左半部に横方向の工具(幅1.6cm程の平ノミ状)の連続刺突痕。	

4号井戸

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	-	高			
第61図 PL.26	327	在地系土器 片口鉢か	口縁部片	口底	-	高	灰白	断面黒色、器表灰白色。口縁部わずかに外反し、端部は稜をなして内側に突き出る。端部上面三角形に稜をなす。	
	328	石造物 板碑石材?	不明	長幅	31.5 17.5	厚重 6.6 6700	緑色片岩	板状。板碑とするには非常に厚く、加工痕が見られないことから板碑石材?としたが、詳細は不明である。	

2号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	-	高			
第57図	329	在地系土器 皿	底部1/2	口底	3.8	高	橙	底部器壁厚く、底部は台状をなす。底部糸切無調整。	
第57図	330	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底	-	高	黒	断面中央灰白色、器表付近橙色、内面器表暗灰色、外面器表黒色。内面口縁部下段差無く曲がる。	
第57図 PL.26	331	鉄製品 不詳	破片	長幅	6.4 1.5	厚重 1.5 13.79		断面ほぼ正方形の角棒状鉄製品で、端部はやや丸みを持ち終わり他の端部側は劣化破損し全体形状は不明。木質等の付着は確認できない。	
第57図 PL.26	332	石製品? 凹み石	完形	長幅	20.7 16.7	厚重 10.1 4493.3	粗粒輝石安山岩	楕円礫上面に長軸3.3cm、深さ5mm程度の不整形な凹みをもつ。凹み内側は平滑である。	

集合遺構(2号土塁上面)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	-	高			
第62図	335	肥前磁器 染付皿	底部1/3	口底	(4.1)	高	灰白	底部内面2重圏線内に草花文か。外面無文。高台端部のみ無釉。	
第62図	336	瀬戸・美濃 陶器 碗	底部	口底	4.2	高	灰白	内面鉄釉。外面無釉。割れ口やや摩滅。	
第62図	337	常滑陶器 片口鉢か	底部片	口底	-	高	暗灰	内面斑状に自然釉かかる。内面平滑。常滑陶器片口鉢Ⅱ類か。	
第62図	338	常滑陶器 甕	肩部片	口底	-	高	灰~褐灰	断面中央黒色、器表付近橙色、器表灰色から褐灰色。外面自然釉かかる。釉は白っぽく濁る。	
第62図	339	在地系土器 皿	底部1/4	口底	(7.0)	高	橙	底部左回転糸切無調整。	
第62図	340	在地系土器 皿	底部2/3	口底	(5.0)	高	橙	底部左回転糸切無調整。	
第62図	341	在地系土器 皿	口縁部1/8、底部1/4	口底	(9.2) (5.4)	高 1.7	橙	口縁端部油煙付着。底部回転糸切無調整。	
第62図	342	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底	-	高	黒	断面にふい橙色、器表黒色。口縁端部外面水平に折り曲げる。端部上面平坦。器壁やや厚い。	
第62図	343	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底	-	高	灰	器壁厚く、口縁部短い。内面口縁部下低い段差。外面煤付着。	
第62図 PL.26	344	在地系土器 内耳鍋	体部から底部片	口底	-	高	暗灰	断面にふい橙色。丸底。器壁やや厚い。	
第62図	345	在地系土器 内耳鍋か	口縁部片	口底	-	高	灰	口縁部ゆるく内湾。口縁端部内面稜をなし、上面平坦。	
第62図	346	在地系土器 片口鉢か	口縁部片	口底	-	高	黒	口縁端部内側に小さく突き出る。内面から口縁部外面回転横撫で。外面口縁部以下撫で。	
第62図 PL.26	347	在地系土器 火鉢	口縁部から体部片	口底	-	高	暗灰	断面橙色、器表暗灰色、口縁部内面から端部上面器表橙色。外面突帯間に菱形スタンプ文。外面器表ほとんど剥離。外面器表粗い磨き。	
第62図 PL.26	352	石製品 凹み石	完形	長幅	21.0 21.0	厚重 15.0 3896.8	二ツ岳軽石	上面に掃り鉢状の凹みを丸タガネ状工具により穿つ。内面研磨の痕跡なし。底面及び側面の所々を平ノミ状工具により切削し、面を造り出す。	

洪水層

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長幅	9.6 6.5	厚重 4.5 169.42			
PL.26	355	鉄滓 流動滓?	破片	長幅	9.6 6.5	厚重 4.5 169.42		表面は黒色でなめらか、一部を茶褐色の酸化土砂が覆う。下面は灰黒色で凹凸が有り炭痕などの凹みを伴う。	

2面遺構外出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	-	高			
第62図 PL.26	356	龍泉窯系青 磁 碗	口縁部片	口底	-	高	灰白	外面片彫りによる蓮弁文。残存幅狭く、残存部に鑄認められない。内外面青磁釉。	
第62図 PL.26	357	中国磁器か 染付皿	底部片	口底	-		白	高台外面削る。高台内傾。高台端部外面から内面下半無釉。	

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第62図 PL.26	358	古瀬戸陶器 平碗か	体部下位片	口 底	- -	高 -	灰白	内面から残存部外面下位灰釉。細かい貫入入る。器厚、傾きから平碗であろう。	
第62図 PL.26	359	瀬戸・美濃 陶器 志野不詳	底部片	口 底	- -	高 -	淡黄橙	内面鉄絵。内面の志野釉厚い。外面の釉薄く、平坦であり底部と推定される。	大窯4段階後半～末。360と同一個体の可能性高い。
第62図 PL.26	360	瀬戸・美濃 陶器 志野不詳	口縁部片	口 底	- -	高 -	淡黄橙	体部外反。口縁部屈曲して立ち上がり外反。内面鉄絵。内外面厚い志野釉。胎土、釉調は359と同じ。	大窯4段階後半～末。359と同一個体の可能性高い。
第62図 PL.26	361	瀬戸・美濃 陶器 折縁皿	1/8	口 底	- -	高 2.5	灰白	口縁部外反し、端部上方に折り曲げる。体部内面丸鑿状工具で菊花状に削ぐ。残存部全面に灰釉。高台脇削り込むが釉が溜まる。貫入入る。	大窯。
第62図 PL.26	362	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	- -	高 -	灰	器壁やや厚く、口縁部やや短い。口縁部下は段差なく外反。口縁端部内外面丸味をもつ。430に比して器壁少し厚いが、色調調整痕はきわめて似る。	430と同一個体か。
第62図 PL.26	363	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.351 2.366	厚 重 0.185 2.69		洪武通寶。表面は彫非常に深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面も彫非常に深く外縁・郭とも明瞭。	
第62図 PL.26	364	銅製品 銭貨	一部欠損	縦 横	2.454 2.403	厚 重 0.127 2.05		皇宋通寶。表面は彫浅目だが外縁・郭とも明瞭、文字はやや潰れ気味。裏面は平坦で外縁・郭は不明瞭。	
第62図 PL.26	365	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.444 2.394	厚 重 0.135 2.42		元符通寶?。表面は彫深く外縁・文字・明瞭、文字は錆化のため不明瞭。裏面はやや彫浅いが外縁・郭とも明瞭。	
PL.26	366	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 幅	4.5 1.7	厚 重 1.1 6.06		断面四角形の角釘で中央でくの字に曲がる。先端は細くなるが尖らない。頭は斜めに細くなるが折り返し等は確認できない。	

遺物観察表

[5.3面]

2号土塁

挿 図 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第65図 PL.27	367	形象埴輪 人物(男子)	顔の左下から右 後頭部の一部。				砂粒は細かい・海 綿骨針	粘土板を貼り付け顎から頬のふくらみを成形。左目左下と 口の切り込み、左耳孔の一部が残存。工具で切開している。 左顎下に粘土の剥離痕。耳環あるいは美豆良が装着されて いたか。右後頭部は上を右側に束ねた分け目を段で表現し ている。縦方向にハケメを施し髪毛を表現している。内面 はていねいなナデ。	
第66図 PL.27	368	形象埴輪 人物(女子)	両目から額部分 の左顎の一部が 残存				海綿骨針	上端は髷が欠損した様子がわかる。左右の目の切り込みの 一部とその上には粘土紐を貼り、眼窩上突起が表現される。 豆粒大の粘土粒は耳玉を表現したものか。鼻が剥離した痕 跡が認められる。内面は丁寧なナデ。	
第66図 PL.27	369	形象埴輪 人物(頸部)	着衣の襟首と首 飾り。					着衣の端部は胴部本体に粘土紐を貼り足し厚みをもたせて いる。残存部下端には刺突文が並ぶ。首飾りの玉は直径1.3 cmと大きい。	
第65図 PL.27	370	形象埴輪 人物(左手)	上腕部から肩部 にかけての破片					左手か。腕は中実の粘土棒を開口させた肩口に差し込んで 接合させており、胴部内に腕部端が柄状に延びている。肩 部は腕の粘土棒に粘土を貼り足して成形している。	
第65図 PL.27	371	形象埴輪 人物(左腕 か)	上腕部の残存				海綿骨針	左腕か。剥離部分が多い。中実。	
第65図 PL.27	372	形象埴輪 人物	左下げ美豆良の 下半部、中実					下端はL字状に屈曲。前方に突出する。幅1.1～1.3cmの 飾り紐が3条見られるが大半が剥離している。	紐の外面に 赤色塗彩か。
第65図 PL.27	373	形象埴輪 人物	右手				雲母	粘土紐を貼り手甲の装着を表現している。刺突文が重ねら れている。指は5本が個々に表現されていたと考えられる が、いずれも欠損している。手のひらは本体に接地してい た。	
第65図 PL.27	374	形象埴輪 盾か	盾か					外線が弧状をなす板状品である。内外面ともハケメ。縁部 にのみナデ。	
第65図 PL.27	375	形象埴輪 家	入母造り上屋根 の流れ部分				海綿骨針	破風は妻側の端部を外側に折り返している。頂部には粘土 帯を貼りへら描きによる鋸歯文を配している。流れの外 面にはへら描きによる蕨手文が配されていると考えられる。	
第65図 PL.27	376	形象埴輪 家	下屋根の破片					内面には壁面、基台部への接合部が見られる。軒先部分 は短く外反して延びる。外面にはハケメの上にへら描き。円 弧文が見られる。	
第65図 PL.27	377	形象埴輪 家	入母造りの上屋 根棟部分					流れの傾斜は極めて強く、妻側から見た形状は極めて扁平 に映るものと考えられる。頂部には堅魚木が剥離した痕跡 が見られ、本体を貫通する小孔が穿たれている。頂部直下 には横方向の粘土板がはりつき、線刻による文様が施され ている。	
第65図 PL.27	378	形象埴輪 家	入母造りの上屋 根棟部分					377と同一個体。7.8～8.4cm間隔に堅魚木が配されてい たが剥離している。剥離部分には直径3.5×4.5mmの小孔が本 体を貫通している。頂部直下には両側に横方向の粘土板が 張り付く。内面は丁寧なナデ。	
第66図 PL.27	379	形象埴輪 家	上屋根の一部					内面に接合痕が見られることから下端に近い部分と考えら れる。妻側の端部は短く屈曲外反させ破風を表現している。 流れにはハケメの上にへら描きによる区画文、円弧文が見 られる。	
第66図 PL.27	380	形象埴輪 家(屋根)	屋根流れ部分の 破片					外面にはハケメの上にへら描きによる鋸歯文が施される。	
第66図 PL.27	381	形象埴輪 家	切妻造りの家の 上屋根の破片					破風は小さく折り返っている。破風の縁に刺突文を、端面 に線刻を施す。流れにはハケメを残した上に刺突を伴う線 刻文が延びる。	
第66図 PL.27	382	形象埴輪 家	堅魚木の一部					中実の棒状粘土をへらで成形して端部としている。頂部寄 りに直径6mmの円孔が貫通している。	
第66図 PL.27	383	形象埴輪 基台部	大型破片					形象部分は本体からスカート状で外反する。先端は欠損し ている。外面にへら描き。基台部には楕円形あるいは円形 と考えられる透孔の一部が残存する。外面は縦ハケ。内面 はナデ。	家形埴輪の 下屋根から 基部か。
第66図 PL.27	384	形象埴輪 不明	馬の繋か。					横断面は弧をなす。幅4.8cm程の粘土帯が張り付き帯状に 肥厚する。外面にはハケが施され一部に剥離痕が見られる。 馬の繋か。	
第66図 PL.27	385	形象埴輪か	基部片	底	17.4		細砂粒/良好/明赤 褐		
第66図 PL.27	386	形象埴輪	胴部着衣の合わ せと結びの紐					合わせの縁は粘土を貼り厚みを表現している。粘土の方向 に沿って刺突文が2列並ぶ。蝶結びの紐にも刺突文を重ね ている。	表面に黒色 の付着物。 塗彩か。
第66図 PL.27	387	形象埴輪 不明					雲母	幅6.1cm、厚さ8mmの薄い粘土板の破片。本体から剥離した もの。両縁に沿って刺突文が2列ずつ施される。	外面に赤色 塗彩。
第66図 PL.27	388	形象埴輪 不明						厚さ1.2cmの粘土板。本体から剥離した痕跡が見られる。 三日月形となる縁部に沿って刺突文を伴う線刻文が配され ている。人物の胴部に装着された刀子を表現したものか。 赤色塗彩が施される。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第66図 PL.27	389	形象埴輪 不明	籠手あるいは着 衣の袖口か				雲母	厚さ5～7mmの薄い粘土板。本体から剥離したものの。横断面は強く彎曲。縦方向にヘラ描き線文が4本残る。天地左右不明。	
第66図	390	形象埴輪					細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐		
第66図 PL.27	391	円筒埴輪	胴部片	凸 径	21.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙		
第66図 PL.27	392	円筒埴輪	胴部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙		
第66図 PL.27	393	円筒埴輪	胴部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙		
第66図 PL.27	394	円筒埴輪	基底部片	底	17.6		細砂粒・粗砂粒・ 褐粒/良好/にぶい 黄橙		
第66図	395	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	- -	高 -	灰・黒	断面灰白、内面器表灰色、外面器表黒色。口縁部やや短く、やや厚い。	
PL.27	396	鉄製品 不詳	破片	長 幅	23.0 3.3	厚 重	2.2 63.87		534と接合。刃部14cmと茎部6.5cmを有する鉄製刃物。茎には目釘孔は無く、木質も残存しない。棟側は刃～茎へは間を持たず直線的で刃側はなで肩状に茎に移行する。刃部は幅2.5cm厚さ0.5cm程で大刀的な大きさだが、刃部は13.5cm程で細くなり両端に茎を持つせんのような形状を示すが、端部は錆に覆われ脆弱なため詳細は不明。
PL.27	397	鉄製品 不詳	破片	長 幅	2.6 1.5	厚 重	1.0 3.11		鑄造鉄製品破片、全体に破損・錆化のため詳細不明。
第67図 PL.27	398	鉄製品 不詳	ほぼ完形	長 幅	4.3 1.4	厚 重	1.2 5.90		断面ほぼ正方形で一端に向かいラップ状に広がり端部は内側に凹む。他の端部はやや細くなるが尖らずに終わる。
第67図 PL.27	400		加工礫 完形	長 幅	39.2 29.6	厚 重	16.8 19460	二ツ岳軽石	円礫の上下面および側面の3面に平ノミ・丸タガネ状工具により平坦面を造り出す。面は粗削りと平滑の両状態有り。古墳石室の石を転用か。
第67図 PL.27	405	石造物 板碑	基部破片	長 幅	(33.9) (26.5)	厚 重	(3.1) 3520	緑色片岩	表面に斜方向の工具(幅1cm程の平ノミ状)の連続刺突痕。推定幅26cmほどの中型板碑。
第67図 PL.27	407	石製品 凹み石	完形	長 幅	13.7 13.0	厚 重	5.5 866.8	角閃石安山岩	正面中央部に播り鉢状の凹み(直径約9cm)をもつ。裏面は中央部に敲打痕と磨面が見られる。

門

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第67図 PL.27	411	礎石		長 幅	48.8 38.8	厚 重	10.8 30000	粗粒輝石安山岩	板状礎。柱当たり痕(12.8×11.2cm)あり。	東側礎石
第67図 PL.27	401	礎石		長 幅	47.6 31.6	厚 重	15.2 39700	粗粒輝石安山岩	上面凹状を呈する。柱当たり痕(12.8×12.4cm)あり。上面左側が平滑である。	西側礎石

5号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第68図 PL.28	413	形象埴輪 軀	一部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	軀	
第68図 PL.28	414	形象埴輪	形象埴輪の基台 部					本体裾部は円筒本体から短くスカート状に延びる。外面は磨滅するが線刻による文様が配されている。	
第68図 PL.28	415	形象埴輪 家形か	一部片				細砂粒/良好/にぶ い橙		
第68図 PL.28	416	形象埴輪 靴か	板状の破片					外面はハケメを施した上に外縁に沿って2条1単位の刺突文が列をなす。	
第68図 PL.28	417	形象埴輪 人物	着衣の襟口、小 破片				雲母	豆粒上の粘土が並ぶ。首飾りの一部と考えられる。	
第68図 PL.28	418	円筒埴輪	胴部片				細砂粒/良好/にぶ い黄橙		
第68図 PL.28	419	龍泉窯系青 磁 碗か	口縁部片	口 底	- -	高 -	灰白	口縁端部外反し、外方に小さく肥厚。内外面青磁釉。	
第68図 PL.28	420	龍泉窯系青 磁 鎚蓮弁文碗	底部1/3	口 底	- -	高 -	灰白	体部外面片彫りによる蓮弁文。内面から高台内周縁青磁釉。高台端部の釉は削らない。	
第68図 PL.28	421	古瀬戸陶器 平碗	体部1/4、底部 2/3	口 底	- 5.0	高 -	灰白	外面回転鑿削り。高台脇水平に削り込む。高台内浅く削り込む。内面から体部外面中位灰釉。体部内面下位目跡2箇所残る。	
第68図	422	常滑陶器 甕か	体部片	口 底	- -	高 -	暗灰・褐灰	断面から内面器表暗灰色、外面褐灰色。外面木口状工具による斜位撫で。内面撫で。	
第68図	423	常滑陶器 甕か	肩部片か	口 底	- -	高 -	灰白	断面灰白色、内面器表明赤褐色、外面器表褐灰色。外面自然釉薄くかかるが、白濁して剥離する。	
第68図 PL.28	424	在地系土器 皿	1/2	口 底	(7.8) (3.9)	高 2.1	灰白	口縁部から体部内湾。轆轤右回転調整。底部回転糸切無調整。底部から体部内面指撫で。	
第68図	425	在地系土器 皿	底部	口 底	- 4.9	高 -	にぶい褐・黒	断面から外面器表黒色、内面器表にぶい褐色。底部左回転糸切無調整。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第68図 PL.28	426	在地系土器 皿	1/2	口底 (7.4) 5.2	高 2.0		橙	体部外面下位外反気味で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。内面底部境不明瞭。底部右回転糸切無調整。	
第68図 PL.28	427	在地系土器 皿	口縁部一部、底部完	口底 (13.5) 6.5	高 3.3		にぶい橙	底部器壁厚い。体部外反し、口縁部内湾気味。底部内面右回転螺旋状轆轤目。底部右回転糸切無調整。	
第68図	428	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底 -	高 -		灰	断面灰白色、器表灰色。器壁やや厚く、口縁部長い。口縁部内面段差。口縁端部上面平坦。	
第68図	429	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底 -	高 -		灰	口縁端部上面平坦。口縁端部外面わずかに突き出る。残存部に内耳貼り付け時の窪み残る。	
第68図	430	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底 -	高 -		灰	器壁やや厚く、口縁部短い。口縁部下は段差なく屈曲。口縁端部内面稜をなすが、外面は丸い。外面煤付着。	
第68図	431	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底 -	高 -		黒	断面灰白色、器表黒色。口縁部内湾。外面煤付着。残存部端に内耳貼り付け痕残る。貼り付け時に器形歪む。	
第68図	432	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底 -	高 -		灰	器壁薄い。口縁端部外面丸みを持つ。	
第68図	433	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底 -	高 -		にぶい橙・黒	断面にぶい橙色、内面器表にぶい橙色から黒色、外面器表黒色。口縁部わずかに内湾。口縁端部内傾。	
第68図	434	在地系土器 内耳鍋	体部下位から底部片	口底 -	高 -		黒・にぶい橙	断面灰白色、内外面器表黒色、体部外面下端から底部外面器表にぶい橙色。丸底。体部器壁厚く、外面の撫では丁寧。胎土中に片岩含む。	
第68図	435	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口底 -	高 -		灰	内面丁寧な回転横撫で。口縁部外面強い回転横撫でにより口縁部下に低い段差。口縁端部上面丸みを持つ。端部内面折り返すように丸く突き出る。	
第68図	436	在地系土器 片口鉢	体部下位片	口底 -	高 -		暗灰	断面橙色、器表暗灰色。胎土に片岩含む。内面使用により平滑。	
第68図	437	在地系土器 片口鉢	底部1/4	口底 (10.9)	高 -		灰	体部下位内湾気味に立ち上がる。体部下位と底部内面使用により平滑。内面底部境湾曲が強く、すり粉木があたらず摩擦しない。底部板作りか。	
第68図	438	在地系土器 片口鉢	体部下位片	口底 -	高 -		灰白・灰白	断面から内面器表灰白色、外面器表暗灰色。体部下位ゆるく外反。残存部すり目なし。	
第68図	439	在地系土器 片口鉢	体部下位片	口底 -	高 -		にぶい橙	断面灰色、器表付近から器表にぶい橙色。器壁厚い。体部内面10本以上1単位のすり目。	
第68図	440	在地系土器 火鉢	口縁部から底部片	口底 -	高 14.2		灰	断面中央黒色、器表付近灰白色、器表暗灰色。内面撫で、外面回転横撫で。口縁端部上面平坦。脚1箇所残存。3脚であろう。	
第69図	441	在地系土器 火鉢か	底部片	口底 -	高 -		褐灰・黒	断面黒色、器表付近にぶい橙色、内面器表褐灰色、外面器表黒色。器壁は1.6cmと厚い。内面撫で。外面離れ砂付着。	
第69図	442	在地系土器 不詳	口縁部片	口底 -	高 -		明褐灰～黒	断面黒色、器表付近から器表褐灰色、外面下位器表のみ黒色。体部やや内湾し、口縁部外反。口縁端部内側に突き出し、上面中央は明瞭な稜をなす。内外面回転横撫で。	
第69図 PL.28	454	石造物 板碑片?	基部破片	長幅 (15.0) (13.0)	厚重 (3.6) 1001.6		緑色片岩	厚さから大型板碑片か。側部を平坦にして転用。稜部に研磨痕。	
第69図 PL.28	457	石製品 石臼(上臼)	2/3	径高 37.2 13.0	厚重 11660		粗粒輝石安山岩	縁の剥落部も若干の摩擦。下面の挽面はやや偏減りし溝が僅かに残る。側面と下面の孔の一部に細い丸タガネ状の工具痕を残す。	
第69図	461	石製品 石鉢	口縁部片	口高 26.8 (8.7)	厚重 582.9		粗粒輝石安山岩	口縁上面は研磨。外面体部は丸タガネ状工具による刺突成整形後に研磨。内面は使用により摩擦。	
第69図 PL.28	463	石製品 凹み石	略完形	長幅 10.3 9.7	厚重 6.0 224.2		角閃石安山岩	上面に掃り鉢状の凹み(直径7cm)を有し、凹み内側は平滑である。底面および側面には平ノミ状工具による整形痕が残る。	
第69図 PL.28	464	石製品 凹み石	完形	長幅 16.7 12.4	厚重 8.0 1242.6		角閃石安山岩	両面中央部に掃り鉢状の凹みを有する。凹みの直径は7～8cmで、深さは1.7～2.3cmである。	
第69図 PL.28	465	石製品 凹み石	完形	長幅 14.3 10.3	厚重 4.5 865.1		粗粒輝石安山岩	正面に長径6.2cmの浅い凹みを有する。凹み周辺には磨面が認められる。	
第69図 PL.28	467	石製品 砥石	完形	長幅 13.2 2.2	厚重 2.1 89.6		砥沢石	4面使用。細長い形状。正面および左右側面では片減りが認められる。	
第69図 PL.28	468	石製品 砥石	完形	長幅 18.8 4.8	厚重 4.0 472.6		砥沢石	4面使用。正面左上部および右下部が片減りしている。	
第69図 PL.28	471	礫石器 凹み石	完形	長幅 8.7 7.6	厚重 3.7 383.2		粗粒輝石安山岩	扁平楕円礫の正面に長径2.2cmの浅い凹みをもつ。側面に敲打痕が残る。	
第69図 PL.28	473	石製品 火打石	不明	長幅 4.7 3.3	厚重 2.5 50.1		石英	稜線上に潰れが認められる。	
第69図 PL.28	475	石製品 火打石	不明	長幅 4.4 1.9	厚重 1.5 15.8		石英	下辺および側面に潰れが認められる。	

6号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第71図	478	古瀬戸陶器 平碗	口縁部から体部 1/6	口底 (15.0) -	高 -		灰白	口縁端部尖り気味。内面から外面中位灰釉。露胎部橙色。	
第71図 PL.28	479	古瀬戸陶器 天目碗	口縁部1/3、底部完	口底 (11.8) 4.2	高 6.8		灰白	口縁部屈曲せず立ち上がる。底部回転糸切後、高台内を削る。内面から体部外面下位天目釉。口縁部釉薄く錆色に発色。	
第71図	480	在地系土器 皿	底部1/4	口底 (7.0)	高 -		橙	底部器壁やや厚く、体部外面下端は外反して立ち上がる。底部回転糸切無調整。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第71図 PL.28	481	在地系土器 皿	口縁部2/3欠	口底 (7.3) 4.3	高	19.5	褐灰	体部から口縁部内湾。底部内面右回転螺旋状轆轤目。内外面油煙か油付着。	
第71図	482	在地系土器 片口鉢	口縁部1/8	口底 (26.5) -	高	-	灰・橙	断面から外面器表の一部橙色、器表付近から器表灰色。口縁部下の外面肥厚。端部丸く内側に突き出る。残存部内面下位、使用によりやや平滑。	
第72図	483	在地系土器 片口鉢	口縁部1/5	口底 (29.7) -	高	-	灰	断面灰赤色、器表付近から器表灰色。片口1箇所。口縁端部内面突出部使用により摩滅。内面下位使用によりやや平滑。内面丁寧な回転横撫で。口縁部外面回転横撫で。外面口縁部下、成形時の凹凸残る。	
第72図	484	在地系土器 片口鉢	1/7	口底 (32.7) (16.1)	高	11.0	灰	断面中央灰色、器表付近にぶい橙色、器表灰色。体部から口縁部外反して開く。口縁端部内面内側に小さく突き出る。残存部内面すり目なし。内面丁寧な回転横撫で。口縁部外面幅狭い回転横撫で。外面成形時の凹凸残る。外面体部下端磨撫で。体部内面下位使用により器表摩滅、中位は平滑。	
第71図 PL.28	485	石製品 石鉢(片口)	口～底1/4	口高 (33.0) 13.0	底重	(15.4) 1828.5	粗粒輝石安山岩	丁寧な成・整形。口縁上面を研磨。内面の摩滅少。外面体部～底部に製作時の細かい丸タガネ状工具による刺突痕・筋状連続刺突痕を残す。	

8号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第72図 PL.29	486	中国磁器 白磁皿	底部3/4	口底 -	高	-	白	内面透明釉。細かい貫入入る。外面無釉。高台4方を抉る、高台接底部釉付着。	
第72図	487	常滑陶器 甕か	体部片	口底 -	高	-	にぶい赤褐・赤灰	断面中央黒色、器表付近橙色、内面器表赤灰色、外面器表にぶい赤褐色。	
第72図	488	在地系土器 皿	口縁部1/5	口底 (12.1) -	高	-	橙	口縁部内湾。	
第72図	489	在地系土器 皿	底部	口底 -	高	-	橙	底部左回転糸切無調整。外面体部下端円筒状に短く立ち上がる。	
第72図 PL.29	490	在地系土器 皿	1/2	口底 (7.4) 5.0	高	1.9	橙	体部から口縁部直線的に立ち上がる。底部左回転糸切無調整。	
第72図 PL.29	491	在地系土器 皿	底部	口底 -	高	-	にぶい橙	体部外反して開く。底部左回転糸切無調整。	
第72図	492	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底 -	高	-	にぶい橙	断面淡赤橙色、器表にぶい橙色。口縁部長く、内湾。端部上面平坦。口縁部下内面明瞭な段差。	
第72図	493	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底 -	高	-	灰～黒	断面にぶい橙色、器表灰色から黒色。器壁厚く、口縁部短い。口縁部と体部境不明瞭。内耳貼り付け部間は窪む。	
第72図	494	在地系土器 すり鉢	底部片	口底 -	高	-	灰白～にぶい褐	内面6本以上1単位のすり目。内面使用により器表摩滅。体部外面粗い撫で。底部板作りか。	
第72図	495	在地系土器 片口鉢	体部下位から底 部1/4	口底 (14.0)	高	-	褐灰	断面中央暗灰色、器表付近灰白色、器表褐色。残存部内面すり目なし。内面下半使用により器表摩滅、上半平滑。底部板作り。	
第72図 PL.29	496	銅製品 独鈷?	破片	長幅 3.7 1.4	厚重	1.3 22.90		独鈷の破片と見られる金属製品で、上部は分枝部分で破損しする。	
第72図 PL.29	497	石製品 砥石	不明	長幅 (7.4) 2.8	厚重	2.7 72.5	砥沢石	4面使用。左側面には横方向の線状痕が多数残る。	
第72図 PL.29	498	石製品 砥石	破片	長幅 (7.7) 4.1	厚重	4.1 200.8	砥沢石	4面使用。正面左縁辺には刃慣らし傷状の横線状痕が多数認められる。	

9号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第72図 PL.29	500	形象埴輪 人物(左腕)	左腕の付け根部 分					肩部に中実の粘土棒を差し込んでおり先端は胴部内に柄状に延びている。砂粒多くガサついた感。	
第72図	501	在地系土器 皿	1/4	口底 (7.5) (4.9)	高	1.6	橙	体部から口縁部直線的。口縁端部付近油煙付着。	
第72図	502	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口底 -	高	-	灰～暗灰	断面中央灰色、器表付近にぶい橙色、器表灰色から暗灰色。体部外反し口縁部直線的。口縁端部内面丸く突き出る。口縁端部内面器表摩滅、使用痕か。	
第72図	503	在地系土器 片口鉢	体部下位片	口底 -	高	-	灰白～暗灰	断面から残存部中位以下器表灰白色、上位器表暗灰色。内面中位以下使用により器表摩滅、上位平滑。外面撫でで凹凸残る。	
第72図	504	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底 -	高	-	褐灰・黒褐	断面にぶい褐色、内面器表褐色、外面器表黒褐色。口縁部緩く内湾。口縁端部内面稜をなし、外面小さく突き出る。残存部側端部に内耳貼り付け痕。	
第72図	505	在地系土器 内耳鍋	体部片	口底 -	高	-	黒	断面にぶい橙色、器表黒色。器壁厚い。残存部外面上端口縁下縁の横撫で。体部外面磨削り。胎土中に片岩含む。	
第72図	506	在地系土器 内耳鍋	体部下位から底 部片	口底 -	高	-	灰白・灰	断面から内面器表灰白色、外面器表灰色。体部外面下端磨削り。残存部外面上半磨付着。丸底か。	
第72図 PL.29	507	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 1.990 1.977	厚重	0.130 1.42		至道元寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが外縁周囲を破損する。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。	
第72図 PL.29	509	石製品 茶臼(下臼)	1/2	径高 (28.0) 10.6	厚重	4197.1	粗粒輝石安山岩	八分画。挽面は摩滅しているものの、約5mm間隔の溝はよく残る。底面にノミ状工具による整形痕を残す。受け部欠損。	

遺物観察表

10号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第70図	510	在地系土器 片口鉢	口縁部1/8	-	-	-	灰	体部外反し、口縁部肥厚してやや内湾。端部は上方に立ち上がる。口縁端部使用により摩滅。残存部内面下位使用により平滑。	
第70図	511	在地系土器 片口鉢	口縁部片	-	-	-	灰	断面灰白色、器表灰色。口縁部外反。口縁端部内外面小さく突き出る。内面丁寧な回転横撫で。口縁部外面幅狭く回転横撫で。外面口縁部以下撫で成形時の凹凸残る。	
第70図	512	在地系土器 片口鉢	口縁部片	-	-	-	灰	口縁部やや肥厚し、わずかに内湾。口縁端部上面小さく窪む。端部内面内側に突き出る。端部外面丸みを持ち小さく突き出る。口縁端部内面器表使用により摩滅。	
第70図	513	在地系土器 片口鉢	口縁部片	-	-	-	にぶい橙	断面から外面器表にぶい橙色、内面器表褐灰色。器壁薄く、口縁部外反。端部内面内側に突き出る。端部外面幅広の突帯状に突き出る。	
第70図	514	在地系土器 片口鉢	口縁部片	-	-	-	橙色	器壁薄い。口縁端部内面折り曲げるように内側に突き出る。端部外面丸みを持つ。	
第70図 PL.28	515	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.418 2.459	厚重	0.118 2.05	皇宋通寶。表面は彫深く外縁・郭とも明瞭、文字はやや潰れ気味。裏面は彫浅いが錆色の違いにより外縁・郭は明瞭。	
第70図 PL.28	516	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.468 2.489	厚重	0.164 3.44	政和通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。孔はやや星形となる。	
第70図 PL.28	517	鉄製品 釘	ほぼ完形	長幅	6.9 1.5	厚重	1.2 10.78	断面ほぼ正方形の角釘で先端は細くなるが鋭利に尖らない。頭は幅広く折り曲げる。木質等は確認できない。	
第70図 PL.28	518	鉄製品 釘	破片	長幅	5.1 1.3	厚重	1.4 9.01	断面ほぼ正方形の角釘で先端側は劣化破損する。頭は幅広くひろげ折り曲げる。木質等は確認できない。	

11号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				径	高	厚			
第70図 PL.28	522	形象埴輪 人物(腰部)	一部片				細砂粒/良好/橙		
第70図 PL.28	523	円筒埴輪	胴部片	径	22.4			細砂粒・粗砂粒/良好/橙	
第70図 PL.28	524	円筒埴輪	基底部片					細砂粒・粗砂粒/良好/橙	
第70図 PL.28	525	円筒埴輪	胴部片					細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい橙	
第70図 PL.28	526	円筒埴輪	胴部片					細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい橙	
第70図 PL.28	527	円筒埴輪	胴部片					細砂粒・粗砂粒/良好/橙	
第70図 PL.28	528	円筒埴輪 円筒か	口縁部～胴部片					細砂粒/良好/橙	
第70図 PL.28	529	中国磁器 白磁皿	完形	口底	9.1 4.0	高	2.4~ 2.6	白	外面口縁部下、回転鑿削りによると考えられる稜線。内面から高台内白磁釉。高台4箇所アーチ状に抉る。削り残した高台接地部分のみ無釉。
第70図 PL.28	530	瀬戸・美濃 陶器 天目碗	口縁部から体部 片	口底	-	高	-	灰白	口縁部屈曲して立ち上がり、端部は外反。内面から体部外面下位天目釉。口縁部釉薄く、錆色に発色。古瀬戸か。
第70図	531	常滑陶器 甕	肩部片	口底	-	高	-	灰褐・灰白	断面灰白色、内面器表灰褐色、外面器表白濁した自然釉斑状にかかる。
第70図 PL.28	532	在地系土器 皿	口縁部1/4欠	口底	6.0 3.1	高	2.0~ 2.3	浅黄橙	体部から口縁部内湾気味に開く。底径小さく器高高い。底部右回転糸切無調整。底部内面指撫で。
第70図 PL.28	533	鉄製品 釘	ほぼ完形	長幅	6.9 1.5	厚重	1.4 8.46		断面ほぼ正方形の角釘。先端に向かい徐々に細くなり尖る。頭は僅かに曲がるが折り曲げ等は見られない。表面は錆びに覆われ木質等の痕跡は不明。

40号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長幅	厚	重			
第82図 PL.29	536	鉄製品 釘	一部欠損	長幅	7.3 1.2	厚	1.0 7.39		断面ほぼ正方形の角釘で先端に向かい細くなるが先端近くで劣化破損する。頭部は薄く広げ深く折り返す。木質等の痕跡は見られない。
第82図 PL.29	537	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横	2.411 2.454	厚重	0.180 2.05		永楽通寶。彫は深いが劣化により外縁・文字・郭とも一部不鮮明。裏面は彫浅く外縁・郭とも不明瞭。外縁の一部を劣化破損する。

45号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				径	高	厚			
第82図 PL.29	538	石製品 石臼(下臼)	1/2	径	30.6 7.8	厚	4649.2	粗粒輝石安山岩	上(挽)面は偏減り甚大。溝は僅かに残る。石材の空洞部が露出する。
第82図 PL.29	539	石製品 石臼(下臼)	略完形	径	30.0 11.4	厚	10620	粗粒輝石安山岩	全体に磨滅大。溝は僅かに残る。石材の空洞部と含有礫が露出する。

57・58号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第82図 PL.29	542	石製品 火打石	不明	長幅	6.6 3.9	厚重	2.0 39.2	石英	正面右側縁を中心に潰れおよび剥離痕が残る。

62号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第81図1 PL.29	544	石製品 硯	破片	長幅	(2.2) (6.3)	厚重	1.4 23.1	頁岩	上部縁のみ残存。素材の切り出し時に節理を利用していることがわかる。上端小口面に線状の整形痕が残る。

65号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第75図1	545	常滑陶器 甕	体部片	口底	-	高	-	暗灰	断面暗灰色、内面器表灰褐色、外面器表にふい赤褐色。体部下位片か。

122号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第78図1 PL.29	547	鉄製品 不詳	一部欠損	長幅	11.9 2.5	厚重	2.0 45.64		断面角形に近く内部は空洞の管状鉄製品。上側はやや細くなりめくれるように破損する。鉄鐙に似た形状を持つ。
PL.29	548	鉄製品 刀子	破片	長幅	11.0 2.5	厚重	1.6 44.07		刀子先端側破片で関および茎は破損のためか見られない。
第78図1 PL.29	549	石製品 砥石	破片	長幅	(6.0) (2.2)	厚重	(0.9) 15.0	珪質頁岩	板状。4面使用。正面が最も平滑で、左右側面には加工時の整形痕が残る。

128号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第74図	550	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口底	-	高	-	灰	断面にふい橙色、器表灰色。口縁部内湾し、端部内側に小さく突き出る。口縁端部内外面使用痕と推定される摩滅あり。
第74図	551	在地系土器 片口鉢	体部下位から底部片	口底	-	高	-	灰白・橙	断面中央から内面器表灰白色、断面中央から外面器表橙色。内外面器表剥離部分多い。
第74図	552	在地系土器 すり鉢	体部下位片	口底	-	高	-	黒	体部下端断面中央黒色、断面灰白色、器表黒色。内面丁寧な回転横撫で後、7本1単位以上のすり目。外面粗い撫で、下端は窪削り。内面下端使用により器表摩滅、中位は平滑。
第74図 PL.29	553	石製品 砥石	破片	長幅	8.4 4.8	厚重	4.5 181.4	砥沢石	4面使用だが、正面が最も平滑で使用頻度が高い。右側面には平ノミ状工具による整形痕が残る。
第74図 PL.29	556	石造物 板碑	下半左端部片	長幅	(16.2) (12.2)	厚重	2.3 637.9	緑色片岩	碑面やや摩滅。浅い丸彫りの被供養者名「宅泉(宗)禪□」を刻む。裏面は横方向の工具(幅1.1cmほどの平ノミ状)の連続刺突痕が残る。
第74図 PL.29	557	石製品 石臼(下臼)	1/4	径高	(36.0) 12.3	厚重	5462.0	粗粒輝石安山岩	挽面摩滅。放射状の溝が残る。
第74図 PL.29	558	石製品 不明	完形	長幅	22.5 19.8	厚重	16.2 6480	二ツ岳軽石	上下面および側面に平ノミ状工具により面を造り出す。下面は加工により凹状を呈する。側面に黒色の表面変化が一巡する。
第74図 PL.29	559	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.509 2.502	厚重	0.132 2.38		永楽通寶。彫非常に深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面も彫深く外縁・郭とも明瞭。
第74図 PL.29	560	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.454 2.500	厚重	0.126 2.42		皇宋通寶。表面は彫深く外縁・郭とも明瞭。裏面は彫浅く外縁・郭はやや不明瞭。
第74図 PL.29	561	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.447 2.448	厚重	0.134 2.76		〇〇元寶。表面は彫深く外縁・文字とも明瞭だが文字の一部はつぶれ不明瞭、郭も不明瞭。裏面は全体に平坦で不明瞭。

133号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第74図	562	常滑か渥美 陶器甕	肩部片	口底	-	高	-	灰	外面白濁した薄い自然釉かかる。頸部内面人為的に擦って器表摩滅。

141号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第70図 PL.29	563	在地系土器 すり鉢	口縁部1/5、底部1/3	口底	(36.0) (15.0)	高	13.9	暗灰	断面灰白色、器表暗灰色。胎土中に片岩含む。口縁部丸みを持ち、端部は内側に丸めるように撫でる。端部内面小さく突き出る。内面器表摩滅するが、下半は使用痕であろう。すり目は放射状で6本以上1単位。底部外面も摩滅し、使用時の床擦れであろう。
第70図	564	在地系土器 すり鉢	口縁部1/4	口底	(36.0) -	高	-	暗灰	断面灰白色、器表暗灰色。胎土中に片岩含む。口縁部丸みを持ち、端部は内側に丸めるように撫でる。端部内面小さく突き出る。内面器表使用により摩滅。すり目は放射状で6本以上1単位。

遺物観察表

148号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第82図 PL.29	565	古瀬戸陶器 平碗か	口縁部片	口 底	-	高 -	灰白	口縁部ゆるく外反。口縁部器壁やや厚い。内外面灰釉。貫入する。	
第82図	566	在地系土器 片口鉢	底部1/4	口 底	-	高 -	灰・にぶい橙	断面から外面器表にぶい橙色、内面器表付近灰白色、内面器表灰色。内面器表使用によりほとんど摩滅。底部砂底。	
第82図 PL.29	567	石製品 砥石	2/3 ?	長 幅	(10.8) 2.9	厚 重	(2.5) 146.8	砥沢石	4面使用。正面および左側面に鋭利な道具によると推定される断面V字状の線状痕が横方向に多数見られる。

183号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第81図1	568	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	-	高 -	灰	口縁部やや短い。口縁部下内面丸みを帯びた段を有する。口縁部上面撫でで平坦に仕上げ、端部は内外面に小さく突き出る。	

195号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第82図 PL.29	569	石製品 砥石	破片	長 幅	(8.2) 4.3	厚 重	3.5 186.7	砥沢石	4面使用。左側面および正面に先端部の尖った工具による刺突痕が残る。

198号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第76図	570	常滑陶器 甕か	体部下位片	口 底	-	高 -	灰白	断面灰白色、器表赤褐色。内外面木口状工具による撫で。内面自然釉が斑状にかかる。	

204号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第84図	571	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	-	高 -	灰	断面中央灰色、器表付近明赤褐色、器表灰色。口縁部内湾し器壁薄い。	572と同一個体の可能性高い。
第84図	572	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	-	高 -	灰	断面中央灰色、器表付近明赤褐色、器表灰色。口縁部内湾し器壁薄い。	571と同一個体の可能性高い。

306号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第77図	573	瀬戸・美濃 陶器柳碗	完形	口 底	12.3 4.3	高	5.2	灰白	体部から口縁部内湾。外面一方に鉄絵具でしだれ柳。内面から高台脇灰釉。貫入する。
第77図	574	志戸呂陶器 灯火皿	1/4	口 底	(8.4) (3.4)	高	1.5	にぶい赤褐	口縁部外反。底部回転糸切無調整。内面から口縁部外面錆釉。口縁部油煙付着。

308号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第77図	575	肥前磁器 染付仏飯器	口縁部1/4、底 部3/4、脚部欠	口 底	(6.9) -	高 -	-	白	口縁部外面斜格子文。脚部脇1重圏線。内面無文。

310号土坑または10号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第77図	576	在地系土器 皿	口縁部1/6	口 底	-	高 -	-	にぶい橙	体部から口縁部直線的に開く。

19号土坑または319号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第77図	577	龍泉窯系青 磁鎚蓮弁文 碗	口縁部片	口 底	-	高 -	-	灰	外面鎚蓮弁文。内外面青磁釉。

4号ピット

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第83図	578	在地系土器 皿	口縁部一部、底 部1/4	口 底	(7.8) (5.4)	高	1.7	淡橙	体部から口縁部直線的に開く。底部歪む。内外面中位以上油煙付着。

33号ピット

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.29	579	在地系土器 香炉	口縁部1/8、底 部1/4	口 底	(11.2) (6.5)	高	4.0	橙	体部外反し、口縁部強く内湾。底部左回転糸切後、脚貼り付け。脚1箇所残存。3脚であろう。

河道跡(10号溝東部)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第70図	580	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	-	高 -	-	灰	口縁部やや短い。口縁部下内面沈線状の低い段差。

3面遺構外

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第85図 PL.29	582	形象埴輪 不明						弧状の外縁部を有する板状品。盾か。外面にヘラ描きによる文様が見られる。	
第85図 PL.29	583	円筒埴輪	基底部～胴部	底	10.8		細砂粒/良好/橙		
第85図 PL.29	584	中国磁器 白磁皿	体部下位から底 部1/4	口底	- (3.4)	高	白	高台端部外面面取り。内面から高台脇白磁釉。細かい貫入する。やや焼成不良。	
第85図 PL.29	585	中国磁器 青白磁小壺	口縁部1/16、体 部1/8	口底	(6.1) -	高	白	肩部外面の半球状小貼文と体部外面の縦凹線は型による。内面から体部外面下位青白磁釉。口縁端部内外面釉剥ぎ、口縁端部尖る。	
第85図 PL.29	586	瀬戸・美濃 陶器 白天目碗	口縁部1/8	口底	(10.8) -	高	灰白	口縁部屈曲して立ち上がり、端部外反。体部外反。内外面灰釉。粗い貫入する。	
第85図 PL.29	587	瀬戸・美濃 陶器皿類	底部1/4	口底	-	高	灰白	内面から高台内灰釉。粗い貫入する。	大窯。
第85図 PL.29	588	在地系土器 皿	完形	口底	7.3 5.1	高	1.8~ 2.0 にぶい橙	外面中位轆轤目により肥厚。底部左回転糸切無調整。口縁端部3箇所油煙付着。	
第85図 PL.29	589	在地系土器 皿	1/4	口底	(7.8) (4.0)	高	2.2 褐灰	体部ゆるく内湾。底部外面回転糸切無調整。	
第85図	590	在地系土器 内耳鍋	体部片	口底	-	高	灰	外面器表付近にぶい橙色。口縁部内面段差なく外反。	
第85図	591	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底	-	高	灰	器壁やや厚く、口縁部短い。内耳は器壁に孔を開けて通している可能性高い。口縁部外反。外反部内面稜をなす。内耳取り付け部外面粘土貼り付け痕。	
第85図	592	在地系土器 内耳鍋	体部片	口底	-	高	黒	断面灰白色。口縁部外反し、口縁部内面下端ゆるい稜の段差。外面煤付着。	
第85図	593	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口底	-	高	暗灰	断面にぶい橙色、器表暗灰色。体部外反し、口縁部ゆるく内湾。口縁端部内面斜め上方に突き出る。端部内面器表使用により摩滅。	
第85図 PL.29	594	在地系土器 片口鉢	口縁部1/8、底 部1/4	口底	(30.0) (11.0)	高	12.3 暗灰	断面中央灰白色、器表付近にぶい黄橙色、器表暗灰色。体部外反し、上半直線的に開く。口縁端部内面内側に丸みを持って突き出す。体部内面下半から下半6本1単位のすり目。体部内面下位から底部内面、周縁を除き器表摩滅。底部板作りか。	
第85図	595	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口底	-	高	褐灰	体部外反し、口縁部内湾。口縁端部内面丸みを持って突き出る。口縁端部内外面摩滅。摩滅は使用痕か。	
第85図 PL.29	596	銅製品 鏡	破片	長幅	2.3 1.7	厚重	0.3 4.48	鏡の外縁部小破片で、推定直径はcmで破端面は劣化後破損。表面は緑灰黒色で平滑小破片のため鏡の文様等詳細は不明。	
第85図 PL.29	597	鉄製品 釘	一部欠損	長幅	5.3 1.4	厚重	1.3 8.48	断面ほぼ正方形の角釘で先端に向かい細くなるが先端近くで劣化破損する。頭側で幅を広げ端部は深く折り返す。木質等の痕跡は見られない。	
第85図 PL.29	598	鉄製品 火打金	ほぼ完形	長幅	8.8 3.1	厚重	1.2 33.42	山型の火打金で両端は丸く中央は凸型だが孔等は見られない。	
第85図 PL.29	599	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.524 2.517	厚重	0.138 3.23	嘉祐元寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが文字の一部はつぶれる。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。裏面に銹欠けと見られる小孔が開く。	
第85図 PL.29	600	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横	- 2.45	厚重	0.137 1.59	太○通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭、破損により下端の文字を欠く。裏面も彫深く外縁・郭とも明瞭。	

〔6.4面〕

28号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長幅	厚重	厚			
PL.36	608	鉄製品 不詳	破片	長幅	2.9 1.7	厚重	1.2 4.2	鑄造鉄製品破片、全体に破損・錆化のため詳細不明。	

遺物観察表

(7.5面)

1号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第93図 PL.30	609	土師器 甗	口縁部～頸部片	口	15		細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、頸部は縦位、胴部は横位のハケ目(1cmあたり4～5本)。	

2号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第94図1 PL.30	610	土師器 甗	胴部片				細砂粒/良好/にぶい橙	胴部上位に波状文。	
第94図1 PL.30	611	土師器 甗	脚部	脚	8		細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部は胴部に接合。端部は内側に折り返し。脚部上位はハケ目(1cmあたり6～7本)、下位はナデ。内面はナデ。	脚部内面底部側に多量の砂粒を含む粘土貼付。
第94図1 PL.30	612	土師器 台付甗	口縁部～胴部上位	口	16.8		細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)後、肩に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第94図1 PL.30	613	土師器 台付甗	口縁部～胴部上位	口	14.1		細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり4～6本)後、肩に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第94図1 PL.30	614	土師器 台付甗	胴部中位～底部	底	5.8		細砂粒/良好/橙	胴部と脚部は接合。胴部・脚部ともハケ目(1cmあたり4～5本)。内面は胴部・脚部ともナデ。	

3号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第96図1 PL.30	615	土師器 高杯	杯身部～脚部上半片	口底	14.3 8		細砂粒/良好/明赤褐	杯身部と脚部は接合、脚部に透孔が3箇所。外面と内面杯身部はヘラ磨き、脚部内面はヘラナデ。	
第96図1 PL.30	616	土師器 高杯	杯身部	口底	12.1 5		細砂粒/良好/赤褐	杯身部と脚部は接合、杯身部底部中央にホゾ状の突起をつくる。内外面ともヘラ磨き。	
第96図1 PL.30	617	土師器 高杯	杯身部位部～脚部上半	底	9.1		細砂粒・粗砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合、杯身部位部に8箇所、脚部に3箇所の透孔。外面はヘラ磨き。内面は杯身部にヘラ磨き、脚部はヘラナデ。	
第96図1 PL.30	618	土師器 高杯	脚部	脚	9.5		細砂粒/良好/橙	脚部に透孔が4箇所。外面の整形は器面磨滅のため不明。内面はヘラナデ。	
第96図1 PL.30	619	土師器 高杯	脚部片	脚	11.9		細砂粒/良好/にぶい橙	脚部に透孔が4箇所。外面はヘラ削りか、器面磨滅のため単位不明。内面はヘラナデ。	
第96図1 PL.30	620	土師器 器台	口縁部片	口	19.2		細砂粒/良好/橙	受部に透孔が上段3箇所、下段6箇所。内外面ともヘラ磨きか、外面は器面剥離のため単位など不明。	
第96図1 PL.30	621	土師器 鉢	1/2	口底	9 2.8	高 6.5	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り。内面は口縁部が横ナデ、体部から底部はナデ。	
第96図1 PL.30	622	土師器 壺	胴部～底部片	底	3.4		細砂粒/良好/橙	底部・胴部ともヘラ磨き。内面はハケ目(1cmあたり8本)。	
第96図1 PL.30	623	土師器 壺	胴部下位～底部	底	8.7		細砂粒/良好/橙	底部・胴部ともヘラ磨き。内面はハケ目(1cmあたり6～13本)。	
第96図1 PL.30	624	土師器 壺	口縁部～頸部	口	17		細砂粒/良好/橙	外面はハケ目(1cmあたり4本)後、横ナデを施しているが、ハケ目が多く残る。内面も同様であるが、ハケ目はほとんどナデ消されている。	
第96図1 PL.30	625	土師器 甗	口縁部～胴部上位片	口	13.4		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後ナデ。内面胴部もナデ。	
第96図1 PL.30	626	土師器 甗	口縁部～胴部中位片	口 胴	14.2 14.6		細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり13本)後ヘラナデ、一部はハケ目が残る。内面胴部はナデか。	
第96図2 PL.30	627	土師器 甗	口縁部～胴部中位片	口 胴	14.3 14.3		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ磨き、上位は器面磨滅のため単位不明。内面胴部上半はヘラナデか。	
第96図2 PL.30	628	土師器 甗	2/3	口底	12.7 3.7	高 10.7 13.8	細砂粒・粗砂粒/良好/黄橙	口縁部はハケ目(1cmあたり7本)、胴部はハケ目後ナデ。内面は口縁部がハケ目、胴部はヘラナデ。	
第96図2 PL.30	629	土師器 甗	口縁部～胴部上位片	口	12.4		細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり10～12本)。内面胴部はナデ。	
第96図2 PL.30	630	土師器 甗	03/4	口 胴	24.2 27.7		細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい褐	底部は器面剥離。口縁部から胴部はハケ目(1cmあたり5本)後、口縁部上位に横ナデ、胴部下位上半にヘラナデ。内面は口縁部下半と胴部下位にハケ目、胴部上位・中位はヘラナデ。	
第96図2 PL.30	631	土師器 台付甗	口縁部～胴部上位片	口	18.8		細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後、肩に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第96図2 PL.30	632	土師器 台付甗	胴部下位片				細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部は胴部に接合。胴部・脚部ともヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ、一部ナデ。	
第96図2 PL.30	633	土師器 台付甗	脚部	脚	7.4		細砂粒/良好/にぶい褐	脚部は胴部に接合。外面は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後、端部を横ナデ。内面は底部がナデ、脚部は横位のハケ目。	
第96図2 PL.30	634	土師器 台付甗	胴部底部～脚部	脚	8.3		細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部と胴部は接合。胴部はヘラ削りか、脚部上半はヘラナデ、下半は横ナデ。内面は胴部・脚部ともヘラナデ。	
第96図2 PL.30	635	土師器 台付甗	口縁部～胴部下位	口 胴	34.5 32.2		細砂粒/良好/灰黄褐	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり4～5本)後、肩に横位のハケ目。内面胴部はヘラナデ。	
第96図2 PL.30	636	土師器 台付甗	胴部一部欠損	口 脚	15.9 9.2	高 25.6 23.1	細砂粒/良好/灰黄褐	脚部は貼付、脚部端部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部から脚部上位は縦位のハケ目(1cmあたり6～7本)後肩に横位のハケ目。脚部はヘラナデ。内面胴部はナデ。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第96図2 PL.30	637	土師器 台付甕か	脚部	脚	6.8			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部は胴部に貼付、外面は縦位。内面は斜めのハケ目(1cm あたり8～14本)。
第96図2 PL.31	638	土師器 小型台付甕	2/3	口 脚	10.4 4.7	高 12		細砂粒/良好/浅黄	脚部と胴部は接合。口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ、脚 部はナデ。内面は胴部・脚部ともヘラナデ。
第96図2 PL.31	639	土師器 小型台付甕	完形	口 脚	12.3 6.1	高 15.9		細砂粒/良好/にぶ い橙	脚部と胴部は接合。口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ、脚 部はナデ。内面は胴部・脚部ともヘラナデ。
第96図2 PL.31	640	石製品 砥石	破片	長 幅	(7.1) (4.9)	厚 重	(1.7) 48.2	珪質頁岩	表裏面に平滑面と擦痕が認められる。剥片素材で、破損後 の再利用か。
第96図2 PL.31	641	礫石器 敲石	完形	長 幅	10.1 9.4	厚 重	8.5 1284.9	黒色頁岩	立方体に近い形状の礫の平坦面に敲打痕が認められる。下 面右側に平坦面を形成し、中央部に敲打痕をもつ。
第96図2 PL.31	642	礫石器 台石	完形	長 幅	34.4 25.0	厚 重	12.4 15800	粗粒輝石安山岩	大形扁平礫素材。表裏面に磨面を有し、正面中央部が最も 顕著。

4号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第97図2 PL.31	644	土師器 高杯	杯身部1/2	口 底	10.8 7.8			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	杯身部は内外面とも赤色塗彩。口唇部に3条の凹線が巡る。 口縁部はヘラ磨き、底部はヘラナデ。内面は口唇部が横ナ デ、口縁部から底部はヘラ磨き。	
第97図2 PL.31	645	土師器 高杯	杯身部～脚部下 位片	口	12.8			細砂粒/やや軟質/ 橙	杯身部と脚部は接合。杯身部側にホゾ状の突起。杯身部口 縁部は横ナデ、体部から底部はハケ目後ヘラ磨き。内面は 杯身部にヘラ磨き。	
第97図2 PL.31	646	土師器 高杯	杯身部～脚部上 位片	口	11.8			細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合。杯身部・脚部ともヘラ磨き、器面磨 滅のため単位不鮮明。内面は杯身部がヘラ磨き、脚部はヘ ラナデ。	
第97図2 PL.31	647	土師器 高杯	杯身部底部～脚 部上位					細砂粒/良好/橙	外面は杯身部・脚部ともヘラ磨き。内面脚部はヘラナデ。	
第97図2 PL.31	648	土師器 高杯	杯身部底部～脚 部上位					細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合。内外面ともヘラナデか。	
第97図2 PL.31	649	土師器 高杯	脚部片	脚	17.2			細砂粒/良好/明赤 褐	脚部に上下各3箇所透孔。外面はヘラ磨き、内面はヘラ ナデ。	
第97図2 PL.31	650	土師器 高杯	脚部片	脚	19.8			細砂粒/良好/橙	脚部に透孔3箇所。外面はヘラ磨き、内面はハケ目(1cmあ たり7本)。	
第97図2 PL.31	651	土師器 高杯	脚部片	脚	19.8			細砂粒/良好/橙	脚部に透孔3箇所。外面はヘラ磨き、内面は器面磨滅のため 不明。	
第97図2 PL.31	652	土師器 高杯か	1/3	口	13			細砂粒/やや軟質/ 橙	内外面とも全面的にヘラ磨き、外面口縁部は器面磨滅のため 方向・単位不明。	
第97図2 PL.31	653	土師器 高杯か	脚部	脚	8.7			細砂粒/良好/橙	脚部と杯身部は接合。脚部に透孔が6箇所。脚部は外面が ヘラ磨き、内面はヘラナデ。	
第97図2 PL.31	654	土師器 器台	脚部2/3欠損	口 脚	6.8 9.9	高 8.4		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部に透孔が3箇所。受部口唇部・脚部端部は横ナデ、そ の間はヘラ磨き。内面は受部がヘラ磨き、脚部はヘラナデ。	
第97図2 PL.31	655	土師器 埴 土師器 埴	頸部～胴部上位 片					細砂粒/良好/明赤 褐	頸部と胴部は接合。外面はヘラ磨き、内面はナデ。	
第97図2 PL.31	656	土師器 小型埴か	口縁部～頸部片	口	5.4			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面はヘラ磨き、内面はナデ。	
第97図2 PL.31	657	土師器 小型埴か	頸部～胴部上半 片					細砂粒/良好/にぶ い橙	頸部は横ナデ、胴部中位はヘラ磨き、内面胴部はナデ。	
第97図2 PL.31	658	土師器 壺	口縁部片					細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面に輪積痕が残る。外面は縄文(0段多条LR)が施文、 内面はヘラ磨き。	
第97図2 PL.31	659	土師器 壺	胴部片					細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面は縄文(0段多条LR)が施文、内面はヘラ磨き。	
第97図2 PL.31	660	土師器 台付甕	口縁部～胴部上 位片	口	11			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、頸部から胴部はハケ目(1cmあたり6～7本)。 内面胴部はヘラナデ。	
第97図2 PL.31	661	土師器 台付甕	口縁部～胴部上 位片	口	16.4			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、頸部から胴部はハケ目(1cmあたり6本)。内 面は頸部にハケ目、胴部はヘラナデ。	
第97図2 PL.31	662	土師器 台付甕	胴部上位片					細砂粒/良好/灰黄 褐	胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後横位のハケ目。	
第97図2 PL.31	663	土師器 台付甕	胴部上位片					細砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後横位のハケ目。	
第97図2 PL.31	664	土師器 台付甕	胴部上位片					細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後頸部やや下に横位の ハケ目。内面はナデ。	
第97図2 PL.31	665	土師器 台付甕	脚部上位					細砂粒/良好/にぶ い黄褐	外面はハケ目(1cmあたり5本)。内面脚部はナデ。	胴部内面に 多量の砂粒 を含む粘土 を貼付。
第97図2 PL.31	666	土師器 台付甕	脚部上位～胴部 下位					細砂粒/良好/にぶ い橙	外面はハケ目(1cmあたり4～5本)。内面脚部はナデ。	底部両面に 多量の砂粒 を含む粘土 を貼付。
第97図2 PL.31	667	土師器 台付甕	胴部～脚部上位	底	6			細砂粒/良好/灰黄 褐	胴部と脚部は接合。胴部から脚部はハケ目(1cmあたり7～ 8本)。内面は胴部・脚部ともナデ。	胴部内面に 多量の砂粒 を含む粘土 を貼付。
第97図2 PL.31	669	鉄製品 鏃		長 幅	3.1 2.0	厚 重	0.1 1.23		無茎の鉄鏃で、厚さ1mmほどと薄く表面には矢柄等の痕跡 は見られない。矢柄固定用の孔も認められない。	

遺物観察表

5号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第98図 PL.31	670	土師器 台付甕	胴部～脚部	脚	4.9		細砂粒/良好/浅黄 橙	胴部と脚部は接合。胴部から脚部はナデ。内面は胴部・脚部ともナデ。
第98図 PL.31	671	土師器 台付甕	口縁部～胴部上 位片	口	13.2		細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部横ナデ、頸部から胴部はハケ目(1cmあたり6本)。内面胴部はヘラナデ。
第98図 PL.31	672	土師器 台付甕	口縁部～胴部上 位片	口	19.8		細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部横ナデ、頸部から胴部はハケ目(1cmあたり4本)後肩に横位のハケ目。内面胴部はヘラナデ。
第98図 PL.31	673	土師器 台付甕	脚部片	脚	10.6		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部と胴部は接合。脚部内面端部は折り返し。脚部は上位・中位はナデ後下位にハケ目(1cmあたり6～7本)、内面はハケ目。
第98図 PL.31	674	土師器 甕	口縁部～胴部上 位片	口	13.6		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり9～10本)。内面は胴部がヘラナデ。

6号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第99図2 PL.31	675	土師器 高杯	杯身底部				細砂粒/良好/橙	脚部は貼付。杯身部から脚部はヘラ磨き。内面は器面剥落のため不明。
第99図2 PL.31	676	土師器 高杯	杯身底部～脚 部上位				細砂粒/良好/橙	杯身部は内面黒色処理。脚部と杯身部は接合。脚部内面は横ナデ。
第99図2 PL.31	677	土師器 高杯	脚部片	脚	8.6		細砂粒/良好/橙	脚部は接合、透孔が3箇所。外面はヘラ磨き、内面はヘラナデ。
第99図2 PL.31	678	土師器 高杯	杯身底部～脚 部上半				細砂粒/良好/明赤 褐	脚部に透孔が3箇所。杯身部と脚部は接合。杯身部底部はヘラナデ、脚部はヘラ削り後やや雑なヘラ磨き。内面は杯身部・脚部ともヘラナデ。
第99図2 PL.31	679	土師器 高杯	杯身部～脚部上 半	口	15.9		細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合、脚部に透孔が3箇所。外面はヘラ磨き、一部器面磨滅のため不鮮明。
第99図2 PL.31	680	土師器 高杯	1/2	口 脚	12.7 8.2	高 8.7	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部に透孔が4箇所。杯身部と脚部は接合。外面は全面的にヘラ磨き。内面は杯身部がヘラ磨き、脚部はヘラナデ。
第99図2 PL.31	681	土師器 高杯	杯身部片	口	23		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は放射状ヘラ磨き。内面は放射状ヘラ磨き。
第99図2 PL.31	682	土師器 高杯	杯身部	口 底	22.6 7.2		細砂粒/良好/にぶ い橙	杯身部と脚部は接合。杯身部は内外面とも放射状ヘラ磨き。
第99図2 PL.31	683	土師器 高杯か	脚部	脚	6		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面はヘラ磨き、内面はヘラナデ。
第99図2 PL.31	684	土師器 器台	脚部下位欠損	口	9.6		細砂粒/良好/橙	脚部に透孔が3箇所。口唇部は内外面とも横ナデ、受部から脚部はヘラ磨き。内面は受部が斜放射状上ヘラ磨き、脚部はヘラナデ。
第99図2 PL.31	685	土師器 蓋	1/3	口 摘	10 3.8	高 3.3	細砂粒/良好/明赤 褐	摘みはナデ、天井部はヘラ削り、口縁部は横ナデ。内面は中央部がナデ、周縁部はヘラナデ。
第99図2 PL.31	686	土師器 鉢	1/5	口 底	13.4 5.1		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から体部はヘラ磨き、底部はヘラ削りか。内面は放射状ヘラ磨き。
第99図2 PL.31	687	土師器 鉢	1/2	口 底	10.7 4.6	高 6	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部はハケ目(1cmあたり7本)、底部はナデ。内面は底部から体部下位にヘラナデ。
第99図2 PL.31	688	土師器 小型壺	1/4	口 胴	7 9.4	高 9.9	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、胴部は上半がナデ、下半から底部はハケ目(1cmあたり5～10本)後一部にナデ。内面は胴部がナデ。
第99図2 PL.31	689	土師器 小型壺	口縁部～胴部片	口 胴	7.2 9.1		細砂粒/良好/橙	口唇部はハケ目、口縁部横ナデ、胴部は上半がナデ、下半から底部はハケ目後にナデ。内面は胴部がヘラナデ。
第99図2 PL.31	690	土師器 埴	口縁部～胴部片	口 胴	10.2 13.6		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、頸部はヘラ磨き、胴部はハケ目(1cmあたり10本)後、上位をヘラナデ。内面胴部はヘラナデ。
第99図2 PL.32	691	土師器 壺	口縁部1/2	口	15.9		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	外面は縦位のヘラ磨き、内面は口縁部がヘラナデ、頸部はヘラ磨き。
第99図2 PL.32	692	土師器 壺	口縁部～胴部上 位	口	14.8		細砂粒/良好/橙	口縁部は縦位のヘラ磨き、胴部は細かいヘラナデ。内面は口縁部から頸部にヘラ磨き。
第99図2 PL.32	693	土師器 壺	口縁部片	口	13.6		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面に輪積痕が残る。外面は縄文(LR)、内面は横位のヘラ磨き。
第99図2 PL.32	694	土師器 壺	口縁部～胴部上 半	口	13.5		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ後ヘラ磨き、胴部はやや不定方向のヘラ磨き。内面は口縁部がヘラ磨き、胴部はヘラナデ。
第99図2 PL.32	695	土師器 甕	口縁部～胴部中 位片	口	12.4		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。内面胴部もヘラナデ。
第99図2 PL.32	696	土師器 甕	口縁部～胴部上 位片	口	20		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり4本)。内面は口縁部から頸部がハケ目後横ナデ、胴部はヘラナデ。
第99図2 PL.32	697	土師器 甕	口縁部～胴部上 位片	口	18.4		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、頸部から胴部は縦位のハケ目(1cmあたり7本)後肩に横位のハケ目。内面胴部はヘラナデ。
第99図2 PL.32	698	土師器 甕	口縁部～胴部下 位	口 胴	17 23.7		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。
第99図2 PL.32	699	土師器 甕か	口縁部～頸部片	口	14.2		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、頸部はヘラナデ。内面は口縁部下半にハケ目(1cmあたり5本)、頸部はヘラナデ。
第99図2 PL.32	700	土師器 小型台付甕	口縁部～胴部中 位片	口 胴	10.8 13.6		細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5～7本)後上位に横位のハケ目。内面胴部はナデ。
第99図2 PL.32	701	土師器 小型台付甕	脚部	脚	5.1		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部と胴部は接合、端部は折り返し。胴部はハケ目、脚部はヘラナデ。内面はヘラナデ。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第99図2 PL.32	702	土師器 台付甕	口縁部～胴部中 位片	口	14.2		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後肩 に横位のハケ目。内面は頸部にハケ目、胴部はナデ。		
第99図2 PL.32	703	土師器 台付甕	口縁部～胴部中 位片	口	14		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6～8本) 後肩に横位のハケ目。内面胴部はナデ。		
第99図2 PL.32	704	土師器 台付甕	脚部	脚	7.6		細砂粒/良好/橙	脚部と胴部は接合、端部は折り返し。胴部は上位にハケ目 (1cmあたり4本)下半部はヘラナデ。内面はナデ。		
第99図2 PL.32	705	土師器 台付甕	脚部	脚	9.5		細砂粒/良好/橙	脚部と胴部は接合、端部は折り返し。胴部は上位にハケ目 (1cmあたり5本)下半部はヘラナデ。内面はナデ。		
第99図2 PL.32	706	土師器 台付甕	脚部	脚	10		細砂粒/良好/橙	脚部と胴部は接合。胴部は上位にハケ目(1cmあたり5本)下 半部はヘラナデ。内面はナデ。	体部内面に 多量の砂粒 を含む粘土 を貼付。	
第99図2 PL.32	707	土師器 台付甕	胴部～脚部	脚	6.8		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部と胴部は接合。胴部はハケ目か。内面は脚部がヘラナ デ。		
第99図2 PL.32	708	土師器 台付甕	脚部片	脚	8.6		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部と胴部は接合。胴部は上位にハケ目(1cmあたり5～7 本)下半部はヘラナデ。内面はハケ目。		
第99図2 PL.32	709	土師器 台付甕	脚部	脚	9.4		細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄橙	脚部は胴部に接合。脚部は内外面ともハケ目(1cmあたり6 本)後端部をナデ。胴部内面はヘラナデ。		
第99図2 PL.32	710	土師器 台付甕	脚部	脚	9.8		細砂粒/良好/橙	脚部は胴部に接合。外面はハケ目(1cmあたり4～7本)、内 面もハケ目(1cmあたり4本)。		
第99図2 PL.32	711	礫石器 敲石	略完形	長 幅	13.5 7.1	厚 重	5.5 771.9	粗粒輝石安山岩	上面に剥離痕、正面中央部に磨面が認められる。	
第99図2 PL.32	712	礫石器 敲石	完形	長 幅	9.5 4.5	厚 重	3.1 199.1	アブライト	扁平な楕円礫素材。正面中央部に磨面、上端部に敲打痕が ある。	

7号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第100図2 PL.32	713	土師器 高杯	杯身部下～脚 部上半				細砂粒/良好/黄橙	脚部と杯身部は接合。脚部に透孔が3箇所。杯身部から脚 部は外面がヘラ磨き、内面脚部はヘラナデ。		
第100図2 PL.32	714	土師器 高杯	脚部片	脚	15.8		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部に透孔が3箇所。内外面とも横ナデ。		
第100図2 PL.32	715	土師器 器台	小片	口 脚	7.6 11.1	高	8.1	細砂粒/良好/明赤 褐	受口唇部は横ナデ、底部から脚部は上半は横位、下半は 縦位のヘラ磨き。内面脚部は上半がヘラナデ、下半がハケ 目後ヘラ磨き。	
第100図2 PL.32	716	土師器 鉢	2/3	口 底	7.1 4.3	高	5	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から体部は器面磨滅のため単位不明、底部はヘラ削 り。内面は底部から体部下位にヘラナデ。	
第100図2 PL.32	717	土師器 壺	口縁部片	口	25		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は縄文を施文後3本1対の棒状凸帯を貼付と下端に刻 み目。		
第100図2 PL.32	718	土師器 壺	胴部上位片	頸	9		細砂粒/良好/にぶ い橙	頸部は胴部に接合。胴部は外面がヘラ磨き、内面はハケ目 (1cmあたり7～8本)後ヘラナデ。		
第100図2 PL.32	719	土師器 壺	底部～胴部下 半片	底	7.6		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	底部はヘラ削り、胴部はハケ目後ヘラ磨き。内面はヘラナ デ。		
第100図2 PL.32	720	土師器 甕	口縁部～胴部	口 胴	14.6 15.8		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり4本)、内面胴部 はヘラナデ。		
第100図2 PL.32	721	土師器 甕	口縁部～胴部	口 胴	13.6 17.4		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部はハケ目後横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり3本)。 内面は口縁部がハケ目、胴部はヘラナデ。		
第100図2 PL.33	722	土師器 甕	口縁部～胴部	口 胴	16.5 23.9		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり3～5本)。内面 胴部はヘラナデ。		
第100図2 PL.33	723	土師器 甕	口縁部～胴部	口 胴	17.8 22.8		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり5本)。内面は口 縁部がハケ目後横ナデ、胴部はヘラ磨き、器面磨滅のため 単位不明。		
第100図2 PL.32	724	石製品 砥石?	略完形	長 幅	9.2 6.0	厚 重	5.1 67.4	軽石	表裏両面および左右側面に幅約4mmの溝を有するため、砥 石と考えた。溝は断面V字状を呈し、鋭利な道具によるも のと推定される。	
第100図2 PL.32	725	礫石器 敲石	破片	長 幅	16.9 (3.1)	厚 重	(2.1) 139.5	黒色片岩	右側縁に連続剥離が認められ、加撃の際に生じたと推定さ れる。	
第100図2 PL.32	726	礫石器 敲石	完形	長 幅	11.9 5.4	厚 重	4.8 461.4	変質玄武岩	棒状礫の下面に敲打痕を有する。	

8号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第101図 PL.33	727	土師器 高杯	脚部下半	脚	12.3		細砂粒/良好/橙	脚部に透孔が4箇所。外面はヘラ削り後縦位のヘラ磨き、 内面はヘラナデ。	
第101図 PL.33	728	土師器 埴	口縁部1/3	口	8.3		細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	頸部で胴部と接合。口縁部は縦位のヘラ磨き。内面は口縁 部が横位のヘラ磨き、頸部はナデ。	
第101図 PL.33	729	土師器 壺	頸部～胴部中 位片	頸	5		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	頸部は胴部に接合。胴部はヘラ削り、器面磨滅のため単位 不明。内面胴部はナデ。	
第101図 PL.33	730	土師器 甕	頸部片				細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から胴部上位に波状文が3段以上施文。	
第101図 PL.33	731	土師器 壺	口縁部片	口	23.8		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口唇部は内側に折り返し、凸帯は貼付。内外面ともヘラナ デ。	
第101図 PL.33	732	土師器 壺	口縁部片	口	23.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口唇部は内側に折り返し、凸帯は貼付。内外面ともヘラナ デ。	731と同一個 体の可能性 高い。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第101図 PL.33	733	土師器 台付甕	口縁部～胴部片	口 胴	14.8 22.4		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後、 肩に横位のハケ目。内面胴部はナデ。		
第101図 PL.33	734	土師器 台付甕	脚部3/4	脚	9		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部は胴部に接合。端部は内側に折り返し。脚部上位はハ ケ目(1cmあたり8本)、下半はナデ、内面はナデ。	脚部内面底 部側に多量 の砂粒を含 む粘土貼付。	
第101図 PL.33	735	礫石器 敲石	略完形	長 幅	17.9 6.7	厚 重	4.9 765.1	砂質頁岩	正面および上端部に敲打痕が認められる。左上部の剝離痕 は敲打による衝撃剝離の可能性はある。	

9号住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第102図 PL.33	736	土師器 高杯	脚部1/2	脚	16		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部に透孔が4箇所。外面はハケ目(1cmあたり7～8本)後 端部を横ナデ、上半をナデ。内面は上半がナデ、下半はハ ケ目。	
第102図 PL.33	737	土師器 高杯	脚部1/3	脚	15.6		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部に透孔が3箇所。外面はヘラ磨き、一部器面磨滅のため 不鮮明。内面はヘラナデ、単位不鮮明。	
第102図 PL.33	738	土師器 埴	口縁部1/3	口	7.8		//明褐色		
第102図 PL.33	739	土師器 壺	口縁部片	口	15.4		細砂粒/良好/橙	口唇部は横ナデ、棒状凸帯を貼付、単位不明、口縁部はハ ケ目。	
第102図 PL.33	740	土師器 台付甕	口縁部～胴部上 位片	口	14.6		細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり5本)後横方向に 2条の浅い凹線が巡る。	
第102図 PL.33	741	土師器 台付甕	口縁部～胴部上 位片	口	17.6		細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり4～5本) 後肩に横位のハケ目。	
第102図 PL.33	742	土師器 台付甕	口縁部～胴部上 位片	口	15.6		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり4～5本) 後肩に横位のハケ目。	

1号竪穴

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第105図 PL.34	743	土師器 高杯	杯身部	口	13.8		細砂粒/良好/橙	脚部とは接合が剥落。内外面とも丁寧なヘラ磨き、内面は 器面磨滅のため一部単位など不明。		
第105図 PL.34	744	土師器 高杯	ほぼ完形	口 脚	20 11.1	高	13	細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合。脚部に透孔が3箇所。杯身部・脚部 ともヘラ磨き。内面は杯身部がハケ目後ヘラ磨き、脚部は ヘラナデ。	
第105図 PL.34	745	土師器 高杯	ほぼ完形	口 脚	19.7 11.6	高	12.2	細砂粒・粗砂粒・ 褐粒/良好/明黄褐	杯身部と脚部は接合。脚部に透孔が3箇所。杯身部・脚部 ともヘラ磨き。内面は杯身部がヘラ磨き、脚部はヘラナデ。	
第105図 PL.34	746	土師器 高杯	ほぼ完形	口 脚	21.7 11.2	高	14.2	細砂粒/良好/浅黄 橙	杯身部と脚部は接合。脚部に透孔が3箇所。杯身部・脚部 ともヘラ磨き。内面は杯身部がヘラ磨き、脚部はヘラナデ。 一部器面磨滅のため単位不明。	
第105図 PL.34	747	土師器 高杯	ほぼ完形	口 脚	21 12.8	高	14.6	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	脚部に杯身部を接合。脚部に透孔が3箇所。外面と内面口 縁部はヘラ磨きか、器面磨滅のため単位不明。内面脚部は ヘラナデ。	
第105図 PL.34	748	土師器 高杯	ほぼ完形	口 脚	21.5 12	高	13.9	細砂粒/良好/橙	脚部に杯身部を接合。脚部に透孔が3箇所。杯身部口縁部 は内外面ともヘラ磨き、一部器面磨滅のため不鮮明、底部 はヘラ削り。脚部は内外面ともヘラナデ。	
第105図 PL.34	749	土師器 高杯	ほぼ完形	口 脚	21.4 13.6	高	14.4	細砂粒/良好/にぶ い橙	脚部に杯身部を接合。脚部に透孔が3箇所。外面は杯身部 から脚部までヘラ磨き。内面は杯身部がヘラ磨き、脚部は ヘラナデ。	
第105図 PL.34	750	土師器 高杯	完形	口 底	12.6 5.8	脚 高	20.6 12.2	細砂粒・粗砂粒・ 褐粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合。脚部に透孔が3箇所。杯身部口縁部 と脚部はヘラ磨き。内面は杯身部がヘラ磨き、脚部は上半 がヘラナデ、下半はハケ目。	
第105図 PL.34	751	土師器 高杯	完形	口 底	14.9 7.8	脚 高	19.1 13.5	細砂粒・粗砂粒・ 褐粒/良好/にぶ い橙	脚部に杯身部を接合。脚部に透孔が上下各3箇所。杯身部 口縁部と脚部までヘラ磨き、一部器面磨滅のため不鮮明。 内面は杯身部がヘラ磨き、脚部は上半がヘラナデ、下半は ハケ目後ヘラナデ。	
第106図 PL.34	752	土師器 埴	ほぼ完形	口 底	9.2 4.1	高 胴	16.6 13	細砂粒/良好/橙	口縁部は放射状、頸部は横位、胴部は縦位のヘラ磨き、底 部はヘラ削り。内面は口縁部が斜放射状ヘラ磨き。	
第106図 PL.34	753	土師器 埴	完形	口 底	9.6 3.7	高 胴	20.4 15.8	細砂粒/良好/橙	口縁部はハケ目後放射状ヘラ磨き、胴部底部ともヘラ磨き、 内面は口縁部が横位のヘラ磨き。	
第106図 PL.35	754	土師器 埴	完形	口 底	9.1 3.3	高 胴	19 15.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は放射状ヘラ磨き、胴部と底部もヘラ磨き。内面口 縁部はヘラ磨き、器面磨滅のため単位不明。	
第106図 PL.35	755	土師器 小型壺	ほぼ完形	口 底	10 2.2	高	8.9	細砂粒/良好/橙	口縁部と胴部は縦位、頸部は横位、底部は不定方向のヘラ 磨き。内面は口縁部が斜放射状、胴部は横位のヘラ磨き。	
第106図 PL.34	756	土師器 壺	胴部一部欠損	口 底	17.1 6	高 胴	27.1 24.8	細砂粒/良好/橙	口唇部は刻み目、頸部から胴部はハケ目後ヘラ磨き、底部 はヘラ削り。内面は口縁部がヘラ磨き、胴部はヘラナデ。	
第106図 PL.34	757	土師器 壺	ほぼ完形	口 底	14.9 2.9	高 胴	16.5 16.2	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	頸部から口縁部は放射状、頸部下は横位、胴部は縦位のヘ ラ磨き。内面は口縁部がヘラ磨き、器面磨滅のため単位不 明。頸部にハケ目が残る。	
第106図 PL.35	758	土師器 壺	ほぼ完形	口 底	14.8 4.3	高 胴	22.4 19.2	細砂粒/良好/橙	口縁部・胴部ともヘラ磨きであるが、大部分は器面磨滅の ため単位等不明、底部と胴部最下部はヘラ削り。内面は胴 部がヘラナデ。	
第106図 PL.35	759	土師器 壺	口縁部3/4欠損	口 底	16.2 4.3	高 胴	22.9 20	細砂粒/良好/橙	口縁部・胴部・底部ともヘラ磨きであるが、大部分は器面 磨滅のため単位等不明。内面は胴部がヘラナデ。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	胴			
第106図 PL.34	760	土師器 小型甕	ほぼ完形	11.2 3.9	11.9 12.4		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	内面胴部に輪痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部上半はハケ目(1cmあたり9～11本)、下半から底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第106図 PL.34	761	土師器 小型甕	ほぼ完形	11.3 4	9.5 11.8		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第106図 PL.34	762	土師器 小型甕	ほぼ完形	11.9 3.3	10.7 12.1		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第106図 PL.34	763	土師器 小型甕	ほぼ完形	12.2 4.2	9.3 12		細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部から底部までヘラ磨き、内面は口縁部と底部にハケ目、胴部はナデ。	
第106図 PL.34	764	土師器 小型甕	完形	10.4 4	9.7 13.2		細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ磨き、底部は器面磨滅のため不明。内面は口縁部がヘラ磨き、胴部上半はハケ目(1cmあたり7～9本)、下半はヘラナデ。	
第106図 PL.34	765	土師器 小型甕	完形	13.7 4.1	13.4 13.8		細砂粒・粗砂粒・ 石英他/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はナデ、一部にハケ目(1cmあたり6～9本)が残る。底部はヘラ磨き。内面は口縁部がハケ目後、上半を横ナデ、胴部はヘラナデ。	
第106図 PL.34	766	土師器 甕	口縁部～胴部上位片	19.4			細砂粒/良好/橙	口縁部上半は横ナデ、下半から胴部はハケ目(1cmあたり11～12本)一部はナデ消されている。内面は口縁部がハケ目、胴部はナデ。	
第106図 PL.35	767	土師器 甕	4/5	15.3 5	15.3 16		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり3～5本)、底部はヘラ削り。内面は口縁部から頸部は横ナデ、胴部上半はハケ目、下半はヘラ磨き。	
第106図 PL.35	768	土師器 小型台付甕	完形	11 6.5	13.8 12.6		細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部と胴部は接合、脚部端部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後肩に横位のハケ目、脚部は上半がハケ目、下半はナデ。内面は胴部が脚部ともナデ。	
第106図 PL.35	769	土師器 小型台付甕	ほぼ完形	9.8 6.6	15.4 13.4		細砂粒/良好/浅黄橙	脚部は接合、脚部端部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり8本)後肩に横位のハケ目、脚部は上半がハケ目、下半はナデ。内面は胴部上半がナデ、底部から下半はハケ目、脚部はナデ。	
第107図 PL.35	770	土師器 台付甕	脚部～胴部下位	8.6			細砂粒/良好/灰白	脚部は接合、脚部端部は内側に折り返し。胴部から脚部上位はハケ目(1cmあたり5～7本)、脚部下半はナデ。内面は脚部がナデ、底部付近はヘラナデ、胴部はハケ目が残る。	
第107図 PL.35	771	土師器 台付甕	口縁部～胴部上位片	14.2			細砂粒/良好/浅黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり7～8本)後、横位のハケ目。内面は胴部がナデ。	
第107図 PL.35	772	土師器 台付甕	口縁部～胴部	12.7 15.9			細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部は接合。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)後上位に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第107図 PL.35	773	土師器 台付甕	脚部1/2欠損	11.3 7.1	19.2 15		細砂粒/良好/灰黄褐	脚部は接合、脚部端部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)後、肩に横位のハケ目、脚部は上半がハケ目、下半はナデ。内面は胴部がナデ、脚部もナデ。	脚部側底部に砂粒の多い粘土貼付。胴部上位に焼成後の穿孔あり。
第107図 PL.35	774	土師器 台付甕	一部欠損	12.8 7.4	20.3 17		細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部は接合、脚部端部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり8本)後、肩に横位のハケ目、脚部は上半がハケ目、下半はナデ。内面は胴部がナデ、脚部もナデ。	
第107図 PL.35	775	土師器 小型台付甕	3/4	9.8 6.8	15.8 13.8		細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部は胴部に接合。脚部端部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部から脚部上位はハケ目(1cmあたり7～9本)。内面胴部はナデ。	脚部内面底部に多量の砂粒を含む粘土貼付。
第107図 PL.35	776	土師器 台付甕	脚部欠損	12.5 17			細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部は貼付。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり4本)後上位に横位のハケ目。内面胴部ナデ。	
第107図 PL.35	777	土師器 台付甕	一部欠損	14.1 8.3	23.9 19.5		細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部は接合、脚部端部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後上位に横位のハケ目、脚部は上半にハケ目。内面胴部はナデ。	脚部内側底部に佐柳の多い粘土を貼付。
第107図 PL.35	778	土師器 台付甕	ほぼ完形	18.1 9.5	25.8 21.7		細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄橙	脚部は接合。口縁部は横ナデ、胴部から脚部は縦位・斜め・横位のハケ目(大部分は粗い目であるが、一部細かい部分あり)。内面も胴部・脚部にハケ目。	

1号掘立柱建物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	胴			
第104図 PL.33	779	土師器 鉢	1/4	21.8 5.5 6.0	7		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から体部はハケ目後ナデ、底部はヘラ削り。内面もハケ目後ナデ、口唇部にハケ目が残る。	
第104図 PL.33	780	土師器 壺	口縁部～胴部上位片	18			細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部はナデ、頸部から胴部はハケ目後ナデ。内面は口縁部から頸部はハケ目(1cmあたり13～15本)、胴部はナデ。	
第104図 PL.33	781	土師器 壺	胴部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	胴部上半はハケ目(1cmあたり11～13本)、下半はヘラナデ、一部にヘラ磨き。内面はヘラナデ。	
第104図 PL.33	782	土師器 壺	底部～胴部下位	6.9			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	底部はヘラ磨き、胴部はヘラナデ後やや雑なヘラ磨き。内面はハケ目(1cmあたり13～15本)後ヘラナデ。	

5面遺構外

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	胴			
第109図 PL.36	783	土師器 高杯	杯身底部～脚部中位				細砂粒/良好/橙	杯身と脚部は接合、脚部に透孔が3箇所。外面はヘラ磨き、一部器面磨滅のため不鮮明。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第109図 PL.36	784	土師器 高杯	脚部片	脚	18.1		細砂粒/良好/にぶ い褐	脚部に杯身部を接合。脚部に透孔が4箇所。外面はヘラ磨き、 器面磨滅のため単位不鮮明。内面はヘラナデ。	
第109図 PL.36	785	土師器 器台	受部片				細砂粒/良好/橙	受部に透孔。内外面ともヘラ磨き、器面磨滅のため詳細不 鮮明。	
第109図 PL.36	786	土師器 脚付鉢	鉢身部1/2	口	15		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	脚部と接合。口縁部上半は横ナデ、下半から底部はヘラ磨 き。内面は全面ヘラ磨き。	
第109図 PL.36	787	土師器 台付甕	1/3	口 脚	9.2 5.7	高 13.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	脚部は貼付、脚部端部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、 胴部から脚部上位はハケ目(1cmあたり5～7本)。脚部はヘ ラナデ。	

〔8. 縄文時代の出土遺物〕

分類	特徴
A	中量の石英粗砂や黒・灰色礫粗砂と繊維を含むやや粗雑な胎土。
B	少量の石英・結晶片岩・灰色礫・粗砂を含むやや緻。
C	多量の石英・結晶片岩の粗砂と少量の赤・灰色粗砂を含む緻密な胎土。
D	多量の石英・結晶片岩の粗砂と少量の赤・灰色粗砂を含む緻密な胎土。
E	多量の石英・角閃石粗砂と少量の灰色礫粗砂を含むやや緻密な胎土。
F	中量の灰色粗細砂と少量の石英粗砂を含む緻密な胎土。
G	中量の石英・角閃石・灰色礫粗砂を含む緻密な胎土。
H	少量の石英、黒・灰色細砂を含む緻密な胎土。
I	中量の石英、赤・灰色礫粗砂を含む緻密な胎土。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第109図 PL.36	788	縄文土器 深鉢	口縁部片				A	L R 縄文を横位施文。内面横磨き。	有尾式
第109図 PL.36	789	縄文土器 深鉢	口縁部片				A	附加条第1種の R L + R と L R + L を横位施文して羽状構 成。内面横磨き。	有尾式
第109図 PL.36	790	縄文土器 深鉢	胴部片				A	788と同一個体。	有尾式
第109図 PL.36	791	縄文土器 深鉢	胴部片				A	附加条第1種 R L + L を横位施文。内面磨きに近い横磨 撫で。	有尾式
第109図 PL.36	792	縄文土器 深鉢	口縁部片				B	R L 縄文を横位施文。内面やや風化。	諸磯 b 式
第109図 PL.36	793	縄文土器 深鉢	口縁部片				C	波状口縁。R L 縄文を横位施文し、半截竹管の集合沈線文 を施す。内面やや風化。	諸磯 b 式
第109図 PL.36	794	縄文土器 深鉢	口縁部片				C	波状口縁。半截竹管の集合沈線文を横位や渦巻状に施文。 内面横磨き。	諸磯 b 式
第109図 PL.36	795	縄文土器 深鉢	口縁部片				D	波状口縁。R L 縄文を横位施文し、半截竹管の集合沈線文 を横・斜位に施す。内面横磨撫で。	諸磯 b 式
第109図 PL.36	796	縄文土器 深鉢	胴部片				C	浮線文を横位多段に施し、その上面を含めて L R 縄文を横 位施文。内面横磨撫で。	諸磯 b 式
第109図 PL.36	797	縄文土器 深鉢	胴部片				C	R L 縄文を横・斜位に施文。内面やや風化。	諸磯 b 式
第109図 PL.36	798	縄文土器 深鉢	胴部片				C	794と同一個体。	諸磯 b 式
第109図 PL.36	799	縄文土器 深鉢	口縁部片				C	波状口縁。半截竹管の集合沈線文を横位や渦巻状に施文。 内面横磨き。	諸磯 c 式
第109図 PL.36	800	縄文土器 深鉢	口縁部片				E	口縁に無文部を置き、単沈線により文様構成。内面磨き状 の横磨撫で。	堀之内 1 式
第109図 PL.36	801	縄文土器 深鉢	胴部片				E	単沈線による区画文を施す。内面磨き状の横磨撫で。	堀之内 1 式
第109図 PL.36	802	縄文土器 深鉢	胴部片				E	単沈線による区画文を施す。内外面やや風化。	堀之内 1 式
第109図 PL.36	803	縄文土器 深鉢	胴部片				E	単沈線による区画文を施す。内面縦磨き。	堀之内 1 式
第109図 PL.36	804	縄文土器 深鉢	底部1/4				F	L R 縄文を縦位施文し、沈線懸垂文を施す。底面に木葉痕。 内面横磨き。	堀之内 1 式
第109図 PL.36	805	縄文土器 深鉢	口縁部片				G	口縁に8字状貼付文を施し、単沈線による区画文を施文。 内面口縁に捻転貼付文と横位沈線文を施文。内面横磨き、 やや風化。	堀之内 2 式
第109図 PL.36	806	縄文土器 深鉢	口縁部片				G	口縁に8字状貼付文を施し、沈線区画文内に L R 縄文を充 填。内面口縁に捻転貼付文と2条の横位沈線文を施文。内 面横磨き。	堀之内 2 式
第109図 PL.36	807	縄文土器 深鉢	胴部片				G	粗製土器。体部上半に斜位凹線状の粗い磨撫で調整痕を残 す。内面風化。	堀之内 2 式
第109図 PL.36	808	縄文土器 深鉢	胴部片				G	沈線区画文内に L R 縄文を充填。内外面風化。	堀之内 2 式
第109図 PL.36	809	縄文土器 深鉢	胴部片				G	いわゆる体部屈曲鉢。三角形区画文に L R 縄文を充填。 内面横磨き。	堀之内 2 式

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第109図 PL.36	810	縄文土器 深鉢	底部1/8					G	底面に網状痕。内外面共に横篋磨き。	堀之内2式
第109図 PL.36	811	縄文土器 深鉢	頸部片					G	横位の羽状沈線文を多段に構成。内面横篋磨き。	加曾利B2式
第109図 PL.36	812	弥生土器 甕	口縁部片					H	口唇上面～口縁に細密なRL縄文を横位施文。内面丁寧な横篋磨き。色調は褐灰色。	弥生中期
第109図 PL.36	813	弥生土器 甕	胴部片					I	LR縄文を横位施文。内面横篋撫で。色調は鈍い黄橙色。	弥生中期
第109図 PL.36	814	剥片石器 石鏃	略完形	長 幅	(2.8) 1.8	厚 重	0.5 1.3	珪質頁岩	上半部が直線状で、下半部が大きく広がる特徴的な形状である。茎部欠損。	凹基有茎鏃
第109図 PL.36	815	剥片石器 石鏃	略完形	長 幅	(2.8) 2.8	厚 重	0.3 2.1	黒色安山岩	先端部欠損。両面に押圧剥離による2次加工を施し整形。	凹基無茎鏃
PL.36	824	剥片石器 打製石斧	完形	長 幅	14.7 7.5	厚 重	2.2 229.4	黒色頁岩	大形。撥形を呈する。両側縁および基部を丁寧に加工する。	
PL.36	825	剥片石器 打製石斧	完形	長 幅	8.9 6.0	厚 重	2.0 108.8	砂岩	刃部は急斜度の2次加工を施し、片刃状を呈する。側縁の一部の摩滅が顕著。裏面に自然面を大きく残す。	
PL.36	826	剥片石器 打製石斧	完形	長 幅	11.0 6.3	厚 重	1.6 102.7	黒色頁岩	両側縁に抉りをもち、分銅形を呈する。刃部やや摩滅。	
PL.36	827	剥片石器 打製石斧	完形	長 幅	9.9 7.2	厚 重	2.8 217.4	黒色頁岩	両側縁に抉りをもち、分銅形を呈する。抉り内部に潰れと摩滅が見られる。	

遺物観察表

表29 非掲載遺物集計表

(g)

区	層位・面	遺構番号	遺構種	土師器				須恵器				埴輪		灰釉陶器			瓦
				小型製品	中型製品	大型製品	不明	小型製品	中型製品	大型製品	不明	円筒類	形象	椀・皿	瓶類	不明	
1-1	1面	1	建物床下				2										
1-1	1面	1	建物土間			10											
1-1	1面		カマド														
1-1	1面	1	建物排水升														
1-1	1面	1	建物壁														
1-1	1面	1	建物掘り方														
1-1	1面	1	建物														
1-1	1面		屋敷				37										
1-1	1面	1	土塁														
1	3面	1	溝		37	31						448	55				
1	3面	1	溝(調査区東)			10											
1	3面	2	溝		115	163	30			46							
1-1	1面	17	溝							8							
1-1	1面		復旧1														
1-1	1面		復旧溝群														
1-1	1面	1	畑														
1-1	1面	6	畑														
1-1	1面	9	畑														
1-1	1面	12	畑														
1-1	1面	18	畑														
1-1	1面	19	畑														
1	3面	21	畑跡														
1-1	1面	23	畑														
1-1	1面	1	竹藪														
1-1	1面		A泥流														
1-1	1面		確認面														
1-1	1面						5										
1-1	2面	2	竪穴				8										
1-1	2面	3	井戸														
1-1	2面	10	土坑														
1-1	2面	21	溝				3										
1-1	2面		畑跡				9										
1-1	2面		土塁上集石														
1-1	2面	2	土塁														
1-1	2面		土塁									243					
1-1	2面		古墳									62					
1-1	2面											409					
1-1	2.5面					10	12	70									
1-1	3面	2	土塁														
1-1	3面	2	土塁	5	337	83	151	26		605		5932	744				
1-1	3面	2	土塁門柱穴2ピット									37					
1-1	3面	2	土塁門付近														
1	3面		虎口SP2	3			4										
1-1	3面	5	溝				16										
1-1	3面	6	溝		22	28											
1-1	3面	7	溝				3										
1-1	3面	8	溝			14											
1-1	3面	9	溝		58	171	9				154						
1-1	3面	10	溝		9	53	4										
1-1	3面	11	溝		6	39	6				42						
1-1	3面	14	溝		5												
1-1	3面	15	溝		11	158	50										
1-1	3面	23	溝	8	150	439	185	48		158		678	60				
1-1	3面	25	溝			76	19			34		1564	69				
1	3面	301(1)	土坑	6			8					81					
1	3面	302(2)	土坑			9											
1	3面	303(3)	土坑			4											
1-1	3面	304(4)	土坑														
1	3面	305(5)	土坑			3	8										
1	3面	305・306	土坑														
1-1	3面	306(6)	土坑														
1	3面	308(8)	土坑														
1-1	3面	308(8)	土坑														
1	3面	310(10)	土坑					6									
1	3面	317(17)	土坑					4									
1-1	3面	20	土坑			26	9										
1-1	3面	40	土坑					3									
1-1	3面	42	土坑			30	63										
1-1	3面	52	土坑			13											
1-1	3面	59	土坑				27										
1-1	3面	62	土坑							41							
1-1	3面	65	土坑			8											
1-1	3面	69	土坑														
1-1	3面	71	土坑					46									
1-1	3面	101	土坑			6											
1-1	3面	105	土坑			3											
1-1	3面	108	土坑														
1-1	3面	121	土坑	4		17											
1-1	3面	128	土坑		2	7											
1-1	3面	133	土坑		22												
1-1	3面	141	土坑														
1-1	3面	148	土坑		83	61	14				70						
1-1	3面	154	土坑			4	2										
1-1	3面	157	土坑		18												
1-1	3面	203	土坑							78							
1-1	3面	204	土坑			61	6										
1-1	3面	205	土坑			5											

遺物観察表

区	層位・面	遺構番号	遺構種	土師器				須恵器				埴輪		灰釉陶器				
				小型製品	中型製品	大型製品	不明	小型製品	中型製品	大型製品	不明	円筒類	形象	椀・皿	瓶類	不明	瓦	
1-1	3面	207	土坑			163	22											
1-1	3面	208	土坑			12												
1-1	3面	209	土坑		20													
1-1	3面	211	土坑		9	26	8											
1-1	3面	212	土坑			93	33											
1-1	3面	17-19	土坑			33	14											
1-1	3面	203・209	土坑			20	8											
1-1	3面下	221	土坑				6											
1-1	3面	27	ビット															
1-1	3面	36	ビット			4												
1-1	3面		B混土	18														
1-1	3面		B混土				2											
1-1	3面		北下B土		14	128	5											
1-1	3面		確認面				8											
1-1	3面		前半東	4			2											
1-1	3面		前半北中				5											
1-1	3面						68	28		74								
1-1	3面						1											
1-1	4面	28	溝					1										
1-1	4面		As-B上			102	28	7		45	3							
1-1	4面		B軽石下			18	6	5			2							
1-1	4面		北部			29	10											
1-1	4面					203	86		33									
1-1	4面					215	57					33			1			
1-1	5面	1	住居		29	433	92											
1-1	5面	2	住居		35	999	203											
1-1	5面	3	住居		542	4923	1874											
1-1	5面	4	住居		355	3271	1304											
1	5面	5	住居		243	1660	985			38								
1-1	5面	6	住居		708	3435	734											
1-1	5面	7	住居		663	3100	1115											
1-1	5面	8	住居		118	1120	718											
1-1	5面	9	住居		231	2397	594											
1-1	5面	1堀立	掘立(P 2)			72												
1-1	5面	1堀立	掘立(P 2・3)				16											
1-1	5面	1堀立	掘立(P 8)				83											
1-1	5面	1	掘立(P 9)															
1-1	5面	1	竪穴		18	220	101											
1-1	5面		S D			42	48											
1-1	5面	201	土坑		10	8	18											
1-1	5面	213	土坑		130	187	17											
1-1	5面	219	土坑		8	47	66											
1-1	5面	220	土坑		3		7											
1-1	5面	202・208	土坑		21	52												
1-1	5面	59	ビット		8													
1-1	5面	64	ビット			63												
1-1	5面	1	焼土			23												
1-1	5面		確認面		148	1133	512											
1-1	5面		東b下PA上			8	6											
1-1	5面		東c混黒土		27	233	26											
1-1	5面		南c混黒土			88	5											
1-1	5面		南東			324	79											
1-1	5面					587	58					13						
1-1	5面			9	336	1435	369											
1-1			土塁							127								
1-1			土塁断ち割り			1												
1-1			断ち割り															
1-1			S e東															
1-1			東○															
1-1			攪乱															
1-1				3	101	114	119	53		22		292						
1-2	1面		復旧1															
1-2	1面		復旧2															
1-2	1面		As-A下															
1-3	1面		復旧4															
1	1面		As-A下洪水層			17	1											
1	4面		As-B下黒色土	4														
1	3面	4	ビット				1											
1	3面		確認面			88	22	3		76								
1	3面		調査区西側トレンチ			11		2										
1	3面		攪乱				6			67		103						
1			全体			16												
2-1	1面		復旧坑															
2-1	1面		上面															
2-2	1面																	
2-2	2面		上面									47						
2	1面		上面				9											
2	1面						4											
3	1面		上面				51	4										
3	1面		南壁															
3	1面		北壁															
4	1面	4	畑															
4	1面		上面															
5	1面	1	溝															
5	1面		上面				91											
5		試掘18	トレンチ	48.13		28.61		19.27										
5			北壁6															
			計	122	4,517	28,605	10,293	278	0	1,365	5	9,760	873	1	0	0	0	0

写真図版



1 1-1区東部1面(上側東)



2 1-1区中~南西部1面(上側東)



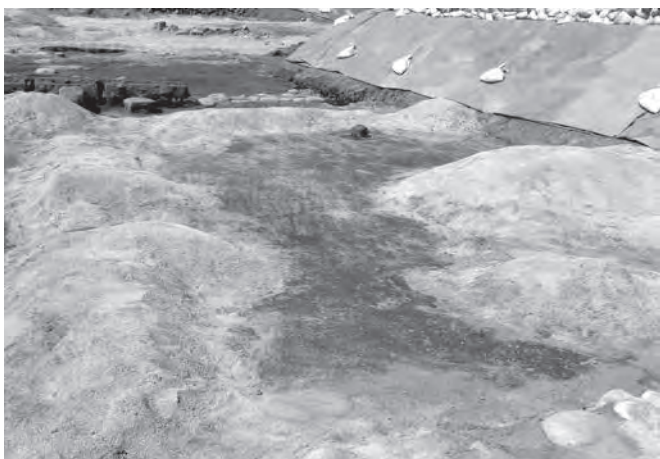
1 1-2・3区1面復旧溝群(南より)



2 1-1区東部1面(北より)



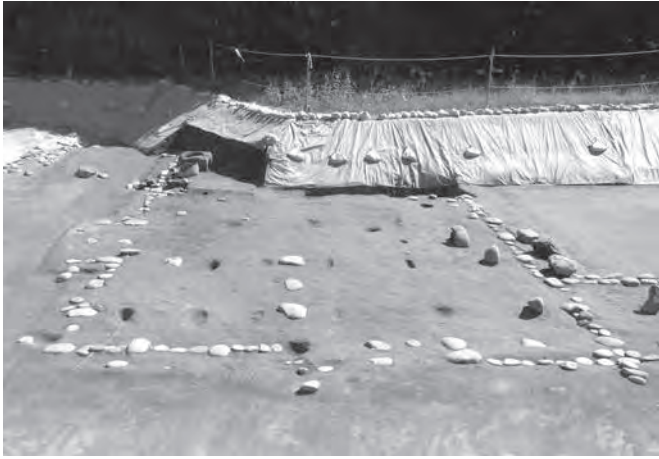
3 1区1号屋敷(上側東、As-A上面)



4 1区1号屋敷庭As-A清掃状況(南より)



5 1区1・2号建物土壁遺存状況(北西より)



1 1区1号建物(西より)



2 1区1号建物南壁遺存状況(北西より)



3 1区1号建物竈と排水升(北より)



4 1区1号建物竈と水甕(南西より)



5 1区1号建物礎石(49)出土状況



6 1区1号建物ダイドコロ付近遺物出土状況



7 1区2号建物全景(北西より)

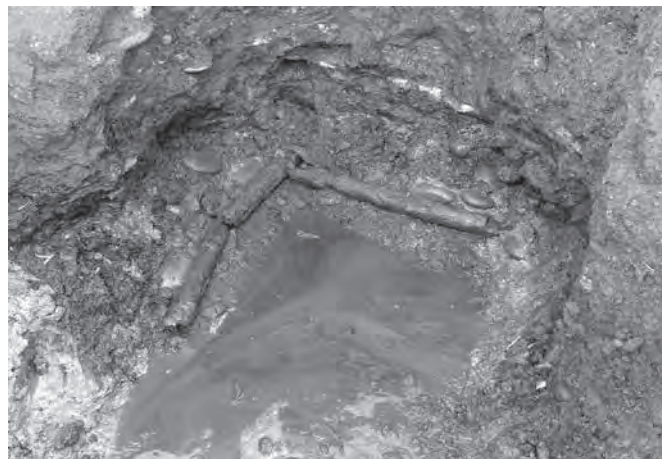


8 1区3~5号土坑全景(南より)

PL.4



1 1区1号井戸付近全景(南より)



2 1区1号井戸底部杵材出土状況(西より)



3 1区3号建物全景(西より)



4 1区1号土塁全景(西より)



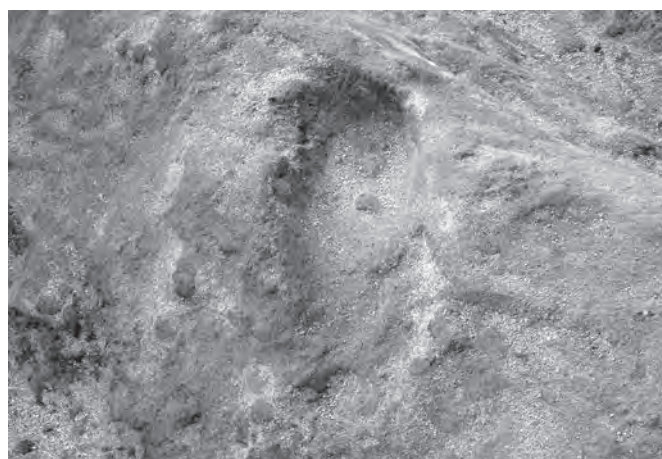
5 1区1号道路(南より、As-A上)



6 1区1号溝全景(北より)



7 1区1号畑全景(南より)



8 1区1号畑足跡(南東寄り)



1 1-1区中・北西部全景(東より)



2 1区32号畑と9号復旧溝群(横位)(北より)



3 2区東部全景(西より)



4 2区1号復旧溝群と1号畑(軽石部)(北東より)



5 2-2区全景(北東より)



1 2区1号復旧畑全景(南西より)



2 2区2号復旧畑全景(東より)



3 3区全景(東より)



4 3区北西部(南西より)



5 3区1号土坑全景(東より)



1 4区全景(東より)



2 4区2号復旧畑As-A残存状況(西より)



3 4区2号復旧畑全景(西より)



4 4区5号復旧畑西部(南より)



5 4区5号復旧畑東部(南より)



1 4区6号復旧畑(東より)



2 4区7号復旧畑(南より)



3 5区全景(東より)



4 5区3号復旧畑(東より)



5 5区1・2号道路、2号溝全景(南より)



1 1-1区東部・北部2面(上側東)



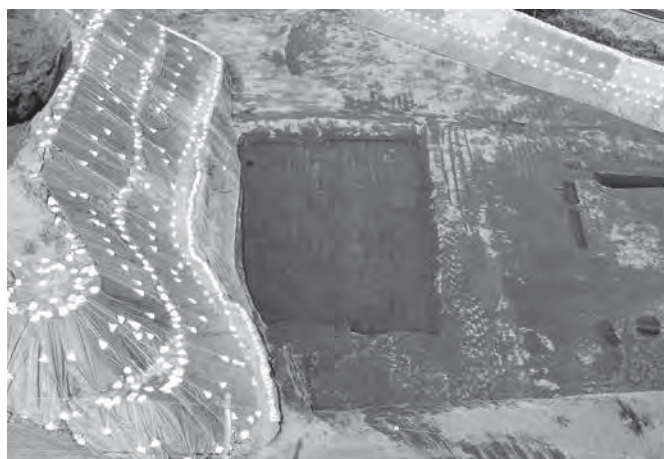
2 1-1区南西寄り2面(上側東)



1 1区2・3号溝全景(西より)



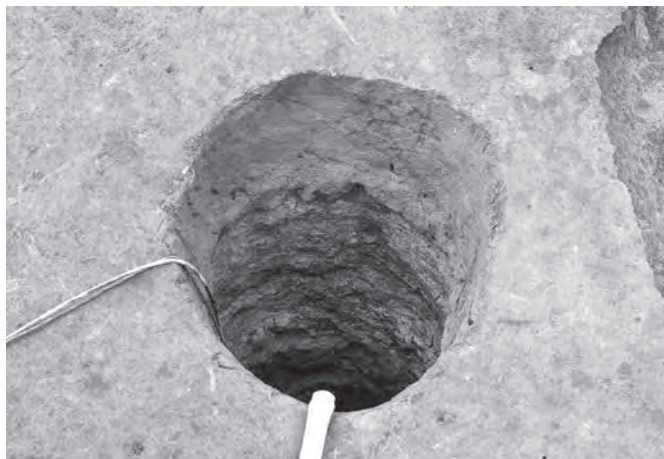
2 1区19号溝全景(東より)



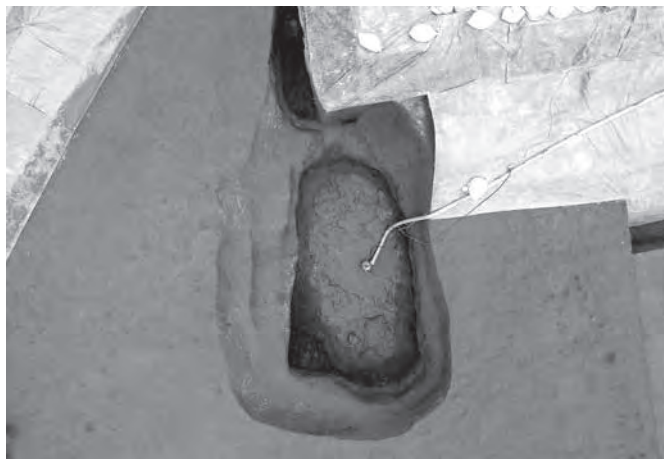
3 1区23号畑全景(南より)



4 1区3号井戸全景(西より)



5 1区4号井戸全景(東より)



6 1区2号竪穴全景(上側東)



7 1区2号土塁上土層断面(北東より)



8 1区2号土塁近世面表出状況ビ(東より)



1 1-1区東部・北部3面(北西より)



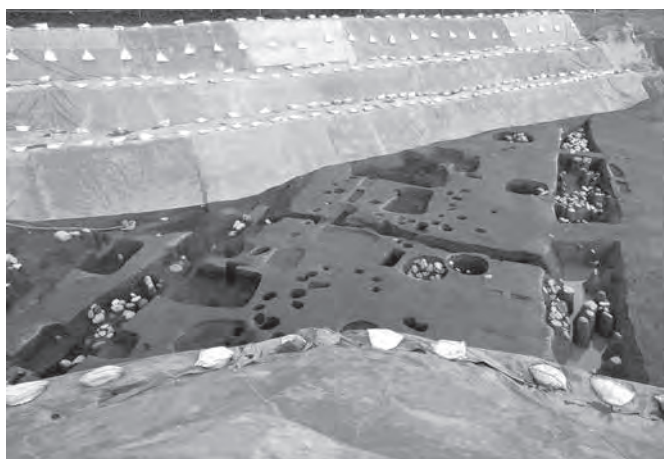
2 1-1区中・南西部3面(南西より)



1 1区館北部(東より)



2 1区館中央・中西部(東より)



3 1区館東部(西より)



4 1区館中南・南西部(東より)



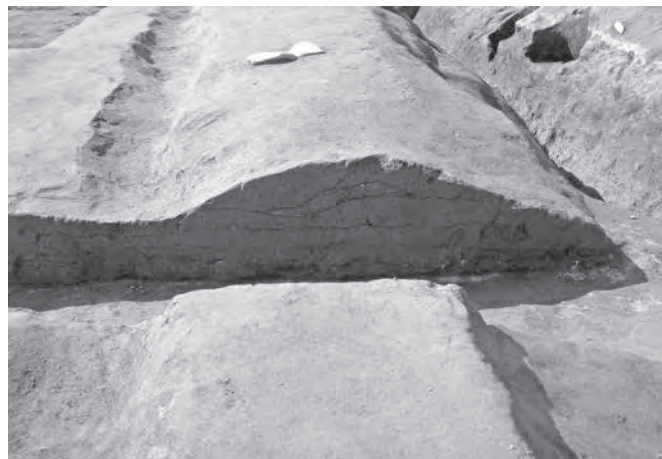
5 1区5号溝中部全景(西より)



6 1区5号溝西部と橋脚柱穴(東より)



1 1区5号溝・土壘土層断面(東より)



2 1区5号溝南塵除土層断面(東より)



3 1区10号溝(左)・11号溝(右)全景(西より)



4 1区11号溝埋戻土橋(西より)



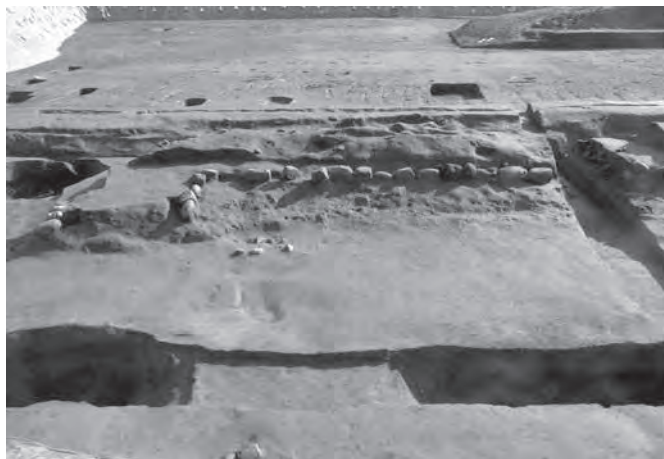
5 1区11号溝白磁皿出土状況(南東より)



6 1区12号溝全景(南より)



1 1区2号土塁全景(南より)



2 1区2号土塁中東部(北より)



3 1区2号土塁と土塁痕跡(手前)(東より)



4 1区2号土塁中東部礫崩落状況(西より)



5 1区2号土塁石列(北西より)



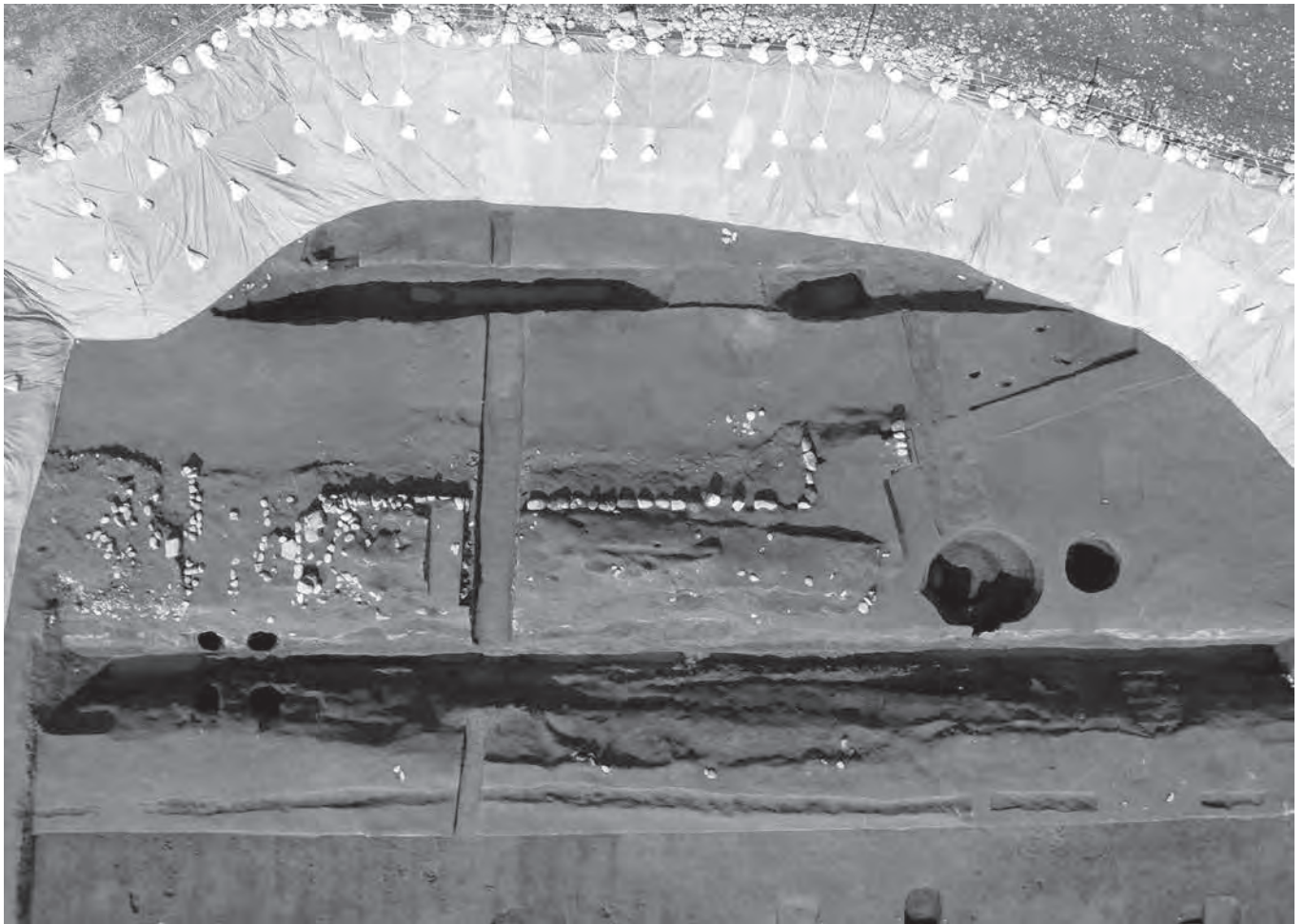
6 1区2号土塁突出部(北西より)



7 1区2号土塁土層断面(北東より)



8 1区館門(西より)



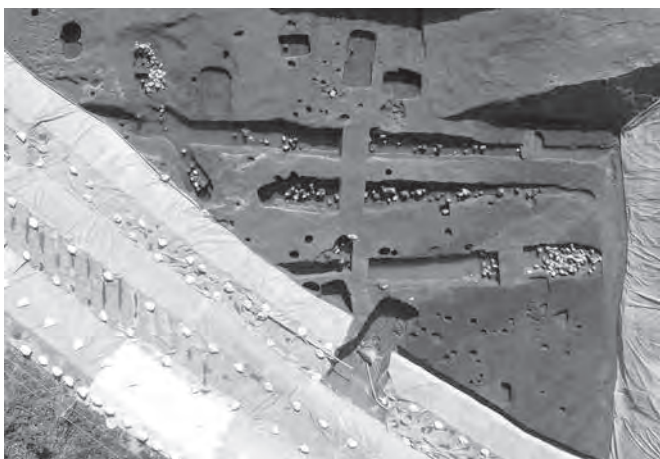
1 1区館虎口全景(上側北)



2 1区館門(北より)



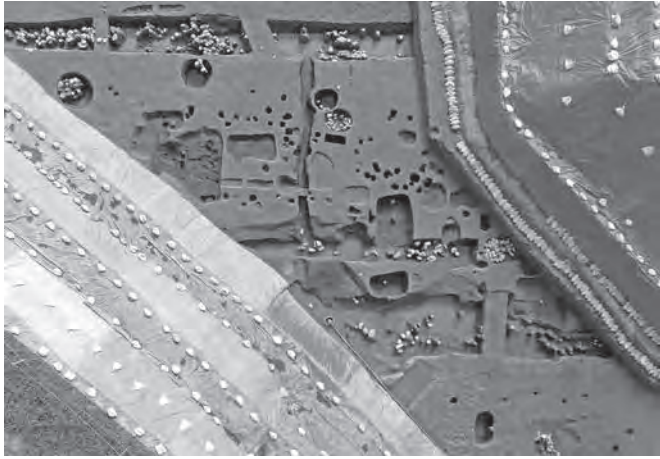
3 1区館門下部ピット(西より)



4 1区館北部土坑・ピット群(上側南)



5 1区館中央・中西部土坑ピット群(北より)



1 1区館南東部土坑ピット群(上側南)



2 1区館南部東寄りピット群(東より)



3 1区41号土坑周辺土坑・ピット群(東より)



4 1区106・107号土坑土層断面(西より)



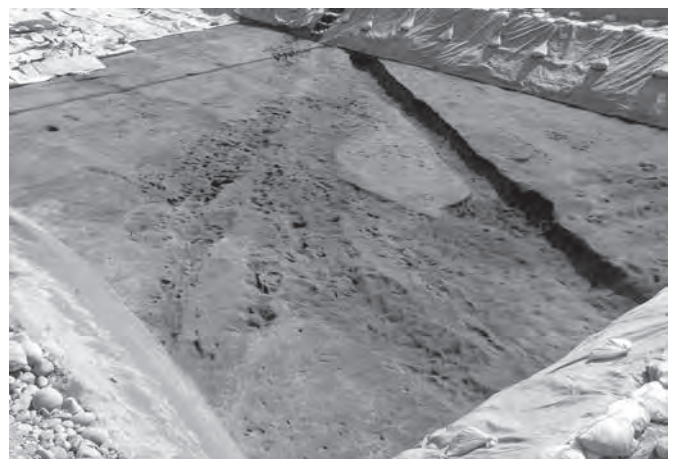
5 1区148号土坑全景(南より)



6 1区306号土坑周辺土坑ピット群(北より)



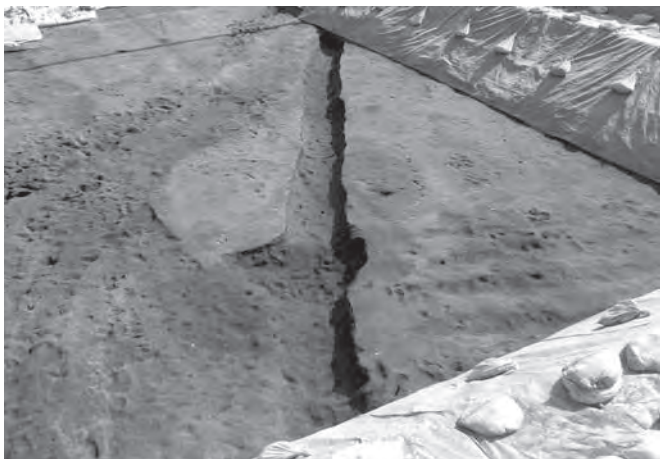
7 1区52・53号土坑全景(南より)



8 1区29号溝全景(北西より)



1 1-1区東部4面全景(南より)



2 1区27号溝全景(北西より)



3 1区40号畑全景(西より)



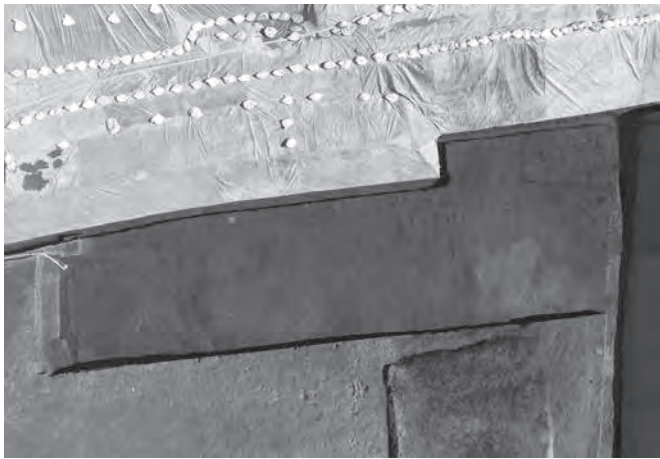
4 1区41号畑全景(北より)



5 1-2区4面全景(南より)



1 1-1区中央・中南部5面全景(南南東より)



2 1-1区南東隅部5面(西より)



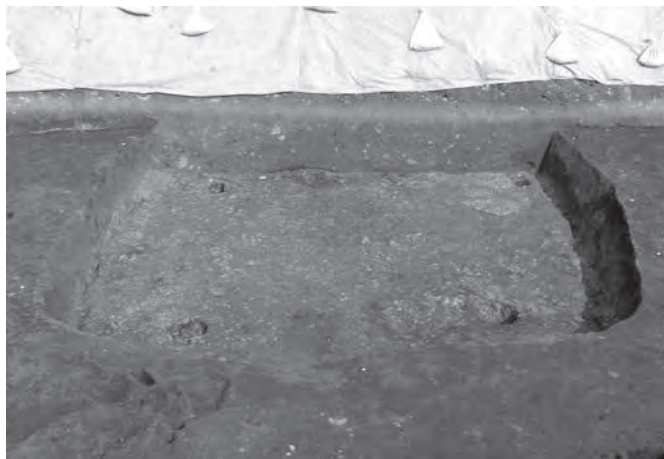
3 1区1号住居掘り方全景(南より)



4 1区2号住居遺物出土状況(西より)



5 1区2号住居炭化材出土状況(南西より)



1 1区2号住居全景(西より)



2 1区2号住居掘り方全景(南より)



3 1区3号住居遺物出土状況(北より)



4 1区3号住居遺物出土状況(南西より)



5 1区3号住居全景(西より)



6 1区3号住居土坑1土層断面(西より)



7 1区3号住居掘り方全景(西より)



8 1区4・5号住居出土遺物(西より)



1 1区4号住居全景(北より)



2 1区4号住居掘り方全景(西より)



3 1区5号住居全景(北西より)



4 1区5号住居掘り方全景(南より)



5 1区5号住居床・床下土層断面(西より)



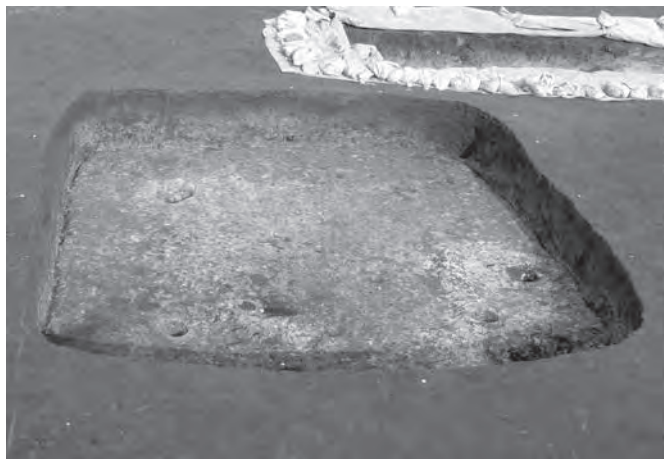
6 1区6号住居遺物出土状況(西より)



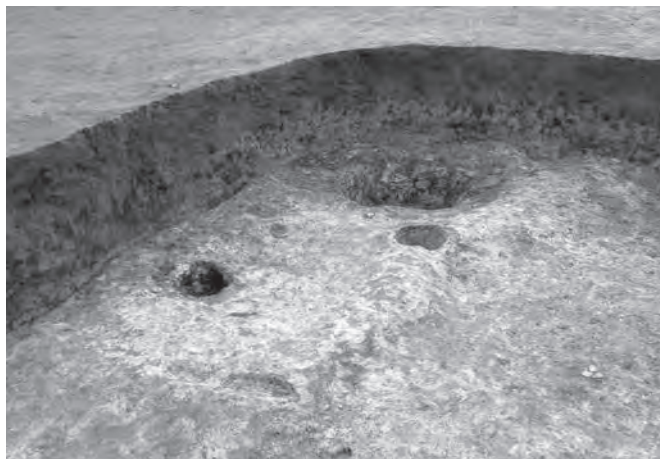
7 1区6号住居灰遺存状況(北東より)



8 1区6号住居中北部灰堆積状況(西より)



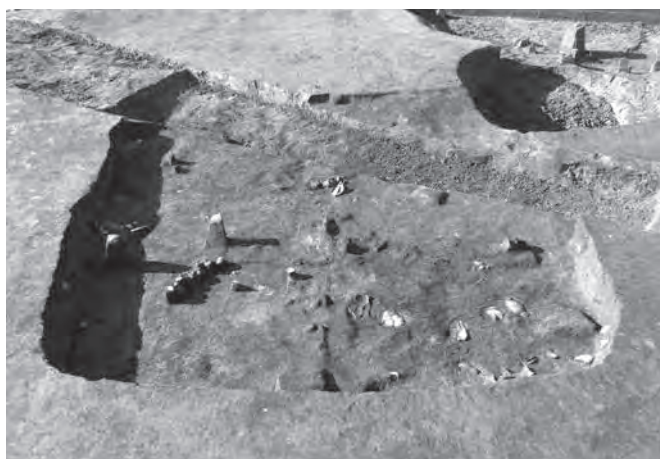
1 1区6号住居全景(西より)



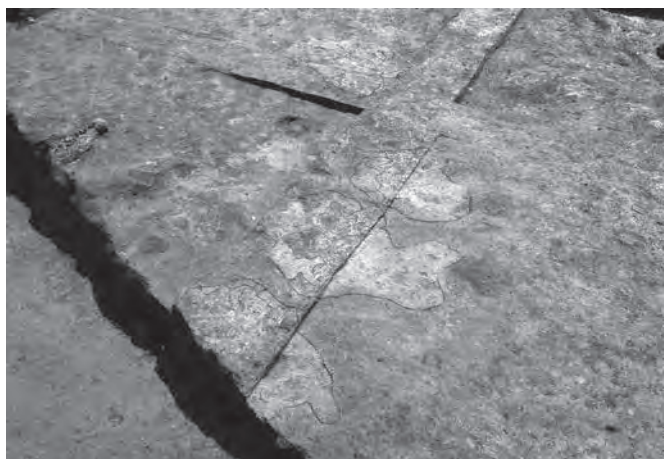
2 1区6号住居貯蔵穴付近(北東より)



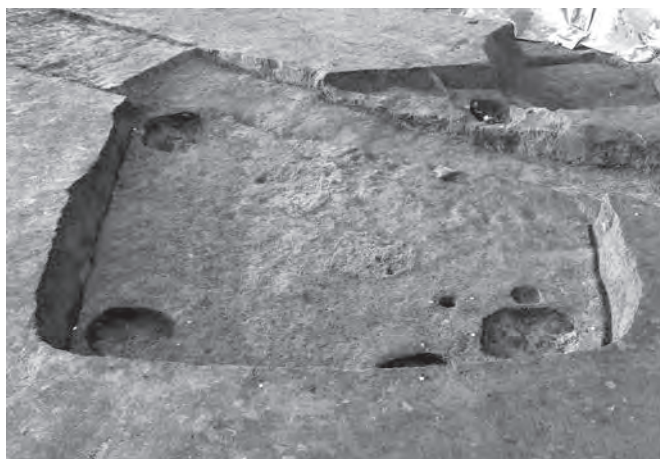
3 1区6号住居掘り方全景(西より)



4 1区7号住居遺物出土状況(南東より)



5 1区7号住居焼土面分布状況(北西より)



6 1区7号住居全景(南東より)



7 1区7号住居掘り方全景(南西より)



8 1区8号住居南半部全景(北より)



1 1区8号住居北半部全景(南東より)



2 1区8号住居南半部掘り方等全景(東より)



3 1区9号住居遺物出土状況(南より)



4 1区9号住居全景(南より)



5 1区9号住居掘り方全景(北より)



6 1区1号掘立柱建物全景(南より)



7 1区1号竪穴遺物出土状況(東より)



8 1区1号竪穴遺物出土状況(東より)

1区1面1号復旧溝



1 (1/3)

1区1面2号復旧溝



2 (1/4)

3区1面1号土坑



28(1/3)

29(1/3)

30(1/3)

1区1面上遺構外



5 (1/5)

17(1/3)

20(1/3)

2区1面上遺構外



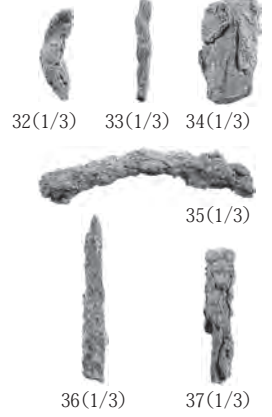
9 (1/5)

18(1/3)

19(1/3)

21(1/3)

3区1面上遺構外



25(1/4)

26(1/3)

32(1/3)

33(1/3)

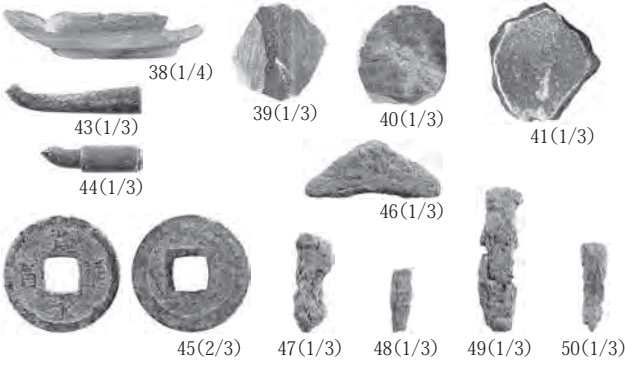
34(1/3)

35(1/3)

36(1/3)

37(1/3)

4区1面上遺構外



38(1/4)

43(1/3)

44(1/3)

39(1/3)

40(1/3)

41(1/3)

46(1/3)

45(2/3)

47(1/3)

48(1/3)

49(1/3)

50(1/3)

5区1面上遺構外



51(2/3)

52(1/3)

53(1/3)

54(1/3)

55(1/3)

56(1/3)

57(1/3)

58(1/3)

59(1/3)

60(1/3)

1区1面1号建物(1) 礎石



61(1/9)



62(1/9)



67(1/9)



77(1/9)



79(1/9)



81(1/9)



82(1/9)



124(1/9)



86(1/9)



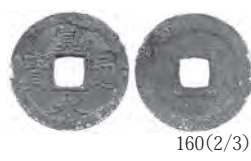
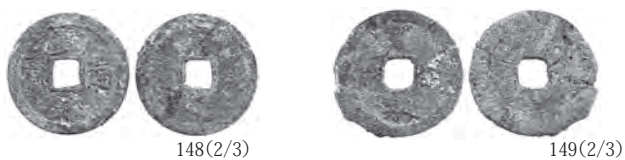
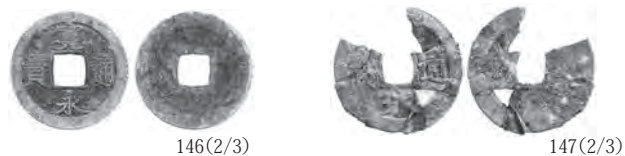
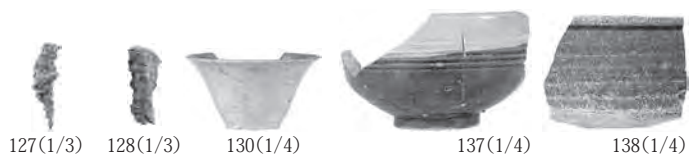
88(1/9)



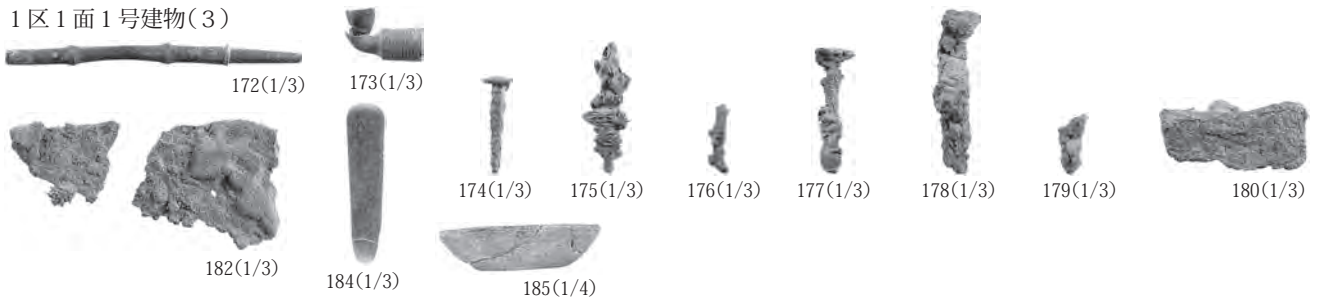
118(1/9)

PL.24

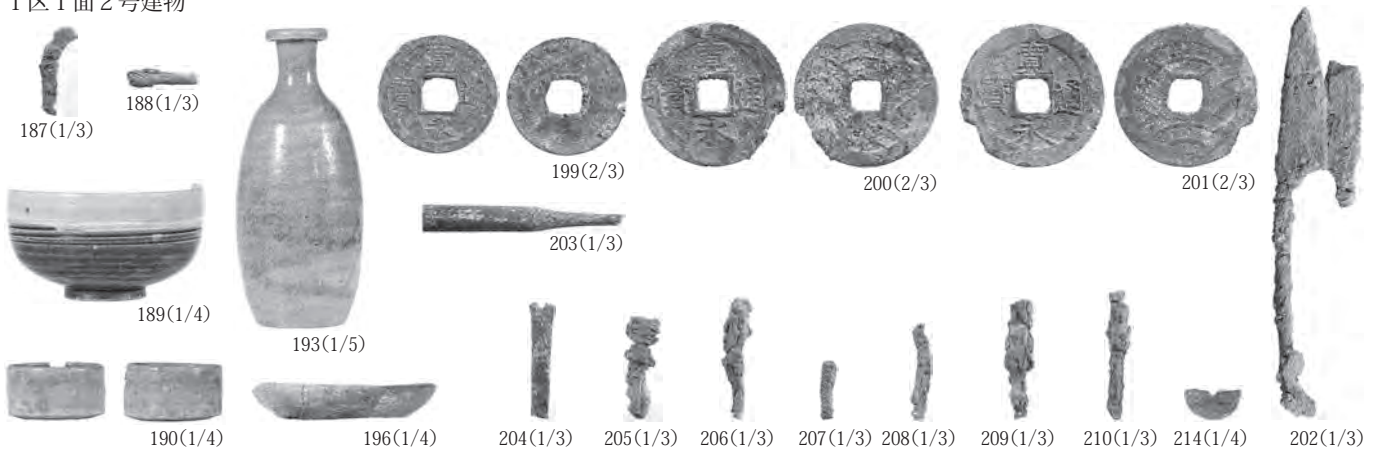
1区1面1号建物(2)



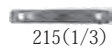
1区1面1号建物(3)



1区1面2号建物



1区1面ミソグラカ



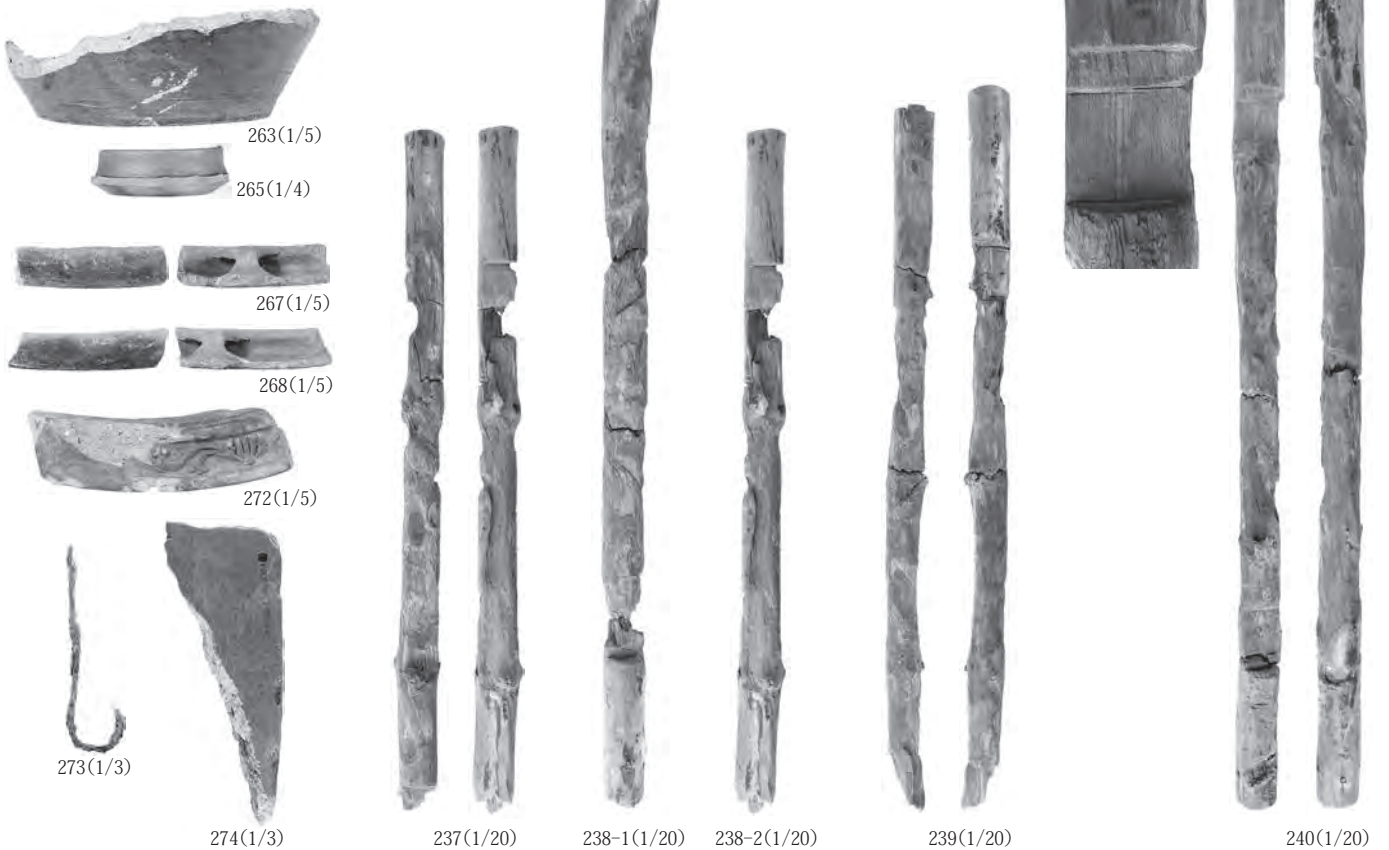
1区1面建物一括



1区1面1号土塁

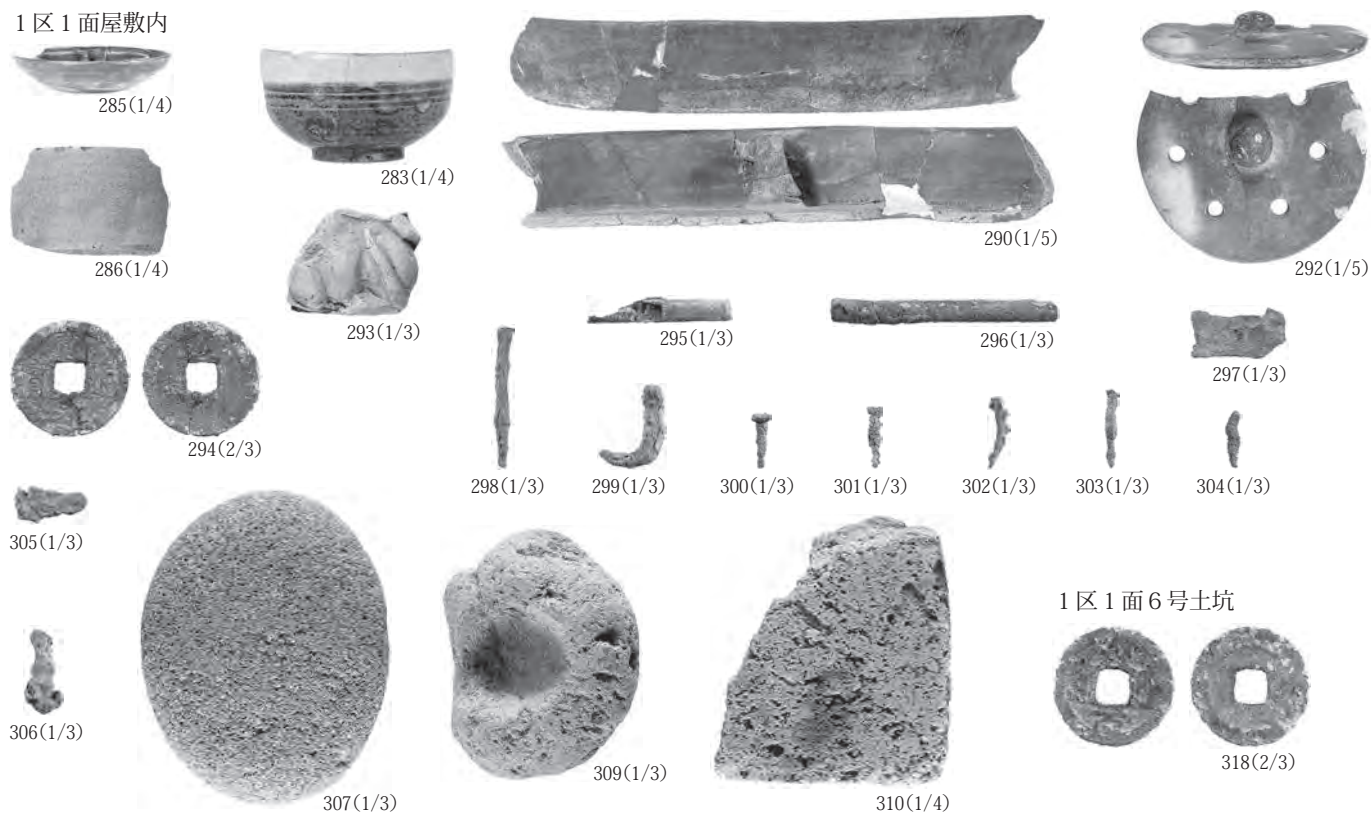


1区1面1区1号井戸



PL.26

1区1面屋敷内



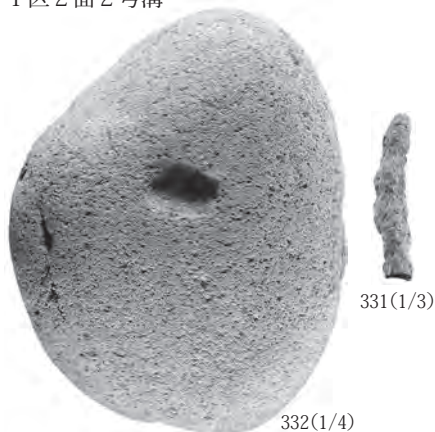
1区1面6号土坑



1区1面1号溝



1区2面2号溝



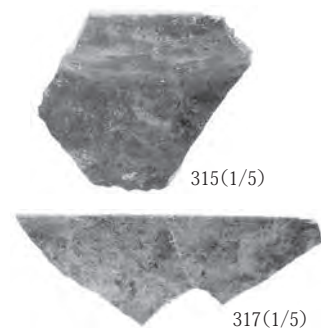
1区2面3号井戸



1区2面4号井戸



1区1面17号溝



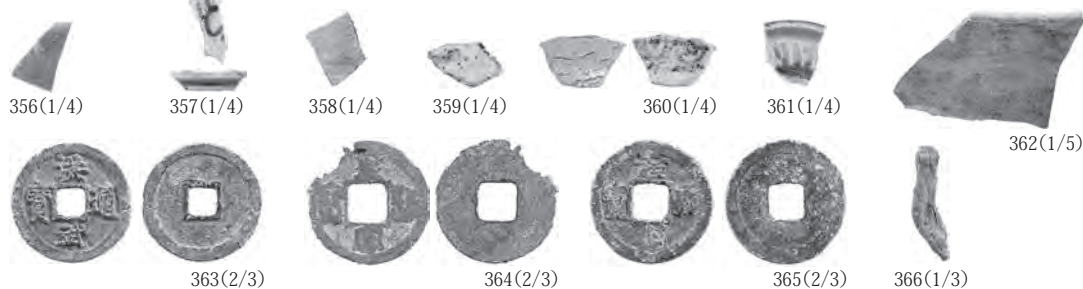
1区2面集石



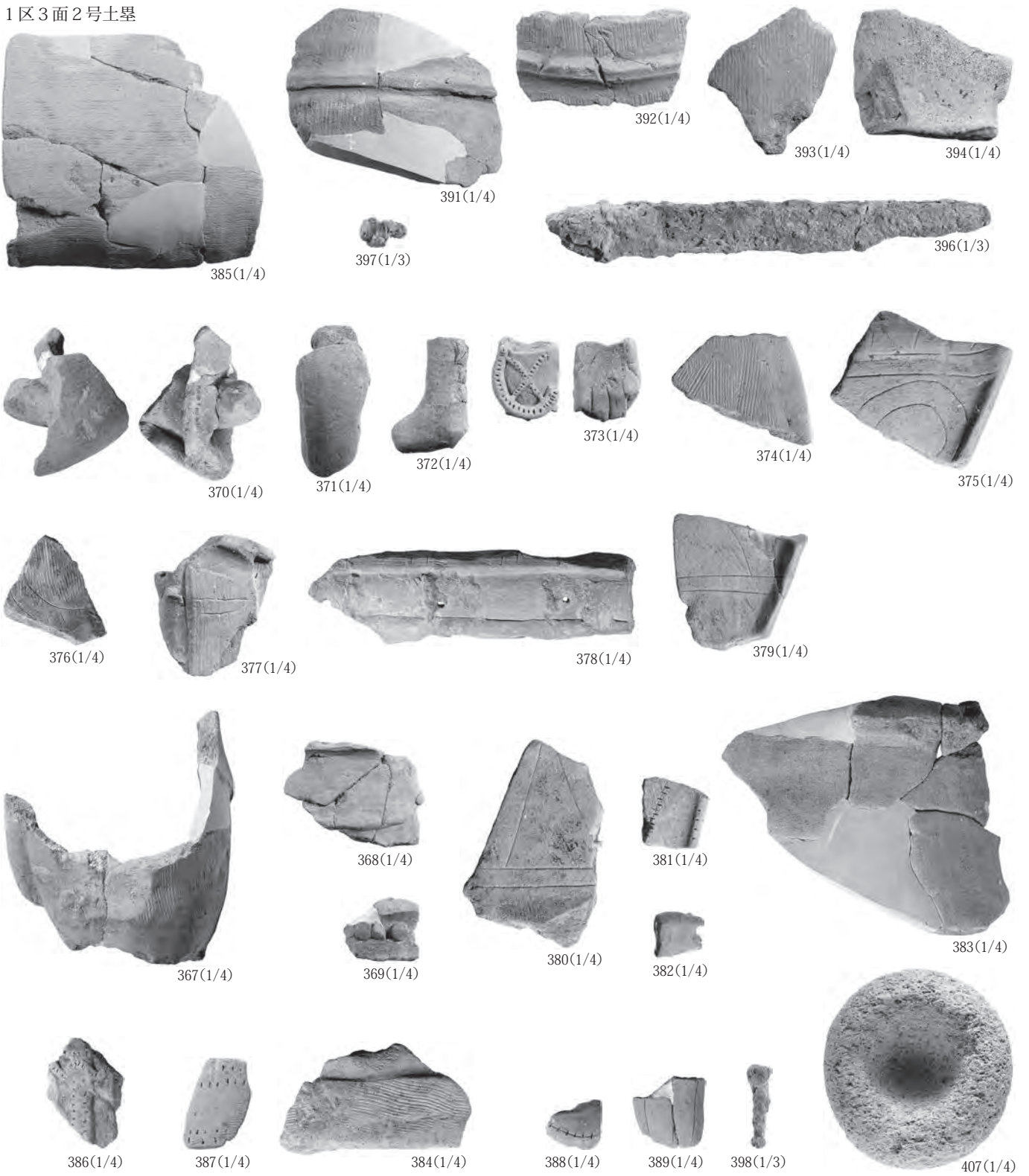
1区2面洪水層



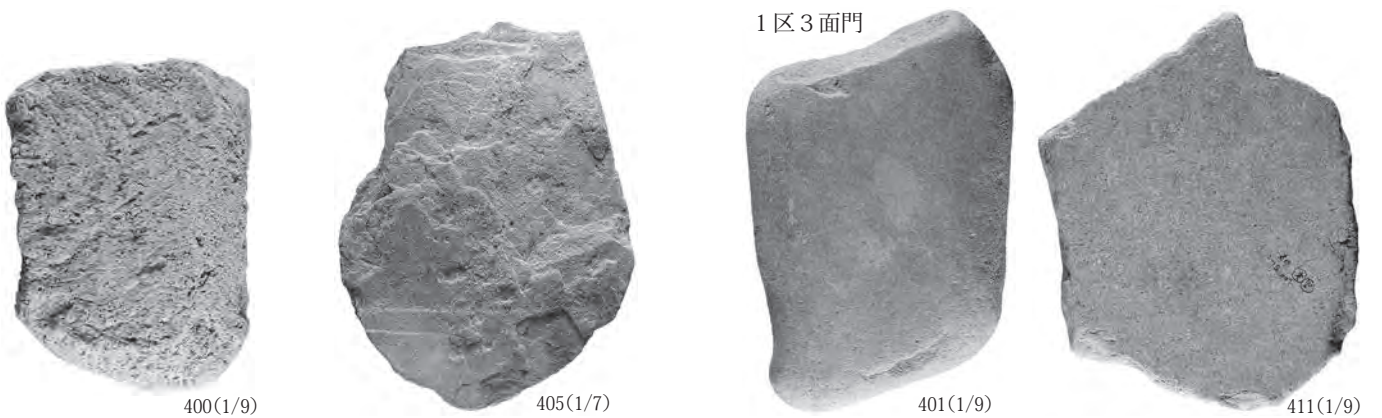
1区2面遺構外



1区3面2号土壘

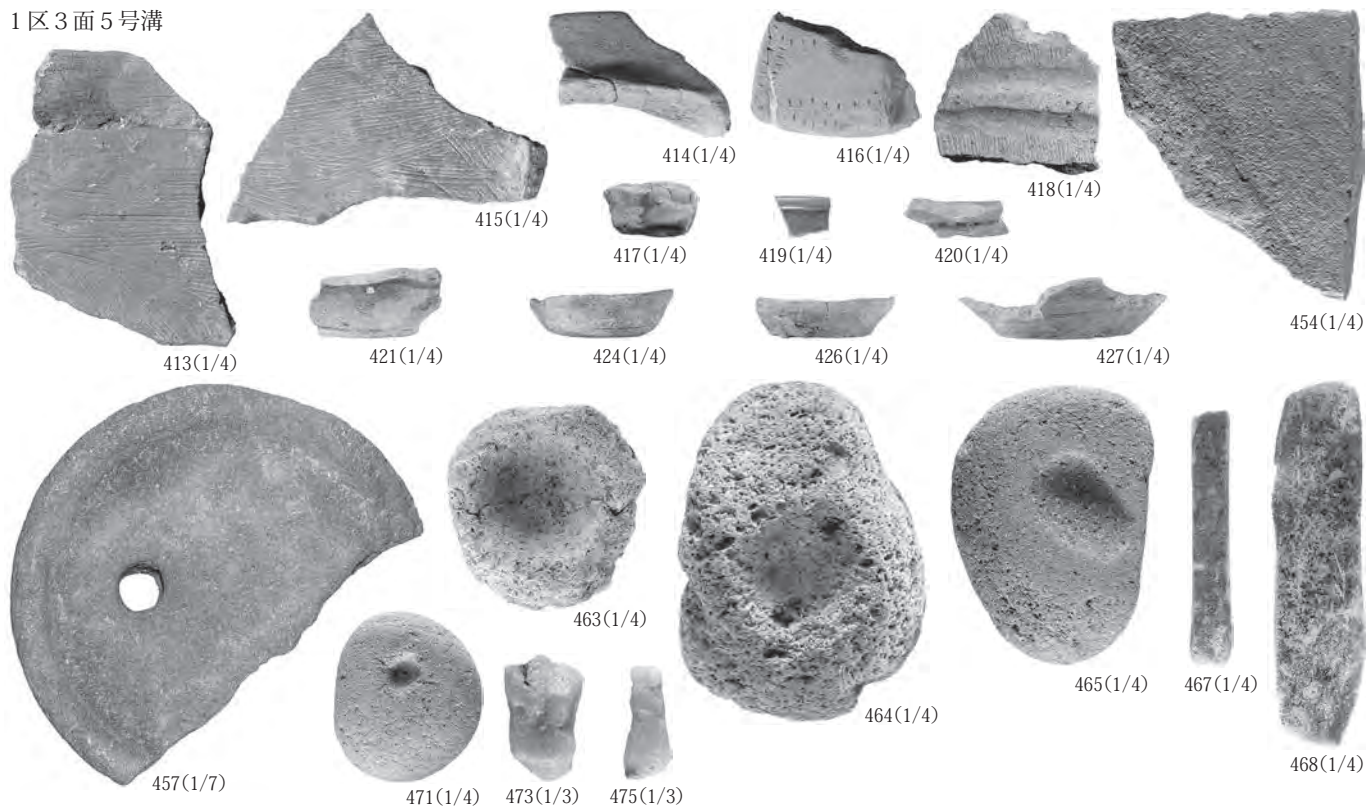


1区3面門

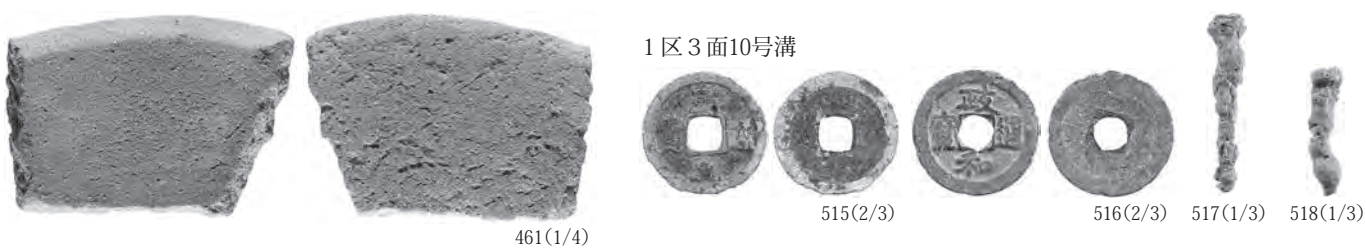


PL.28

1区3面5号沟



1区3面10号沟



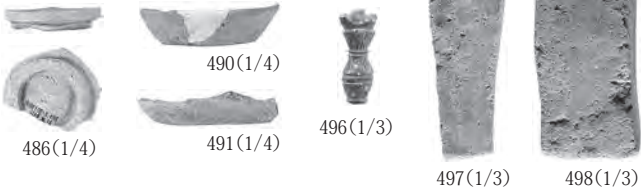
1区3面11号沟



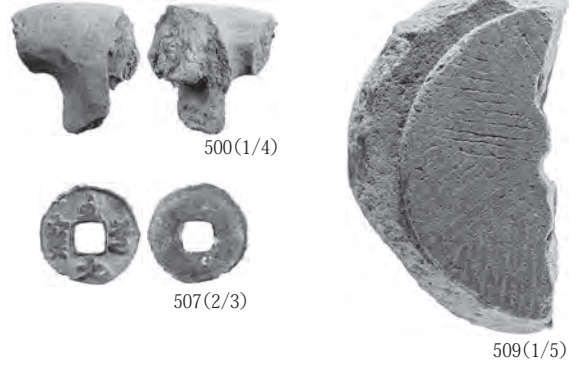
1区3面6号沟



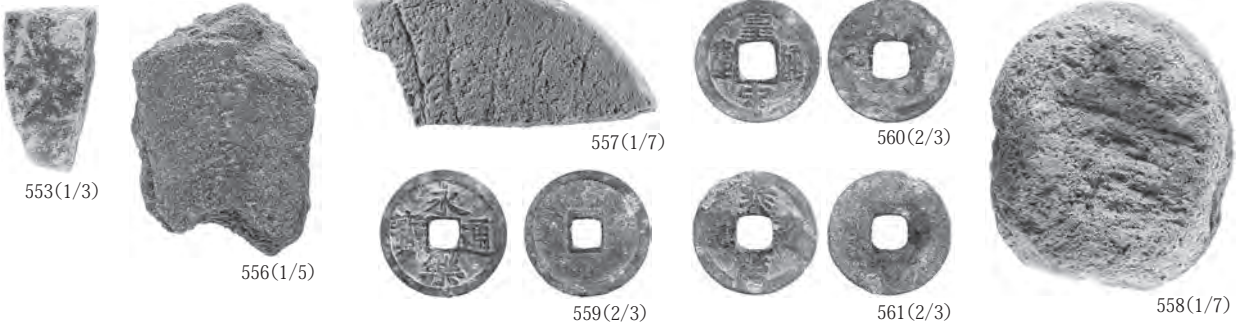
1区3面8号溝



1区3面9号溝



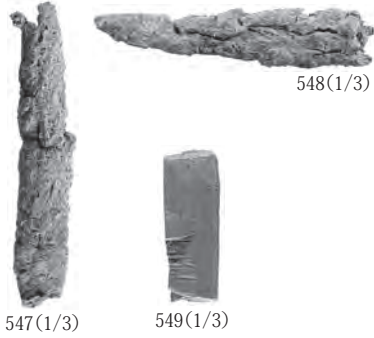
1区3面128号土坑



1区3面141号土坑



1区3面122号土坑



1区3面62号土坑



1区3面33号ピット



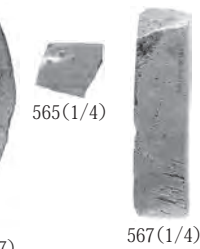
1区3面40号土坑



1区3面57・58号土坑 1区3面45号土坑



1区3面148号土坑



1区3面195号土坑



1区3面遺構外



PL.30

1区5面1号住居



609(1/4)

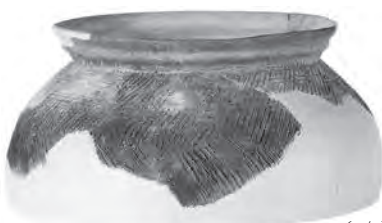
1区5面2号住居



610(1/4)



611(1/4)



613(1/4)



614(1/4)



612(1/4)

1区5面3号住居(1)



615(1/4)



616(1/4)



617(1/4)



618(1/4)



619(1/4)



620(1/4)



621(1/4)



622(1/4)



623(1/4)



624(1/4)



625(1/4)



626(1/4)



630(1/4)



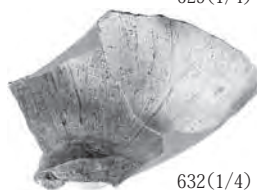
627(1/4)



629(1/4)



628(1/4)



632(1/4)



631(1/4)



635(1/4)



636(1/4)



633(1/4)



634(1/4)

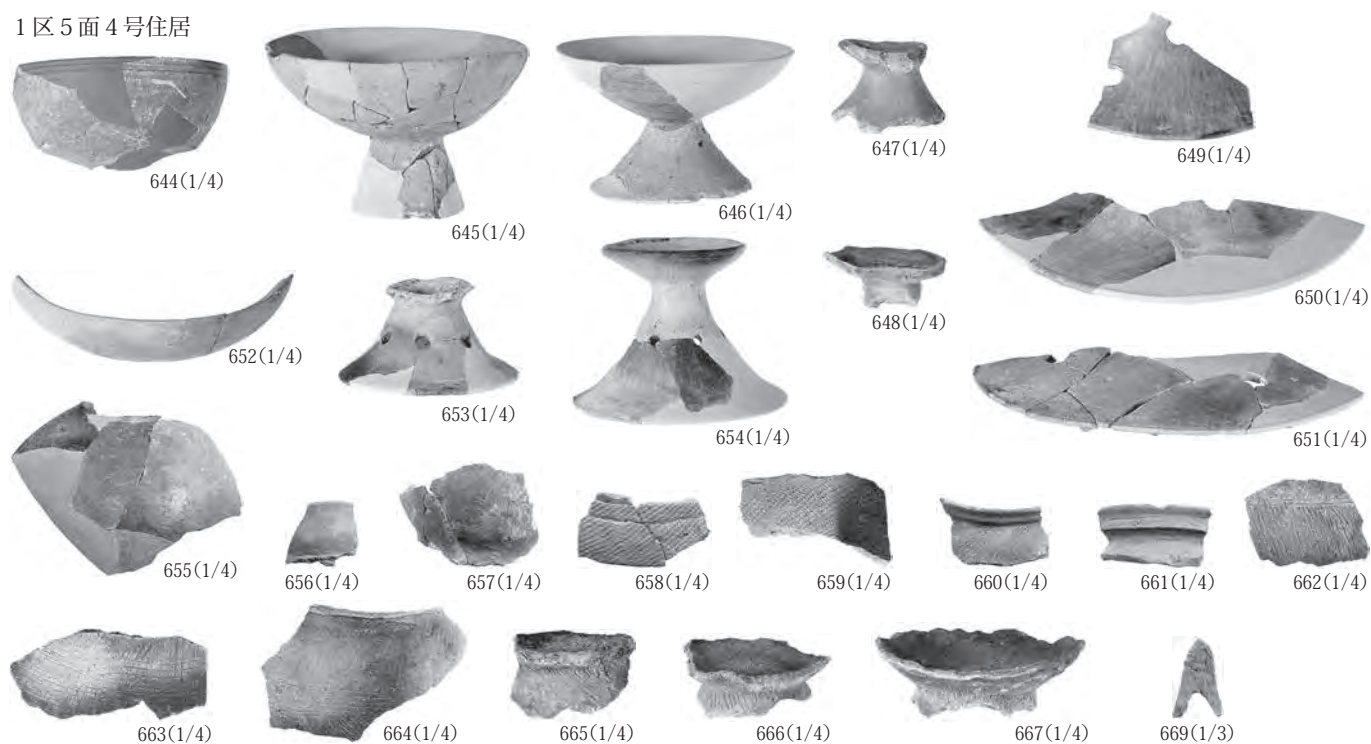


637(1/4)

1区5面3号住居(2)



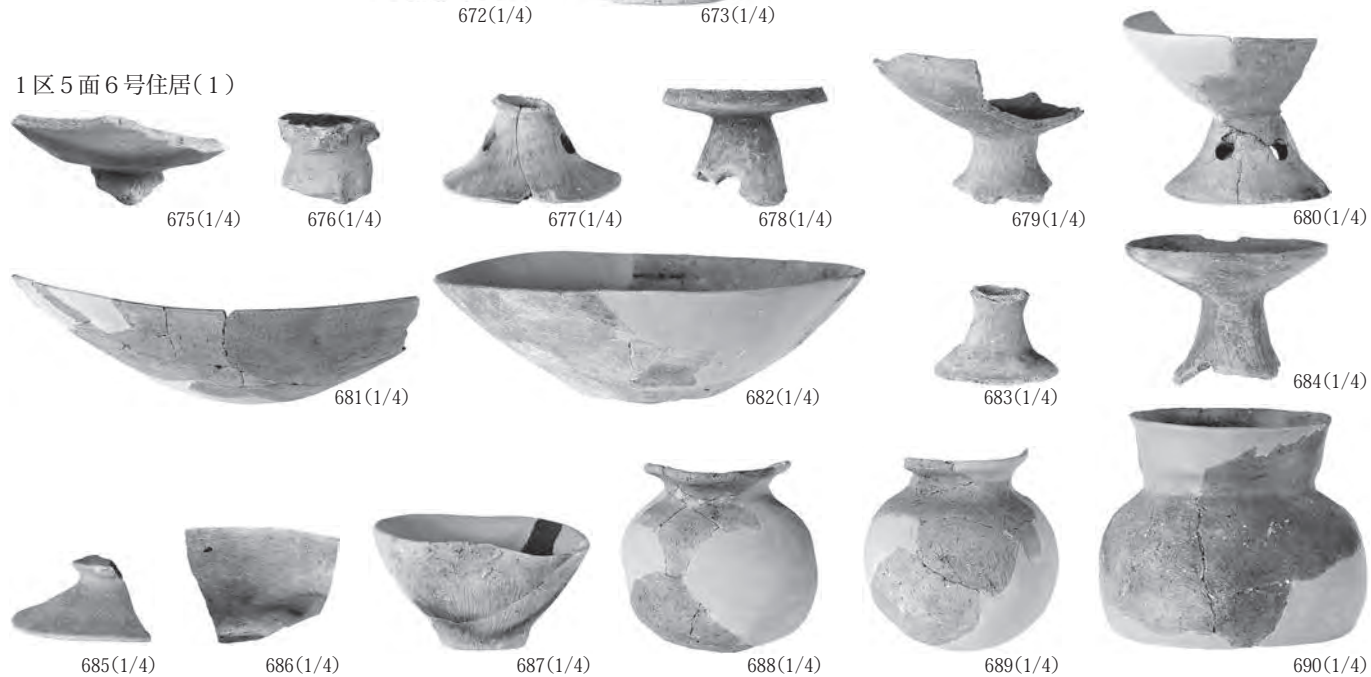
1区5面4号住居



1区5面5号住居

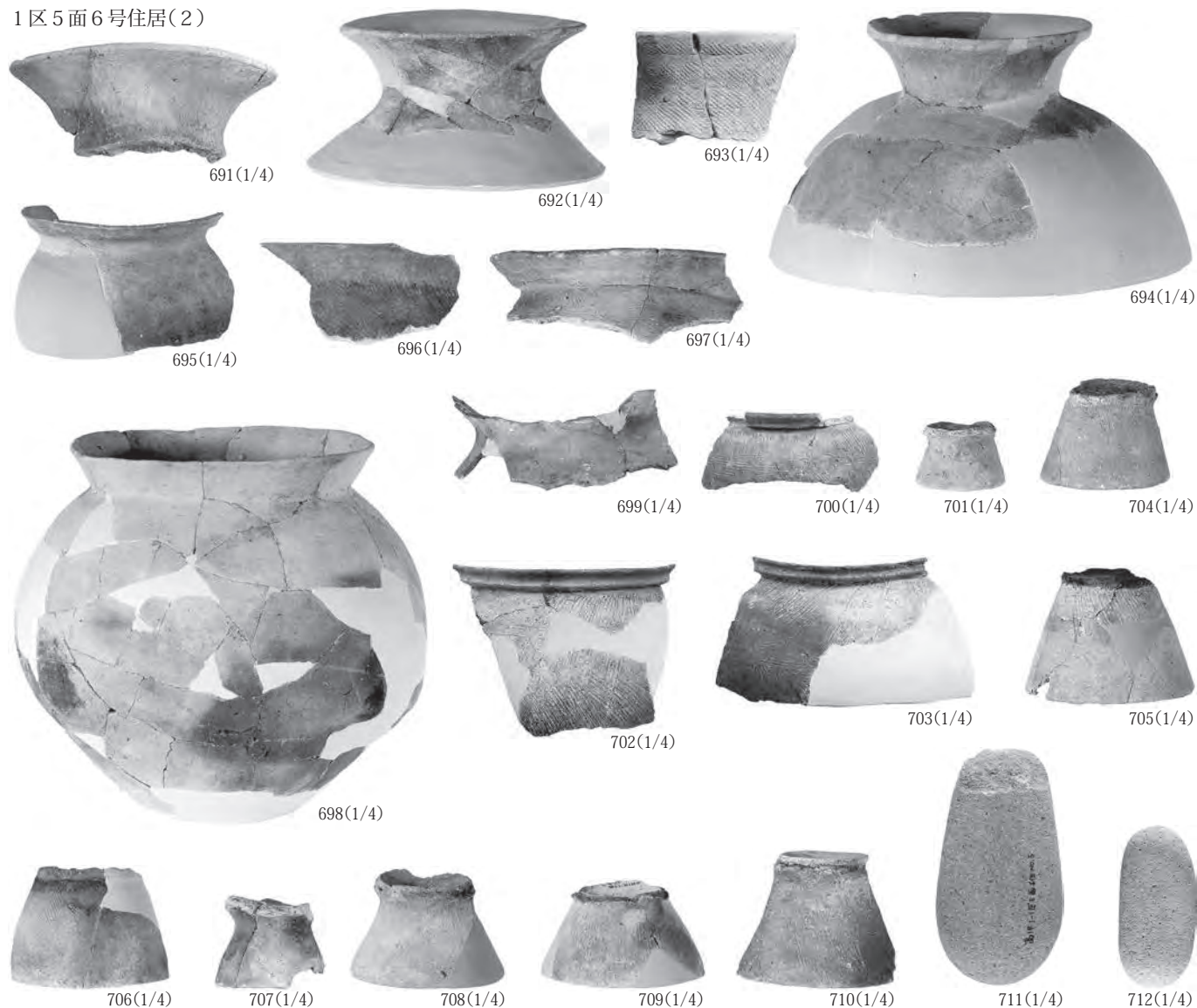


1区5面6号住居(1)

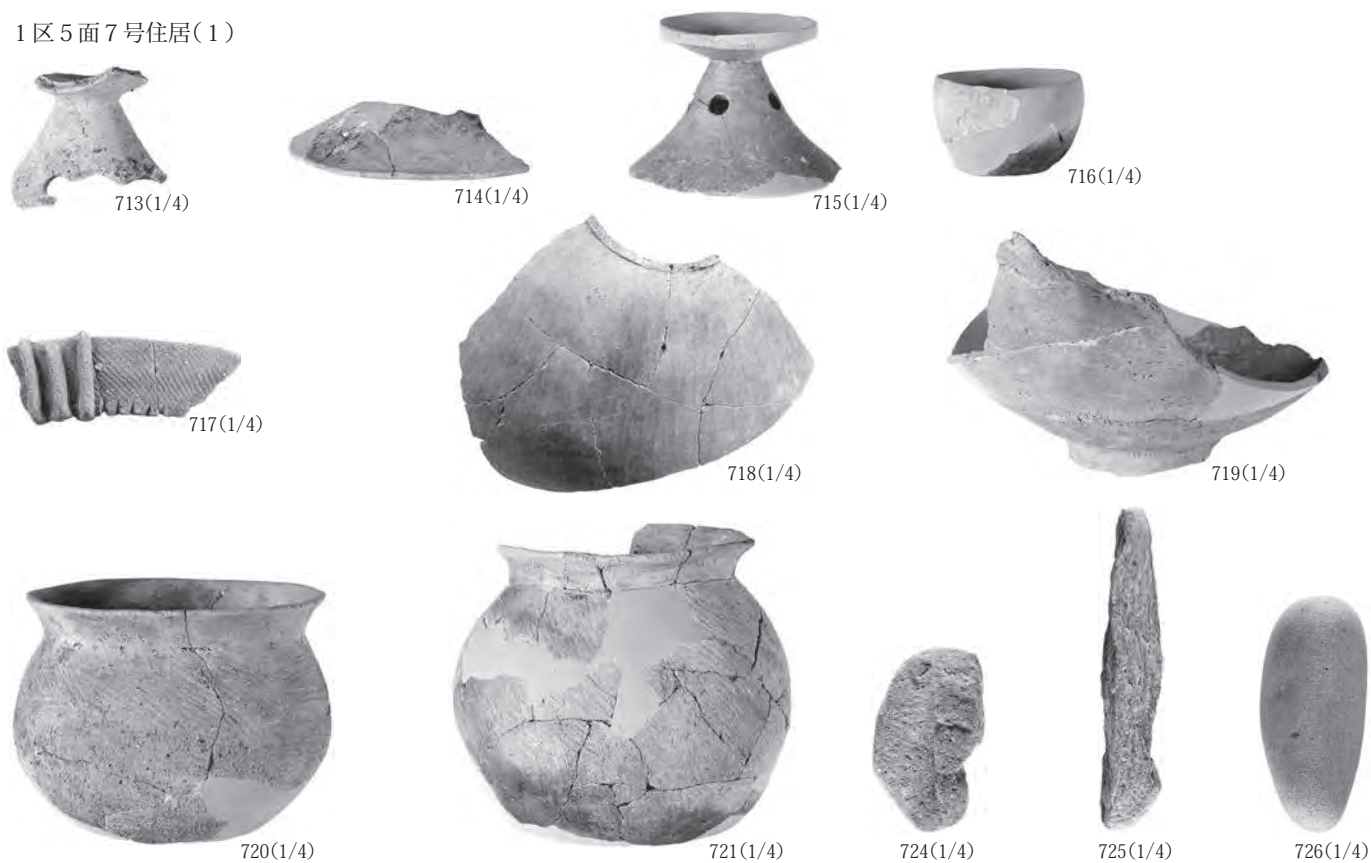


PL.32

1区5面6号住居(2)



1区5面7号住居(1)



1区5面7号住居(2)



722(1/4)



723(1/4)

1区5面8号住居



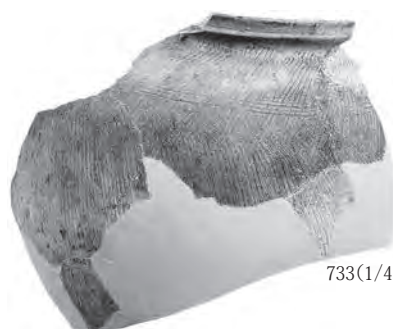
727(1/4)



729(1/4)



730(1/4)



733(1/4)



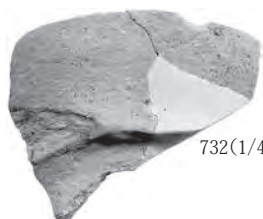
735(1/4)



728(1/4)



731(1/4)



732(1/4)



734(1/4)

1区5面9号住居



736(1/4)



737(1/4)



738(1/4)



739(1/4)



740(1/4)



741(1/4)



742(1/4)

1区5面1号掘立柱建物



779(1/4)



782(1/4)



780(1/4)



781(1/4)

PL.34

1区5面1号竖穴住居(1)



743(1/4)



746(1/4)



749(1/4)



744(1/4)



747(1/4)



750(1/4)



745(1/4)



748(1/4)



751(1/4)



752(1/4)



756(1/4)



760(1/4)



761(1/4)



762(1/4)



763(1/4)



753(1/4)



757(1/4)



764(1/4)



765(1/4)



766(1/4)

1区5面1号竖穴住居(2)



754(1/4)



758(1/4)



755(1/4)



767(1/4)



768(1/4)



769(1/4)



770(1/4)



759(1/4)



771(1/4)



772(1/4)



773(1/4)



774(1/4)



775(1/4)



776(1/4)



777(1/4)



778(1/4)

PL.36

1区5面遺構外



783(1/4)



784(1/4)



785(1/4)



786(1/4)



787(1/4)

1区4面28号溝



608(1/3)

縄文・弥生時代



788(1/4)



789(1/4)



790(1/4)



791(1/4)



792(1/4)



793(1/4)



794(1/4)



795(1/4)



796(1/4)



797(1/4)



798(1/4)



799(1/4)



800(1/4)



801(1/4)



802(1/4)



803(1/4)



804(1/5)



805(1/4)



806(1/4)



807(1/4)



808(1/4)



809(1/4)



810(1/5)



811(1/4)



812(1/4)



813(1/4)



814(1/2)



815(1/2)



824(1/4)



825(1/4)



826(1/4)



827(1/4)

抄 録

書名ふりがな	しものみやたかままいせき
書 名	下之宮高俣遺跡
副 書 名	国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	619
編 著 者 名	石守 晃・長谷川博幸・大木紳一郎・村田敬一
編 集 機 関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発 行 機 関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20160318
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橋町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	しものみやたかままいせき
遺 跡 名	下之宮高俣遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんさわぐんたまむらまちおおあざしものみや
遺 跡 所 在 地	群馬県佐波郡玉村町大字下之宮11-2、12-1・2、15-1・5～11、29-1・4～6、32-1～8、33-1、43、45、46、48-2、238、239、240、241、242、230・233・234、245、246、247番地
市町村コード	10464
遺 跡 番 号	玉村町 0704
北緯(世界測地系)	361812
東経(世界測地系)	1390854
調 査 期 間	20101001-20130430
調 査 面 積	18,386
調 査 原 因	道路建設
種 別	生産/集落/館/屋敷
主 な 時 代	古墳時代/平安/中世/近世
遺 跡 概 要	弥生・縄文-土器・石器/古墳-竪穴住居9+掘立柱建物1+溝12+土坑5+ピット15+焼土1-土師器・石製品/平安-溝4+土坑1+畑11-石製品・金属製品/中世-館1+土塁1+溝10+溝53+橋脚1+土橋1+門1土坑93+ピット188+段差1-土器・陶磁器・石製品・金属製品/近世(天明3年以前)-竪穴2+溝8+井戸2+土坑1+畑23+集石1-/近世(天明3年)-屋敷1+礎石建物2+建物痕1+土塁1+溝3+道路2+土坑5+畑49+竹藪1+集石1-土器+陶磁器+金属製品+石製品+礎石/近世(天明3年以降)-溝7+道路4+土坑4+復旧溝群15+復旧畑22-土器・陶磁器・石製品・鉄製品
特 記 事 項	古墳時代前期の粕殻を主体とした灰が厚く堆積した竪穴住居や32個体の土師器を出土した祭祀遺構と認識される竪穴遺構、15世紀と判断される中世館の明確な構造を示す虎口遺構群、天明3年の屋敷を含む集落景観を把握し得る遺構群を調査した。
要 約	本遺跡は利根川右岸の前橋台地上に立地する。古墳時代前期の現利根川の位置に在った中小河川の自然堤防上に構築された集落址、平安時代末の畑群、15世紀の館跡等の中世遺構群、寛保2(1742)年の大洪水等の洪水砂等で覆われた畑や復旧畑、天明3(1783)年の浅間山の大噴火に伴う軽石や泥流で覆われた屋敷、畑、竹藪等の遺構群や、その復旧等に伴う復旧溝群や復旧畑等の遺構群を調査した。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第619集

下之宮高俣遺跡

国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備
(活力創出基盤整備)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成28(2016)年3月8日 印刷

平成28(2016)年3月15日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社開文社印刷所
